

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第265集

都城市所在

うえんでら  
上平遺跡

県有スポーツ施設整備事業（陸上競技場）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2023

宮崎県埋蔵文化財センター







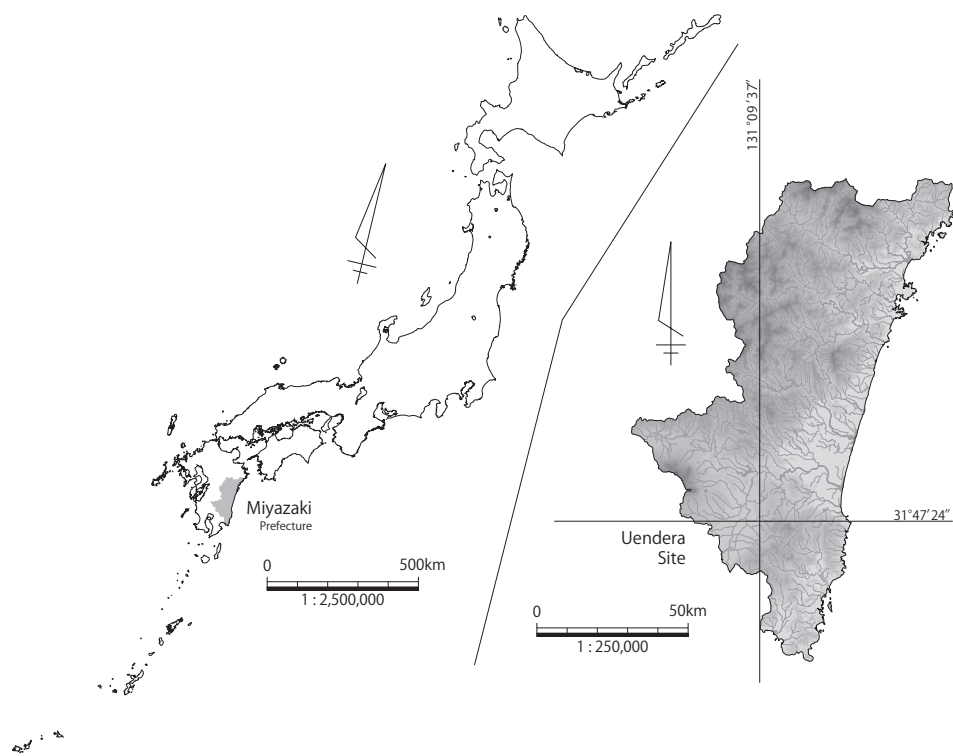
都城市所在

うえんでら

# 上平遺跡

Uendera Site

県有スポーツ施設整備事業(陸上競技場)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2023

宮崎県埋蔵文化財センター



# 序

宮崎県教育委員会では、2027年に本県で開催される第81回国民スポーツ大会・第26回全国障害者スポーツ大会の主会場となる陸上競技場建設工事に係る県有スポーツ施設整備事業に伴い、令和元年度から令和2年度にかけて都城市山之口町に所在する上平遺跡の発掘調査を実施しました。本書は、その発掘調査記録を掲載した報告書です。

上平遺跡では、縄文時代早期の平地式建物跡、竪穴状遺構、炉穴、陥し穴、集石遺構などの遺構を検出し、石鏃や石斧などの石器類や縄文土器が多数出土しました。また、縄文時代後期の竪穴建物跡、古墳時代中期から後期の土坑墓と地下式横穴墓が検出され、土坑墓と地下式横穴墓の中からは鉄刀や鉄剣、鉄鏃などの鉄製品が出土しました。発掘調査を通して、様々な年代の遺構や遺物を確認したことで、この地において脈絡と続いてきた人々の営みを明らかにすることができました。

今回の発掘調査で得られた成果は、山之口地区をはじめとする都城盆地のみならず、南九州の歴史を解明する上で、貴重な資料になるものと考えられます。

また、本書や出土遺物等が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場において活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり御協力いただいた関係諸機関及び関係各位、地元の方々に心より厚くお礼申し上げます。

令和5年3月

宮崎県埋蔵文化財センター  
所長 吉本正典

## 例 言

- 1 本書は、県有体育施設整備事業（現：県有スポーツ施設整備事業）に伴い、宮崎県教育委員会が実施した宮崎県都城市山之口町に所在する上平遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は宮崎県総合政策部国体準備課（現：国スポ・障スポ準備課）の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。第1次調査は令和2年3月4日から令和2年3月27日までの12日間、第2次調査は令和2年5月18日から令和2年12月23日までの133日間の2か年度にわたり実施した。
- 3 発掘調査は、第1次調査を二宮満夫、大竹進太郎、吉行真人が担当し、第2次調査を吉行真人、伊東浩二、二宮満夫が担当した。現地調査における図面作成は調査担当者が主体となり、山元高光、和田理啓、橋本英俊、今塩屋毅行、平井祥蔵、古川誠、江藤建輔、加藤真理子の協力を得た。写真撮影は調査担当者が主体となり、東憲章の協力を得た。
- 4 地下式横穴墓出土の人骨の調査は鹿児島女子短期大学の竹中正巳教授の協力を得た。
- 5 発掘調査及び報告書作成に伴う、測量業務（グリッド杭設置）、空中写真撮影、自然科学分析（植物珪酸体分析、花粉分析、放射性炭素年代測定、樹種同定、種実同定）、石器実測および鉄器保存処理は、下記のとおり業務委託した。
  - ・ 測量業務委託 南日本総合コンサルタント株式会社
  - ・ 空中写真撮影 有限会社 スカイサーバイ九州
  - ・ 自然科学分析 株式会社 古環境研究センター
  - ・ 石器実測委託 株式会社 島田組 / 株式会社 九州文化財研究所
  - ・ 鉄器保存処理 株式会社 吉田生物研究所
- 6 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターにおいて整理作業員の補助を得て行った。デジタル図化作業は二宮満夫、伊東浩二、土器の実測及び拓本作業は谷口武範、和田理啓の協力を得た。
- 7 土器の型式分類は谷口武範や飯田博之、都城市文化財課の柴畑光博氏の助言を得て、吉行が行った。
- 8 石器の分類は日高広人、藤木聡が、石器石材の同定は赤崎広志による助言を得て、吉行が行った。
- 9 本書にて使用した位置図等は、国土地理院発行の電子地形図2万5000分の1『都城』や電子国土Web、および国体準備課より提供の1000分の1図をもとに作成している。
- 10 本書に掲載している土層断面及び土器の色調等については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（2008年版）に拠る。
- 11 本書における図中の方位は、国土座標第Ⅱ系（世界測地系）の座標北（G.N.）、国土地理院発行地図は真北を指す。また、本書中の座標値についても世界測地系に準拠し、標高は海拔絶対高である。
- 12 本書で使用した遺構略記号等は、下記のとおりである。
  - SA：竪穴建物跡 SB：平地式建物跡 SC：土坑 SD：土坑墓 SI：集石遺構 SJ：竪穴状遺構
  - SK：自然流路 SP：炉穴 ST：地下式横穴墓 SU：配石遺構 Gr.：グリッド
- 13 本書の執筆は第Ⅰ章から第Ⅱ章、第Ⅲ章のうち第4節と第5節1・2は二宮満夫が、第Ⅲ章のうち第3節は東憲章が担当し、その他の執筆と編集は吉行が行った。遺物写真は東が撮影し、吉行が補助した。
- 14 出土遺物・実測図・その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。



## 本文目次

第I章 はじめに		第8節 第XV層で検出した縄文時代早期の遺構	
第1節 発掘調査に至る経緯	1		68
第2節 調査の体制	2	1 遺構の分布	
		2 遺構	
		(1) 平地式建物跡	
		(2) 竪穴状遺構	
		(3) 土坑	
		(4) 陥し穴	
		(5) 炉穴	
		(6) 配石遺構・集石遺構	
第II章 遺跡の立地と歴史的環境		第9節 縄文時代早期包含層の遺物	125
第1節 遺跡の立地と地形	4	1 土器	
第2節 既往の調査と歴史的環境	6	2 石器	
第III章 調査の成果		第IV章 自然科学分析の結果	
第1節 調査の概要	10	第1節 はじめに	249
第2節 基本層序	13	第2節 植物珪酸体分析	249
第3節 地中レーダー探査	15	第3節 花粉分析	251
第4節 古墳時代中期～後期の遺構と遺物	24	第4節 放射性炭素年代測定	252
		第5節 樹種同定	252
1 遺構の分布		第6節 種実同定	256
2 土坑墓			
3 地下式横穴墓		第V章 地下式横穴墓出土の人骨調査	
第5節 縄文時代後期～晩期の遺構と遺物	36	第1節 はじめに	258
		第2節 地下式横穴墓から出土した人骨の所見	258
1 遺構の分布			
2 竪穴建物跡			
3 遺構に伴わない遺物			
第6節 縄文時代早期の概要	41	第VI章 総括	
第7節 第XIV層で検出した縄文時代早期の遺構	42	第1節 縄文時代早期の様相	259
		1 遺構	
1 遺構の分布		2 遺物	
2 遺構		第2節 縄文時代後期～晩期の様相	264
(1) 平地式建物跡		第3節 古墳時代中期～後期の様相	264
(2) 竪穴状遺構		第4節 結語	265
(3) 土坑			
(4) 配石遺構・集石遺構			

## 挿 図 目 次

<p>第1図 上平遺跡位置図…………… 4</p> <p>第2図 上平遺跡周辺の地形分類図…………… 5</p> <p>第3図 上平遺跡及び周辺遺跡分布図…………… 9</p> <p>第4図 調査区及びグリッド配置図……………10</p> <p>第5図 基本層序柱状図……………14</p> <p>第6図 アンテナ走査図……………15</p> <p>第7図 レーダーグラムプロファイル……………16</p> <p>第8図 レーダーグラムプロファイルからタイムスライス(平面図)を作成するイメージ……………16</p> <p>第9図 上平遺跡 タイムスライス……………17</p> <p>第10図 深さ29cmの状況……………18</p> <p>第11図 深さ67cmの状況……………18</p> <p>第12図 第XIV層遺構分布図……………18</p> <p>第13図 第XV層遺構分布図……………18</p> <p>第14図 レーダーグラムプロファイルに見られる各遺構の反射……………19</p> <p>第15図 第XIV層遺構分布図と地中レーダー結果……………20</p> <p>第16図 第XV層遺構分布図と地中レーダー結果①……………21</p> <p>第17図 第XIV層遺構分布図と地中レーダー結果②……………22</p> <p>第18図 古墳時代中期～後期の遺構分布図……………24</p> <p>第19図 土坑墓実測図(1) ……………26</p> <p>第20図 土坑墓実測図(2) ……………27</p> <p>第21図 土坑墓実測図(3) ……………28</p> <p>第22図 土坑墓出土遺物実測図……………29</p> <p>第23図 地下式横穴墓実測図(1) ……………31</p> <p>第24図 地下式横穴墓実測図(2) ……………32</p> <p>第25図 地下式横穴墓出土遺物実測図……………34</p> <p>第26図 縄文時代後期～晩期の遺構分布図……………36</p> <p>第27図 竪穴建物跡実測図……………37</p> <p>第28図 竪穴建物跡出土遺物実測図……………39</p> <p>第29図 縄文時代後期～晩期包含層出土遺物実測図 (1) ……………39</p> <p>第30図 縄文時代後期～晩期包含層出土遺物実測図 (2) ……………40</p>	<p>第31図 第XIV層で検出した縄文時代早期の遺構分布図 ……………42</p> <p>第32図 平地式建物跡実測図(1) ……………44</p> <p>第33図 竪穴状遺構実測図(1) ……………45</p> <p>第34図 土坑実測図(1) ……………47</p> <p>第35図 土坑実測図(2) ……………48</p> <p>第36図 土坑実測図(3) ……………50</p> <p>第37図 土坑実測図(4) ……………51</p> <p>第38図 土坑実測図(5) ……………52</p> <p>第39図 土坑実測図(6) ……………53</p> <p>第40図 第XIV層で検出した縄文時代早期の散礫及び配石遺構・集石遺構分布図 ……………54</p> <p>第41図 配石遺構実測図(1) ……………55</p> <p>第42図 集石遺構実測図(1) ……………56</p> <p>第43図 集石遺構実測図(2) ……………58</p> <p>第44図 集石遺構実測図(3) ……………59</p> <p>第45図 集石遺構実測図(4) ……………62</p> <p>第46図 集石遺構実測図(5) ……………63</p> <p>第47図 集石遺構実測図(6) ……………65</p> <p>第48図 集石遺構実測図(7) ……………66</p> <p>第49図 集石遺構実測図(8) ……………67</p> <p>第50図 第XV層で検出した縄文時代早期の遺構分布図 ……………68</p> <p>第51図 平地式建物跡実測図(2) ……………70</p> <p>第52図 平地式建物跡実測図(3) ……………71</p> <p>第53図 竪穴状遺構実測図(2) ……………72</p> <p>第54図 土坑実測図(7) ……………73</p> <p>第55図 土坑実測図(8) ……………75</p> <p>第56図 土坑実測図(9) ……………77</p> <p>第57図 土坑実測図(10)……………78</p> <p>第58図 土坑実測図(11)……………79</p> <p>第59図 土坑実測図(12)……………81</p> <p>第60図 土坑実測図(13)……………83</p> <p>第61図 陥し穴実測図(1) ……………85</p> <p>第62図 陥し穴実測図(2) ……………86</p> <p>第63図 陥し穴実測図(3) ……………87</p> <p>第64図 陥し穴実測図(4) ……………88</p>
---	---

第65図	陥し穴実測図(5) ……………	89	第101図	Ⅱ類土器実測図(8) ……………	143
第66図	炉穴実測図(1) ……………	91	第102図	Ⅱ類土器実測図(9) ……………	145
第67図	炉穴実測図(2) ……………	92	第103図	Ⅱ類土器実測図(10) ……………	146
第68図	炉穴実測図(3) ……………	93	第104図	Ⅱ類土器実測図(11) ……………	147
第69図	炉穴実測図(4) ……………	94	第105図	Ⅱ類土器実測図(12) ……………	148
第70図	炉穴実測図(5) ……………	95	第106図	Ⅱ類土器実測図(13) ……………	149
第71図	第Ⅴ層で検出した縄文時代早期の散礫及び配 石遺構・集石遺構分布図 ……………	96	第107図	Ⅱ類土器実測図(14) ……………	150
第72図	配石遺構実測図(2) ……………	97	第108図	Ⅲ類土器出土分布図 ……………	153
第73図	集石遺構実測図(9) ……………	99	第109図	Ⅲ類土器実測図(1) ……………	154
第74図	集石遺構実測図(10) ……………	100	第110図	Ⅲ類土器実測図(2) ……………	155
第75図	集石遺構実測図(11) ……………	101	第111図	Ⅲ類土器実測図(3) ……………	156
第76図	集石遺構実測図(12) ……………	103	第112図	Ⅲ類土器実測図(4) ……………	157
第77図	集石遺構実測図(13) ……………	105	第113図	Ⅲ類土器実測図(5) ……………	159
第78図	集石遺構実測図(14) ……………	107	第114図	Ⅲ類土器実測図(6) ……………	160
第79図	集石遺構実測図(15) ……………	108	第115図	Ⅲ類土器実測図(7) ……………	161
第80図	集石遺構実測図(16) ……………	109	第116図	Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類土器出土分布図 ……………	163
第81図	集石遺構実測図(17) ……………	112	第117図	Ⅳ類土器実測図 ……………	164
第82図	集石遺構実測図(18) ……………	113	第118図	Ⅴ類土器実測図(1) ……………	164
第83図	集石遺構実測図(19) ……………	115	第119図	Ⅴ類土器実測図(2) ……………	165
第84図	集石遺構実測図(20) ……………	116	第120図	Ⅵ類土器実測図 ……………	165
第85図	集石遺構実測図(21) ……………	117	第121図	Ⅶ類土器出土分布図(1) ……………	168
第86図	集石遺構実測図(22) ……………	118	第122図	Ⅶ類土器出土分布図(2) ……………	169
第87図	集石遺構実測図(23) ……………	119	第123図	Ⅶ類土器出土分布図(3) ……………	170
第88図	集石遺構実測図(24) ……………	120	第124図	Ⅶ類土器実測図(1) ……………	172
第89図	Ⅰ類土器出土分布図 ……………	127	第125図	Ⅶ類土器実測図(2) ……………	173
第90図	Ⅰ類土器実測図(1) ……………	128	第126図	Ⅶ類土器実測図(3) ……………	174
第91図	Ⅰ類土器実測図(2) ……………	129	第127図	Ⅶ類土器実測図(4) ……………	175
第92図	Ⅱ類土器出土分布図(1) ……………	132	第128図	Ⅶ類土器実測図(5) ……………	176
第93図	Ⅱ類土器出土分布図(2) ……………	133	第129図	Ⅶ類土器実測図(6) ……………	177
第94図	Ⅱ類土器実測図(1) ……………	134	第130図	Ⅶ類土器実測図(7) ……………	178
第95図	Ⅱ類土器実測図(2) ……………	135	第131図	Ⅶ類土器実測図(8) ……………	179
第96図	Ⅱ類土器実測図(3) ……………	136	第132図	Ⅶ類土器実測図(9) ……………	180
第97図	Ⅱ類土器実測図(4) ……………	137	第133図	Ⅶ類土器実測図(10) ……………	181
第98図	Ⅱ類土器実測図(5) ……………	140	第134図	Ⅶ類土器実測図(11) ……………	182
第99図	Ⅱ類土器実測図(6) ……………	141	第135図	Ⅶ類土器実測図(12) ……………	183
第100図	Ⅱ類土器実測図(7) ……………	142	第136図	Ⅶ類土器実測図(13) ……………	184
			第137図	Ⅶ類土器実測図(14) ……………	185

第138図	VII類土器実測図(15)……………	186	第175図	石器実測図(15)……………	242
第139図	VII類土器実測図(16)……………	187	第176図	石器実測図(16)……………	243
第140図	VIII類土器出土分布図……………	190	第177図	石器実測図(17)……………	244
第141図	VIII類土器実測図(1)……………	191	第178図	石器実測図(18)……………	245
第142図	VIII類土器実測図(2)……………	192	第179図	石器実測図(19)……………	246
第143図	VIII類土器実測図(3)……………	193	第180図	調査区南東端における植物珪酸体分析結果 ……………	249
第144図	VIII類土器実測図(4)……………	194	第181図	暦年較正結果……………	254
第145図	VIII類土器実測図(5)……………	195	第182図	暦年較正年代マルチプロット図……………	255
第146図	VIII類土器実測図(6)……………	196			
第147図	VIII類土器実測図(7)……………	197			
第148図	VIII類土器実測図(8)……………	198			
第149図	VIII類土器実測図(9)……………	199			
第150図	VIII類土器実測図(10)……………	200			
第151図	VIII類土器実測図(11)……………	201			
第152図	VIII類土器実測図(12)……………	203			
第153図	IX類土器出土分布図……………	205			
第154図	IX類土器実測図……………	206			
第155図	X類土器実測図(1)……………	207			
第156図	X類土器実測図(2)……………	208			
第157図	石器分布図(1)……………	222			
第158図	石器分布図(2)……………	223			
第159図	石器分布図(3)……………	224			
第160図	石器分布図(4)……………	225			
第161図	石器実測図(1)……………	226			
第162図	石器実測図(2)……………	227			
第163図	石器実測図(3)……………	228			
第164図	石器実測図(4)……………	229			
第165図	石器実測図(5)……………	231			
第166図	石器実測図(6)……………	233			
第167図	石器実測図(7)……………	234			
第168図	石器実測図(8)……………	235			
第169図	石器実測図(9)……………	236			
第170図	石器実測図(10)……………	237			
第171図	石器実測図(11)……………	238			
第172図	石器実測図(12)……………	239			
第173図	石器実測図(13)……………	240			
第174図	石器実測図(14)……………	241			

## 表 目 次

第1表	古墳時代中期～後期の遺構一覧表及び鉄器観察表……………	35
第2表	縄文時代早期の遺構・遺物と検出層位……………	41
第3表	縄文時代の遺構一覧表(1)……………	121
第4表	縄文時代の遺構一覧表(2)……………	122
第5表	縄文時代の遺構一覧表(3)……………	123
第6表	縄文時代の遺構一覧表(4)……………	124
第7表	土器観察表(1)……………	209
第8表	土器観察表(2)……………	210
第9表	土器観察表(3)……………	211
第10表	土器観察表(4)……………	212
第11表	土器観察表(5)……………	213
第12表	土器観察表(6)……………	214
第13表	土器観察表(7)……………	215
第14表	土器観察表(8)……………	216
第15表	土器観察表(9)……………	217
第16表	土器観察表(10)……………	218
第17表	石器石材分類表……………	219
第18表	遺構及び第XIV・XV層出土石器器種組成表……………	219
第19表	石器計測表(1)……………	247
第20表	石器計測表(2)……………	248
第21表	植物珪酸体分析結果……………	250
第22表	花粉分析結果……………	251
第23表	放射性炭素年代測定結果……………	253
第24表	樹種同定結果……………	255
第25表	炭化種実同定結果……………	255

第26表	頭蓋の計測値(mm)及び示数	258
第27表	頭蓋形態小変異の出現状況	258
第28表	遺構出土の炭化物年代測定結果	259
第29表	上平遺跡出土の土器形式分類と出土点数	261
第30表	上平遺跡出土の石鏃分類と出土点数	263

## 写真目次

写真1	発掘調査の様子①	11
写真2	発掘調査の様子②	11
写真3	現地説明会の様子	11
写真4	発掘通信	11
写真5	地中レーダー探査実施状況	23
写真6	地下式横穴墓ST1完掘状況	23
写真7	集石遺構群(第XV層)	23
写真8	炉穴SP3完掘状況(第XV層)	23
写真9	植物珪酸体(プラントオパール)	250
写真10	花粉	251
写真11	樹種同定及び種実同定における試料(拡大図)	257
写真12	ST1出土熟年男性人骨(頭蓋)	258

## 図版目次

図版1	遺跡の立地(1)(北より)
	遺跡の立地(2)(東より)
図版2	発掘調査風景(南東より)
	基本土層(北西壁) 土層断面(北壁)
	調査区(北西より)
図版3	SD1検出状況(北西より)
	SD1完掘状況(北西より)
	ST1完掘状況(南西より)
	ST1人骨・遺物出土状況〔掲載番号5〕
	SD1・ST1出土鉄製品
図版4	SA1完掘状況(北より) SA1出土遺物
	SA1・縄文時代後期～晩期包含層出土遺物
図版5	調査区全景(1)〔第XIV層検出面・上が北〕
	SB1完掘状況(南より)

	第XIV層遺物出土状況(B2～C2Gr.・南東より)
図版6	SC17遺物出土状況(西より)
	SC23遺物出土状況(北西より)
	SI2検出状況(北より)
	SI10半截状況(東より)
	SI13検出状況(北西より)
	SI25検出状況(北より)
	SI30検出状況(北より)
	SI33配石状況(西より)
図版7	調査区全景(2)〔第XV層検出面・上が北〕
	SB3柱穴完掘状況(東より)
	SJ4完掘状況(南東より)
図版8	SC59遺物出土状況(北西より)
	SC60半截状況(東より)
	SC61(左)・SS8(右)半截状況(南西より)
	SS1完掘状況(北より)
	SS2完掘状況(西より)
	SS3半截状況(南西より)
	SS6半截状況(南西より)
	SS7完掘状況(西より)
図版9	SP1完掘状況(北西より)
	SP2完掘状況・燃焼部(東より)
	SP3完掘状況(東より)
	SP3第1煙道・燃焼部(南東より)
	SP4完掘状況(北東より)
図版10	D5Gr. 周辺の集石遺構群(北東より)
	SU2検出状況(南より)
	SI48半截状況(北東より)
	SI78検出状況(南西より)
	SI87検出状況(北より)
	SI89検出状況(北東より)
	SI91半截状況(北東より)
	SI96半截状況(東より)
図版11	縄文時代早期の遺物
図版12	I類土器(1) I類土器(2) I類土器(3)
図版13	II類土器(1) II類土器(2) II類土器(3)
図版14	II類土器(4) II類土器(5)

- 図版15 III類土器(1) III類土器(2) III類土器(3)
- 図版16 IV・V・VI類土器 VII類土器(1) 楕円押型文
- 図版17 VII類土器(2) 連珠押型文  
VII類土器(3) 山形押型文  
VII類土器(4) 山形押型文  
VII類土器(5) 格子目押型文・縄文
- 図版18 VII類土器(6) 撚糸文  
VII類土器(7) 変形撚糸文  
VII類土器(8) 変形撚糸文・同心円押型文・  
格子状押型文・短枝回転文
- 図版19 VIII類土器(1) VIII類土器(2) VIII類土器(3)
- 図版20 VIII類土器(4) VIII類土器(5) VIII類土器(6)  
VIII類土器(7)
- 図版21 VIII類土器(8) VIII類土器(9)  
IX類土器 X類土器
- 図版22 打製石鏃(1) (S=1/1)
- 図版23 打製石鏃(2) (S=1/1)
- 図版24 磨製石鏃・尖頭器・異形石器・尖頭状石器  
石匙・スクレイパー・微細剥離剥片
- 図版25 石核・細石刃核・原石  
石斧・環状石斧・棒状石器
- 図版26 磨石・敲石・凹石 台石

# 第 I 章 はじめに

## 第 1 節 発掘調査に至る経緯

宮崎県では、令和 9 (2027) 年に本県で開催される国民体育大会 (令和 5 (2023) 年より国民スポーツ大会に名称変更) 及び全国障害者スポーツ大会に向けた競技施設の選定にあたって、可能な限り県内の既存体育施設を活用することで調整してきたが、主要な県有体育施設の多くが昭和 54 (1979) 年に開催された「日本のふるさと宮崎国体」の際に整備されたもので、老朽化の進行も著しく、また現在の施設基準に適合していないなど多くの課題を抱えていた。そうした中、宮崎県総合政策部国体準備課 (現：国スポ・障スポ準備課) では、平成 30 (2018) 年に、整備にあたっての基本的な考え方、施設基本計画、整備スケジュール等について具体的にとりまとめた「県陸上競技場整備基本計画 (素案)」を作成 (翌年に策定。以下、「基本計画」という。) し、陸上競技場、体育館、プールの主要 3 施設を新たに整備する方針を定めた。

「基本計画」の作成後に、宮崎県教育庁文化財課 (以下、「文化財課」という。) に対して、主要 3 施設の新たな開発予定地における埋蔵文化財保護について照会があり、このうち都城市山之口町で整備が行われる陸上競技場の事業予定地一帯については、周知の埋蔵文化財包蔵地外であったが、同一の河岸段丘面一帯が中世城郭の王子城跡にも比定されており、発掘調査で縄文時代草創期～早期を主体とする遺構・遺物が確認された王子山遺跡が約 1 km 南側に近接して所在することから、文化財課では試掘調査による詳細把握の必要があると判断した。

事業予定地は、試掘調査段階では都城市宮山之口運動公園の敷地内、市営住宅の敷地内及び民間事業者の倉庫を含む資材置き場として利用されていた。対象地の旧地形は、本来的には運動公園一帯を最高地点として北側に傾斜する尾根地形を呈していたと考えられるが、民間事業者の資材置き場にあたる運動公園の北側については大きく削り込まれて平坦地が形成されていた。試掘調査は事業予定地である約 220,000 m<sup>2</sup>を対象に平成 30 年 3 月及び 7～9 月にかけて計 70 か所で実施したが、旧運動公園と市営住宅の敷地内における試掘坑では施設及び建物建設による地形の改変が著しいことが判明し、旧地形が残る場所においても遺物がわずかに出土しただけであった。一方、民間事業者の資材置き場に設定した試掘坑では、運動公園との境界である崖法面下については旧地形が大きく削平されていたものの、大部分において良好な状態でアカホヤ火山灰以下の地層が残っており、一部では上位層である霧島御池降下軽石層及びその上位クロボク層の堆積も確認できた。その中で、対象地の東側については深い谷地形となっていることが判明し、谷地形の起点にあたる最西側には縄文時代早期に属する遺物包含層と焼礫の安定的な分布が認められた。このように、全事業予定地の中で、民間事業者の資材置き場のうち北西端側について、埋蔵文化財が顕著に残ることが明らかになった。先述のとおり当概地については周知の埋蔵文化財包蔵地外であったことから、試掘調査の結果に基づき「周知の埋蔵文化財包蔵地の新規発見」を平成 30 年 11 月 5 日付けで都城市教育委員会教育長に対して通知し、遺跡名については都城市と協議を行い、当概地の小字名から「上平遺跡」と呼称することとした。

文化財課では事業予定地のうち埋蔵文化財の存在を確認した地点の取り扱いについて、国体準備課と工事計画変更等の埋蔵文化財保護の協議を行ったが、新しい体育施設の整備がスポーツランドの拠点形成を軸とした本県の発展を見据えて取り組んでいることと、避難施設あるいは救護等の活動拠点の確保

といった災害時への備えとして整備されるという点から、埋蔵文化財の現状保存は困難であるという結論に達したため、発掘調査による記録保存の措置をとることとなった。

上平遺跡における文化財保護法第94条に基づく工事通知は、国体準備課長より令和元年12月17日付けで提出され、発掘調査の指示に関する回答を宮崎県教育委員会教育長より令和元年12月27日付けで行った。発掘調査の実施については、宮崎県埋蔵文化財センターが担当し、上平遺跡は令和2(2020)年3月4日から調査に着手した。

## 第2節 調査の体制

上平遺跡の発掘調査及びそれに伴う整理作業と報告書作成は以下の体制で実施した。

**調査主体** 宮崎県教育委員会

**事業調整** 宮崎県教育庁文化財課

主査 松本 茂 (平成29～30年度)

主査 藤木 聡 (令和元(平成31)年度)

主査 甲斐 貴充 (令和2～3年度)

副主幹 甲斐 貴充 (令和4年度)

**発掘調査・整理作業及び報告書作成** 宮崎県埋蔵文化財センター

**令和元(平成31)(2019)年度 発掘調査**

所長	山元 高光
副所長兼総務課長	内野 真由美
総務担当リーダー	寺原 真由美
調査課長	赤崎 広志
調査第一担当リーダー	和田 理啓
調査第二担当主査	二宮 満夫 (調査主任)
調査第一担当主査	大竹 進太郎
調査第一担当主査	吉行 真人

**令和2(2020)年度 発掘調査及び整理作業・報告書作成**

所長	山元 高光
副所長兼調査課長	赤崎 広志
総務課長	鈴木 勝代
総務担当リーダー	阿波野 ゆかり
調査第一担当リーダー	和田 理啓
調査第一担当主査	吉行 真人 (調査主任、整理作業・報告書作成)
調査第二担当主査	伊東 浩二
調査第二担当主査	二宮 満夫



令和3(2021)年度 整理作業・報告書作成

所長	菊村 祐司	
副所長	赤崎 広志	
専門主幹	谷口 武範	
総務課長	鈴木 勝代	
総務担当リーダー	阿波野 ゆかり	
調査課長	飯田 博之	
調査第一担当リーダー	和田 理啓	
調査第一担当主査	吉行 真人	(整理作業・報告書作成)

令和4(2022)年度 整理作業・報告書作成

所長	菊村 祐司	(令和4年12月まで)
	吉本 正典	(令和5年2月から)
副所長兼総務課長	片伯部 真一	
専門主幹	谷口 武範	
総務担当リーダー	阿波野 ゆかり	
調査課長	東 憲章	
調査第一担当リーダー	和田 理啓	
調査第一担当主査	吉行 真人	(整理作業・報告書作成)

## 第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

### 第1節 遺跡の立地と地形

都城市は、宮崎県の南西部の内陸に位置する。都城市が所在する都城盆地は、東部を鰐塚山地、北西部を霧島火山群、そして西部を白鹿岳などの鹿児島県の高山によって囲まれているが、南西部には山地が卓越しないため、南側の曽於市方向に向かって開けており、地溝状の盆地地形を呈している。盆地のほぼ中央部を北流する大淀川は、都城盆地南西に位置する金御岳南西面に源流をもち、この河川沿いに広がる氾濫原は沖積低地を発達させ、市域の中心部と肥沃な農業地帯を形成している。また大淀川を境にして左岸側、盆地の北西隅から南西隅にかけては、標高 180 ～ 260m のシラス台地と、このシラス台地の東側に形成された一段低い標高 150 ～ 170m の成層シラス台地が広がる様相となる。一方、大淀川右岸の盆地東部においては、東縁山地を水源とする大淀川支流の諸河川によって、谷に沿った河岸段丘が形成されており、その西側地域には開析扇状地が広く発達している。

上平遺跡が所在する都城市山之口地区（旧北諸県郡山之口町：平成 18 年合併）は、都城盆地の北東部に位置する。盆地東部を囲む鰐塚山地は、複数の河川で浸食されて複雑な稜線を形成しており、山之口地区の後背には、東岳川支流の野々宇都川と花木川に挟まれた標高 300m 級の山地が広がっている。この山地の西斜面は山麓地形となっており、南北に細長い山之口地区の東半部は、この地形を構成する段丘や扇状地上に立地している。遺跡周辺には、大淀川支流の花木川が西に向かって蛇行しながら流下しており、ここに樹枝状に分岐する複数の支流が合流している。このうち陸上競技場東側を南西に流下し、山之口小学校付近で花木川に合流する佐土原川は、前述の開析扇状地と後背の山地斜面とを分断して開析谷を形成しており、ここに花木池平遺跡が立地している。上平遺跡は、この佐土原川に分断され、細長い台地状に開析された扇状地の上部縁辺に立地している。細長い台地状の地形の東側は盆地底部の低地に続いており、日豊本線や国道 269 号が縦断している。（宮崎県農政水産部農業振興課 1980、都城市教育委員会 2009）



第1図 上平遺跡位置図



- 開析扇状地面
- 河岸段丘面
- 氾濫原面

第2図 上平遺跡周辺の地形分類図

## 第2節 既往の調査と歴史的環境

都城市山之口地区では、平成18年に新都市として合併する以前は、旧町域すべてを網羅した正式な遺跡詳細分布に関する調査はなく、発掘調査に至った事例も数例を数えるだけであった。しかし、合併を機に実施された分布調査において、133箇所もの埋蔵文化財包蔵地が確認されるに至り（都城市教育委員会 2009）、数は少ないながらも注目・特筆される調査が継続して行われている。ここでは既往の調査や歴史的事項を概観することで、都城盆地の最北東に位置し、山東地域との境界をなすこの地で活動した人々の動向を追って行きたい。

旧町域における人類の生活痕跡は、近年の調査事例で後期旧石器時代にまで遡ることができると判明しているが、周辺域には霧島御池軽石や鬼界アカホヤ火山灰などの降下火山灰層が厚く堆積するため、縄文時代中期以前の様相を知ることは容易なことではなかった。しかし、曾畑式土器を中心とする前期後半の土器群が採集された脇之田第2遺跡（第3図7）や早期及び後期の土器群とともに局部磨製石斧が採集された山之口城跡（第3図14）などが周知の遺跡として知られており、中期以前に遡る遺跡の存在は旧町域においても広く認識されていた（都城市教育委員会 2009）。

このような状況下で、近年、上平遺跡と同一丘陵の南側先端部で調査が行われた王子山遺跡（第3図8）において、草創期に属する竪穴状遺構、炉穴、配石遺構、集石遺構などの遺構群とともに隆帯文土器や各種石器類が多数確認された。また、わずかではあるが後期旧石器時代の石器も出土したことで、調査事例の少ない当該地域における後期旧石器時代から継続する初期縄文時代の様相が明らかとなった。さらに、堅果類や鱗茎の炭化植物遺体も多数出土し、植物質食料の積極的な利用を裏付ける資料として注目されている（都城市教育委員会 2012）。なお、旧町域外ではあるが、当該遺跡の北西約3.9kmの台地縁辺部に立地する軍神原遺跡（第3図10）においては、黒曜石製細石刃核と細石刃がまとまって出土し、1点だけであるが粗製土器片も確認されたことで、当該地域の旧石器時代から縄文時代草創期の移行期の様相を示す重要な資料として注目される。さらに、後期旧石器時代の角錐状石器とその接合資料も確認されている（都城市教育委員会 2016a）。このように、厚く堆積した降下火山灰層の影響で長らく判然としなかった後期旧石器時代の資料が近年目立つようになってきた。

縄文時代には旧町域において、早期以降、周辺域を含めた活発な活動が広がっていたと考えられ遺跡数も増加する。先の王子山遺跡（第3図8）では別府原式土器と石坂式土器を中心とする早期前葉の貝殻文円筒形土器群を主体に、早期中葉の押型文土器や早期後葉の妙見式・塞ノ神式土器と早期を通じた遺物が出土しており、遺構としては別府原式土器と石坂式土器の時期を中心とする炉穴群、竪穴状遺構、集石遺構などが検出されている。また、完成品以外にも石鏃未製品が大量に出土しており、集落の性格を考える上で重要である（都城市教育委員会 2012）。当該遺跡から約2.6km南の丘陵先端部に立地する萩ヶ久保第1遺跡（第3図26）においては、前平式土器を中心に志風頭式土器や押型文土器など早期初頭から中葉に属する遺物とともに集石遺構などが検出されており、さらに中期に属する土器群と陥し穴状遺構も発見されている（都城市教育委員会 2010）。周辺域では前述の軍神原遺跡（第3図10）で集石遺構や陥し穴状遺構が検出され、前平式土器片と打製石器などの石器類が少量ではあるが出土している（都城市教育委員会 2016a）。さらに、富吉前田遺跡（第3図21）ではキャリパー形の縄文時代中期の土器と石製土掘具1点ずつが出土しており（宮崎県埋蔵文化財センター 2011）、遺物の出土量は少ないながら

も、台地上ではない扇状地面における活動として注目される。

また、後期以降となると、上平遺跡が立地する丘陵地の東側に位置する、一段低い平坦面上で調査された花木池平遺跡(第3図2)において、集落そのものの確認はできなかったが、後期の丸尾式土器も包含する溝状遺構が検出され、周辺における同時期の集落の展開が想定される(宮崎県埋蔵文化財センター 2022)。また、同一の丘陵地では、最高地点である運動公園の南側に広がる平坦面において、確認調査で竪穴建物の可能性がある遺構や晩期を主体とする土器などが確認された峯元第1遺跡(第3図6)(都城市教育委員会 2018)があり、西接する山之口佐土原遺跡(第3図5)においても晩期の土器が出土している(都城市教育委員会 2019b)。

その他、縄文時代の生活痕跡ではないが、上平遺跡の北約0.6kmに位置する山之口一本松遺跡(第3図3)で、前期～中期に比定される液状化現象をともなう大規模地震痕跡が確認されており、少なくとも鬼界アカホヤ火山灰降下後で2回、霧島御池軽石降下後に1回の噴砂が認められ、当該時期の調査としては県内でも希有な事例となった。なお、同遺跡では遺構の検出はなかったが、縄文時代後期の土器片及び石器類が出土している(都城市教育委員会 2016b)。

さらに、弥生時代になっても旧町域内での活動は活発であったと考えられ、近年特に注目される調査例が増え始めている。

当該遺跡から約2.9km南西にある富吉平遺跡(第3図24)では、包含層中から弥生時代前期末に比定される土器群がまとまって出土している(都城市教育委員会 2015a)。当該遺跡から約3.4km南西、花木川沿いの河岸段丘縁辺に立地する土角遺跡(第3図20)では、中期後半の竪穴建物1棟と後期後葉～終末の竪穴建物4棟などが検出され、後期の竪穴建物では遺物の出土量も多く、うち1棟は小型で土坑墓の可能性も指摘され(都城市教育委員会 2019a)、土角遺跡の対岸に位置する富吉前田遺跡(第3図21)では、後期～古墳時代初頭とされる独立棟持柱を有する掘立柱建物跡1棟も検出されている。さらに、先の峯元第1遺跡(第3図6)では本地域で希有な磨製石剣が、当該遺跡の北東、佐土原川を挟んだ河岸段丘面の縁辺部に位置する八幡領遺跡(第3図4)では中期後半に属する完形の高坏が採集されており(都城市教育委員会 2009)、現状で少数の事例からではあるが、旧町域内に広がる弥生時代集落の様相が想定できる。

古墳時代については、県指定文化財である「山之口村古墳」の存在が知られている。花木川支流佐土原川左岸の河岸段丘面上に所在した円墳5基(脇之田第2遺跡内)及び右岸段丘面上の円墳1基(王子山遺跡内)、さらに富吉川右岸の河岸段丘面上に立地した円墳3基と地下式横穴墓1基(後田遺跡内)を総じて「山之口村古墳」として登録されていたものの、大半が失われ、現在は後田遺跡(第3図23)内の円墳2基を残すのみである。これら古墳の造営時期についての詳細は明らかではないが、先の王子山遺跡(第3図8)内での採集物ながら、地下式横穴墓と推測される地点から後期後半に属する須恵器坏蓋と土師器坏身が出土しており、かつて近接して存在した円墳との関係も指摘されている(都城市教育委員会 2009)。この他、当該遺跡の南に近接する都城市営山之口運動公園において、地下式横穴墓から鉄製刀子や勾玉が出土したとも伝わっている(山之口町史編纂委員会 1974)。

さらに、旧町域外ではあるが、東岳川右岸、当該遺跡の北西約2.0km付近のシラス台地縁辺部には高城牧ノ原古墳群(第3図13)が立地する。同古墳群は、前方後円墳3基を含む13基の高塚墳で構成され、これまでの発掘調査で箱式石棺墓3基、木棺墓1基、地下式横穴墓15基、土坑墓3基が検出された。

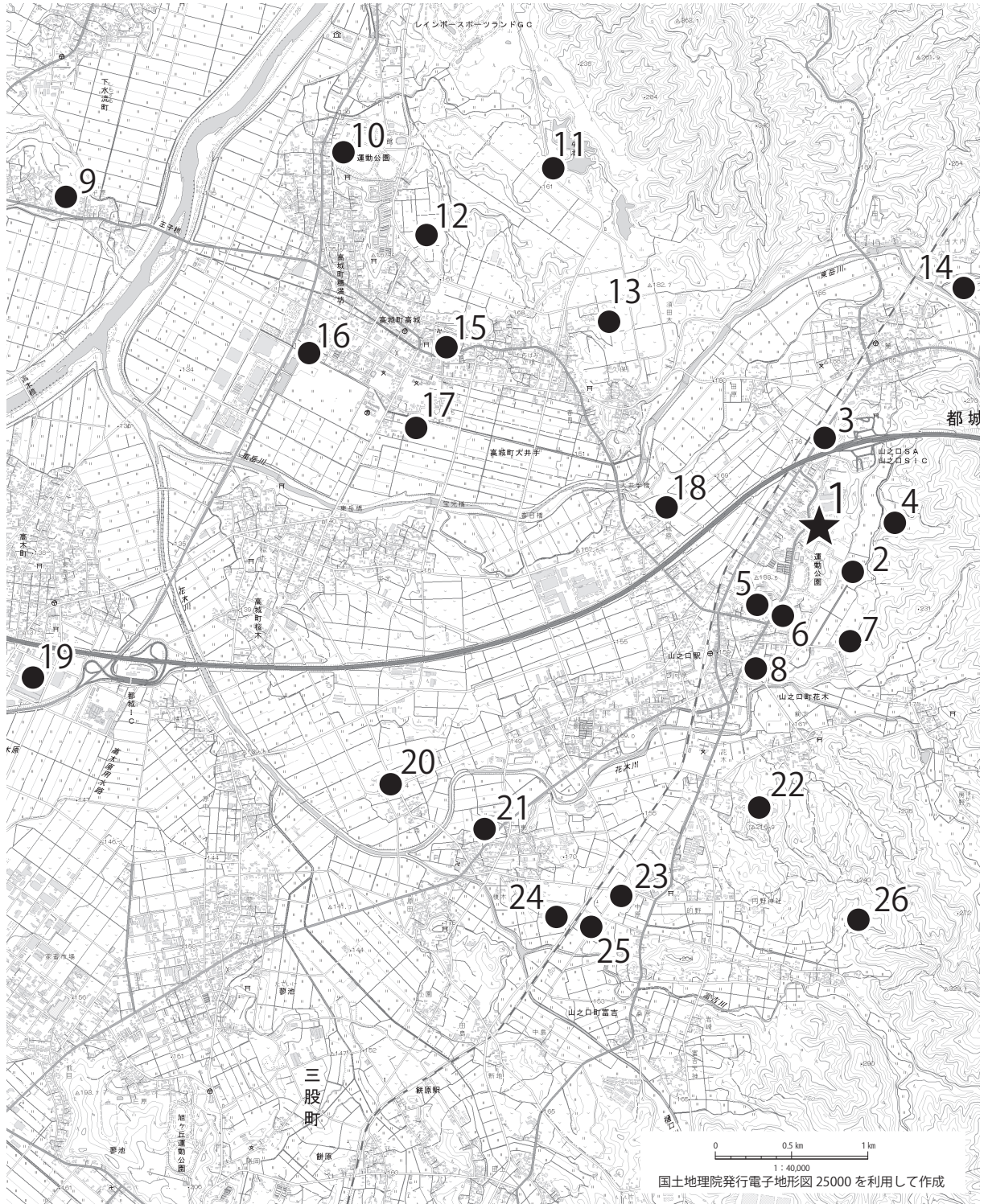
このことから多様な墓制をもつ古墳群であることが明らかとなっており、古墳群の造営時期としては中期中葉を前後する時期が想定されている（高城町教育委員会 2005）。

これらの造墓を支えた集団については、明確ではないが、花木池平遺跡（第3図2）において古墳時代中期から後期に属する6軒の竪穴建物が検出されたこと（宮崎県埋蔵文化財センター 2022）は注目でき、当該遺跡や王子山遺跡（第3図8）などの集落遺跡と古墳群の関係性が注視される。また、当該遺跡の西約1.1kmの二本松遺跡（第3図18）で、部分的な調査ではあったが、古墳時代前期に比定される幅約5m、深さ1.8mの大溝が確認されている（都城市教育委員会 2010）。

律令制導入以後は、『和名類聚抄』にある諸県郡に属していたとされるが、郷名の比定には至っていない。発掘調査の事例としては、花木池平遺跡（第3図2）において、掘立柱建物1棟や畝状遺構が確認されており、布痕土器などの平安時代中期の遺物が多く出土している。また、緑釉陶器の小片も出土している（宮崎県埋蔵文化財センター 2022）。この他の周辺域における古代の様相は明らかではないが、日向国府から大隈国府を結ぶ駅路が旧町域を通過し、駅馬である水俣駅が置かれていたとも推定されている（永山 1998）。事実、分布調査において、以前より官衙跡など古代の拠点の遺跡として目されていた後田遺跡（第3図23）を含む「新町原」と通称される一帯で、平安時代の土師器や須恵器などが多数採集されており、その中には緑釉陶器も含まれる。西畑遺跡（第3図25）では製塩土器も採集されていること（都城市教育委員会 2009）から、当該地を水俣駅の有力候補のひとつとすることは可能であろう。

鎌倉時代以降の中世期の考古学的な様相は、伊東氏の庄内八城に数えられる山之口城（第3図14）や三俣（松尾）城（第3図22）などの中世城郭が遺構として今に残る。南九州における典型的な台地立地型の城郭である山之口城（第3図14）では、巨大な空堀や曲輪群などが残り、輸入陶磁器などの採集量も多い（都城市教育委員会 2009）。発掘調査は、直線的に4つの主曲輪が並ぶ三俣（松尾）城（第3図22）で実施されており、主郭及びその東隣の2曲輪の調査では、中世の土師質土器や輸入陶磁器などとともに掘立柱建物跡や鍛冶工房が検出され、北東曲輪の調査では、主郭北面の守護を担った土塁や道路状の遺構も見つかっている（宮崎県埋蔵文化財センター 2004）。当該遺跡の同一丘陵地では、王子山遺跡（第3図8）周辺が王子城跡とされるが、すでに城郭遺構は失われている（宮崎県教育委員会 1999）。また、富吉前田遺跡（第3図21）では、平安時代末期から鎌倉時代にかけての屋敷地と考えられる遺構群が確認されており、井戸跡の検出なども含め（宮崎県埋蔵文化財センター 2011）、狭小な調査ながら注目される。さらに、山之口一本松遺跡（第3図3）では、掘立柱建物跡5棟以上などとともに鍛冶関連遺物が出土し（宮崎県埋蔵文化財センター 2015、都城市教育委員会 2016b）、山之口城麓にほど近い中世期の様相が明らかとなった。

さて、江戸時代になると、旧町域は鹿児島藩直轄領となり、現在も残る麓集落には地頭仮屋が置かれていた（都城市史編さん委員会 2005、山之口町史編さん委員会 2005）。発掘調査によった江戸時代に関する情報は少ないが、富吉前田遺跡（第3図21）では、掘立柱建物で構成される屋敷地の一角と鍛冶工房跡が検出され（宮崎県埋蔵文化財センター 2011）、旧町永野地区には幕末から明治期に操業されていた島津寒天工場跡が現在も残り、整備のための調査（都城市教育委員会 2015b）が行われており、鹿児島藩直轄領としての村落の有り様の一端が示された。



- |                           |                          |                               |                         |
|---------------------------|--------------------------|-------------------------------|-------------------------|
| 1 うえんであら<br>上平遺跡          | 2 はなのきいけんびら<br>花木池平遺跡    | 3 やまのくちいつほんまつ<br>山之口一本松遺跡     | 4 はちまんりょう<br>八幡領遺跡      |
| 5 やまのくちさどわら<br>山之口佐土原遺跡   | 6 みねもと<br>峯元第1遺跡         | 7 わきのた<br>脇之田第2遺跡             | 8 おうじやま<br>王子山遺跡 (王子城跡) |
| 9 ひらばる<br>平原地下式横穴墓群       | 10 ぐんじんはる<br>軍神原遺跡       | 11 ながやまはる<br>永山原遺跡            | 12 ちやえんはる<br>茶園原遺跡      |
| 13 たかじょうまきのほる<br>高城牧ノ原遺跡群 | 14 やまのくちじょう<br>山之口城跡     | 15 たかじょう がっせんひわ<br>高城 (月山日和城) | 16 まめだ<br>真米田遺跡         |
| 17 なんかいちまえ<br>七日市前遺跡      | 18 にほんまつ<br>二本松遺跡        | 19 なみきぞえ<br>並木添遺跡             | 20 とかく<br>土角遺跡          |
| 21 とみよしまえだ<br>富吉前田遺跡      | 22 みまた まつお<br>三俣 (松尾) 城跡 | 23 うしろだ<br>後田遺跡 (山之口村古墳)      |                         |
| 24 とみよしひら<br>富吉平遺跡        | 25 にしはた<br>西畑遺跡          | 26 はきがくほ<br>萩ヶ久保第1遺跡          |                         |

第3図 上平遺跡及び周辺遺跡分布図

## 第三章 調査の成果

### 第1節 調査の概要

#### 1 発掘調査の方法

##### 調査区の設定

上平遺跡の発掘調査は、調査対象面積 6,000㎡を2か年度にわたり実施した。調査対象箇所の西側には民間事業者が所有していた倉庫の基礎が残っていたため、都城土木事務所が撤去工事を行った。その後、倉庫基礎の北西端を基準とし調査区を設定した。

##### グリッドの設定

調査区全体に国土座標（世界測地系）に基づいた 10m×10mのグリッドを設定し、南北方向のグリッド線に数字、東西方向のグリッド線にアルファベットを付与して、グリッドの北西隅の交点をグリッド名とした（第4図）。

##### 遺構の掘削

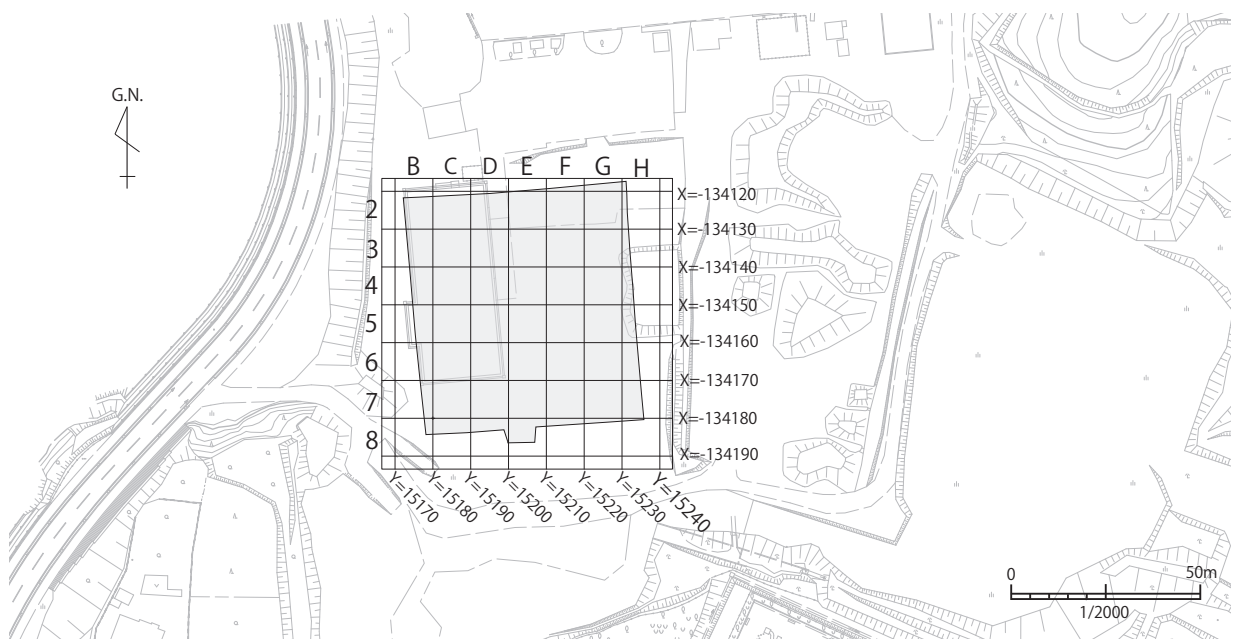
遺構の掘削については、検出状況から個別に任意の主軸を設定し、半截もしくは4分法により埋土の状況を確認しながら掘削することを基本とした。

##### 作図記録

竪穴建物跡や炉穴の平面図や断面図については縮尺 1/20、集石遺構の平面図や断面図については縮尺 1/10 での個別図作成を基本とし、調査員が実測と記録を進めた。

##### 写真記録

遺構や遺物出土状況等の写真撮影機器として一眼レフデジタルカメラを使用した。デジタル画像の保存形式は TIFF と RAW を基本としている。なお、第Ⅳ層及び第Ⅴ層調査面の垂直写真などは業者委託による空中写真撮影を行った。



第4図 調査区及びグリッド配置図



## 2 発掘調査の経過

第1次調査は、令和2年3月4日から令和2年3月27日まで表土掘削を中心に行った。都城土木事務所との協議の結果、東側の霧島御池軽石層上面までの表土除去と西側の表土除去を宮崎県埋蔵文化財センター（以下、センター）が行い、民間業者の倉庫基礎撤去を含め、残りの表土除去や法面設置等を都城土木事務所が行うことになった。センターによる表土除去等は令和2年3月27日に終了し、都城土木事務所による表土除去等は令和2年4月25日に終了した。重機による表土除去時は、都城土木事務所によるものも含め、調査員による掘削状況や遺構・遺物の確認を行った。

第2次調査は、令和2年5月18日から令和2年12月23日まで実施した。

なお、調査成果について積極的に情報発信するために、「発掘通信」を作成し、都城市山之口町内の小中学校に配布した。また、令和2年11月8日に現地説明会を行うなど、地元への普及活動を行った。



写真1 発掘調査の様子①



写真2 発掘調査の様子②



写真3 現地説明会の様子



写真4 発掘通信

これらの発掘調査の概要については、下記の通りである。

### 第1次調査

R2. 3. 4 ~ 3. 6	重機による調査区東側の霧島御池軽石層上面までの表土除去
3. 6 ~ 3. 19	霧島御池軽石層上面にて竪穴建物跡を検出 実測
3. 9 ~ 3. 19	重機による調査区西側の表土除去
3. 27	現場事務所等の撤去を行い、第一次調査終了

### 第2次調査

R2. 5. 12 ~ 5. 13	地中レーダー探査
5. 18	発掘作業員雇用開始
5. 19 ~ 5. 29	重機による排土置場掘削と現場事務所周辺の整地
5. 20 ~ 5. 27	遺物包含層上位にある桜島 11 テフラ層 (第Ⅲ層) 掘削
5. 28 ~	縄文時代早期の遺物包含層 (第Ⅳ層) 掘削開始 遺構検出及び実測
6. 2	調査区南西部で土坑墓 (SD1) 検出
6. 5	調査区西部で地下式横穴墓 (ST1) 検出
6. 12	鹿児島女子短期大学竹中教授による地下式横穴墓 (ST1) 出土の人骨取上げ
7. 20 ~ 7. 21	重機による排土搬出及び整地
8. 28	第1回空中写真撮影
9. 1 ~	縄文時代早期の遺物包含層 (第Ⅴ層) 掘削開始 遺構検出及び実測
9. 23・9. 25	重機による排土搬出
11. 8	現地説明会
11. 9 ~ 11. 10	重機による排土搬出
11. 14	第2回空中写真撮影
11. 16 ~	下層確認調査開始
11. 25	自然科学分析のサンプリング採取
12. 11	発掘作業員雇用終了
12. 18 ~ 12. 19	現場事務所等撤去 (一部は12月25日に撤去)
12. 23	調査終了、建設関連業者へ引き渡し

### 3 整理作業及び報告書作成

整理作業はセンター本館にて令和2年度から令和4年度にかけて実施した。令和2年度は遺物水洗と注記、石器の器種や石材の分類を中心に行った。令和3年度は、土器の接合作業、実測、拓本、ならびにトレース作業のほか、報告書作成を進めた。令和4年度は、遺物や図面記録類に関する収蔵作業を行った。

また、石器実測図作成、炭化材や種子等の自然科学分析、土坑墓ならびに地下式横穴墓から出土した鉄製品の保存処理については民間調査会社等への業務委託とした。

## 第2節 基本層序

上平遺跡は、細長い台地上にある都城市営山之口運動公園の北側に位置し、同運動公園一帯を最高地点とする尾根上地形の北緩斜面に位置する。そのため、調査区内は南西部を最高地点に北東部に向けて傾斜していく。

発掘調査の結果、大きく3つの時代(時期)にわたる遺構と遺物が検出された。時代の新しい順に、古墳時代中期～後期(遺構検出面：第XIV層)、縄文時代後期～晩期(遺物包含層：第V層、遺構検出面：第VI層)、縄文時代早期(遺物包含層：第XIV～XV層、遺構検出面：第XIV～XV層)となる。

主な基本層序は下記に示すとおりである。

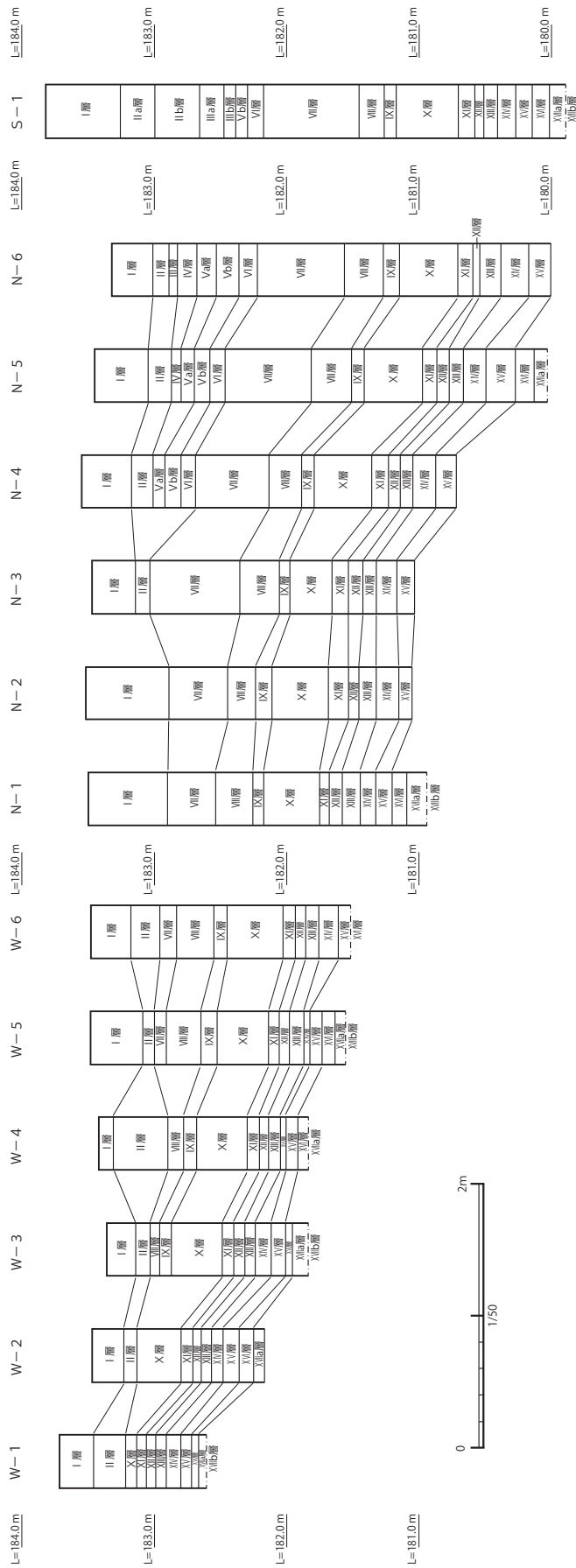
- I層 表土
- II層 整地層
- III層 黒色土に細かい白色粒子と霧島御池軽石を含む【近世以降の耕作土層】
- IV層 黒色土に明黄褐色粒子や白色粒子を含む
- V層 黒色土に霧島御池軽石を含む【縄文時代後期～晩期の遺物包含層】
- VI層 黒褐色土に粒径1 cm以下の霧島御池軽石を多く含む
- VII層 霧島御池軽石(Kr-M, 約4,600年前)
- VIII層 黒色土に細かい透明の粒子を含む
- IX層 灰黄褐色土に粒径1 cm以下の赤褐色のスコリアを含む
- X層 鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah, 約7,300年前)
- XI層 霧島牛のすね火山灰(Kr-U<sub>s</sub>)
- XII層 黒色土
- XIII層 桜島11テフラ(Sz-11, 約8,000年前)
- XIV層 黒褐色土【縄文時代早期の遺物包含層①】
- XV層 黒褐色土【縄文時代早期の遺物包含層②】
- XVI層 暗褐色土に白色粒子や黄褐色粒子を含む
- XVII層 褐色土に灰黄褐色の硬い粘質土ブロックを含む

**基本層序の概要** III層は層厚約0.1～0.2mで、攪拌の様子が見られるため近世以降の耕作土層と考える。IV層は層厚約0.1～0.2mで、土師質の遺物を少量含む。V層は縄文時代後～晩期の遺物包含層で層厚約0.1～0.3m。遺物の出土量は上層(V a層)の方が多い。VII層は霧島御池軽石(Kr-M, 4,600年前)層で層厚約0.1～0.7m。倉庫の基礎があった調査区西側を除き全体に厚く堆積していた。IX層は粒径1 cm以下の赤褐色のスコリアを含み、鬼界アカホヤ火山灰の二次堆積層とみられる。X層は鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah, 約7,300年前)層で層厚約0.1～0.5m。下部5 cm程度に粒径1 cm以下の明黄褐色の豆石の集積が見られた。XIII層は桜島11テフラ(Sz-11, 8,000年前)層で層厚約0.1～0.2m。黒曜石製の石鏃や剥片などが少量出土した。XIV層からXV層は縄文時代早期の遺物包含層で、XIV層は層厚約0.1～0.2m、XV層は層厚約0.1～0.2mであった。XV層はXIV層に比べ色調が明るい。XIV層からXV層にかけて縄文時代早期の遺構を検出した。

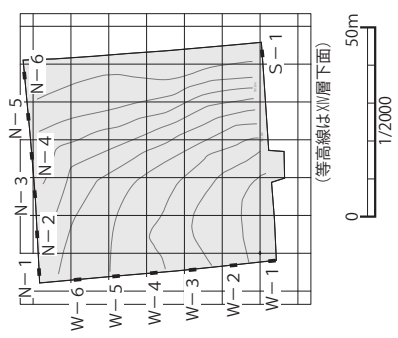
西側土層断面

北側土層断面

南側土層断面



- I層 表土 瓦・礫を多く含む
- IIa層 整地層 御池ボラを多く含む 非常に硬くしまる
- IIb層 白色土 御池ボラを含む 非常に硬くしまる
- IIIa層 黒色土 細砂混粘性シルト しまりなし 細かい白ボラを含む
- IIIb層 黒色土 細砂混粘性シルト しまりなし 細かい白ボラと御池ボラを含む
- IV層 黒色土 シルト質でかたくしまる 土師質の遺物を少量含む 明黄褐色及び白色粒子を含む
- Va層 黒色土 粘性シルト質で細かい御池ボラを含む
- Vb層 黒色土 やや強い粘性シルト質 φ5mm以下の御池ボラを多く含む
- VI層 黒褐色土 粘質土で硬くしまる φ1cm以下の御池ボラを多く含む
- VII層 明黄褐色土 φ3cm以下のボラの堆積 霧島御池段石(Kr-M, 約4,600前)
- VIII層 黒色土 やや強い粘質土でしまりなし 細かい透明の粒子が散見される
- IX層 灰黄褐色土 やや強い粘質土 φ1cm以下の赤褐色のスコリアを含む 【卑界アカボヤ火山の二次堆積層】
- X層 黄褐色土 やや強い粘質土 下部5cm程度にφ1cm以下の明黄褐色の軽石の集積あり 【鬼界アカボヤ火山灰(Kr-Ah, 約7,300年前)】
- XI層 黒色土 やや強い粘質土 細かい白色粒子が散見される 【霧島牛のすね火山灰(Kr-U5)】
- XIIa層 黒色土 やや強い粘質土 細かい白色粒子を多量に含む 細かい白色粒子を含む 【桜島11テフラ(Sz-11, 約8,000年前)】
- XIIb層 褐色土 やや強い粘質土 中位より下位で白色粒子が散見される 【縄文時代早期の遺物包含層①】
- XIIc層 褐色土 やや強い粘質土 中位より下位で白色粒子が散見される 【縄文時代早期の遺物包含層②】
- XIIId層 黄褐色土 やや強い粘質土 φ3cm以下の灰黄褐色の硬い粘質ブロックを含む
- XIIIf層 黄褐色土 やや強い粘質土 φ4cm程度の灰黄褐色の硬いシルト質ブロックを含む



第5図 基本層序柱状図

### 第3節 地中レーダー探査

#### 1 はじめに

地中レーダー (Ground Penetrating Radar) は、非破壊的かつ物理的に地中の状況を把握するための手段の一つである。日本においては、1980年代以降に電気や磁気を利用する手法とともに遺跡探査に応用されるようになった。宮崎県においては1990年代から、特別史跡西都原古墳群をはじめとする県内の遺跡、特に古墳群や地下式横穴墓群でその有効性の検証が行われてきた。地上に顕著な構造を持たず、地中に穿った空洞に死者を埋葬する地下式横穴墓は、南九州に特徴的な古墳時代の墓制であり、偶然の陥没による発見よりも前にその存在を把握することは、最も重要な地域的課題の一つであった。

近年では探査機材や解析ソフトウェアの改良に加え、データ収集や解析の経験や実績の蓄積もあり、高い精度で遺跡の状況を捉えるなど大きな成果を上げている。

上平遺跡では、試掘調査において縄文時代早期の遺物が確認されていたことから、集石遺構や炉穴 (連穴土坑) などの遺構の存在を事前に把握することを目的に地中レーダー探査を実施した。しかし、縄文時代早期の包含層は、地表から比較的深い位置に想定されたことから、御池ボラ (Kr-M) 層上面 (地表下 30 ~ 60cm) で検出された縄文時代後期の竪穴建物跡の調査完了後に、重機によって御池ボラ層から鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah) 層までを除去し (地表下約 100 ~ 230cm)、平坦に整地した状況で探査を実施した。

#### 2 地中レーダー探査

上平遺跡の地中レーダー探査は、以下のとおりに実施した。

探 査 日 : 2020年5月12日、13日

使用機材 : GSSI 社製 SIR-3000 デジタルパルスレーダーシステム、500MHz アンテナ

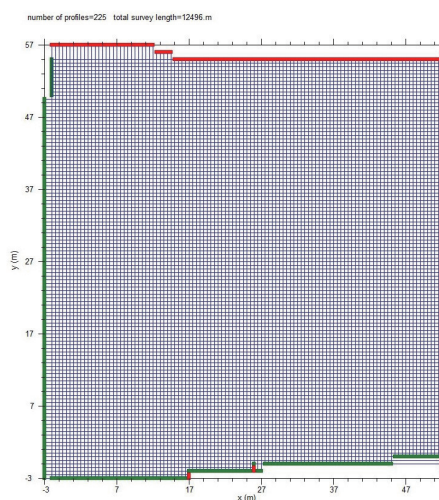
(宮崎県立西都原考古博物館所有機材)

探査深度 : 80 ナノ秒 (NS) 探査面から約 2.4 m 下までのデータを記録

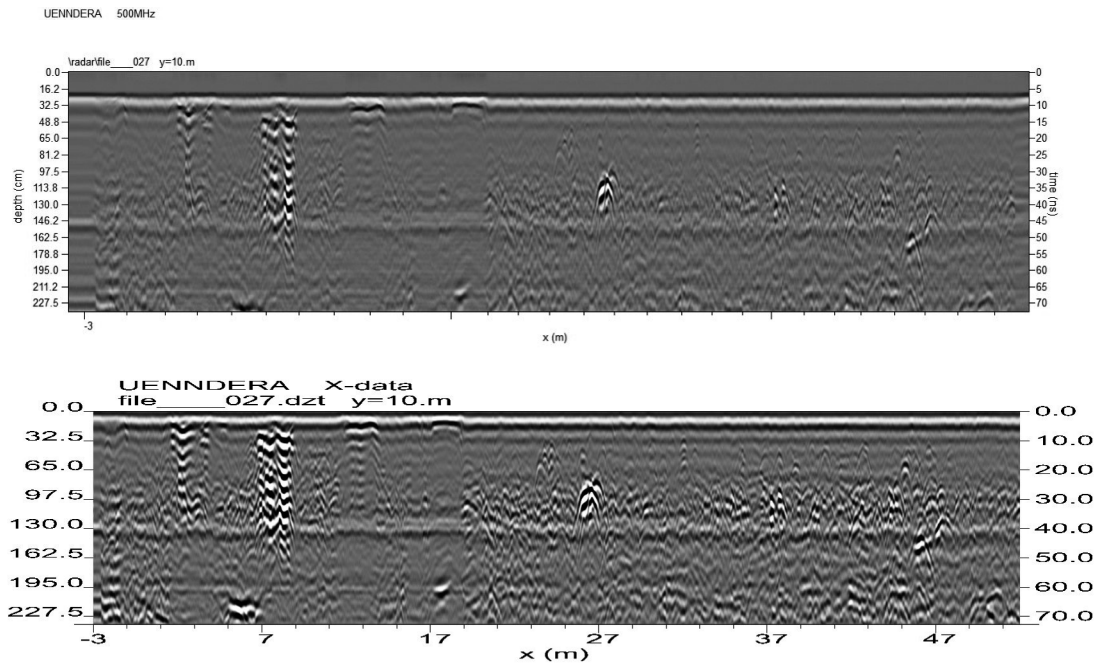
探査方法 : 現場に設定した任意の杭 (50 m グリッド) を基準に、2 m 間隔に設置したメジャーテープに沿ってアンテナを手引きにより走査し、50cm 毎に平行移動した。現場の南西隅の杭を仮の基点 (X, Y = 0, 0) として、X 軸 (東西) 方向と Y 軸 (南北) 方向の両方向にアンテナを走査してデータを収集した。アンテナ走査の総距離は 12,496 m である。(第6図)

探査面積 : 約 3300 m<sup>2</sup>

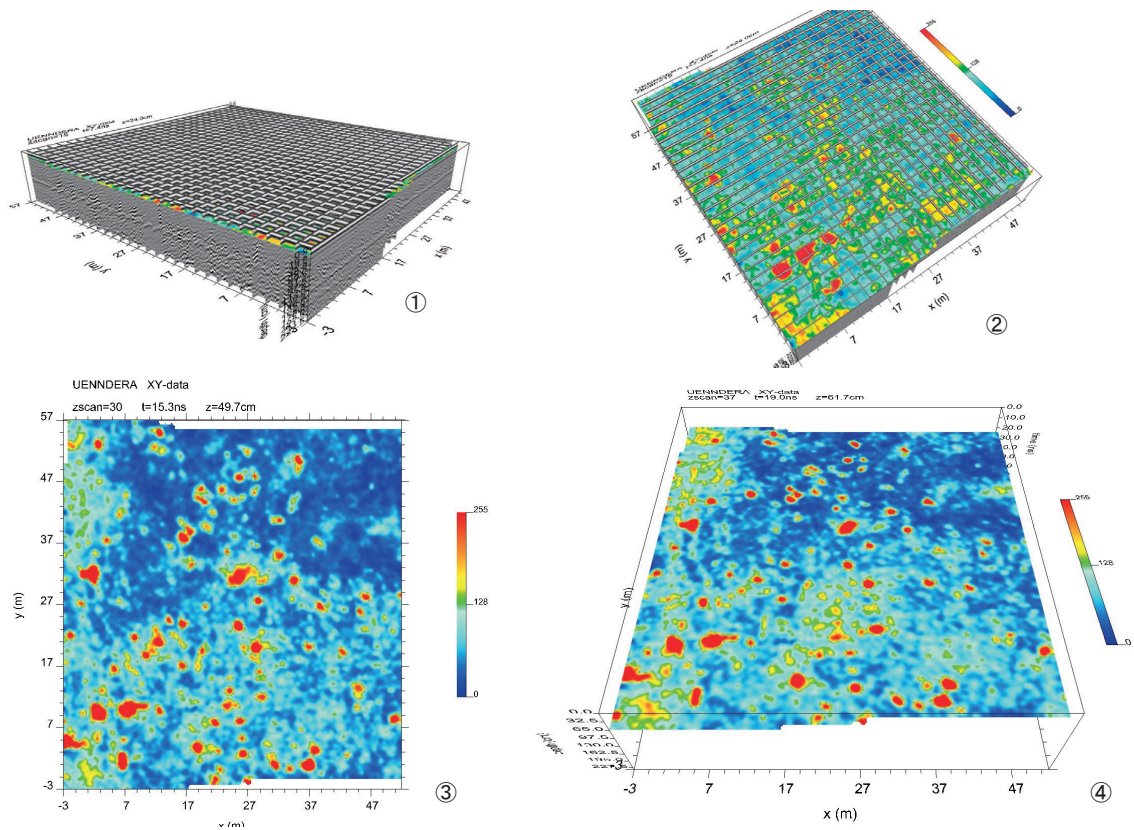
地中レーダー探査は、地表にあるアンテナから地中に向けて発せられた電磁波が、地中の物質に反射してアンテナに戻る状況を記録するものであり、その往復の時間により電磁波の到達深度、すなわち探査深度を限定することができる。



第6図 アンテナ走査図



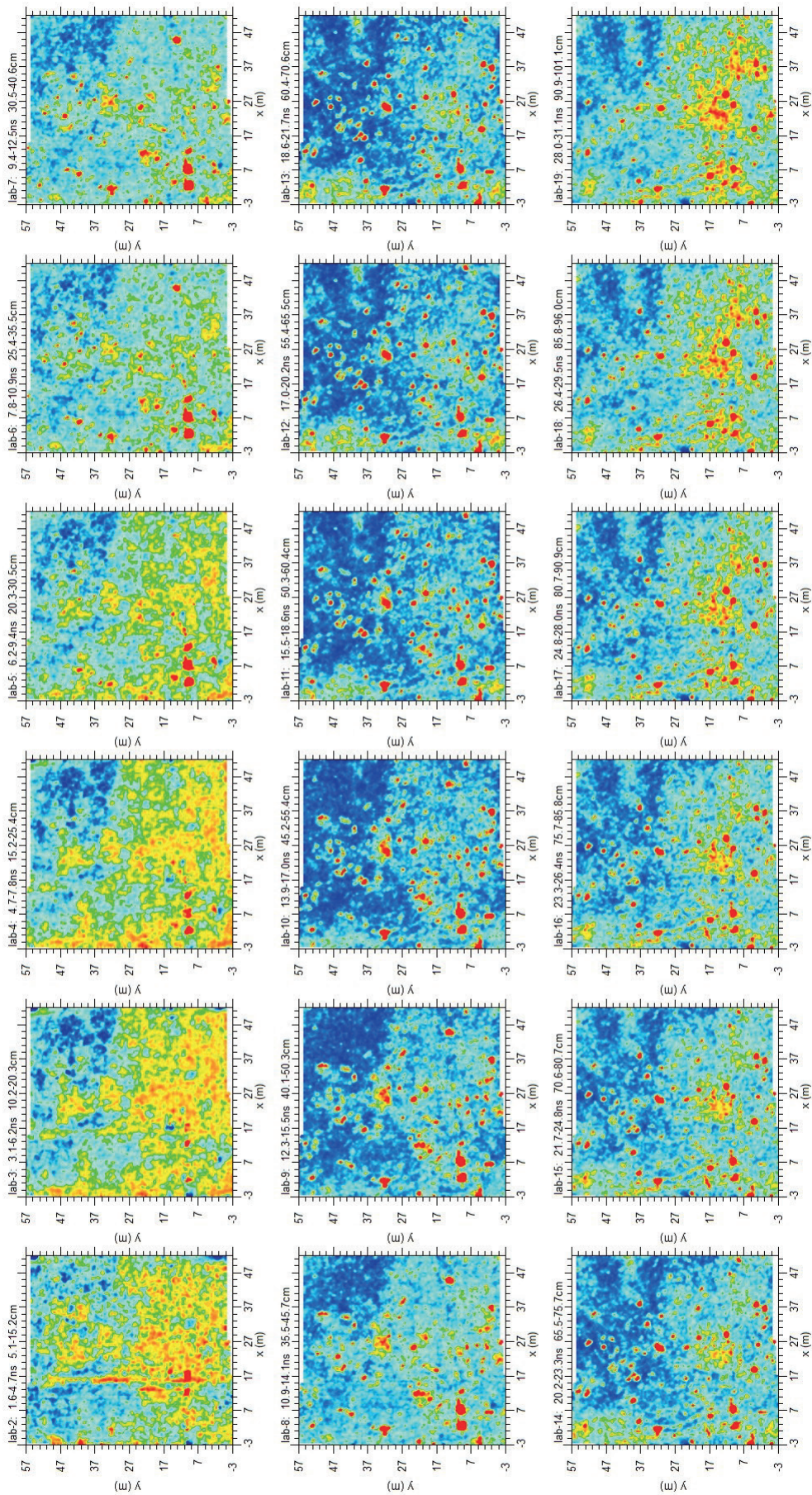
第7図 レーダーグラム プロファイル(上:Rawデータ 下:Resampleデータ)  
Raw データに距離補正とリゲイン等のリサンプル処理を行った



第8図 レーダーグラムプロファイルからタイムスライス (平面図)を作成するイメージ

- ① レーダーグラムプロファイルを位置情報に従って整理させる
- ② 一定の時間帯のデータをビットマップ化する
- ③ 作成されたタイムスライス (2D)
- ④ 三次元タイムスライス (3D)

UENNEDERA 500MHz

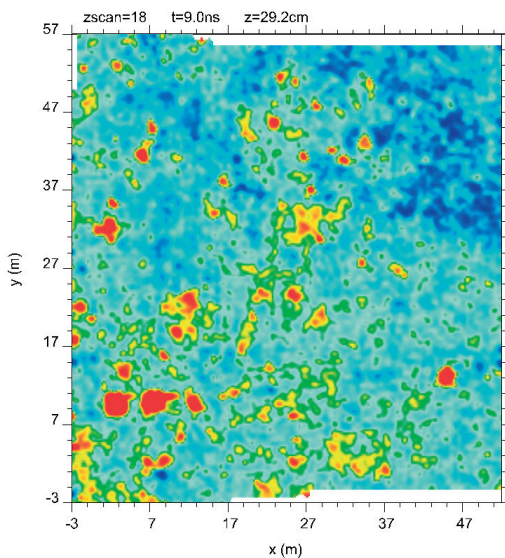


第9図 上平遺跡 タイムスライス

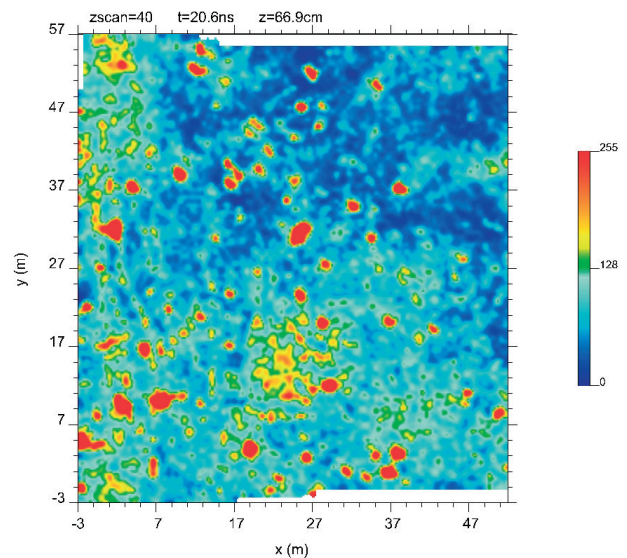
記録されたレーダグラムプロファイルは見かけ上の断面図であり、人による手引きの速度補正をすることでアンテナの移動距離の補正ができる(第7図)。これを位置情報(infomation file)に従って整列させ、特定の時間帯(深度)の状況を表示したものがタイムスライスであり平面図である。これを時間毎に積層することで三次元化することもできる(第8図)。

探査の結果をタイムスライス(平面図)で示したものが第9図である。これは3.1ナノ秒(NS)毎の状況を表示しており、隣り合うデータとは50%のオーバーラップを行っている。地表から約10cmの厚みで、5cm毎に水平にスライスして地中の状況を表示していることになる。

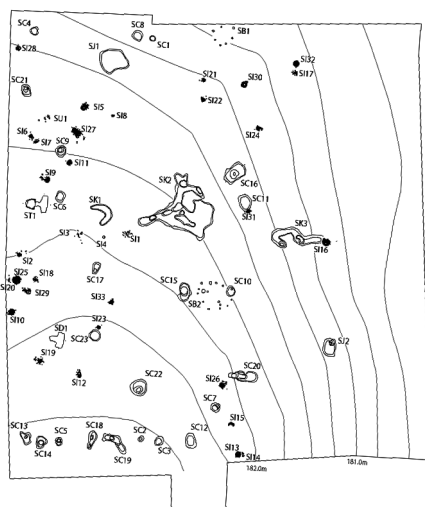
電磁波の反射の強弱は、地中の構造(土、砂、粘土、石、空洞など)の物性の差であり、その差を色の違いで表現している。強い反射を赤、弱い反射を青で段階的に振り分けている。これは、一枚の画像の中で相対的に配色しているため、異なる画像の同色部分が同じ強さを示している訳ではない。また、強い反射が多い画像では、相対的に弱い反射が認識しづらくなる傾向があるため注意が必要である。



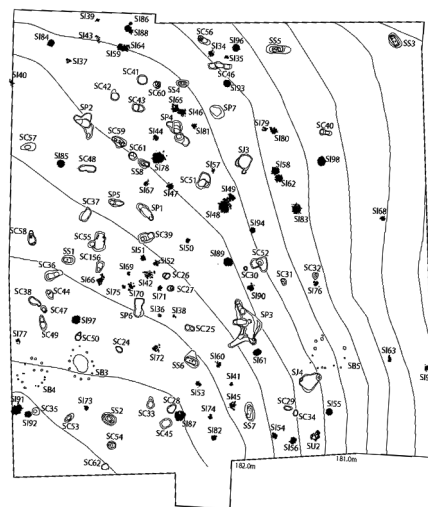
第10図 深さ29cmの状況



第11図 深さ67cmの状況

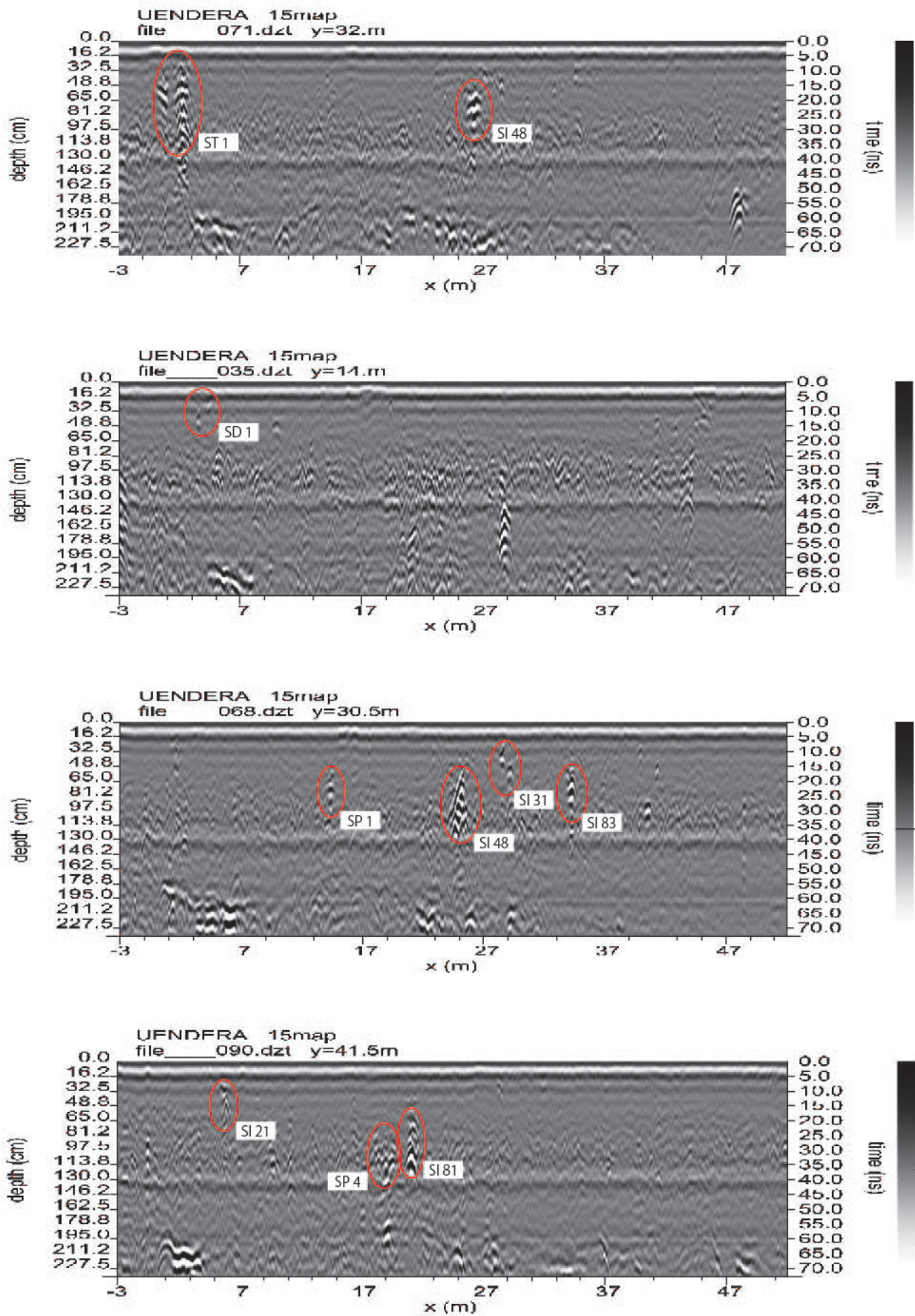


第12図 第Ⅳ層遺構分布図



第13図 第Ⅳ層遺構分布図





第14図 レーダーグラムプロファイルに見られる各遺構の反射  
(地下式横穴墓、土坑墓、集石遺構、炉穴等の反射が認められる)

第9図を見ると、lab-6からlab-7(深さ25.4～40.6cm)の画像に、強い赤色の点状の反射が数多く認められる。更に、lab-11からlab-14(深さ50.3～75.7cm)の各画像には、それより上層の画像とは異なる位置に強い赤色の点状の反射が数多く認められる。これは、強い反射を引き起こした構造物が、上層と下層に分かれて存在している可能性を示しており、探査後の発掘調査で確認された第XIV層と第XV層で検出された遺構を捉えたものと考えられる。

### 3 探査結果の検証

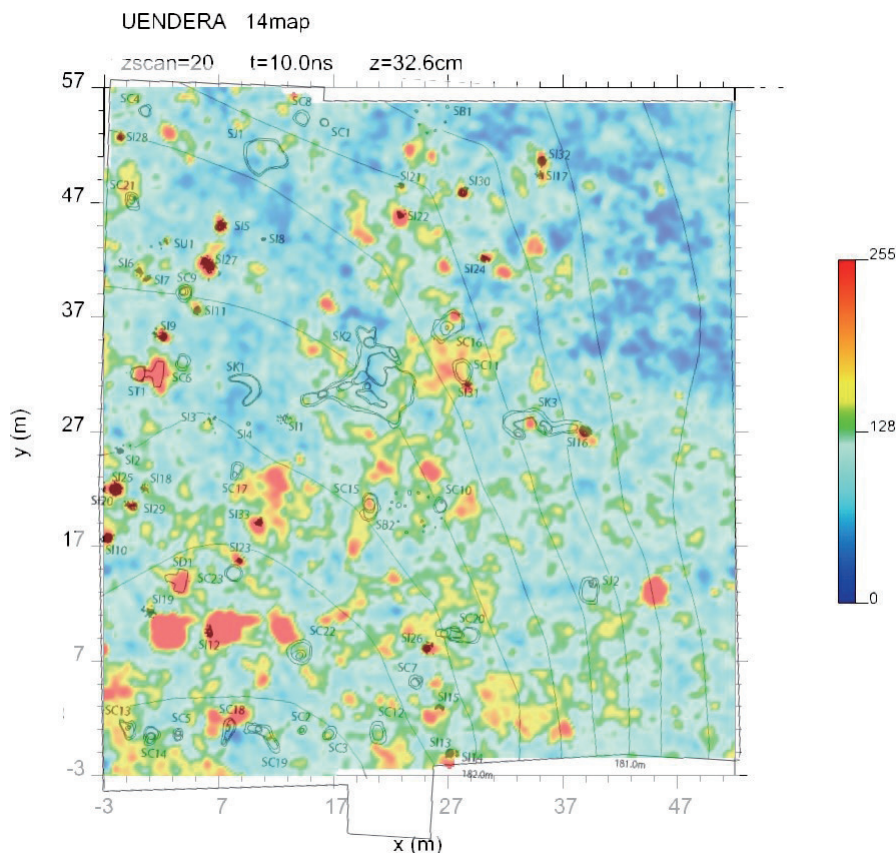
地中レーダー探査の結果(第10図、第11図)と発掘調査で検出された第XIV層と第XV層の遺構の分布状況を示す(第12図、第13図)。

第10図と第12図を、第11図と第13図をそれぞれ比較すると、反射の強い赤く示された部分と遺構分布の傾向が概ね一致していることが分かる。

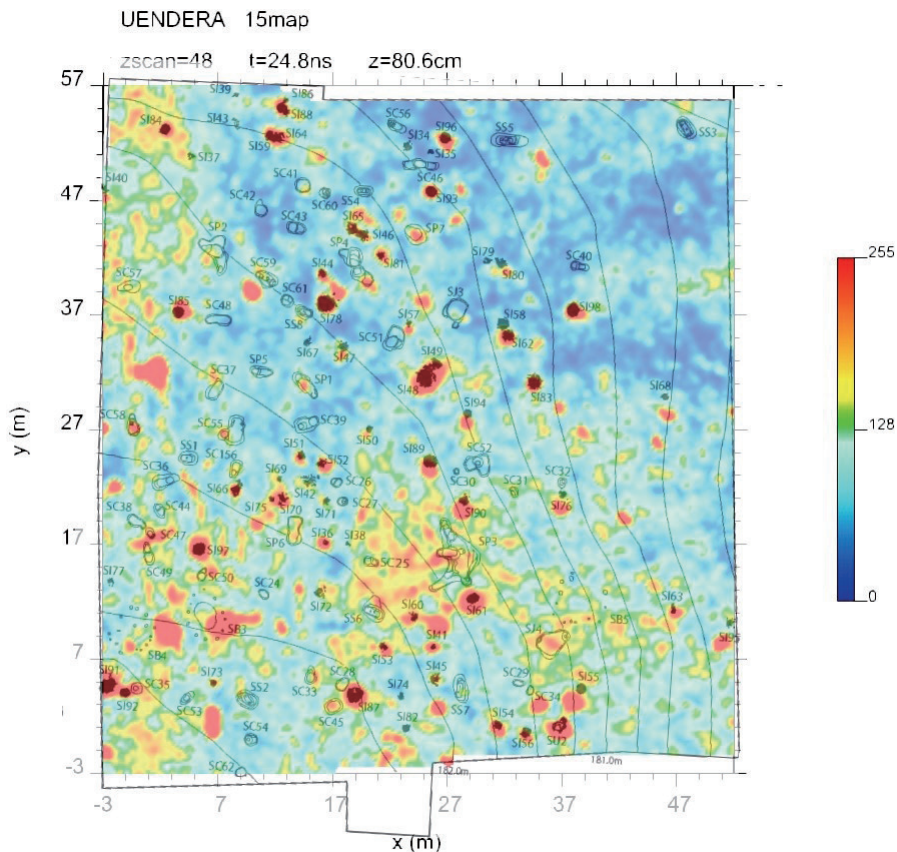
#### (1) レーダーグラムプロファイルの検証

見かけの断面であるレーダーグラムプロファイルのいくつかを検証すると、file-071には第XIV層検出の地下式横穴墓ST1と第XV層検出のSI48が、file-035には土坑墓SD1が捉えられている。file-068には第XIV層検出のSI31、第XV層検出のSP1、SI48、SI83が、file-090には第XIV層検出のSI27、第XV層検出のSP4、SI81が捉えられており、それぞれの層位の差も明瞭である。

これにより、いずれも天井が陥没して玄室が埋まった状態の地下式横穴墓や土坑墓、集石遺構、炉穴などの遺構が地中レーダーによって捉えられていることが確認された。



第15図 第XIV層遺構分布図と地中レーダー結果  
(タイムスライスは深さ20～30cmのデータを重複させた)



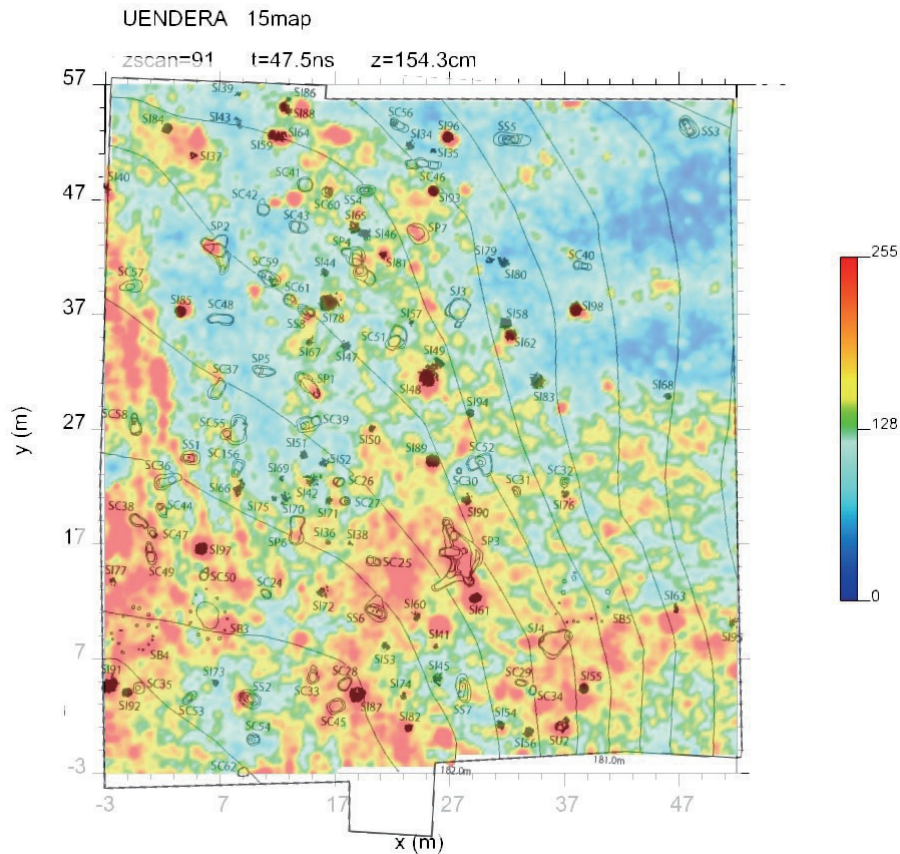
第 16 図 第XV層遺構分布図と地中レーダー結果①

(タイムスライスは深さ 50 ~ 80cm のデータを重複させた)

## (2) タイムスライスと遺構分布図の検証

第 15 図は、第XV層の遺構分布図に深さ 20 ~ 30cm のデータを重ねたものである。地下式横穴墓 ST1、土坑墓 SD1、集石遺構 SI1 ~ 33 については、その位置と形状、大きさなどが正確に一致している。しかし、土坑や平地式建物跡が想定されている小ピットについては、必ずしもすべてを捉えていない。これは、地山と埋土の物性に差がなく、一様に硬く締まっていたため、電磁波反射の相対的差異で異常箇所を捉える地中レーダーの特質から、識別が困難であったためと考えられる。

第 16 図は、第XV層の遺構分布図に深さ 50 ~ 80cm のタイムスライスを重ねたものである。集石遺構 SI34 ~ 98 については、ほぼすべての遺構を地中レーダーが捉えていることが分かる。他方、土坑 (SC) や炉穴 (SP)、平地式建物跡の小ピット (SB) については捉えられていないものが多い。これは第XIV層と同じく、地山と埋土の物性が近似し、一様に硬く締まっていたことに起因すると思われる。しかし、炉穴については、床面に強い被熱痕と焼土が認められることから、何らかの物性の相違が存在すると考えられた。そこで、第 16 図のデータよりも深い 90 ~ 154cm のデータを重ねたのが第 17 図である。これを見ると炉穴の底面に残る強い被熱痕と焼土が反射し、SP1 ~ SP7 の遺構位置と一致していることが分かる。



第 17 図 第Ⅳ層遺構分布図と地中レーダー結果②  
(タイムスライスは深さ 90 ~ 154cm のデータを重複させた)

#### 4 おわりに

上平遺跡において、アカホヤ火山灰層下の集石遺構や炉穴といった縄文時代早期の遺構を対象として地中レーダー探査を実施した。その結果、二つの異なる深さにおいて、多くの反射を捉えることができた。それらを発掘調査で検出された遺構分布状況と比較検証すると、天井が陥没して埋まった状態の地下式横穴墓や土坑墓、拳大の焼礫を集積した集石遺構、細長い土坑の底面に強い被熱痕と焼土が残る炉穴を捉えたものであることが判明した。

また、地山と埋土が近似し硬く締まっている土坑については、地中レーダーの特性から判別が難しいことも確認された。これまで宮崎県内における地中レーダー探査は、古墳や地下式横穴墓などを対象としたものがほとんどで、古代の集落や官衙、近世城郭の石垣などを対象とした事例も数例あった。その多くは、比較的軟質の黒ボク土やアカホヤ火山灰層が主なターゲット層となり、非常に良好な成果が得られている。しかし、火山灰やスコリアなど火山噴出物の多い宮崎県においては、縄文時代早期以前の遺構検出面が地表面から 2 ~ 3 m 以上も下層となることもあり、遺構の有無や分布状況の把握が困難となる場合もある。

今回は、アカホヤ火山灰層下の硬く締まった土層中で、縄文時代早期以前の集石遺構や土坑、炉穴など空隙がない状態で埋まった遺構をターゲットとしたが、事前に重機によりアカホヤ火山灰層までを除去した状態で探査を行うことで、高周波数のアンテナを使用することが可能となり、より詳細なデータ

を収集することが可能となった。その結果、多数の遺構の平面的・垂直的分布状況を捉えることができた。このことは、縄文時代早期以前の遺跡の調査においても、地中レーダー探査が有効であることを証明するものである。

遺跡の立地や環境にもよるが、可能な限りターゲットとなる層に近いレベルで探査を実施する条件を整えることで、縄文時代早期以前の硬質土層に埋まる集石遺構や土坑など径1 m未満の比較的小さな遺構も捉え、遺跡の状況を把握することができよう。今後の確認調査や発掘調査における地中レーダー探査の更なる活用を望む。



写真5 地中レーダー探査実施状況



写真6 地下式横穴墓 ST1 完掘状況

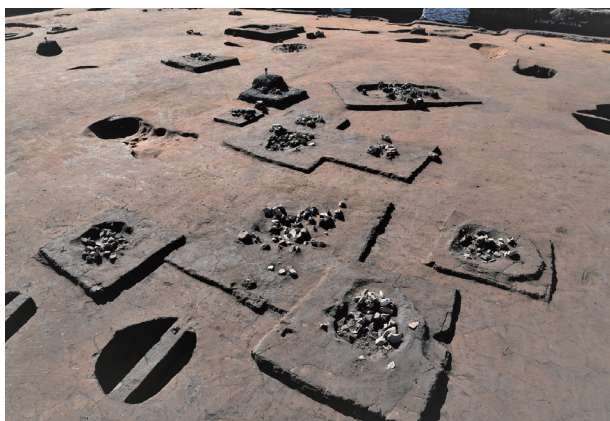


写真7 集石遺構群(第IV層)



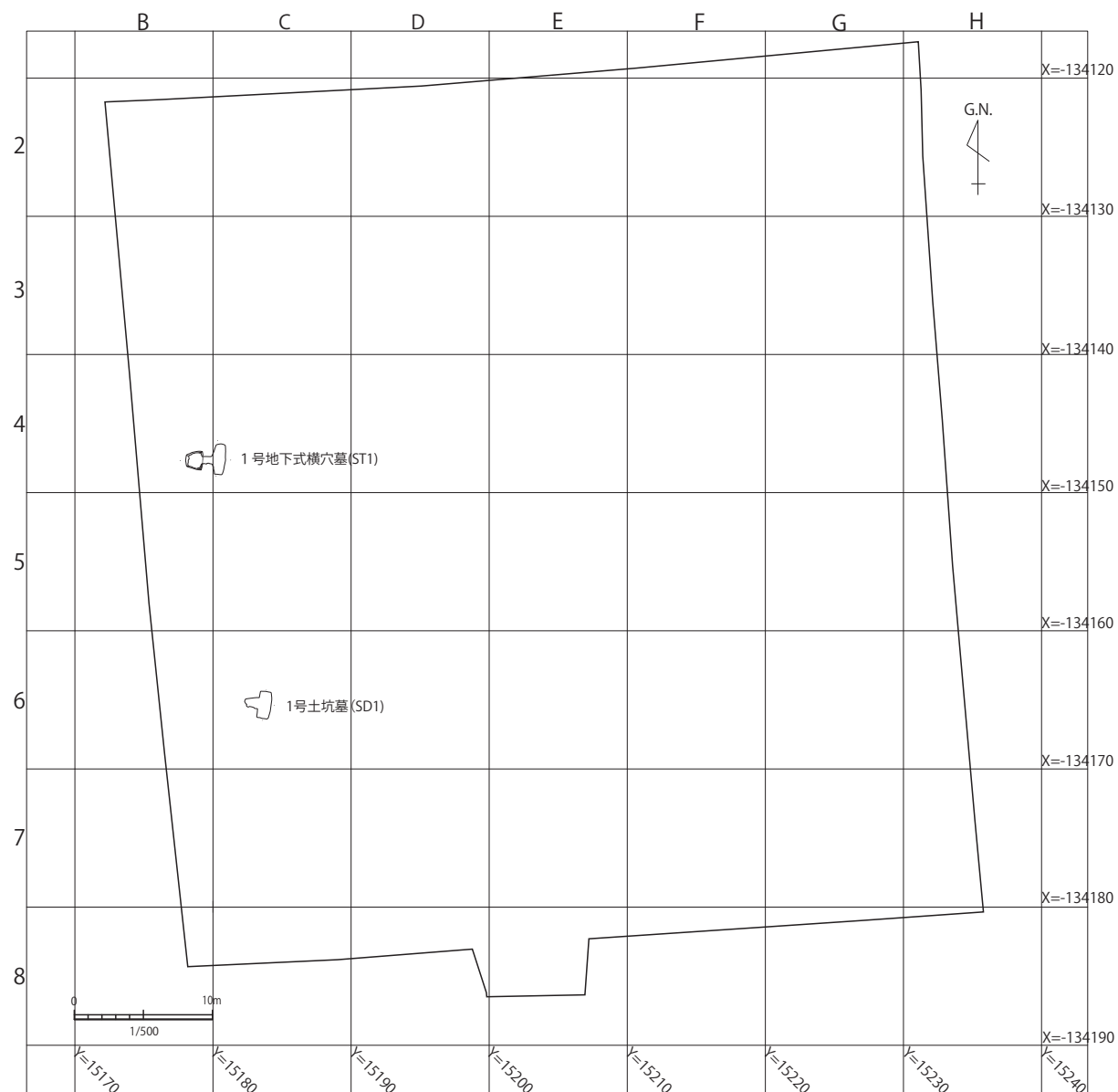
写真8 炉穴 SP3 完掘状況(第IV層)

## 第4節 古墳時代中期～後期の遺構と遺物

### 1 遺構の分布 (第18図)

古墳時代中期～後期の遺構については、土坑墓1基と地下式横穴墓1基を検出した。調査区の旧地形は南西から北東方向にかけて傾斜するが、両墓が位置する調査区西端の中央から南側付近にかけては、緩やかな傾斜上にやや平坦な部分が形成されている場所となる。両墓ともに、入口を西側に有して埋葬部を東側に造る構造で、両墓間の距離は約17mを測る。

両墓が検出された一帯は、造成工事による上位層の削平や調査直前まで存在した既存建物の攪乱が著しく、また、試掘調査なども含めて古墳時代に関わる遺物も皆無であった。このため、表土掘削途中で遺構を認識することができず、今回の主たる調査対象である第Ⅳ層上面での検出となったが、本来ならば、詳細な時期は不明ながらも少量の土師質土器を包含する第Ⅳ層付近で検出できると考えられる。なお、実際の検出面からすると2.2m程度の差がある。



第18図 古墳時代中期～後期の遺構分布図

## 2 土坑墓

### 1号土坑墓 (SD1、第19～22図)

調査区西端の南側 C6 グリッド (以下 Gr. と表記) で検出した土坑墓である。ほぼ南北方向に主軸をもつ平面長方形の墓壇を造り、墓壇西側長辺の中央に平面二等辺三角形の横口が取り付く。

上位部は失われたが、全体的に最大 0.15m の深さがかろうじて残っていた。検出面において、墓壇は長辺約 2.0m、短辺 0.8～0.9m を測り、横口については短軸最大 0.8m、長軸約 1.0m を測る。

本来は箱形であったと考えられる墓壇は、丁寧に四隅の角を造り、床面を黒褐色の硬いロームである第ⅩⅤ層内で基本的には平坦に仕上げているが、作業場としたためか横口との接点部の底面がやや掘り窪められている。北壁直下には幅 0.1m 強で断面 U 字形の溝が東壁に接して設けられ、北壁の中央付近をやや越えたところから、南側へ直角に曲げて 1.0m ほど掘削し、床面を徐々に上げながら終息させる。この鉤状の溝は、木棺設置のために設けられたと考えられ、埋土の一部であるしまりのない 11 層が木棺材の痕跡だとすると、北側の小口板は北壁側に、西側の側板は被葬者側の平滑に仕上げた壁面に沿わせて設置する。また、遺構検出時に確認できた墓壇東壁に沿った 10 層も側板の痕跡と考えると、被葬者の埋葬には組み合せ式木棺が採用されたと推定されるが、断面観察を含めて南側の小口板と底板の痕跡は確認できなかった。これらを総合すると、木棺の内法については長軸約 1.4m、短軸約 0.5m、棺材の厚みは 0.05m 程度が想定できる。なお、木棺材の設置後は、木棺の内外では床面の整地のために、溝内では目地も兼ねて黒色の硬質ロームやアカホヤ火山灰が薄く互層となって埋められていた。

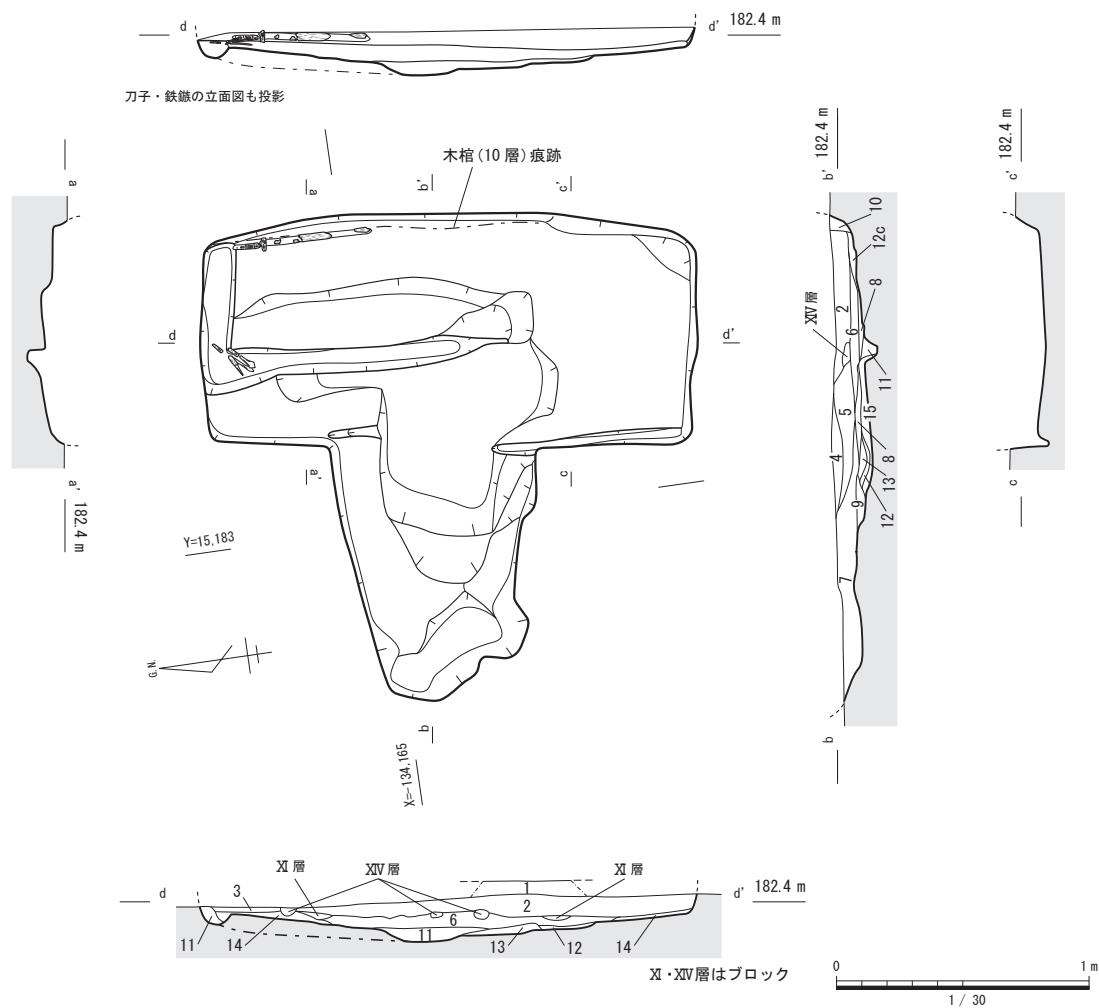
元来横口と墓壇は閉塞していたと考えられ、墓壇側の南西壁面直下から横口との境にかけて幅 0.1m に満たない溝が設けられており、木板などの有機質素材を使用する。

墓壇を含む木棺内の埋土については、横口の開口によって墓壇内に流入した 5・6 層の上位に、墓壇を埋め戻したアカホヤ火山灰層を主体とする 1～3 層が、木棺本体や蓋板が朽ちることで落ち込んで堆積していた。特にアカホヤ火山灰層 (第Ⅹ層) の土塊が利用された 2 層の下面は丁寧に整形しており、埋め戻しに際しては、アカホヤ火山灰の黄褐色を意識していた可能性が高い。

人骨等が全く残っていなかったことから、被葬者の詳細な情報はわからない。なお、木棺内のうち北西隅から西側一帯が 0.25m 弱の幅で若干窪ませて整えられた場所があり、ここが埋葬場所であった可能性もあるが、木棺内の西側に寄っていることは懸念される。ただし、東側の側板痕跡の南端と窪みの位置がほぼ同じであることを考えると、被葬者の身長は 1.4m を越えることはないと推定される。

遺物はすべて墓壇内からで、鉄製武器類として鉄剣 1 点と鉄鏃 2 点、鉄製工具として刀子 1 点の副葬品が出土した。鉄剣は、木棺内のうち北東隅から出土し、鋒を南側に向け東側の側板にもたれ掛けるように置かれていた。鉄鏃と刀子については、すべて墓壇の北西隅において、南西方向に鋒を向けて揃えるようにして出土し、刀子の刃部は棺外側である西側を向いていた。なお、鉄鏃と刀子の出土位置が、木棺側板設置の溝よりも上位で、さらに墓壇を埋める 3 層内で出土したことを鑑みると、木棺の蓋上に置かれていたと考えられる。

**出土遺物** 1 は鉄剣である。残存する鞘材と柄材を含めた残存長は 56.0cm で、完存する鉄剣本体は 53.0cm を測る。剣身の長さは 55.6cm で、鋒から徐々に幅を広げ、関において 3.3cm の最大幅をとる。最大厚 0.6cm となる断面形状は両丸造りである。鋒については、ふくらとなる。関の形状は、確実ではないが X 線透過撮影によって均等な両撫関に見え、浅く曲線を描いて茎に繋がる。長さ 11.0cm、幅 1.7

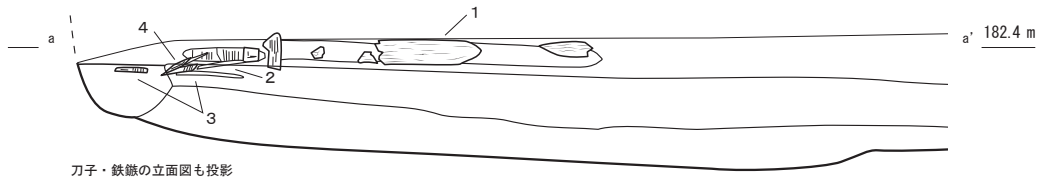
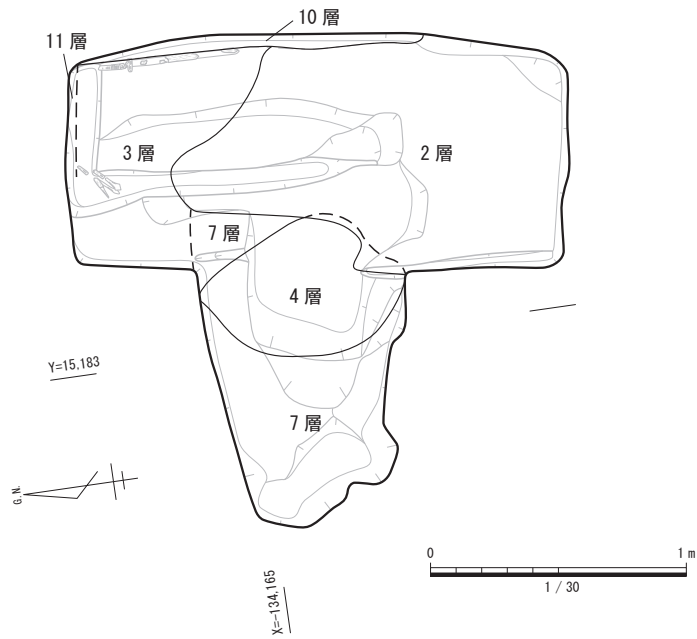


- 1 褐色砂混粘質土
- 2 アカホヤ火山灰 (X層)
- 3 X層とXIV層が混在
- 4 黒色粘質土、1cm以下の御池ボラ (VII層) を多く含む
- 5 黒色粘質土を主体に、5cm以下のアカホヤ火山灰 (X層) ブロックが混在
- 6 黒褐色粘質土、1cm以下のアカホヤ火山灰 (X層) 粒を多く含む
- 7 黒褐色強い粘質土を主体に、2cm以下のアカホヤ火山灰 (X層) 粒と5cm以下の黒色粘質土ブロックが混在
- 8 アカホヤ火山灰 (X層)
- 9 黒褐色粘質土、5cm以下のアカホヤ火山灰 (X層) ブロックを多く含む
- 10 しまりのない黒褐色シルトを主体に、3cm以下のXIII層ブロックを含む
- 11 5cm以下の黒褐色粘質土ブロックで構成されるが、全体的にボソボソとしまりが無い
- 12 黒色粘質土 (硬質ローム)
- 13 アカホヤ火山灰 (X層)
- 14 XII層とXIII層が混在
- 15 褐灰色粘質土

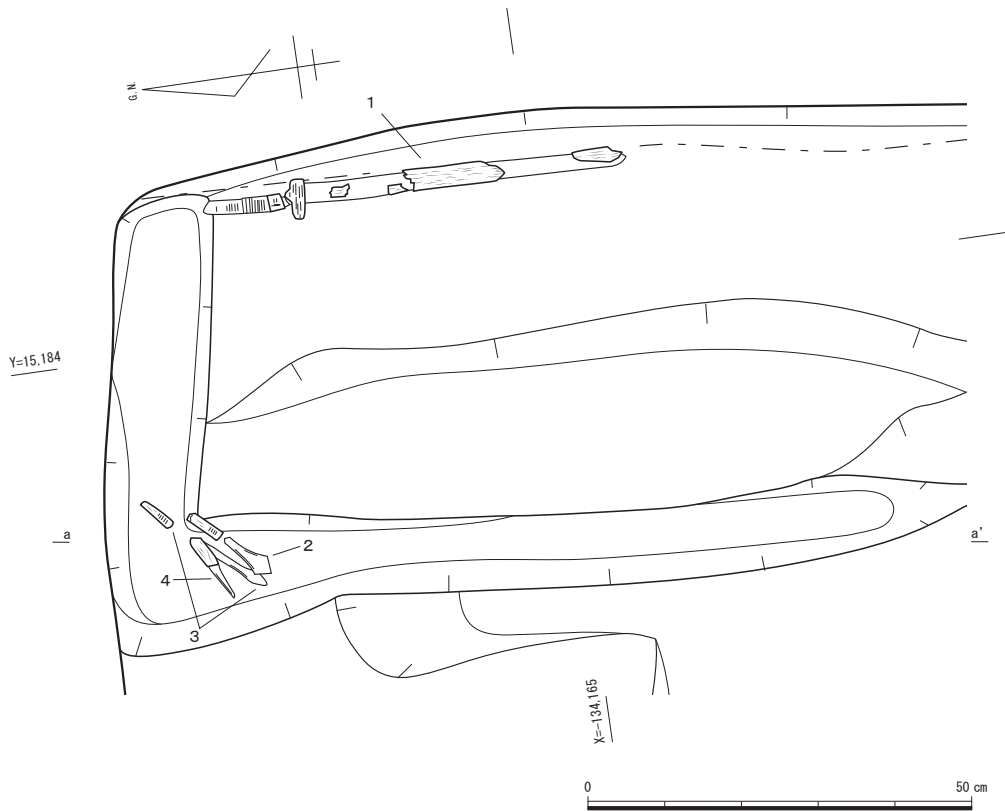
第19図 土坑墓実測図(1)



遺構検出時の埋土の様子

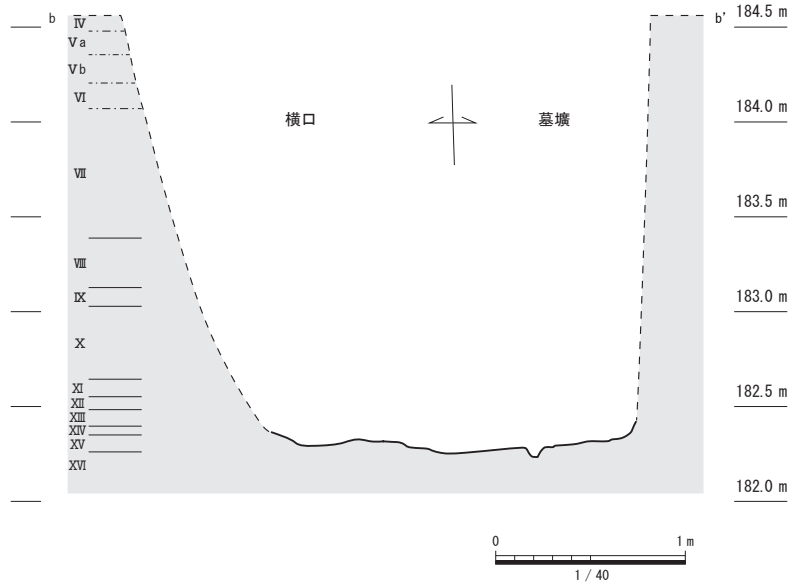


刀子・鉄鏈の立面図も投影



第20図 土坑墓実測図(2)

【想定断面図】



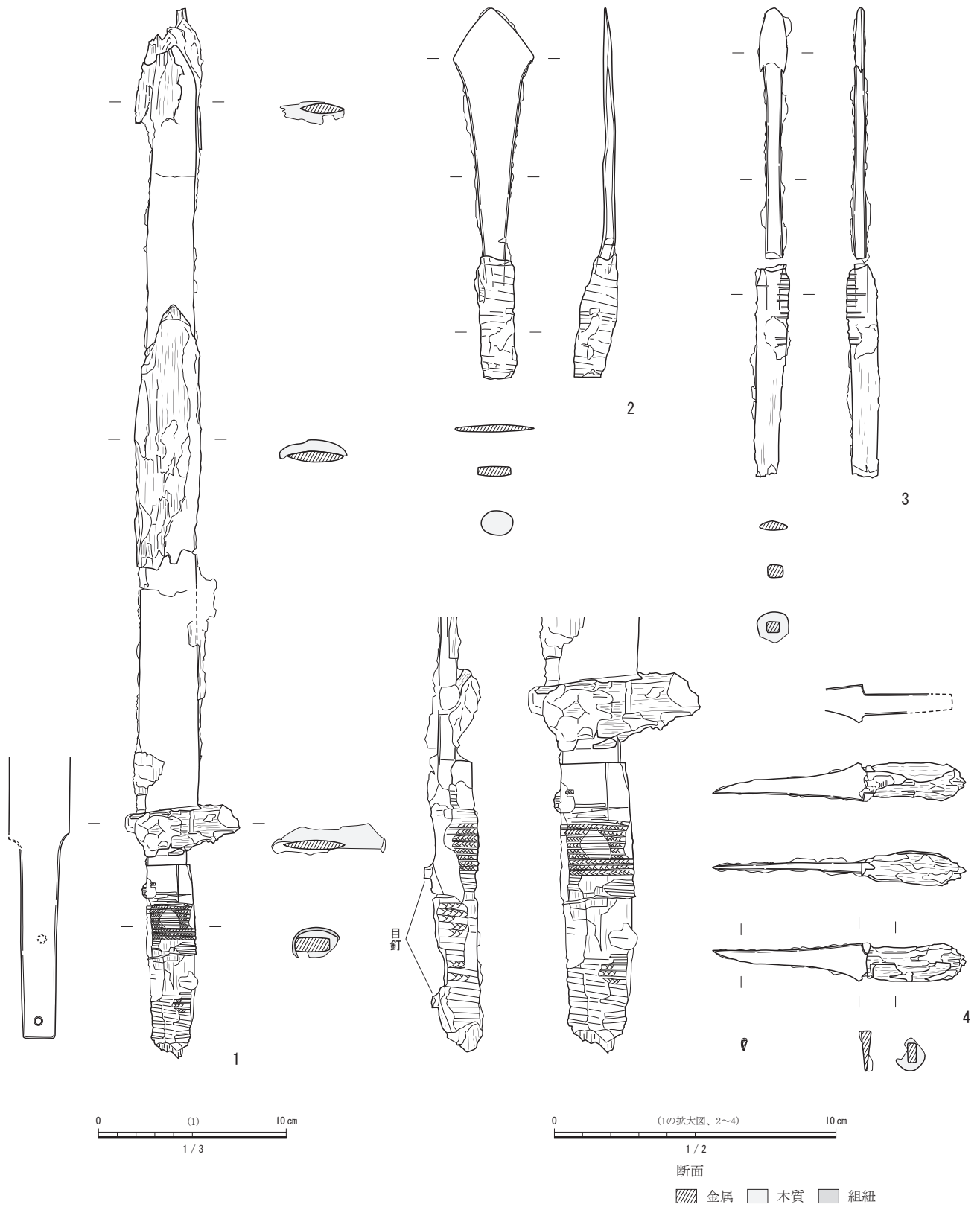
第21図 土坑墓実測図(3)

～2.2cmの茎は、幅を狭めながら茎尻に至り、断面を長方形に作る厚みは0.8cmを測る。茎尻に関しては、X線透過撮影の観察で一文字に見える。また、柄には錆化した目釘が、関から約5.6cmと約10.0cmの2か所に残り、関から遠い位置の目釘穴だけが、X線透過撮影で確認できた。

剣身には、鋒の両側と墓壙床面に接していなかった面の中央付近を中心に鞘材が遺存するが、その他の鞘装具については残っていない。なお、鞘材にはカヤが利用される。

茎には、柄縁と柄間を別で作る木質の柄装具が利用されているが、茎尻を越えることなく柄頭についても残っていない。柄間と柄縁の間に木質の抜ける箇所が認められるが、柄縁の鞘側の面と柄間端面が丁寧に成形されていることから、長さ3cm程度のこの範囲が柄縁であったと考えられ、関を1.5cm程度跨いで装着されていたと思われる。柄間には幅1cm弱、深さ2～3cmの溝が設けられており、落とし込み式で茎が柄間に挿入されている。床面接地面と反対の面に幅6cm程度の柄縁が残る。錆化によって不確実な所もあるが、柄間の開口側を背とした時に、柄縁腹側の方が大きく張り出す。柄間の装具として三つ編みに編まれた組紐が巻き付けられている。組紐については、柄間の中央付近から柄縁側ではやや間隔を開けて1cm幅に5本の密度で、柄頭側では隙間なく1cm幅に4本の密度で巻き付けており、両者の三つ編みが方向を違えていることから巻き方向が反対であったと考えられる。

2は圭頭斧箭式鏃である。残存する矢柄を含めて、13.2cmが残る。刃部の平面形は長さ1.9cm、幅2.9cmの二等辺三角形様を呈し、厚み0.3cmの断面については両丸造りとなる。ややふくらを持つ刃部から小さく内湾させて鏃身部の下半へ至り、徐々に幅を狭めながら茎部へと続く。断面が長方形となる鏃身部下半の最大厚は約0.4cmである。X線透過撮影の観察も含めて、鏃身部から茎部へは関を設けていないように見え、この付近で折れ曲がる。茎部の様子については明確でない。茎部には矢柄の木質が遺存し、口巻きの痕跡と思われる横方向の筋が0.3cm程度の間隔で確認できる。



第 22 図 土坑墓出土遺物実測図

3は長頸鏃で、鏃身部及び頸部と矢柄を残す茎部が遊離した状態で出土した。同一個体と考えられるが、折面の接点はかみ合わない。

鏃身部と遺存する頸部の長さは16.5cmである。長さ2.3cm、幅1.0cmの鏃身部は、全体的にふくらとなる柳葉形の平面形で、両丸造りの断面の厚みは0.4cmを測る。鏃身部下半に小さな逆刺をもち、鏃身関は腸袂となり、鏃身部と頸部の境に段差をつくる。頸部については茎部関まで直線的に伸び、断面はやや扁平な長方形を呈し、幅は0.6cmではほぼ一定であったが、厚みは徐々に増しながら最大で0.5cmを測る。

矢柄を含めた茎部の長さは7.6cmが残る。茎部関の形状は、ナデ関であることがX線透過撮影で観察できたが、茎部の下半については、はっきりとしない。確認できた茎部の断面形はやや扁平な長方形で、幅は0.5cm、厚みは0.4cmとなる。なお、茎部には矢柄の木質が遺存し、0.2cm程度の間隔で巻かれた錆化した口巻きの樹皮が、矢柄の上半約3cmの範囲に残る。

4は鉄製刀子で、残存する柄材を含む長さは9.0cmを測る。茎の位置が不確定であるが、刀子本体は推定で8.5cmとなる。刃部の長さは5.4cmで、幅は関で最大となり1.4cm、背の厚みは、やはり関で最大の0.4cmを測るが、刃部についてはかなりの研ぎ減りが認められる。関は共に斜めに切り込む両関で、刃部側の角度の方を広く切る。茎はX線透過撮影で一文字の茎尻に向かって狭くなっていくように見えるが、不確定なところも多い。推定であるが、長さ3.1cm、幅0.6～0.8cm、厚み0.4cmを測る。茎全体には柄材が残っており、表皮が残る所も確認できる。また、佩表側の関近く、茎の地金が見える箇所において、茎への糸巻きのような錆化した痕跡を確認した。なお、茎の目釘穴については、X線透過撮影によっても認められなかった。

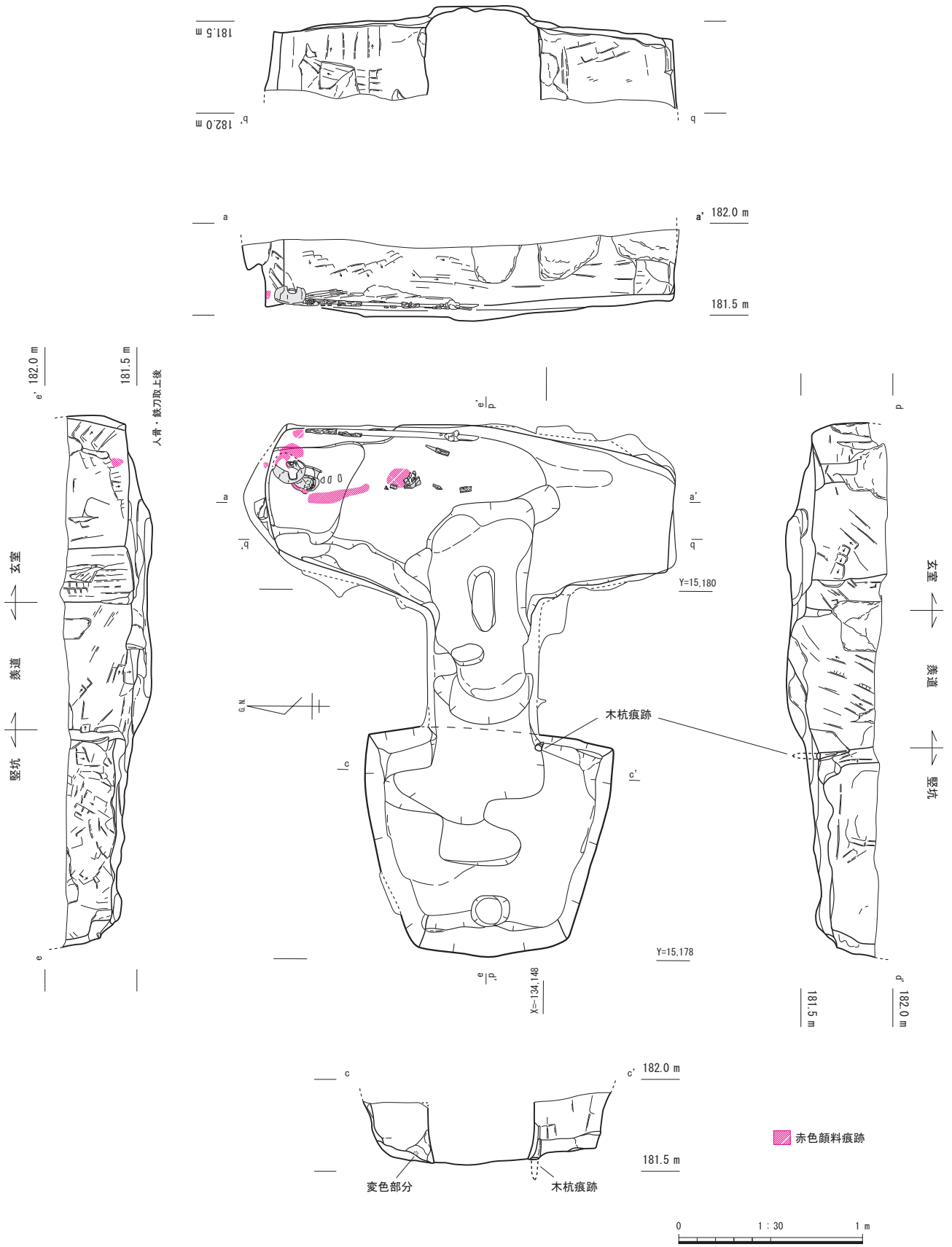
### 3 地下式横穴墓

#### 1号地下式横穴墓 (ST1、第23～25図)

調査区西端中央のB4・C4Gr.で検出した地下式横穴墓である。ほぼ東西方向に主軸をもち、西側に設置された竪坑から羨門・羨道を通って平入りで玄室に至る構造をとる。玄室内には、頭位を右壁側(北側)にした壮年男性が単体で埋葬され、副葬品として鉄刀1振が出土した。各部の詳細は以下で述べるが、天井部等を削り込む形での検出となったため、各部の上位部分は不確定なところも多い。なお、左右の表記については、玄室奥壁を背にした際の表現とする。

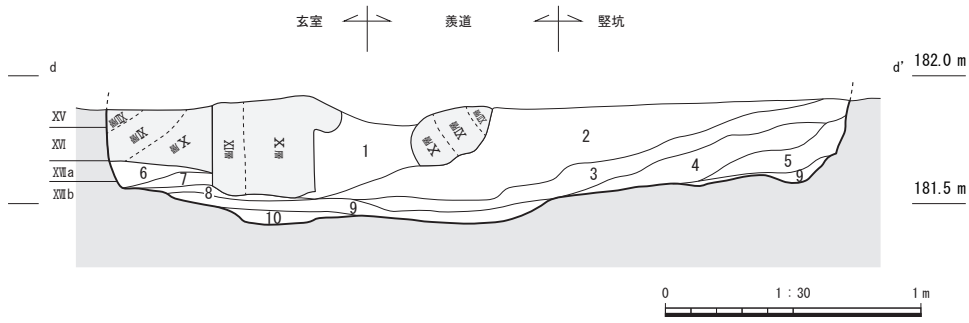
**竪坑** 竪坑の平面形は入口側(西側)に短辺をもつ等脚の台形状を呈する。それぞれの辺は全体的に丸みを帯びるが、玄室側の辺はより弧を描く。検出面での竪坑の規模は、東西軸で最大1.25m、南北軸の西側で0.85m、東側で1.35mを測る。玄室も含めて竪坑は第Ⅶ層まで掘削されており、全体的に床面は明るい褐色が優勢な色調となる。竪坑の掘削は、羨門側については真っ直ぐ平滑に仕上げるが、昇降部である西壁はあまり傾斜を付けずに掘削され、足掛けのためか底位付近に小さな段をつくる。竪坑底面は玄室側に向かって傾斜しており、羨門の前面で小さく削り込んで羨道へと続く。検出面からの深さは最大で0.4mとなる。壁面には加工時における縦あるいは斜め方向を基本とする工具痕跡が見られる。ケズリの方角については一定しないが、特に右壁に多く残り、0.05～0.1cmほどの工具を使用する。

竪坑の埋土については、羨道側に向かって傾斜して堆積する状況がみられ、現状で4段階の埋め戻し工程が確認できた。基本的には竪坑等を掘り上げた土が逆順に埋め戻されており、こぶし大よりも小さな基本層の土塊がしまりなく堆積していた。また、羨門の閉塞が開口した際に、上位の2・3層が羨道



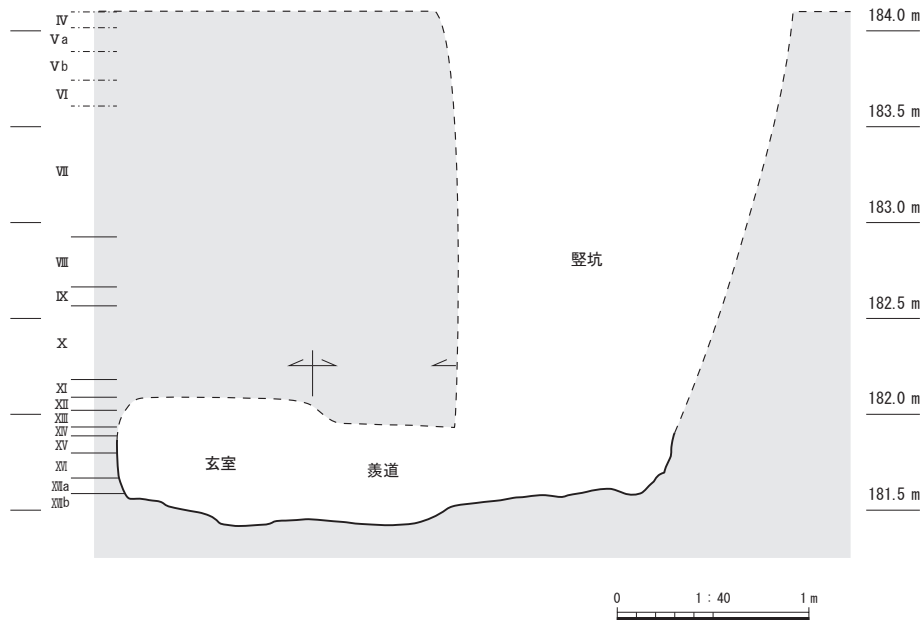
第23図 地下式横穴墓実測図(1)

【断面図】



- 1 10cm以下のX・XI層のブロックを主体に、2cm以下の10YR3/1 黒褐色粘質土ブロックを含む（全体的に空間が多い）
- 2 10YR2/2 黒褐色粘質土を主体に、5cm以下のX～XIV層のブロックを含む（ボソボソとしまりがない。御池ボラ（VII層）を含む）
- 3 5cm以下のXVI～XIII層のブロックで構成
- 4 5cm以下のXI層ブロックを主体に、3cm以下の2層ブロックを含む
- 5 5cm以下のXIV層ブロックを主体に、2cm以下のXIII層ブロックを含む（全体的にしまりなし）
- 6 XII層
- 7 XV層
- 8 10YR2/1 黒色粘質土
- 9 10YR2/2 黒褐色粘質土を主体に、XII層がラミナ状あるいは2cm以下のブロックで混入
- 10 しまりのないXIV層を主体に、10YR3/1 黒褐色粘質土の細かいブロックを含む（ボソボソとしまりがない）

【断面想定図】



第24図 地下式横穴墓実測図(2)

内に流入する状況も確認できた。

なお、上位部分が後世の造成により失われてはいるが、土層の堆積状況から考え、元々旧地表面から2.5m程度の深さがあったものと想定できる。

**羨門・羨道** 羨門は、直立する幅約1.3mの竪坑東壁の中央部に底面から設置される。崩落のため全体の把握は容易ではないが、形状については、幅0.6m弱で、高さ0.35m程度の横長の長方形であったと推定できる。竪坑埋土の羨道への流入状況から、元来羨門は閉塞していたと考えられ、閉塞には木板などの有機質素材を使用したと推測できる。羨門の左下には直径0.05m、深さ0.15m程度の円形の孔が確認でき、閉塞板等の押さえに杭が打たれていた可能性がある。また、羨門右側で竪坑壁面の下部付近に変色痕跡が見られることから、閉塞板等の接点があったとも考えられる。

羨道は羨門幅を保ちながら玄室へと続き、構築時には中程で大きく底面を下げる。長さは0.65m前後で、平面的な形状はほぼ方形を呈している。天井部の形状は崩落のため不明であるが、両壁面は平滑に仕上げられ、竪坑側から斜め下方向に向かう工具痕跡が確認できる。また、ケズリに関してはある一定の長さを連続させながら直線的に削ることを基本とする。

**玄室** 時期は特定できないが、玄室内には天井部の崩落による土塊などが充填しており、これら土塊などを取り除いたところ、玄室内には経年による黒色系の土砂が堆積するのみで、特に乱れた状況は認められなかった。

平面形は平入りで両袖をもつ楕円形に類されるが、左側壁面は直線的に造る。右袖側の方がやや広く設けられており、床面の規模で、長軸2.25m、短軸0.95mの最大値を測る。天井構造は崩落等によって不明だが、床面から検出面までは0.5m程度を測る。残存する壁面は、奥壁面がやや弧を描きながら、側面は直立させながら立ち上げる。また、加工時における0.1m幅の工具痕跡がすべての壁面に明瞭に残っており、中上位で上から下への斜め方向の、下位では横方向を基本とするケズリが確認できた。さらに、右側壁の中位付近には、小さな棚状の段が設けられていたが、ここでの副葬品は認められなかった。

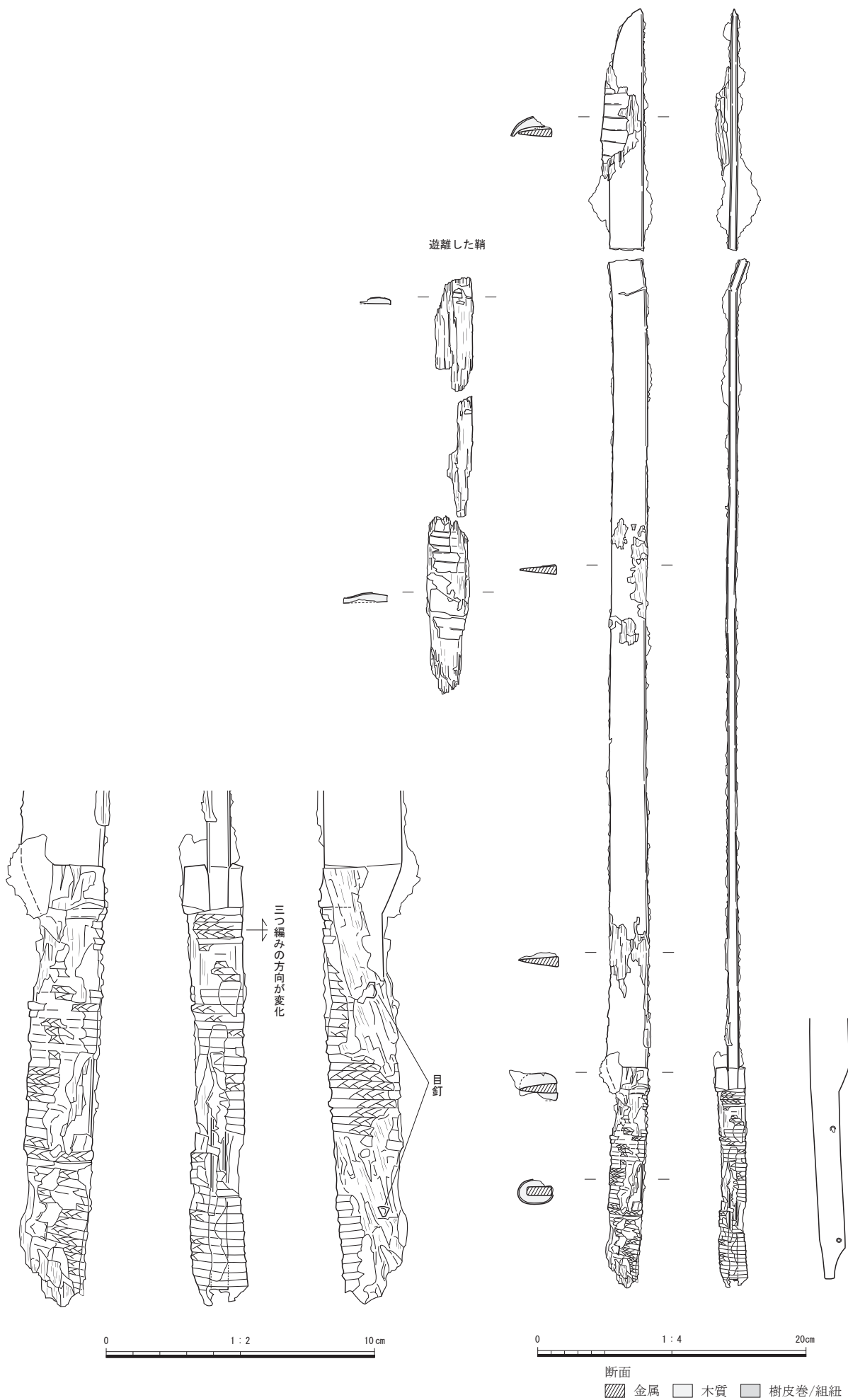
玄室掘削時においては、床面の中央に羨道から続く窪みがあり、全体的な床面の整形については竪坑・羨道と同じく明るい褐色が優勢の第Ⅷ層内で統一する。

玄室の奥壁側には、中央付近より右袖にかけて掘削時にやや掘り窪められた場所があり、当初は屍床を意識していたと思われるが、最終的に羨道も含めて玄室内は第Ⅷ層を互層にしながら黒褐色系粘質土を主体とする9・10層で埋められているため、被葬者の埋葬時には玄室内は平坦に整えられていた。

被葬者は、壮年男性が単体で仰臥伸展葬によって埋葬されていた。頭位は右袖側（北側）を向け、全体的に右袖側に寄せて奥壁に接するように埋葬されていた。残存する人骨については、脳頭蓋、下顎骨、寛骨、左右の大腿骨などの一部が確認できたが、上顎骨や胸椎などペースト状の部位も多く見られた。なお、天井の崩落時かあるいは人体の腐敗過程によるものか脳頭蓋が裏返っていたが、その他確認できた人骨は、埋葬時と比べて大きく乱れていなかった。

また、被葬者の前頭部から胸椎にかけてと腰椎から骨盤までに赤色顔料の散布が確認でき、ベンガラ由来のものであると思われる。また、右壁面や副葬品である鉄剣の柄頭付近にも赤色顔料の散布が認められた。

なお、玄室内の高さについては、天井部の崩落した土塊から0.6～0.7m程度が想定される。



5

第 25 図 地下式横穴墓出土遺物実測図



**出土遺物** 副葬品として鉄刀1点が玄室内から出土した。腕骨が残っていないため詳細は不明であるが、出土の位置としては、腕を絡ませたりせずに仰臥で埋葬された被葬者の左側、玄室奥壁に沿うように置かれていた。鋒を足側にした全体は顎から大腿骨に掛かり、刃を被葬者側に向けている。

5は鉄刀である。銹膨れの影響により鋒に近い位置で折れ曲がっているが、鉄刀本体はほぼ完存する。ただし、折面の接点は完全にはかみ合わない。残存する柄材を含めた残存長は、94.7cmを測り、折れを正位置に戻した際の鉄刀本体の長さは94.1cmである。刀身の長さは78.3cmで、幅については関において2.9cmの最大幅をとる。刀身の断面形状は三角形で、0.5～0.9cmを測る背の厚みは鋒から関にかけて徐々に太くなり、鋒についてはふくらが付く。関の形状は刃側を斜めに切った片関で、背側は関から緩やかに弧を描きて茎尻に至る。茎は最大幅2.1cmから徐々に狭め、茎尻に関しては、柄頭側から見える部分とX線透過撮影の観察で隅を抉る形状が確認できる。茎の長さは15.8cmで、背側の厚みは0.5cm前後を測る。また、現状、柄の2か所に銹化した目釘そのものが確認でき、X線透過撮影においても、関から約4.5cmと約12.8cmの位置に、径0.3cmほどの目釘穴が見える。

刀身には玄室床面に接していた佩裏側を中心に鞘材が遺存するが、刀身中央付近の鞘材が遊離する。鞘材にはカヤが利用され、材には約1cm幅で樹皮が巻かれていた。遺存する鞘から判断すると、幅4cm前後、厚み3cm弱を測る二枚合わせの鞘が想定できる。なお、その他の鞘装具については不明である。

茎には、一体で成形された木質の柄装具が利用されており、柄縁を関の位置に重ねて装着する。柄装具は、刀身茎尻を越えて16.5cmの長さがあり、1.5cm長の柄縁から段差を付けて柄間に至るが、柄頭の残りは悪い。柄縁の形状は銹化によって判断できない所もあるが、背と腹の幅の差はないようにも見える。鞘側の面は平滑に仕上げている。残存する長軸で3.0cm以上、短軸2.5cmを測る。なお、柄間の断面は長軸2.5cm、短軸1.7cmの楕円形に成形する。茎の柄への挿入は落とし込み式で、柄の背側に幅1cm弱、深さ2～3cmの溝を設けている。柄間の装具として1cm幅に3本の密度で隙間なく三つ編みに編まれた組紐が巻き付けられている。なお、柄間での全体的な組紐巻きの三つ編みと柄縁近くの2巻き程度が、三つ編みの方向を違えていることから巻きが反対であったことがわかる。

### 土坑墓 (SD1)

遺構番号	実測番号	長さ (m)		検出面からの深さ (m)	出土遺物		時期	備考
		長軸	短軸		鉄製品 (器種)	その他		
SD1	ST1	2.0	2.0	0.15	鉄剣 / 鉄鏃 / 刀子	-	古墳時代中～後期	木棺墓の可能性あり

### 地下式横穴墓 (ST1)

遺構番号	実測番号	長さ (m)		検出面からの深さ (m)	出土遺物		時期	備考
		長軸	短軸		鉄製品 (器種)	その他		
ST1	ST2	2.9	2.3	0.5	鉄刀	人骨	古墳時代中～後期	

### 古墳時代中期～後期の鉄器観察表

掲載番号	種類	出土位置	法量 (cm)				備考
			全長	刃部長	刃部幅	茎部長	
1	鉄剣	SD1	56.0	42.0	3.3	11.0	鉄剣本体 (全長 53.0cm) 鞘材にカヤを使用
2	鉄鏃	SD1	13.2	1.9	2.9	(不明)	圭頭斧箭式鏃 鏃身長 11.0cm 重さ 26 g
3	鉄鏃	SD1	(16.5)	2.3	1.0	(不明)	長頭鏃 重さ 16 g
4	刀子	SD1	9.0	5.4	1.4	(3.1)	
5	鉄刀	ST1	94.7	78.3	2.9	15.8	鉄刀本体 (全長 94.1cm) 鞘材にカヤを使用

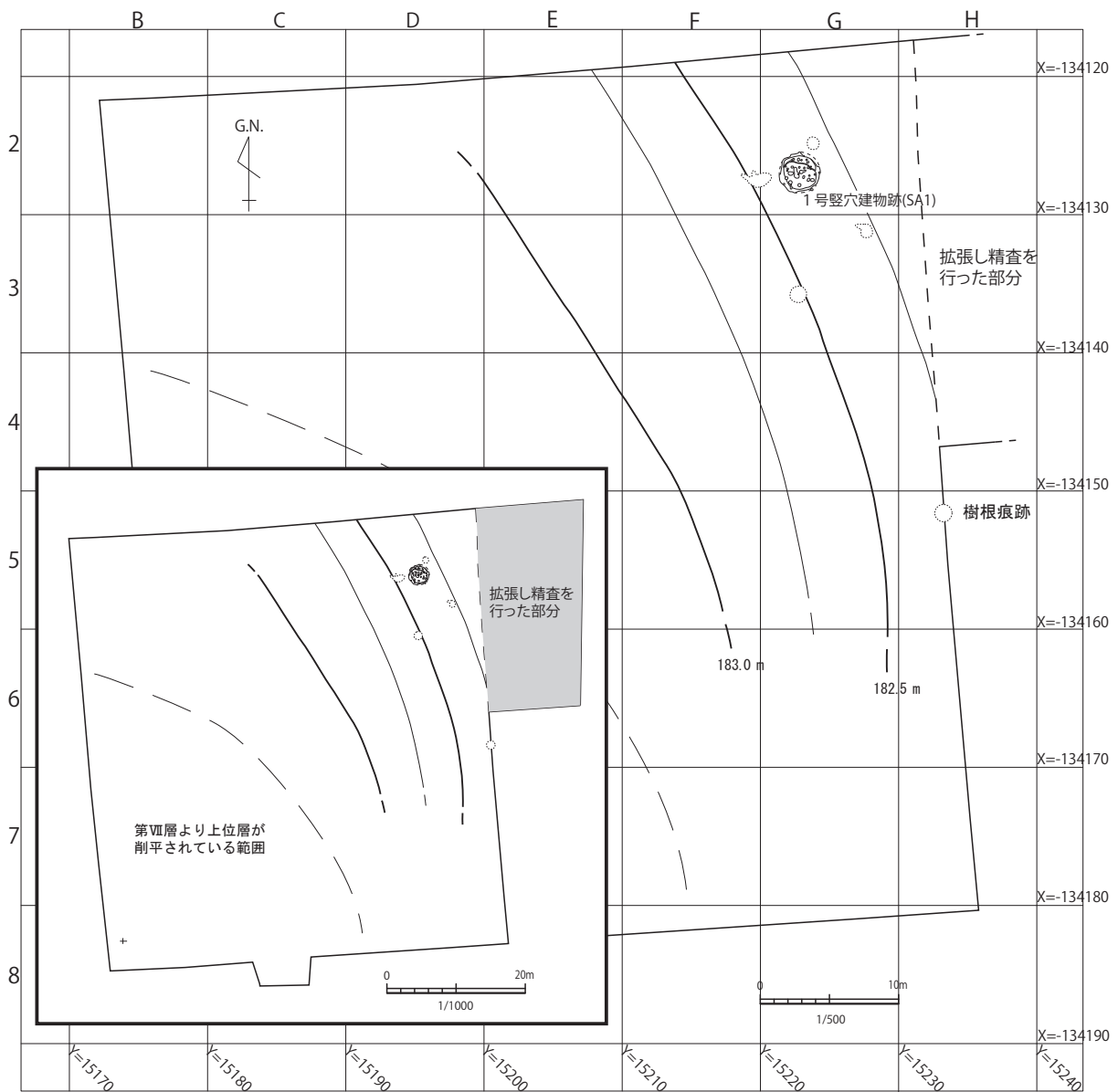
第1表 古墳時代中期～後期の遺構一覧表及び鉄器観察表

## 第5節 縄文時代後期～晩期の遺構と遺物

### 1 遺構の分布 (第26図)

縄文時代後期～晩期についての調査は、今回の調査対象であった第Ⅳ層（縄文時代早期包含層）までの掘削に際して、第Ⅶ層（御池ボラ層）を目安に2回に分けて掘削を行っていたところ、調査区北東端の第Ⅶ層上面において竪穴建物跡が検出されたことから、急遽平面的な精査を実施したものである。本来ならば遺物包含層と考えられる第Ⅴ層中あるいはその下面で検出することができたと考えられる。なお、調査区の南西半分は造成工事などで第Ⅹ層（アカホヤ火山灰層）付近まで削平されている。

調査区の旧地形は南西から北東方向に向けて傾斜するが、北東端で緩やかになり平坦となる。この平坦部において竪穴建物跡1軒や樹根痕跡を数か所検出した。なお、調査区壁面のうち、北東端の第Ⅴ層中に土器片が他より集中して含まれていたことから、当初予定していた調査範囲より東側10m程度を拡張したが、遺構の広がりには確認できなかった。

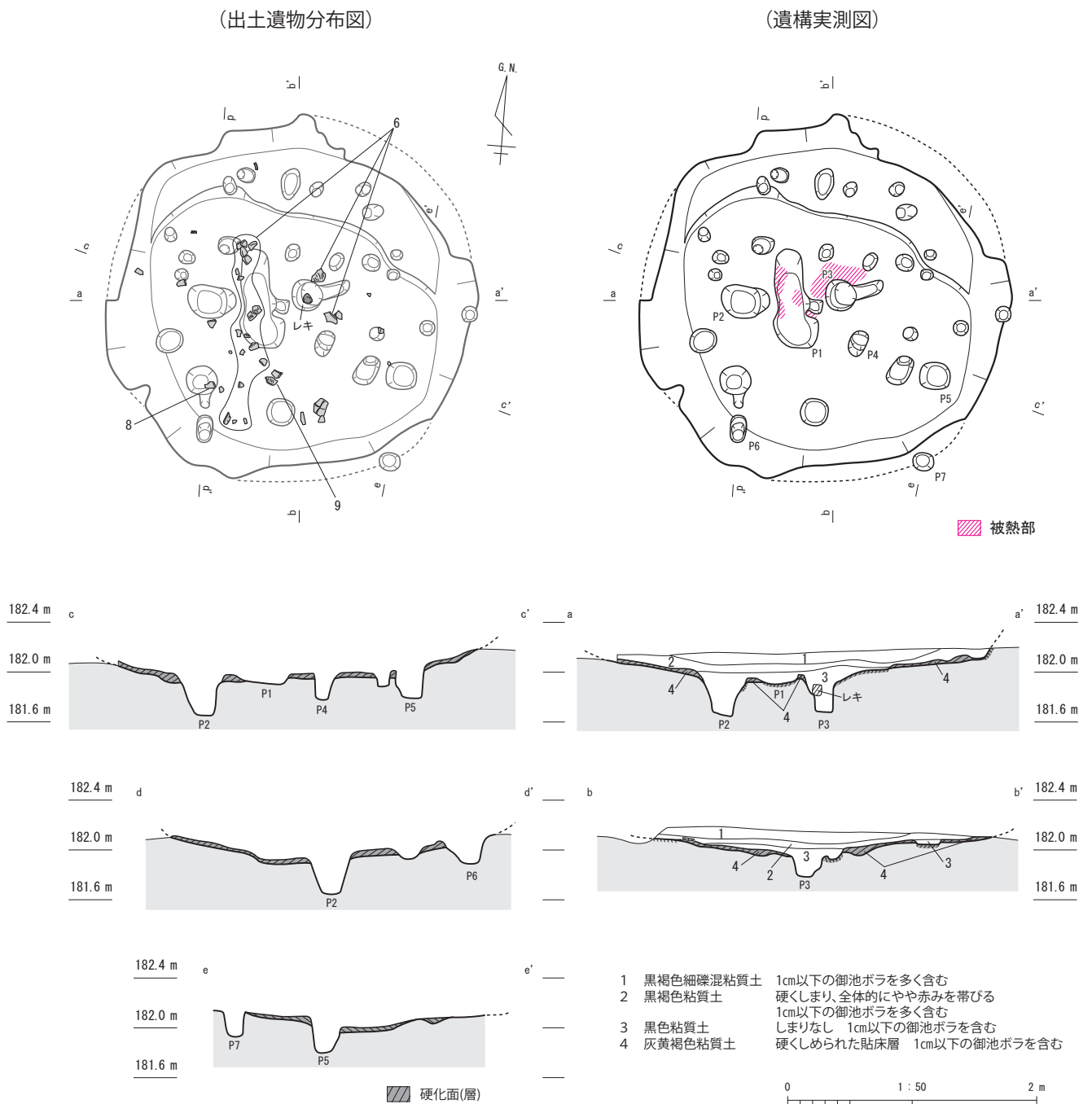


第26図 縄文時代後期～晩期の遺構分布図

## 2 竪穴建物跡

### 1号竪穴建物跡 (SA1、第27～28図)

調査区北東端のG2Gr. で検出した平面円形の竪穴建物跡である。先述のとおり、当該期の遺構は第V b層下面付近で検出できると考えるが、ここでは層位的に0.2m程度下がる第VII層上面での検出となった。このため、本来の遺構規模を示すものではないが、検出面で直径約3m、平面積1.7㎡の平面規模を有する。建物の断面形状はすり鉢状を呈し、床面の北側には最大0.8mの幅で三日月形の棚状施設が床より10cm程度高く掘り残されている。建物掘削時での最深部は検出面から深さ30cmを測り、その上



第27図 竪穴建物跡実測図

部に非常に硬くしめる厚さ 5 cm 程度の貼床が建物全体に敷設されていた。貼床には御池ボラを含む灰黄褐色の粘質土が利用されていた。

建物中央には平面楕円形様の深さ 10cm 弱の地床炉 (P1) をもち、炉の周辺は被熱によって赤く硬化していた。炉の埋土中に目立つ炭化物は確認できなかった。

建物内には径約 0.1m、深さ 10cm 程度の小さなものを含めて 27 基の小穴が確認できたが、このうち地床炉を挟んだ位置にある底径で約 0.2m を越えない、深さ 0.3m の規模の P2 と P3 の 2 本を対応する主柱穴とした。また、P3 の埋土中途には、柱の根固めとして利用していたものか、こぶし大程度の角礫が包含されていた。主柱穴間の距離は約 0.8m である。なお、P2 から東に約 1.7m 離れた位置にある P5 については比較的掘り込みが深いことから建て替えに伴う主柱の 1 本であった可能性がある。P6 と P7 は建物の南端に位置するため出入口にかかわる 2 本であったとすることも可能であろう。P6 と P7 の柱穴間の距離は約 1.5m である。

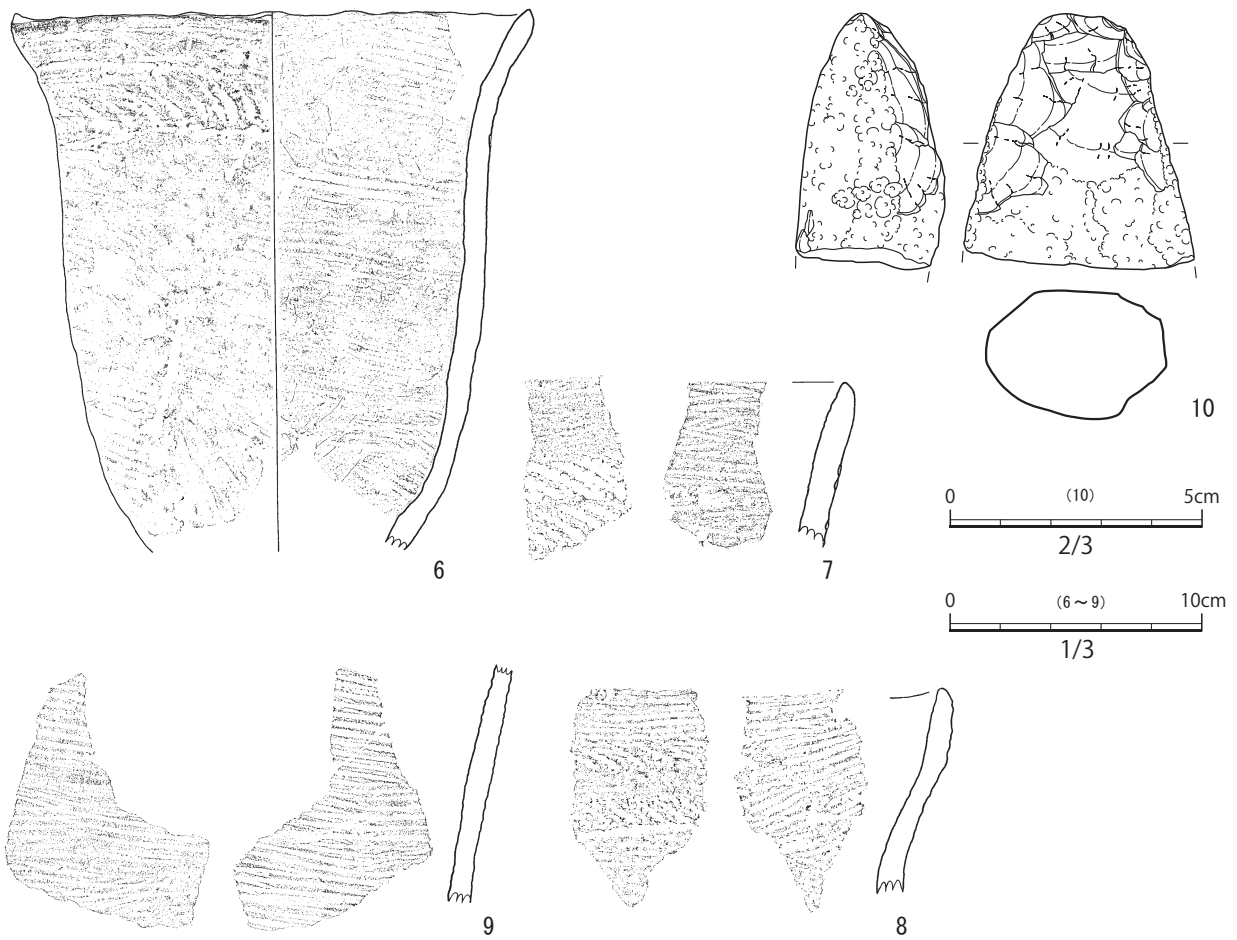
貼床よりすぐ上位の埋土としては、黒褐色粘質土 (2 層) が堆積し、全体的にやや赤みを帯びて硬くしまり、少量であるがやや大きめの炭化物も含むことから、建物が火を受けた可能性も考えておきたい。さらに上位は細礫を含む粘質土 (1 層) が堆積する。出土遺物は 2 層中に集中し、3 個体以上の深鉢片 (6・8・9) が建物床面直上で出土したが、破片そのものは床面全体に散らばっていた。その他に、磨製石斧が 1 点 (10) 出土した。

**出土遺物** 6～9 は縄文土器の深鉢で、口縁部が外傾またはやや内傾し、胴部の外面に貝殻条痕文や貝殻刺突文を、内面に貝殻条痕文を施すものである。器形や施文から「丸尾式土器」と考える。「市来式土器」について本田道輝が分類した口縁部断面形の 5 細分 (本田 1989) のうち、4・5 にあたるものを前迫亮一が「丸尾式土器」と設定した (前迫 1992)。前迫によると「丸尾式土器」には口縁部の屈曲の有無により二つのタイプに分かれ、6～7 は口縁部が外傾または外反する丸尾 B タイプ、8 は口縁部が「く」の字状に屈曲し頸部が外反する丸尾 A タイプに該当する。6 は口縁部から底部付近まで残存する。口縁部が外傾し胴部はやや膨らみながら底部に向けてすぼまる器形である。口縁部上半に横位の貝殻条痕文を施した後、下半に斜位の貝殻刺突文を巡らし、その下位に短沈線を横位に連続して施す。外面には全体的にススが付着し、内外面ともに黄橙色物が付着する。7 は口縁部で外面には斜位の貝殻刺突文を、内面には貝殻条痕文を施す。8 は 6 と同様に外面上半に貝殻刺突文を施した後、斜位の貝殻刺突文を連続して巡らす。口縁部の断面形状が異なる。9 は胴部で、内外面ともに貝殻条痕文を施す。10 はホルンフェルス製の石斧である。刃部は欠損し、基部のみが残存する。残存する基部の全長は 5.0cm を測る。表面に剝離面をもち、背面側は石斧原形の緩やかなカーブを活かした形状である。片方の側面には敲打痕が認められる。

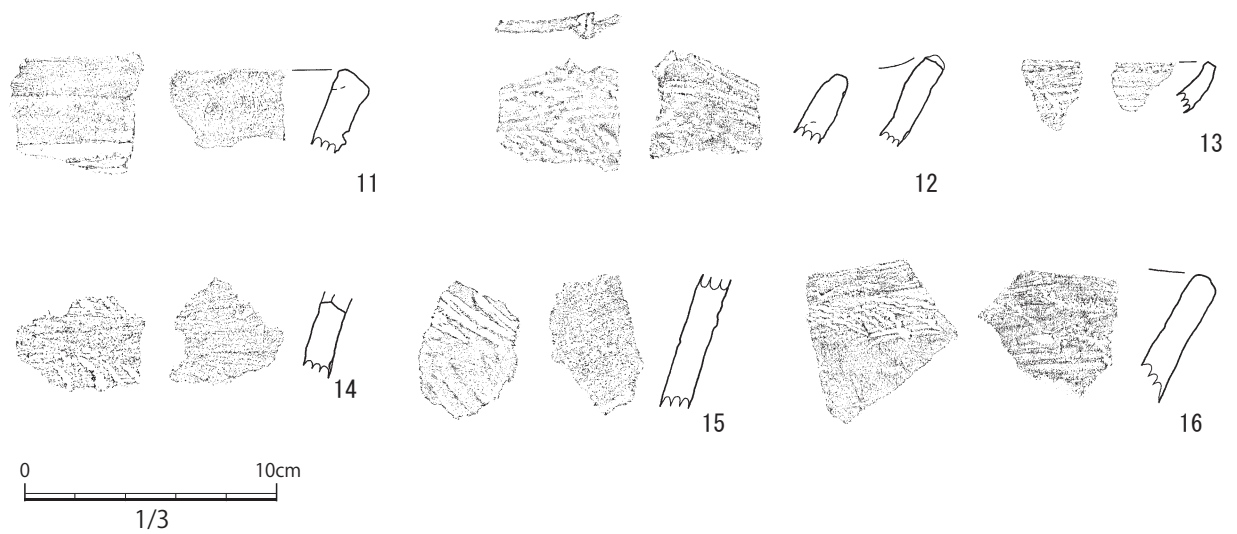
### 3 遺構に伴わない遺物

1 号竪穴建物跡 (SA1) 検出時、周辺に樹根痕跡を数か所確認した。以下に示す遺物は、樹根痕跡から出土したものである。土器の器形や施文から縄文時代後期から晩期に該当する土器型式に属するものと考えられる。

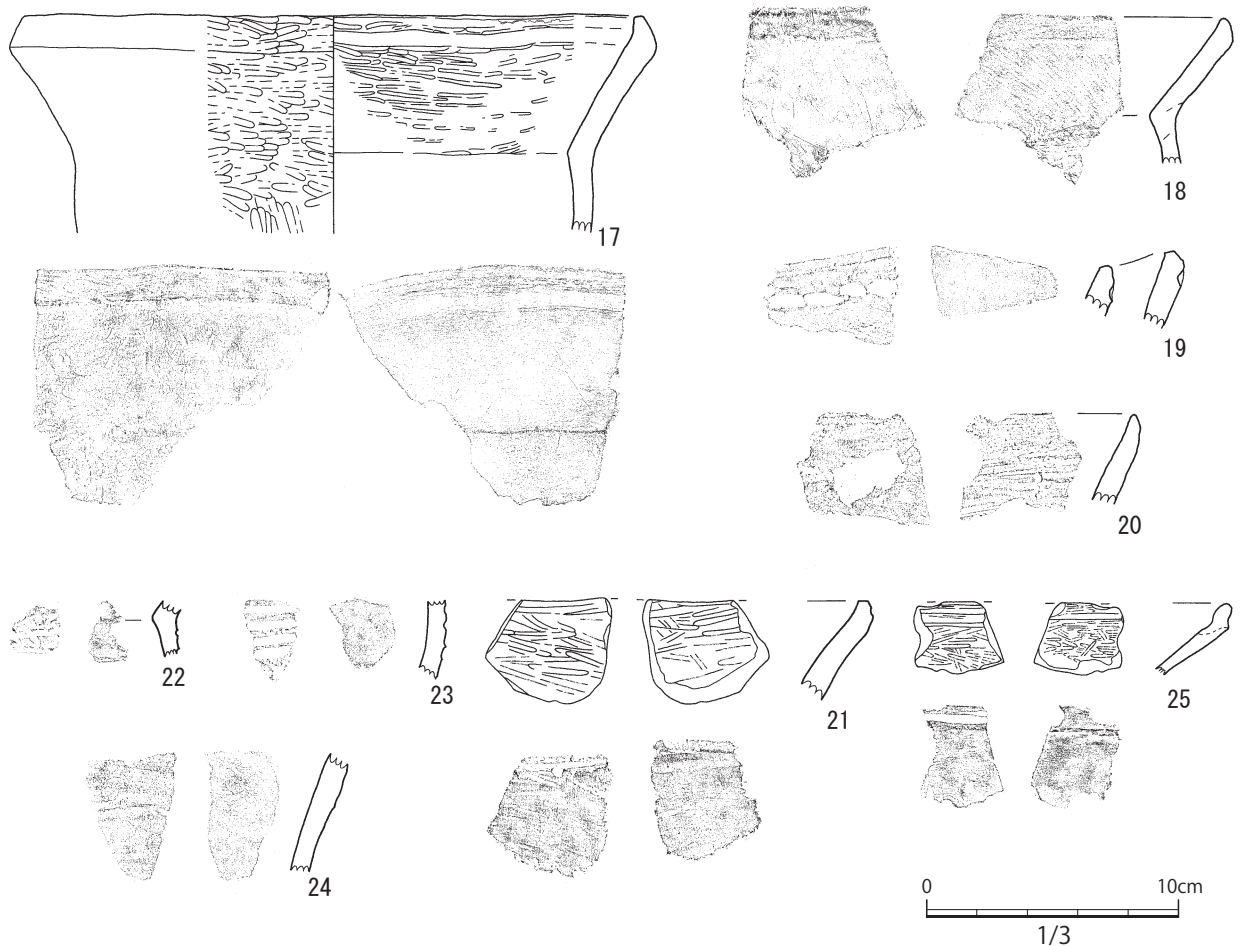
11～23 は深鉢である。11 は口縁部で、外傾し口唇部を平坦につくる。外面には下位に横位の沈線を施し、ススが付着する。指宿式土器もしくは本野原式土器とみられる。12～15 は丸尾式土器である。12 は波状口縁を呈し、頭頂部に工具で押圧したような凹みをもつ。外面は貝殻条痕文を施した後、斜



第 28 図 豎穴建物跡出土遺物実測図



第 29 図 縄文時代後期～晚期包含層出土遺物実測図(1)



第30図 縄文時代後期～晩期包含層出土遺物実測図(2)

位の貝殻刺突文を連続して2段巡らす。13は口縁部で、やや内傾し、外面に斜位の貝殻刺突文を施す。14は胴部で、外面は横位の貝殻条痕文を施した後、斜位の貝殻刺突文を2段連続して巡らす。15も胴部で、外面に斜位の貝殻刺突文を施す。16は口縁部で、納屋向式土器である。波状口縁を呈し、口縁部外面に斜位の貝殻刺突文を連続して施し、その下位に沈線を巡らす。17～18は口縁部で、中岳I式土器である。17は口縁部は外傾し、頸部で搾まり、胴部はやや膨らむ器形である。口縁部内面は工具によるナデ調整を行い、上端に強めのナデを施すことにより1cmほどの凹みをつくる。18も17と同様の器形であるが、やや小型で橙色の色調をもつ。19～24は、型式が不明のものであるが、胎土や調整から丸尾式土器と同時期のものとみられる。19～21は口縁部である。19はミガキ調整後、口縁部外面に棒状工具による横位の刺突文を連続して施す。20は口唇部に幅の狭い平坦部をつくり、内面は横方向の貝殻条痕文を施す。21は外傾するが、上端は口唇部に向けて丸みを帯びながら内傾する。口唇部と口縁部の境界に沈線を巡らす。内面は工具によるミガキ状のナデを施す。22～24は胴部である。22は外面に横位の沈線を巡らした後、斜位の短沈線を重ねる。内面はミガキ状のナデを施す。23は外面に横位の沈線文を連続して巡らす。24は外面に横位の工具によるナデ調整を行う。25は浅鉢の口縁部で、三万田式の黒色磨研土器である。口縁部が「く」の字状に屈曲し、上位に緩い凹線を施す。内外面ともに、ミガキ調整による光沢が見られる。

## 第6節 縄文時代早期の概要

上平遺跡の縄文時代早期の包含層は、第Ⅲ層である桜島 11 テフラ (Sz-11、8,000 年前) 層下位にある第Ⅳ層と第Ⅴ層である。旧地形の傾斜によって層厚は異なるものの、第Ⅳ層が西側で約 10cm、東側で約 20cm、第Ⅴ層が西側で約 10cm、東側で約 25cm 堆積する。調査区内は西側が比較的平坦で、北側及び東側にかけてゆるやかに傾斜する。このため平坦な標高の高い西側に遺構が密集するが、遺物は調査区全体から出土している。

縄文時代早期の遺構としては、平地式建物跡、竪穴状遺構、土坑、陥し穴、炉穴、配石遺構、集石遺構などが検出され、合計 186 基を数える。

**報告順** 遺構については検出された層が異なるため、発掘調査を行った層順に報告する。そのため、第 7 節では主に第Ⅳ層で検出した遺構について、第 8 節では主に第Ⅴ層で検出された遺構について述べる。検出した遺構の時期差については第Ⅵ章の総括で述べる。

また、遺物については層位による出土状況の傾向は認められるものの、第Ⅳ層と第Ⅴ層で明確に区別することが難しかった。このため、遺物については遺構に伴う遺物も含め、一括して第 9 節で詳細を報告する。層位による出土状況の傾向については第Ⅵ章の総括で述べる。

**遺構番号** 遺構番号は、何らかの遺構として平面検出された順に付している。なお、土坑 (SC) については、報告書作成段階での検討により、攪乱や樹痕等と判断したものがある。そのため、調査時の番号と報告書掲載の番号が一致していない。番号の振替については、遺構一覧表を参照されたい。

基本土層	火山灰	時代	主な遺構	主な遺物 (土器)	主な遺物 (石器)
第Ⅲ層	Sz-11				
第Ⅳ層		縄文時代早期	平地式建物跡 2 軒	縄文土器 [妙見・天道ヶ尾式] [手向山式]	打製石鏃・磨製石鏃 尖頭器・尖頭状石器 石鏃未製品 異形石器 石匙 スクレイパー 微細剥離剥片 石核 細石刃核 剥片・チップ 石斧・環状石斧 磨石・敲石・凹石 台石 など
			竪穴状遺構 2 基		
			土坑 23 基		
			配石遺構 1 基		
			集石遺構 33 基		
(自然流路 3 条)	[原体を回転し施文する土器 (押型文・燃糸文・縄文など)]				
第Ⅴ層			平地式建物跡 3 軒	[中原式] [桑ノ丸式] [下剥峯式] [別府原式] [石坂式] [前平式]	
			竪穴状遺構 2 基		
			土坑 39 基		
			陥し穴 8 基		
		炉穴 7 基			
		配石遺構 1 基			
集石遺構 65 基					

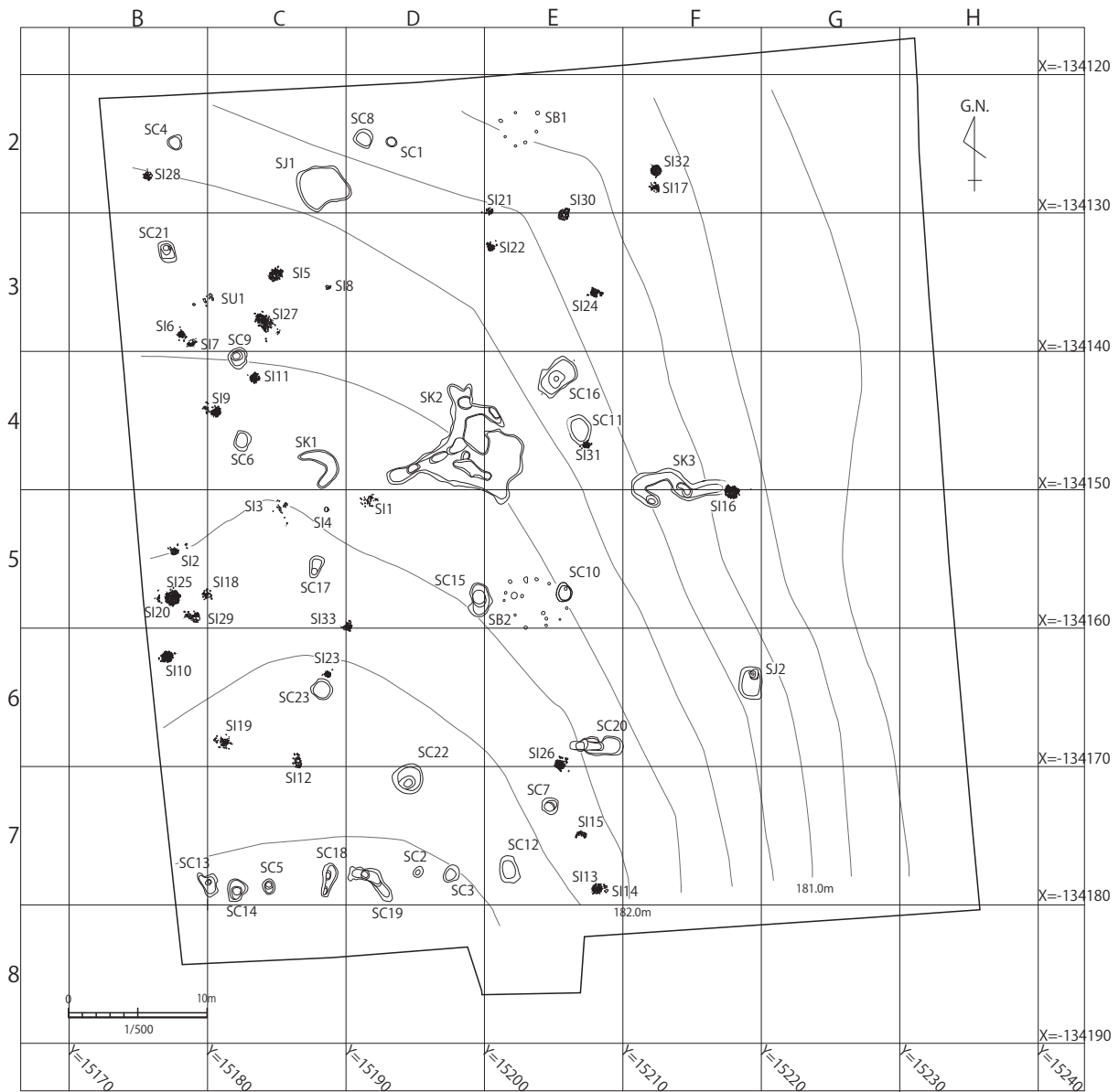
第 2 表 縄文時代早期の遺構・遺物と検出層位

## 第7節 第Ⅳ層で検出した縄文時代早期の遺構

### 1 遺構の分布 (第31図)

主に第Ⅳ層を掘削する際に検出した遺構を報告する。第Ⅳ層では、平地式建物跡2軒、竪穴状遺構2基、土坑23基、配石遺構1基、集石遺構33基を検出した。多くの遺構が比較的平坦な調査区西側に広がって分布している。調査区北側と中央に平地式建物跡を1軒ずつ検出した。集石遺構は調査区西側から中央にかけて広がる。その中で、調査区北西部(B3・B4・C3・C4Gr.)周辺の一群と調査区南西部(B5・B6・C5・C6Gr.)周辺の一群の2つのまとまりが認められる。

なお、調査区中央の東西方向にあるSK1～SK3については、自然流路と判断した。計測値等の詳細については第3～6表の遺構一覧表を参照されたい。



第31図 第Ⅳ層で検出した縄文時代早期の遺構分布図



## 2 遺構

### (1) 平地式建物跡

調査区内で検出された小穴のうち、一定の間隔で円形や楕円形に巡るといった有機的な関連性を有する小穴群を平地式建物跡とする。第Ⅳ層では平地式建物跡2軒を検出した。

#### 1号平地式建物跡 (SB1、第32図)

調査区北側のE2Gr.に位置する。平面形は不整な楕円形で、長軸3.1m、短軸2.5mを測る。円形に巡る7基の小穴群を柱穴列と考えた。各柱穴とも円形や楕円形で、直径は約0.2～0.3m、深さ約0.2～0.3mを測る。柱穴の多くが、柱穴列の中心から外側に向かうような形で下端を形成している。柱穴列の内部には炉や土坑は検出されていない。柱穴内からは遺物は出土しなかったが、SB1の範囲と重なる遺物包含層(第Ⅳ層)からは縄文土器深鉢(VII類)や黒曜石製の石鏃、剥片等が出土し、そのうちチャート製の石鏃(694)、流紋岩製の磨製石鏃(698)、縄文土器深鉢(VII類:366)を図化した。(第129・165図)

#### 2号平地式建物跡 (SB2、第32図)

調査区中央のE5Gr.に位置し、10号土坑(SC10)に切られる。平面形は楕円形で、長軸4.7m、短軸3.6mを測る。現存しているのは15基の小穴群で、楕円形に巡る11基からなる柱穴列の内部に3基の柱穴(P7・P8・P12)が確認できる。各柱穴とも円形や楕円形で、直径約0.2～0.3m、深さ約0.2～0.3mとなるが、直径約0.4mの楕円形の柱穴が1基(P2)ある。柱穴列内の西側に位置する1基(P15)は直径約0.4m、深さ0.1mと他柱穴よりも大きく浅いものであり、埋土に焼土を含んでいることから、炉跡の可能性もある。柱穴内から遺物は出土していない。

### (2) 竪穴状遺構

一定の面積を有し、竪穴建物としての可能性があるものの、柱穴とされる小穴が不明瞭な遺構を竪穴状遺構とする。第Ⅳ層では2基の竪穴状遺構を検出した。

#### 1号竪穴状遺構 (SJ1、第33図)

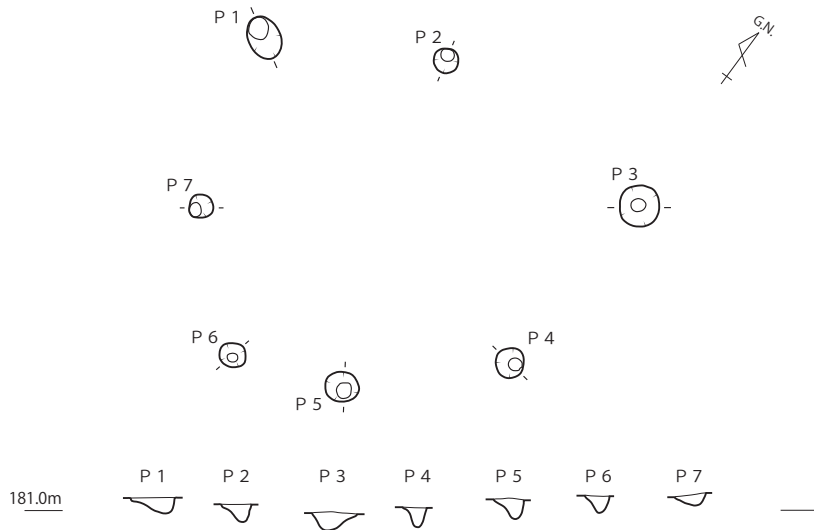
調査区北西側のC2Gr.に位置する。平面形は隅丸方形で、長軸3.5m、短軸3.1m、深さ0.2mを測る。遺構壁面の傾斜の度合いは概ねなだらかであるが、床面は平坦ではない。床面の精査及び床面や遺構周辺の掘り下げを行ったが、小穴及び炉跡は検出されていない。埋土内には礫が比較的多く含まれ、縄文土器深鉢(Ⅱ類、Ⅲ類、Ⅶ類)のほか、黒曜石製の石鏃未製品や石核、剥片等が出土している。そのうち、縄文土器深鉢(Ⅱ類:71・86、Ⅶ類:314、Ⅸ類:532)の4点を図化した。(第95・97・124・154図)

#### 2号竪穴状遺構 (SJ2、第33図)

調査区南東側のF6Gr.に位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸2.3m、短軸1.7mを測る。床面は深さ0.4m付近で平坦であるが、一部深い掘り込みをもつ。深い掘り込み部の壁面は階段状に傾斜し、最深部は検出面から深さ0.6mを測り、埋土に炭化物や焼土を含むことから炉跡の可能性もある。埋土1層内からは縄文土器深鉢(Ⅱ類、Ⅲ類)のほか、黒曜石製の石鏃未製品や剥片等が出土している。そのうち、縄文土器深鉢(Ⅱ類:169)の1点を図化した。(第105図)

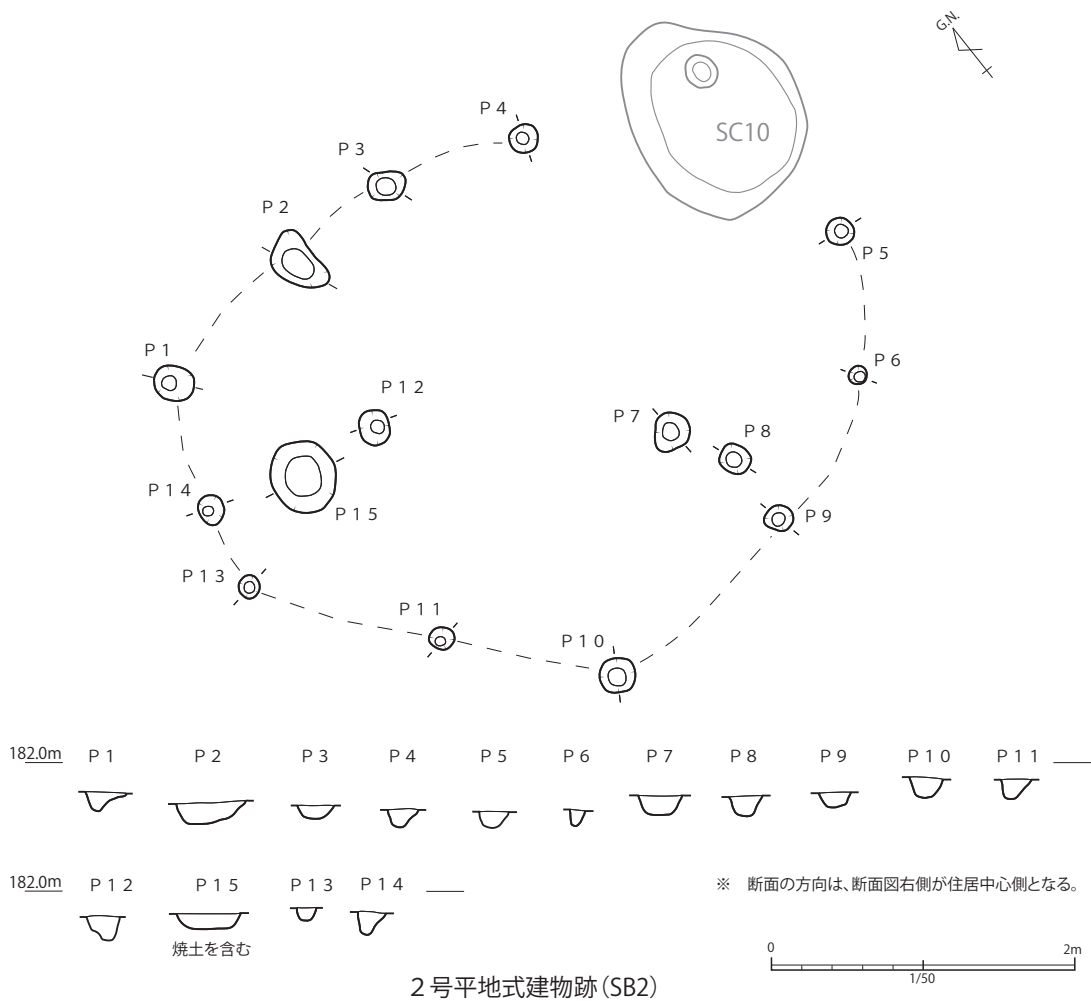
### (3) 土坑

上平遺跡で検出された土坑は平面形や掘り込みの形態など様々である。土坑には、陥し穴や炉穴、貯蔵穴等の可能性も考えられるが明確でないものも、ここでは土坑に含める。第Ⅳ層では23基の土坑を検出した。



※ 断面の方向は、断面図左側が住居中心側となる。

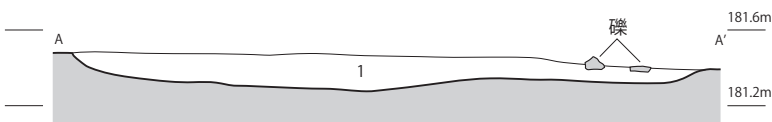
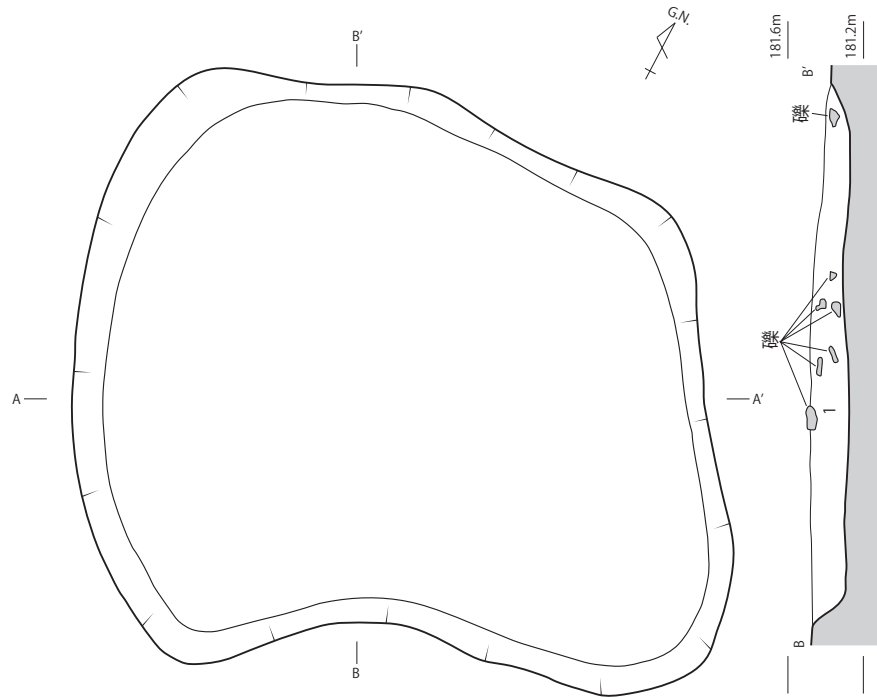
1号平地式建物跡 (SB1)



※ 断面の方向は、断面図右側が住居中心側となる。

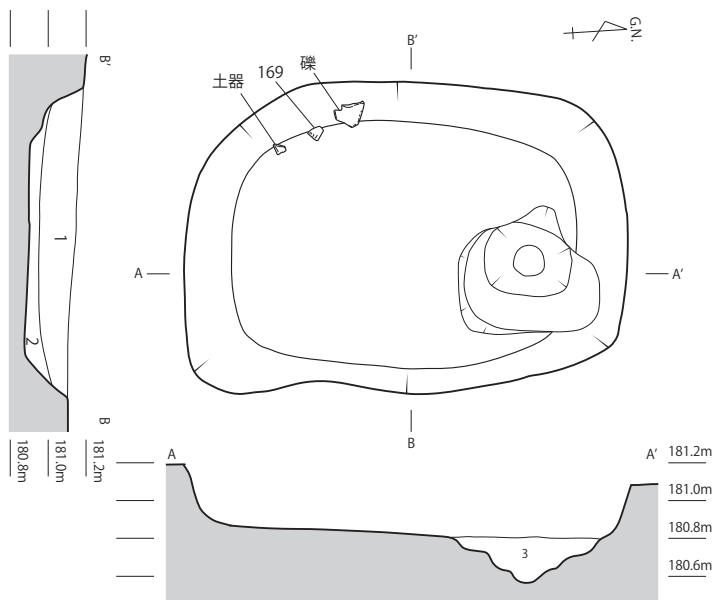
2号平地式建物跡 (SB2)

第32図 平地式建物跡実測図(1)



1 黒褐色土 粘性シルトで白色粒子を含む φ5cm以下の礫を含む

1号竪穴状遺構(SJ1)



- 1 黒褐色土 粘性シルトで白色粒子を含む
- 2 黒褐色土 粘質土
- 3 黒褐色土 粘質土で炭化物や焼土を含む

2号竪穴状遺構(SJ2)



第33図 竪穴状遺構実測図(1)

#### 1号土坑 (SC1、第34図)

調査区北側のD2Gr.に位置する。平面形は円形で、長軸0.8m、短軸0.7m、深さ0.2mを測る。壁の立ち上がりは直立に近く、床はおおよそ平坦である。遺物は出土していない。

#### 2号土坑 (SC2、第34図)

調査区南側のD7Gr.に位置する。平面形は楕円形で、長軸0.8m、短軸0.6m、深さ0.2mを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、床面が浅く、皿状の断面形を呈する。遺物は出土していない。

#### 3号土坑 (SC3、第34図)

調査区南側のD7Gr.に位置する。平面形は不整な楕円形で、長軸1.4m、短軸1.1m、深さ0.2mを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、床面が浅く、皿状の断面形を呈する。埋土内から縄文土器深鉢(Ⅱ類、Ⅲ類)、黒曜石やチャートの剥片が出土しており、そのうち縄文土器深鉢(Ⅱ類:163)の1点を図化した。(第105図)

#### 4号土坑 (SC4、第34図)

調査区北西側のB2Gr.に位置する。平面形は不整な円形で、長軸1.1m、短軸1.1m、深さ0.2mを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、床面が浅く、皿状の断面形を呈する。埋土内から縄文土器深鉢(Ⅱ類、Ⅷ類、Ⅸ類)や黒曜石の剥片等が出土しており、そのうち縄文土器深鉢(Ⅷ類:490、Ⅸ類:538)の2点を図化した。(第148・154図)

#### 5号土坑 (SC5、第34図)

調査区南西側のC7Gr.に位置する。平面形は楕円形で、長軸1.1m、短軸0.9m、深さ0.3mを測る。壁の立ち上がりは比較的緩やかで床面も浅いが、北側に掘り込みが深くなる部分がある。埋土2層内に焼土や炭化物を含む。また、埋土内から縄文土器深鉢(Ⅲ類)や、黒曜石の剥片等が出土した。

#### 6号土坑 (SC6、第34図)

調査区西側のC4Gr.に位置する。平面形は不整な隅丸長方形で、長軸1.4m、短軸1.2m、深さ0.3mを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、床面は比較的平坦である。埋土内から縄文土器深鉢(Ⅷ類)や敲石が出土した。第XV層で検出したが、出土遺物の土器型式から第XIV層の遺構である可能性が高いと判断した。

#### 7号土坑 (SC7、第34図)

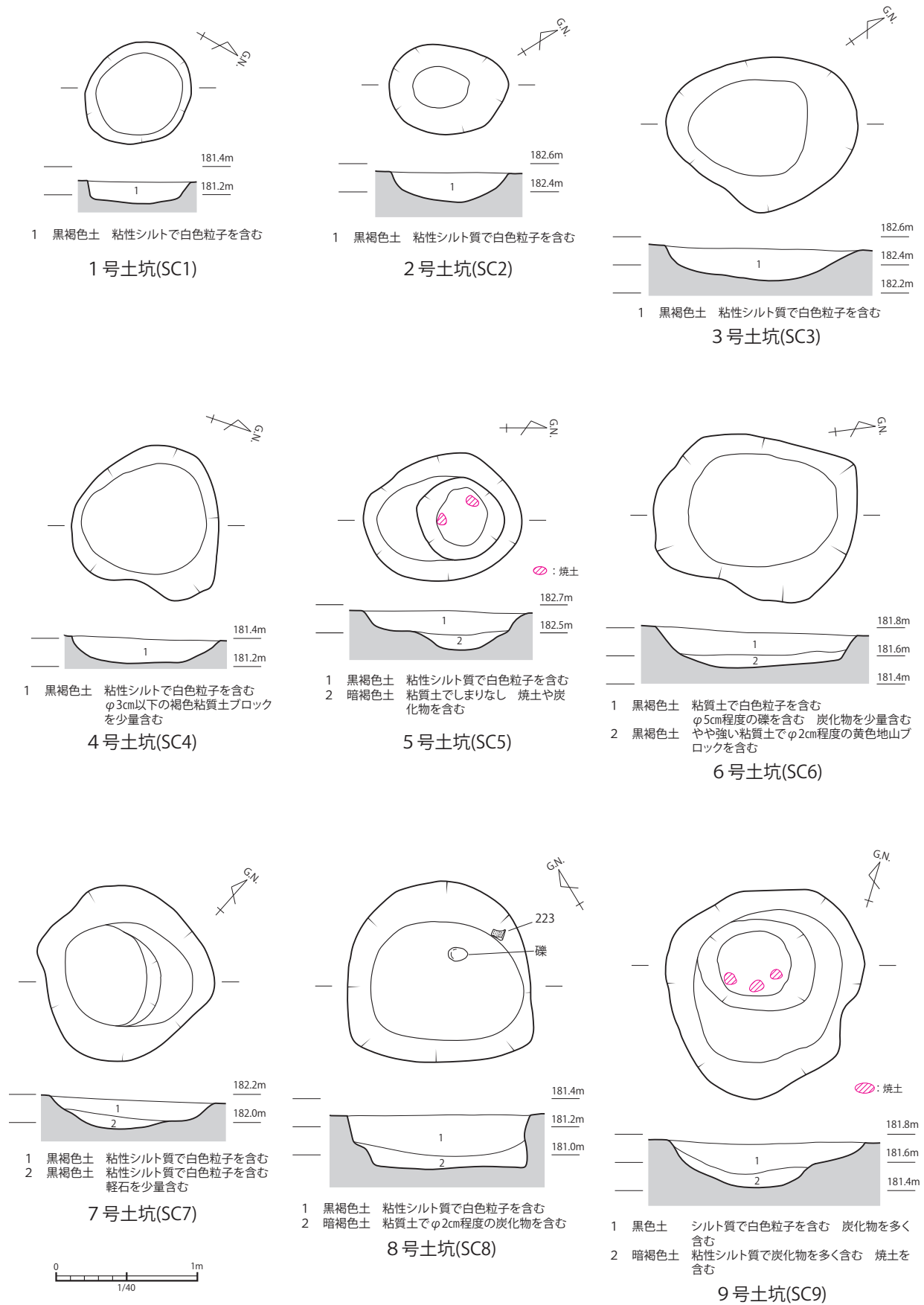
調査区南側のE7Gr.に位置する。平面形は不整な円形で、長軸1.3m、短軸1.2m、深さ0.2mを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、北東側の床面は緩やかな段をもち、南西側は深くなる。埋土内から黒曜石やガラス質安山岩の剥片が出土した。

#### 8号土坑 (SC8、第34図)

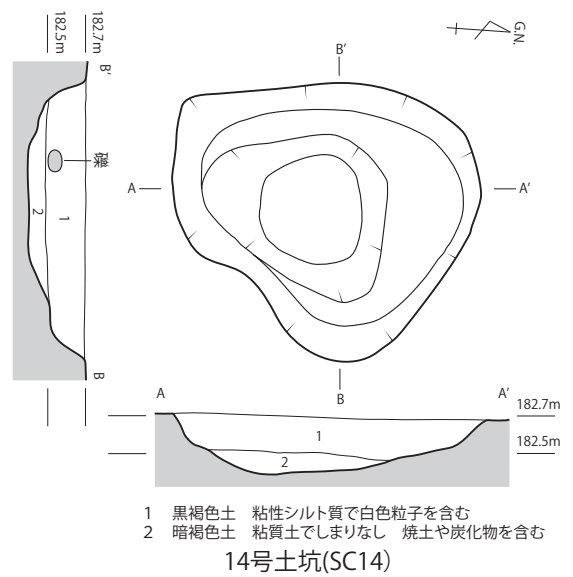
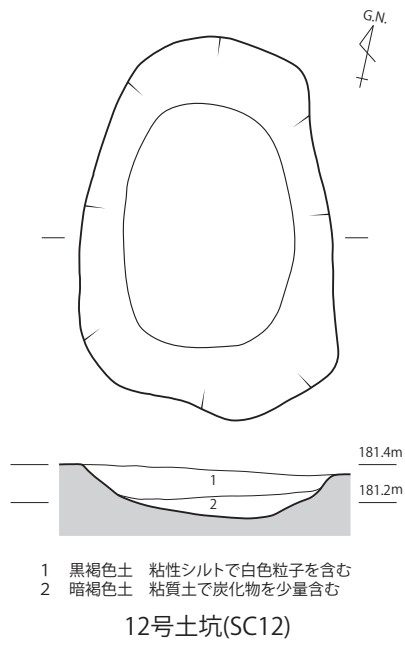
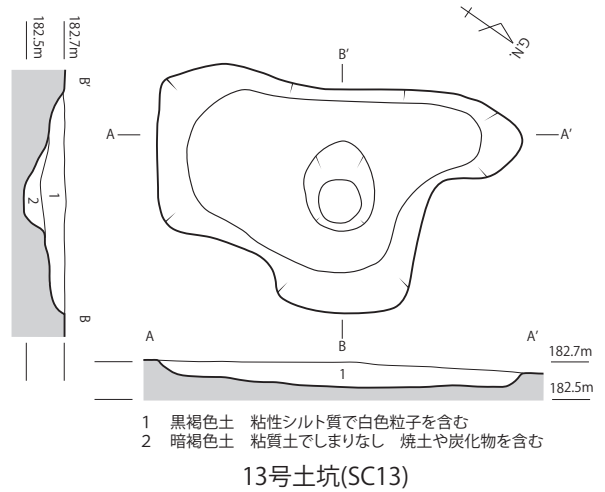
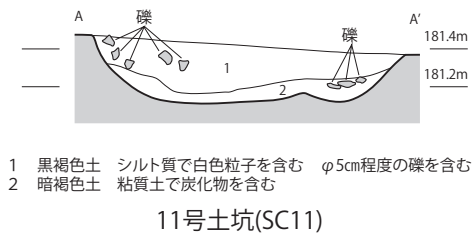
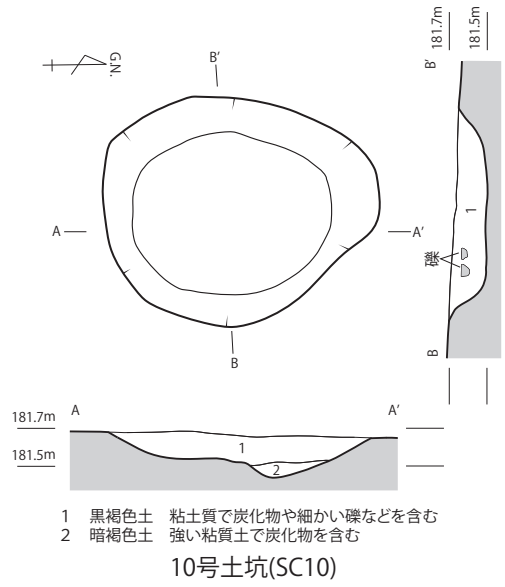
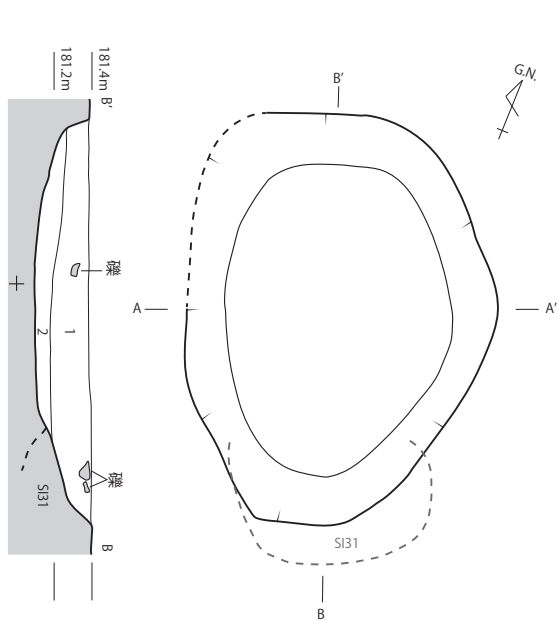
調査区北側のD2Gr.に位置する。平面形は隅丸方形で、両軸ともに1.3m、深さ0.4mを測る。壁の立ち上がりは直立に近く、断面形は逆台形状を呈する。埋土内に炭化物を含む。また、埋土内から縄文土器深鉢(Ⅱ類、Ⅲ類、Ⅶ類押型文、Ⅶ類撚糸文、Ⅷ類)や黒曜石製の石鏃、剥片等が出土し、そのうち縄文土器深鉢(Ⅲ類:223)と黒曜石製の石鏃(660)の2点を図化した。(第111・164図)

#### 9号土坑 (SC9、第34図)

調査区西側のC4Gr.に位置する。平面形は不整な隅丸方形で、長軸1.5m、短軸1.4m、深さ0.3mを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、北東部に緩やかな段をもち、中心部が深くなる。埋土には炭化物



第34図 土坑実測図(1)



第35図 土坑実測図(2)

を多く含み、床面には焼土が見られる。また、埋土内からチャート製の石鏃や黒曜石の剥片が出土した。

#### 10号土坑 (SC10、第35図)

調査区中央のE5Gr. に位置し、周辺に2号平地式建物跡(SB2)がある。平面形は楕円形で、長軸1.4m、短軸1.2m、深さ0.2mを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿状を呈する。床面は平坦だが、北側に掘り込みが深くなる部分があり、最深部は0.3mを測る。埋土内に炭化物を含む。また、埋土内から縄文土器深鉢(Ⅲ類)や磨石等が出土した。

#### 11号土坑 (SC11、第35図)

調査区中央のE4Gr. に位置する。平面形は楕円形で、長軸2.2m、短軸1.7m、深さ0.3mを測る。31号集石遺構(SI31)を攪乱して構築する。壁の立ち上がりは緩やかで、皿状の断面形を呈する。埋土内には礫や炭化物が含まれ、黒曜石製の石鏃や剥片等が出土した。

#### 12号土坑 (SC12、第35図)

調査区南側のE7Gr. に位置する。平面形は不整な隅丸長方形で、長軸2.0m、短軸1.4m、深さ0.3mを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、皿状の断面形を呈する。埋土内から黒曜石の石核や剥片等が出土した。

#### 13号土坑 (SC13、第35図)

調査区南西側のB7・C7Gr. に位置する。平面形は不整な長方形で、長軸1.9m、短軸1.3m、深さ0.1mを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、床面は平坦である。中央部に掘り込みが深くなる部分があり、最深部は検出面から0.2mを測る。埋土には焼土や炭化物が含まれ、縄文土器深鉢(Ⅲ類、Ⅶ類押型文)や黒曜石製の石鏃、剥片等が出土した。

#### 14号土坑 (SC14、第35図)

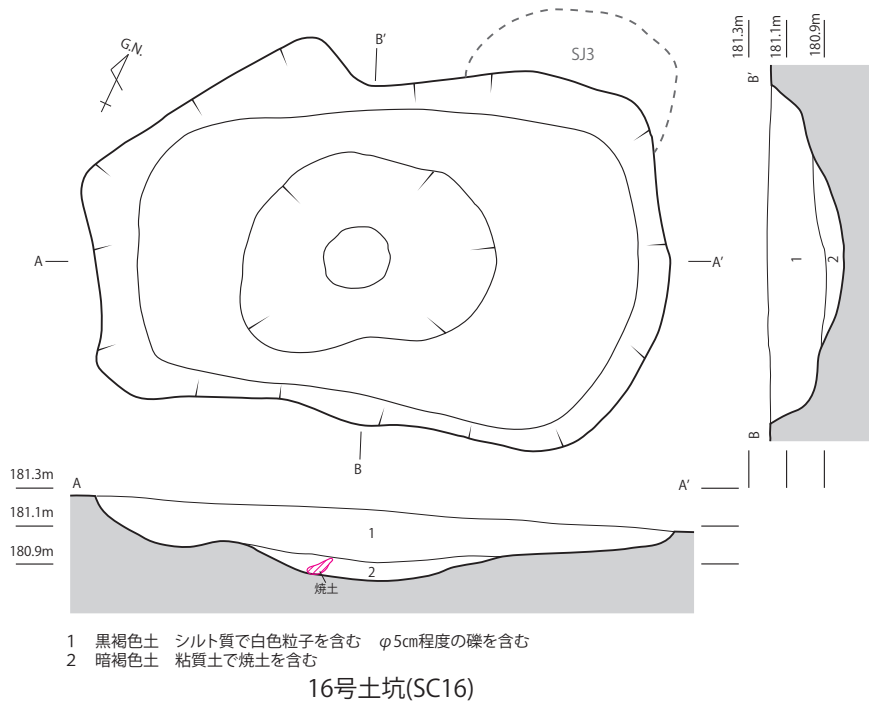
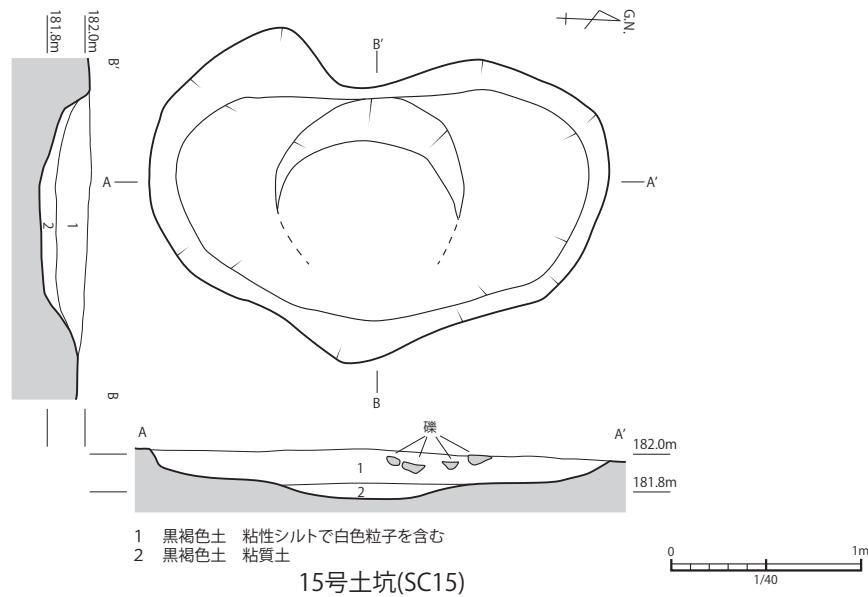
調査区南西側のC7Gr. に位置する。平面形は不整な隅丸三角形で、長軸1.6m、短軸1.5m、深さ0.3mを測る。壁の立ち上がりは比較的急な傾斜で、中央部に掘り込みが深くなる部分がある。埋土には焼土や炭化物を含む。また、埋土内から縄文土器深鉢(Ⅰ類、Ⅱ類、Ⅲ類)や黒曜石製の石鏃、剥片等が出土しており、そのうち縄文土器深鉢(Ⅱ類:108)を図化した。(第100図)

#### 15号土坑 (SC15、第36図)

調査区中央のD5・E5Gr. に位置する。平面形は不整な楕円形で、長軸2.4m、短軸1.8m、深さ0.3mを測る。南側の壁の立ち上がりは比較的急で、中央部に少し掘り込みが深くなる部分がある。埋土内から縄文土器深鉢(Ⅶ類)や黒曜石の剥片が出土しており、そのうち縄文土器深鉢(Ⅶ類:334)を図化した。(第126図)

#### 16号土坑 (SC16、第36図)

調査区中央のE4Gr. に位置する。平面形は不整な隅丸長方形で、長軸3.1m、短軸2.2m、深さ0.4mを測る。第XV層で検出した3号竪穴状遺構(SJ3)を攪乱して構築するように検出した。壁の立ち上がりは緩やかで、中央に掘り込みが深くなる部分がある。埋土2層に焼土ブロックを有する。埋土内から縄文土器深鉢(Ⅰ類、Ⅱ類、Ⅲ類)や黒曜石の剥片等が出土し、そのうち縄文土器深鉢(Ⅰ類:45/Ⅲ類:263)の2点を図化した。(第91・114図)



第36図 土坑実測図(3)

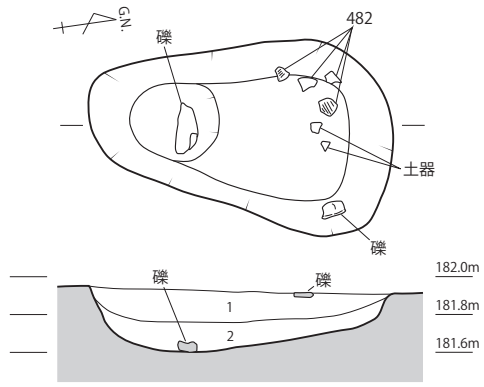
17号土坑 (SC17、第37図)

調査区西側のC5Gr.に位置する。平面形は不整な楕円形で、長軸1.6m、短軸1.0m、深さ0.3mを測る。壁の立ち上がりは急な傾斜をつくり、床面は南側が深くなる。埋土内に土器を多く含み、床面南側のやや窪んだ位置に扁平な礫が1点据え置かれていた。埋土内から縄文土器深鉢(I類、VII類縄文、VIII類)が出土し、そのうち同一個体と考えられる縄文土器深鉢(VIII類:482)の1点を図化した。(第147図)

18号土坑 (SC18、第37図)

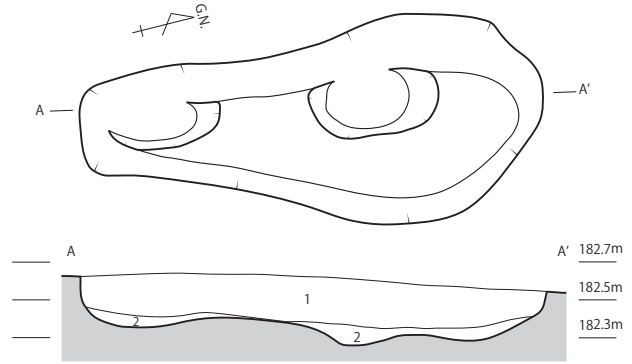
調査区南西側のC7Gr.に位置する。平面形は不整な楕円形で、長軸2.5m、短軸1.1m、深さ0.3m





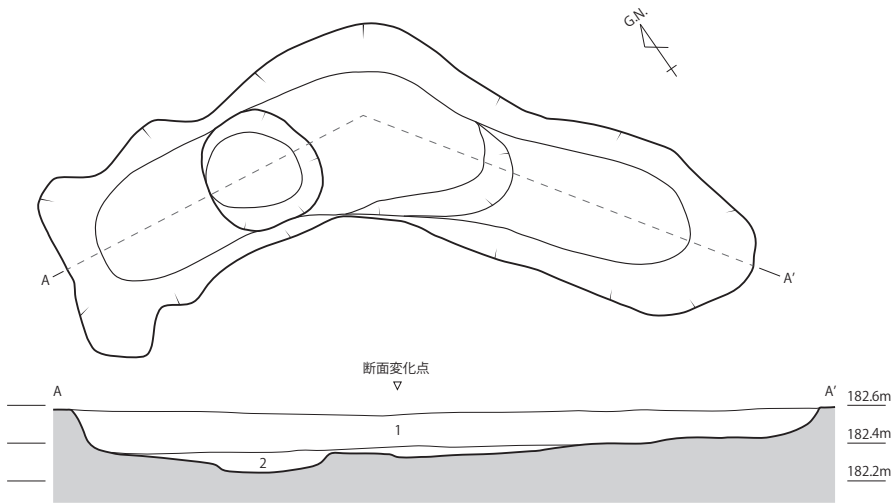
- 1 黒褐色土 粘質土で白色粒子を含む
- 2 黒褐色土 やや強い粘質土で炭化物を含む 細かい褐色地山ブロックを含む

17号土坑(SC17)



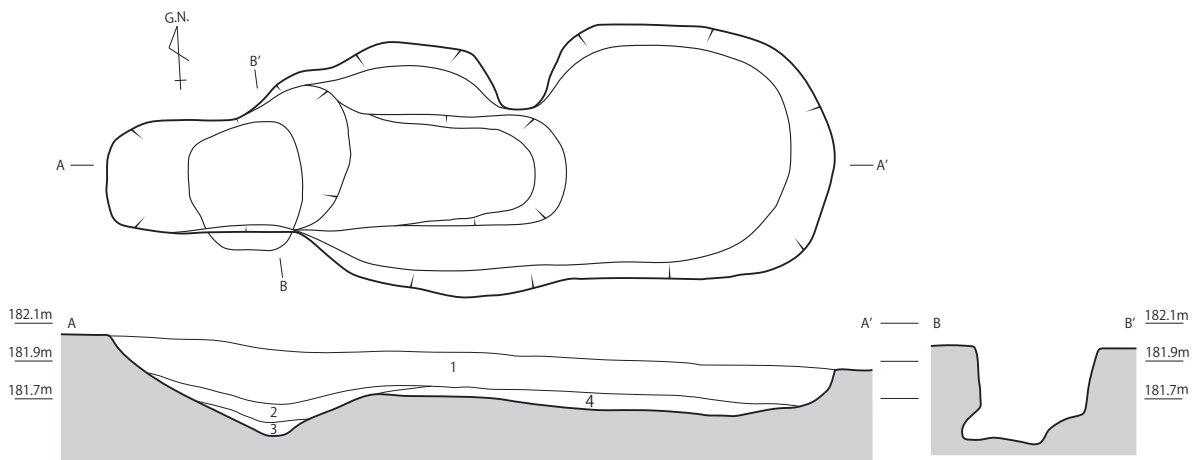
- 1 黒褐色土 粘性シルト質で白色粒子を含む
- 2 暗褐色土 粘質土でしまりなし 焼土や炭化物を含む

18号土坑(SC18)



- 1 黒褐色土 粘性シルト質で白色粒子を含む
- 2 黒褐色土 粘性シルト質で白色粒子や焼けた軽石を含む

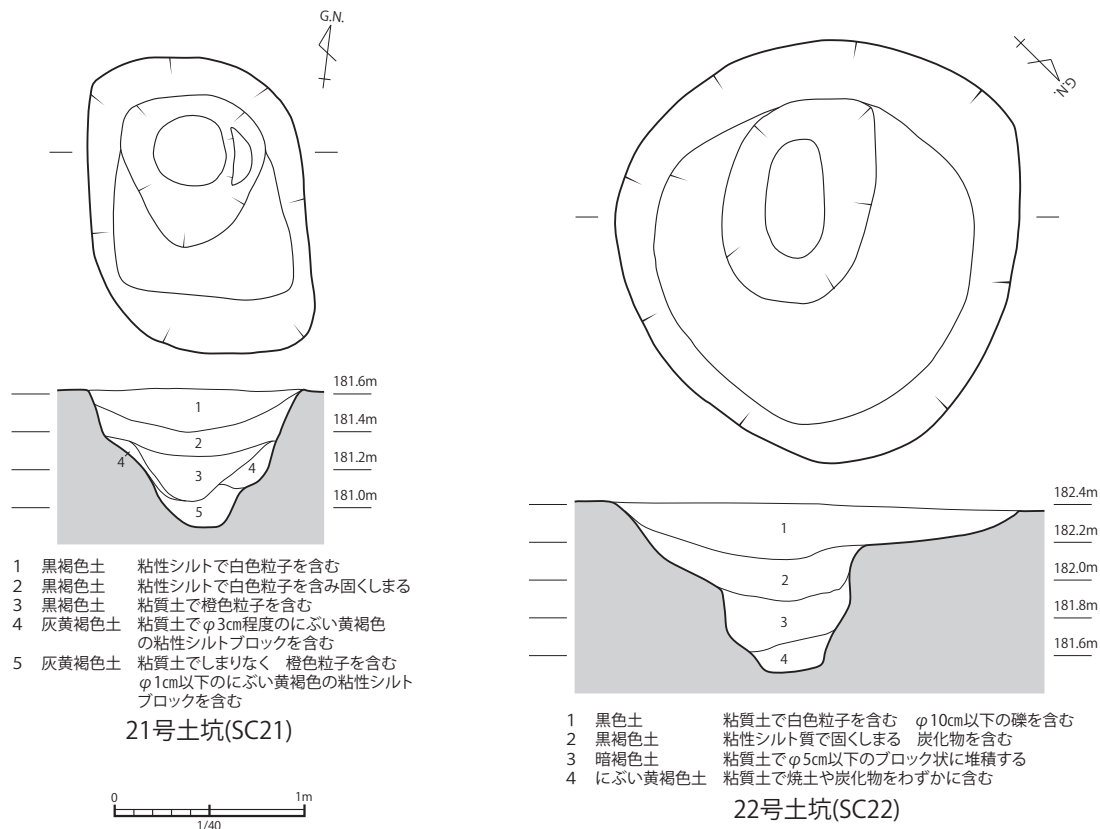
19号土坑(SC19)



- 1 黒色土 粘質土で白色粒子を含む
- 2 暗褐色土 粘性シルト質で固くしめる 炭化物を含む
- 3 暗褐色土 粘質土でφ5cm以下のブロック状に堆積する
- 4 にぶい黄褐色土 粘質土で焼土や炭化物をわずかに含む

20号土坑(SC20)

第37図 土坑実測図(4)



第38図 土坑実測図(5)

を測る。壁の立ち上がりは直立に近く、床面は平坦でなく中央に一部掘り込みが深くなる部分がある。埋土全体に炭化物が多く、床面は焼土がわずかに見られた。形態や埋土の状況から炉穴の可能性も考えられる。埋土内から縄文土器深鉢（Ⅱ類）や黒曜石の剥片等が出土した。

**19号土坑 (SC19、第37図)**

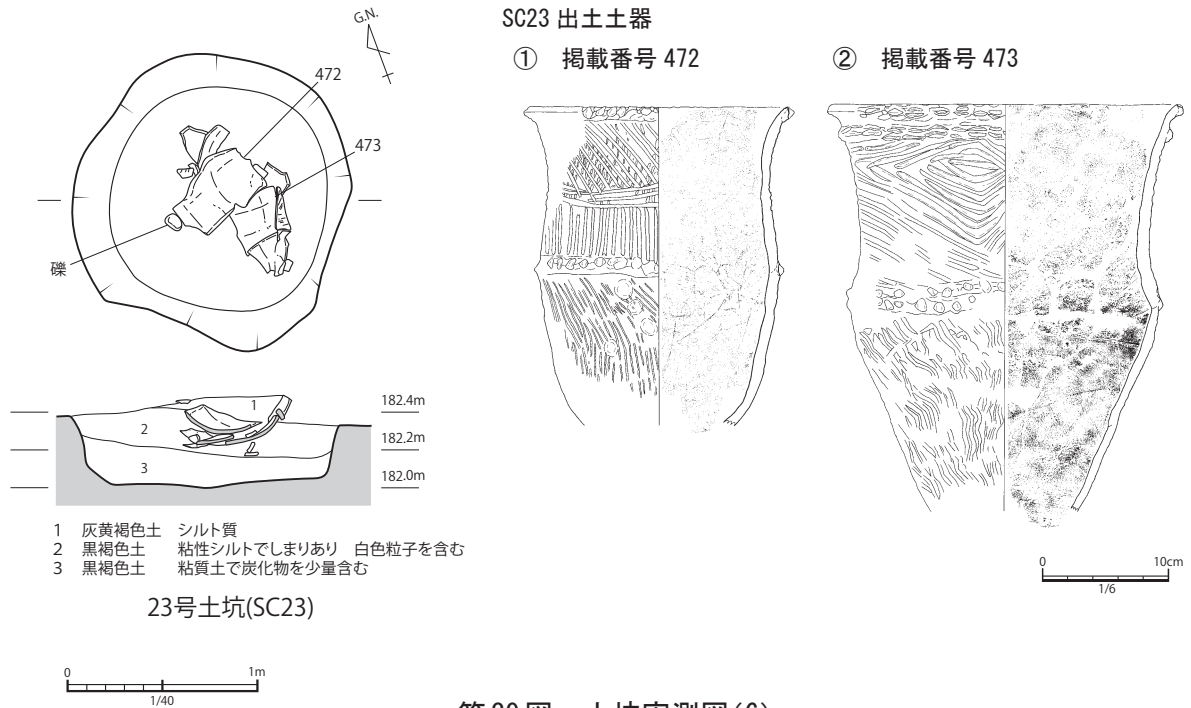
調査区南側のD7Gr.に位置する。平面形は不整な楕円形であり、「く」の字状に屈折する。長軸3.8m、短軸1.8m、深さ0.2mを測る。壁の立ち上がりはやや急に傾斜し、床面は比較的平坦となる。西側に一部掘り込みが深くなる部分があり、最深部は検出面から深さ0.3mを測る。埋土内から黒曜石の剥片等が出土した。

**20号土坑 (SC20、第37図)**

調査区南側のE6Gr.に位置する。平面形は不整な楕円形で、長軸3.8m、短軸1.4m、深さ0.4mを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、東側の床面は比較的平坦である。西側に掘り込みが一段深くなる部分があり、南側がオーバーハングするように形成し、最深部は検出面から深さ0.5mを測る。東側の床面に堆積する埋土に炭化物や焼土をわずかに含む。形態や埋土の状況から炉穴の可能性はあるが、明確に床面が焼けた痕跡は見られなかった。埋土内から縄文土器深鉢（Ⅱ類、Ⅶ類押型文）や黒曜石の剥片が出土した。

**21号土坑 (SC21、第38図)**

調査区北西側のB3Gr.に位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸1.6m、短軸1.2mを測る。一部掘り込みが深くなり、最深部は検出面から深さ0.7mを測る。壁の立ち上がりは急で、短軸の断面形は不



第 39 図 土坑実測図(6)

整なすり鉢状を呈する。形態から陥し穴や貯蔵穴の可能性はある。埋土内から縄文土器深鉢(Ⅱ類、Ⅲ類、Ⅷ類)や黒曜石の剥片等が出土した。

#### 22号土坑(SC22、第38図)

調査区南側のD7Gr.に位置する。平面形は円形で、長軸2.2m、短軸2.1mを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、北から東側にかけて平坦面を有し、南側をすり鉢状に深く掘る。最深部は検出面から深さ0.9mを測る。形態から陥し穴や貯蔵穴の可能性はある。埋土内から黒曜石の剥片等が出土した。

#### 23号土坑(SC23、第39図)

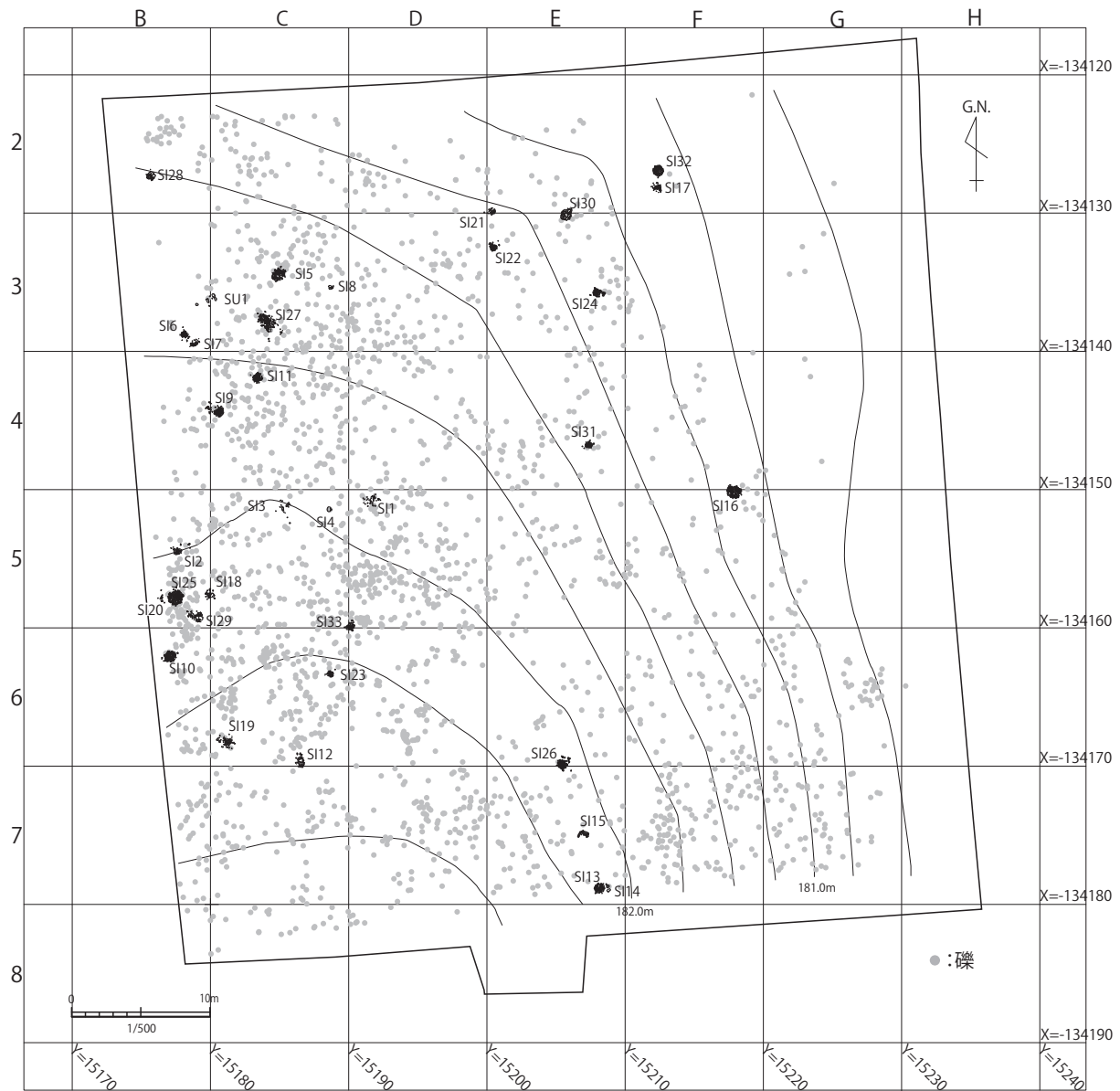
調査区南西側のC6Gr.に位置する。平面形は円形で、長軸1.6m、短軸1.6m、深さ0.4mを測る。壁はほぼ直立に立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。床面より高い位置ではあるが、埋土2層中から2個体の縄文土器深鉢(Ⅷ類:472・473)が重なって出土した。(第144・145図)出土状況を見ると2個の土器が入れ子状に据えられた可能性がある。出土した2個の土器の大きさは異なるが施文や器形から同一型式の範疇であると考え。そのほか、縄文土器深鉢(Ⅲ類)や黒曜石の剥片等が出土した。

#### (4) 配石遺構・集石遺構

第Ⅲ層を除去し第Ⅳ層を掘り下げていくと、調査区全体に礫の分布が見られた。これを散礫として平面分布図(第40図)を作成した。平面分布図にはおよそ長径5cm以上の礫を中心に持ち上げ、位置を示した。第Ⅳ層内で持ち上げた散礫は2,011点となる。平面分布図を見ると、散礫は標高の高い調査区西側から中央にかけて広がり、標高の下がる東側ではまばらになる。

散礫の中で比較的大きい礫を意図的に配置した可能性のあるものを配石遺構とした(SU1)。また、周辺より礫が集中し、ある程度のまとまりをなす箇所や、散礫以外の場所で礫が密に集中する箇所を集石遺構とした(SI1～SI33)。上平遺跡で検出された集石遺構の多くは砂岩類の焼礫で構成され、掘り込みを伴うものが多い。中には、焼礫や掘り込みを伴わないもの、または礫のまとまりは認められないが意図的に配置された可能性があるものなど様々な形態があるが、これらも含んで集石遺構とした。

散礫が密集する箇所に集石遺構の多くが分布している。



第40図 第Ⅳ層で検出した縄文時代早期の散礫及び配石遺構・集石遺構分布図

上平遺跡では、縄文時代早期の配石遺構として、第Ⅳ層、第Ⅴ層で1基ずつ検出した。集石遺構としては第Ⅳ層から第Ⅴ層で計98基を検出した。検出数の多かった集石遺構については、①礫の密度、②掘り込みの有無、③配石の有無と形状の3つの点からⅠ～Ⅲ類に大別することとする。また、各分類群を以下の通りさらに細別していく。

【Ⅰ類】礫が集中せず散漫に広がりのあるもの

〔Ⅰ a類〕掘り込みを伴わないもの

〔Ⅰ b類〕掘り込みを伴うもの

【Ⅱ類】礫が比較的集中し掘り込みを伴うが、底石（配石）は見られないもの

〔Ⅱ a類〕礫が重層的に集中するもの

〔Ⅱ b類〕礫が平面的に集中するもの

【Ⅲ類】礫が比較的集中し掘り込みを伴う上に、底石（配石）が見られるもの

〔Ⅲ a類〕底石が1個のもの

〔Ⅲ b類〕底石が複数個あるもの

〔Ⅲ c類〕底石が花卉状になるもの

配石遺構や集石遺構の検出面や分類、規模等については、第5・6表にまとめた。また、範囲として示すのは礫の広がりであり掘り込みの長さではない。深さは検出面からの深さを示している。

#### 【配石遺構】(SU1)

##### 1号配石遺構 (SU1、第41図)

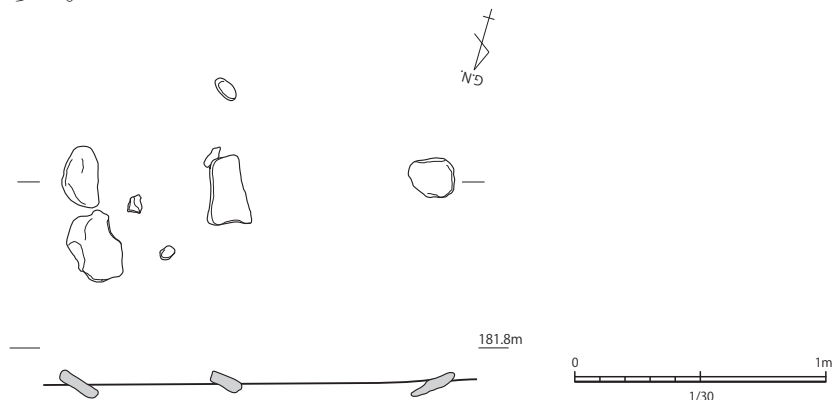
調査区北西側のB3・C3Gr.に位置する。周辺から6・7号集石遺構(SI6・SI7)など複数の集石遺構を検出している。1.6×0.8mの範囲に礫がまばらに広がり、掘り込みは見られない。長径20～30cm大の礫が同じ向き、もしくは向かい合うような傾きで配置している。構成礫は砂岩で、被熱した形跡は見られない。

#### 【集石遺構：Ⅰ a類】(SI1)

本類は集石遺構を構成する礫が集中せず散漫に広がりのあるもので、掘り込みを伴わない一群である。

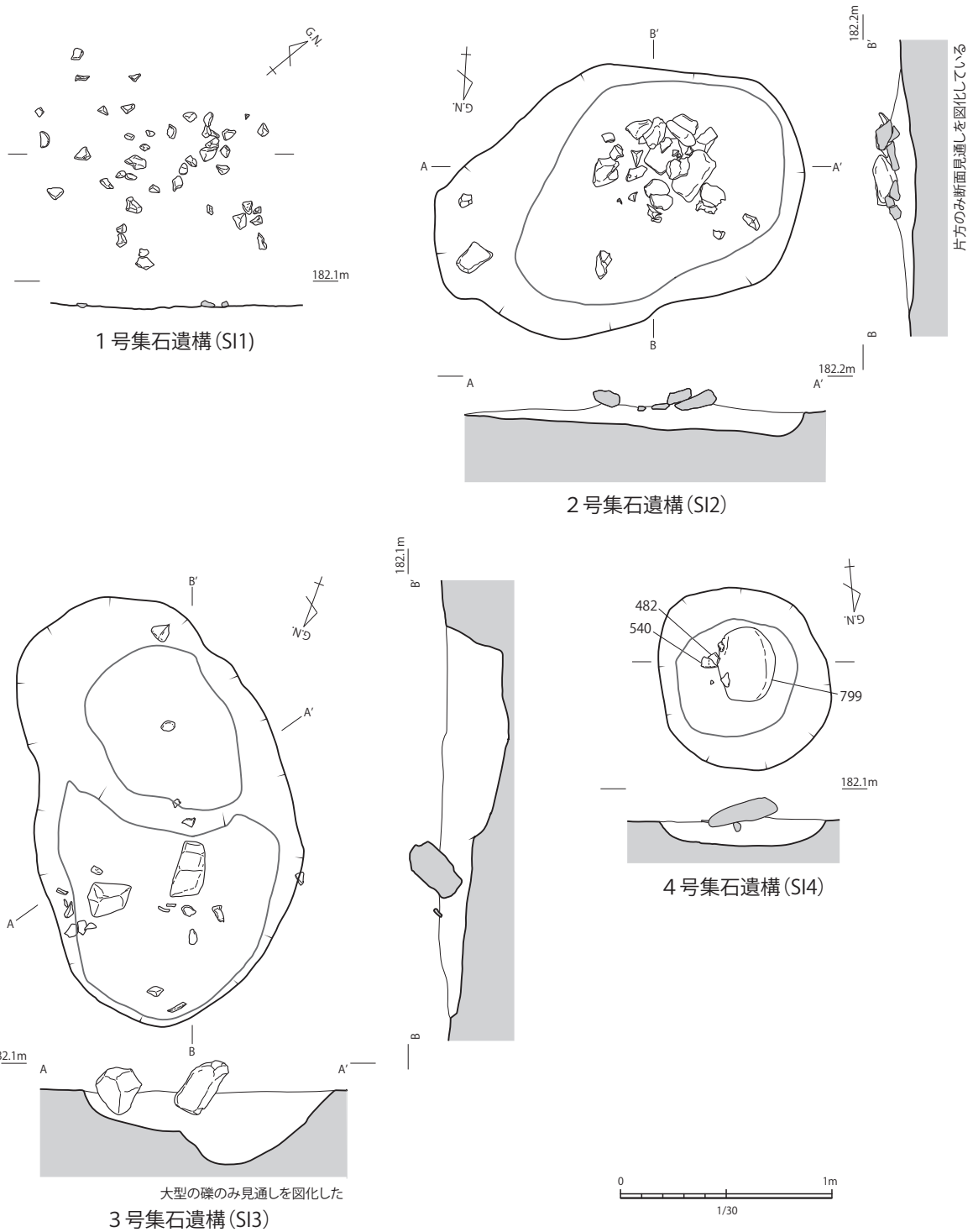
##### 1号集石遺構 (SI1、第42図)

調査区中央のD5Gr.に位置する。1.2×1.1mの範囲に礫がまばらに広がり、掘り込みは見られない。構成礫は長径5cm前後の小片が多い。



1号配石遺構(SU1)

第41図 配石遺構実測図(1)



第42図 集石遺構実測図(1)

【集石遺構：I b類】(SI2～4)

本類は集石遺構を構成する礫が集中せず散漫に広がるもので、掘り込みを伴う一群である。

2号集石遺構 (SI2、第42図)

調査区西側のB5Gr.に位置する。1.5×0.8mの範囲の中心部に礫が集中している。礫は掘り込みの上層に位置している。構成礫は長径20～30cm大の大型礫が2つ配置され、その周辺に長径10cm前後の中型の礫が散在する。被熱のためか、赤化・破碎した礫が多く見られた。

### 3号集石遺構 (SI3、第42図)

調査区西側のC5Gr.に位置する。1.9×1.3mの範囲に礫がまばらに広がる。構成礫は長径20～30cm大の大型礫が埋土上層に2つ配置され、その周辺に長径5cm前後の小型の礫がまばらに広がる。埋土内から、土器片や石鏃などが出土し、そのうち縄文土器深鉢(Ⅱ類:112)と黒曜石製の石鏃(576)の2点を図化した。(第100・161図)

### 4号集石遺構 (SI4、第42図)

調査区西側のC5Gr.に位置する。0.4×0.4mの掘り込みの中心に、台石(799)を転用した長径40cm弱の大型の礫を配置する。(第177図)大型礫とともに土器片が出土し、そのうち縄文土器深鉢(Ⅷ類:482、Ⅸ類:540)の2点を図化した。(第147・154図)縄文土器深鉢(Ⅶ類:482)の一部は17号土坑(SC17)からも出土している。

### 【集石遺構:Ⅱa類】(SI5～17)

本類は集石遺構を構成する礫が重層的に集中し掘り込みを伴うが、配石は見られない一群である。

### 5号集石遺構 (SI5、第43図)

調査区北西側のC3Gr.に位置する。1.1×1.0mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.2mの掘り込みを伴い、断面形は皿状を呈する。構成礫は長径10～20cm前後の中型の礫を主体とする。礫の配置と掘り込みに差が見られる。礫の密度は北側が高く、掘り込みの中心部から南側の礫はまばらに広がるため、礫が持ち出された可能性がある。埋土内に炭化物を多く含む。出土した炭化材について樹種同定及びAMS法による放射性炭素年代測定を実施した結果、樹種はコナラ属コナラ節であり、8240±30年BPの測定値が得られた。(第23・24表試料11参照)また、埋土内からは土器片が出土した。

### 6号集石遺構 (SI6、第43図)

調査区北西側のB3Gr.に位置する。1.0×0.8mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.1mの掘り込みを伴い、断面形は浅い皿状を呈する。構成礫は長径10～20cm程度の中型な礫を主体とする。礫の配置と掘り込みに僅かな差が見られる。礫は中心部に集中し、埋土内には炭化物を含む。

### 7号集石遺構 (SI7、第43図)

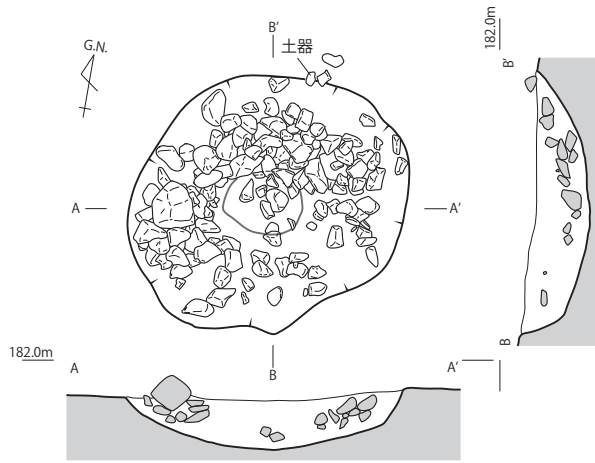
調査区北西側のB3Gr.に位置する。0.9×0.5mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.2mの掘り込みを伴い、断面形は逆台形状を呈する。構成礫は長径10～20cm程度の中型の礫を主体とし、北東部に長径30cm程度の大型の礫が配石される。礫の位置と掘り込みに差が見られる。礫は掘り込みの中心部に集中するが、北西部は礫の広がりがまばらになることから、礫が持ち出された可能性がある。埋土内から土器片が出土した。

### 8号集石遺構 (SI8、第43図)

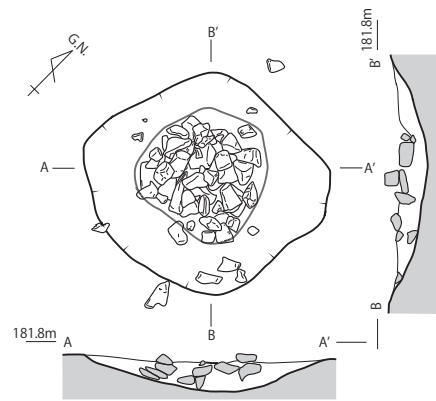
調査区北西側のC3Gr.に位置する。0.4×0.3mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.1mの掘り込みを伴い、断面形は皿状を呈する。構成礫は長径30cm程度の大型の礫と長径10～20cm程度の中型の礫で、掘り込みの中心部に密に配石される。礫の位置と掘り込みに僅かな差が見られる。埋土内から縄文土器深鉢(Ⅲ類)や黒曜石の剥片が出土した。

### 9号集石遺構 (SI9、第43図)

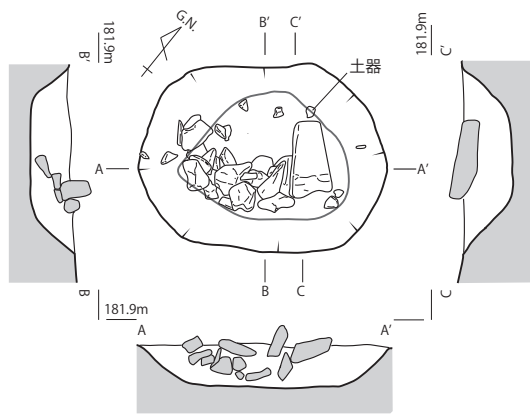
調査区北西側のB4・C4Gr.に位置する。1.4×0.9mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.2mの掘り込みを伴い、断面形は皿状を呈する。構成礫は10～20cm程度の中型の礫を主体とし、その上位には



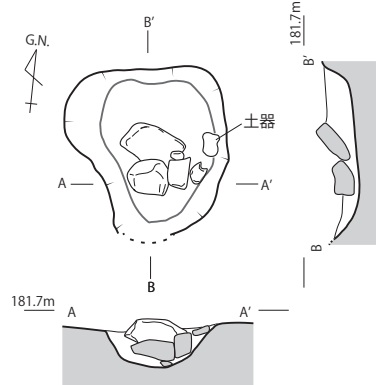
5号集石遺構 (S15)



6号集石遺構 (S16)

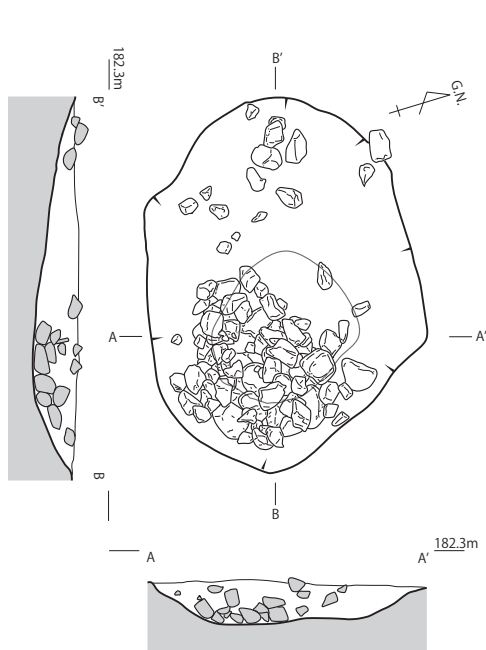


7号集石遺構 (S17)

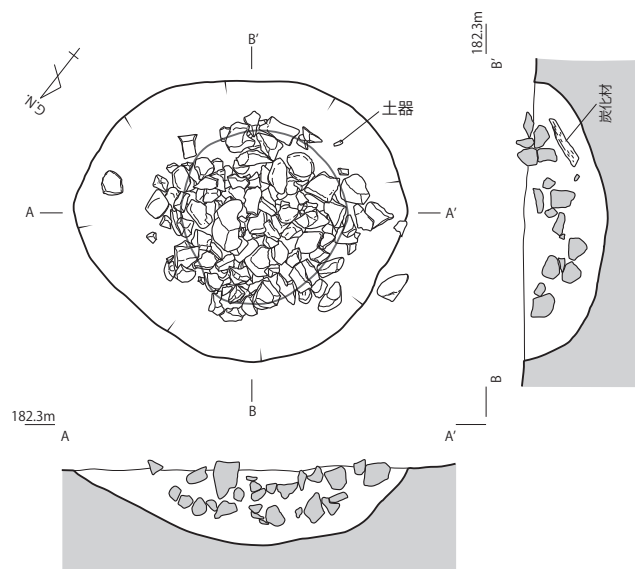


片方のみ断面見通しを図化している

8号集石遺構 (S18)



9号集石遺構 (S19)

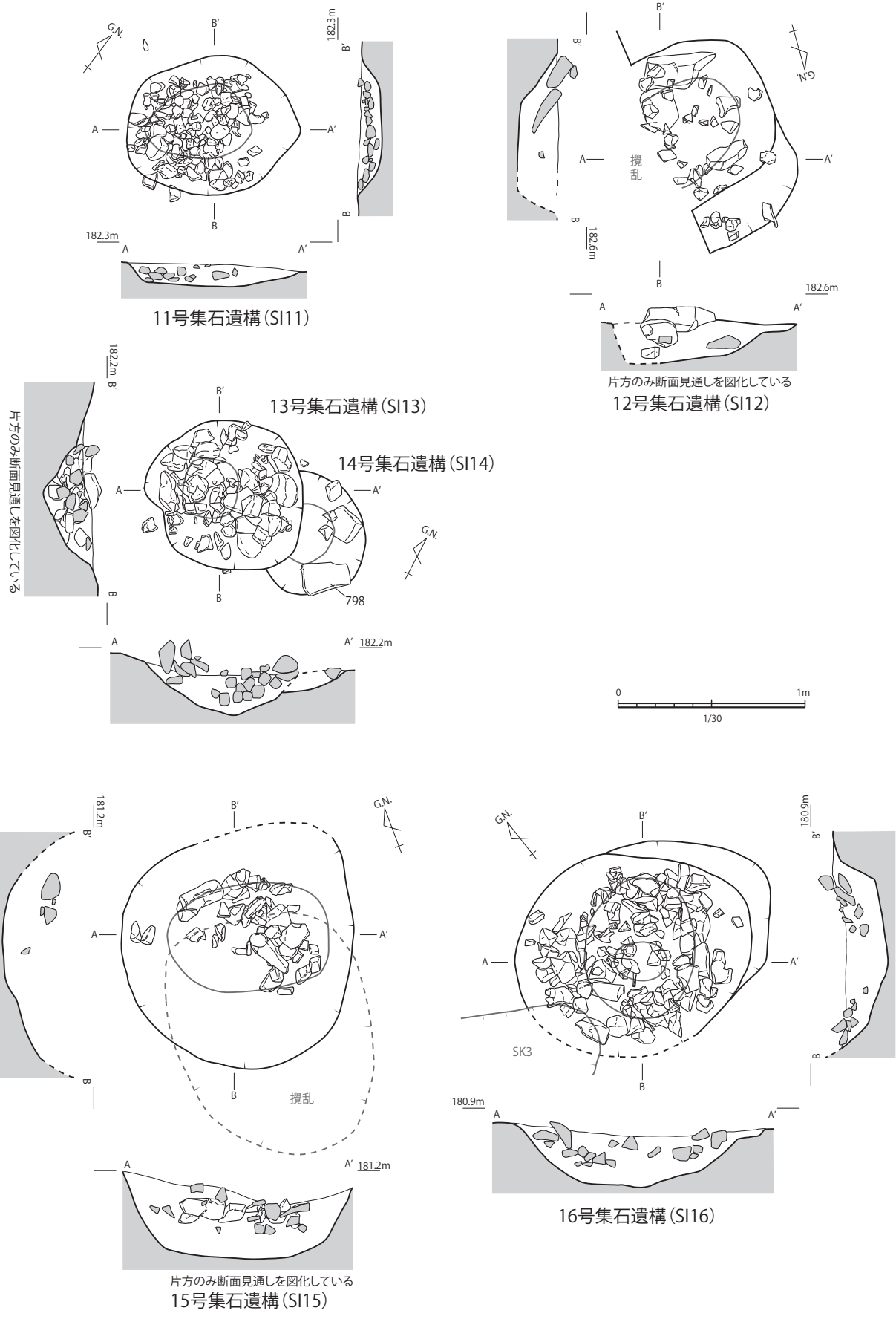


10号集石遺構 (S110)



第43図 集石遺構実測図(2)





第 44 図 集石遺構実測図(3)

5 cm 程度の小型の礫が重なる。礫は掘り込みの東部に集中するが、西部は礫がまばらに広がり、持ち出された可能性がある。また、礫は掘り込みに据えるように位置している。被熱のため赤化した礫が多い。

#### 10号集石遺構 (SI10、第43図)

調査区西側のB6Gr.に位置する。1.2×0.9mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.3mの掘り込みを伴い、断面形は浅いすり鉢状を呈する。構成礫は長径10～20cm程度の中型の礫を主体とし、被熱のため赤化した礫が多い。礫の位置と掘り込みには差があり、礫の下位にある埋土には炭化物が多く含まれ、長さ20cm程度の炭化材も出土している。出土した炭化材について樹種同定及びAMS法による放射性炭素年代測定を実施した結果、樹種はコナラ属コナラ節であり、8210±30年BPの測定値が得られた。(第23・24表試料13参照)また、埋土内から縄文土器深鉢(VIII類)が出土した。

#### 11号集石遺構 (SI11、第44図)

調査区西側のC4Gr.に位置する。0.8×0.7mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.1mの掘り込みを伴い、断面形は皿状を呈する。構成礫は長径5～10cm程度の小型の礫を主体とし、被熱のため赤化した礫が多い。埋土内から黒曜石製の石鏃が出土した。

#### 12号集石遺構 (SI12、第44図)

調査区南西側のC6Gr.に位置する。1.0×0.8mの範囲に礫が広がり、下部には深さ想定0.2mの掘り込みを伴う。東側を既存の建物基礎によって攪乱されるため、掘り込みの大きさや礫の個数は実際と異なる。構成礫は長径30～40cm程度の大型の礫と長径5～10cm程度の小型の礫からなる。礫の位置と掘り込みには差が見られる。攪乱のため礫全体の配置が不明確なためII a類としたが、大型の礫が掘り込みの壁面に沿って花卉状に配置されているようにも見えるためIII c類に属する可能性がある。埋土内から黒曜石の剥片が出土した。

#### 13号集石遺構 (SI13、第44図)

調査区南側のE7Gr.に位置する。0.9×0.8mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.2mの掘り込みを伴い、断面形はすり鉢状を呈する。14号集石遺構(SI14)に隣接する。構成礫は長径10～20cm程度の中型の礫を主体とする。掘り込みの下位に底石は見られないが、掘り込みの壁面に沿うように長径20cm大の礫を配置することからIII c類の可能性がある。埋土内には炭化物を多く含み、出土した炭化材について樹種同定及びAMS法による放射性炭素年代測定を実施した結果、樹種はコナラ属コナラ節であり、8290±30年BPの測定値が得られた。(第23・24表試料29参照)また、埋土内から縄文土器深鉢(III類)や、黒曜石製の石鏃や剥片等が出土した。

#### 14号集石遺構 (SI14、第44図)

調査区南側のE7Gr.に位置する。0.6×0.3mの範囲に礫が広がり、下部には掘り込みを伴うが、北西側を13号集石遺構(SI13)に切られている。構成礫は長径20～30cm程度の大型の礫と長径5～10cm程度の小型の礫からなる。南東部に配置する大型の礫は台石(798)を転用したものとみられる。(第176図)

#### 15号集石遺構 (SI15、第44図)

調査区南側のE7Gr.に位置する。0.8×0.7mの範囲に礫が広がる。下部には深さ0.5mの掘り込みを伴い、断面形は碗状を呈する。上位を後世の攪乱によって乱される。構成礫は長径10～20cm程度の中型の礫と長径5cm程度の小型の礫からなる。礫のほとんどが被熱のため赤化している。攪乱により礫

の配置が不明確であるが、中型の礫が中心を囲むように配石している点ではⅢ類の可能性もある。残存する礫の配置と掘り込みに差が見られる。埋土内から縄文土器深鉢（Ⅱ類）や磨石が出土した。

#### 16号集石遺構（SI16、第44図）

調査区東側のF4・F5Gr.に位置する。1.1×1.0mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.2mの掘り込みを伴い、断面形は皿状を呈する。掘り込みの東側の壁は急な傾斜で立ち上がり、浅いステップを形成する。また西側を自然流路（SK3）に切られる。下位には長径10～20cm程度の中型の礫が配置され、上位は長径10cm以下の小型の礫で構成される。礫の配置と掘り込みに差が見られる。中央部に礫が少ないため、礫が持ち出された可能性がある。埋土内から縄文土器深鉢（Ⅶ類押型文）と黒曜石製の石鏃未製品が出土した。

#### 17号集石遺構（SI17、第45図）

調査区北東側のF2Gr.に位置する。0.8×0.8mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.2mの掘り込みを伴い、断面形は皿状を呈する。構成礫は長径5～10cm程度の小型の礫を主体とする。礫の配置と掘り込みに差が見られる。北側に比べて南側の礫が少ないため、持ち出された可能性がある。埋土内から縄文土器深鉢（Ⅲ類・Ⅶ類押型文）、黒曜石の剥片が出土した。

#### 【集石遺構：Ⅱb類】（SI18～22）

本類は集石遺構を構成する礫が平面に集中し、礫の出土高と掘り込みに差がある一群である。

#### 18号集石遺構（SI18、第45図）

調査区西側のB5・C5Gr.に位置する。0.9×0.8mの範囲に礫が平面的に広がる。下部には深さ0.1mの掘り込みを伴う。構成礫は長径40cm大の大型の礫1個と長径10cm前後の小型の礫からなる。小型の礫の中には赤化した礫もあるが、多くが破砕した角礫である。埋土内から黒曜石の剥片が出土した。

#### 19号集石遺構（SI19、第45図）

調査区南西側のC6Gr.に位置する。1.4×1.1mの範囲に礫が平面的に広がる。下部には深さ0.1mの掘り込みを伴う。構成礫は長径5～10cm程度の小型の礫を主体とする。埋土内から黒曜石製の石鏃や剥片が出土し、そのうち黒曜石製の石鏃（615）の1点を図化した。（第162図）

#### 20号集石遺構（SI20、第45図）

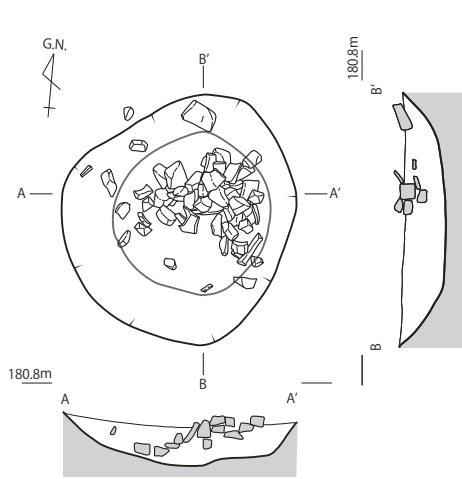
調査区西側のB5Gr.に位置する。0.9×0.5mの範囲に礫が平面的に広がる。下部には深さ0.2mの掘り込みを伴う。東側を25号集石遺構（SI25）に切られる。構成礫は長径5～10cm程度の小型の礫からなる。埋土内から縄文土器深鉢（Ⅷ類：457）や炭化種実が出土した。（第141図）炭化種実について種実同定を実施した結果、ノビル鱗茎であることが分かった。（第25表試料3-2参照）

#### 21号集石遺構（SI21、第45図）

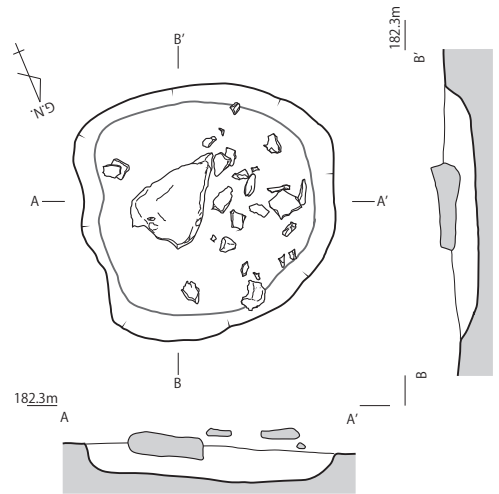
調査区北側のE2Gr.に位置する。0.9×0.5mの範囲に礫が平面的に広がる。下部には0.1mの掘り込みを伴うが、他と比べて深さが浅い。構成礫は長径5～10cm程度の小型の礫を主体とする。埋土内から黒曜石の剥片が出土した。

#### 22号集石遺構（SI22、第45図）

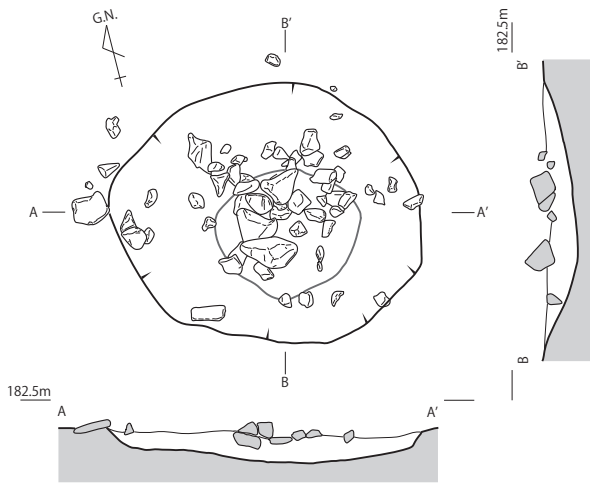
調査区北側のE3Gr.に位置する。0.9×0.7mの範囲に礫が平面的に広がる。下部には掘り込みがあり、中心部は検出面から0.1m程度の深さを測るが、南西部は検出面から0.2m程度の深い掘り込みがある。構成礫は長径5～10cm程度の小型の礫を主体とする。埋土内から縄文土器深鉢（Ⅲ類・Ⅶ類押型文・



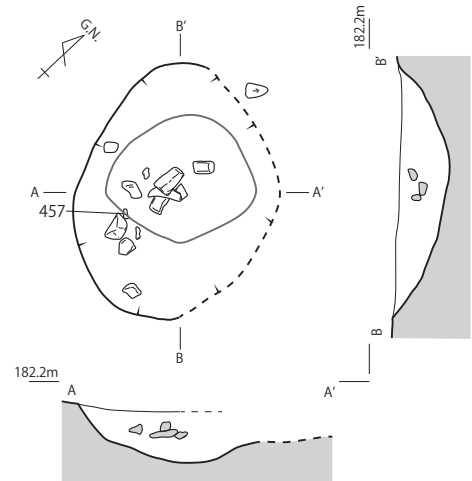
17号集石遺構 (SI17)



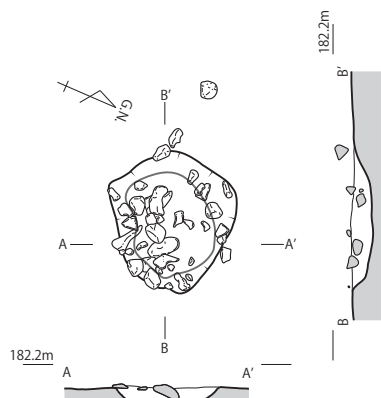
18号集石遺構 (SI18)



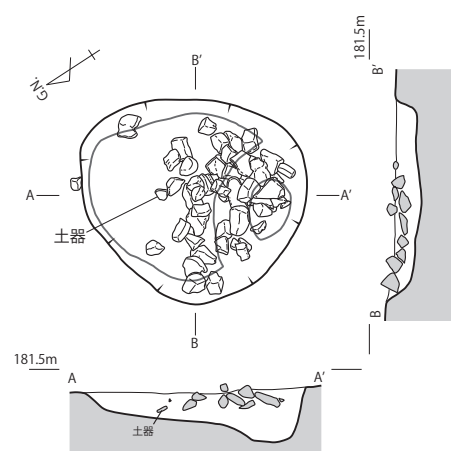
19号集石遺構 (SI19)



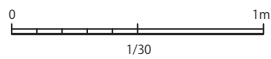
20号集石遺構 (SI20)



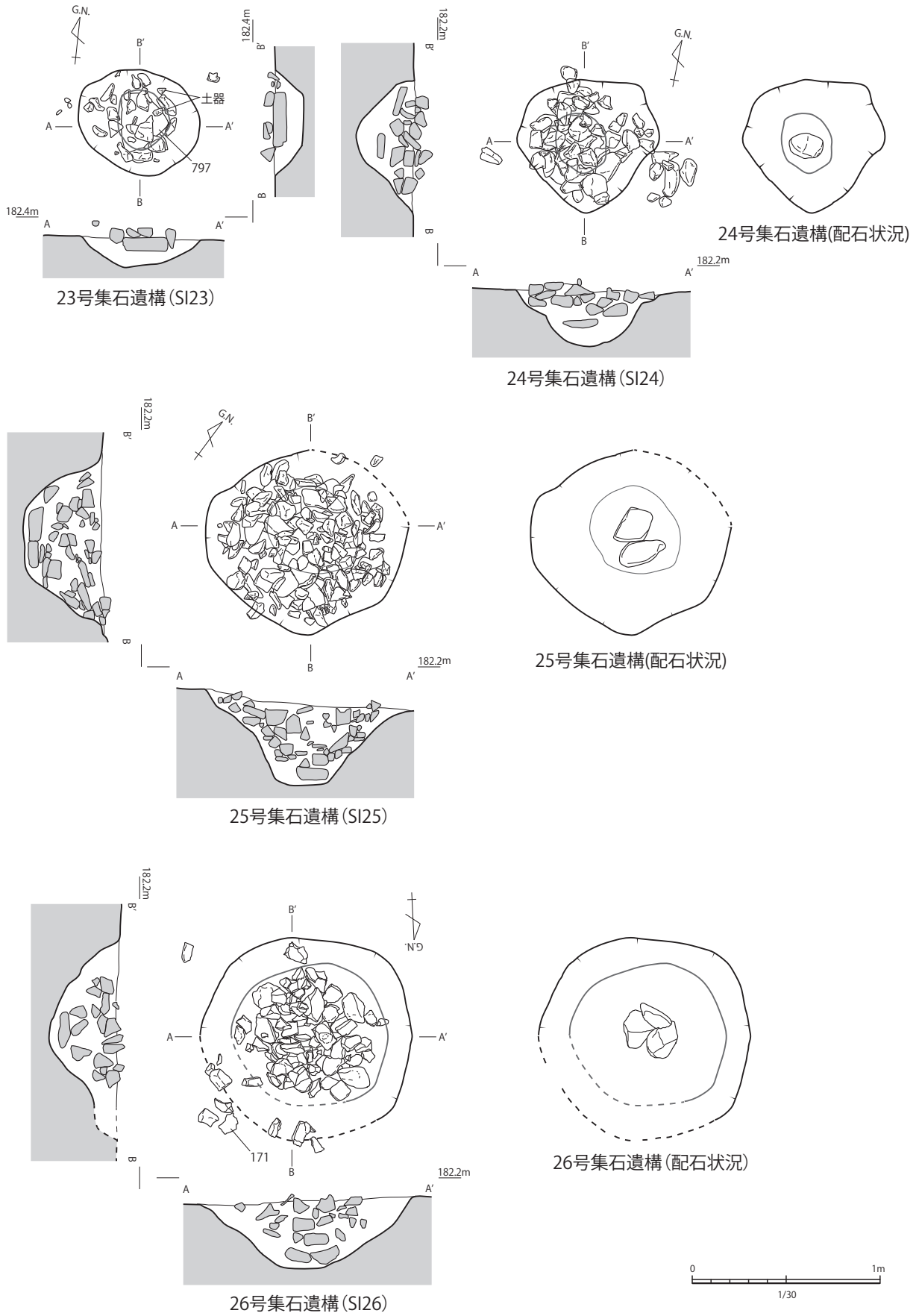
21号集石遺構 (SI21)



22号集石遺構 (SI22)



第45図 集石遺構実測図(4)



第46図 集石遺構実測図(5)

VIII類)、黒曜石製の石鏃等が出土した。

#### 【集石遺構：Ⅲ a類】(SI23～24)

本類は礫が比較的集中し掘り込みを伴う上に、下位に1個の底石が認められる一群である。

##### 23号集石遺構 (SI23、第46図)

調査区南西側のC6Gr.に位置する。0.9×0.5mの範囲に礫が広がる。下部には深さ0.2mの掘り込みがある。上位に5～10cm程度の小型の礫が広がり、その下位に長径30cm大の底石が位置する。底石の表面には打痕が認められるため、台石(797)を転用した可能性がある。(第176図)埋土内から縄文土器深鉢(VIII類)や黒曜石の剥片が出土した。

##### 24号集石遺構 (SI24、第46図)

調査区北側のE3Gr.に位置する。1.2×0.8mの範囲に礫が重層的に集中する。下部には深さ0.3mの掘り込みがあり、断面形はすり鉢状を呈する。上位に長径10～20cm程度の中型の礫が集中し、下位には長径20cm弱の底石が位置する。埋土内から黒曜石の剥片が出土した。

#### 【集石遺構：Ⅲ b類】(SI25～27)

本類は礫が比較的集中し掘り込みを伴う上に、下位に複数個の底石が認められる一群である。

##### 25号集石遺構 (SI25、第46図)

調査区西側のB5Gr.に位置する。1.0×1.0mの範囲に礫が重層的に集中する。西側には20号集石遺構(SI20)が隣接している。検出時には同一の集石遺構としていたが、礫集中部や掘り込みが異なるため別遺構とした。下部には深さ0.5mの掘り込みがあり、断面形は深いすり鉢状を呈する。掘り込みの中心部の上位に長径5～20cm程度の小型、中型の礫が密に集中し、下位に長径30cm前後の大型の底石2個が位置する。埋土内から縄文土器深鉢(Ⅲ類、Ⅶ類押型文)、黒曜石製の石鏃や剥片等が出土した。

##### 26号集石遺構 (SI26、第46図)

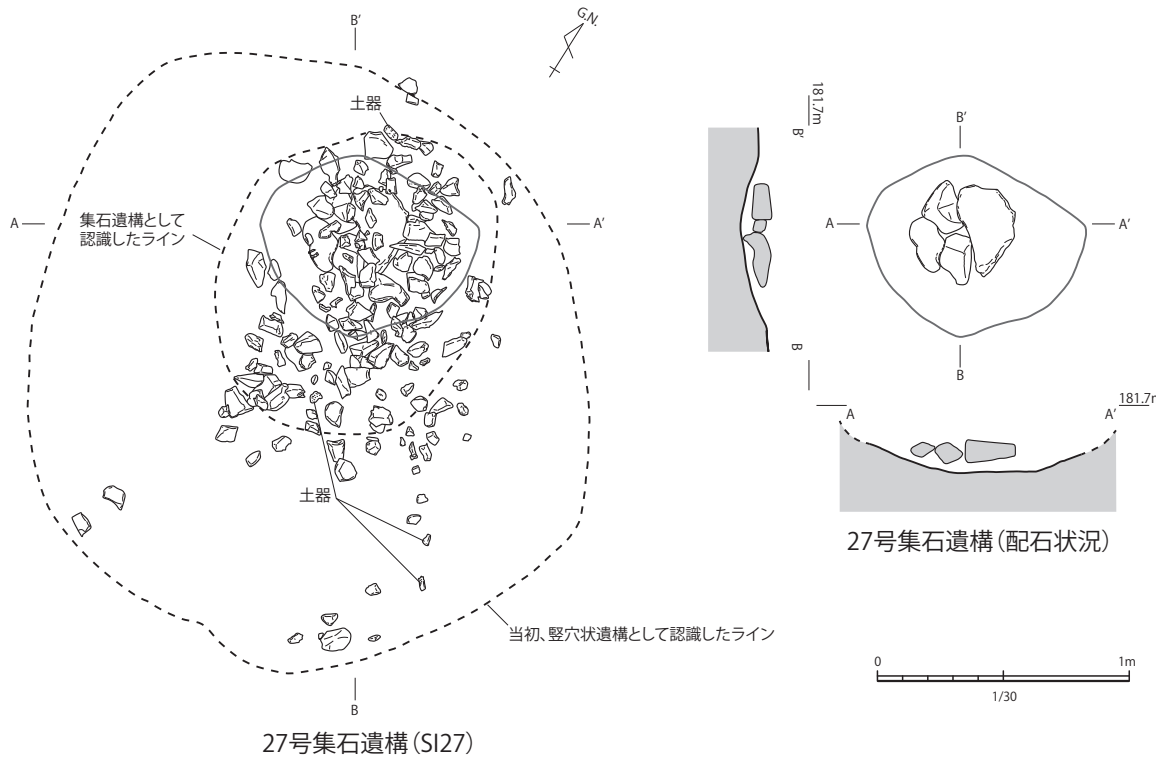
調査区南側のE6・E7Gr.に位置する。1.2×0.8mの範囲に礫が重層的に集中する。下部には深さ0.4mの掘り込みがあり、断面形は深いすり鉢状を呈する。掘り込みの北東部は攪乱の影響を受ける。掘り込みの中心部の上位に長径10～20cm程度の中型の礫が密に集中し、下位に長径20cm前後の底石3個が位置する。埋土内には炭化物を多く含む。出土した炭化材について樹種同定及びAMS法による放射性炭素年代測定を実施した結果、樹種はコナラ属コナラ節であり、8250±30年BPの測定値が得られた。(第23・24表試料28参照)また縄文土器深鉢(Ⅱ類)や黒曜石の剥片が出土し、そのうち縄文土器深鉢(Ⅱ類:130/171)の2点を図化した。(第101・105図)

##### 27号集石遺構 (SI27、第47図)

調査区北西側のC3Gr.に位置する。2.2×1.9mの範囲に礫が平面的に広がる。検出時は広範囲に黒く、遺構のプランが検出できたため竪穴状遺構として調査を行っていたが、掘り進めるうちに中心部から北部にかけて礫が集中し、最終的に底石が認められたことから集石遺構とした。底石の周りには深さ0.2m程度の掘り込みがあり、断面形は浅い皿状を呈する。上位の礫は長径10～20cm程度の中型の礫が広がり、下位には長径20～40cmの底石4個が位置する。埋土内から縄文土器深鉢(Ⅲ類・Ⅶ類:410)、黒曜石の剥片が出土した。(第134図)

#### 【集石遺構：Ⅲ c類】(SI28～33)

本類は礫が比較的集中し掘り込みを伴う上に、下位に花卉状の配石が認められる一群である。



第47図 集石遺構実測図(6)

#### 28号集石遺構 (SI28、第48図)

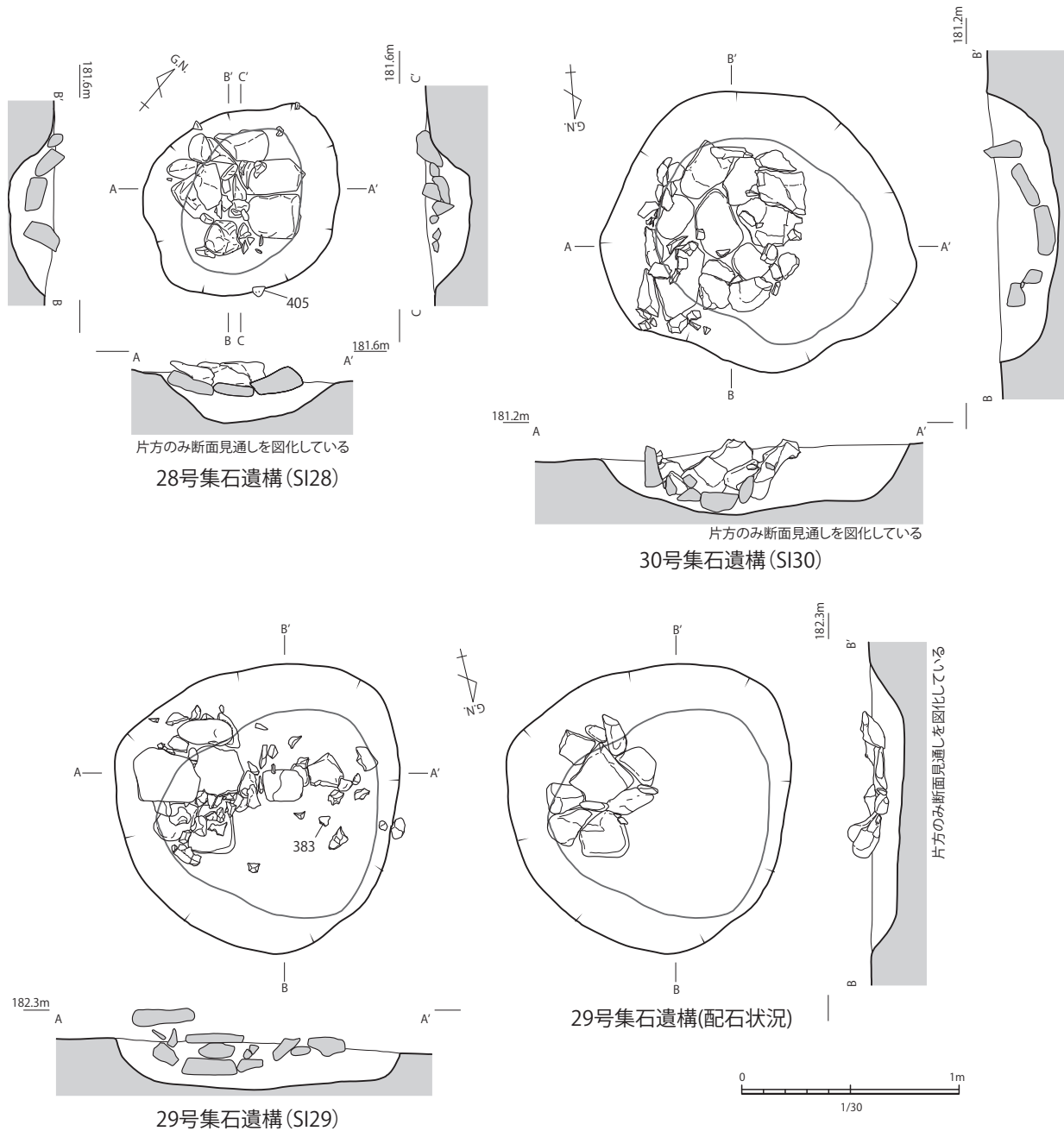
調査区北西側のB2Gr.に位置する。0.7×0.6mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.2mの掘り込みがあり、断面形は皿状を呈する。上位には長径5～10cm程度の小型の礫が平面的に集中し、下位に長径20～30cm程度の大型の礫が密接するように位置する。礫の配置と掘り込みに差が見られる。配石がゆるやかな花卉状に見えることからⅢc類としたが、Ⅲb類の可能性もある。埋土内から縄文土器深鉢(VII類山形)が出土し、そのうち1点(405)を図化した。(第133図)

#### 29号集石遺構 (SI29、第48図)

調査区西側のB5Gr.に位置する。付近に18号集石遺構(SI18)や25号集石遺構(SI25)などが位置する。1.3×0.8mの範囲に礫が広がる。下部には深さ0.2mの掘り込みがあり、断面形は皿状を呈する。上位に長径30cm程度の大型の礫が重なるように位置し、下位に長径30cm大の底石を囲むように長径20cm前後の礫が花卉状に位置する。礫の配置と掘り込みに差が見られる。埋土内から縄文土器深鉢(VII類山形)が出土し、そのうち1点(383)を図化した。(第131図)

#### 30号集石遺構 (SI30、第48図)

調査区北側のE2・E3Gr.に位置する。0.9×0.8mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.3mの掘り込みがあり、断面形は深い皿状を呈する。上位に長径5～10cm程度の細かい礫や破碎した礫が広がり、下位に長径20～40cm程度の大型の礫が急角度に立ち上がりつつ花卉状に位置する。埋土内には炭化物を多く含み、出土した炭化材について樹種同定及びAMS法による放射性炭素年代測定を実施した結果、樹種はカヤであり、8170±30年BPの測定値が得られた。(第23・24表試料14参照) また埋土内から黒曜石製の石鏃や剥片が出土した。



第48図 集石遺構実測図(7)

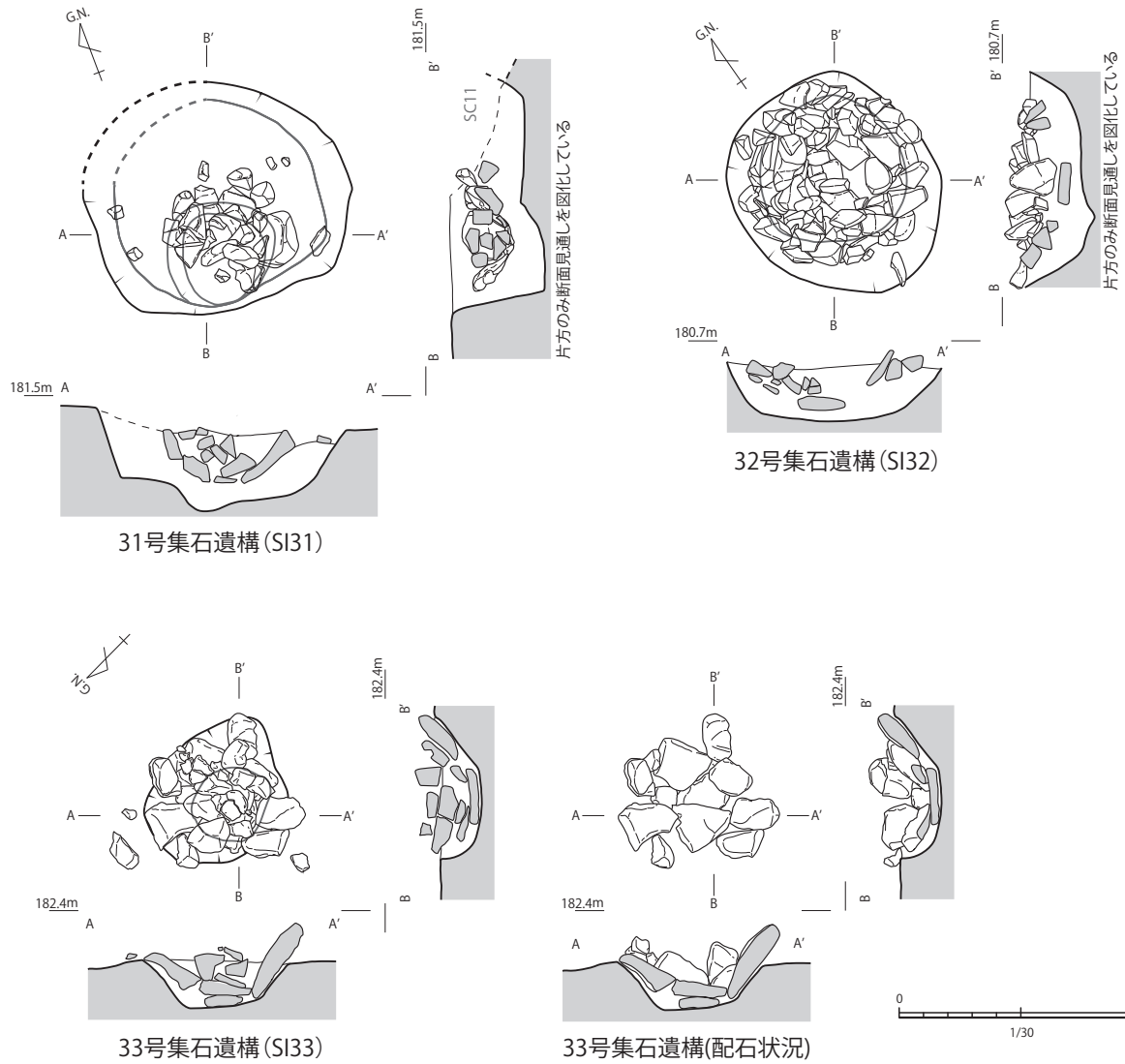
**31号集石遺構 (SI31、第49図)**

調査区中央のE4Gr.に位置する。0.9×0.6mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.4mの掘り込みを伴う。北側を11号土坑(SC11)に切られる。上位に長径5～10cm程度の小型の礫が集中し、下位に長径10～30cm程度の中型～大型の礫が花卉状に位置する。礫の配置と掘り込みに差が見られる。埋土内から黒曜石製の石鏃(610)が出土した。(第162図)

**32号集石遺構 (SI32、第49図)**

調査区北東部のF2Gr.に位置する。0.9×0.8mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.2mの掘り込みがあり、断面形はゆるやかな逆台形状を呈する。上位に長径10～20cm程度の中型の礫が集中し、下位に長径20cm前後の礫が花卉状に位置する。礫の配置と掘り込みに差が見られる。埋土内には炭化物





第49図 集石遺構実測図(8)

を多く含み、出土した炭化材について樹種同定及びAMS法による放射性炭素年代測定を実施した結果、クリの炭化材であり、 $8290 \pm 30$  年BPの測定値が得られた。(第23・24表試料15参照) また埋土内からは黒曜石の剥片が出土した。

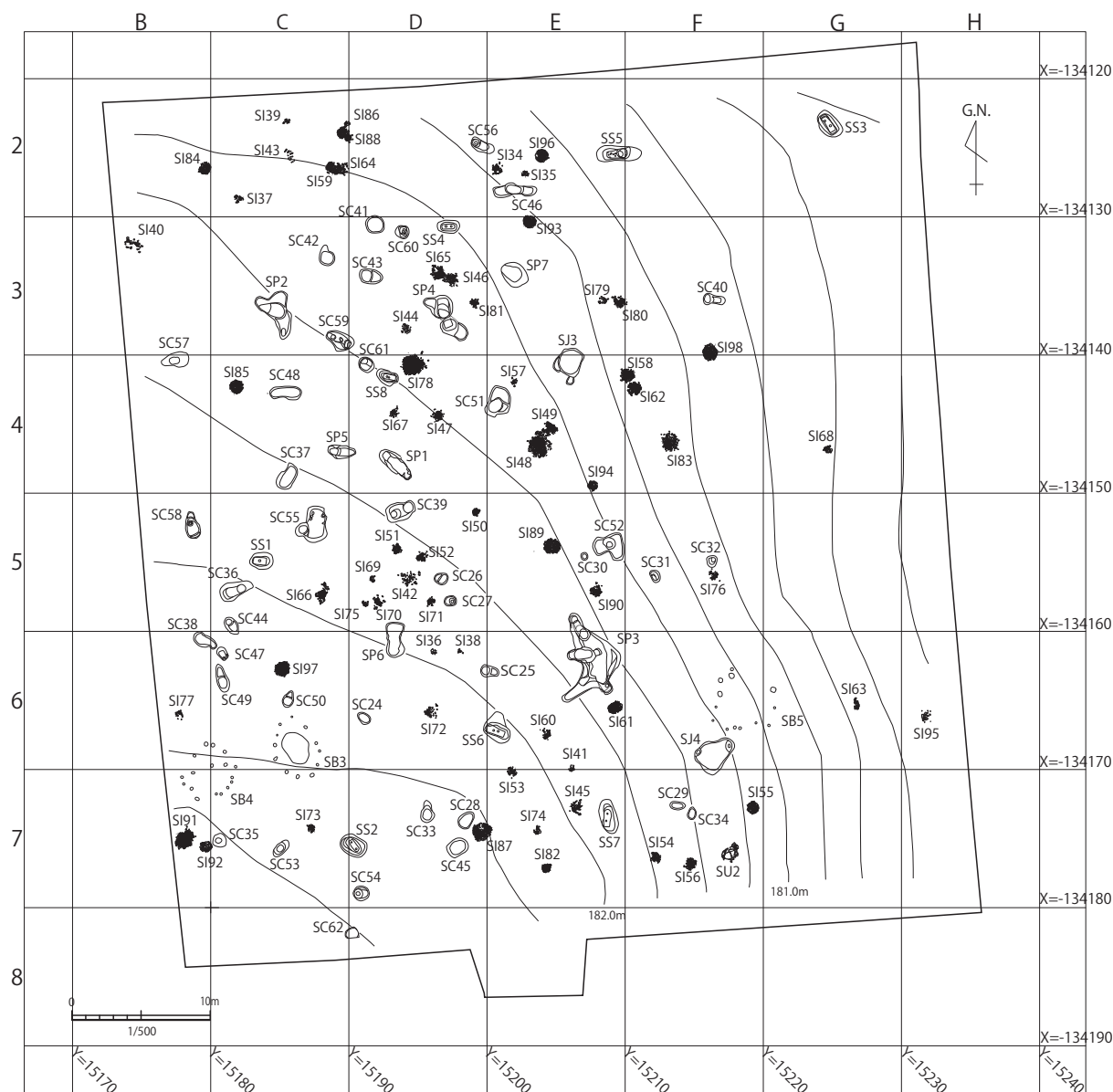
### 33号集石遺構 (SI33、第49図)

調査区西部のD5・D6Gr. に位置する。0.8×0.7mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.2mの掘り込みがあり、断面形は深い逆台形状を呈する。上位には長径5～10cm程度の小型の礫が集中し、下位に長径20～30cm前後の大型の礫が花卉状に位置する。さらにその下位に長径30cm大の底石を伴う。

## 第8節 第XV層で検出した縄文時代早期の遺構

### 1 遺構の分布 (第50図)

主に第XV層を掘削する際に検出した遺構を報告する。第XV層では、平地式建物跡3軒、竪穴状遺構2基、土坑39基、陥し穴8基、炉穴7基、配石遺構1基、集石遺構65基を検出した。第XV層で検出した遺構と同様、多くの遺構が比較的平坦な調査区西側から中央にかけて広がる。平地式建物跡は調査区南西側で2軒、南東側で1軒を検出した。集石遺構は調査区西側から中央にかけて広く分布し、調査区北部(D3・E2・E3Gr.)周辺の一群、調査区中央～西部(C5・D5Gr.)周辺の一群、調査区南部(E7・F7Gr.)周辺の一群などのまとまりが認められる。陥し穴は調査区内に広く分布し、多くが傾斜に対し垂直方向に長軸を形成するような向きで位置している。



第50図 第XV層で検出した縄文時代早期の遺構分布図

## 2 遺構

### (1) 平地式建物跡

第XV層では平地式建物跡3軒を検出した。

#### 3号平地式建物跡 (SB3、第51図)

調査区南西側のC6・C7Gr.に位置する。平面形は楕円形で、長軸4.6m、短軸3.3mを測る。現存している12基の小穴群を柱穴列と考えた。各柱穴の平面形は円形や楕円形で、直径約0.2～0.4m、深さ約0.1～0.2mを測る。柱穴列の内側ほぼ中央には、長軸2.5m、短軸1.8m、深さ0.2mを測る土坑を有する。柱穴内から遺物は出土しなかったが、土坑内から縄文土器深鉢(I類)や黒曜石の剥片等が出土し、縄文土器深鉢(I類:35)の1点を図化した。(第91図)

#### 4号平地式建物跡 (SB4、第51図)

調査区南西側のB6・B7・C6・C7Gr.に位置する。約3m東側に3号平地式建物跡(SB3)がある。平面形は不整な円形で、長軸3.8m、短軸3.6mを測る。現存しているのは17基の小穴で、13基の小穴群(P1～P13)を柱穴列と考えた。柱穴列の内部に3基の柱穴(P15・P16・P17)と外側に1基の柱穴(P14)を含む。各柱穴とも平面形は円形や楕円形で、直径約0.1～0.4m、深さ約0.1～0.2mを測る。柱穴の形態や深さから有機的な関連性があると判断した。周辺にも同じような小穴があるため、建て替えや別の平地式建物跡との切り合っている可能性がある。床面の精査及び床面や遺構周辺の掘り下げを行ったが、炉跡は検出されていない。また、柱穴から黒曜石の剥片が出土した。

#### 5号平地式建物跡 (SB5、第52図)

調査区南東側のF6・G6Gr.に位置する。平面形は不整な楕円形で、長軸4.3m、短軸3.9mを測る。現存しているのは13基の小穴で、8基の小穴群を柱穴列として考えた。柱穴列の内部に1基の柱穴(P13)と外部に4基の柱穴(P3・P4・P7・P9)を含む。柱穴列の北部は第XIV層で検出した2号竪穴状遺構(SJ2)の攪乱の影響を受けたか、もしくは2号竪穴状遺構(SJ2)内にある掘り込みが柱穴列の一部にあたる可能性がある。比較的緩斜面上に位置するため、柱穴の検出高には差がある。柱穴から関連する遺物は出土していない。

### (2) 竪穴状遺構

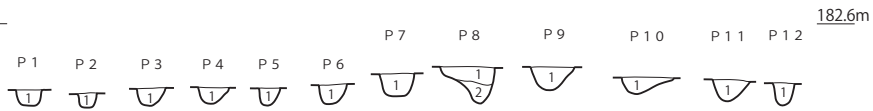
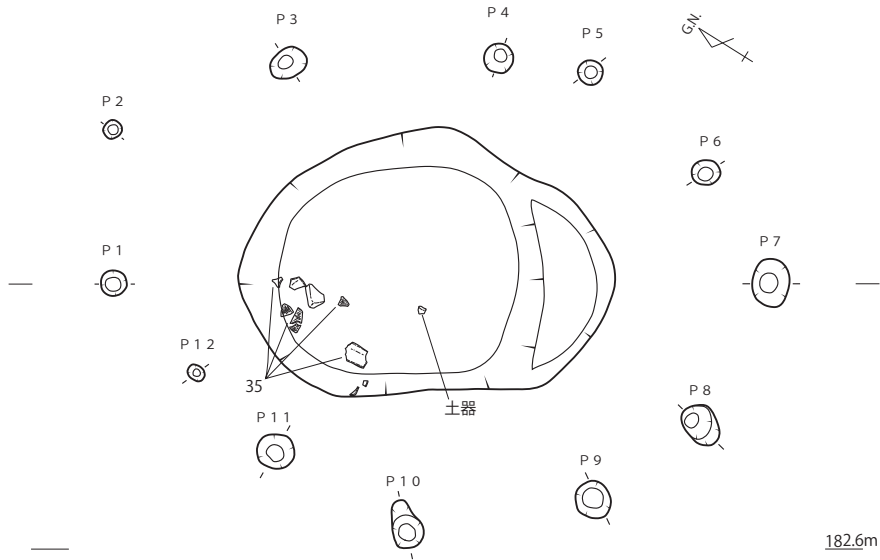
第XV層では2基の竪穴状遺構を検出した。

#### 3号竪穴状遺構 (SJ3、第53図)

調査区中央のE3・E4Gr.に位置する。平面形は不整な隅丸長方形を基本とし、西側にステップ状の掘り込みを有する。長軸2.4m、短軸2.1mを測る。上位を16号土坑(SC16)によって攪乱される。南北軸の断面形は、深い皿状を呈する。埋土の上層(1層)に礫集中部があるが、礫と床面に高低差があるため、遺構に伴う礫かは不明である。埋土内からは縄文土器深鉢(Ⅲ類)が多数出土し、チャート製の石鏃や黒曜石の剥片等も出土した。

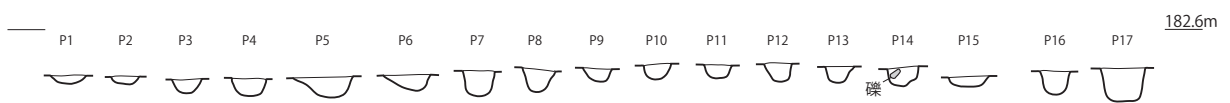
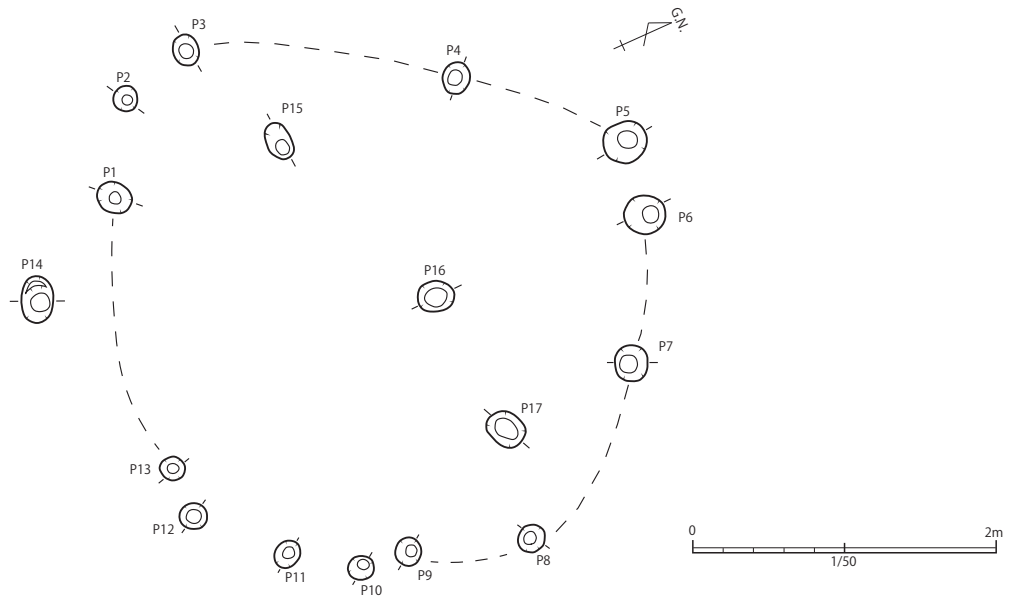
#### 4号竪穴状遺構 (SJ4、第53図)

調査区南東側のF6・F7Gr.に位置する。平面形は不整な隅丸長方形で、長軸2.9m、短軸2.2mを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、検出面から床面までの深さは0.1mと浅い。床面は平坦でなく、西端と東端に浅い掘り込みを有する。床面の精査を行ったが、ピット及び炉跡は検出されていない。埋土1層には炭化物を多く含み、また、縄文土器深鉢(Ⅱ類、Ⅲ類)や黒曜石の剥片等が出土した。このうち砂岩



- 1 黒褐色土 粘質土で炭化物を少し含む
  - 2 黒褐色土 粘質土で細かい黄色地山ブロックを含む
- ※ 断面の方向は、断面図右側が住居中心側となる。

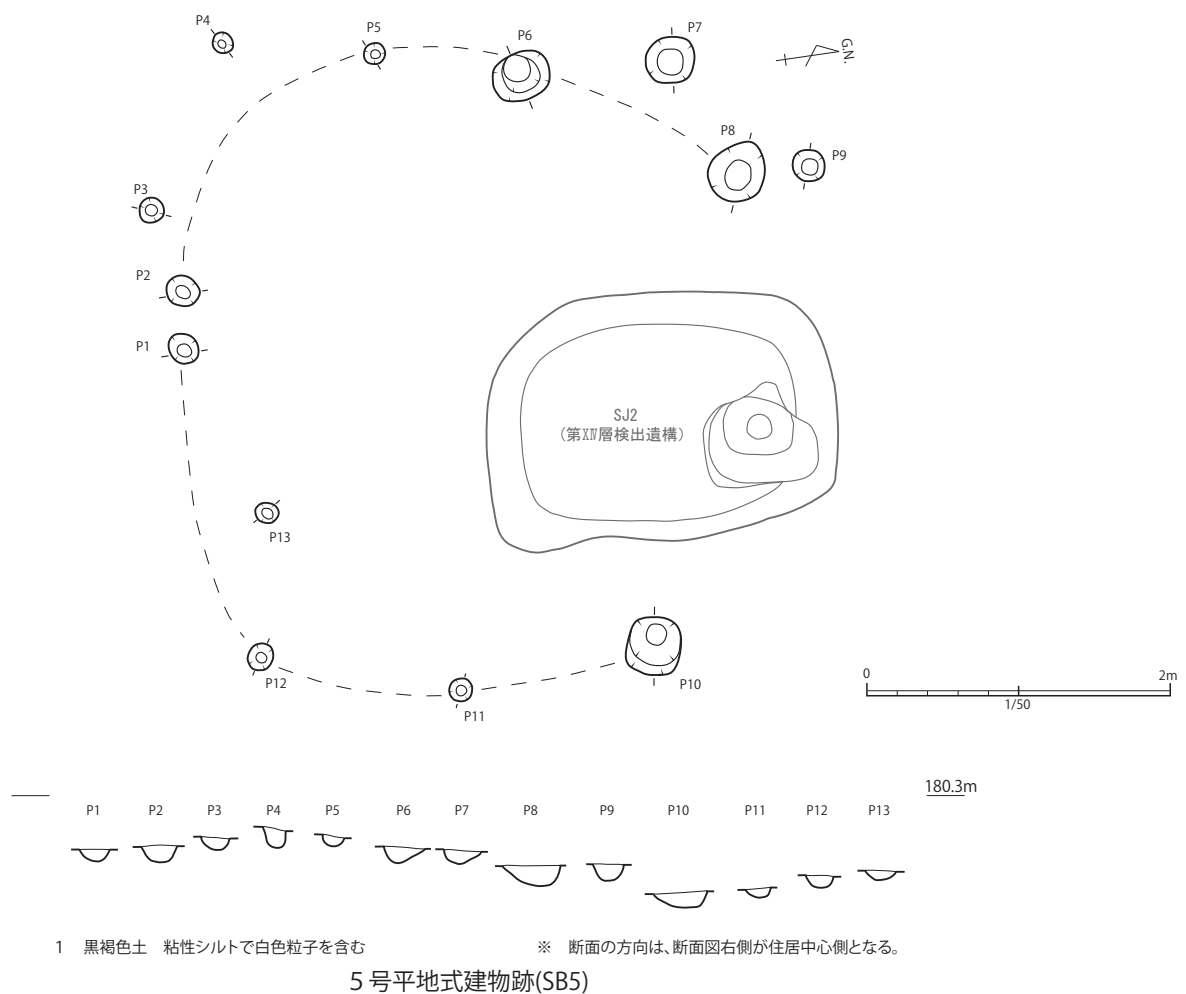
3号平地式建物跡(SB3)



- 1 黒褐色土 粘質土で細かい黄色地山ブロックを含む
- ※ 断面の方向は、断面図左側が住居中心側となる。

4号平地式建物跡(SB4)

第51図 平地式建物跡実測図(2)



第52図 平地式建物跡実測図(3)

製の磨石 (773) と凹石 (794) の2点を図化した。(第173・175図)

### (3) 土坑

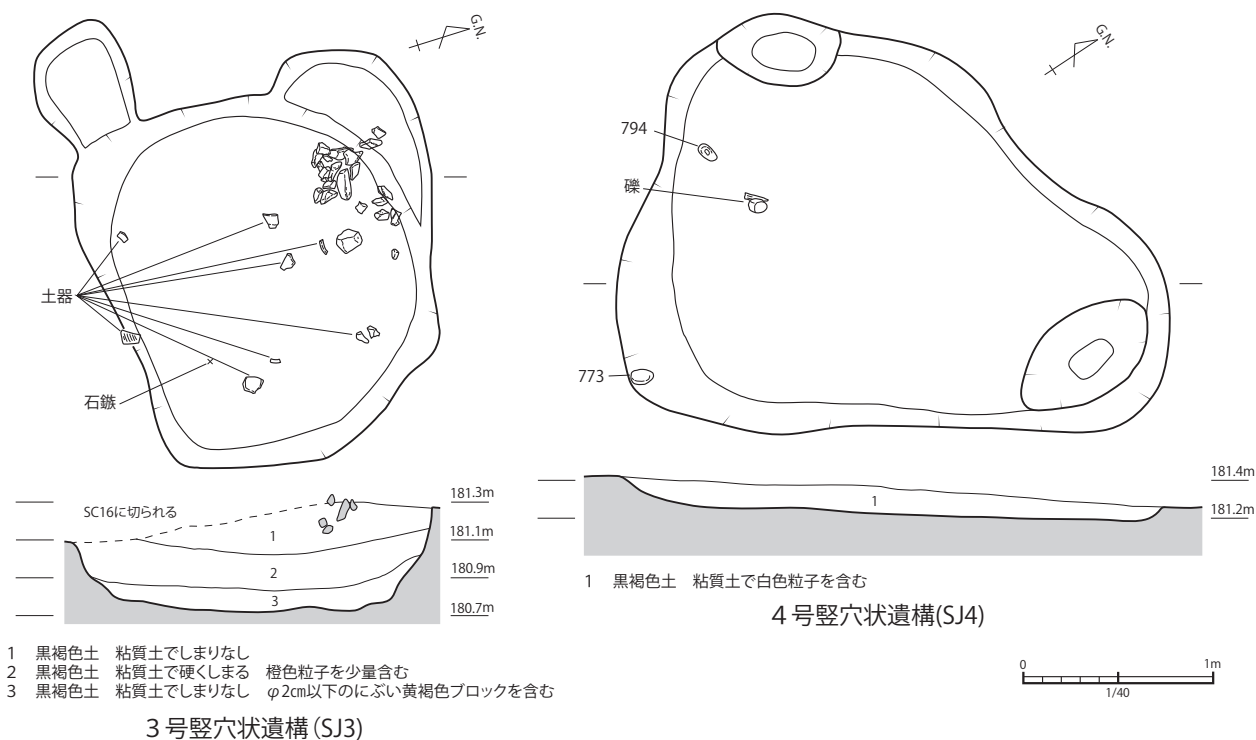
第XIV層では39基の土坑を検出した。

#### 24号土坑 (SC24、第54図)

調査区南西側のD6Gr.に位置する。平面形は楕円形で、長軸1.0m、短軸0.8m、深さ0.2mを測る。壁の立ち上がりは比較的緩やかで、断面形は皿状を呈する。埋土は2つに分層でき、1層は白色粒子や礫を含んでレンズ状に、2層は壁面側に堆積する。埋土から炭化種子が多数出土した。出土した炭化種子について種実同定を実施した結果、ノビル鱗茎破片であることが分かった。(第25表試料6参照) また、埋土内から黒曜石の剥片が出土した。

#### 25号土坑 (SC25、第54図)

調査区南側のD6・E6Gr.に位置する。平面形は不整な楕円形で、長軸1.3m、短軸0.9m、深さ0.2mを測る。壁の立ち上がりは比較的緩やかで、床面は平坦でなく、西側の掘り込みが深くなる。遺物は出土していない。



第53図 竪穴状遺構実測図(2)

26号土坑(SC26、第54図)

調査区中央のD5Gr.に位置する。平面形は楕円形で、長軸1.0m、短軸0.8m、深さ0.2mを測る。壁の立ち上がりは比較的緩やかで、床面は平坦でなく、東側に掘り込みが深くなる。埋土内から黒曜石やチャートの剥片が出土した。

27号土坑(SC27、第54図)

調査区中央のD5Gr.に位置する。平面形は楕円形で、長軸0.9m、短軸0.8m、深さ0.1mを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、断面形はレンズ状を呈する。遺物は出土していない。

28号土坑(SC28、第54図)

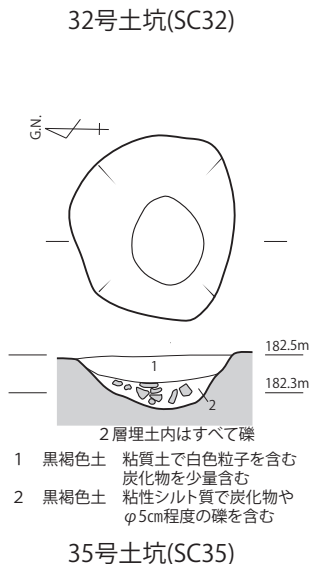
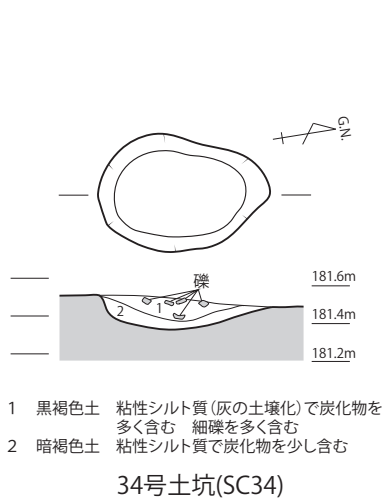
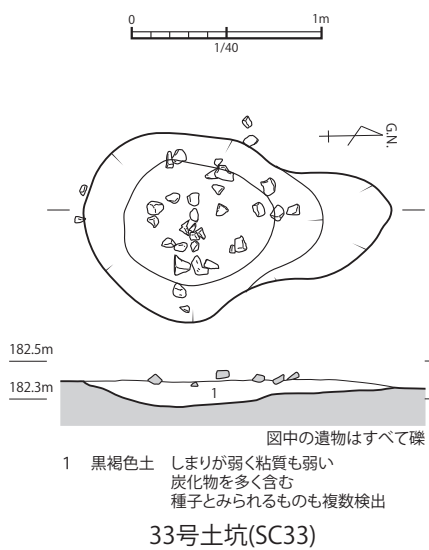
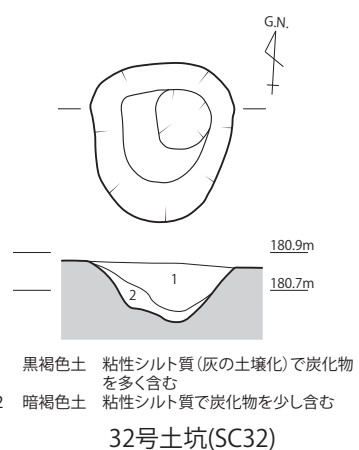
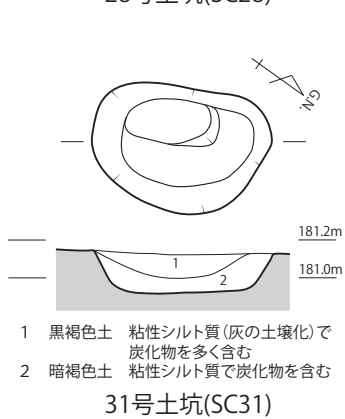
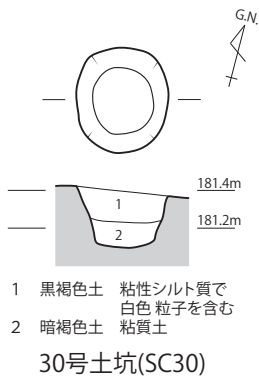
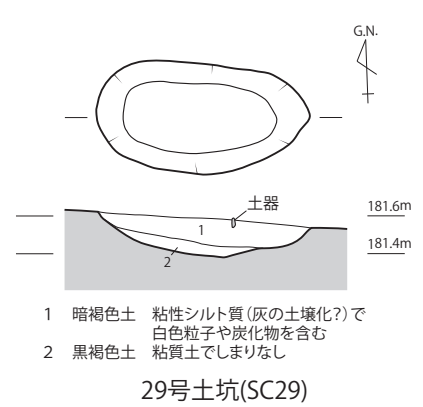
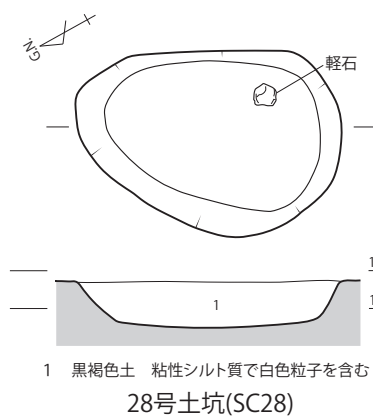
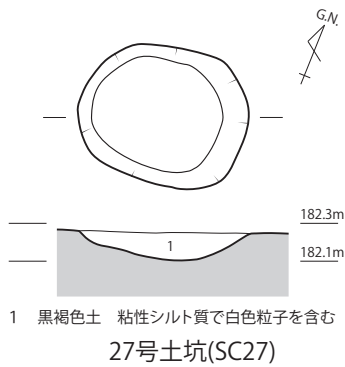
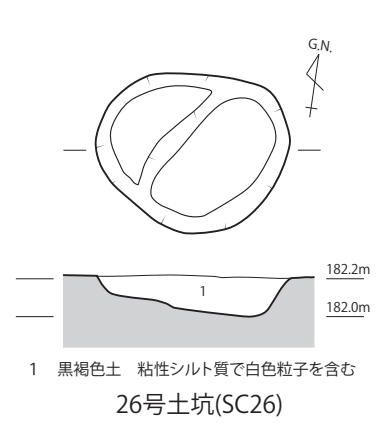
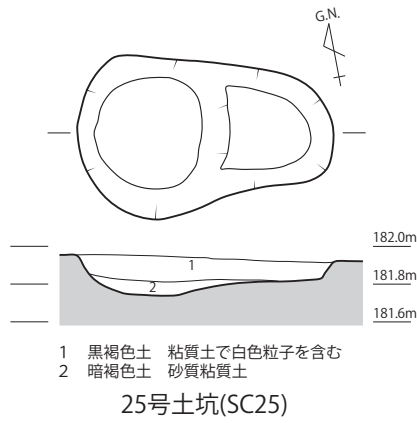
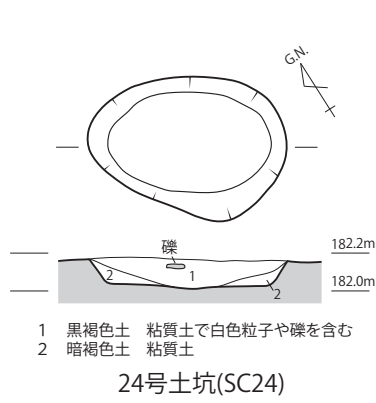
調査区南側のD7Gr.に位置する。87号集石遺構(SI87)に隣接する。平面形は不整な楕円形で、長軸1.4m、短軸1.0m、深さ0.2mを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、断面形は逆台形状を呈する。埋土内から黒曜石やチャートの剥片が出土した。

29号土坑(SC29、第54図)

調査区南東側のF7Gr.に位置する。平面形は楕円形で、長軸1.1m、短軸0.6m、深さ0.2mを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、断面形はレンズ状を呈する。1層は炭化物を含む粘性シルト質のため、土坑穴に集積された灰が土壌化した層の可能性がある。埋土内から縄文土器深鉢(Ⅲ類)が出土した。

30号土坑(SC30、第54図)

調査区中央のE5Gr.に位置する。平面形は楕円形で、長軸0.6m、短軸0.5m、深さ0.3mを測る。壁の立ち上がりは急な傾斜をつくり、断面形は逆台形状を呈する。遺物は出土していない。



第54図 土坑実測図(7)

### 31号土坑 (SC31、第54図)

調査区東側のF5Gr.に位置する。平面形は楕円形で、長軸1.0m、短軸0.7m、深さ0.2mを測る。壁の立ち上がりは比較的緩やかで、断面形は皿状を呈する。埋土内には炭化物を含み、1層は灰が土壌化したとみられ、灰溜めとしての機能を有する可能性がある。遺物は出土していない。

### 32号土坑 (SC32、第54図)

調査区東側のF5Gr.に位置する。76号集石遺構(SI76)に隣接する。平面形は楕円形で、長軸0.8m、短軸0.8m、深さ0.3mを測る。壁の立ち上がりは比較的緩やかで、断面形はすり鉢状を呈する。埋土内には炭化物を含み、31号土坑(SC31)同様に1層の堆積状況から灰溜めとしての機能を有する可能性がある。遺物は出土していない。

### 33号土坑 (SC33、第54図)

調査区南側のD7Gr.に位置する。平面形は不整な楕円形で、長軸1.6m、短軸1.0m、深さ0.1mを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、断面形は浅い皿状を呈する。検出時は1層に細礫が集中したため集石遺構としていたが、埋土内に炭化物や炭化種子を多く含むため、灰溜めとしての機能を有する土坑の可能性が高いと判断した。出土した炭化種子について種実同定を実施した結果、ノビル鱗茎であることが分かった。(第25表試料7-1,2参照) 遺物は出土していない。

### 34号土坑 (SC34、第54図)

調査区南東側のF7Gr.に位置する。平面形は不整な楕円形で、長軸0.9m、短軸0.6m、深さ0.2mを測る。壁の立ち上がりは、南側は直立に近いが、北側は緩やかに傾斜する。埋土内に炭化物や細礫を多く含むため、灰溜めとしての機能を有する可能性がある。埋土内から黒曜石やチャートの剥片が出土した。

### 35号土坑 (SC35、第54図)

調査区南西側のC7Gr.に位置する。92号集石遺構(SI92)に隣接する。平面形は不整な楕円形で、長軸1.0m、短軸1.0m、深さ0.3mを測る。壁の立ち上がりは比較的緩やかで、断面形はすり鉢状を呈する。埋土は2つに分層でき、どちらにも炭化物を含むが2層には細礫を多く含む。灰溜めとしての機能を有する可能性がある。埋土内から縄文土器深鉢(VII類押型文)や黒曜石の石核や剥片が出土し、そのうち縄文土器深鉢(VII類:315)を図化した。(第124図)

### 36号土坑 (SC36、第55図)

調査区西側のC5Gr.に位置する。平面形は不整な楕円形で、長軸2.5m、短軸1.3m、深さ0.4mを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、床面は平坦ではない。埋土内に炭化物や焼土を含み、縄文土器深鉢(I類、II類、III類)や黒曜石製の石鏃未製品や剥片等が出土した。そのうち1層から出土した縄文土器深鉢(III類:231)の1点を図化した。(第111図)

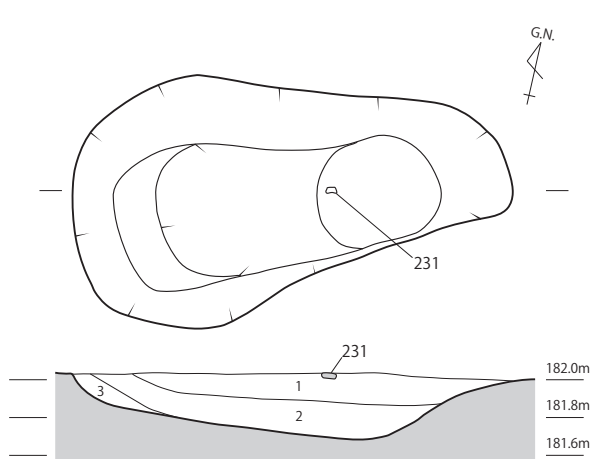
### 37号土坑 (SC37、第55図)

調査区西側のC4Gr.に位置する。平面形は不整な楕円形で、長軸1.9m、短軸1.3m、深さ0.3mを測る。壁の立ち上がりは比較的緩やかで、断面形は皿状を呈する。床面は平坦でなく北東側に一部掘り込みが深くなる部分がある。また、中央部に粘質土がブロック状に堆積する。遺物は出土していない。

### 38号土坑 (SC38、第55図)

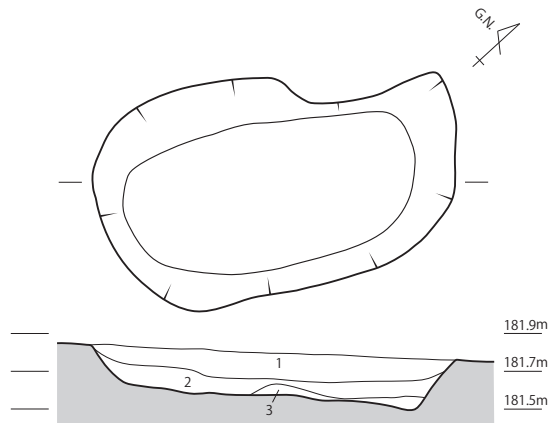
調査区南西側のB6・C6Gr.に位置する。平面形は不整な楕円形で、長軸1.8m、短軸0.9m、深さ0.2





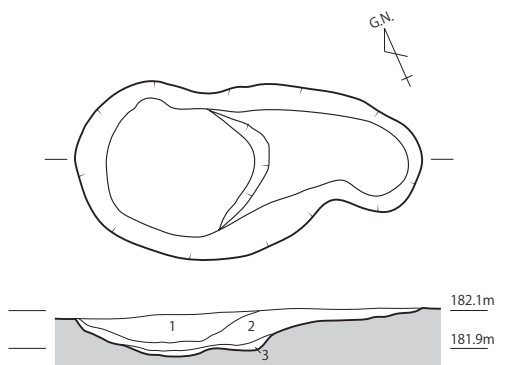
- 1 黒褐色土 粘質土で白色粒子を含む
- 2 黒褐色土 やや強い粘質土で炭化物や焼土を含む
- 3 黒褐色土 やや強い粘質土でφ2cm程度の黄色地山ブロックを含む

36号土坑(SC36)



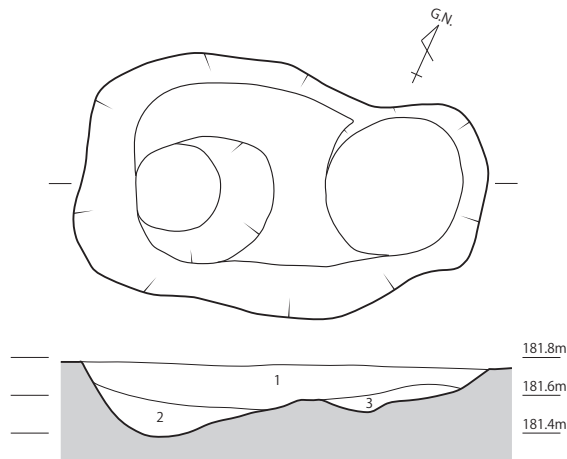
- 1 暗褐色土 粘質土で炭化物を少量含む 白色粒子を含む
- 2 にぶい黄褐色土 粘質土 φ2cm程度の褐色の粘質土ブロックを含む
- 3 褐色土 粘質土でブロック状に堆積する

37号土坑(SC37)



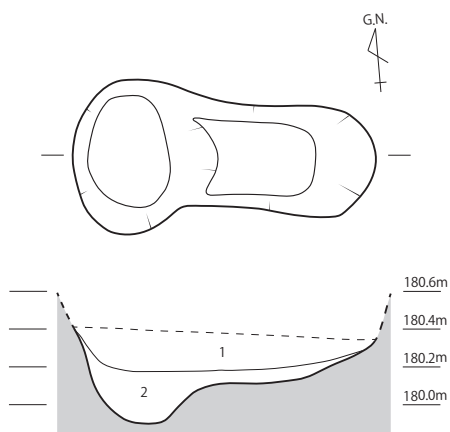
- 1 黒褐色土 粘性シルト質
- 2 暗褐色土 粘性シルト質
- 3 暗褐色土 弱粘性シルト質でφ1~2cm程度の地山ブロックを含む

38号土坑(SC38)



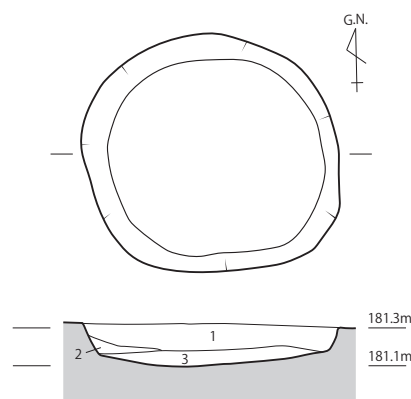
- 1 黒褐色土 粘性シルト質で白色粒子を含む
- 2 黒褐色土 粘質土でしまりなし
- 3 黒褐色土 やや強い粘質土でφ2cm程度の黄色地山ブロックを含む

39号土坑(SC39)



- 1 にぶい黄褐色土 粘性シルト質で白色粒子を含む 炭化物を少量含む
- 2 暗褐色土 粘質土でφ3cm以下の黄色地山ブロックを含む

40号土坑(SC40)



- 1 黒褐色土 粘質土で白色粒子を含む
- 2 黒褐色土 粘質土でしまりあり 炭化物を多量に含む 焼土を含む
- 3 黒褐色土 粘質土でしまりあり 炭化物や焼土を少し含む

41号土坑(SC41)

第 55 図 土坑実測図(8)

mを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、床面は平坦でなく、北西側に一部掘り込みが深くなる部分がある。埋土内から縄文土器深鉢（Ⅶ類押型文）や黒曜石の剥片等が出土した。

#### 39号土坑（SC39、第55図）

調査区中央のD5Gr.に位置する。平面形は不整な隅丸長方形で、長軸2.2m、短軸1.4m、深さ0.4mを測る。壁の立ち上がりは比較的緩やかで、床面は平坦ではなく、西側にかけて深くなる。埋土内から黒曜石やチャートの剥片等が出土し、そのうち黒曜石製の石鏃（612）の1点を図化した。（第162図）

#### 40号土坑（SC40、第55図）

調査区北東側のF3Gr.に位置し、第Ⅶ層以降の下層確認時に検出した。平面形は不整な楕円形で、長軸1.6m、短軸0.8mを測る。検出面からの深さは0.5mを測るが、本来はより高い位置から掘り込まれたと考える。壁の立ち上がりは急な傾斜をつくり、床面に段を有し、西側の掘り込みが深くなる。遺物は出土していない。

#### 41号土坑（SC41、第55図）

調査区北側のD3Gr.に位置する。平面形は円形で、長軸1.4m、短軸1.3m、深さ0.2mを測る。壁の立ち上がりは急な傾斜をつくり、断面形は逆台形状を呈する。2層に炭化物や焼土を多く含む。遺物は出土していない。

#### 42号土坑（SC42、第56図）

調査区北西側のC3Gr.に位置する。平面形は不整な隅丸方形で、長軸1.4m、短軸1.1m、深さ0.4mを測る。壁の立ち上がりは急な傾斜をつくり、断面形は逆台形状を呈する。埋土内に炭化物や焼土を含み、黒曜石の剥片等が出土した。

#### 43号土坑（SC43、第56図）

調査区北側のD3Gr.に位置する。平面形は不整な楕円形で、長軸1.7m、短軸1.1m、深さ0.3mを測る。壁の立ち上がりは比較的緩やかで、床面に段を有し、西側の掘り込みが深くなる。遺物は出土していない。

#### 44号土坑（SC44、第56図）

調査区西側のC5・C6Gr.に位置する。平面形は不整な楕円形で、長軸1.4m、短軸0.9m、深さ0.3mを測る。壁の立ち上がりは比較的緩やかで、床面は平坦でなく、北西側の掘り込みが深くなる。遺物は出土していない。

#### 45号土坑（SC45、第56図）

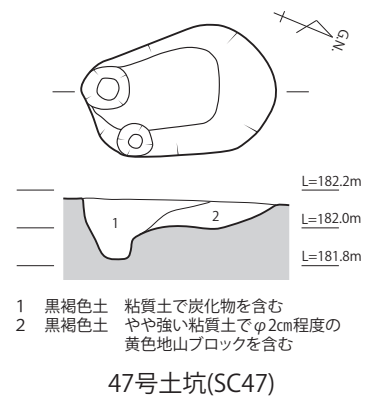
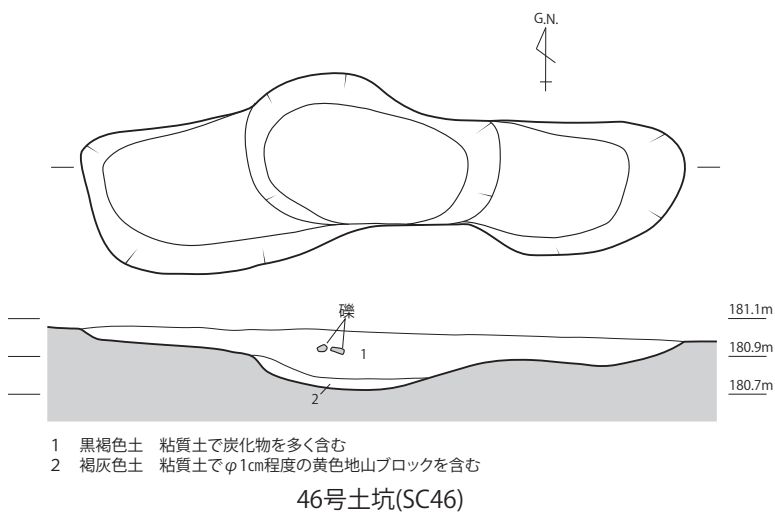
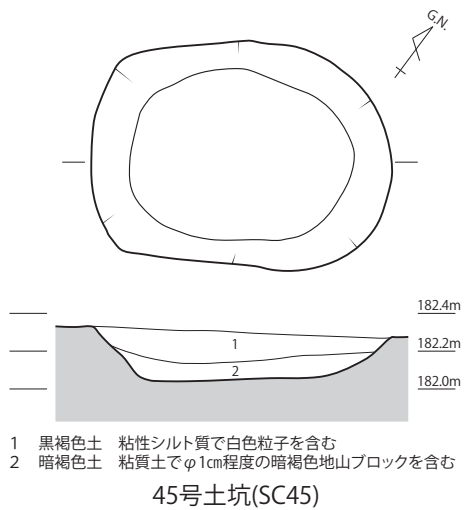
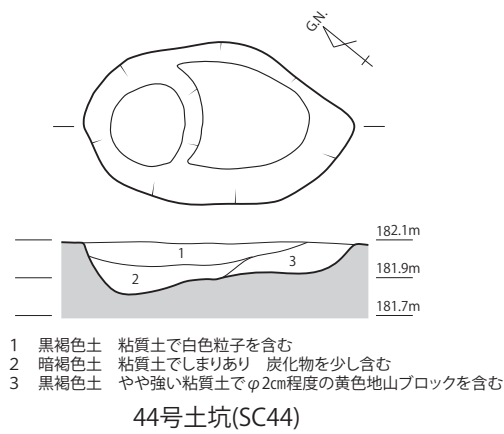
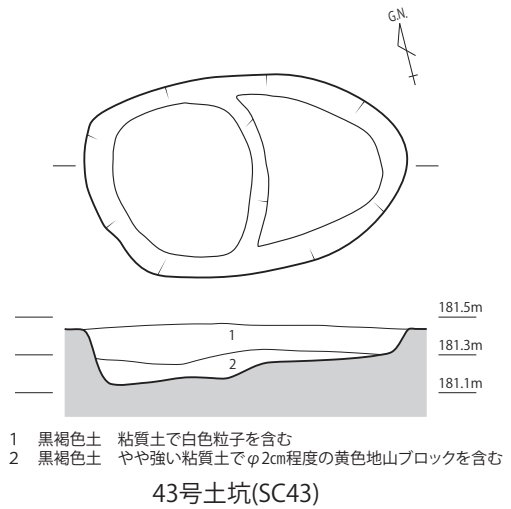
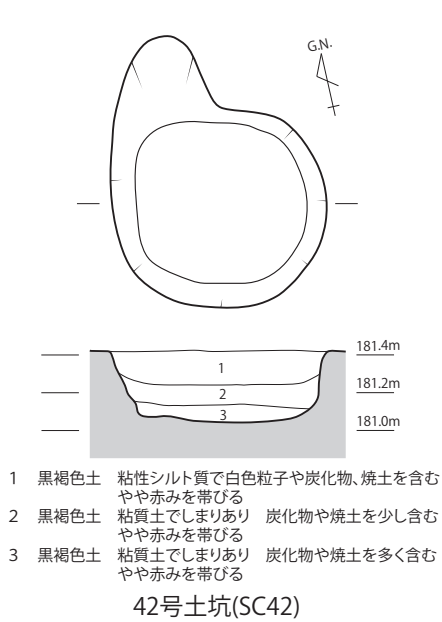
調査区南側のD7Gr.に位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸1.6m、短軸1.2m、深さ0.3mを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿状を呈する。遺物は出土していない。

#### 46号土坑（SC46、第56図）

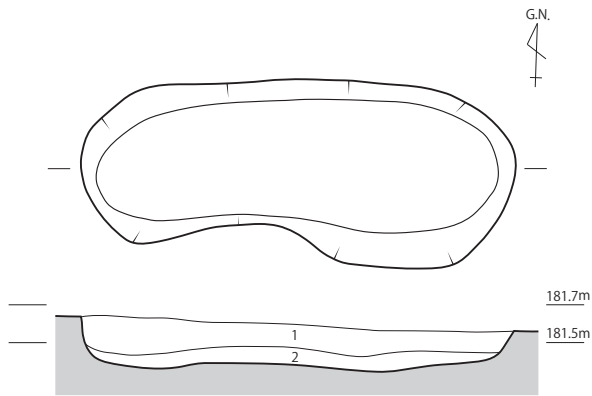
調査区北側のE2Gr.に位置する。平面形は不整な隅丸長方形で、長軸3.2m、短軸1.1m、深さ0.3mを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿状を呈し、中心部の掘り込みが深くなる。埋土の1層には炭化物を多く含む。遺物は出土していない。

#### 47号土坑（SC47、第56図）

調査区南西側のC6Gr.に位置する。平面形は不整な隅丸長方形で、長軸1.0m、短軸0.7m、深さ0.3mを測る。北側の壁の立ち上がりは緩やかで、検出面からの深さ0.2m程度の床面をつくる。南側に小

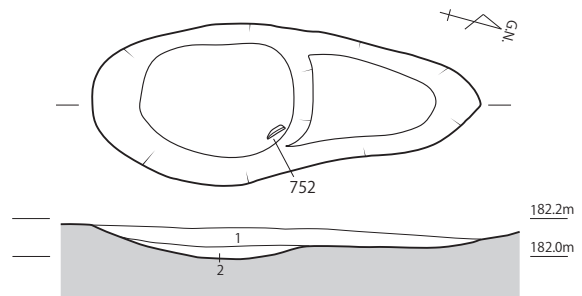


第56図 土坑実測図(9)



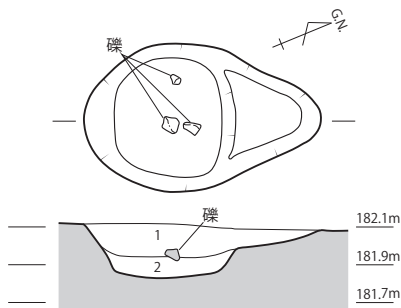
- 1 黒褐色土 粘質土で白色粒子を含む
- 2 黒褐色土 やや強い粘質土でφ2cm程度の黄色地山ブロックを含む

48号土坑(SC48)



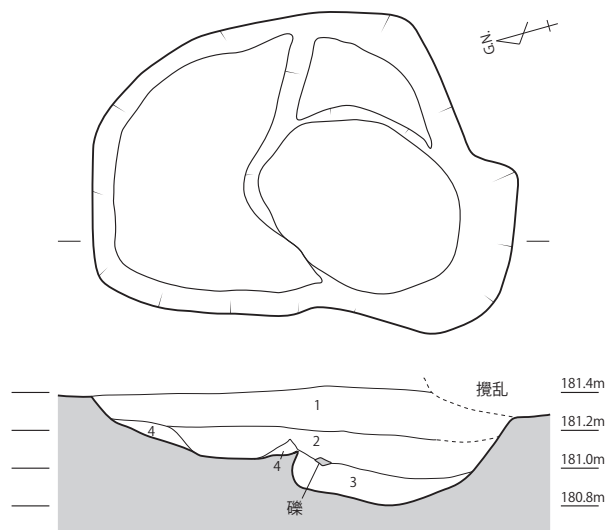
- 1 黒褐色土 粘質土で白色粒子を含む
- 2 暗褐色土 砂質粘質土

49号土坑(SC49)



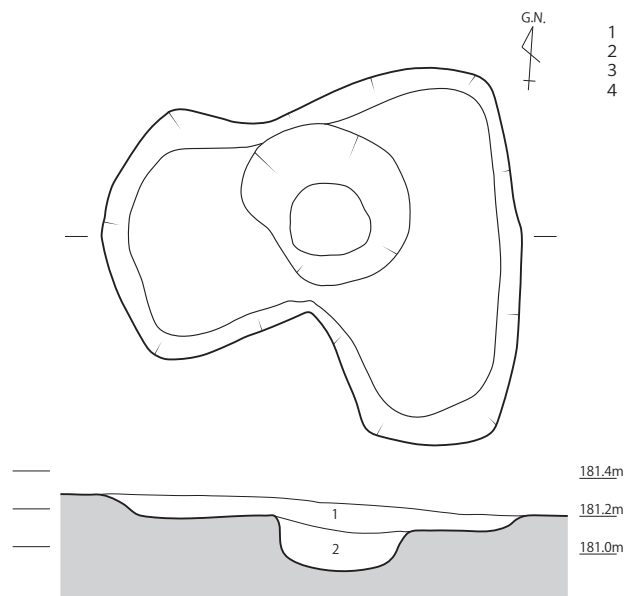
- 1 黒褐色土 粘質土で白色粒子や炭化物を含む  
細かい褐色地山ブロックを含む
- 2 暗褐色土 砂質粘質土

50号土坑(SC50)



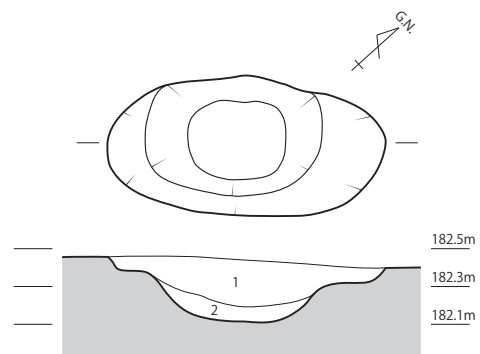
- 1 黒褐色土 粘性シルト質で白色粒子を含む
- 2 黒褐色土 粘性シルト質で炭化物を含む φ1cm程度の黄色地山ブロックを含む
- 3 暗褐色土 粘質土で炭化物を含む φ2cm程度の黄色地山ブロックを含む
- 4 褐灰色土 粘質土でφ1cm程度の黄色地山ブロックを含む

51号土坑(SC51)



- 1 黒褐色土 粘性シルト質で白色粒子を含む
- 2 暗褐色土 粘質土

52号土坑(SC52)

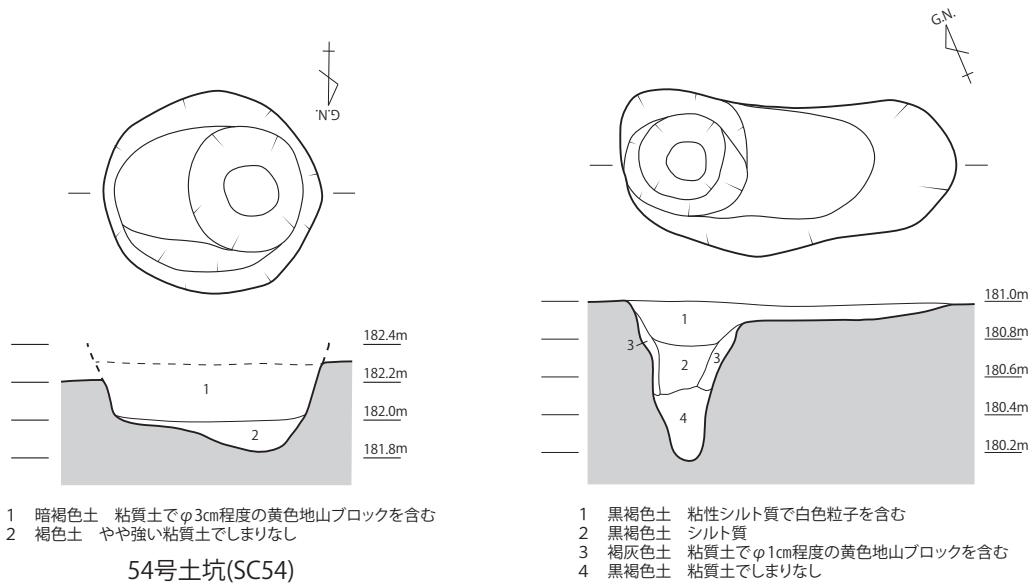


- 1 黒褐色土 シルト質で白色粒子を含む
- 2 暗褐色土 砂質粘質土

53号土坑(SC53)

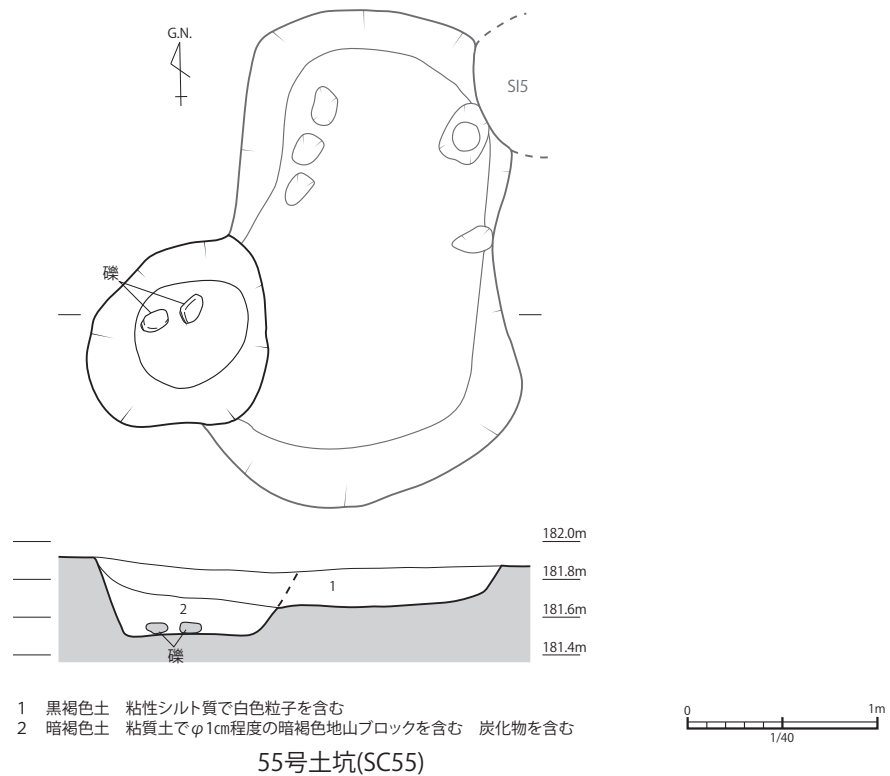


第57図 土坑実測図(10)



54号土坑(SC54)

56号土坑(SC56)



第58図 土坑実測図(11)

穴が2基あり、検出面からの深さは0.4mを測る。樹痕の可能性はある。遺物は出土していない。

48号土坑 (SC48、第57図)

調査区西側のC4Gr. に位置する。平面形は不整な楕円形で、長軸2.3m、短軸1.0m、深さ0.3mを測る。壁の立ち上がりは急傾斜であり、断面形は皿状を呈する。埋土内から黒曜石の剥片が出土した。

49号土坑 (SC49、第57図)

調査区南西側のC6Gr. に位置する。平面形は不整な楕円形で、長軸2.1m、短軸0.9m、深さ0.2m

を測る。壁の立ち上がりは緩やかで、床面は平坦でなく、南側にやや深い掘り込みをもつ。埋土内から石斧(752)が出土した。(第170図)

#### 50号土坑(SC50、第57図)

調査区南西側のC6Gr.に位置する。平面形は不整な楕円形で、長軸1.3m、短軸0.8m、深さ0.3mを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、床面は段を有し、南側の掘り込みが深くなる。埋土内に礫を含むが、被熱は見られない。また、埋土内から黒曜石の剥片等が出土した。

#### 51号土坑(SC51、第57図)

調査区中央のD4・E4Gr.に位置する。平面形は不整な隅丸長方形で、長軸2.2m、短軸1.7m、深さ0.6mを測る。南側の上層の一部を攪乱される。壁の立ち上がりは緩やかで、床面は平坦でなく、南側の掘り込みが深くなる。掘り込みの中心部分は北側にオーバーハングする。北側の床面には4層のブロックがある。焼土は見られないが、掘り込みの形状やブリッジの崩落土と見られる4層があることから炉穴の可能性はある。埋土内から縄文土器深鉢(VII類:359)が1点と黒曜石製の異形石器1点(715)が出土した。(第129・166図)

#### 52号土坑(SC52、第57図)

調査区中央のE5Gr.に位置する。平面形は不整形で、長軸2.2m、短軸2.0mを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、中心部の掘り込みが深くなり、最深部の深さは検出面から0.4mを測る。埋土内から縄文土器深鉢(I類、III類)や黒曜石やチャートの剥片等が出土し、そのうち縄文土器深鉢(III類:232)の1点を図化した。(第111図)また、埋土内から炭化種子が出土し、種実同定を実施した結果、ノビル鱗茎であることが分かった。(第25表試料8参照)

#### 53号土坑(SC53、第57図)

調査区南西側のC7Gr.に位置する。平面形は楕円形で、長軸1.5m、短軸0.8mを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、中心部の掘り込みが深くなり、最深部の深さは検出面から0.3mを測る。埋土から黒曜石の剥片が出土した。

#### 54号土坑(SC54、第58図)

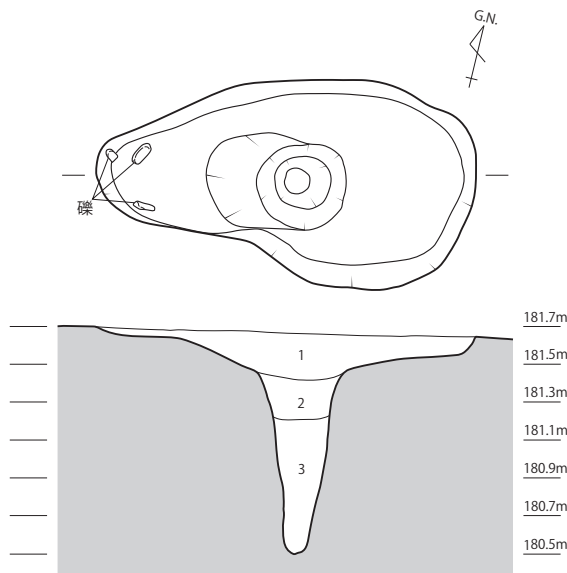
調査区南側のD7Gr.に位置する。平面形は円形で、長軸1.2m、短軸1.1mを測る。壁の立ち上がりは急傾斜であり、床面は平坦でなく西側が深くなる。最深部の深さは検出面から0.5mを測るが、第VII層以降の下層確認時に検出したため、本来は検出面が高い位置にある。埋土内から縄文土器深鉢(II類、III類、VII類)等が出土した。

#### 55号土坑(SC55、第58図)

調査区西側のC5Gr.に位置する。検出時は隅丸方形状の土坑としていたが、東側の1層については樹痕の可能性があるので、西側の2層のみ土坑の本体とした。平面形は不整な円形で、長軸1.0m、短軸1.0m、深さ0.4mを測る。壁の立ち上がりは急傾斜であり、断面形は逆台形状を呈する。床面に長径20cm弱の礫を配置し、埋土内に炭化物を含む。遺物は出土していない。

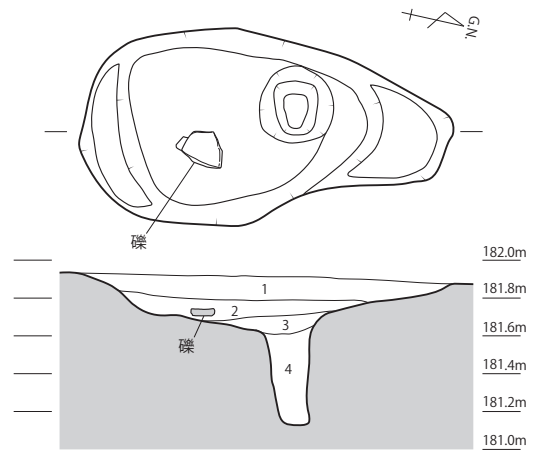
#### 56号土坑(SC56、第58図)

調査区北側のD2・E2Gr.に位置する。平面形は不整な楕円形で、長軸1.8m、短軸0.9mを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、床面の一部に柱穴状の掘り込みをもつ。柱穴状の掘り込みの深さは検出面から0.8mを測る。柱穴状の掘り込みの先端が先細りする形状から山芋掘削痕の可能性はある。埋土内か



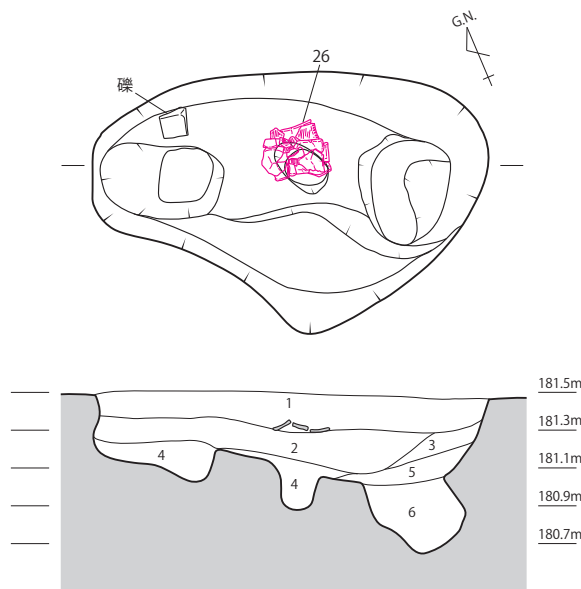
- 1 黒褐色土 粘質土で白色粒子を含む
- 2 暗褐色土 シルト質
- 3 暗褐色土 やや強粘質土でしまりなし 炭化物を含む

57号土坑(SC57)



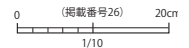
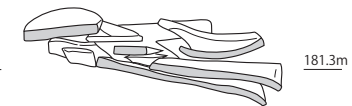
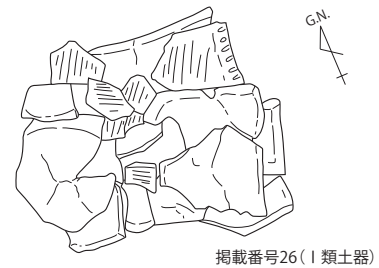
- 1 暗褐色土 粘質土で白色粒子を含む
- 2 暗褐色土 粘質土でφ5mm程度の黄褐色の地山ブロックを含む炭化物を少量含む
- 3 暗褐色土 強い粘質土でしまりあり やや赤みを帯びる
- 4 灰黄褐色土 粘質土でしまりなし

58号土坑(SC58)



- 1 黒褐色土 粘質土で白色粒子を含む
- 2 黒褐色土 粘質土で焼土を含む
- 3 暗褐色土 全体的に赤みを帯びている 焼土を含む
- 4 黒褐色土 やや強い粘質土でφ2cm程度の黄色地山ブロックを含む
- 5 暗褐色土 粘質土で焼土の層 硬くしまる
- 6 褐色土 砂質粘質土でしなりなし

59号土坑(SC59)



第 59 図 土坑実測図(12)

ら黒曜石の剥片が出土した。

57号土坑(SC57、第59図)

調査区西側のB3・B4Gr.に位置する。平面形は不整な楕円形で、長軸2.0m、短軸1.1mを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、床面の一部に柱穴状の掘り込みをもつ。柱穴状の掘り込みの深さは検出面から1.2mを測る。柱穴状の掘り込みの先端が先細りする形状から山芋掘削痕の可能性がある。埋土内から砂岩製の磨石や敲石が出土した。

#### 58号土坑 (SC58、第59図)

調査区西側のB5Gr.に位置する。平面形は不整な楕円形で、長軸2.0m、短軸1.0mを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、床面の一部に柱穴状の掘り込みをもつ。柱穴状の掘り込みの深さは0.8mを測る。56号土坑(SC56)や57号土坑(SC57)と比べて、柱穴の先端が比較的平らであるため、柱穴としての機能をもつ可能性がある。柱穴状の掘り込みから約30cm程度離れた位置に長径40cm程度の礫が配置している。遺物は出土していない。

#### 59号土坑 (SC59、第59図)

調査区北西側のC3・D3Gr.に位置する。平面形は不整な楕円形で、長軸2.1m、短軸1.4mを測る。壁の立ち上がりは急な傾斜をつくり、床面は平坦でなく、床面の北西部、中央部、南東部に柱穴状の掘り込みを有する。最深部となる南東側の掘り込みの深さは検出面から0.8mを測る。埋土内には焼土を含み、5層は焼土がまとまり硬くしまる。1層下部に1個体の深鉢を破碎した土器片を方形に組んだ状態で出土した。土器片は東側に口縁部を位置し、西側に底部で蓋をするように配置されていた。出土した土器は縄文土器深鉢(I類:26)として図化した。(第90図)

#### 60号土坑 (SC60、第60図)

調査区北側のD3Gr.に位置する。平面形は不整な円形で、長軸1.0m、短軸1.0mを測る。壁の立ち上がりは直立に近く、掘り込みの途中で南北軸に対して段をつくる。最深部までの深さは検出面から1.7mを測る。堆積状況から柱状の構造物を建てるための土坑である可能性が考えられる。埋土内から縄文土器深鉢(Ⅱ類、Ⅲ類)、黒曜石や流紋岩の剥片等が出土し、そのうち縄文土器深鉢(Ⅱ類:143)の1点を図化した。(第102図)

#### 61号土坑 (SC61、第60図)

調査区中央のD4Gr.に位置する。8号陥し穴(SS8)が南東側に隣接する。平面形は楕円形で、長軸1.2m、短軸1.0m、深さ1.1mを測る。壁の立ち上がりは緩やかで内傾し、下層は袋状を成す。貯蔵穴の可能性を考え、埋土のフローテーションを行ったが、炭化種子等は確認されなかった。8層の上面がほぼ水平なことから機能時の床面と考えられる。7層の堆積状況も踏みしめられたような形跡が残る。3～6層が水平に堆積する状況を見ると人為的に埋められた可能性がある。埋土内から縄文土器深鉢(I類、Ⅱ類)、黒曜石の剥片等が出土し、そのうち縄文土器深鉢(I類:41)の1点を図化した。(第91図)

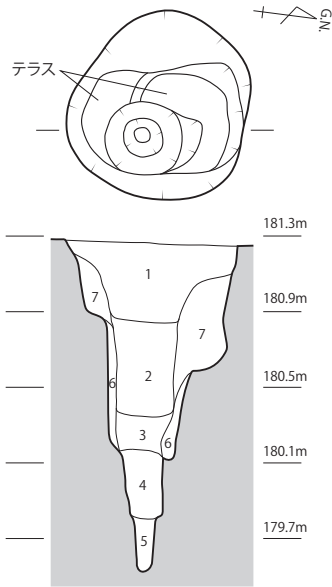
#### 62号土坑 (SC62、第60図)

調査区南側のC8・D8Gr.に位置する。調査区南側の壁際で検出した。表土面から2m以上の深さがあるため安全を優先し、壁際や埋土の掘削を制限したため未掘部分がある。平面形は不整な円形で、長軸1.0m、短軸は南側の壁面まで0.8mを測る。壁の立ち上がりは比較的緩やかで、断面形は中層が袋状に広がるが、下層に向けて一度窄む。未掘のため全容は明確ではないが、下層は袋状に広がっていく可能性がある。埋土内から縄文土器深鉢(Ⅱ類、Ⅲ類)や黒曜石や流紋岩の剥片が出土し、そのうち縄文土器深鉢(Ⅲ類:229/255)の2点を図化した。(第111・113図)

#### (4) 陥し穴

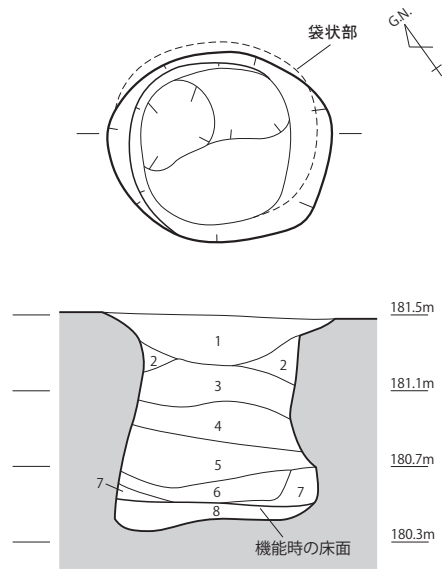
土坑の中でも深い掘り込みをもち、底面に小穴を有するもの陥し穴とした。小穴の埋土内から木質の存在を認めることはできなかったが、いわゆる「逆茂木痕」であると考え。上平遺跡では第XV層掘削中に8基の陥し穴を検出した。検出した陥し穴の多くが始良Tn火山灰層(約30,000年前)を底面とし





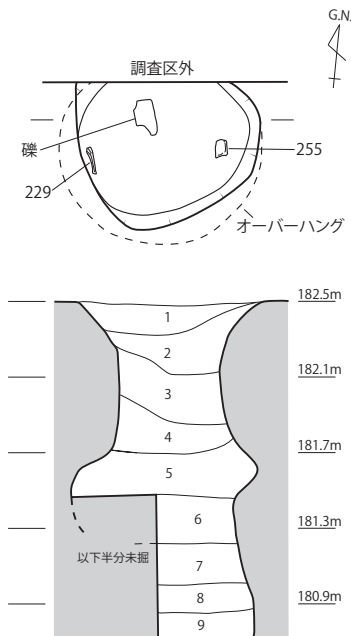
- |   |         |  |
|---|---------|--|
| 1 | 黒褐色土    | 粘質土で白色粒子を含む  |
| 2 | 黒色土     | やや強い粘質土  |
| 3 | 黒褐色土    | 砂混粘質土でしまりなし  |
| 4 | 黒褐色土    | φ1cm程度の黄色地山ブロックを含む<br>砂混でやや強い粘質土 しまりなし<br>φ1cm以下の黄色地山ブロックや炭化物を含む |
| 5 | にぶい黄褐色土 | 砂混でやや強い粘質土 しまりなし<br>細かい黄色地山ブロックを多く含む                             |
| 6 | 灰黄褐色土   | やや強い粘質土でしまりなし<br>細かい地山ブロックを含む                                    |
| 7 | 暗褐色土    | 砂質粘質土でかたくしなる   |

60号土坑(SC60)



- |        |   |              |  |
|--------|---|--------------|--|
| 人為的な堆積 | 1 | 黒褐色粘質土       | 白色粒子を含む  |
|        | 2 | 黒褐色粘質土       | 細かい黄褐色砂混粘質土ブロックを含む                                 |
|        | 3 | 黒褐色粘質土       | 硬くしなる  |
|        | 4 | にぶい黄褐色砂混粘質土  | 4cm以下の黄褐色砂混粘質土ブロックを多く含む<br>4cm以下の黄褐色砂混粘質土ブロックが多く混在 |
|        | 5 | にぶい黄褐色砂混粘質土  | 硬くしなる 炭化物を含む<br>炭化物および2cm程度の黄褐色砂混粘質土ブロックを含む        |
|        | 6 | 暗褐色砂混やや強い粘質土 | 細かい黄褐色砂混粘質土ブロックを含む                                 |
|        | 7 | 暗褐色砂混粘質土     | 硬くしなる<br>3cm以下の黄褐色砂混粘質土ブロックを含む<br>(機能時の踏みしめ等か)     |
|        | 8 | 黄褐色砂質土       | 床付近のシラス層の堆積[床面の整形層]                                |

61号土坑(SC61)



- |   |         |  |
|---|---------|--|
| 1 | 暗褐色土    | 粘性シルト質で白色・橙色粒子を含む 炭化物を少し含む                   |
| 2 | にぶい黄褐色土 | 粘質土で白色粒子を含む<br>φ2cm程度の暗褐色地山ブロックを少し含む         |
| 3 | 灰黄褐色土   | 砂混粘質土で白色・橙色粒子を含む<br>φ2cm程度の暗褐色地山ブロックを少し含む    |
| 4 | 黒褐色土    | やや強い粘質土で橙色粒子を含む<br>φ5mm程度の暗褐色地山ブロックを含む しまりあり |
| 5 | 暗褐色土    | やや強い粘質土でφ3cm以下の黄色地山ブロックを含む                   |
| 6 | 灰黄褐色土   | 粘性砂質土でφ3cm程度の黄色地山ブロックを含む                     |
| 7 | 黒褐色土    | やや強い粘質土でφ2cm以下の黄色地山ブロックを含む しまりなし             |
| 8 | 褐色土     | 粘性砂質土でしまりなし                                  |
| 9 | 黄褐色土    | 砂混でやや強い粘質土 しまりなし                             |

62号土坑(SC62)



第60図 土坑実測図(13)

て構築していた。

#### 1号陥し穴 (SS1、第61図)

調査区西側のC5Gr.に位置する。平面形は不整な楕円形で、長軸1.7m、短軸1.2mを測る。底面は長方形となり、長軸1.0m、短軸0.5mを測る。壁の立ち上がりは直立に近く、断面形は箱状を呈する。検出面から底面までの深さは1.8mを測る。底面には直径約0.2m、底面からの深さ0.2mの小穴が1箇所確認できる。陥し穴の埋土から縄文土器深鉢(Ⅱ類、Ⅲ類)や黒曜石の剥片等が出土し、そのうち縄文土器深鉢(Ⅲ類:258)の1点を図化した。(第113図)

#### 2号陥し穴 (SS2、第61図)

調査区南側のC7・D7Gr.に位置する。平面形は楕円形で、長軸2.0m、短軸1.4mを測る。底面は長方形となり、長軸1.0m、短軸0.4mを測る。壁の立ち上がりは直立に近く、断面形は箱状を呈する。検出面付近は崩落によるものかやや開き気味で、東西軸にテラス状の平坦部をもつ。検出面から底面までの深さは2.1mを測る。底面には直径0.1~0.2m、底面からの深さ0.2mの小穴が2箇所確認できる。小穴の間隔は0.5m程度である。埋土から縄文土器深鉢(Ⅱ類、Ⅲ類、Ⅶ類押型文)や黒曜石製の石鏃や剥片等が出土し、そのうち縄文土器深鉢(Ⅱ類:60)の1点を図化した。(第95図)

#### 3号陥し穴 (SS3、第62図)

調査区北東側のG2Gr.に位置する。平面形は不整な楕円形で、長軸2.1m、短軸1.4mを測る。底面は不整な長方形となり、長軸1.2m、短軸0.5mを測る。検出面付近の壁の立ち上がりは緩やかで、下層に向かうほどほぼ直立となる。断面形は箱状を呈する。検出面から底面までの深さは2.2mを測る。底面には直径0.1~0.2m、底面からの深さ0.2mの小穴が2箇所確認できる。埋土から縄文土器深鉢(Ⅱ類、Ⅲ類)や黒曜石製の石鏃や剥片等が出土し、そのうち縄文土器深鉢(Ⅱ類:186、Ⅲ類:194/209)の3点を図化した。(第107・109・110図)

#### 4号陥し穴 (SS4、第62図)

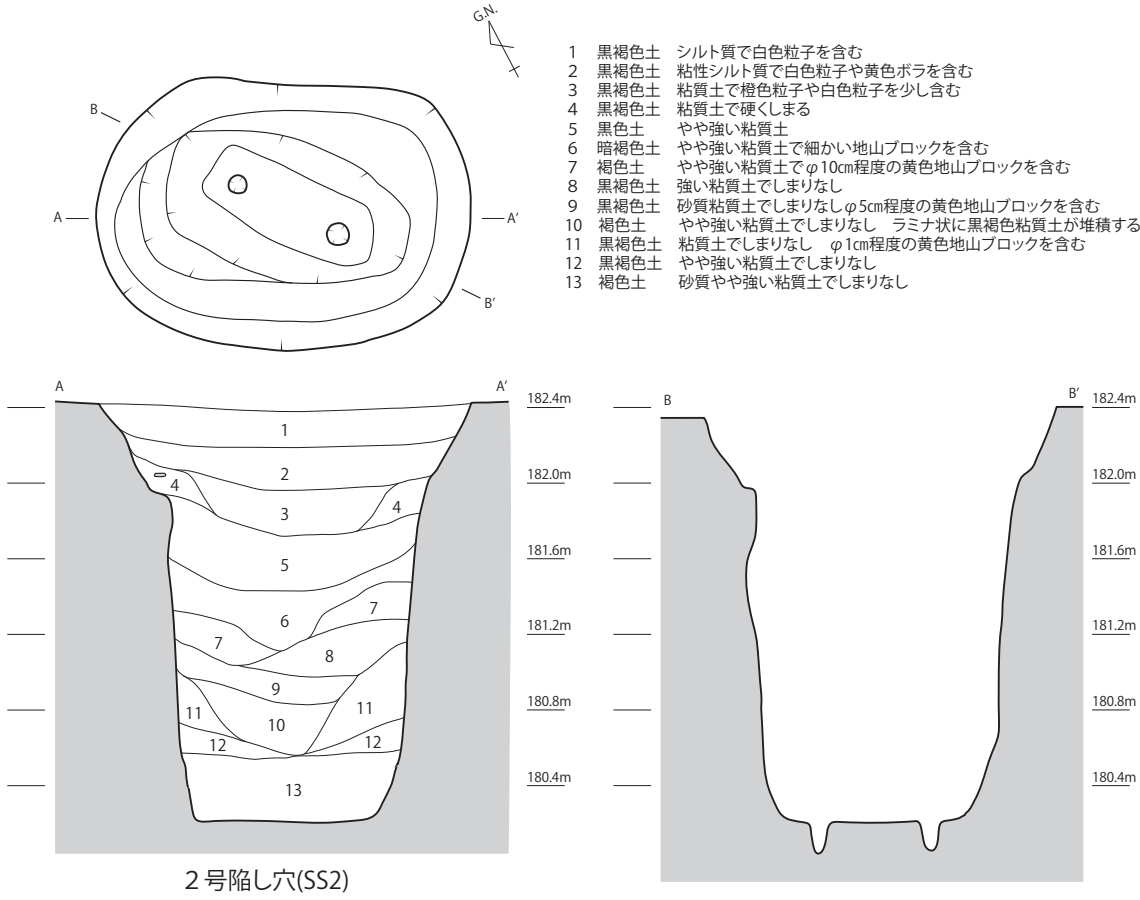
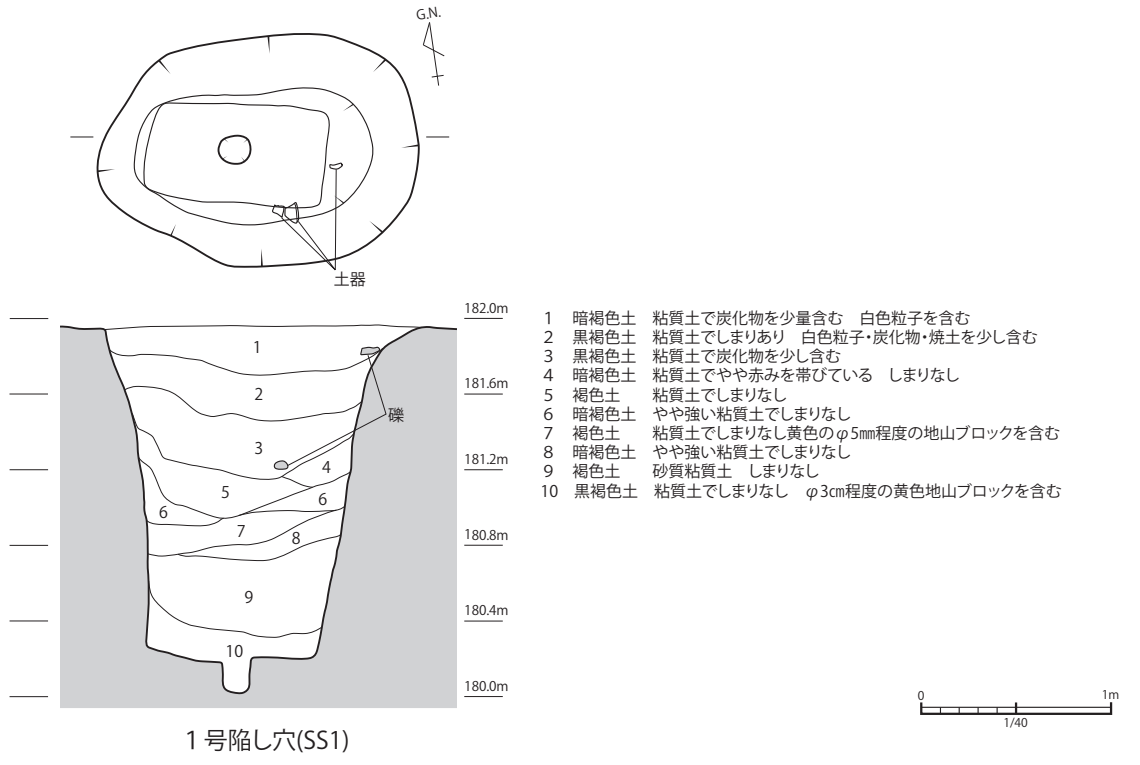
調査区北側のD3Gr.に位置する。平面形は楕円形で、長軸1.6m、短軸0.9mを測る。底面は長方形となり、長軸0.9m、短軸0.3mを測る。壁の立ち上がりは検出面付近が比較的緩やかで、下層に向かうほどほぼ直立となる。断面形は箱状を呈する。検出面から底面までの深さは1.9mを測る。底面には直径0.1~0.2m、底面からの深さ0.2mの小穴が2箇所確認できる。埋土から黒曜石製の石鏃や剥片が出土し、そのうち黒曜石製の石鏃(613)の1点を図化した。(第162図)

#### 5号陥し穴 (SS5、第63図)

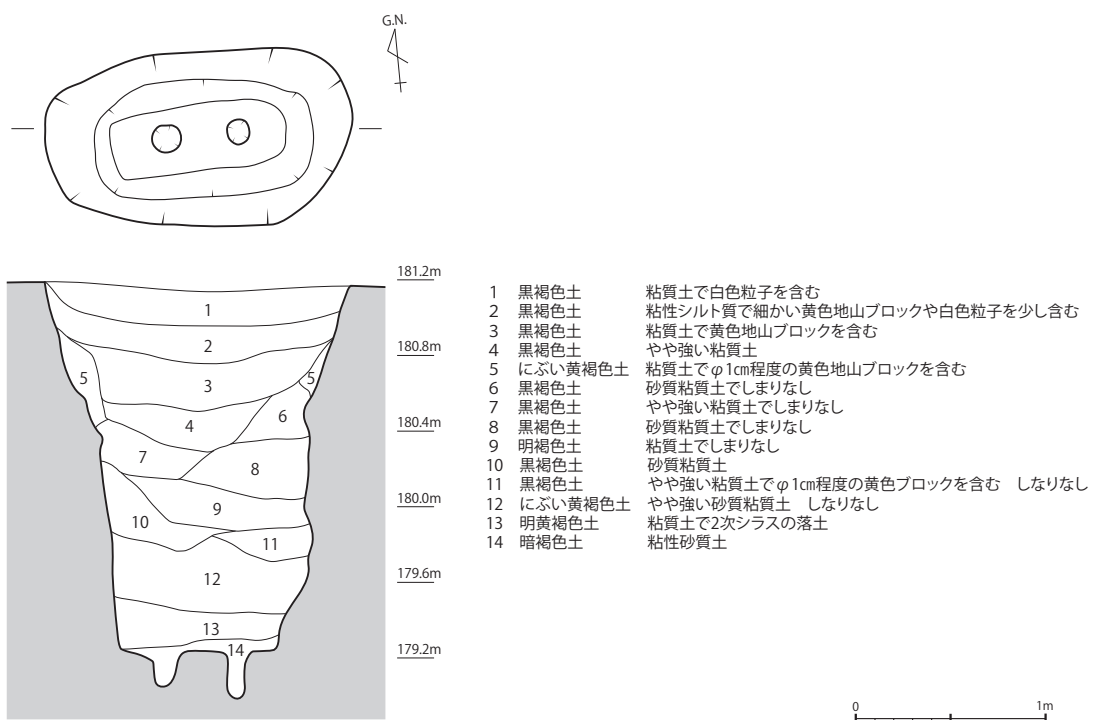
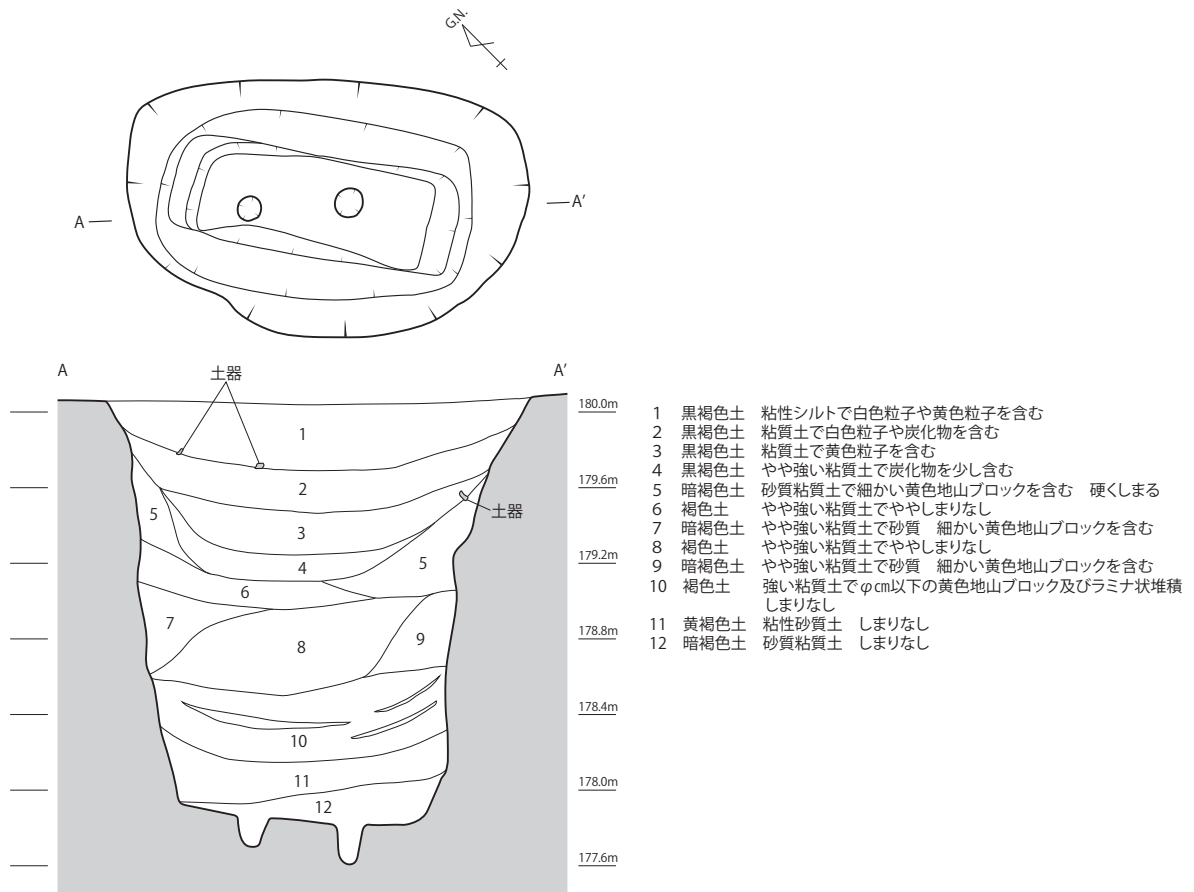
調査区北側のE2・F2Gr.に位置する。平面形は不整な楕円形で、長軸3.3m、短軸1.2mを測る。底面は不整な長方形となり、長軸1.5m、短軸0.6mを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、東側の掘り込みは段をつくり、断面形は逆台形状を呈する。検出面から底面までの深さは1.3mを測る。底面には長径0.1~0.2m、底面からの深さ0.1mの円形や楕円形の小穴が9箇所確認できる。また、東側の掘り込みは底面から一段深くなり、最深部は底面から深さ0.3mを測る。遺物は出土していない。

#### 6号陥し穴 (SS6、第64図)

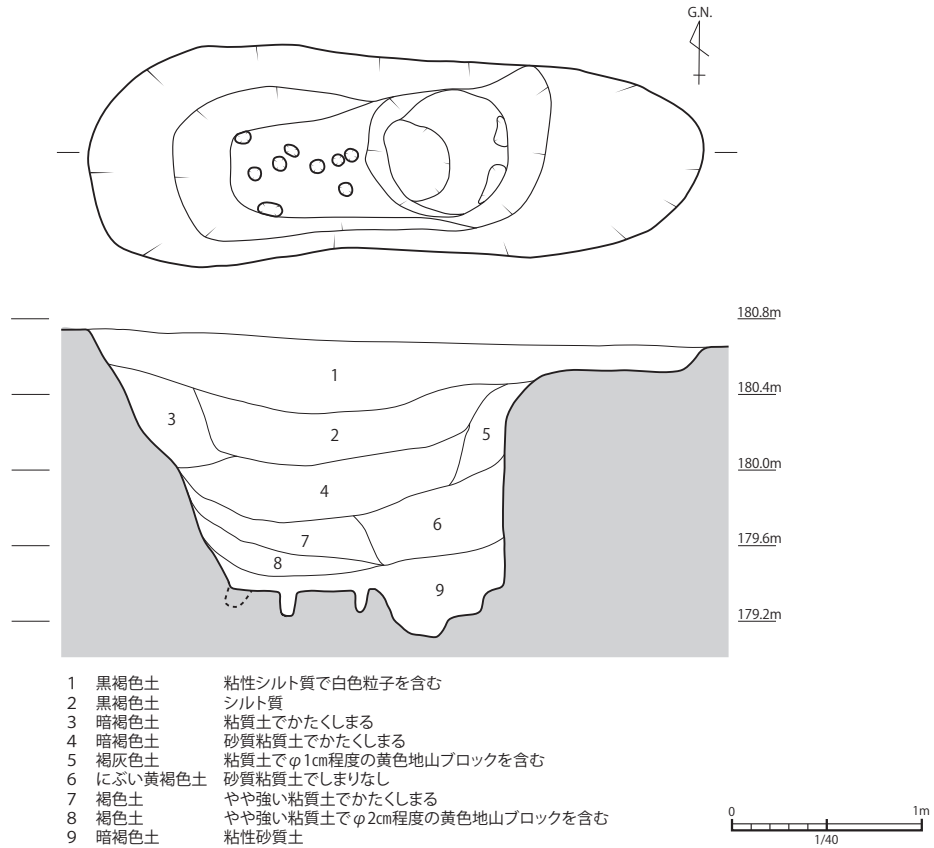
調査区南側のD6・E6Gr.に位置する。平面形は不整な隅丸三角形に見えるが、陥し穴本体はほかと同じく楕円形となる。北側に浅い段をつくることから、長軸2.1m、短軸1.8mを測る。底面は長方形となり、長軸1.3m、短軸0.6mを測る。北西・南東軸(A-A')は検出面付近の浅い掘り込みもあり壁の立ち上が



第61図 陥し穴実測図(1)



第62図 陥し穴実測図(2)



5号陥し穴(SS5)

### 第63図 陥し穴実測図(3)

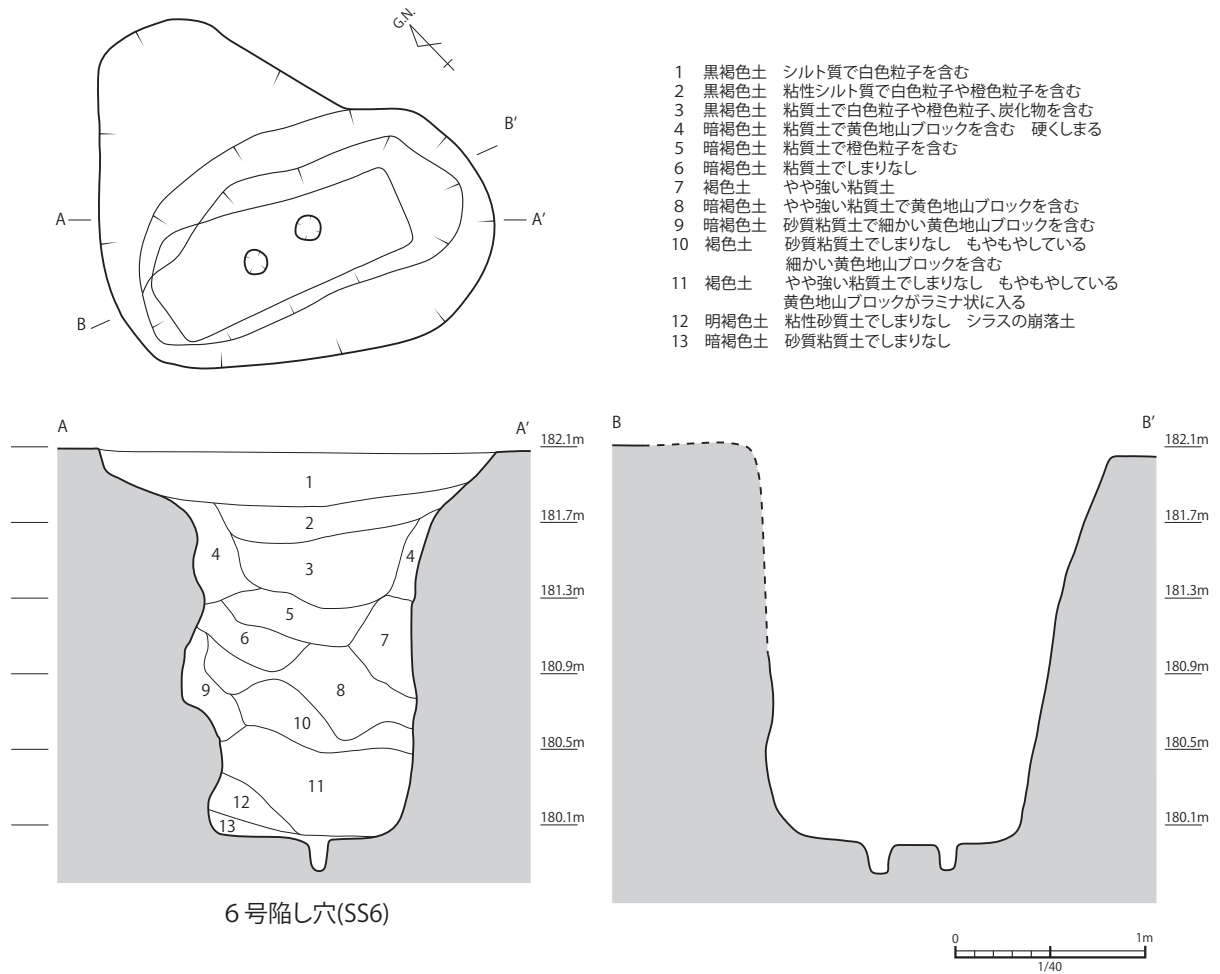
りは緩やかで、北西側(A)の壁は直線的ではなく屈曲部をもつ。一方、東西軸(B-B')の壁の立ち上がりは直立に近く、断面形は箱状を呈する。検出面から底面までの深さは2.1mを測る。底面には直径0.1m、底面からの深さ0.1~0.2mの小穴が2箇所確認できる。遺物は出土していない。

#### 7号陥し穴(SS7、第65図)

調査区南側のE7Gr.に位置する。平面形は楕円形で、長軸2.5m、短軸1.2mを測る。底面は不整な長方形となり、長軸1.3m、短軸0.4mを測る。壁の立ち上がりは急傾斜で、断面形は逆台形状を呈する。検出面から底面までの深さは2.0mを測る。底面には直径0.1~0.2m、底面からの深さ0.1mの小穴が2箇所確認できる。埋土から縄文土器深鉢(Ⅱ類、Ⅲ類、Ⅶ類 押型文)や黒曜石の剥片が出土した。

#### 8号陥し穴(SS8、第65図)

調査区中央のD4Gr.に位置する。61号土坑(SC61)が隣接する。平面形は不整な楕円形で、長軸1.6m、短軸1.0mを測る。底面は長方形となり、長軸0.9m、短軸0.3mを測る。壁の傾斜は角度が大きく、断面形は逆台形状を呈する。東側の壁の中位に小さなステップを設ける。検出面からの深さは2.0mを測る。底面には直径0.1~0.2m、底面からの深さ0.1mの小穴が2箇所確認できる。埋土から縄文土器深鉢(Ⅱ類)や黒曜石製の石鏃や剥片が出土し、そのうち縄文土器深鉢(Ⅱ類:114)と黒曜石製の石鏃(593)の2点を図化した。(第100・161図)



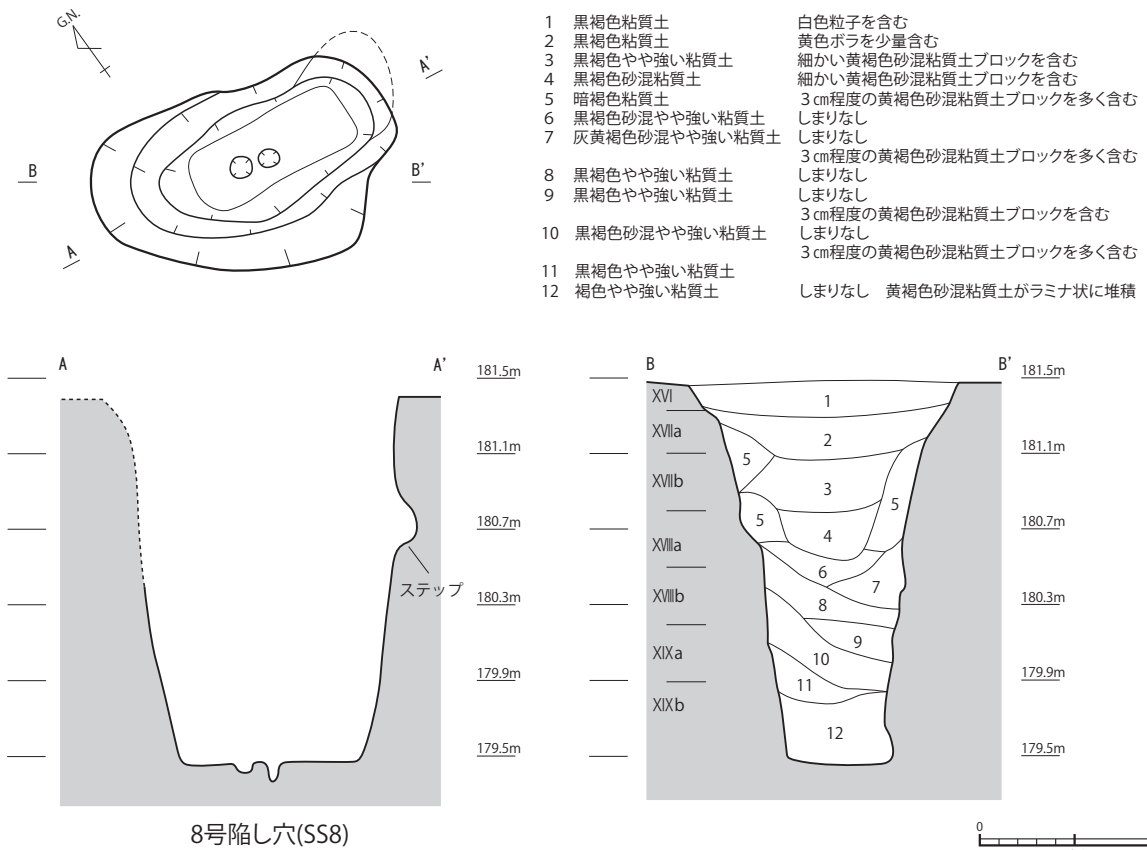
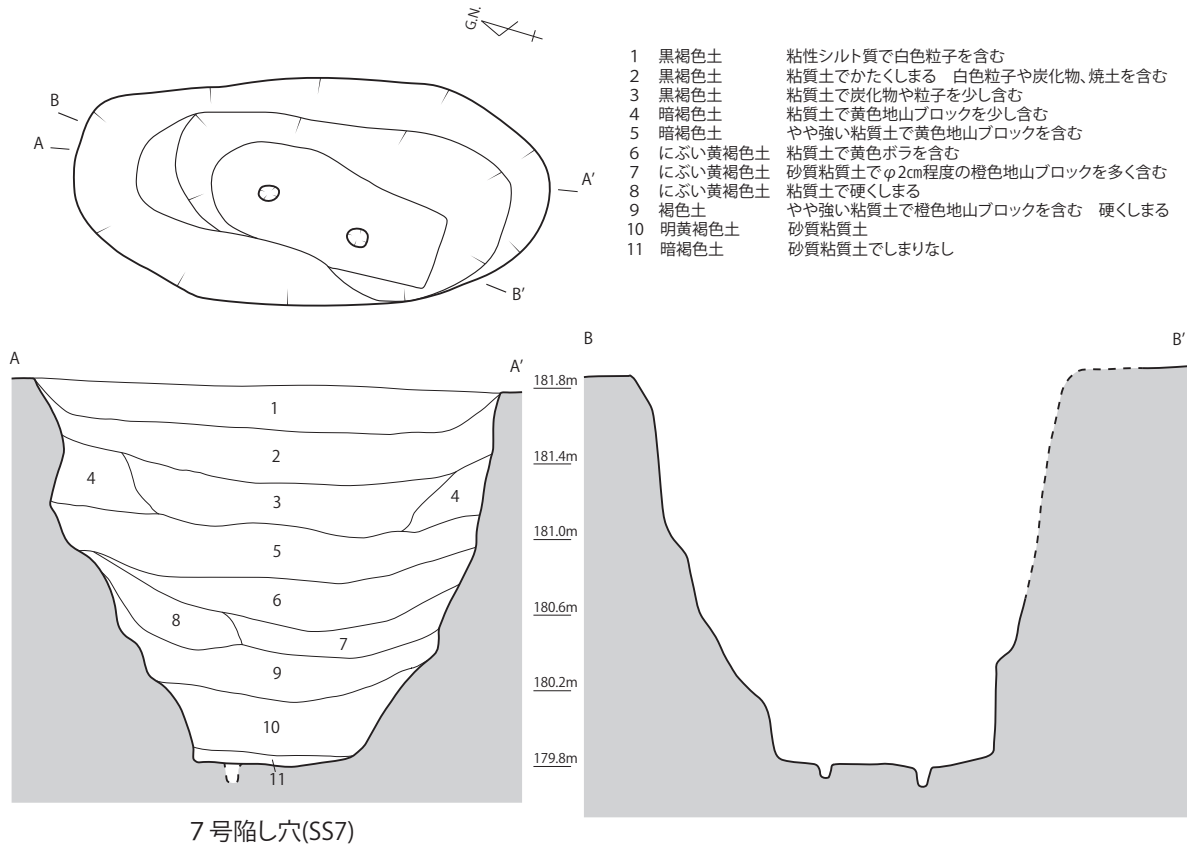
第64図 陥し穴実測図(4)

### (5) 炉穴

土坑の中で、一部に焼土を有する燃焼部をもち、向かい合う部分に空間（作業面）をもつものを炉穴とした。上平遺跡では第XIV層掘削時に7基の炉穴を検出した。ブリッジが残存し煙道と作業坑が確認できるもの（SP1・3・4）と、形態や埋土から炉穴と判断したもの（SP2・5・6・7）がある。また、燃焼部が単独のもの（SP1・2・4・5・6・7）と切り合いによる群をなすもの（SP3）とがある。

#### 1号炉穴（SP1、第66図）

調査区中央のD4Gr. に位置する。平面形は楕円形と円形からなる大小2つの堅坑が連結するタイプで、長軸2.9m、短軸1.2m、深さ0.7mを測る。南東部に位置する円形状の穴が煙道部と見られ、連結部分のブリッジがわずかに残存する。ブリッジの下位には焼土を有する燃焼部があり、床面に焼礫が残る。長軸（A-A'）の壁の立ち上がりは北西側（A）から緩やかな傾斜をつくり、南東側（A'）が深くなる。煙道部の壁の立ち上がりは直立に近い。検出面から燃焼部（6層）までの深さは0.5m程度で、燃焼部は焼土や炭化物を多く含み、硬くしまる。5層はブロック状に堆積していることから、ブリッジの崩落土と見られる。7層は非常に硬くしまるため作業面と考える。埋土内から縄文土器深鉢や黒曜石の剥片等が多数出土し、そのうち縄文土器深鉢（Ⅱ類：141、Ⅲ類：247、Ⅶ類：338/392/393/456）を図化した。（第102・112・127・132・139図）また、床面近くから縄文土器深鉢（Ⅶ類：409）が出土した。（134図）



第65図 陥し穴実測図(5)

## 2号炉穴 (SP2、第 67 図)

調査区北西側の C3Gr. に位置する。本体の平面形は東西軸 (B-B') に長軸をもつ楕円形で、南北方向に作業面をつくる。長軸 3.4m、短軸 3.0m、深さ 0.9m を測る。西側に焼土を有する燃焼部をもつ。ブリッジの崩落からか煙道部は確認できないが、4・5層がブリッジの崩落土の可能性はある。東西軸 (B-B') の壁の立ち上がりは、検出面付近に浅い掘り込みをもち、段をつくって直立に近い傾斜となる。西側 (B') の壁はオーバーハングする。検出面から燃焼部 (9層) までの深さは 0.8m 程度で、燃焼部は焼土や炭化物を多く含み、硬くしまる。

南北軸 (C-C') を見ると、南側 (C) の壁の立ち上がりは緩やかで、検出面からの深さ 0.5m 程度の掘り込みをもち、段をつくって検出面からの深さ 0.7m を測る深い掘り込みとなる。南北軸の床面に段があり、14層にブリッジの崩落土と見られるブロック状の堆積がある。このことから、南北軸に成形していた炉穴が崩壊等の理由により使えなくなったため、煙道としていた北側の深い掘り込みを利用して東西軸に炉穴を再構築した可能性がある。

燃焼部から採取した炭化材について樹種同定及び AMS 法による放射性炭素年代測定を実施した結果、サクラ属の炭化材であり、8410 ± 30 年 B P の測定値が得られた。(第 23・24 表試料 9 参照) また、1層から縄文土器深鉢 (Ⅱ類) や黒曜石の剥片が出土し、そのうち縄文土器深鉢 (Ⅱ類 : 131) を図化した。(第 101 図)

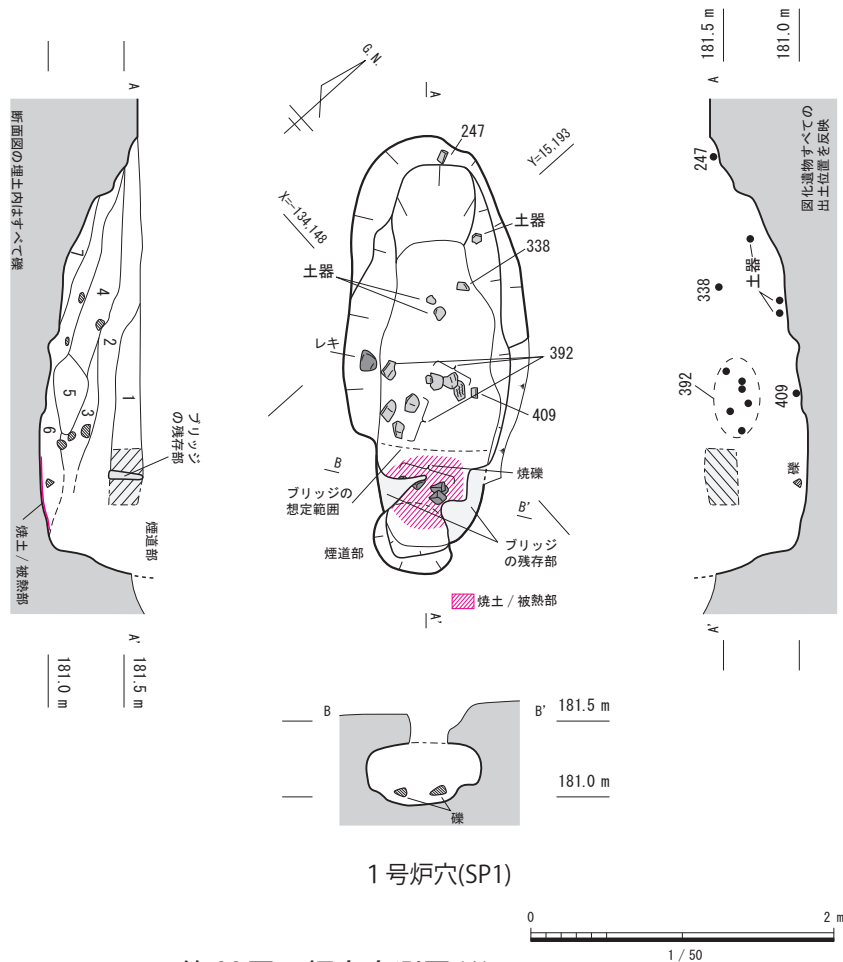
## 3号炉穴 (SP3、第 68 図)

調査区南側の E5・E6Gr. に位置する。北側と南側、西側に煙道部が張り出すプランで検出した。南西部にある浅い掘り込みの緩斜面は第Ⅳ層掘削時から確認することができたが、煙道部を含め大部分を第Ⅴ層掘削時に検出したため、縄文時代早期前半の遺構とした。全体として、長軸 6.1m、短軸 5.1m を測る。全ての煙道部の下位に焼土や燃焼部を有する。ブリッジの残存状況や埋土の堆積状況から、使用時期の古い順に、西側を第 1 煙道、北側を第 2 煙道、南側を第 3 煙道とした。第 1 煙道は西側に煙道部を、東側に作業面をもつ。煙道の焚口となる穴やブリッジは残っていないが、煙道部と見られる西側の掘り込みの壁面にブリッジの残存部が確認できる。煙道部の焚口と見られる位置の下位は深く掘り下げられている。煙道部の下位には焼土があり、焼土が円座状になっていることから、使用時に何かを据え置いた可能性がある。検出面から燃焼部 (24層) までの深さは 1.1m を測る。燃焼部の上位に燃焼灰が厚く堆積し、その上面に焼礫が残る。燃焼灰が約 0.3m 程度堆積していることから長期間使用していた可能性がある。第 2 煙道は北側に煙道部を、南側に作業面をもつ。煙道部の焚口となる穴は直径 0.6m の円形プランで、長さ 0.6m 程度のブリッジが残存する。煙道部の掘り込みは南側に向かって緩やかに傾斜しスロープをつくる。ブリッジの南側に使用時に陥没したと見られる小穴を有する。煙道部の焚口の下位は深く掘り下げられている。検出面から燃焼部 (18層) までの深さは 0.8m を測る。燃焼部の上位に燃焼灰が約 0.1m 堆積する。第 3 煙道は、南側に煙道部を、北側に作業面をもつ。煙道部の焚口となる穴は長軸 0.2m の隅丸長方形のプランで、長さ 0.2m 程度のブリッジが残存する。焚口の壁の立ち上がりは直立に近く、下位は張り出して平坦な床面を構築する。検出面から燃焼部 (16層) までの深さは 0.8m を測る。燃焼部の上位には燃焼灰 (15層) が約 0.1m 程度堆積する。

第 2 煙道の燃焼部から採取した炭化材について樹種同定及び AMS 法による放射性炭素年代測定を実施した結果、コナラ属コナラ節の炭化材であり、8170 ± 30 年 B P の測定値が得られた。(第 23・24 表



- 1 灰黄褐色シルト
- 2 黒褐色粘質土 2cm以下の炭化物および白色粒子を含む
- 3 暗褐色粘質土 5cm程度の細礫を含む
- 4 黒褐色粘質土 しまりなし
- 5 黒褐色粘質土 (ブリッジの崩落土) 硬くしまる
- 6 黒褐色粘質土 (作業面) 非常に硬くしまる
- 7 黒褐色粘質土 (ブリッジの理想範囲)



1号炉穴(SP1)

第66図 炉穴実測図(1)

試料 10 参照)

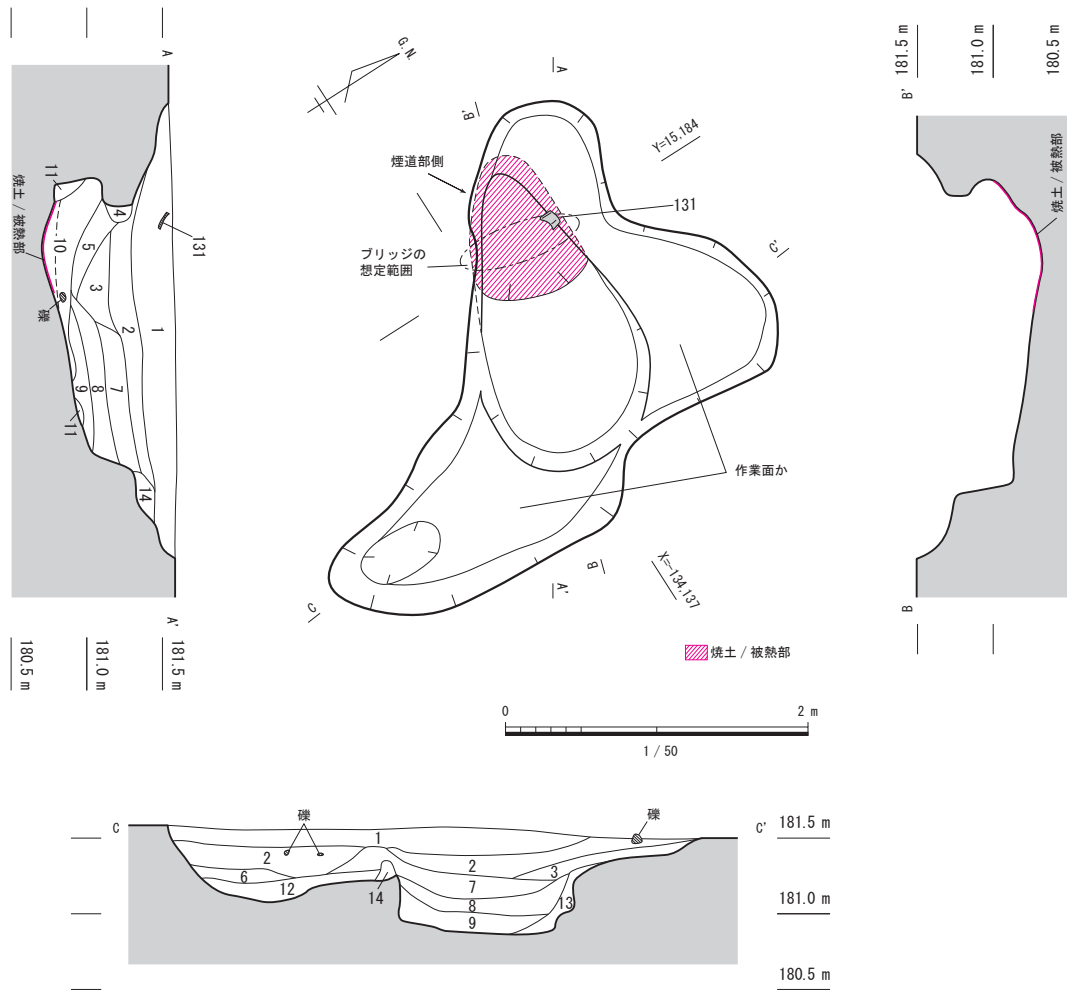
埋土内から縄文土器深鉢 (I類、II類、III類、VII類押型文、VII類変形捺糸文、VIII類) や黒曜石製の石鏃や剥片等が多数出土し、そのうち縄文土器深鉢 (II類 : 111、VII類 : 396/447、VIII類 : 481) や黒曜石製の石鏃 (677) の5点を図化した。(第100・132・138・147・164図)

#### 4号炉穴 (SP4、第69図)

調査区北側の D3Gr. に位置する。当初、北側にある不整な円形プランの土坑としていたが、検出面から深さ 1.5mの底面に焼土が認められた。焼土は南側に続いていることから、精査を行ったところ焚口と見られる小穴を含む長軸 2.1mの楕円形の土坑を検出したため、南側に煙道を、北側に作業面をもつ炉穴とした。南北軸 (A-A') において、北側 (A') の壁の立ち上がりは急な傾斜で下位に段をつくる。南側 (A) は比較的緩やかな傾斜をつくながら、平坦な床面となる。煙道部の焚口は長径 1.0mの楕円形を呈し、北側に薄い土壁のブリッジを有する。焼土を含む燃焼部 (10層) は煙道部の焚口の下位に位置し、検出面から燃焼部までの深さは 1.5mを測る。埋土内から縄文土器深鉢 (II類) が出土した。

#### 5号炉穴 (SP5、第70図)

調査区西側の C4・D4Gr. に位置する。平面形は不整な楕円形で、長軸 2.0m、短軸 1.0m、深さ 0.3mを測る。煙道は確認できないが、南北軸 (A-A') の壁面にブリッジ状のブロックが残存し、その床面に焼土を有する燃焼部が見られることから、西側に煙道を、東側に作業面をもつ炉穴と判断した。東西



- |    |                          |                                 |
|----|--------------------------|---------------------------------|
| 1  | 黒色粘質土                    | 2 cm以下の炭化物および白色粒子を含む            |
| 2  | 黒褐色粘質土                   | 硬くしまる 2 cm程度の炭化物および5 cm程度の細礫を含む |
| 3  | 黒褐色粘質土                   |                                 |
| 4  | 黒褐色粘質土                   | 硬くしまる 2 cm程度の黄褐色砂混粘質土ブロックを含む    |
| 5  | 灰黄褐色砂混粘質土〔ブリッジの崩落土〕      | 硬くしまる 2 cm程度の黄褐色砂混粘質土ブロックを含む    |
| 6  | 黒褐色強粘質土                  |                                 |
| 7  | 暗褐色粘質土                   | 全体的に赤味を帯びて、硬くしまる 炭化物・焼土を多く含む    |
| 8  | 黒褐色粘質土                   | 炭化物・焼土を多く含む                     |
| 9  | 黒褐色強粘質土                  | 硬くしまる 炭化物・焼土を少量含む               |
| 10 | 暗褐色強粘質土                  | 下層ほど硬くしまる 炭化物・焼土を多く含む           |
| 11 | 暗褐色砂混粘質土                 | 硬くしまる                           |
| 12 | 黒褐色強粘質土〔作業面か〕            | 硬くしまる                           |
| 13 | 4層と同じ〔壁面の崩落土〕            |                                 |
| 14 | 4層と同じ〔最初の掘削時に崩落したブリッジか？〕 |                                 |

2号炉穴(SP2)

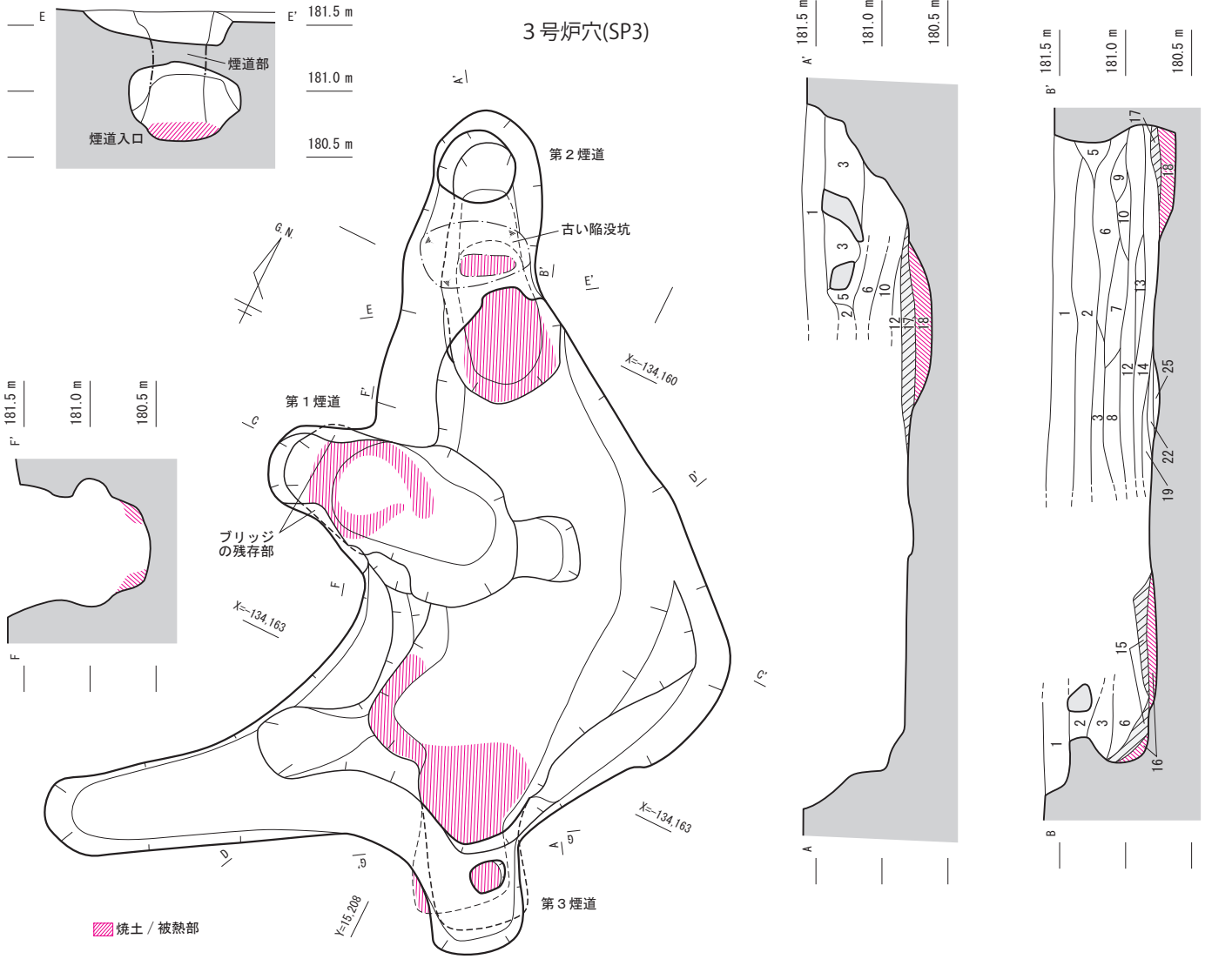
第67図 炉穴実測図(2)

軸の壁の立ち上がりは比較的緩やかで、床面は平坦でなくわずかな段を有する。埋土内には炭化物を多く含む。遺物は出土していない。

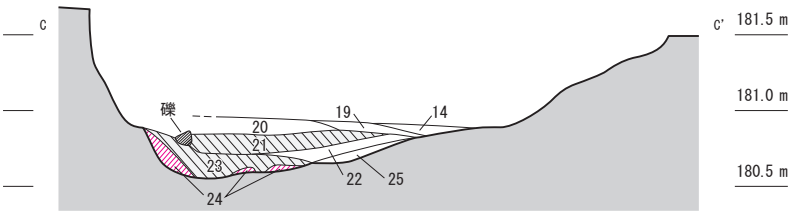
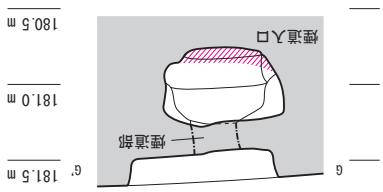
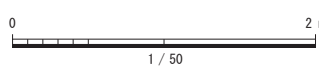
6号炉穴 (SP6、第70図)

調査区南側のD5・D6Gr. に位置する。平面形は不整な隅丸長方形で、長軸2.6m、短軸1.4m、深さ0.3mを測る。煙道やブリッジは残存していないが、床面に焼土のまとまりが見られ、埋土内に炭化物を多く含むことから炉穴と判断した。南北軸の壁の立ち上がりは比較的緩やかで、床面は平坦でなく、南側の掘り込みが深くなる。この掘り込みや燃焼部とされる焼土のまとまりの位置から、南側に煙道を、北

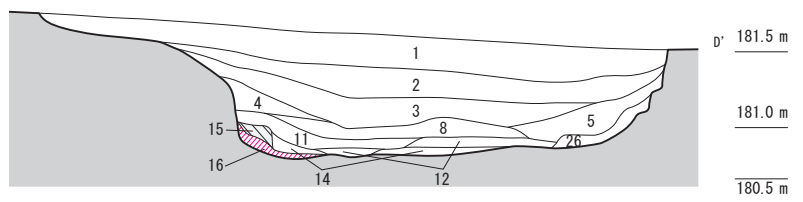
### 3号炉穴(SP3)



焼土 / 被熱部



燃烧灰の堆積層

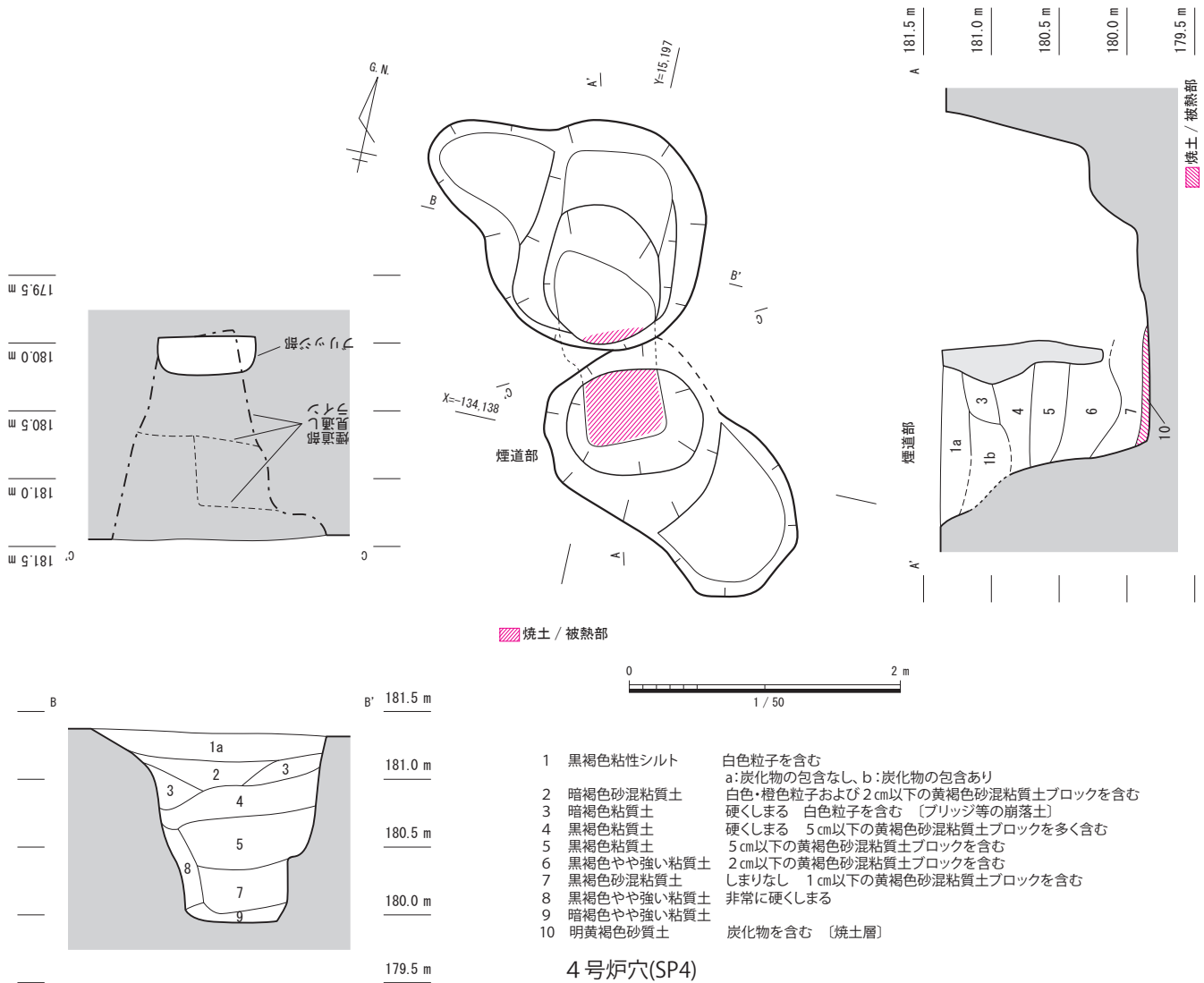


- 1 黒色粘性シルト 白色粒子を含む
- 2 黒褐色粘質土 白色粒子を含む
- 3 黒褐色粘質土 しまりあり
- 4 黒褐色粘質土 黄色粒子および5cm程度の褐色粘質土ブロックを少量含む
- 5 黒褐色やや強い粘質土 しまりあり 3cm以下の褐色粘質土ブロックを含む
- 6 黒褐色やや強い粘質土 非常に硬くしまる
- 7 黒褐色粘質土 1cm程度の黄褐色砂粘質土ブロックを含む
- 8 黒褐色砂粘質土 全体的に赤みを帯びる 炭化物・焼土を含む
- 9 黒褐色粘質土 炭化物・焼土を少量含む
- 10 黒褐色粘質土 硬くしまる やや赤みを帯びる
- 11 黒褐色やや強い粘質土 5cm程度の褐色粘質土ブロックを含む
- 12 黒褐色砂粘質土 黄褐色砂質土がラミナ状に堆積
- 13 黒褐色粘質土 硬くしまる 5cm程度の黄褐色砂質土ブロックを含む
- 14 黒褐色強粘質土 硬くしまる 炭化物を少量含む
- 15 暗褐色強粘質土(作業時の堆積) 硬くしまる 炭化物・焼土を多く含む
- 16 赤褐色粘性砂質土(燃烧灰の堆積層) 非常に硬くしまる 炭化物を多く含む

- 使第2煙道 {
  - 17 15層と同じ
  - 18 焼土塊
  - 19 にぶい黄褐色粘質土(作業時の堆積) しまりあり 黄褐色砂質土がラミナ状に堆積
  - 20 黒褐色やや強い粘質土(作業時の堆積) 硬くしまる
  - 21 黒色やや強い粘質土(燃烧灰の堆積層) 硬くしまる 炭化物を多く含む
  - 22 にぶい黄褐色粘質土(作業時の堆積) 硬くしまる
- 使第1煙道 {
  - 23 15層と同じ
  - 24 焼土塊
  - 25 褐色粘質土(作業時の堆積) 5cm程度の黄褐色砂質土ブロックを多く含む
  - 26 暗褐色やや強い粘質土 硬くしまる 1cm以下の黄褐色砂質土ブロックを含む

使用時  
第3煙道

第68図 炉穴実測図(3)

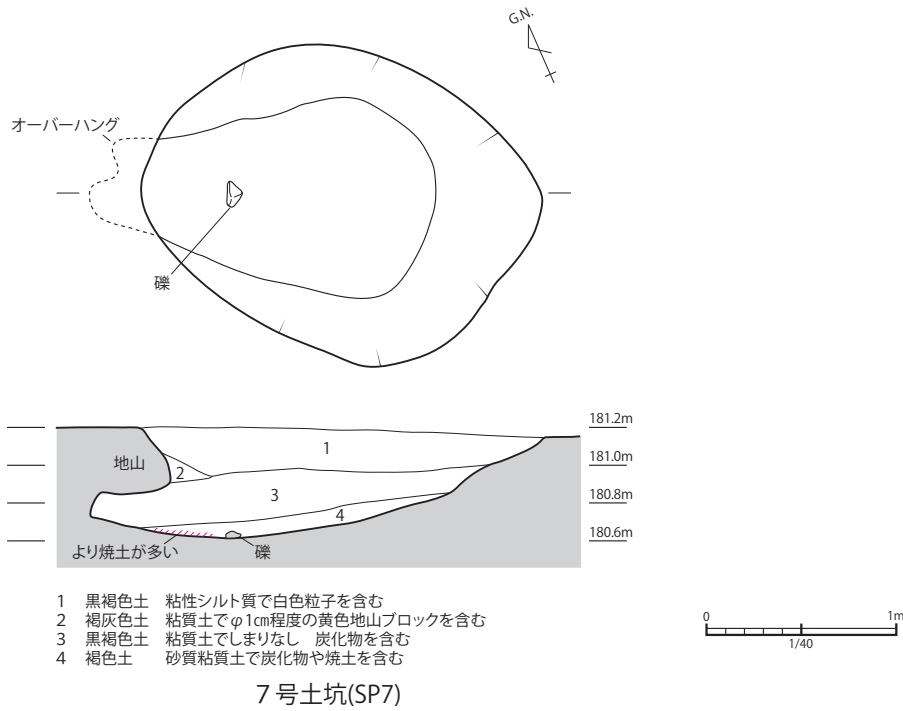
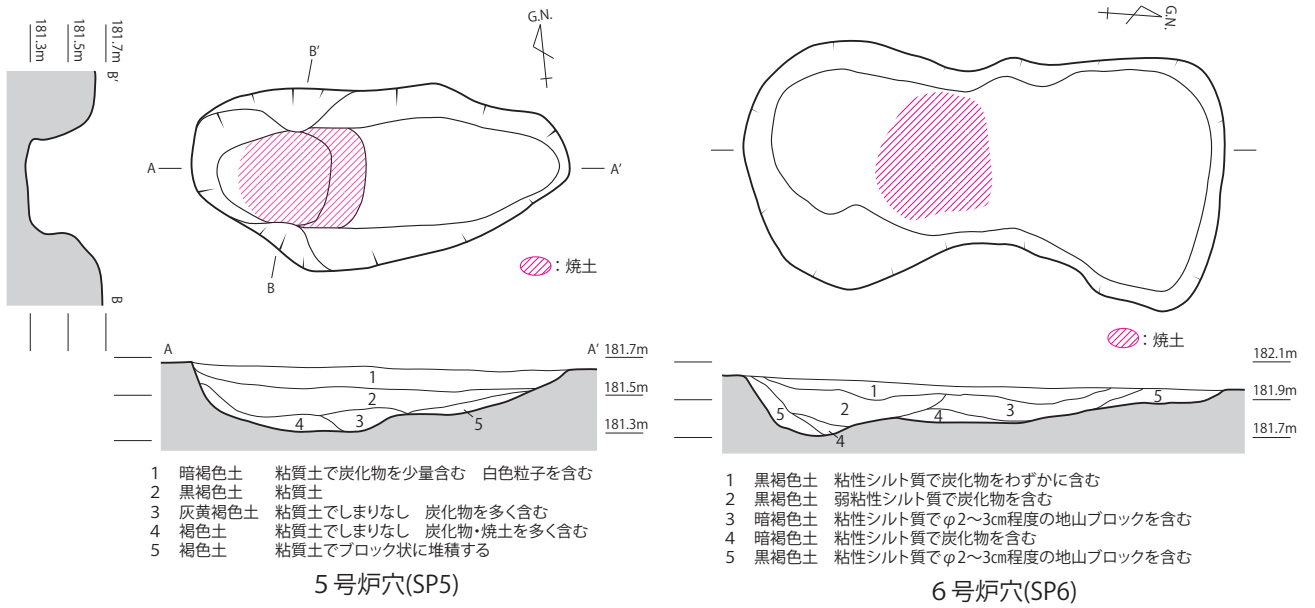


第 69 図 炉穴実測図(4)

側に作業面をもつ炉穴と考えられる。遺物は出土していない。

#### 7号炉穴 (SP7、第 70 図)

調査区北側の E3Gr. に位置する。平面形は不整な楕円形で、長軸 2.1m、短軸 1.7m、深さ 0.6mを測る。北西側の壁面が内側に張り出し、床面に焼土が見られる。形態に加え、埋土内に焼土や炭化物が多いことから、炉穴と判断した。煙道は確認できなかった。張り出した部分の上位が地山のブリッジで、煙道部が崩落した可能性がある。また、煙道部が確認されないことから炉穴の作りかけの可能性も考えられるが、焼土や炭化物を有することから、炉穴として機能した形跡が残る。遺物は出土していない。



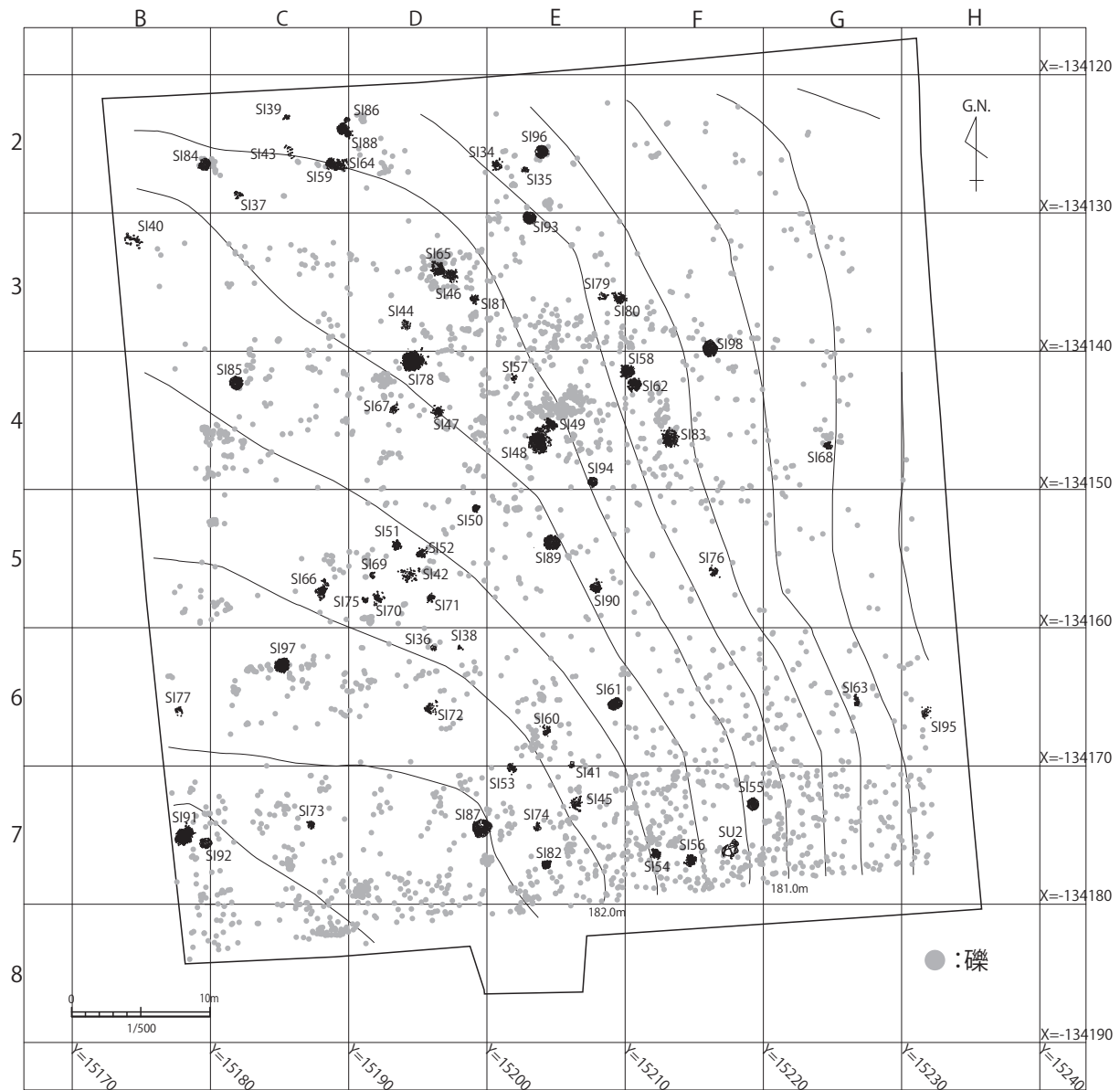
第70図 炉穴実測図(5)

(6) 配石遺構・集石遺構

第XV層掘削時に出土した散礫を平面分布図(第71図)に示した。平面分布図には、およそ長径5cm以上の礫を中心に取り上げ位置を示した。第XV層で取り上げた散礫は3,281点となる。平面分布図を見ると、散礫は調査区全体に分布するが、E4・F4Gr. 周辺の調査区中央とB7～G7Gr. にかけての調査区南側に集中する箇所が見られる。

第7節同様、散礫の中で比較的大きい礫を意図的に配置した可能性のあるものを配石遺構とした(SU2)。また、周辺より礫が集中し、ある程度まとまりをなす箇所や、散礫以外の場所で礫が密に集中する箇所を集石遺構とした(SI34～98)。平面分布図を見ると、散礫が密集する箇所の周辺に配石遺構や集石遺構の多くが分布している。

集石遺構の分類については、第7節を参照されたい。



第71図 第XV層で検出した縄文時代早期の散礫及び配石遺構・集石遺構分布図

## 【配石遺構】(SU2)

### 2号配石遺構 (SU2、第72図)

調査区南東側のF7Gr.に位置する。周辺には55号集石遺構(SI55)や56号集石遺構(SI56)がある。1.4×1.2mの範囲に大型の礫が集中している。明確な掘り込みは見られない。構成礫は全て砂岩で、長径72cmと長径59cmの超大型の礫を中心に、長径20～40cmの大型の礫や長径10cm前後の中型の礫で形成される。被熱した礫も一部見られるが、全体的に被熱した形跡はない。構成礫は台石や磨石を転用したものが多く、その中から台石(801/802)と磨石(778)の3点を図化した。(第174・178・179図)

### 【集石遺構：I a類】(SI34～41)

本類は集石遺構を構成する礫が集中せず散漫に広がりのあるもので、掘り込みを伴わない一群である。

### 34号集石遺構 (SI34、第73図)

調査区北側のE2Gr.に位置する。1.0×0.8mの範囲に礫がまばらに広がる。構成礫は長径10cm未満の小型の礫を主体とする。集石遺構とした範囲内から縄文土器深鉢(Ⅲ類)が出土した。

### 35号集石遺構 (SI35、第73図)

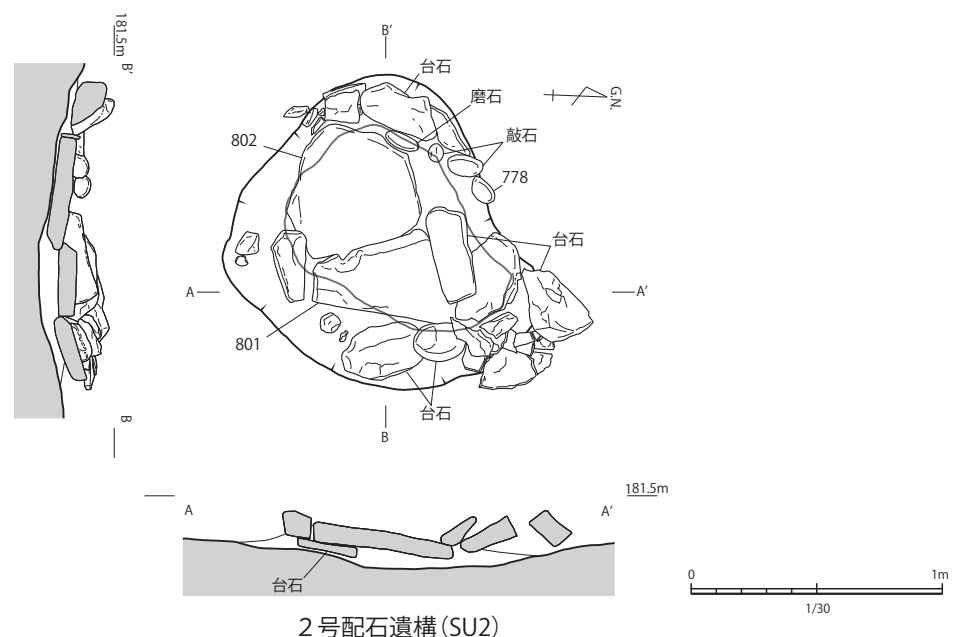
調査区北側のE2Gr.に位置する。0.5×0.5mの範囲に礫がまばらに広がる。構成礫は長径10cm未満の小型の礫を主体とする。

### 36号集石遺構 (SI36、第73図)

調査区南側のD6Gr.に位置する。0.5×0.4mの範囲に礫がまばらに広がる。構成礫は長径20cm程度の中型の礫と長径10cm未満の小型の礫で形成される。被熱を受けた形跡はない。長径20cm程度の中型の礫は台石を転用した可能性がある。

### 37号集石遺構 (SI37、第73図)

調査区北西側のC2Gr.に位置する。0.7×0.6mの範囲に礫がまばらに広がる。構成礫は長径10cm未



第72図 配石遺構実測図(2)

満の小型の礫を主体とする。被熱のため赤化した礫が見られた。集石遺構とした範囲内から黒曜石の剥片が出土した。

#### 38号集石遺構 (SI38、第73図)

調査区南側のD6Gr.に位置する。0.5×0.3mの範囲に礫がまばらに広がる。構成礫は長径10cm未満の小型の礫を主体とする。

#### 39号集石遺構 (SI39、第73図)

調査区北西側のC2Gr.に位置する。0.6×0.4mの範囲に礫がまばらに広がる。構成礫は長径10cm未満の小型の礫を主体とする。

#### 40号集石遺構 (SI40、第73図)

調査区北西側のB3Gr.に位置する。1.1×0.7mの範囲に礫がまばらに広がる。構成礫は長径10～20cm程度の中型の礫を主体とする。被熱のため赤化した礫が見られる。一部磨石や敲石を転用したものがあり、そのうち磨石(780)の1点を図化した。(第174図)

#### 41号集石遺構 (SI41、第73図)

調査区南側のE6・E7Gr.に位置する。0.5×0.5mの範囲に礫が集中する。構成礫は長径20cm以上の大型の礫と10～20cm程度の中型の礫で形成される。一部、台石を転用したものがあある。掘り込みを伴わないためI a類としたが、礫が集中することから配石遺構等の可能性がある。

#### 【集石遺構：I b類】(SI42～44)

本類は集石遺構を構成する礫が集中せず散漫に広がるもので、掘り込みを伴う一群である。

#### 42号集石遺構 (SI42、第74図)

調査区中央のD5Gr.に位置する。1.6×1.3mの範囲に礫がまばらに広がる。礫は掘り込みの上層に位置している。下部には深さ0.1mの掘り込みを伴い、断面形は皿状を呈する。構成礫は長径10cm未満の小型の礫を主体とする。

#### 43号集石遺構 (SI43、第74図)

調査区北西側のC2Gr.に位置する。1.1×0.6mの範囲に礫がまばらに広がる。下部には深0.1mの掘り込みを伴い、断面形は皿状を呈する。構成礫は長径20cm程度の中型の礫と長径10cm未満の小型の礫で形成される。埋土内から縄文土器深鉢(VII類：441)が出土した。(第138図)

#### 44号集石遺構 (SI44、第74図)

調査区北側のD3Gr.に位置する。0.8×0.8mの範囲に礫がまばらに広がる。下部には深さ0.2mの掘り込みを伴い、断面形は浅いすり鉢状を呈する。構成礫は長径20cm程度の中型の礫と長径5cm前後の小片からなる。埋土内に炭化物を多く含み、礫は被熱しているものが多い。

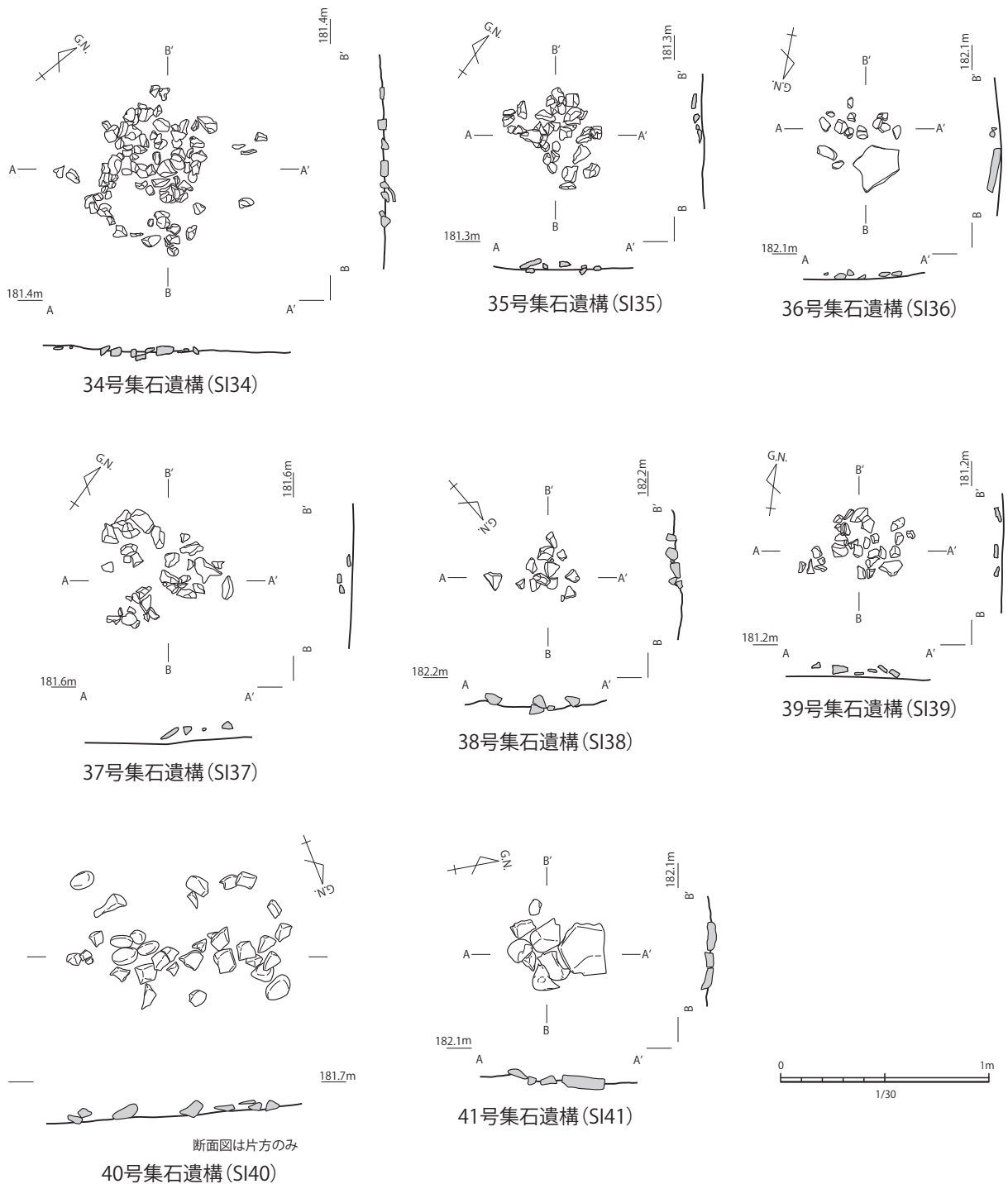
#### 【集石遺構：II a類】(SI45～65)

本類は集石遺構を構成する礫が重層的に集中し掘り込みを伴うが、配石は見られない一群である。

#### 45号集石遺構 (SI45、第74図)

調査区南側のE7Gr.に位置する。1.2×1.0mの範囲に礫が比較的集中する。下部には深さ0.1mの掘り込みを伴い、断面形は皿状を呈する。構成礫は10～20cm程度の中型の礫で形成される。埋土内から縄文土器深鉢(II類)が出土した。

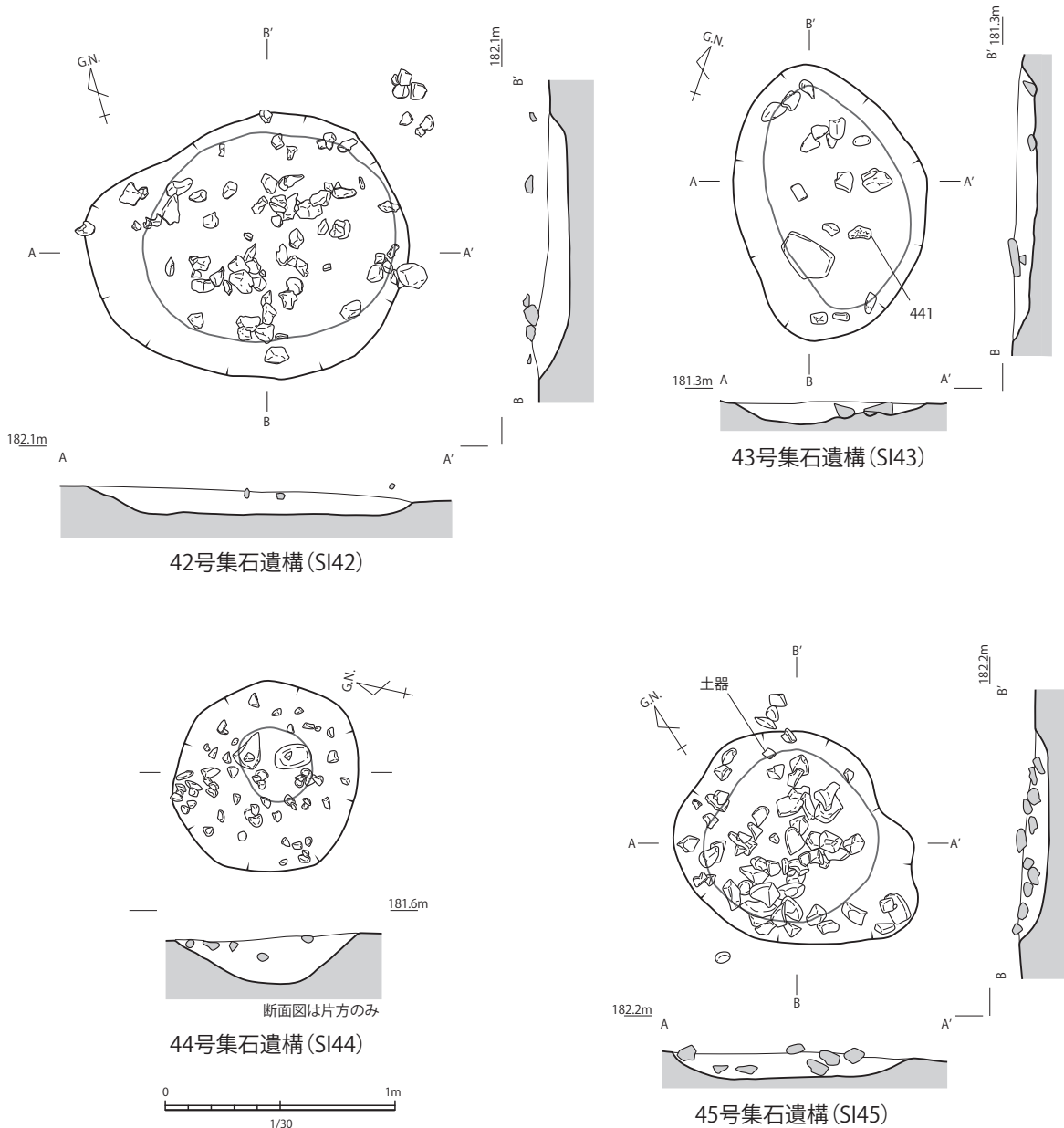




第73図 集石遺構実測図(9)

46号集石遺構 (SI46、第75図)

調査区北側のD3Gr.に位置する。北西側に65号集石遺構(SI65)が隣接する。1.0×1.0mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.2mの掘り込みを伴い、断面形は皿状を呈する。北西部は上層の攪乱により掘り込みの範囲が不明瞭となる。構成礫は長径10～20cmの中型の礫や長径10cm未満の小型の礫から形成される。被熱のため赤化した礫が多い。掘り込みの中央に長径20cm程度の礫が位置するためⅢa類の可能性はあるが、掘り込みが浅く、底石と見られる礫とほかの礫との出土高にあまり差が見られ



第74図 集石遺構実測図(10)

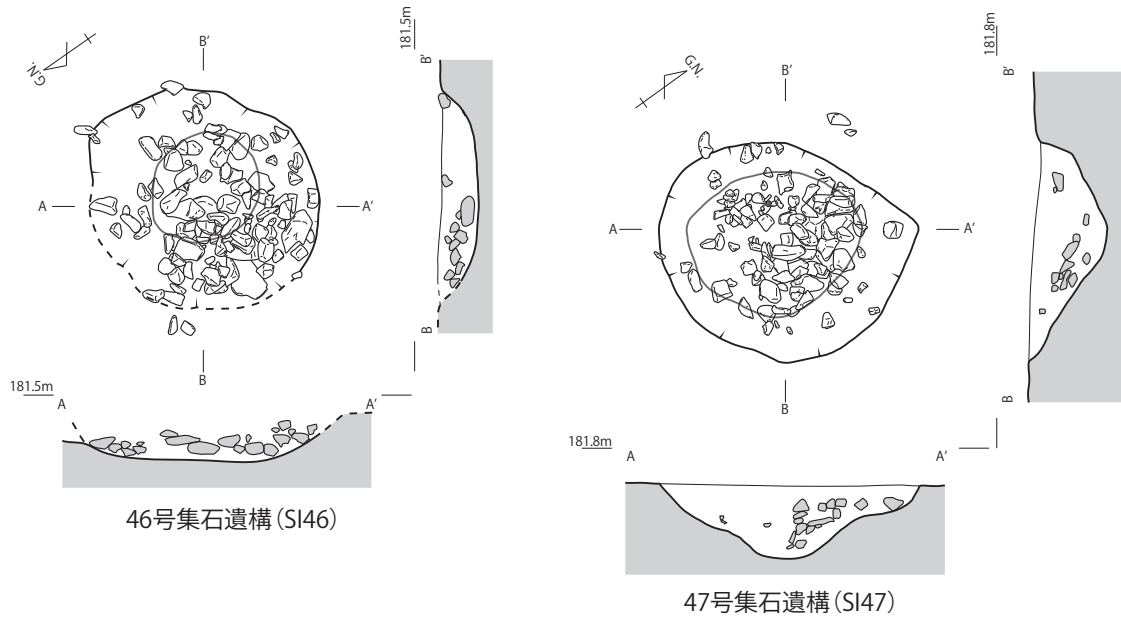
ないためⅡ a類とした。埋土内から黒曜石やチャート、ガラス質安山岩の剥片が出土した。

**47号集石遺構 (SI47、第75図)**

調査区中央のD4Gr.に位置する。1.0×0.9mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.3mの掘り込みを伴い、断面形はすり鉢状を呈する。構成礫は長径10cm未満の小型の礫を主体とする。礫の密度は東側が高く、西側の礫は小片ばかりで数もまばらなため、礫が持ち出された可能性がある。埋土に炭化物を含み、縄文土器深鉢(Ⅲ類)が出土した。

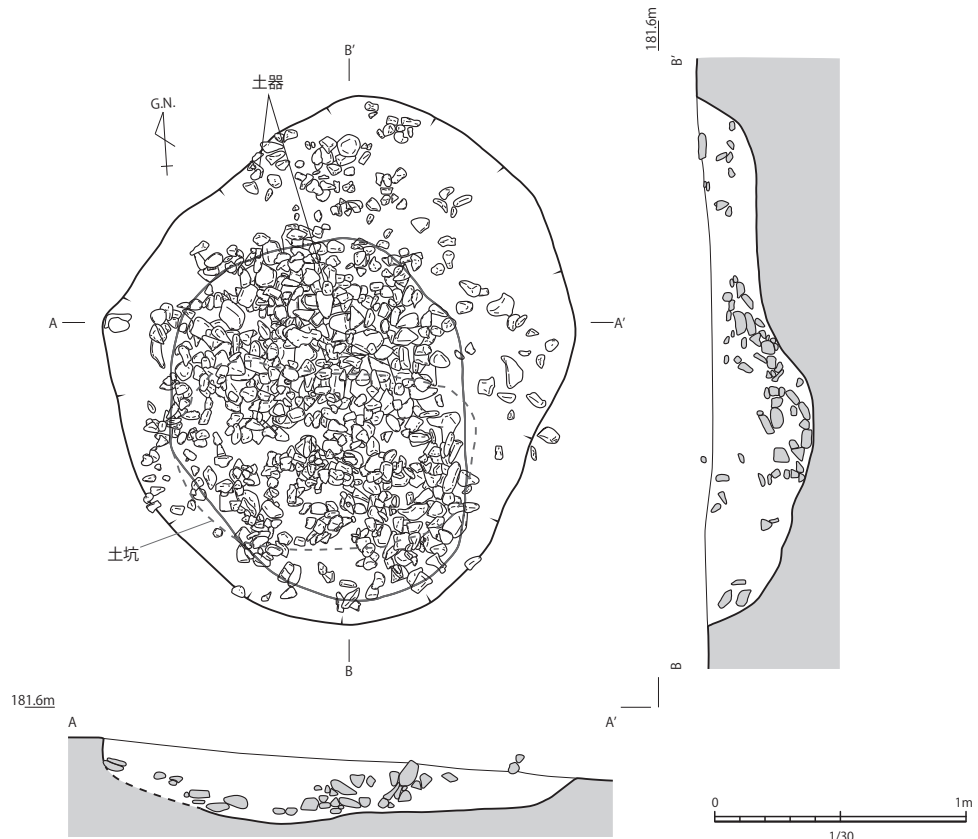
**48号集石遺構 (SI48、第75図)**

調査区中央のE4Gr.に位置する。北東側に49号集石遺構(SI49)が隣接する。2.1×1.9mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.4mの掘り込みを伴い、断面形は皿状を基本とする。床面は平坦でなく掘り込みの南側が深くなる。構成礫は長径10cm程度の小型の礫を主体とするが、長径5cmに満たない小



46号集石遺構 (SI46)

47号集石遺構 (SI47)



48号集石遺構 (SI48)

第75図 集石遺構実測図(11)

片の礫も多い。埋土に炭化物を含み、埋土内から縄文土器深鉢(Ⅲ類、Ⅴ類、Ⅶ類押型文)や黒曜石の剥片が出土した。

49号集石遺構 (SI49、第76図)

調査区中央のE4Gr.に位置する。1.2×1.1mの範囲に礫が集中する。東西軸にトレンチによる削平が

行われ、南西側を48号集石遺構(SI48)に攪乱されるため不明瞭な部分がある。下部には0.3mの掘り込みを伴い、断面形は皿状を呈するが床面は平坦ではない。構成礫は長径5cm未満の小片の礫を主体とし、長径10cm程度の小型の礫も見られる。埋土に炭化物を多く含み、掘り込みの中心の床面に炭化材が集中する。埋土内から縄文土器深鉢(Ⅲ類)や黒曜石の剥片が出土した。

#### 50号集石遺構(SI50、第76図)

調査区中央のD5Gr.に位置する。0.6×0.5mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.2mの掘り込みを伴い、断面形は碗状を呈する。構成礫は10cm程度の小型の礫を主体とする。埋土内から縄文土器深鉢(Ⅱ類、Ⅶ類押型文)や黒曜石の剥片等が出土し、そのうち黒曜石製の石鏃(614)を図化した。(第162図)

#### 51号集石遺構(SI51、第76図)

調査区中央のD5Gr.に位置する。0.8×0.8mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.3mの掘り込みを伴い、断面形は碗状を呈する。構成礫は10cm未満の小型の礫を主体とする。掘り込みの中央に長径20cm程度の中型の礫が位置するためⅢa類の可能性はあるが、一番下に位置する底石ではないためⅡa類とした。中型の礫の下層に炭化物を多く含む。出土した炭化材について樹種同定及びAMS法による放射性炭素年代測定を実施した結果、樹種はコナラ属コナラ節であり、8250±30年BPの測定値が得られた。(第23・24表試料18参照)

#### 52号集石遺構(SI52、第76図)

調査区中央のD5Gr.に位置する。0.9×0.8mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.2mの掘り込みを伴い、断面形は皿状を呈する。構成礫は長径20cm程度の中型の礫と長径10cm未満の小型の礫から形成される。被熱のため赤化した礫が多い。埋土に炭化物を含む。

#### 53号集石遺構(SI53、第76図)

調査区南側のE7Gr.に位置する。0.8×0.6mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.2mの掘り込みを伴い、断面形は皿状を呈する。構成礫は長径10cm未満の小型の礫を主体とする。被熱のため赤化した礫が多い。埋土に炭化物を含む。

#### 54号集石遺構(SI54、第76図)

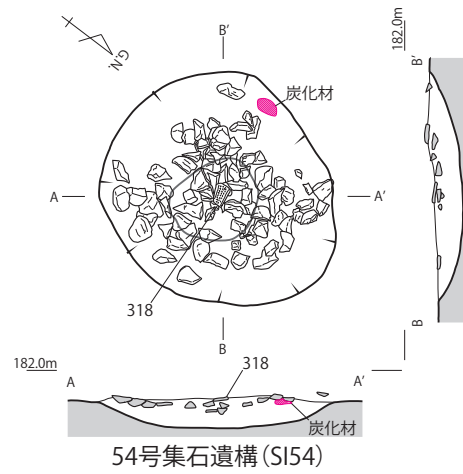
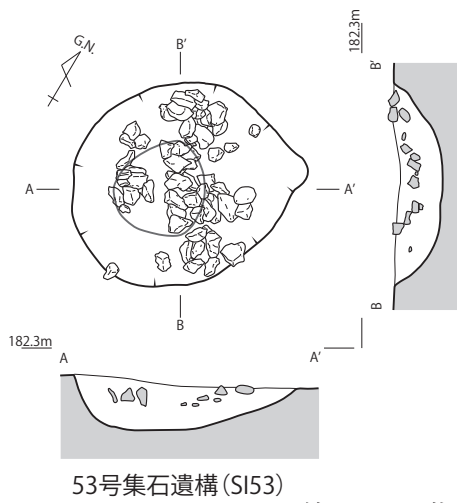
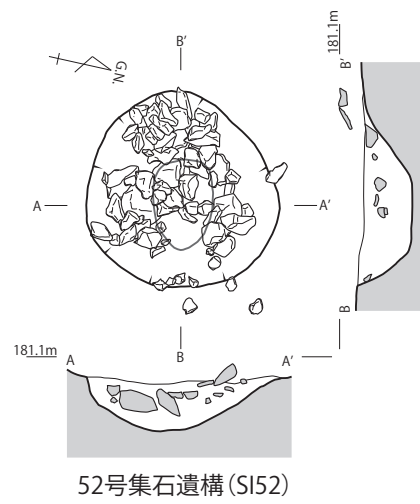
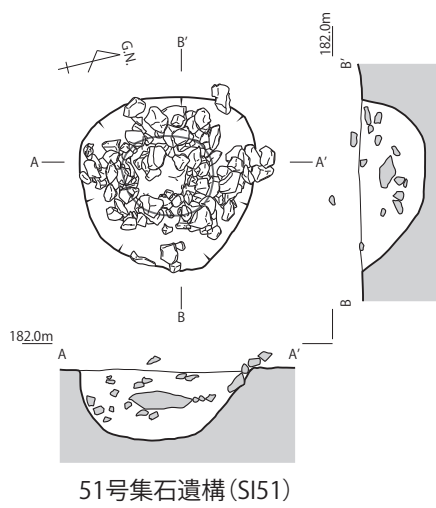
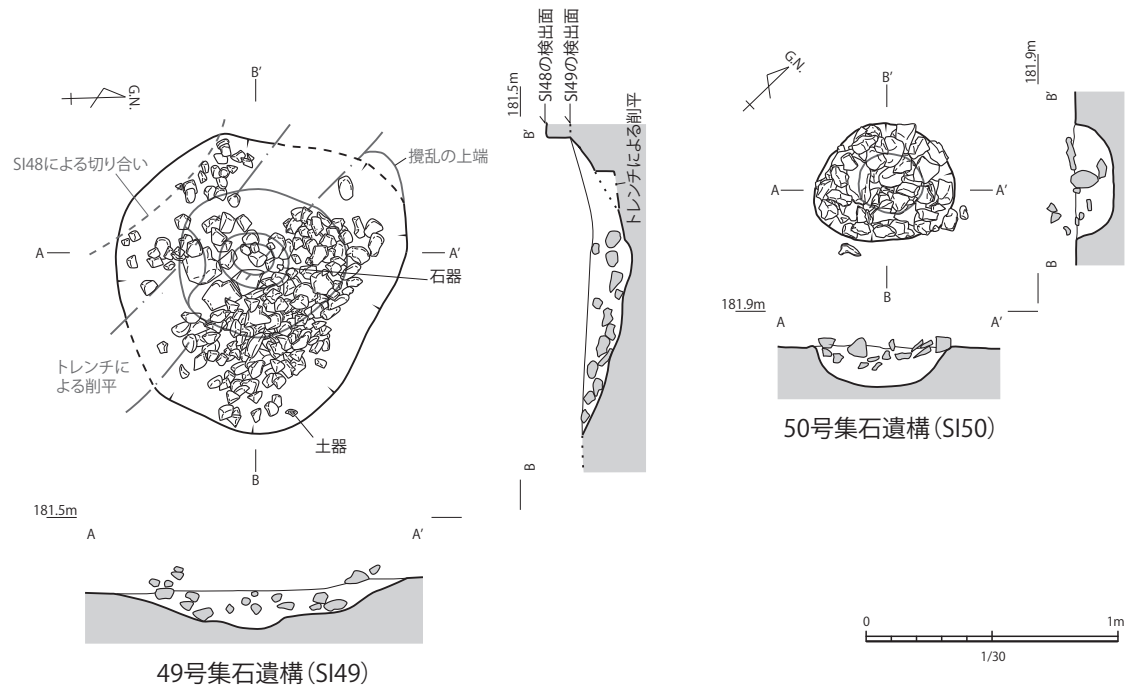
調査区南東側のF7Gr.に位置する。0.9×0.8mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.1mの掘り込みを伴い、断面形は皿状を呈する。構成礫は長径10cm未満の小型の礫を主体とする。埋土に炭化物を含み、炭化材もまとまって出土した。また、埋土内から縄文土器深鉢(Ⅶ類:318)が出土した。(第125図)

#### 55号集石遺構(SI55、第77図)

調査区南東側のF7Gr.に位置する。1.0×0.9mの範囲に礫が重層的に集中する。下部には深さ0.4mの掘り込みを伴い、断面形は逆台形状を呈する。構成礫は長径10～20cm程度の中型の礫を主体とし、中には長径20cm以上の大型の礫もある。被熱のため赤化した礫が多い。埋土に炭化物を含む。埋土内から縄文土器深鉢(Ⅱ類、Ⅶ類:308)が出土した。(第124図)

#### 56号集石遺構(SI56、第77図)

調査区南東側のF7Gr.に位置する。0.9×0.9mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.2mの掘り込みを伴い、断面形は皿状を呈する。構成礫は長径10cm未満の小型の礫を主体とする。埋土に炭化物を



第76図 集石遺構実測図(12)

含み、炭化材もまとまって出土した。また、埋土内から黒曜石の剥片が出土した。

#### 57号集石遺構 (SI57、第77図)

調査区中央のE4Gr.に位置する。0.7×0.5mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.1mの掘り込みを伴い、断面形は逆台形状を呈する。構成礫は長径10～20cm程度の中型の礫を主体とする。礫が集中する西側に比べて東側は礫がまばらに広がることから、礫が持ち出された可能性がある。埋土に炭化物を含む。

#### 58号集石遺構 (SI58、第77図)

調査区東側のF4Gr.に位置する。南東側に隣接する62号集石遺構(SI62)を攪乱して構築する。1.1×1.1mの範囲に礫が重層的に集中する。下部には深さ0.3mの掘り込みを伴い、断面形は皿状を呈する。構成礫は長径10cm未満の小型の礫を主体とするが、長径10～20cm程度の中型の礫もある。被熱のため赤化した礫が多い。埋土に炭化物を含み、埋土内から縄文土器深鉢(Ⅱ類:76)や黒曜石の剥片等が出土した。(第96図)

#### 59号集石遺構 (SI59、第77図)

調査区北西側のC2Gr.に位置する。北東側に隣接する64号集石遺構(SI64)を攪乱して構築する。1.1×1.0mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.5mの掘り込みを伴い、断面形はすり鉢状を基本とする。床面は平坦でなく、北側が深くなる。構成礫は長径10cm未満の小型の礫を主体とする。埋土に炭化物を含む。埋土内から縄文土器深鉢(Ⅱ類:86、127、Ⅶ類押型文)や黒曜石の剥片等が出土した。(第97・101図)

#### 60号集石遺構 (SI60、第77図)

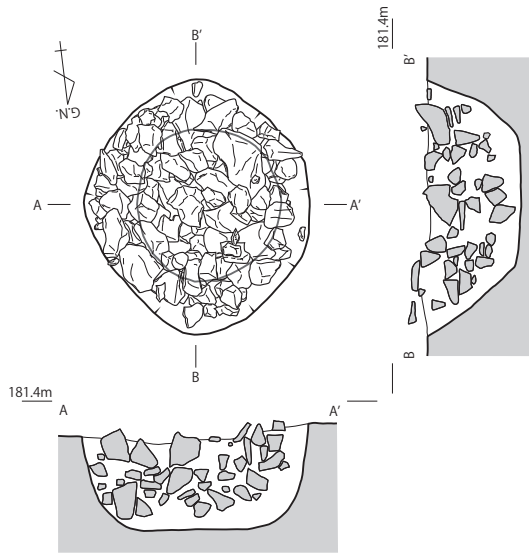
調査区南側のE6Gr.に位置する。0.8×0.8mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.4mの掘り込みを伴い、断面形はすり鉢状を基本とする。構成礫は長径10cm未満の小型の礫を主体とする。礫が集中する南側に比べて北西側の礫はまばらに広がることから、礫が持ち出された可能性がある。埋土に炭化物を含み、埋土内から縄文土器深鉢(Ⅲ類)が出土した。

#### 61号集石遺構 (SI61、第78図)

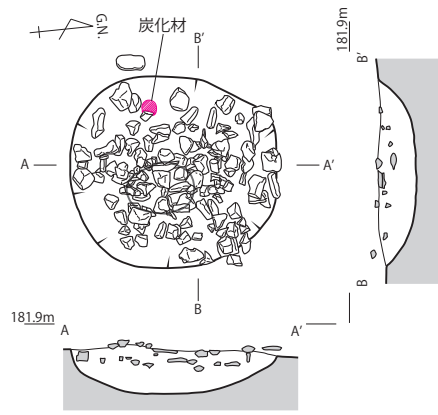
調査区南側のE6Gr.に位置する。北西側に3号炉穴(SP3)がある。1.1×0.8mの範囲に礫が重層的に集中する。下部には深さ0.5mの掘り込みを伴い、断面形はすり鉢状を呈する。構成礫は長径10cm未満の小型の礫を主体とするが、長径10～20cm程度の中型の礫もある。被熱のため赤化する礫が多い。埋土に炭化物を多く含み、北側床面の土層にまとまって見られた。出土した炭化材について樹種同定及びAMS法による放射性炭素年代測定を実施した結果、樹種はコナラ属アカガシ亜属であり、8200±30年BPの測定値が得られた。(第23・24表試料31参照)また、埋土内から黒曜石製の石鏃未製品(704)や剥片が出土した。(第165図)

#### 62号集石遺構 (SI62、第78図)

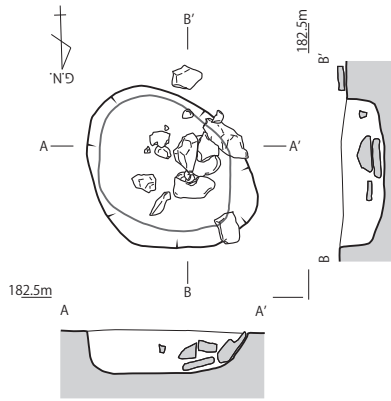
調査区東側のF4Gr.に位置する。58号集石遺構(SI58)が隣接し、上層は攪乱を受ける。1.1×1.0mの範囲に礫が重層的に集中する。下部には深さ0.4mの掘り込みを伴い、断面形は碗状を呈する。構成礫は長径10cm未満の小型の礫を主体とする。被熱のため赤化した礫が多い。埋土に炭化物を多く含み、出土した炭化材について樹種同定及びAMS法による放射性炭素年代測定を実施した結果、樹種はコナラ属コナラ節であり、8350±30年BPの測定値が得られた。(第23・24表試料21参照)また、埋土内か



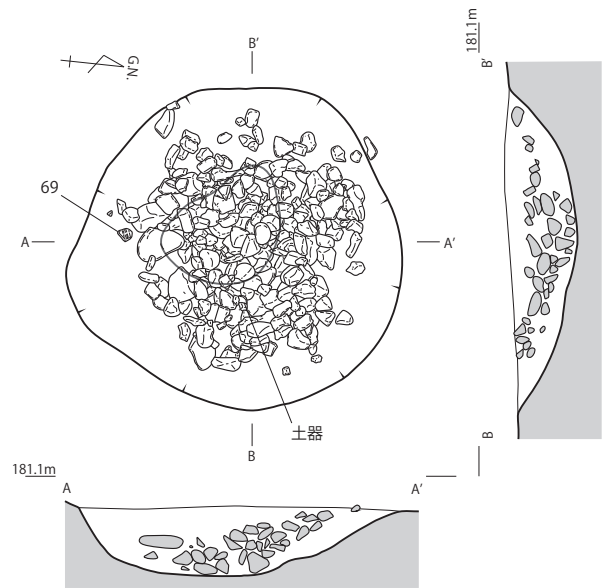
55号集石遺構 (SI55)



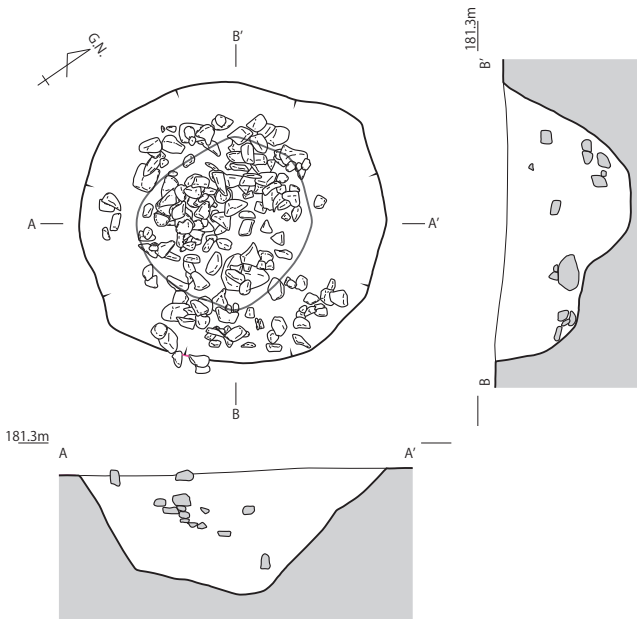
56号集石遺構 (SI56)



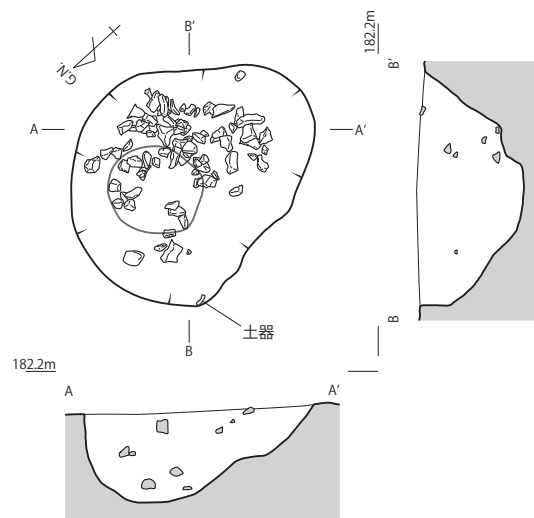
57号集石遺構 (SI57)



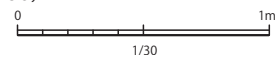
58号集石遺構 (SI58)



59号集石遺構 (SI59)



60号集石遺構 (SI60)



第77図 集石遺構実測図(13)

ら黒曜石の剥片が出土した。

#### 63号集石遺構 (SI63、第78図)

調査区南東側のG6Gr.に位置する。0.9×0.5mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.2mの掘り込みを伴い、断面形は皿状を呈する。構成礫は長径10～20cm程度の中型の礫を主体とする。

#### 64号集石遺構 (SI64、第79図)

調査区北西側のC2Gr.に位置する。1.1×1.1mの範囲に礫が集中する。西側の上層を59号集石遺構(SI59)に攪乱される。下部には深さ0.5mの掘り込みを伴い、断面形は逆台形状を呈する。構成礫は長径10cm未満の小型の礫を主体とする。

#### 65号集石遺構 (SI65、第79図)

調査区北側のD3Gr.に位置する。南東側に46号集石遺構(SI46)が隣接する。1.4×1.1mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.3mの掘り込みを伴い、断面形は皿状を呈する。構成礫は長径10cm未満の小型の礫を主体とする。礫が集中する南側に比べて北西側は少ないことから、礫が持ち出された可能性がある。埋土内から縄文土器深鉢(VII類:308)が出土した。(第124図)

#### 【集石遺構：II b類】(SI66～77)

本類は集石遺構を構成する礫が平面に集中し、礫の出土高と掘り込みに差がある一群である。

#### 66号集石遺構 (SI66、第79図)

調査区西側のC5Gr.に位置する。1.3×1.1mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.1mの掘り込みを伴い、断面形は皿状を呈する。構成礫は長径10cm未満の小型の礫を主体とするが、掘り込みの中心部は長径5cm未満の小片が多くなる。礫の出土高に差があることから、本来の掘り込みが検出面より高い可能性や別の集石遺構が切り合っている可能性がある。埋土内から縄文土器深鉢(III類:242)や凹石(793)、炭化種実等が出土した。(第112・175図)炭化種実について種実同定を実施した結果、ノビル鱗茎であることが分かった。(第25表試料4参照)

#### 67号集石遺構 (SI67、第79図)

調査区中央のD4Gr.に位置する。0.8×0.7mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.2mの掘り込みを伴い、断面形は浅い椀状を呈する。構成礫は長径10～20cmの中型の礫を主体とする。

#### 68号集石遺構 (SI68、第79図)

調査区東側のG4Gr.に位置する。0.7×0.6mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.2mの掘り込みを伴い、断面形は椀状を呈する。構成礫は長径10cm未満の小型の礫を主体とするが、長径10～20cm程度の中型の礫もある。埋土内から縄文土器深鉢(III類)や黒曜石の剥片が出土した。

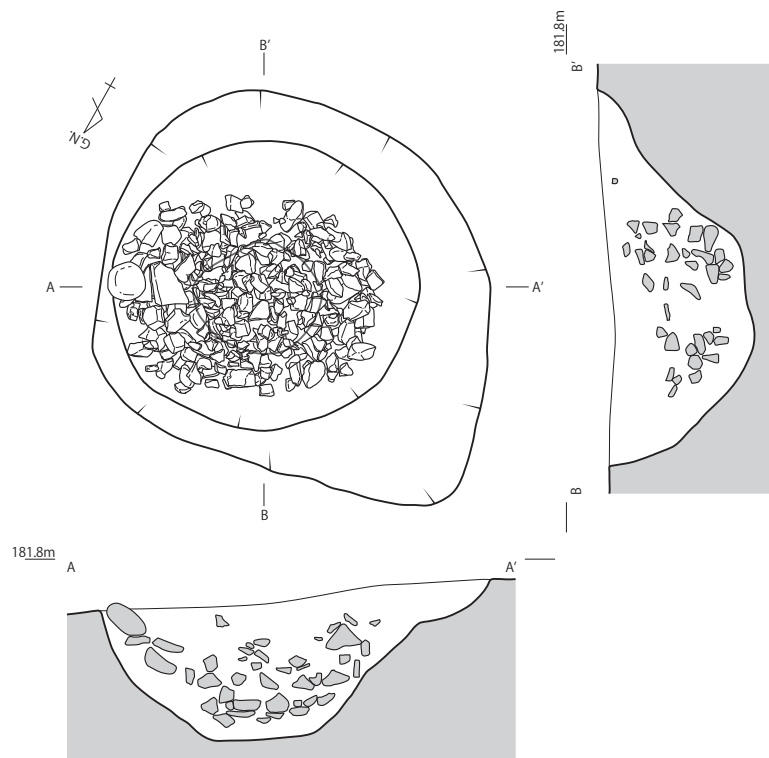
#### 69号集石遺構 (SI69、第79図)

調査区中央のD5Gr.に位置する。0.5×0.5mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.1mの掘り込みを伴い、断面形は皿状を呈する。構成礫は長径10～20cm程度の中型の礫を主体とする。

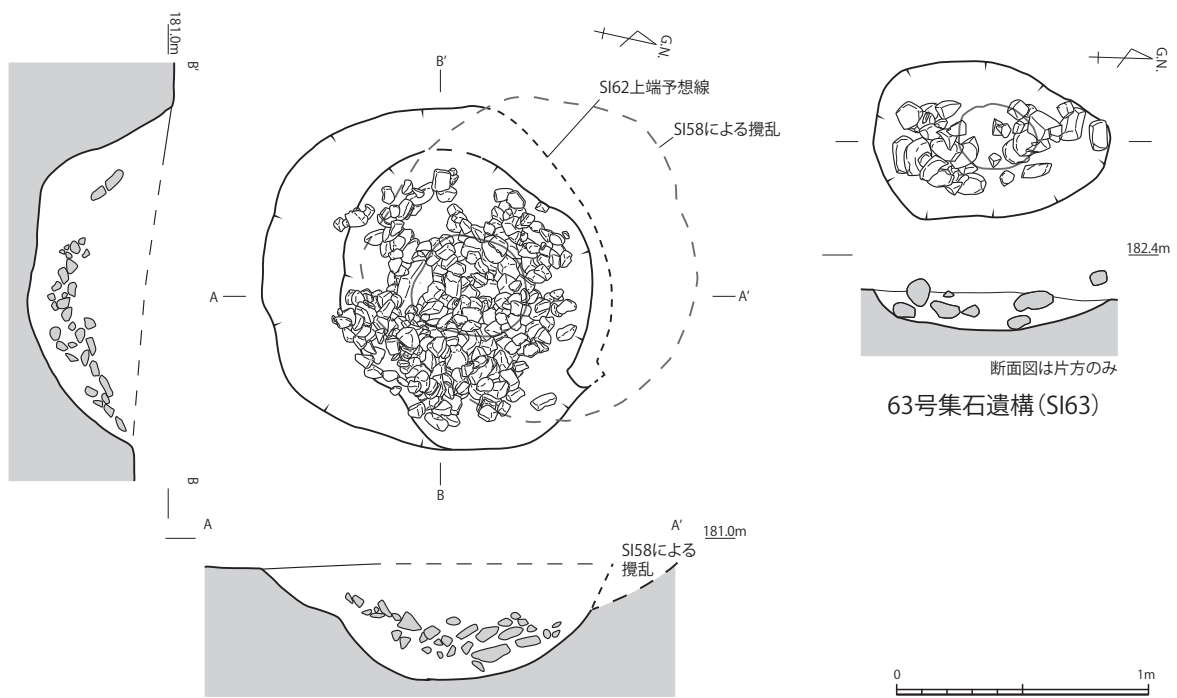
#### 70号集石遺構 (SI70、第80図)

調査区中央のD5Gr.に位置する。1.1×0.9mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.2mの掘り込みを伴い、断面形は皿状を呈する。構成礫は長径10cm未満の小型の礫を主体とする。埋土に炭化物を含む。





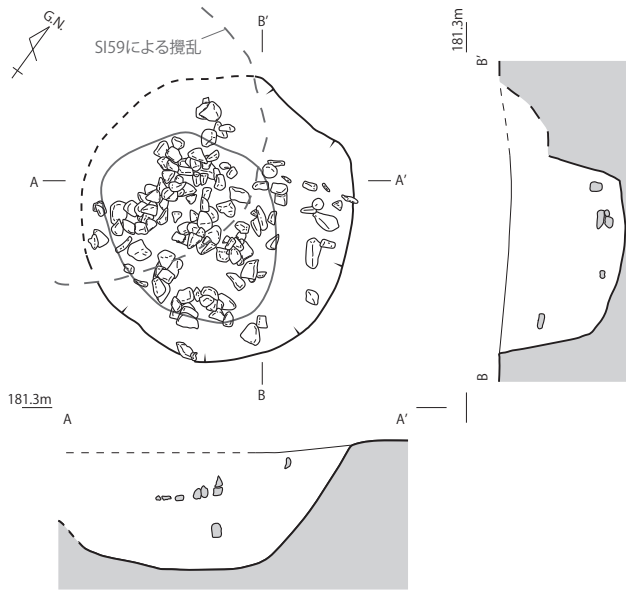
61号集石遺構(SI61)



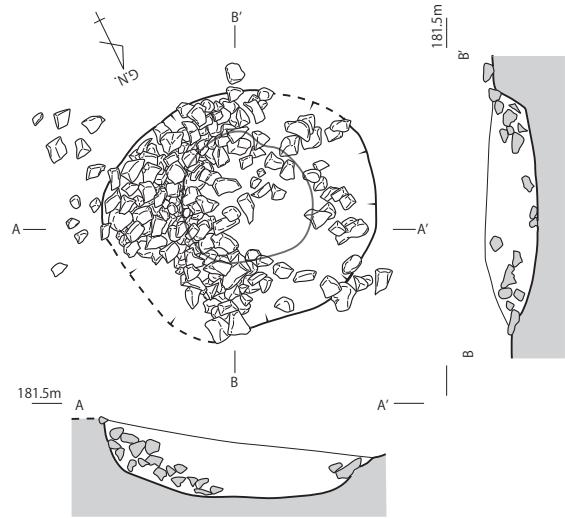
62号集石遺構(SI62)

63号集石遺構(SI63)

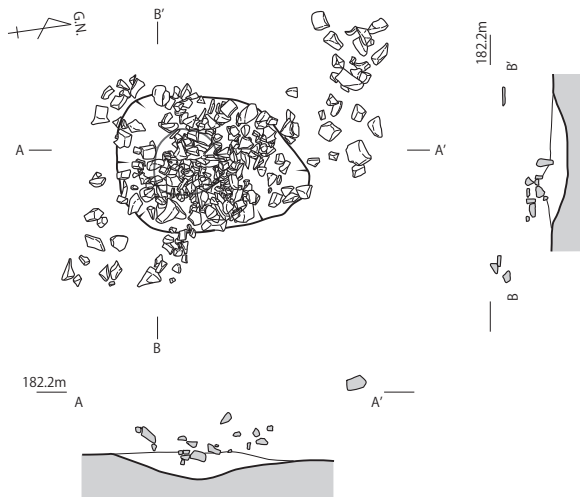
第78図 集石遺構実測図(14)



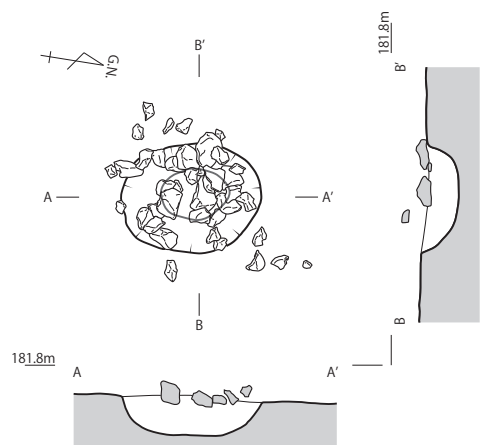
64号集石遺構 (SI64)



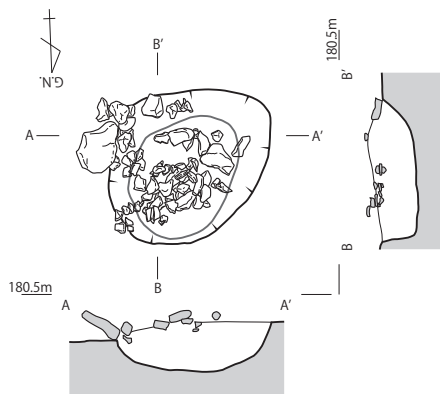
65号集石遺構 (SI65)



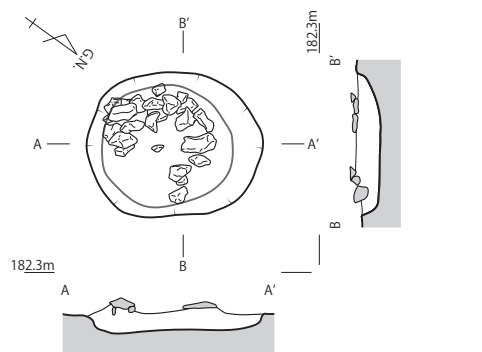
66号集石遺構 (SI66)



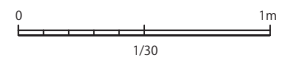
67号集石遺構 (SI67)



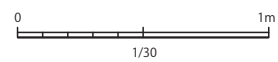
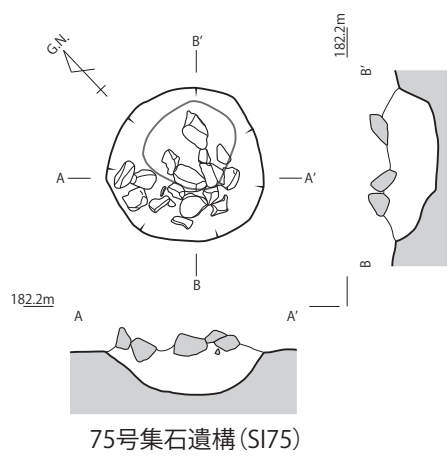
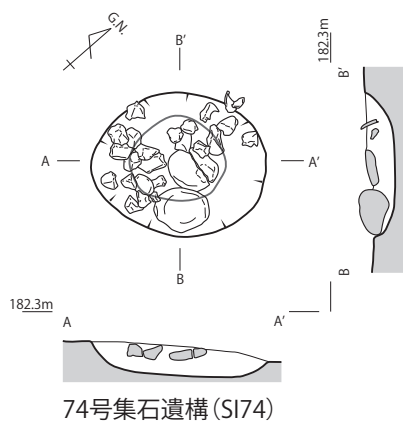
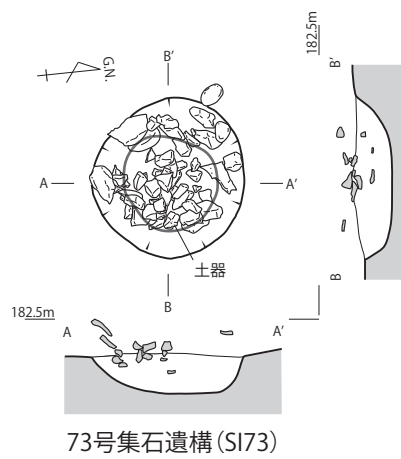
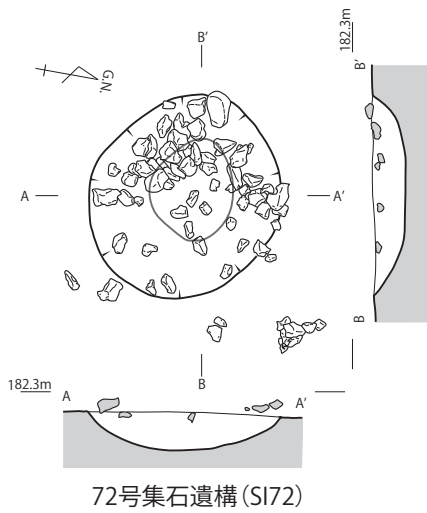
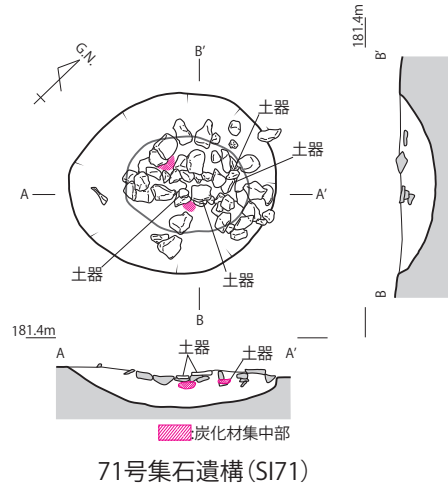
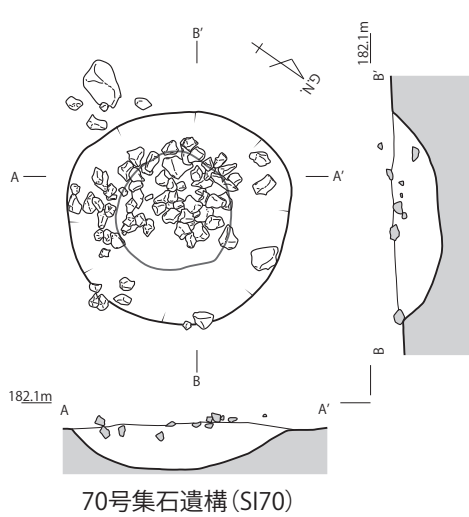
68号集石遺構 (SI68)



69号集石遺構 (SI69)



第79図 集石遺構実測図(15)



第80図 集石遺構実測図(16)

#### 71号集石遺構 (SI71、第80図)

調査区中央のD5Gr.に位置する。0.8×0.6mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.1mの掘り込みを伴い、断面形は皿状を呈する。構成礫は長径10cm未満の小型の礫を主体とする。埋土に炭化物を多く含み、炭化材がまとまって出土した。出土した炭化材について樹種同定及びAMS法による放射性炭素年代測定を実施した結果、樹種はコナラ属コナラ節であり、8220±30年BPの測定値が得られた。(第23・24表試料19参照)また、埋土内には土器を多く含み、縄文土器深鉢(VII類押型文)や黒曜石の剥片等が出土した。

#### 72号集石遺構 (SI72、第80図)

調査区南側のD6Gr.に位置する。1.1×1.0mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.2mの掘り込みを伴い、断面形は皿状を呈する。構成礫は長径10cm未満の小型の礫を主体とする。

#### 73号集石遺構 (SI73、第80図)

調査区南西側のC7Gr.に位置する。0.6×0.6mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.1mの掘り込みを伴い、断面形は皿状を呈する。掘り込みの中心部は長径10cm未満の小型の礫が集中するが、外周付近は長径10～20cm程度の中型の礫が位置する。埋土に炭化物を含み、埋土内から縄文土器深鉢(VII類押型文)が出土した。

#### 74号集石遺構 (SI74、第80図)

調査区南側のE7Gr.に位置する。0.6×0.6mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.1mの掘り込みを伴い、断面形は皿状を呈する。長径20cm以上の丸い礫2個を中心に位置し、その周りを長径10～20cmの中型の礫で囲む。埋土に炭化物を含む。

#### 75号集石遺構 (SI75、第80図)

調査区中央のD5Gr.に位置する。0.5×0.5mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.2mの掘り込みを伴い、断面形は碗状を呈する。構成礫は長径10cm未満の小型の礫を主体とする。埋土に炭化物を含み、埋土内から黒曜石の剥片が出土した。

#### 76号集石遺構 (SI76、第81図)

調査区東側のF5Gr.に位置する。0.8×0.7mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.1mの掘り込みを伴い、断面形は皿状を呈する。構成礫は長径10～20cm程度の中型の礫を主体とする。埋土に炭化物を含む。

#### 77号集石遺構 (SI77、第81図)

調査区南西側のB6Gr.に位置する。0.7×0.6mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.1mの掘り込みを伴い、断面形は皿状を呈する。構成礫は長径10cm未満の小型の礫を主体とする。埋土内から縄文土器深鉢(III類)が出土した。

#### 【集石遺構：Ⅲa類】(SI78～85)

本類は礫が比較的集中し掘り込みを伴う上に、下位に1個の底石が認められる一群である。

#### 78号集石遺構 (SI78、第81図)

調査区中央のD4Gr.に位置する。1.9×1.5mの範囲に礫が重層的かつ密に集中する。下部には深さ0.3mの掘り込みを伴い、断面形は皿状を呈する。構成礫は上位に長径10cm未満の小型の礫が多数広がり、その下位に長径30cm程度の大型の礫が配石される。埋土に炭化物を多量に含み、出土した炭化材につ

いて樹種同定及びAMS法による放射性炭素年代測定を実施した結果、コナラ属コナラ節であり、8400 ± 30年BPの測定値が得られた。(第23・24表試料17参照)また、埋土内から縄文土器深鉢(VII類押型文)や黒曜石の剥片が出土し、付近から磨石(770)が出土した。(第173図)

#### 79号集石遺構(SI79、第82図)

調査区北側のE3Gr.に位置する。0.8×0.6mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.2mの掘り込みを伴い、断面形は椀状を呈する。構成礫は上位に長径10cm未満の小型の礫が広がり、その下位に長径20cm程度の中型の礫が配石される。

#### 80号集石遺構(SI80、第82図)

調査区北側のE3Gr.に位置する。1.2×0.9mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.2mの掘り込みを伴い、断面形は皿状を呈する。構成礫は上位に長径10cm未満の小型の礫が主に広がり、その下位に長径20cm以上の大型の礫が配石される。埋土に炭化物を含み、埋土内から縄文土器深鉢(VII類押型文)が出土した。

#### 81号集石遺構(SI81、第82図)

調査区北側のD3Gr.に位置する。0.7×0.7mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.5mの深い掘り込みを伴い、断面形は逆台形状を呈する。構成礫は上位から中位にかけて長径10cm未満の小型の礫がまばらに広がり、その下位に長径20cm以上の大型の礫が配石される。

#### 82号集石遺構(SI82、第82図)

調査区南側のE7Gr.に位置する。0.7×0.7mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.3mの掘り込みを伴い、断面形は碗状を呈する。構成礫は上位に長径10cm未満の小型の礫が密集し、その下位に長径20cm程度の中型の礫が配石される。被熱のため赤化した礫が多い。埋土に炭化物を含む。

#### 83号集石遺構(SI83、第82図)

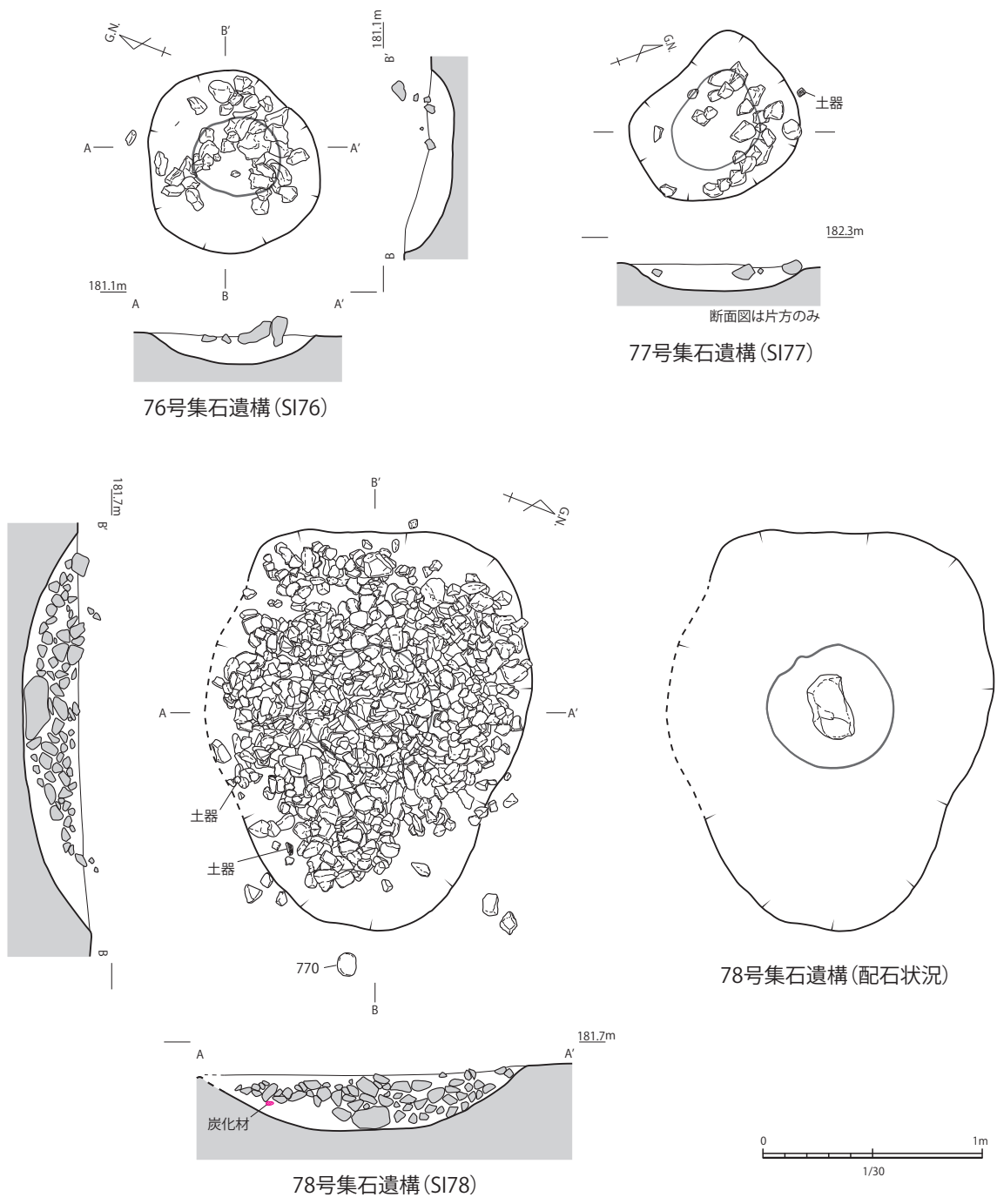
調査区東側のF4Gr.に位置する。1.5×1.3mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.2mの掘り込みを伴い、断面形は浅い皿状を呈する。構成礫は上位に長径10cm未満の小型の礫が広がり、その下位に長径20cm程度の中型の礫が配石される。埋土に炭化物を含む。

#### 84号集石遺構(SI84、第82図)

調査区北西側のB2Gr.に位置する。0.9×0.8mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.3mの掘り込みを伴い、断面形は皿状を呈する。構成礫は上位に長径10cm未満の小型の礫が広がり、その下位に長径20cm程度の中型の礫が配石される。被熱のため赤化した礫が多い。埋土に炭化物を含み、炭化材がまとまって出土した。出土した炭化材について樹種同定及びAMS法による放射性炭素年代測定を実施した結果、樹種はスダジイであり、8230 ± 30年BPの測定値が得られた。(第23・24表試料20参照)

#### 85号集石遺構(SI85、第83図)

調査区西側のC4Gr.に位置する。1.1×1.0mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.6mの深い掘り込みを伴い、断面形は椀状を呈する。調査当初は土坑として調査していたが、下層から多くの焼礫が出てきたため、集石遺構とした。構成礫は上位に10～20cm程度の中型の礫が主に広がり、その下位に長径30cm程度の大型の礫が配石される。



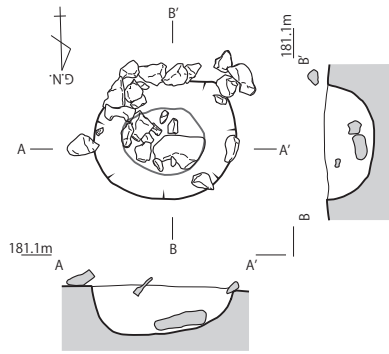
第81図 集石遺構実測図(17)

【集石遺構：Ⅲb類】(SI86～98)

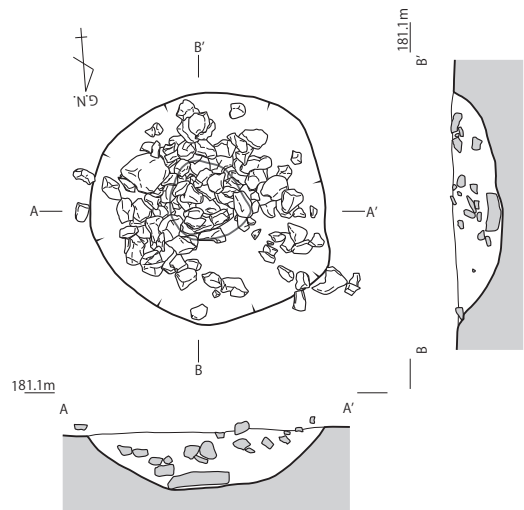
本類は礫が比較的集中し掘り込みを伴う上に、下位に複数個の底石が認められる一群である。

86号集石遺構 (SI86、第83図)

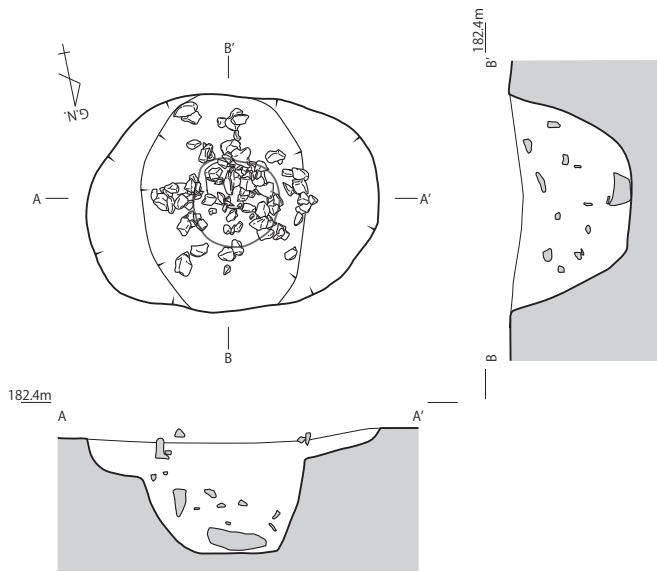
調査区北西側のC2Gr.に位置する。南西側に88号集石遺構(SI88)が隣接する。0.5×0.4mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.1mの掘り込みを伴い、断面形は浅い皿状を呈する。構成礫は上位に長径10cm未満の小型の礫が位置し、その下位に長径20cm程度の中型の礫2個と長径30cm程度の大型の礫1個が配石される。



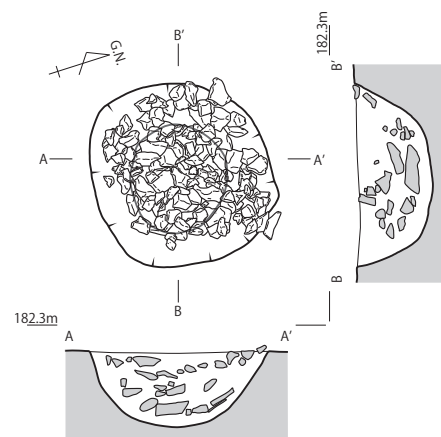
79号集石遺構 (SI79)



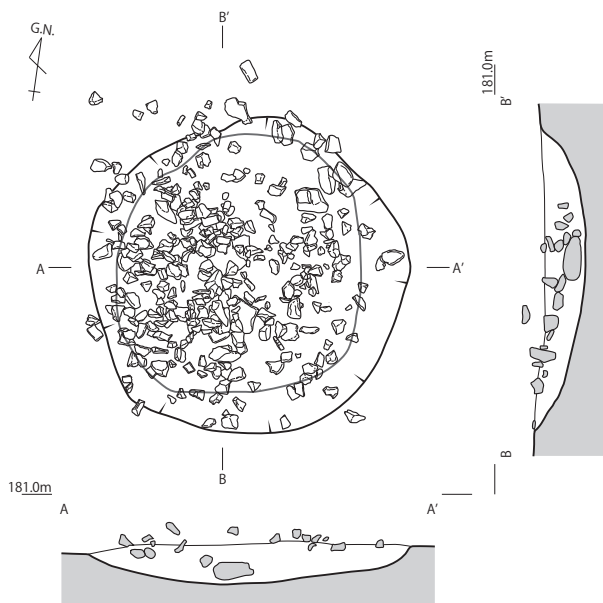
80号集石遺構 (SI80)



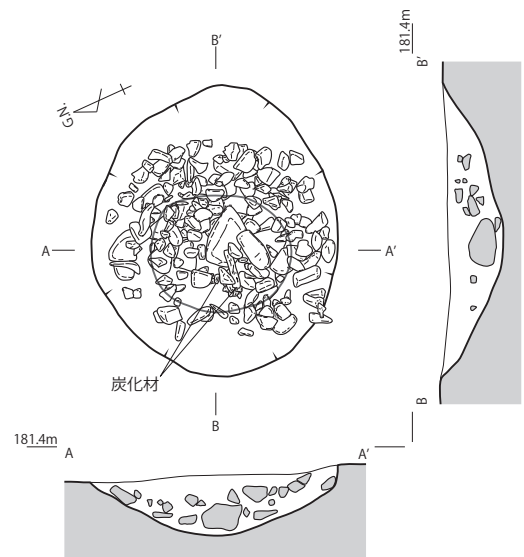
81号集石遺構 (SI81)



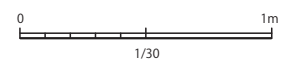
82号集石遺構 (SI82)



83号集石遺構 (SI83)



84号集石遺構 (SI84)



第82図 集石遺構実測図(18)

#### 87号集石遺構 (SI87、第83図)

調査区南側のD7Gr.に位置する。1.5×1.3mの範囲に礫が重層的に集中する。下部には深さ0.5mの深い掘り込みを伴い、断面形は逆台形状を呈する。中心部を長径10～20cm程度の中型の礫が密集し、掘り込みに沿って長径20cm以上の大型の礫が位置する。最深部には長径20～30cm程度の大型の礫2個が配石され、赤変が顕著に見られた。中央部から北西部にかけて礫が少なくなり、中央部近くに礫が垂直気味に壁状に位置する箇所もあるため、焼礫をかき出した可能性がある。埋土には炭化物を多く含み、掘り込みの下層には泥状化した炭化物が堆積する層が10cm程度認められる。出土した炭化材について樹種同定及びAMS法による放射性炭素年代測定を実施した結果、樹種はクスノキであり、8280±30年BPの測定値が得られた。(第23・24表試料16参照)また、埋土内から縄文土器深鉢(V類、VII類押型文)や黒曜石の剥片が出土した。

#### 88号集石遺構 (SI88、第84図)

調査区北西側のC2Gr.に位置する。北東側に86号集石遺構(SI86)が隣接する。1.3×1.0mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.3mの掘り込みを伴い、断面形は逆台形状を基本とするが、床面は平坦でなく西側の掘り込みが深くなる。構成礫は上位に長径10cm未満の小型の礫が広がり、その下位に台石を転用した長径20cm以上の大型の礫2個が配石される。

#### 89号集石遺構 (SI89、第84図)

調査区中央のE5Gr.に位置する。1.3×1.2mの範囲に礫が重層的に集中する。下部には深さ0.3mの掘り込みを伴い、断面形は椀状を呈する。構成礫は上位に長径10～20cm程度の中型の礫が密集し、その下位に長径20～30cm程度の大型の配石7個が位置する。被熱のため赤化した礫が多い。埋土に炭化物を多く含み、炭化種実も出土した。炭化種実について種実同定を実施した結果、ノビル鱗茎であることが分かった。(第25表試料5参照)また、埋土内から縄文土器深鉢(III類)や黒曜石の剥片等が出土した。

#### 90号集石遺構 (SI90、第85図)

調査区中央のE5Gr.に位置する。1.1×0.9mの範囲に礫が重層的に集中する。下部には深さ0.2mの掘り込みを伴い、断面形は浅い箱状を呈する。構成礫は上位に長径10～20cm程度の中型の礫が広がり、その下位に長径20～30cm程度の大型の礫4個が配石される。埋土内から、縄文土器深鉢(III類:212、VII類押型文)や黒曜石の剥片等が出土した。(第110図)

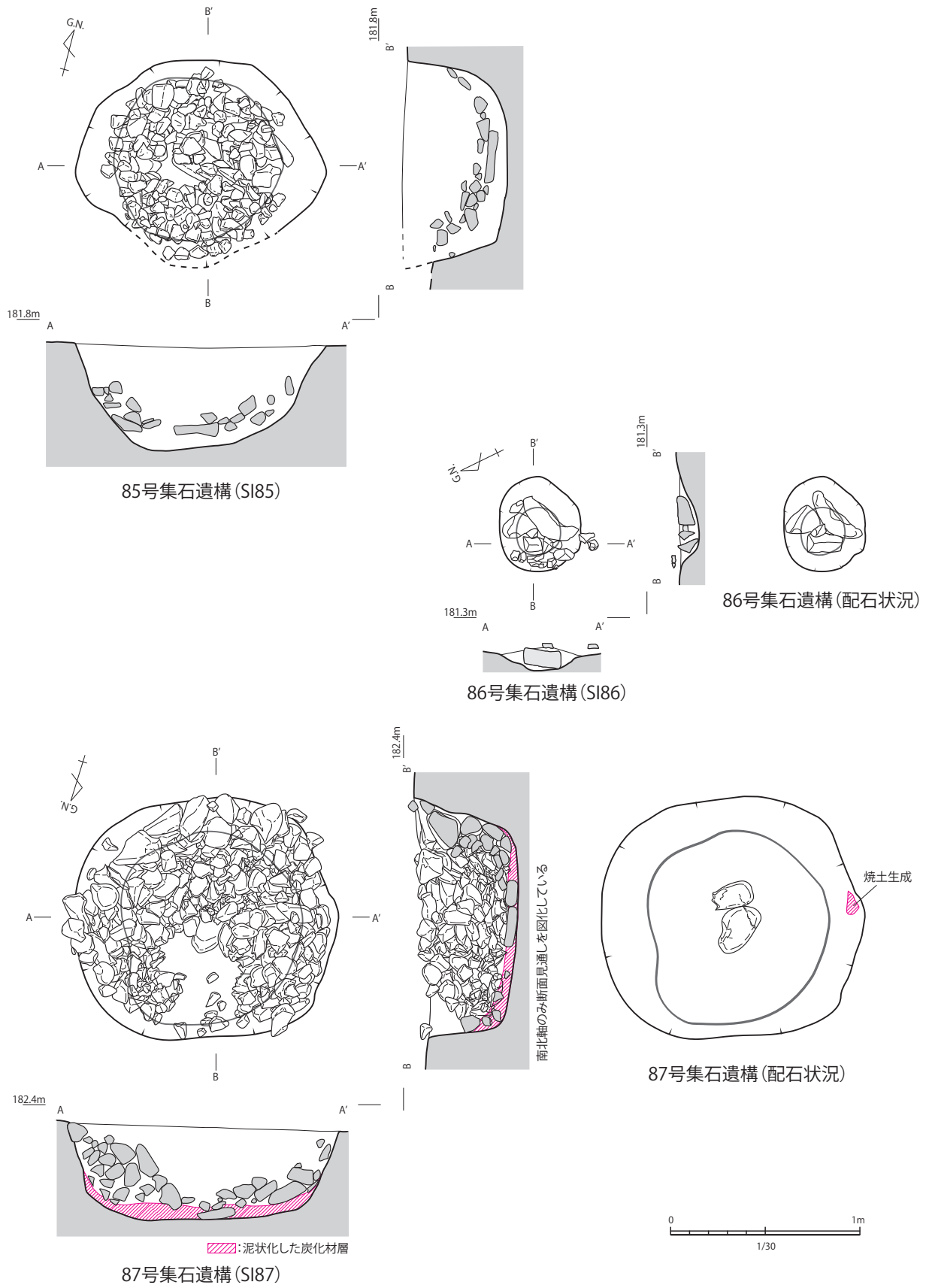
#### 91号集石遺構 (SI91、第85図)

調査区南西側のB7Gr.に位置する。1.6×1.3mの範囲に礫が重層的に集中する。下部には深さ0.6mの深い掘り込みを伴い、断面形はすり鉢状を呈する。構成礫は上位に長径10cm未満の小型の礫が密集し、その下位に長径20cm以上の大型の礫1個と長径10～20cm程度の中型の礫5個が配石として位置する。被熱のため赤化した礫が多い。埋土に炭化物を多く含む。出土した炭化材について樹種同定及びAMS法による放射性炭素年代測定を実施した結果、樹種はコナラ属コナラ節であり、8170±30年BPの測定値が得られた。(第23・24表試料30参照)埋土内から縄文土器深鉢(III類、VII類押型文)や黒曜石製の石鏃未製品等が出土した。

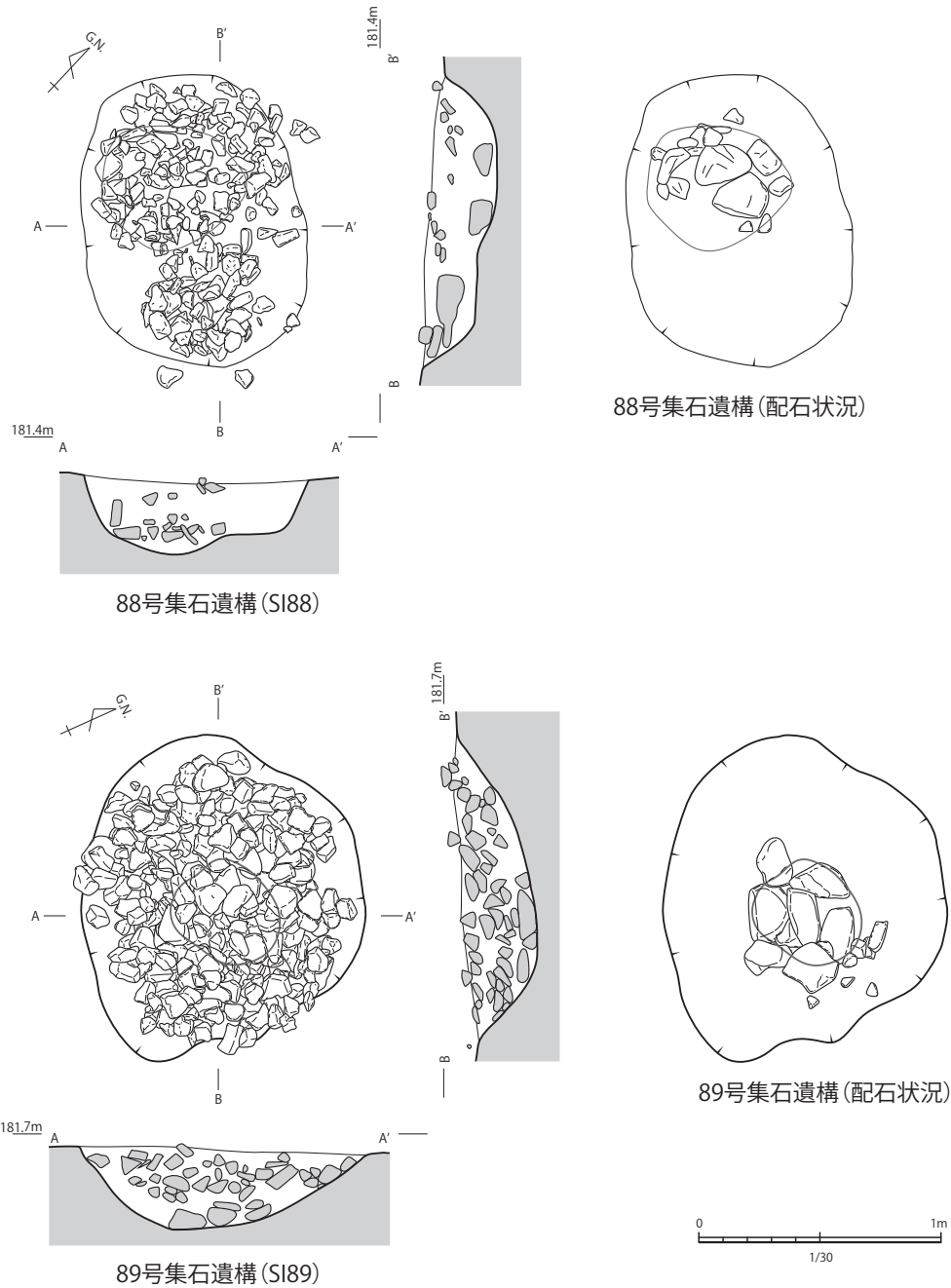
#### 92号集石遺構 (SI92、第86図)

調査区南西側のB7Gr.に位置する。北西側に91号集石遺構(SI91)がある。0.9×0.9mの範囲に礫が





第83図 集石遺構実測図(19)

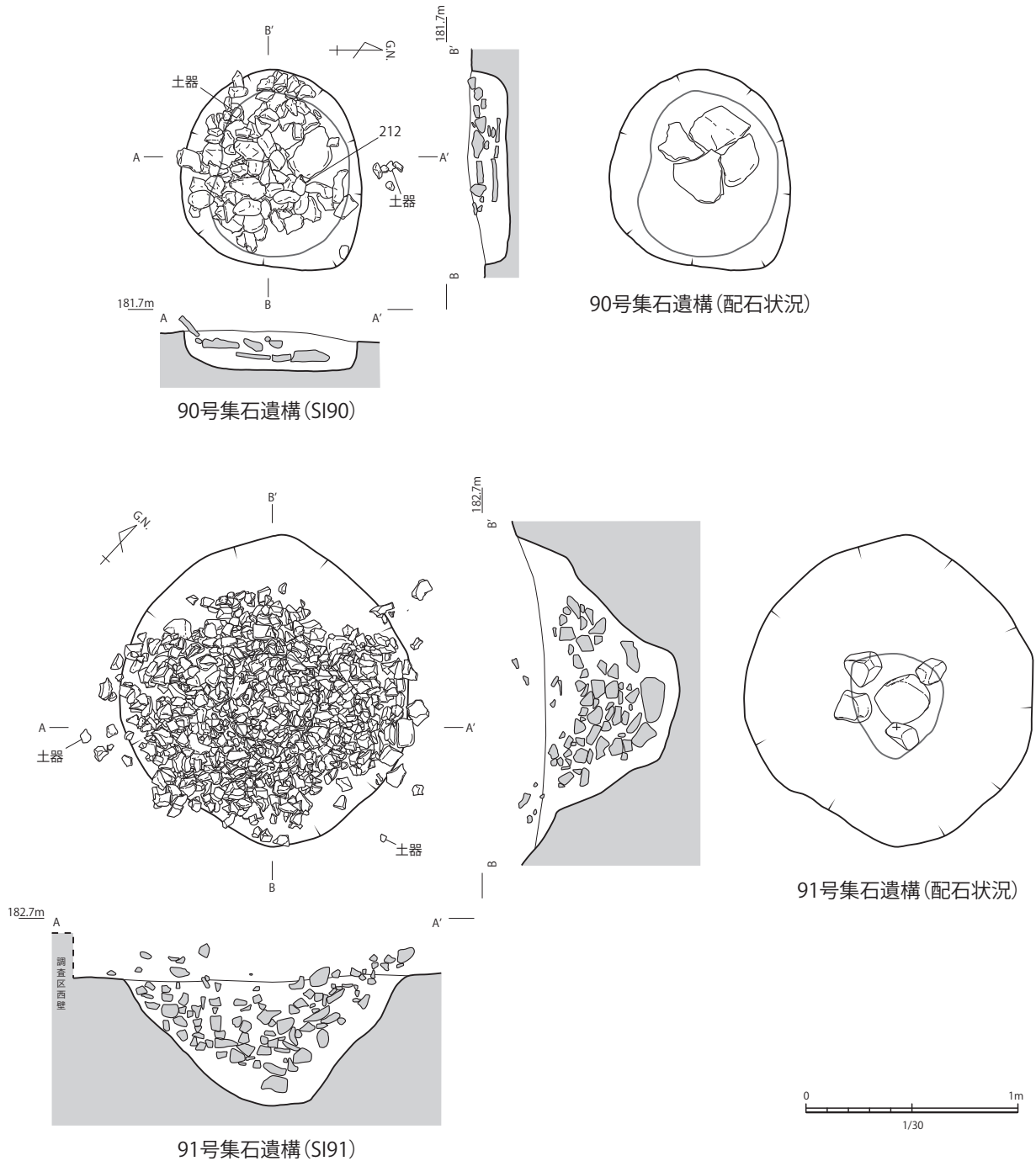


第84図 集石遺構実測図(20)

集中する。下部には深さ0.2mの掘り込みを伴い、断面形は逆台形状を呈する。構成礫は上位に長径10～20cm程度の中型の礫があり、その下位に長径20cm以上の礫7個が密に配石される。被熱のため赤化する礫が多い。底石の下位には焼土層と見られる層があり、地山層が赤変する。

93号集石遺構 (SI93、第86図)

調査区北側のE3Gr.に位置する。1.0×0.9mの範囲に礫が重層的に集中する。下部には深さ0.3mの掘り込みを伴い、断面形は碗状を呈する。構成礫は上位に10～20cm程度の中型の礫が広がり、その下位には長径20cm以上の大型の礫3個が配石される。被熱のため赤化した礫が多い。埋土に炭化物を含み、埋土内から黒曜石やチャートの剥片が出土した。



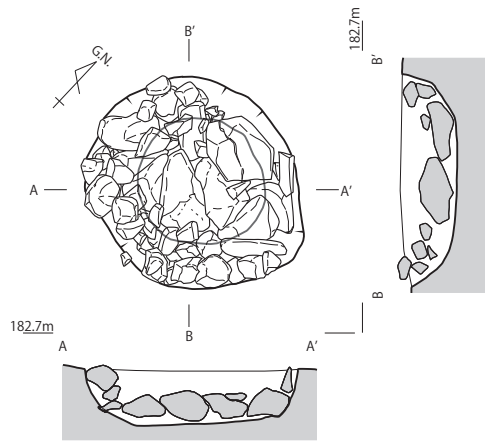
第85図 集石遺構実測図(21)

94号集石遺構 (SI94、第86図)

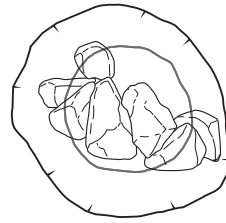
調査区中央のE4Gr. に位置する。0.8×0.7mの範囲に礫が集中する。下部には深さ0.2mの掘り込みを伴い、断面形は皿状を呈する。構成礫は上位に長径10cm未満の小型の礫が広がり、その下位に磨石や台石を転用した長径10～20cm程度の中型の礫6個が配石される。

95号集石遺構 (SI95、第87図)

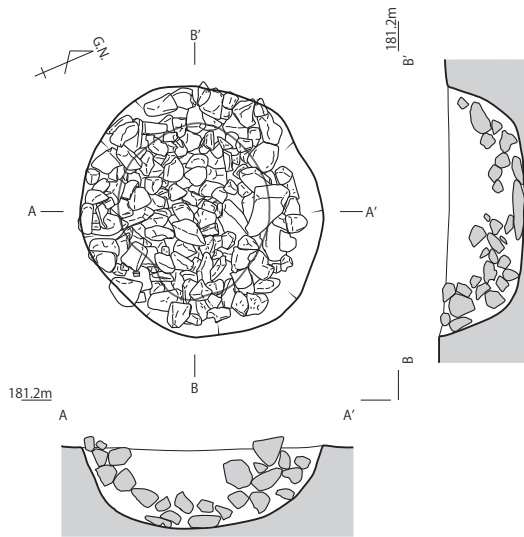
調査区南東側のH6Gr. に位置する。0.9×0.7mの範囲に礫が広がる。下部には深さ0.1mの浅い掘り込みを伴い、断面形は皿状を呈する。掘り込みの床面に沿って配置された長径20cm以上の礫を配石と



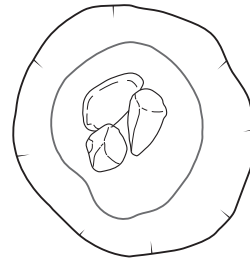
92号集石遺構 (SI92)



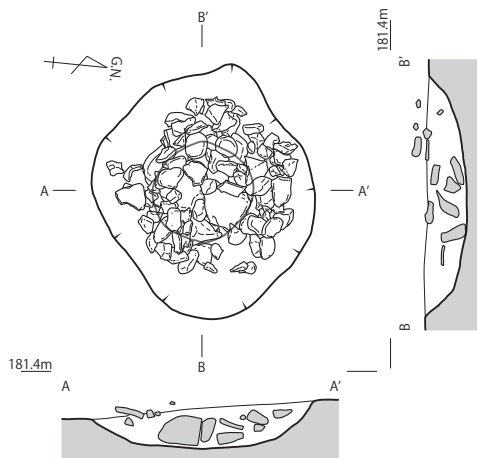
92号集石遺構 (配石状況)



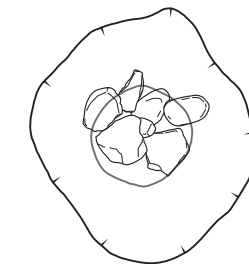
93号集石遺構 (SI93)



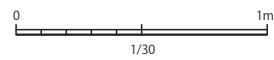
93号集石遺構 (配石状況)



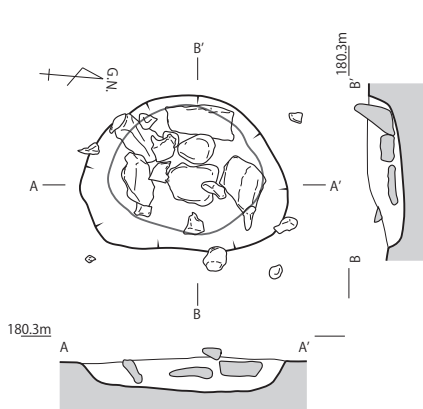
94号集石遺構 (SI94)



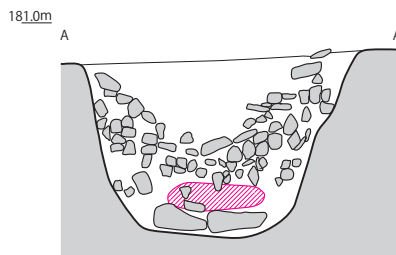
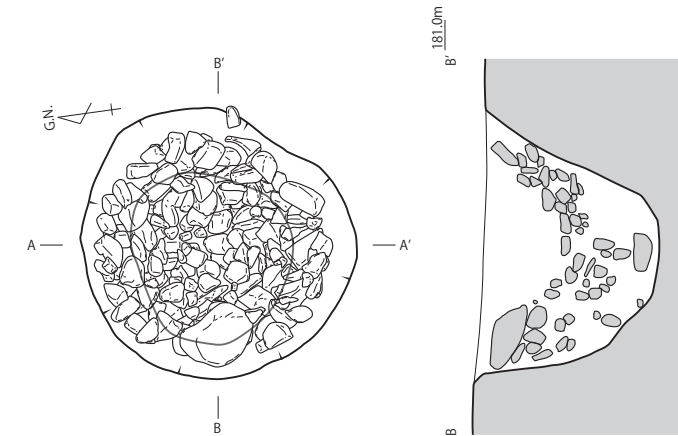
94号集石遺構 (配石状況)



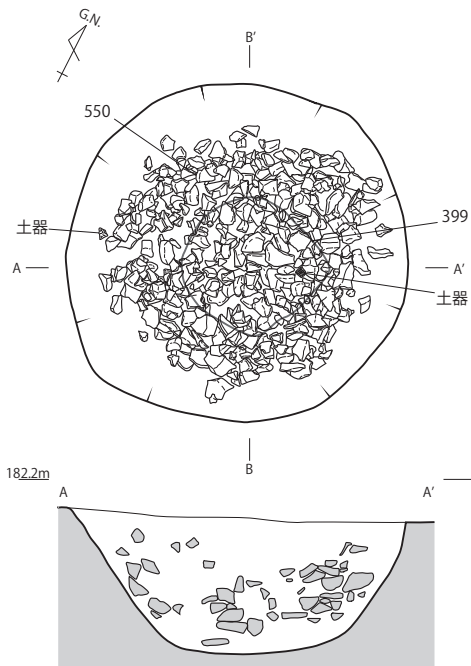
第86図 集石遺構実測図(22)



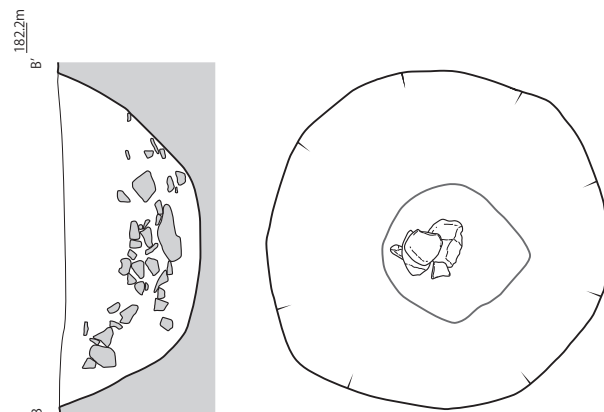
95号集石遺構 (SI95)



96号集石遺構 (SI96)



97号集石遺構 (SI97)



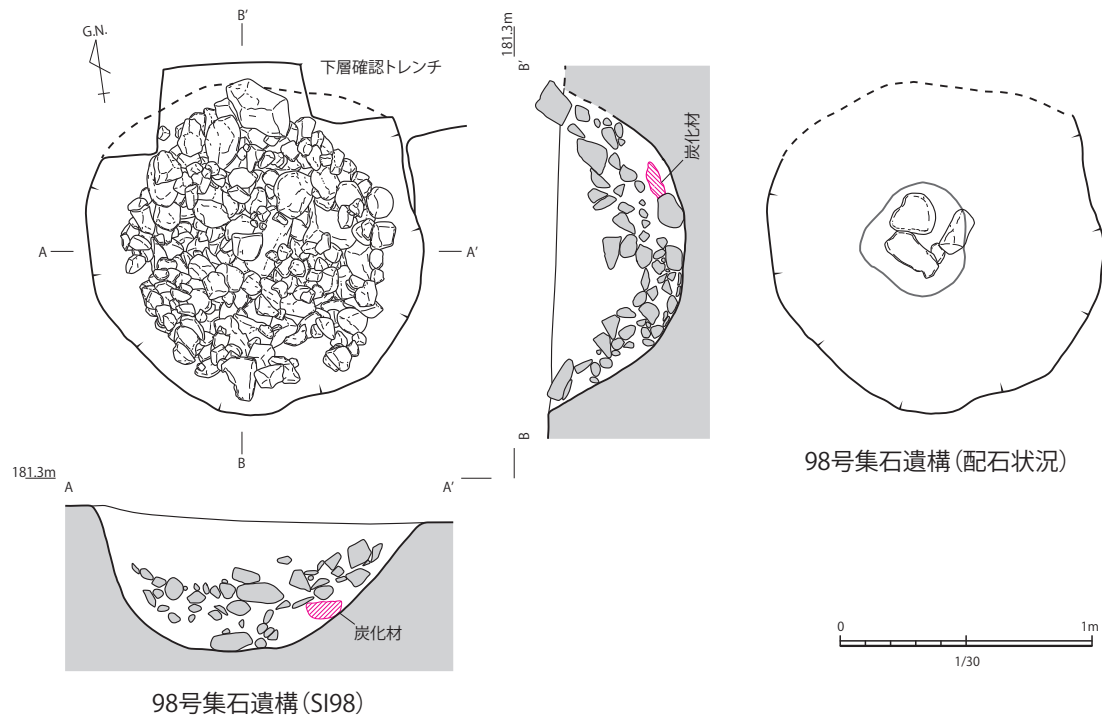
97号集石遺構 (配石状況)

### 第 87 図 集石遺構実測図 (23)

みなしたのでⅢb類とした。埋土内から縄文土器深鉢(Ⅱ類、Ⅲ類)が出土した。

#### 96号集石遺構 (SI96、第 87 図)

調査区北側のE2Gr.に位置する。1.1×1.0mの範囲に礫が重層的に集中する。下部には深さ0.8mの深い掘り込みを伴い、断面形は逆台形状を呈する。構成礫は上位に長径10~20cm程度の中型の礫が集



第88図 集石遺構実測図(24)

中し、下位に長径 20cm 以上の大型の礫 2 個が配石される。埋土に炭化物を含み、底石の上位には泥状化した炭化物の層が見られる。埋土内から黒曜石製の石鏃が出土した。

#### 97号集石遺構 (SI97、第 87 図)

調査区南西側の C6Gr. に位置する。1.2×1.1mの範囲に礫が重層的に集中する。下部には深さ 0.6m の深い掘り込みを伴い、断面形は逆台形状を呈する。構成礫は上位に長径 10cm 未満の小型の礫が集中し、その下位に長径 10～20cm 程度の礫 3 個が配石される。被熱のため赤化した礫が多い。埋土に炭化物を多く含み、埋土内から縄文土器深鉢 (Ⅲ類、Ⅶ類 : 399、Ⅹ類 : 550) や黒曜石の剥片等が出土した。(第 133・155 図)

#### 98号集石遺構 (SI98、第 88 図)

調査区北東側の F3Gr. に位置する。下層確認を行っている際に、トレンチの壁際で検出した。1.3×1.1mの範囲に礫が重層的に集中する。下部には深さ 0.6m の深い掘り込みを伴い、断面形は碗状を呈する。構成礫は長径 10～20cm 程度の中型の礫が集中し、その下位に長径 20cm 程度の中型の礫が位置する。被熱のためか赤化した礫が多い。埋土に炭化物を多く含む。出土した炭化材について樹種同定及び AMS 法による放射性炭素年代測定を実施した結果、樹種はコナラ属コナラ節であり、8560 ± 30 年 B P の測定値が得られた。(第 23・24 表試料 22 参照) また、埋土内から縄文土器深鉢 (Ⅲ類、Ⅷ類 : 528) や黒曜石製の石鏃未製品が出土した。(第 152 図)

竪穴建物跡 (SA) ※ 縄文時代後期

遺構番号	実測番号	平面形	長さ (m)		支柱穴	検出位置		出土遺物		時期	備考
			長軸	短軸		Gr.	層位	土器 (深鉢) の型式	石器 (器種)		
SA1	SA1	円形	3.0	2.9	2	G2	Ⅱ	丸尾式	石斧	丸尾式期	地床炉あり

平地式建物跡 (SB)

遺構番号	実測番号	平面形	長さ (m)		支柱穴	検出位置		出土遺物 (※報告書未掲載)		時期	備考
			長軸	短軸		Gr.	層位	土器 (深鉢) の型式	石器 (器種)		
SB1	SA2	不整楕円形	3.1	2.5	7	E2	Ⅳ			縄文早期	
SB2	SA3	楕円形	4.7	3.6	15	E5	Ⅳ			縄文早期	
SB3	SA4	楕円形	4.6	3.3	12	C6/C7	Ⅳ	前平式 / ※手向山式 / ※石坂式 / ※別府原式	※剥片	前平式期?	土坑あり
SB4	SA5	不整円形	3.8	3.6	17	B6/B7/C6/C7	Ⅳ		※剥片	縄文早期	
SB5	SA6	不整楕円形	4.3	3.9	13	F6/G6	Ⅳ			縄文早期	

炉穴 (SP)

遺構番号	実測番号	長さ (m)		深さ (m) (最深部)	ブリッジ残存	検出位置		出土遺物 (※報告書未掲載)		時期	備考
		長軸	短軸			Gr.	層位	土器 (深鉢) の型式	石器 (器種)		
SP1	SP1	2.9	1.2	0.7	あり	D4	Ⅳ	石坂式 / 別府原式 / 押型文 (楕円 / 山形 / 格子目 / 短枝回転文) / ※燃糸文	※石鏃 / ※剥片	縄文早期 中葉	
SP2	SP2	3.4	3.0	0.9	なし	C3	Ⅳ	石坂式	※剥片	縄文早期 中葉	炭化材 (サクラ属)
SP3	SP3	6.1	5.1	1.1	一部あり	E5/E6	Ⅳ	石坂式 / 押型文 (山形) / 変形燃糸文 / 手向山式 / ※前平式 / ※別府原式 / ※押型文 (楕円)	石鏃 / ※石鏃未製品 / ※剥片 / ※磨石	縄文早期 中葉	炭化材 (コナラ属コナラ節)
SP4	SP4	3.5	2.7	1.5	あり	D3	Ⅳ	※石坂式		縄文早期	
SP5	S105	2.0	1.0	0.3	なし	C4/D4	Ⅳ			縄文早期	
SP6	S107	2.6	1.4	0.3	なし	D5/D6	Ⅳ			縄文早期	
SP7	SC153	2.1	1.7	0.6	なし	E3	Ⅳ			縄文早期	

竪穴状遺構 (SJ)・土坑 (SC)・陥し穴 (SS)・自然流路 (SK)

掲載番号	遺構番号	平面形	長さ (m)		深さ (m) (最深部)	検出位置		出土遺物 (※報告書未掲載)		時期	備考
			長軸	短軸		Gr.	層位	土器 (深鉢) の型式	石器 (器種)		
SJ1	SC14	隅丸方形	3.5	3.1	0.2	C2	Ⅳ	石坂式 / 押型文 (楕円) / 妙見・天道ヶ尾 / ※別府原式 / ※燃糸文	※石鏃 / ※剥片 / ※チップ	縄文早期	竪穴状遺構
SJ2	SC40	隅丸長方形	2.3	1.7	0.4 (0.6)	F6	Ⅳ	石坂式 / ※別府原式	※石鏃未製品 / ※剥片 / ※微細剥離剥片	別府原式期?	竪穴状遺構
SJ3	SC146	不整隅丸長方形	2.4	2.1	0.4+α	E3/E4	Ⅳ	※別府原式	※石鏃 / ※剥片 / ※チップ	別府原式期?	竪穴状遺構
SJ4	SC149	不整隅丸長方形	2.9	2.2	0.1	F6/F7	Ⅳ	※石坂式 / ※別府原式	磨石 / 凹石 / ※剥片 / ※蔽石	別府原式期?	竪穴状遺構
SC1	SC16	円形	0.8	0.7	0.2	D2	Ⅳ			縄文早期	
SC2	SC32	楕円形	0.8	0.6	0.2	D7	Ⅳ			縄文早期	
SC3	SC33	不整楕円形	1.4	1.1	0.2	D7	Ⅳ	石坂式 / ※別府原式	※剥片	別府原式期?	
SC4	SC1	不整円形	1.1	1.1	0.2	B2	Ⅳ	手向山式 / 妙見・天道ヶ尾式 / ※石坂式	※剥片	妙見式期?	
SC5	SC25	楕円形	1.1	0.9	0.3	C7	Ⅳ	※別府原式	※剥片 / ※チップ	別府原式期?	焼土や炭化物を含む
SC6	SC128	不整隅丸長方形	1.4	1.2	0.3	C4	Ⅳ	※手向山式	※蔽石	手向山式期?	
SC7	SC29	不整円形	1.3	1.2	0.2	E7	Ⅳ		※剥片	縄文早期	
SC8	SC15	隅丸方形	1.3	1.3	0.4	D2	Ⅳ	別府原式 / ※石坂式 / ※押型文 (楕円) / ※燃糸文 / ※手向山式	石鏃 / ※剥片 / ※チップ	手向山式期?	炭化物を含む
SC9	SC8	不整隅丸方形	1.5	1.4	0.3	C4	Ⅳ		※石鏃 / ※剥片	縄文早期	焼土や炭化物を含む
SC10	SC43	楕円形	1.4	1.2	0.3	E5	Ⅳ	※別府原式	※磨石 / ※剥片 / ※チップ	別府原式期?	炭化物を含む
SC11	SC21	楕円形	2.2	1.7	0.3	E4	Ⅳ		※石鏃 / ※剥片	縄文早期	SI31 と切りあう
SC12	SC41	不整隅丸長方形	2.0	1.4	0.3	E7	Ⅳ		※石鏃 / ※剥片 / ※チップ	縄文早期	
SC13	SC23	不整長方形	1.9	1.3	0.1 (0.2)	B7/C7	Ⅳ	※別府原式 / ※押型文 (楕円)	※石鏃 / ※剥片 / ※チップ	縄文早期	焼土や炭化物を含む
SC14	SC24	不整隅丸三角形	1.6	1.5	0.3	C7	Ⅳ	石坂式 / ※前平式 / ※別府原式	※石鏃 / ※石鏃未製品 / ※剥片 / ※チップ	別府原式期?	焼土や炭化物を含む
SC15	SC11	不整楕円形	2.4	1.8	0.3	D5/E5	Ⅳ	押型文 (楕円)	※剥片	縄文早期	
SC16	SC20	不整隅丸長方形	3.1	2.2	0.4	E4	Ⅳ	前平式 / 別府原式 / ※石坂式	※剥片	別府原式期?	焼土ブロックあり SJ3 と切りあう
SC17	SC156	不整楕円形	1.6	1.0	0.3	C5	Ⅳ	手向山式 / ※前平式 / ※縄文		手向山式期?	土器を多く含む
SC18	SC26	不整楕円形	2.5	1.1	0.3	C7	Ⅳ	※石坂式	※剥片 / ※チップ	石坂式期?	焼土や炭化物を含む
SC19	SC27	不整楕円形	3.8	1.8	0.2 (0.3)	D7	Ⅳ		※剥片 / ※チップ	縄文早期	
SC20	SC22	不整楕円形	3.8	1.4	0.4	E6	Ⅳ	※石坂式 / ※押型文 (山形)	※剥片	縄文早期	焼土や炭化物を含む
SC21	SC37	隅丸長方形	1.6	1.2	0.7	B3	Ⅳ	※石坂式 / ※別府原式 / ※手向山式	※剥片	手向山式期?	陥し穴や貯蔵穴か?

第3表 縄文時代の遺構一覧表(1)

掲載 番号	遺構 番号	平面形	長さ (m)		深さ (m) (最深部)	検出位置		出土遺物 (※報告書未掲載)		時期	備考
			長軸	短軸		Gr.	層位	土器 (深鉢) の型式	石器 (器種)		
SC22	SC31	円形	2.2	2.1	0.9	D7	Ⅳ		※剥片	縄文早期	陥し穴や貯蔵穴か?
SC23	SC44	円形	1.6	1.6	0.4	C6	Ⅳ	手向山式 / ※別府原式	※剥片 / ※チップ	手向山式期	土器がまとまって出土した
SC24	SC134	楕円形	1.0	0.8	0.2	D6	Ⅳ		※剥片	縄文早期	炭化種実 (ノビル鱗茎破片)
SC25	SC135	不整楕円形	1.3	0.9	0.2	D6/E6	Ⅳ			縄文早期	
SC26	SC136	楕円形	1.0	0.8	0.2	D5	Ⅳ		※剥片	縄文早期	
SC27	SC137	楕円形	0.9	0.8	0.1	D5	Ⅳ			縄文早期	
SC28	SC144	不整楕円形	1.4	1.0	0.2	D7	Ⅳ		※剥片	縄文早期	
SC29	SC148	楕円形	1.1	0.6	0.2	F7	Ⅳ	※別府原式		別府原式期?	炭化物を含む
SC30	SC163	楕円形	0.6	0.5	0.3	E5	Ⅳ			縄文早期	
SC31	SC139	楕円形	1.0	0.7	0.2	F5	Ⅳ			縄文早期	炭化物を含む
SC32	SC140	楕円形	0.8	0.8	0.3	F5	Ⅳ			縄文早期	炭化物を含む
SC33	SC145	不整楕円形	1.6	1.0	0.1	D7	Ⅳ			縄文早期	SI154 から変更 炭化種実 (ノビル鱗茎)
SC34	SC150	不整楕円形	0.9	0.6	0.2	F7	Ⅳ		※剥片	縄文早期	炭化物を多く含む
SC35	SC157	不整楕円形	1.0	1.0	0.3	C7	Ⅳ	押型文 (楕円)	※石核 / ※剥片	縄文早期	炭化物を含む
SC36	SC101	不整楕円形	2.5	1.3	0.4	C5	Ⅳ	別府原式 / ※前平式 / ※石坂式	※石鏃未製品 / ※剥片 / ※チップ	別府原式期?	焼土や炭化物を含む
SC37	SC104	不整楕円形	1.9	1.3	0.3	C4	Ⅳ			縄文早期	
SC38	SC106	不整楕円形	1.8	0.9	0.2	B6/C6	Ⅳ	※押型文 (楕円)	※剥片 / ※チップ	縄文早期	
SC39	SC108	不整隅丸長方形	2.2	1.4	0.4	D5	Ⅳ		石鏃 / ※剥片 / ※チップ	縄文早期	
SC40	SC112	不整楕円形	1.6	0.8	0.5+ α	F3	Ⅳ			縄文早期	下層確認で検出
SC41	SC113	円形	1.4	1.3	0.2	D3	Ⅳ			縄文早期	焼土や炭化物を多く含む
SC42	SC115	不整隅丸長方形	1.4	1.1	0.4	C3	Ⅳ		※剥片 / ※チップ	縄文早期	焼土や炭化物を含む
SC43	SC116	不整楕円形	1.7	1.1	0.3	D3	Ⅳ			縄文早期	
SC44	SC130	不整楕円形	1.4	0.9	0.3	C5/C6	Ⅳ			縄文早期	
SC45	SC143	隅丸長方形	1.6	1.2	0.3	D7	Ⅳ			縄文早期	
SC46	SC120	不整隅丸長方形	3.2	1.1	0.3	E2	Ⅳ			縄文早期	炭化物を多く含む
SC47	SC131	不整隅丸長方形	1.0	0.7	0.3	C6	Ⅳ			縄文早期	
SC48	SC127	不整楕円形	2.3	1.0	0.3	C4	Ⅳ		※剥片	縄文早期	
SC49	SC132	不整楕円形	2.1	0.9	0.2	C6	Ⅳ		石斧	縄文早期	
SC50	SC133	不整楕円形	1.3	0.8	0.3	C6	Ⅳ		※剥片 / ※チップ	縄文早期	
SC51	SC152	不整隅丸長方形	2.2	1.7	0.6	D4/E4	Ⅳ	押型文 (連珠)	異形石器	縄文早期	炭化物を含む 炉穴の可能性
SC52	SC154	不整形	2.2	2.0	0.4	E5	Ⅳ	別府原式 / ※前平式	※石鏃未製品 / ※剥片 / ※チップ	別府原式期?	炭化種実 (ノビル鱗茎)
SC53	SC158	楕円形	1.5	0.8	0.3	C7	Ⅳ		※剥片	縄文早期	
SC54	SC160	円形	1.2	1.1	0.5+ α	D7	Ⅳ	※石坂式 / ※別府原式 / ※押型文 (楕円)	※剥片	縄文早期	下層確認で検出
SC55	SC162	不整円形	1.0	1.0	0.4	C5	Ⅳ			縄文早期	炭化物を多く含む
SC56	SC119	不整楕円形	1.8	0.9	0.8	D2/E2	Ⅳ		※剥片	縄文早期	山芋掘削痕の可能性
SC57	SC125	不整楕円形	2.0	1.1	1.2	B3/B4	Ⅳ		※磨石 / ※敲石	縄文早期	山芋掘削痕の可能性
SC58	SC129	不整楕円形	2.0	1.0	0.8	B5	Ⅳ			縄文早期	柱穴の可能性
SC59	SC123	不整楕円形	2.1	1.4	0.8	C3/D3	Ⅳ	前平式		前平式期	土器が方形に組んで出土した
SC60	SC117	不整円形	1.0	1.0	1.7	D3	Ⅳ	石坂式 / ※別府原式	※剥片	別府原式期?	柱穴の可能性
SC61	SC124	楕円形	1.2	1.0	1.1	D4	Ⅳ	前平式 / ※石坂式	※剥片	石坂式期?	貯蔵穴の可能性
SC62	SC161	不整円形	1.0	0.8+ α	1.8	C8/D8	Ⅳ	別府原式 / ※石坂式	※剥片	別府原式期?	貯蔵穴の可能性
SS1	SC102	不整楕円形	1.7	1.2	1.8	C5	Ⅳ	別府原式 / ※石坂式	※剥片 / ※チップ	縄文早期	陥し穴 逆茂木痕 (1)
SS2	SC109	楕円形	2.0	1.4	2.1	C7/D7	Ⅳ	石坂式 / ※別府原式 / ※押型文 (山形)	※石鏃 / ※剥片 / ※チップ	縄文早期	陥し穴 逆茂木痕 (2)
SS3	SC110	不整楕円形	2.1	1.4	2.2	G2	Ⅳ	石坂式 / 別府原式	※石鏃 / ※石鏃未製品 / ※剥片 / ※チップ / ※磨石	縄文早期	陥し穴 逆茂木痕 (2)
SS4	SC118	楕円形	1.6	0.9	1.9	D3	Ⅳ		石鏃 / ※剥片 / ※磨石	縄文早期	陥し穴 逆茂木痕 (2)
SS5	SC121	不整楕円形	3.3	1.2	1.3	E2/F2	Ⅳ			縄文早期	陥し穴 逆茂木痕 (9)
SS6	SC141	不整隅丸三角形	2.1	1.8	2.1	D6/E6	Ⅳ			縄文早期	陥し穴 逆茂木痕 (2)
SS7	SC147	楕円形	2.5	1.2	2.0	E7	Ⅳ	※石坂式 / ※別府原式 / ※押型文 (楕円)	※剥片	縄文早期	陥し穴 逆茂木痕 (2)
SS8	SC151	不整楕円形	1.6	1.0	2.0	D4	Ⅳ	石坂式	石鏃 / ※剥片	縄文早期	陥し穴 逆茂木痕 (2)
SK1	SC9	不整形	3.1	2.7	0.2	C4	Ⅳ			縄文早期	自然流路
SK2	SC10	不整形	10.0	9.4	0.4	D4/E4/E5	Ⅳ	石坂式 / 押型文 (楕円 / 連珠 / 山形) / 手向山式 / ※前平式 / ※別府原式 / ※下刺峯式 / ※中原式 / ※燃糸文	石斧 / ※石鏃未製品 / ※石核 / ※剥片 / ※チップ	手向山式期?	自然流路
SK3	SC13	不整形	6.40+ α	2.9	0.5	F4/F5	Ⅳ	※石坂式 / ※別府原式 / ※押型文 (楕円)	※剥片	縄文早期	自然流路

第4表 縄文時代の遺構一覧表(2)



配石遺構 (SU)・集石遺構 (SI)

掲載 番号	遺構 番号	長さ (m)		深さ (m)	分類	検出位置		出土遺物 (※報告書未掲載)		備考
		長軸	短軸			Gr.	層位	土器 (深鉢) の型式	石器 (器種)	
SU1	SI4	1.6	0.8	—		B3/C3	Ⅳ		※台石	配石遺構
SU2	SI177	1.4	1.2	(0.2)		F7	Ⅳ	※別府原式	磨石 / 台石 / ※敲石 / ※剥片	配石遺構
SI1	SI21	1.2	1.1	—	I a	D5	Ⅳ			
SI2	SI10	1.5	0.8	—	I b	B5	Ⅳ			
SI3	SI19	1.9	1.3	0.4	I b	C5	Ⅳ	石坂式 / ※別府原式 / ※手向山式	石鏃 / ※剥片	
SI4	SI20	0.4	0.4	0.1	I b	C5	Ⅳ	手向山式 / 妙見・天道ヶ尾式	台石	
SI5	SI3	1.1	1.0	0.2	II a	C3	Ⅳ	※石坂式 / ※別府原式	※剥片	炭化材 (コナラ属コナラ節)
SI6	SI5	1.0	0.8	0.1	II a	B3	Ⅳ			
SI7	SI6	0.9	0.5	0.2	II a	B3	Ⅳ	(型式不明土器)		
SI8	SI7	0.4	0.3	0.1	II a	C3	Ⅳ	※別府原式	※剥片	
SI9	SI9	1.4	0.9	0.2	II a	B4/C4	Ⅳ		※剥片	
SI10	SI14	1.2	0.9	0.3	II a	B6	Ⅳ	※手向山式		炭化材 (コナラ属コナラ節)
SI11	SI18	0.8	0.7	0.1	II a	C4	Ⅳ		※石鏃	
SI12	SI23	1.0	0.8+	0.2+	II a	C6	Ⅳ		※剥片	建物基礎に攪乱される
SI13	SI27	0.9	0.8	0.2	II a	E7	Ⅳ	※別府原式	※石鏃 / ※石鏃未製品 / ※剥片	炭化材 (コナラ属コナラ節)
SI14	SI36	0.6	0.3+	0.1+	II a	E7	Ⅳ		台石	SI13 に切られる
SI15	SI31	0.8	0.7	0.5	II a	E7	Ⅳ	※石坂式	※磨石	一部攪乱される
SI16	SI32	1.1	1.0	0.2	II a	F4/F5	Ⅳ	※押型文 (楕円)	※石鏃未製品	SK3 に切られる
SI17	SI34	0.8	0.8	0.2	II a	F2	Ⅳ	※別府原式 / ※押型文 (楕円)	※剥片	
SI18	SI11	0.9	0.8	0.1	II b	B5/C5	Ⅳ		※剥片 / ※台石	
SI19	SI22	1.4	1.1	0.1	II b	C6	Ⅳ		石鏃 / ※剥片	
SI20	SI35	0.9	0.5	0.2	II b	B5	Ⅳ	手向山式		炭化種実 (ノビル鱗茎)
SI21	SI111	0.9	0.5	0.1	II b	E2	Ⅳ		※剥片	
SI22	SI112	0.9	0.7	0.2	II b	E3	Ⅳ	※別府原式 / ※押型文 (楕円) / ※手向山式	※石鏃 / ※剥片 / ※磨石	
SI23	SI25	0.9	0.5	0.2	III a	C6	Ⅳ	※手向山式	台石 / ※剥片	
SI24	SI26	1.2	0.8	0.3	III a	E3	Ⅳ		※剥片	
SI25	SI12	1.0	1.0	0.5	III b	B5	Ⅳ	※別府原式 / ※押型文 (楕円)	※石鏃 / ※剥片	
SI26	SI24	1.2	0.8	0.4	III b	E6/E7	Ⅳ	石坂式	※剥片	炭化材 (コナラ属コナラ節)
SI27	SI30	2.2	1.9	0.2	III b	C3	Ⅳ	押型文 (格子目) / ※別府原式 / ※手向山式	※剥片	
SI28	SI1	0.7	0.6	0.2	III c	B2	Ⅳ	押型文 (山形)		
SI29	SI13	1.3	0.8	0.2	III c	B5	Ⅳ	押型文 (山形)		
SI30	SI28	0.9	0.8	0.3	III c	E2/E3	Ⅳ		※石鏃 / ※剥片	炭化材 (カヤ)
SI31	SI29	0.9	0.6+	0.4	III c	E4	Ⅳ		石鏃	SC11 に切られる
SI32	SI33	0.9	0.8	0.2	III c	F2	Ⅳ		※剥片	炭化材 (クリ)
SI33	SI170	0.8	0.7	0.2	III c	D5/D6	Ⅳ		※台石	
SI34	SI102	1.0	0.8	—	I a	E2	Ⅳ	※別府原式		
SI35	SI103	0.5	0.5	—	I a	E2	Ⅳ			
SI36	SI147	0.5	0.4	—	I a	D6	Ⅳ		※台石	
SI37	SI108	0.7	0.6	—	I a	C2	Ⅳ		※剥片	
SI38	SI148	0.5	0.3	—	I a	D6	Ⅳ			
SI39	SI150	0.6	0.4	—	I a	C2	Ⅳ			
SI40	SI164	1.1	0.7	—	I a	B3	Ⅳ		磨石 / ※敲石	
SI41	SI165	0.5	0.5	—	I a	E6/E7	Ⅳ		※台石	
SI42	SI143	1.6	1.3	0.1	I b	D5	Ⅳ			
SI43	SI151	1.1	0.6	0.1	I b	C2	Ⅳ	撚糸文	※台石	
SI44	SI171	0.8	0.8	0.2	I b	D3	Ⅳ		※剥片 / ※磨石	
SI45	SI105	1.2	1.0	0.1	II a	E7	Ⅳ	※石坂式	※磨石 / ※台石	
SI46	SI113	1.0	1.0	0.2	II a	D3	Ⅳ		※剥片	
SI47	SI118	1.0	0.9	0.3	II a	D4	Ⅳ	※別府原式		
SI48	SI119	2.1	1.9	0.4	II a	E4	Ⅳ	※別府原式 / ※桑ノ丸式 / ※押型文 (楕円)	※剥片	
SI49	SI120	1.2	1.1	0.3	II a	E4	Ⅳ	※別府原式	※剥片	SI48 やトレンチに切られる
SI50	SI122	0.6	0.5	0.2	II a	D5	Ⅳ	※石坂式 / ※押型文 (楕円)	石鏃 / ※剥片	
SI51	SI123	0.8	0.8	0.3	II a	D5	Ⅳ		※剥片	炭化材 (コナラ属コナラ節)
SI52	SI124	0.9	0.8	0.2	II a	D5	Ⅳ			
SI53	SI132	0.8	0.6	0.2	II a	E7	Ⅳ			
SI54	SI139	0.9	0.8	0.1	II a	E7	Ⅳ	押型文 (楕円)		
SI55	SI140	1.0	0.9	0.4	II a	F7	Ⅳ	押型文 (楕円) / ※石坂式		
SI56	SI141	0.9	0.9	0.2	II a	F7	Ⅳ		※剥片	
SI57	SI146	0.7	0.5	0.1	II a	E4	Ⅳ			
SI58	SI156	1.1	1.1	0.3	II a	F4	Ⅳ	石坂式	※剥片	SI62 と切りあう
SI59	SI157	1.1	1.0	0.5	II a	C2	Ⅳ	石坂式 / ※押型文 (楕円)	※剥片	
SI60	SI160	0.8	0.8	0.4	II a	E6	Ⅳ	※別府原式		
SI61	SI166	1.1	0.8	0.5	II a	E6	Ⅳ		石鏃未製品 / ※剥片	炭化材 (コナラ属アカガシ亜属)
SI62	SI168	1.1	1.0	0.4	II a	F4	Ⅳ		※剥片	炭化材 (コナラ属コナラ節)
SI63	SI175	0.9	0.5	0.2	II a	G6	Ⅳ			

第5表 縄文時代の遺構一覧表(3)

掲載 番号	遺構 番号	長さ (m)		深さ (m)	分類	検出位置		出土遺物 (※報告書未掲載)		備考	
		長軸	短軸			Gr.	層位	土器 (深鉢) の型式			石器 (器種)
S164	SI178	1.1	1.1	0.5	II a	C2	XV				
S165	SI179	1.4	1.1	0.3	II a	D3	XV	押型文 (楕円)			
S166	SI101	1.3	1.1	0.1	II b	C5	XV	別府原式	凹石 / ※剥片 / ※磨石	炭化種実 (ノビル鱗茎)	
S167	SI117	0.8	0.7	0.2	II b	D4	XV				
S168	SI121	0.7	0.6	0.2	II b	G4	XV	※別府原式	※剥片		
S169	SI125	0.5	0.5	0.1	II b	D5	XV				
S170	SI126	1.1	0.9	0.2	II b	D5	XV				
S171	SI127	0.8	0.6	0.1	II b	D5	XV	※押型文 (楕円 / 山形)	※剥片	炭化材 (コナラ属コナラ節)	
S172	SI130	1.1	1.0	0.2	II b	D6	XV				
S173	SI133	0.6	0.6	0.1	II b	C7	XV	※押型文 (山形)			
S174	SI136	0.6	0.6	0.1	II b	E7	XV				
S175	SI142	0.5	0.5	0.2	II b	D5	XV		※剥片		
S176	SI144	0.8	0.7	0.1	II b	F5	XV				
S177	SI174	0.7	0.6	0.1	II b	B6	XV	※別府原式			
S178	SI109	1.9	1.5	0.3	III a	D4	XV	※押型文 (山形)	磨石 / ※剥片	炭化材 (コナラ属コナラ節)	
S179	SI115	0.8	0.6	0.2	III a	E3	XV				
S180	SI116	1.2	0.9	0.2	III a	E3	XV	※押型文 (楕円)			
S181	SI162	0.7	0.7	0.5	III a	D3	XV				
S182	SI137	0.7	0.7	0.3	III a	E7	XV				
S183	SI163	1.5	1.3	0.2	III a	F4	XV				
S184	SI149	0.9	0.8	0.3	III a	B2	XV			炭化材 (スダジイ)	
S185	SI180	1.1	1.0	0.6	III a	C4	XV				
S186	SI106	0.5	0.4	0.1	III b	C2	XV				
S187	SI104	1.5	1.3	0.5	III b	D7	XV	※押型文 (楕円) / ※桑ノ丸	※剥片	炭化材 (クスノキ)	
S188	SI107	1.3	1.0	0.3	III b	C2	XV		※台石		
S189	SI128	1.3	1.2	0.3	III b	E5	XV	※別府原式	※剥片 / ※敲石 / ※台石	炭化種実 (ノビル鱗茎)	
S190	SI129	1.1	0.9	0.2	III b	E5	XV	別府原式 / ※押型文 (山形)	※剥片 / ※台石		
S191	SI134	1.6	1.3	0.6	III b	B7	XV	※別府原式 / ※押型文 (山形)	※石織未製品 / ※剥片	炭化材 (コナラ属コナラ節)	
S192	SI135	0.9	0.9	0.2	III b	B7	XV				
S193	SI145	1.0	0.9	0.3	III b	E3	XV		※剥片		
S194	SI158	0.8	0.7	0.2	III b	E4	XV		※磨石 / ※台石		
S195	SI155	0.9	0.7	0.1	III b	H6	XV	※別府原式 / ※石板式	※台石		
S196	SI161	1.1	1.0	0.8	III b	E2	XV		※石織		
S197	SI159	1.2	1.1	0.6	III b	C6	XV	押型文 (山形) / 無文 / ※別府原式 / ※押型文 (楕円)	※剥片		
S198	SI173	1.3	1.1	0.6	III b	F3	XV	手向山式 / ※別府原式	※石織未製品	炭化材 (コナラ属コナラ節)	

第6表 縄文時代の遺構一覧表(4)

## 第9節 縄文時代早期包含層の遺物

縄文時代早期の遺物については、第Ⅹ層（鬼界アカホヤ火山灰層）の下位にある、第ⅩⅢ層から第ⅩⅣ層を掘削時に出土した遺物について報告する。

### 1 土器

縄文時代早期における土器は、器形・文様・器面調整を考慮しⅠ類～Ⅹ類に分類した。以下、各類の特徴を略述する。

#### Ⅰ類土器

器形は底部から口縁部までほぼ直線的に立ち上がり円筒形を呈する。文様は口縁部に貝殻やヘラ状工具による縦位や斜位の刺突文が施される。胴部外面には、横位や斜位の貝殻条痕が幅広で明瞭に施されている。内面にはケズリが行われているものが多い。

#### Ⅱ類土器

器形は口縁部が外反するものと直口するものがあり、バケツ形に近い形を呈する。底部は平底である。文様は口縁部に横位、縦位、斜位、羽状の貝殻刺突文を施す。口唇部に刻目を施す。胴部外面は綾杉状を基本とする貝殻条痕文が施される。内面は丁寧なナデが行われている。

#### Ⅲ類土器

器形は直口もしくは外傾して直線的に開くものと外反するものがある。文様は口縁部外面に貝殻刺突文を施すものと施さないものがある。胴部外面には底部付近を除いて貝殻条痕を斜位に施し、胴部内面は細かなミガキ調整を行う。

#### Ⅳ類土器

器形は口縁部がわずかに内湾し、胴部は直線的もしくはややすぼまりながら底部へ至る。文様は外面に貝殻刺突文を施す。器面調整は内外面ともにナデが行われる。

#### Ⅴ類土器

器形は口縁部が直口するか、ゆるやかに内湾するバケツ形を呈する。文様は櫛歯状工具や貝殻腹縁部による短沈線や条線を連続して施すものと、短沈線や条線で鋸歯状文や縦位の流水文を施すものがある。器面調整は内外面ともにナデが行われる。

#### Ⅵ類土器

器形は直口するものとわずかに外傾するものとある。文様は口縁部から胴部上半に集約されており、貝殻条痕を横位のみならず斜位と縦位に施文するものがある。

#### Ⅶ類土器

原体を回転し施文する一群を本類としてまとめた。器形は大きく外反するものとやや外反するものがあるが、一部直口するものもある。胴部は直線的もしくはややすぼまりながら底部に至るものや屈曲部をもつものがある。器面調整はナデもしくはケズリが行われる。

#### Ⅷ類土器

口縁部が大きく外反し、胴部で屈曲し、底部に向けてすぼまる器形を呈する。口縁部から頸部にかけて刻目突帯を巡らし、胴部に貼付突帯、沈線文、刺突文を施すものもある。器面調整は内外面ともにナデが行われる。

## Ⅸ類土器

口縁部は外反し、胴部はやや膨らみ、底部に向けてすぼまる器形を呈す。口縁部から頸部にかけて刻目突帯を巡らすものや、胴部に瘤状突起、貼付突帯、刺突文を施すものもある。器面調整は内外面ともにナデが行われている。

## X類土器

I～Ⅸ類までに分類できなかったものである。

以上の分類に従って、抽出した土器について記述する。

### (1) I類土器(第90・91図 26～47)

I類土器は底部から口縁部までほぼ直線的に立ち上がり円筒形を呈し、口縁部外面に貝殻やヘラ状工具による縦位や斜位の刺突文、胴部外面に横位や斜位の貝殻条痕が幅広く明瞭に施される一群である。

**分類** 口縁部の施文や形態により以下のとおり、I a～I e類に細分した。

〔I a類〕 口唇部と口縁部に稜を形成し、口縁部端部にヘラ状工具による刺突文を施すもの(26)

〔I b類〕 口唇部と口縁部に稜を形成し、口唇部に刺突文を施すもの(27)

〔I c類〕 口縁部に斜位の貝殻刺突文を1段施すもの(28・29)

〔I d類〕 口縁部にヘラ状工具による刺突文を1段施すもの(30～34)

〔I e類〕 口縁部にヘラ状工具による刺突文を2段施すもの(35～38)

なお、口縁部をもたない胴部や底部については細分せずI類とした。(39～47)

**出土分布** I類土器の出土分布図を第89図に示す。出土数が少なく細分による差は見られないものの、全体的に調査区西側(標高181.5～182.0m)に集中する。26(I a類)が出土した59号土坑(SC59)や、35(I e類)が遺構内の土坑上層から出土した3号平地式建物跡(SB3)も調査区の西側に位置する。

### 土器の特徴

26～38は口縁部を有するものである。

26は59号土坑(SC59)の埋土内から出土した。ほぼ完形となる。口唇部と口縁部の境に稜を形成し、口唇部と口縁部上端にヘラ状工具による刺突文を施している。胴部は斜位の貝殻条痕文を施す。内面は斜位または縦位のケズリの後、貝殻条痕文を施す。口縁部に補修孔をもつ。

同様に27も口唇部と口縁部の境に稜を形成するが、ヘラ状工具による刺突文は口唇部のみで、口縁部には横位の貝殻条痕文の後、下位に斜位の貝殻条痕文を施している。内面は横位または縦位のケズリ調整を行う。

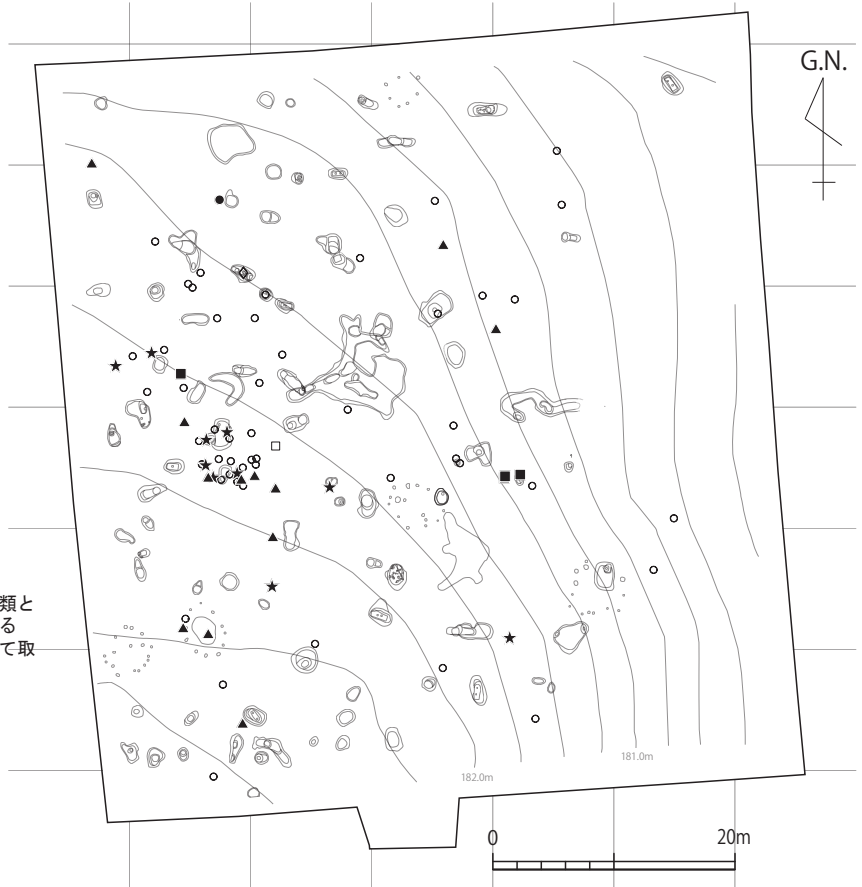
28・29は口縁部に貝殻刺突文を施す。28は押引状の貝殻刺突文を斜位または横位に施している。内面は横位または斜位のケズリの後、ナデ調整を行う。29は口縁部に斜位の貝殻刺突文を1段施す。内面は、上位は横位のナデ、その下位は斜方向のケズリ状のナデ調整を行う。一部棒状工具による斜位の凹線が見られる。胎土に灰褐色粒や灰白色粒を含む。

30～34は口縁部にヘラ状工具による刺突文を1段施す。30～32は胴部外面に横位または斜位の貝殻条痕文を施し、内面も貝殻条痕による器面調整を行う。30は胎土に灰白色粒や褐灰色粒を含む。31は波状口縁の可能性があり、胴部全体に斜位の条痕文を施した後、口縁部に横位の条痕文、口縁部上端に斜位の刺突文を施している。32・33は胎土に灰白色粒を多く含む。33の内面は横方向のケズリによる調整を行う。34は内外ともに灰黄褐色の色調で、内面は斜方向のケズリによる器面調整を行う。

I 類土器

- ◇ … I a類
- … I b類
- … I c類
- ★ … I d類
- ▲ … I e類
- … I 類

・報告書に掲載した遺物に限らず分類と座標が分かるものについては図示する  
 ・遺構埋土及びグリッド一括において取上げた遺物は図示していない  
 ・等高線はXV層下面にて作成  
 ・遺構はXV～XVI層にて検出したもの  
 (上記はII類以下も同様)

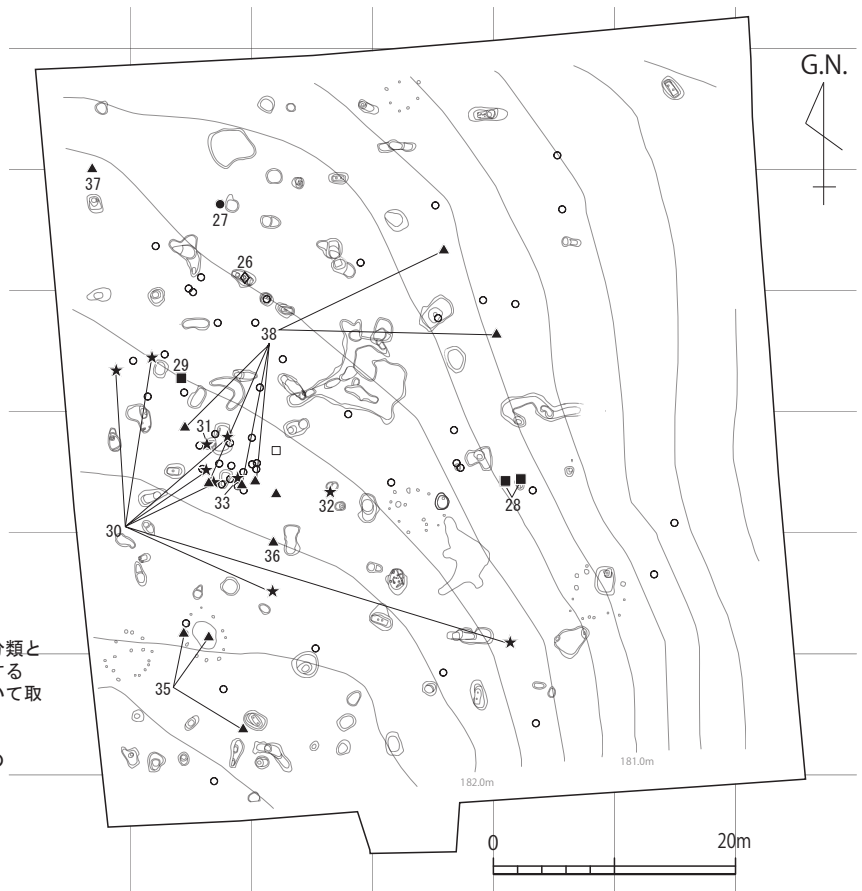


I 類土器

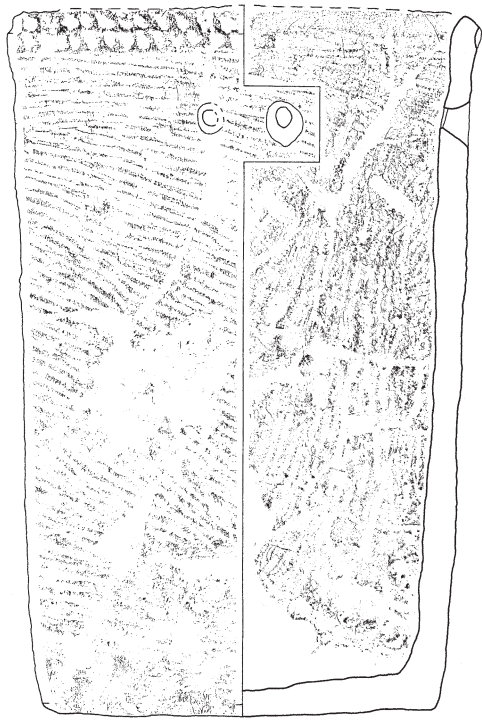
接合状況

- ◇ … I a類
- … I b類
- … I c類
- ★ … I d類
- ▲ … I e類
- … I 類

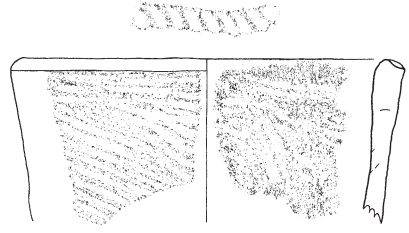
・報告書に掲載した遺物に限らず分類と座標が分かるものについては図示する  
 ・遺構埋土及びグリッド一括において取上げた遺物は図示していない  
 ・等高線はXV層下面にて作成  
 ・遺構はXV～XVI層にて検出したもの  
 (上記はII類以下も同様)



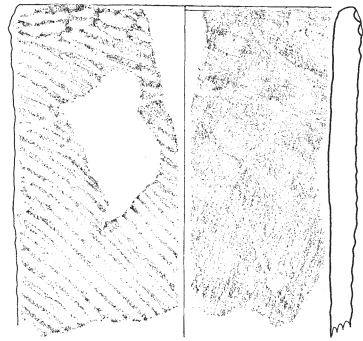
第 89 図 I 類土器出土分布図



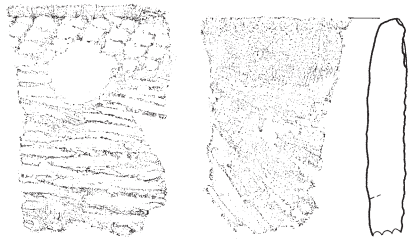
26



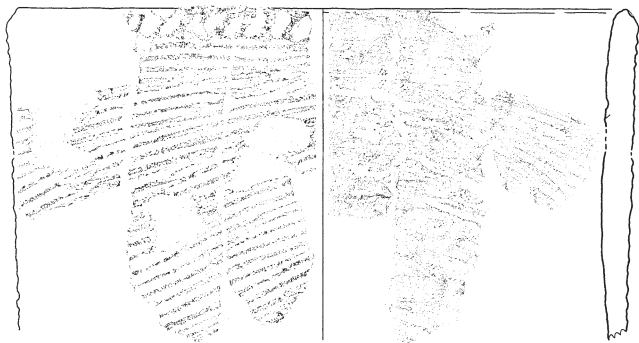
27



28



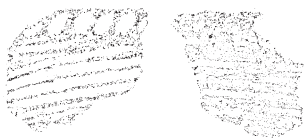
29



30



31



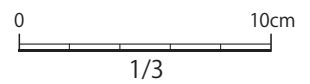
32



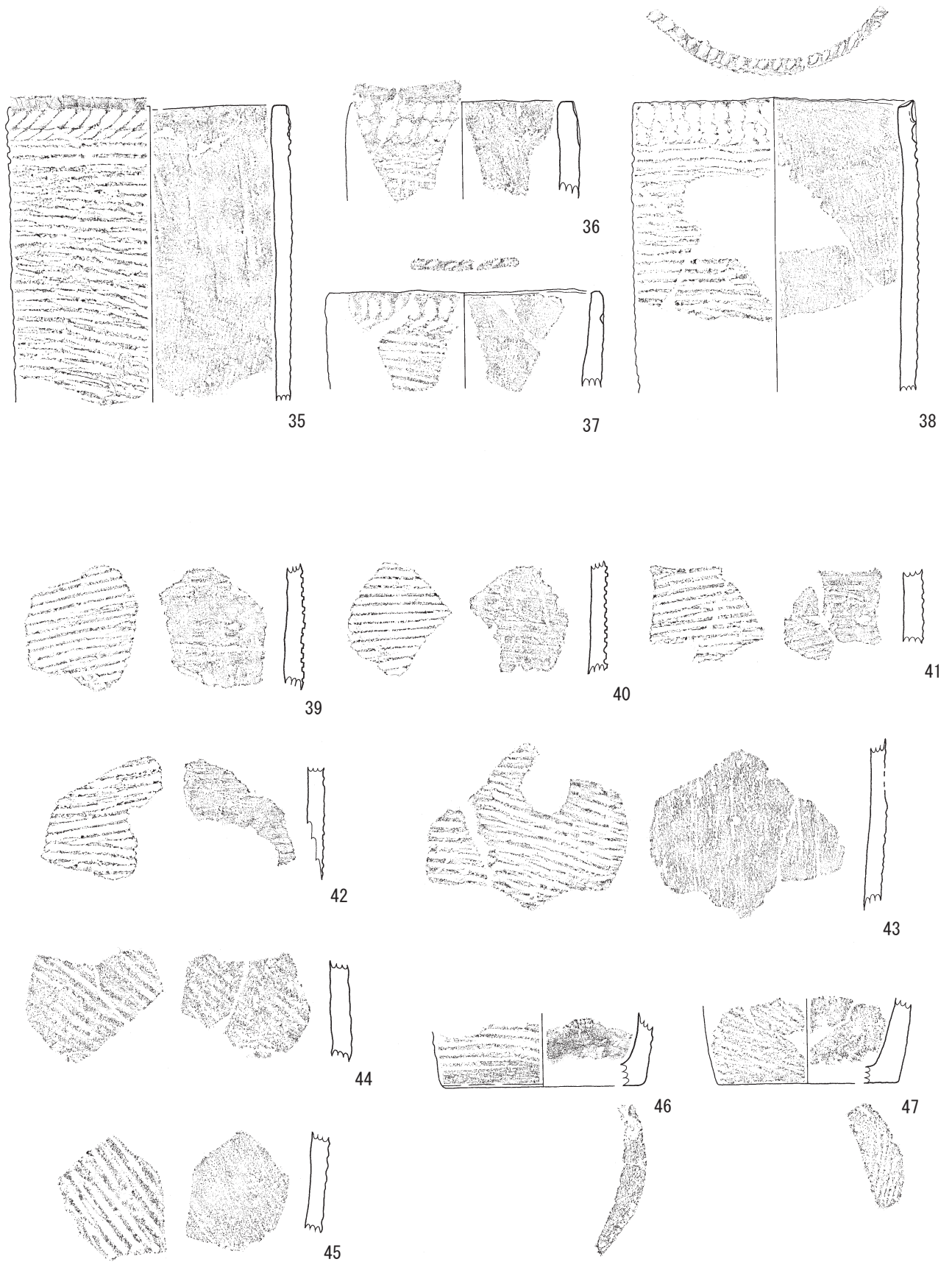
33



34



第90图 I類土器実測図(1)



第91图 I類土器実測图(2)

0 10cm  
1/3

35～38は口縁部にヘラ状工具による刺突文を2段施す。35は3号平地式建物跡(SB3)内の土坑の上層からまとまって出土した。口縁部上端にヘラ状工具による刺突文を2段施した後、横ナデすることにより口唇部を平坦に仕上げている。また、内面は口縁部から胴部にかけて縦方向のケズリによる器面調整を行い、口縁部の縁に沿って指頭圧痕が見られる。36は風化により施文が不明瞭であるが、口縁部にヘラ状工具による刺突文を2段施した後、胴部に横位または縦位の条線が交差するような施文が確認できる。37・38は口唇部に刻目をもつ。37は口縁部上端に縦位の刺突文を施した後、その下に斜位の刺突文を巡らす。38は口縁部上端にヘラ状工具による縦位の刺突文を施した後、その下に「く」の字状の刺突文を巡らす。口唇部の刻目は工具の刺突の加減によるものか、斜位に浅く施すものや、縦位に深く施すことで隣り合う刻目との境に稜を形成するものなどがある。内面は、縦方向のケズリを基本とするが、口縁部内面は横方向によるケズリによって器面調整を行う。工具痕が明瞭に残る部分や指頭圧痕が認められる部分がある。

39～45は胴部である。

39～42は外面に横位の貝殻条痕文を施し、内面にも貝殻条痕による器面調整の痕跡が見られる。胎土は橙色の色調を基本とし、5mm前後の灰白色粒を多量に含み、焼成時に灰白色粒が爆ぜたような痕跡をもつ。41は61号土坑(SC61)の埋土内から出土した。42は外面の一部に斜位の貝殻条痕文を施す。

43～45は外面に斜位の貝殻条痕文を施し、内面にはケズリや貝殻条痕による器面調整を行う。胎土はにぶい黄橙色の色調を基本とする。43は内面を縦方向のケズリで器面調整を行い、明瞭な工具痕が確認できる。44は風化が著しく不明瞭ではあるが、内面に貝殻条痕による器面調整を行う。45は16号土坑(SC16)の埋土内から出土し、内面は斜方向のケズリによる器面調整を行う。

46・47は胴部から底部が残存するものである。

46は底部付近まで横位の貝殻条痕文を明瞭かつ幅広に施す。底部外面は欠損して剝離した部分に貝殻刺突文が見られるので、貝殻刺突による器面調整を行った後、粘土を被せ、ナデを施すことで平らに仕上げたものと考えられる。47は風化により不明瞭ではあるが、底部付近まで斜位の貝殻条痕を幅広に施す。底部外面は貝殻条痕による器面調整を行う。

## (2) II類土器(第94～107図 48～191)

II類土器はバケツ形を呈し、口縁部に横位、縦位、斜位、羽状等の貝殻刺突文、胴部に綾杉状を基本とする貝殻条痕文を施す一群である。口縁部は外反するものと直口するものがある。内面は丁寧なナデが行われているものが多い。

分類 口縁部の施文や形態により、以下のとおりII a～II k類に細分した。

〔II a類〕口縁部が外反し、口縁部外面に横位の貝殻刺突文を施すもの(48～75)

〔II b類〕口縁部が外反し、口縁部外面に縦位の貝殻刺突文を施すもの(76)

〔II c類〕口縁部が外反し、口縁部外面に斜位の貝殻刺突文を施すもの(77～90)

〔II d類〕口縁部が外反し、口縁部外面に斜位の刺突文を方向を違えて施すことにより羽状のモチーフを描くもの(91～107)

〔II e類〕口縁部が直口または外傾し、横位の貝殻刺突文を施すもの(108～122)

〔II f類〕口縁部が直口または外傾し、縦位の貝殻刺突文を施すもの(123～128)

〔II g類〕口縁部が直口または外傾し、斜位の貝殻刺突文を施すもの(129～133)



〔Ⅱ h 類〕口縁部が直口または外傾し、口縁部外面に斜位の刺突文を方向を違えて施すことにより羽状のモチーフを描くもの (134 ~ 137)

〔Ⅱ i 類〕口縁部が直口または外傾し、横位や斜位、縦位の貝殻刺突文を施す薄手で小型の土器 (138 ~ 140)

〔Ⅱ j 類〕口縁部が外傾し、貝殻刺突文を外面全体に施すもの (141・142)

〔Ⅱ k 類〕口縁部が直口または外傾し、細かい条線を縦位または斜位に施すもの (143・144)

なお、口縁部をもたない胴部や底部については細分せずⅡ類とした。(145 ~ 191)

**出土分布** Ⅱ類土器の出土分布図を第92・93図に示す。Ⅱ類に分類した土器は出土数が多く、調査区全体から出土しているが、調査区南東側(標高181m前後)に集中する箇所が認められる。細分した土器の分布傾向を見てみると、Ⅱd類は調査区南東側よりも西側や北側に集中する。また、Ⅱe~Ⅱk類は調査区北側からは出土せず、中央から南側の範囲で出土している。Ⅱg類は調査区南側中央付近(標高181.75~182.0m)に集中する。

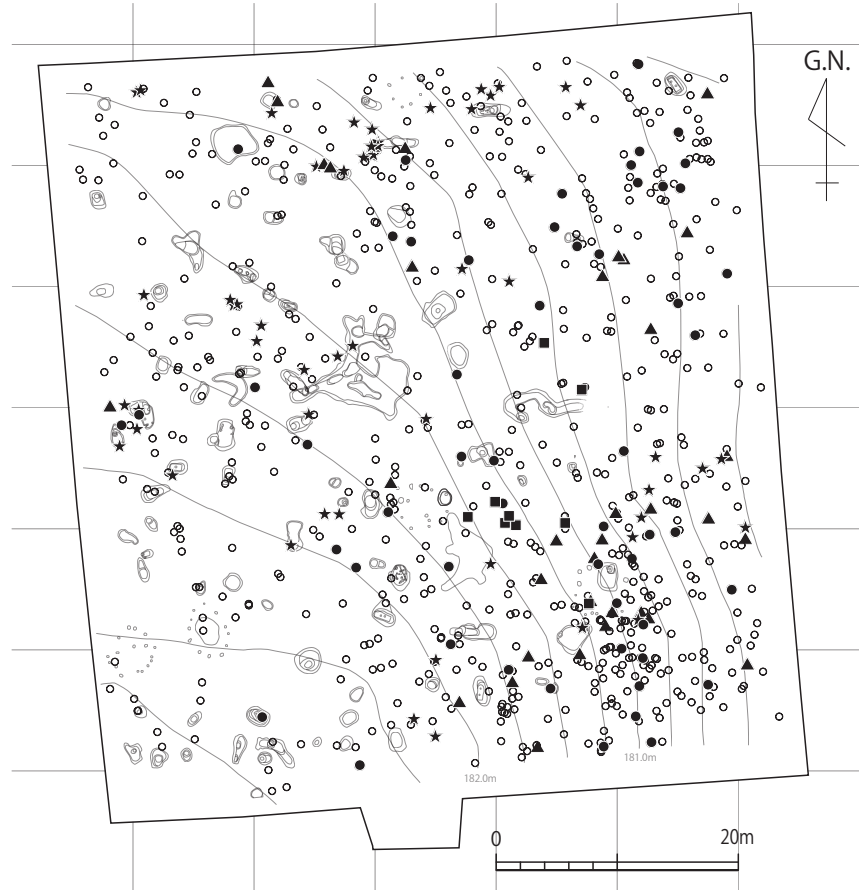
### 土器の特徴

48 ~ 144 (105を除く)は口縁部である。

48 ~ 75は口縁部が外反し、口縁部外面に横位の貝殻刺突文を施す一群である。48は口縁部外面に横位の貝殻刺突文を施した後、下位に斜位の貝殻刺突文を連続して施す。口唇部は丸みを帯び、内面近くに刻目をもつ。49 ~ 60 (55・56を除く)は口縁部外面に横位の貝殻刺突文を2段施した後、下位に斜位の刺突文を連続して施す。口唇部に刻目をもつ。49は大型の器形である。口唇部は丸みを帯び、羽状の刻目を連続して施す。50は口唇部に斜位の刻目をもち、横位または斜位の貝殻刺突文の下位に綾杉状の貝殻条痕文を施す。内面は丁寧なナデ調整を行う。51は口唇部に浅い刻目を施し、内面は工具によるナデ調整を行う。52・53は口縁部外面に横位の貝殻刺突文を2段施し、その下位に工具による刺突文を連続して巡らす。52は波状口縁と考えられる。口唇部に浅い刻目を施す。胴部外面は綾杉状の貝殻条痕文を施し、内面はナデ調整を丁寧に行う。53は口唇部を平坦に仕上げ、斜位の刻目を入れる。54は口唇部に斜位の刻目を連続して施す。55は口縁部外面に横位の貝殻刺突文を施した後、その下位に斜位または縦位の条痕文を施し、上に尖った羽状と思われる刺突を縦方向に施文する。施文方法や胎土の状況から169と170、187と同一個体と見られる。56は器壁が薄く、口縁部上端をほぼ直角に屈曲させ、口唇部を平坦に仕上げる。57は胴部外面に綾杉状の条痕文が見られない。58は口縁部外面に細長い貝殻腹縁による刺突文を横方向に線状に2段施す。59は口唇部に間隔を密にして斜位の刻目を入れる。60は2号陥し穴(SS2)の埋土内から出土した。口唇部に格子目状の施文をもつ。61は口唇部に貝殻刺突文を連続して施し、口縁部外面に横位の貝殻刺突文を施す。62 ~ 75は口縁部外面に横位の貝殻刺突文を3段以上施し、67を除き、口唇部に刻目をもつ。62は口縁部外面に横位の貝殻刺突文を3段施し、3段目に先端を重ねるように斜位の貝殻刺突文を巡らす。63は口唇部に貝殻による刺突文を連続して施す。64は口唇部の内面側に刻目を施す。風化が著しく、内面は広く剝離する。65は先端が先細る器形で、丸みを帯びた口唇部に連続して刻目を入れる。66は口縁部内面にナデ調整を行い、斜方向の工具痕が残る。67は口唇部の風化が著しく、刻目は不明瞭である。68は口縁部が大きく外反し、口縁部外面に横位の貝殻刺突文を3段施した後、斜位の貝殻刺突文を連続して巡らし、その下位に綾杉状の条痕文を施す。69は口縁部内面を横方向にナデ調整を行う。70は口縁部外面に横位の貝殻刺

Ⅱ類土器 (Ⅱa～Ⅱd類)

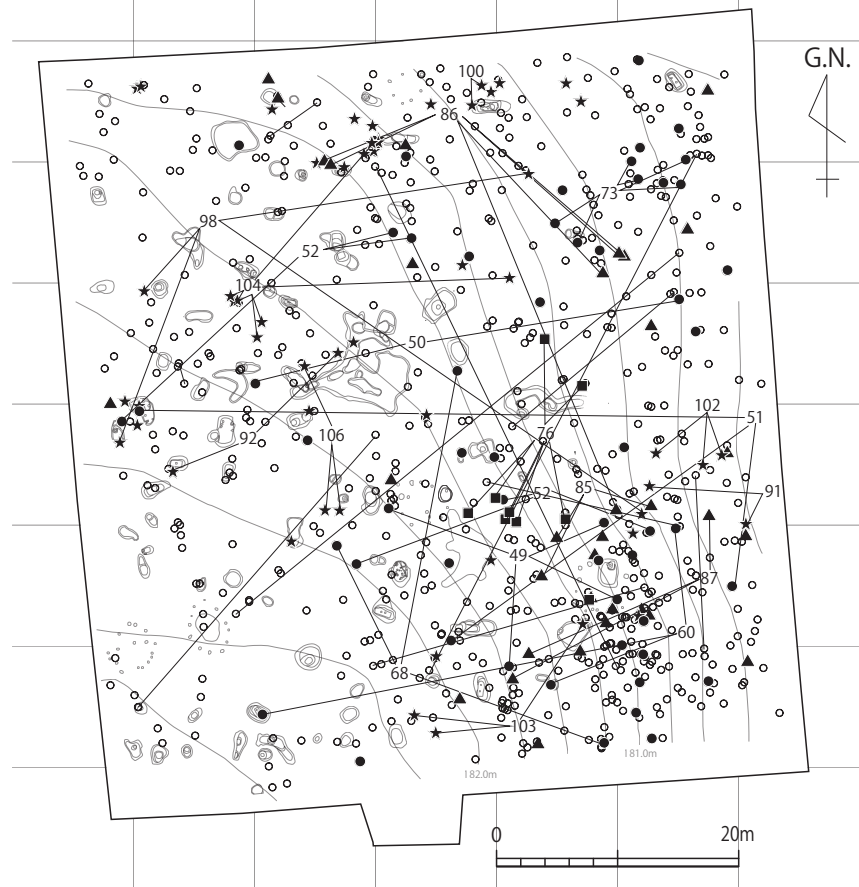
- … Ⅱa類
- … Ⅱb類
- ▲ … Ⅱc類
- ★ … Ⅱd類
- … Ⅱ類



Ⅱ類土器 (Ⅱa～Ⅱd類)

Ⅱa～Ⅱd類の接合状況  
(Ⅱ類の接合状況は省略)

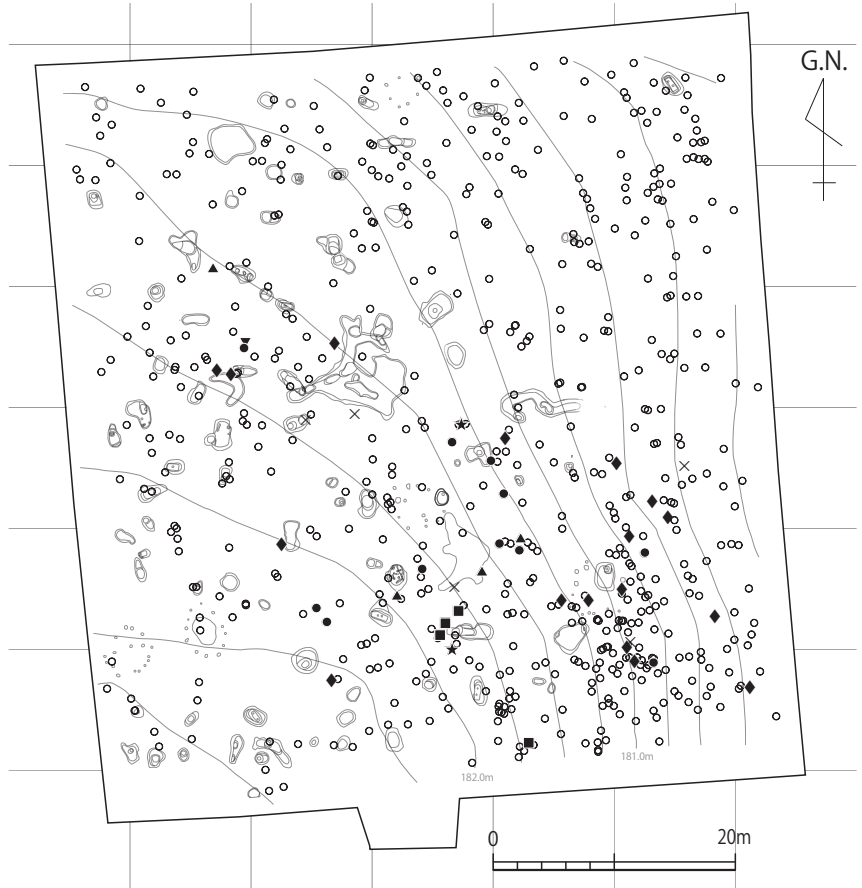
- … Ⅱa類
- … Ⅱb類
- ▲ … Ⅱc類
- ★ … Ⅱd類
- … Ⅱ類



第 92 図 Ⅱ類土器出土分布図(1)

Ⅱ類土器 (Ⅱe~Ⅱk類)

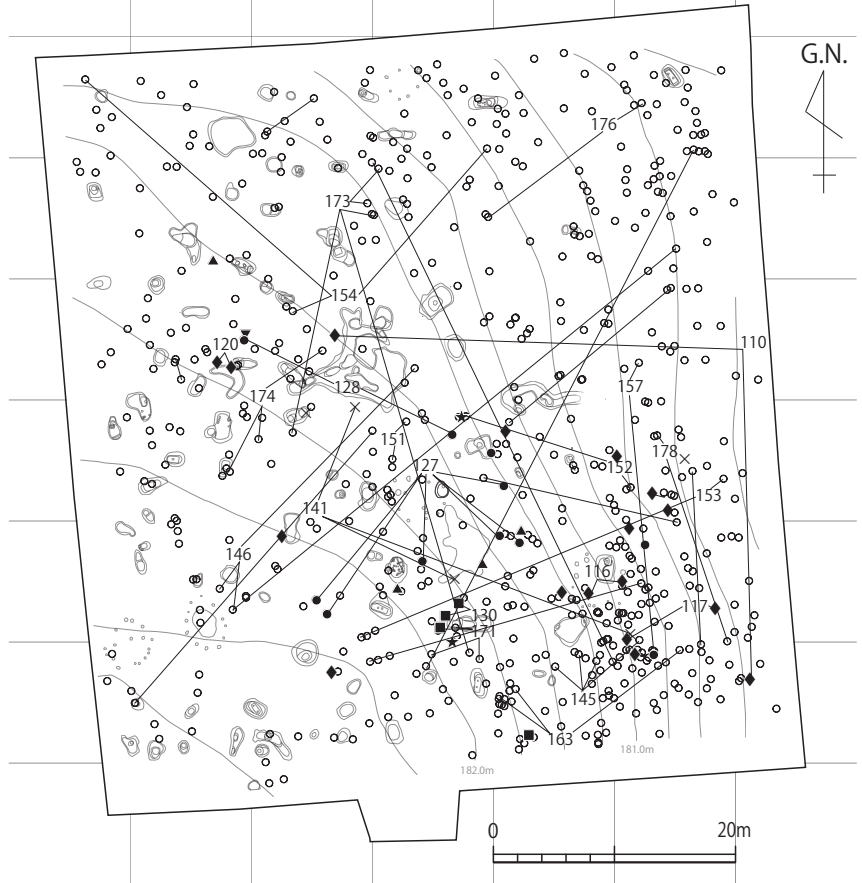
- ◆ … Ⅱe類
- … Ⅱf類
- … Ⅱg類
- ▲ … Ⅱh類
- ★ … Ⅱi類
- × … Ⅱj類
- ▼ … Ⅱk類
- … Ⅱ類



Ⅱ類土器 (Ⅱe~Ⅱk類)

Ⅱe~Ⅱk類の接合状況  
(Ⅱ類の接合状況を含む)

- ◆ … Ⅱe類
- … Ⅱf類
- … Ⅱg類
- ▲ … Ⅱh類
- ★ … Ⅱi類
- × … Ⅱj類
- ▼ … Ⅱk類
- … Ⅱ類

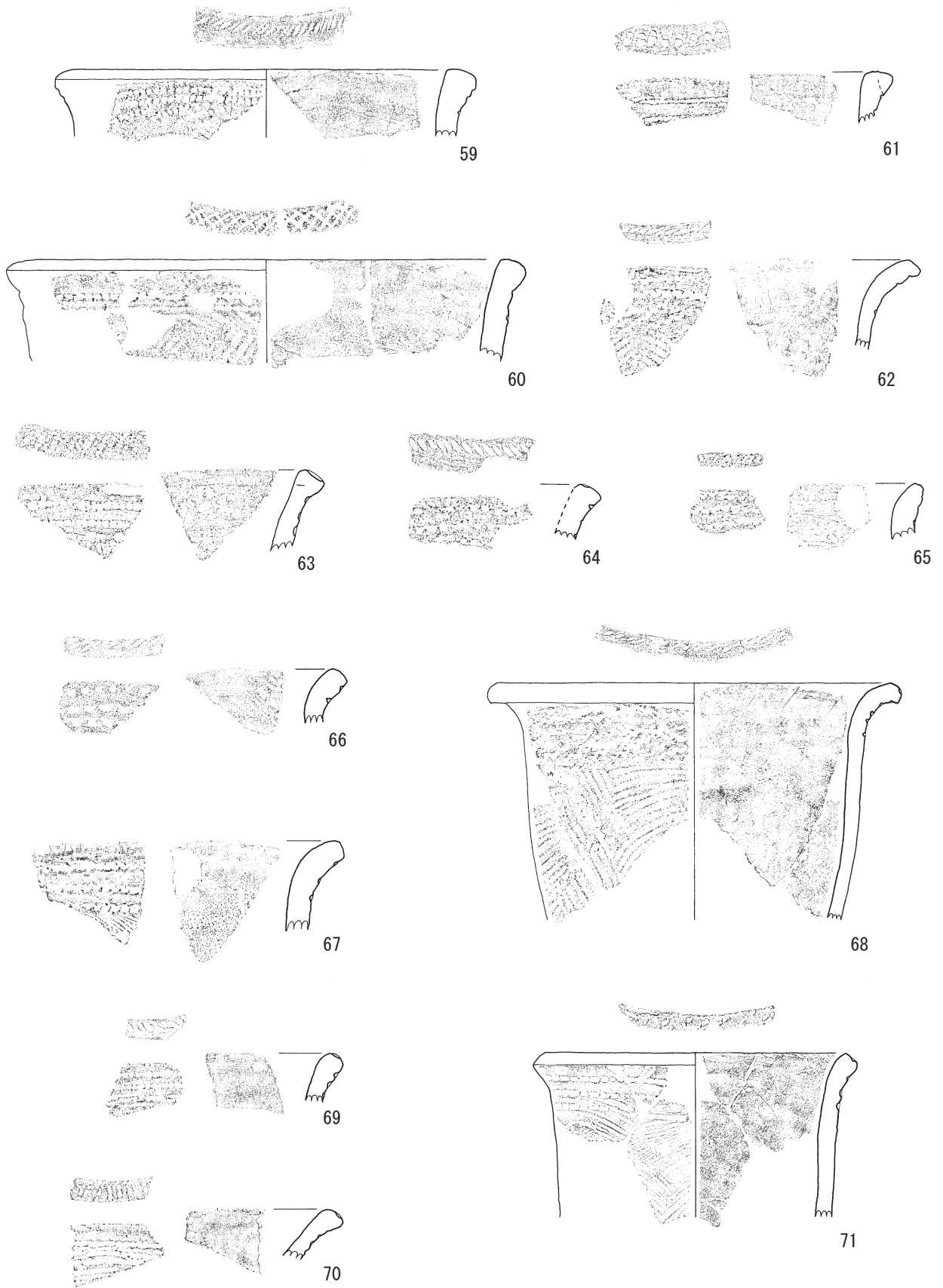


第 93 図 Ⅱ類土器出土分布図(2)

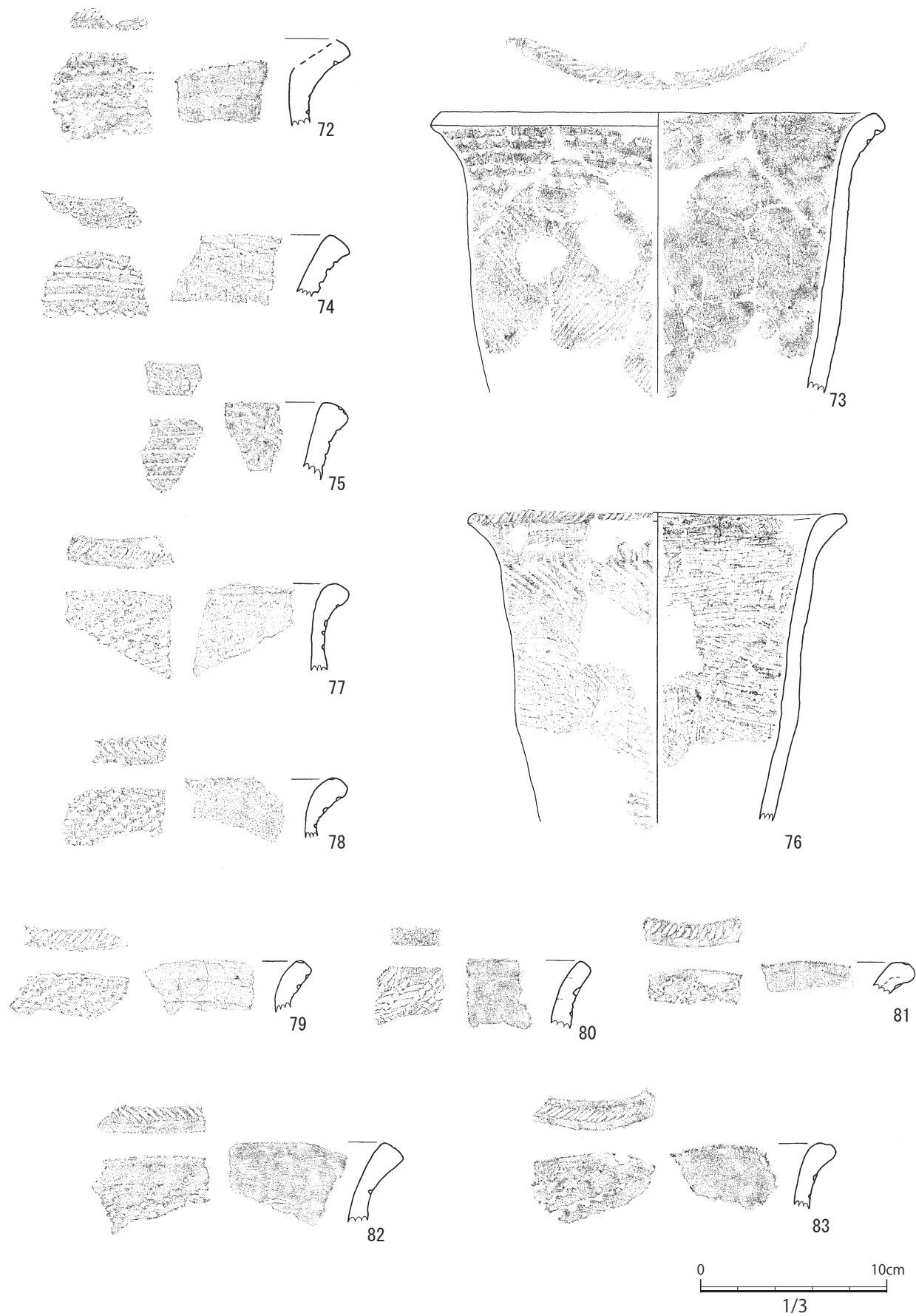


0 10cm  
1/3

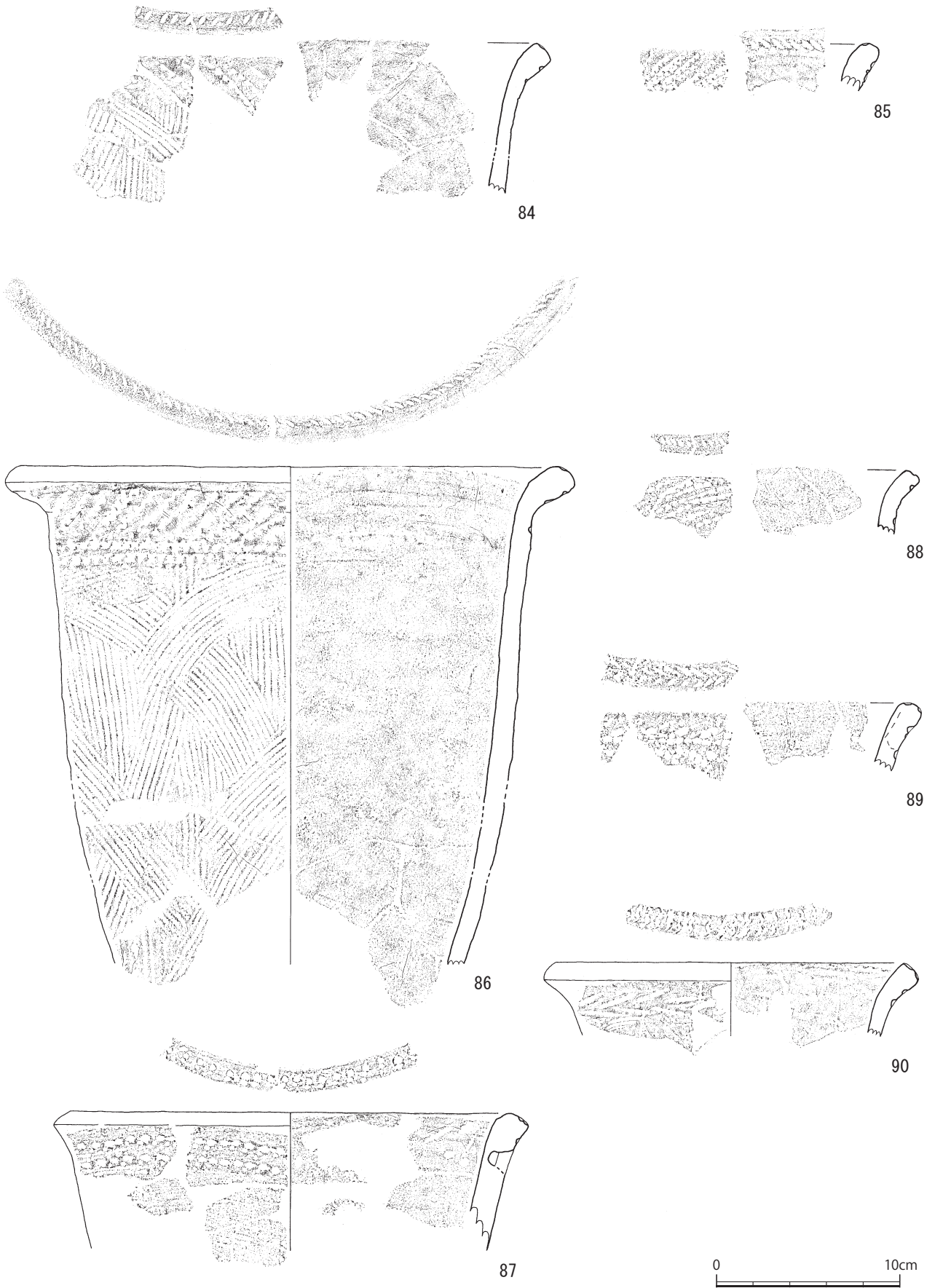
第94图 II類土器実測図(1)



第95图 II類土器実測图(2)



第96图 II類土器実測図(3)



第97图 II類土器実測图(4)

突文を3段施した後、貝殻条痕とみられる横位の条線が見られる。71は口縁部外面に横位の貝殻刺突文を3段施した後、その下位に綾杉状の条痕文を施す。72は口縁部外面に横位の貝殻刺突文を4段施し、その下位に斜位の貝殻刺突文を連続して巡らす。口唇部から口縁部内面にかけて欠損する。73は胴部外面の欠損が多いが、綾杉状の条痕文が確認できる。74は口縁部外面に1単位3cm程度の貝殻刺突文を横位に3段施した後、先の尖った貝殻もしくは棒状工具による刺突文を横位に連続して施す。75は口縁部外面に横位の貝殻刺突文を4段施し、口唇部外面側に貝殻刺突文を巡らす。

76は口縁部が外反し、口縁部外面に縦位の貝殻刺突文を施す。縦位の貝殻刺突文の直下に斜位の貝殻刺突文を施す。胴部外面は多方向の貝殻条痕文を施す。胴部内面は貝殻条痕による器面調整を行う。内面は口唇部と口縁部の境に明確な稜をもたせ、口唇部に斜位の刻目を連続して施す。

77～90は口縁部が外反し、口縁部外面に斜位の貝殻刺突文を施す一群である。77～86は口縁部外面に斜位の貝殻刺突文を1段施し、風化が著しい80を除き、口唇部に刻目をもつ。77は口縁部外面の上端に指頭痕が確認できる。78は口唇部の内面側に刻目を連続して施している。79は口唇部を平坦につくり、口縁部内面は丁寧なナデ調整で仕上げる。80は口縁部に横位の貝殻条痕文を施した上から、斜位の貝殻刺突文を連続して巡らす。81は斜位の貝殻刺突文の間隔が広く、口縁部外面の上端に指頭痕が確認できる。82は口唇部を平坦につくり、口唇部の内面側に刻目を入れる。83は口唇部がやや肥厚し丸みを帯びる。84は口縁部外面に斜位の貝殻刺突文を連続した後、その下位の胴部に縦位、斜位の順に貝殻条痕文を施す。85は口縁部外面に斜位の貝殻刺突文を密に連続して施す。86は大型の器形で、口縁部は外反し、胴部はややすぼまりながら底部付近へと至る。口縁部外面に斜位の貝殻刺突文を連続して巡らし、その下位に横位の貝殻刺突文を2段施す。胴部は縦位の貝殻条痕文の上に、方向を違えて斜位の貝殻条痕文を施すことにより、綾杉状のモチーフを描く。口縁部内面は横方向に丁寧なナデ調整を行う。87～88は口縁部外面に斜位の貝殻刺突文を2段施す。87は口縁部に長径1cm程度の貝殻の殻表を斜位に押し当てるようにして刺突文を連続して2段施し、口唇部にも同じ貝と見られる刺突文を巡らす。口縁部下に未貫通の穿孔がある。88は口縁部外面に角度を緩やかにして斜位の貝殻刺突文を2段施す。89は口縁部外面に上位から斜位、横位、方向を違えて斜位の貝殻刺突文を施す。口唇部には斜位の刻目を方向を違えて施すことにより羽状のモチーフを描く。90は口縁部外面に上位から方向や角度を違えて斜位の貝殻刺突文を施す。口唇部には貝殻刺突文による刻目を施し、口縁部内面はミガキ状のナデ調整を行う。

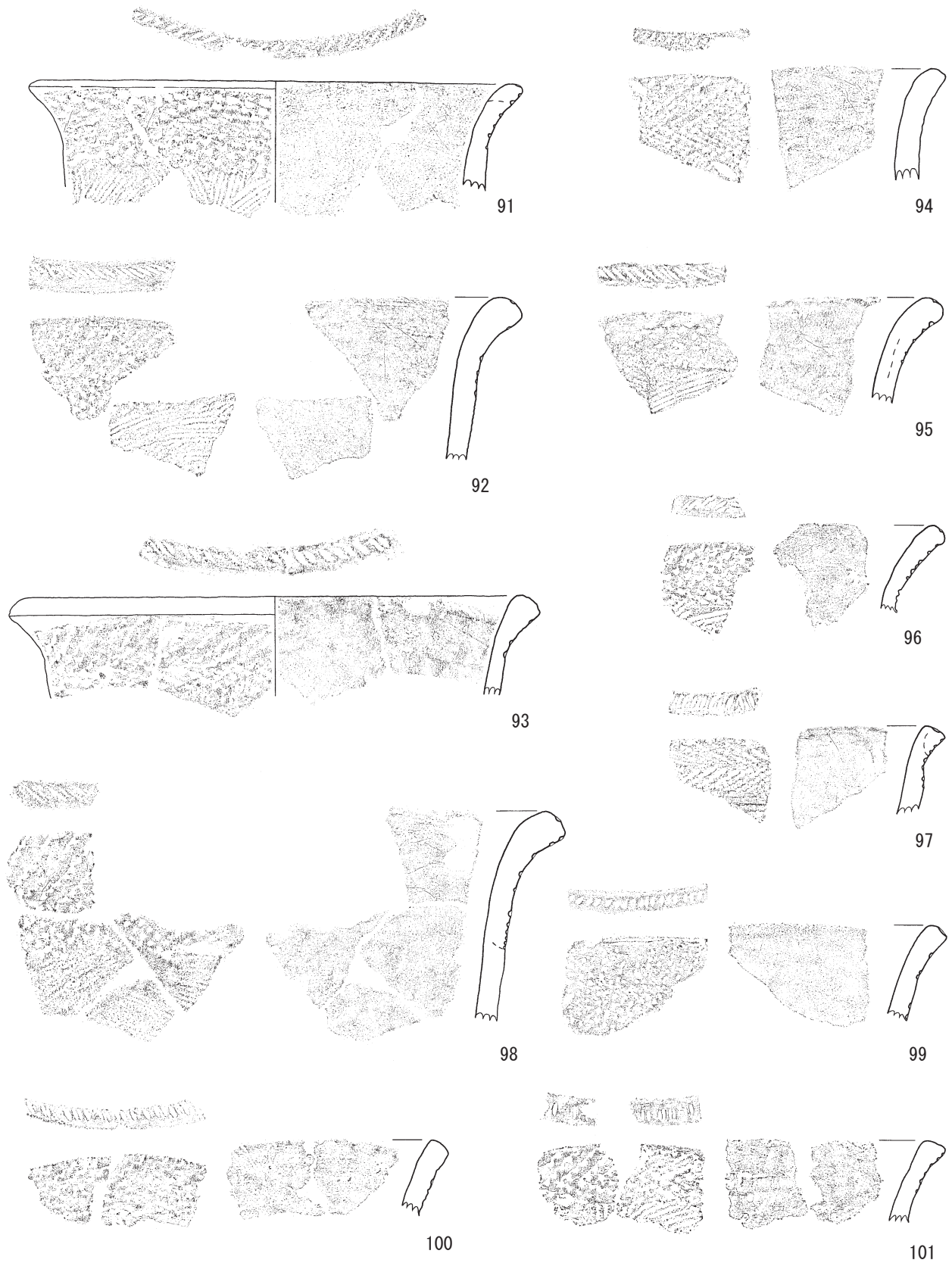
91～107 口縁部が外反し、口縁部外面に斜位の刺突文を方向を違えて施すことにより羽状(「く」の字状)のモチーフを描く一群である。91は口縁部外面に上の貝殻刺突文は右下がり、下は右上がりに施すことで逆「く」の字状に描く。口縁部の一部が黒変している。92は口縁部外面に方向や角度を違えて上の方が長い「く」の字状となり、その下位に横位を基本とした条痕文を施す。93は口縁部上端がやや肥厚し、口唇部は丸みを帯びる。94は口唇部が肥厚せず、不明瞭ではあるが、やや狭幅の口唇部に浅い刻目をもつ。95は口縁部外面に羽状のモチーフを描いた後、下の右下がりの貝殻刺突文が不明瞭となる。ナデ調整を上から施した可能性がある。96は口唇部に浅い刻目を入れ、口縁部外面の貝殻刺突文の下位に斜位の明瞭な貝殻条痕文を施す。97は口縁部外面に逆「く」の字状のモチーフを描き、口唇部は平坦に仕上げ浅い刻目を連続して施す。98は器壁が厚く、口唇部の中央に棒状工具による刻目をもつ。胴部外面は風化が著しく調整が不明瞭なところがある。99は口唇部が肥厚せず丸みを帯びる。



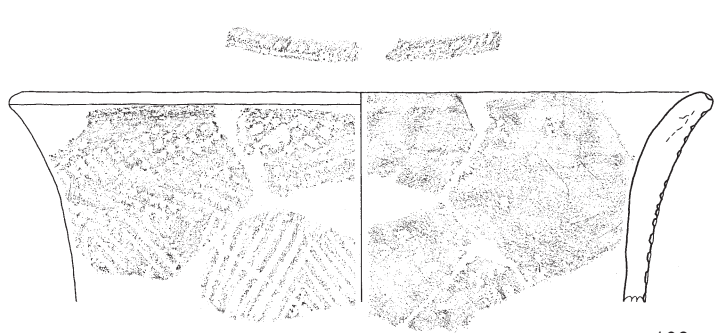
口唇部と口縁部外面の境に横方向にナデ調整を行ったことによる粘土のたるみが見られ、重なり順から口縁部外面に貝殻刺突文を施した後、口唇部の調整や刻目の施文を行ったと考えられる。100は口唇部をやや平坦につくり、棒状工具による浅い刻目を入れる。101は羽状をモチーフに描いた貝殻刺突文の下に、斜位の貝殻条痕文を施す。102は口縁部が肥厚せず、口唇部は丸みを帯びる。「く」の字状の貝殻刺突文の下位に、綾杉状の条痕文を施す。103は口縁部から底部付近の胴部まで残存する。口縁部外面の「く」の字状に描いた貝殻刺突文は、施文後にナデ調整を行ったのかややつづれ気味である。胴部には縦位に貝殻条痕文を施した後、綾杉状の条痕文を施す。口縁部に長径1.5cm程度の楕円形の未貫通の穴があり、外面側は深く、内面側は浅く削られている。補修孔をあけようとした可能性がある。104は口縁部から胴部まで残存する。口縁部が外反し、胴部から底部にかけてすぼまるような器形である。口縁部外面に施した羽状の貝殻刺突文の下位に綾杉状の貝殻条痕文を施す。胎土に10mm以下の浅黄橙色粒や褐色粒、灰白色粒を含む。胴部内面に指頭圧痕が残る。105は胴部から底部まで残存する。胴部外面は綾杉状の条痕文を施すが、底部付近に横位の条痕文を施す。底部は平底である。104・105は施文や胎土の状態から同一個体の可能性がある。106は口唇部をやや平坦に仕上げ、口縁部外面は羽状をモチーフに描いた貝殻刺突文の下位に、上とは形の異なる斜位の貝殻刺突文を連続して施す。内面はナデ調整を丁寧に行う。107は口縁部外面に縦位の条痕文を施した後、羽状に貝殻刺突文を施している。

108～122は口縁部が直口または外傾し、口縁部外面に横位の貝殻刺突文を施す一群である。口唇部に刻目をもつものが多い。108～112は口縁部外面に横位の貝殻刺突文を2段施す。108は口唇部が外面側に大きく傾き、口唇部と口縁部の境に明確な稜をもつ。口縁部外面には横位の貝殻刺突文を施し、その下位に棒状工具による刺突文を横方向に巡らす。口縁部下に穿孔をもつ。109～111は口縁部外面に横位の貝殻刺突文を2段施し、その下位に斜位の貝殻刺突文を施す。109は胴部に横位の貝殻条痕文を施す。110は波状口縁と見られ、口唇部に平坦面をつくる。111は口縁部が肥厚し、胴部に縦位と斜位の貝殻条痕文を施す。112は小型の土器で、口縁部の端部は先細りし、口唇部に刻目は見られない。胴部外面は横位または斜位の条痕文で、胴部内面はミガキ状のナデ調整を行う。113～115は口縁部外面に横位の貝殻刺突文を3段施す。113は波状口縁と見られ、口唇部は丸みを帯び、刻目は確認できない。114は口唇部を平坦につくり、内外面との境に明確な稜をもつ。口縁部外面の貝殻刺突文は風化によるものか一部不明瞭なところがある。115は器壁が厚く、口縁端部が外傾し口唇部に平坦面をつくる。胴部は縦位の貝殻条痕文を施す。116・117は口縁部外面に横位の貝殻刺突文を3段施した後、下位に縦位の短沈線を連続して施す。短沈線は貝殻刺突文の可能性もある。116は口唇部に平坦面をつくる。117は胴部に綾杉状の条痕文を施す。118～120は口縁部外面に横位の貝殻刺突文を5段以上施す。118は口縁部外面に横位の貝殻刺突文を5～6段施し、その下位に先端の尖った工具で綾杉状のモチーフを描く。口縁部直下に未貫通の穿孔がある。119・120はほぼ直線的に立ち上がり、口唇部の内面側に稜をつくり、外面側は丸みを帯びる器形である。口縁部外面は横位の貝殻刺突文が6段まで確認できる。器壁の厚さは異なるが、施文や器形、胎土状況から同一個体の可能性がある。121は口縁部外面に上位から横位、斜位、横位の貝殻刺突文を施す。口縁部に平坦面をつくり、内面側は稜をもつ。122は口縁部上半が残存し、口縁部外面に上位から横位、斜位の貝殻刺突文を施すところまで確認できる。口縁部上端はやや外側に傾き、口唇部に刻目をもつ。

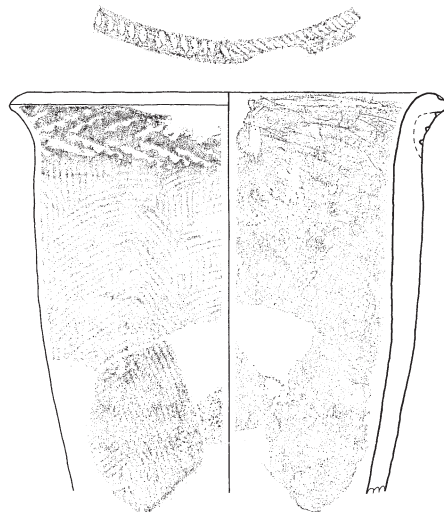
123～128は口縁部が直口または外傾し、口縁部外面に縦位の貝殻刺突文を施す一群である。123～



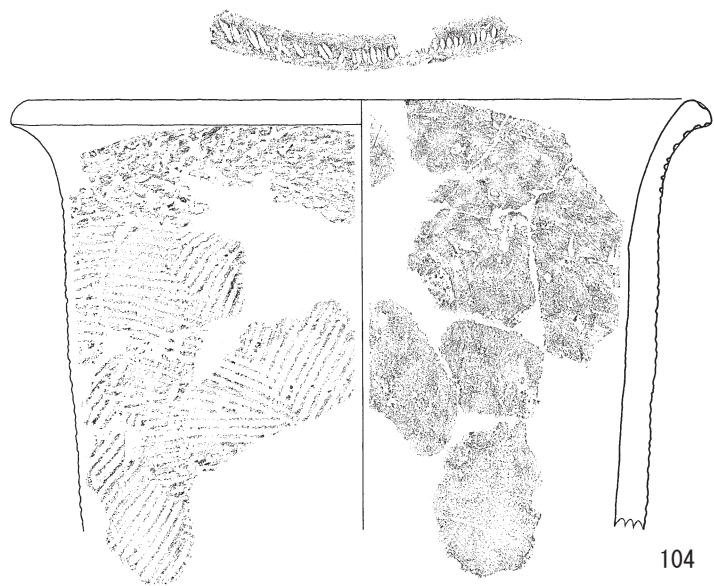
第98图 II類土器実測图(5)



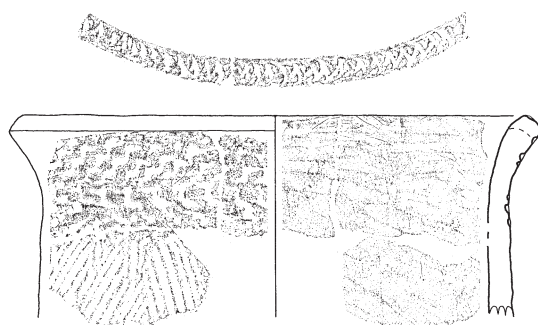
102



103



104



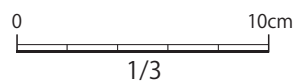
106



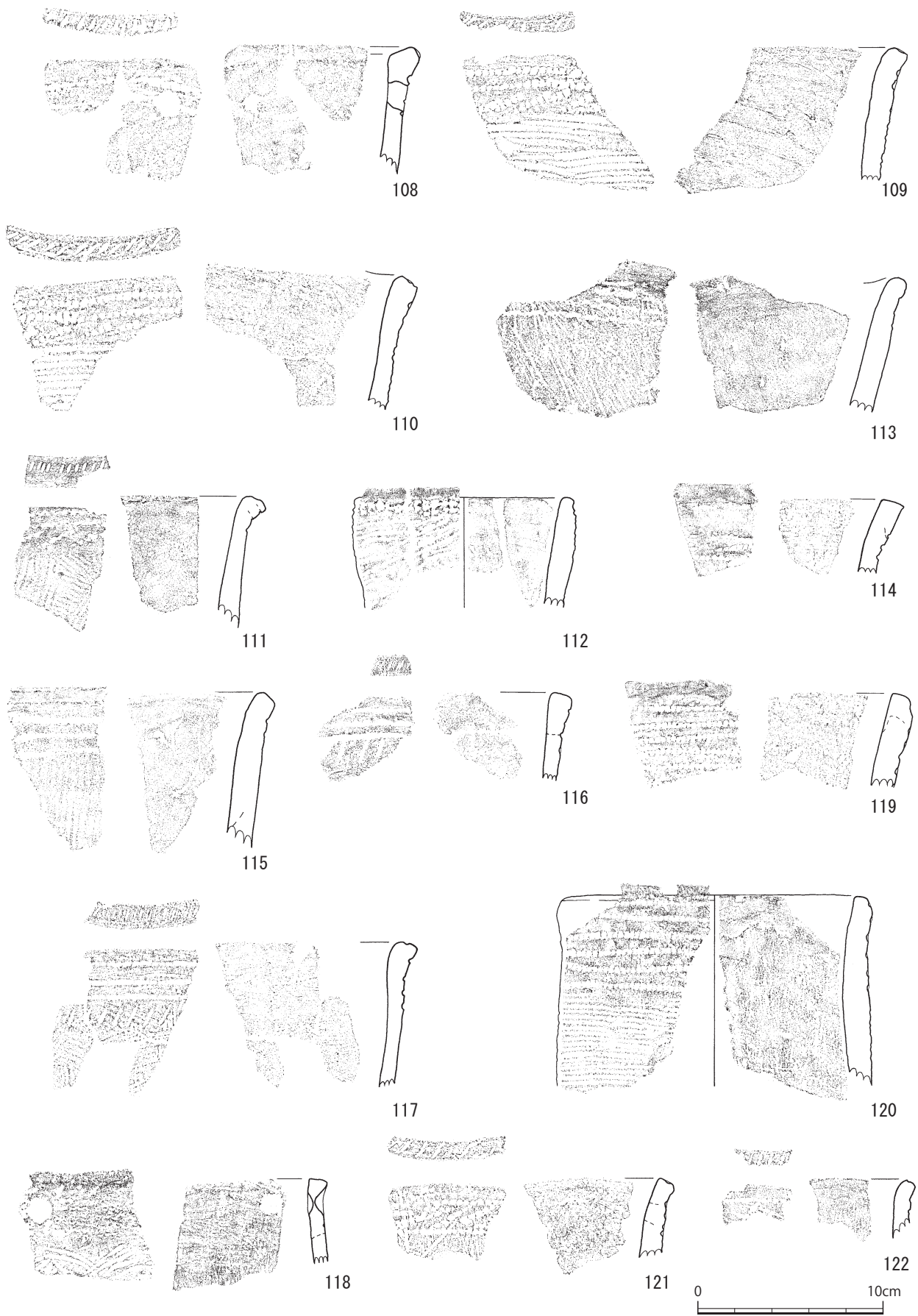
105



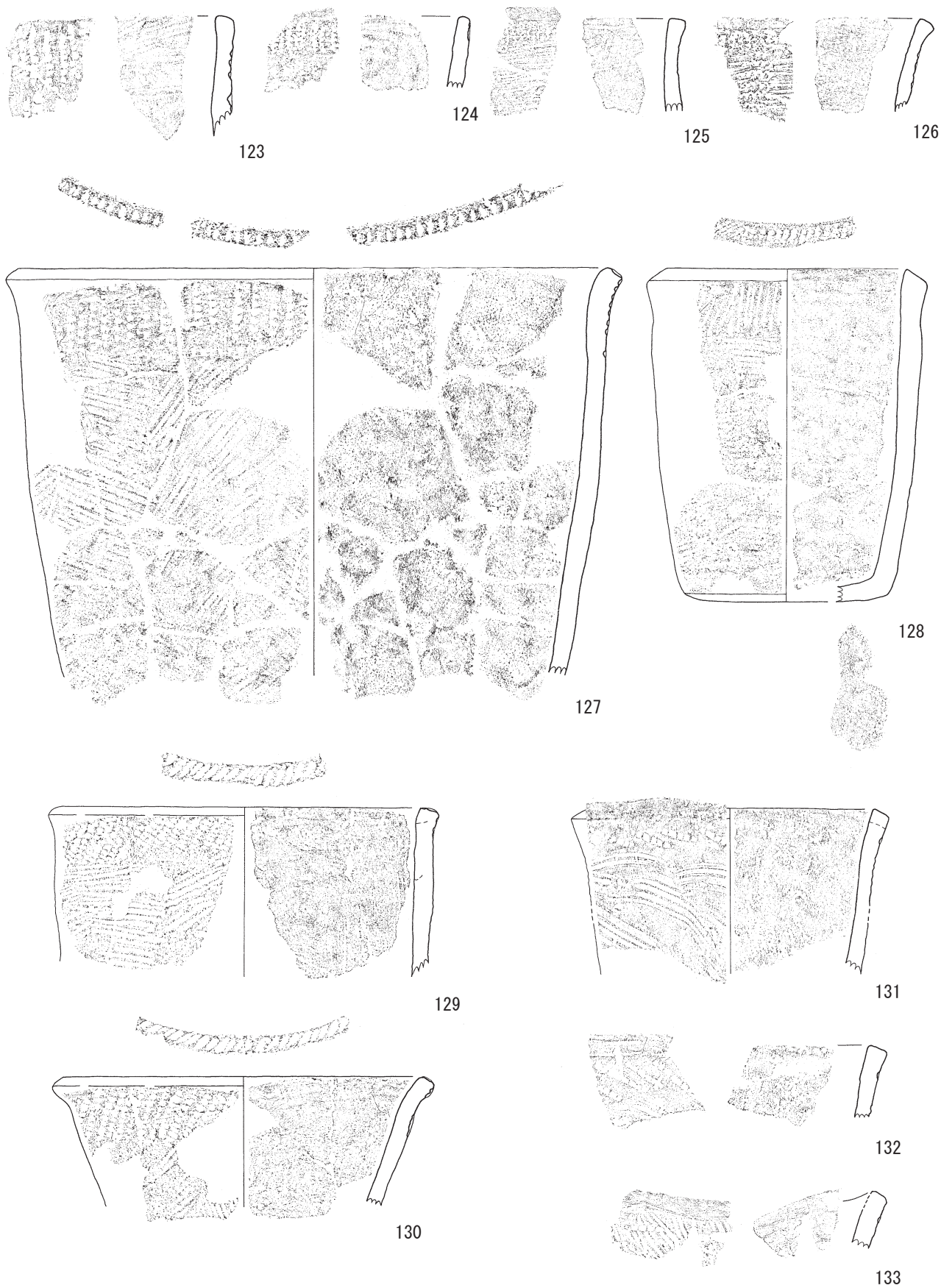
107



第99图 II類土器実測图(6)



第100図 II類土器実測図(7)



第101图 II類土器実測図(8)

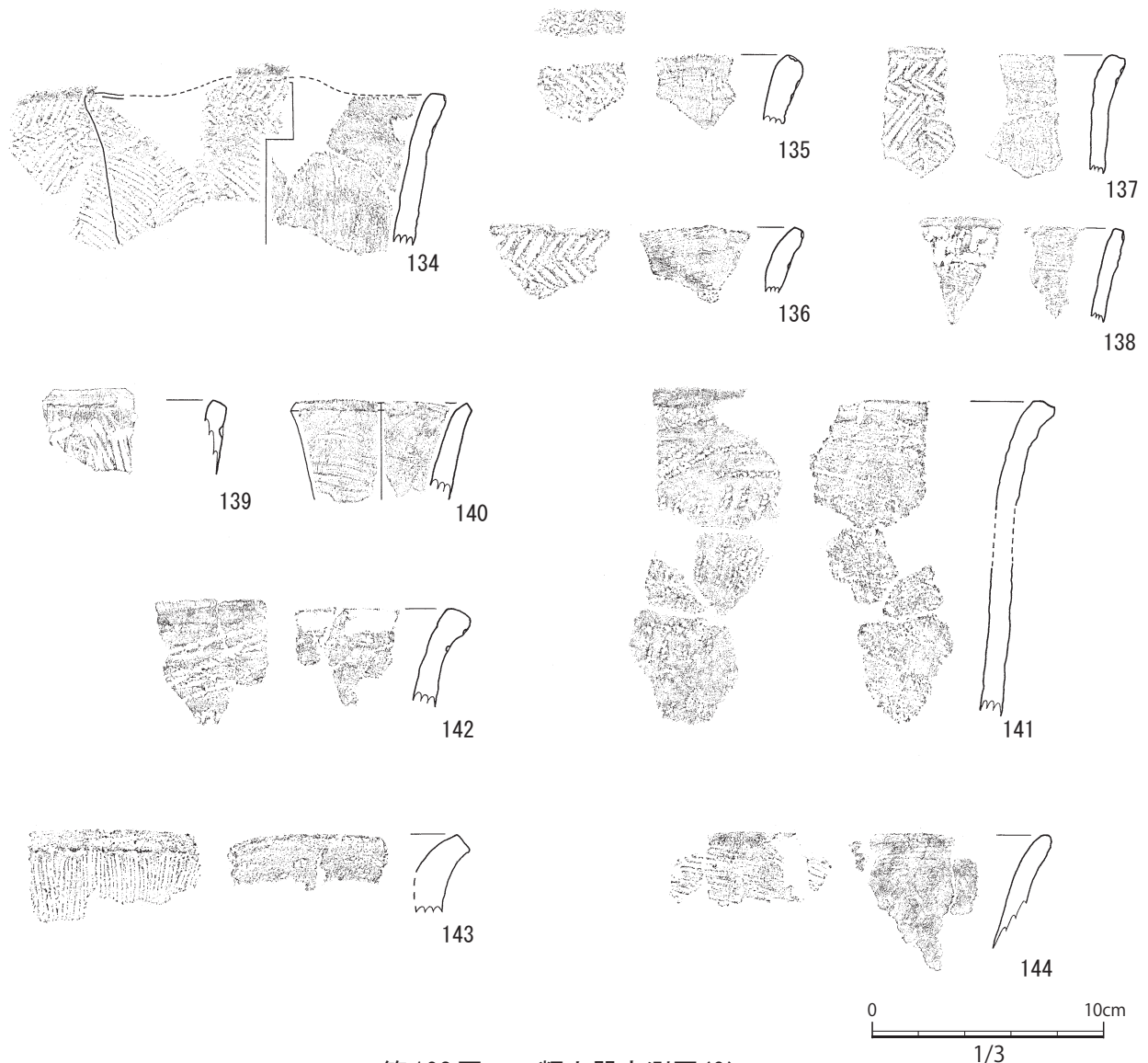
126 は小型の土器である。いずれも口唇部に刻目をもたない。123 は口縁部外面に縦位の貝殻刺突文を連続して施し、その下位にも縦位の貝殻刺突文を施す。124 は口唇部に丸みを帯びる。125・126 は口唇部に平坦面をもつ。外面は口縁部から胴部にかけて横位の貝殻条痕文を施した後、口縁部上端に縦位の貝殻刺突文を連続して巡らす。内面は丁寧にナデ調整を行う。施文や胎土の状況から同一個体の可能性がある。126 は縦位の貝殻刺突文の下位に横位の貝殻刺突文を連続して施している。127 は大型の器形である。口縁部から胴部まで残存する。口唇部は外面側に傾き、ヘラ状工具による縦位の刻目を入れる。口縁部外面は縦位の貝殻刺突文を連続して施した後、一部その下位に刺突文を横位に巡らす。胴部外面は綾杉状の条痕文を施す。128 は口縁部から底部まで残存する。胴部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がり、口唇部は平坦面をつくり外面側に傾く。口唇部にはヘラ状工具による刻目を入れる。口縁部外面には縦位を基本とする貝殻刺突文を施し、胴部外面は横位の貝殻条痕文を施した後、ナデ調整を行う。底面は平底である。

129～133 は口縁部が直口または外傾し、口縁部外面に斜位の貝殻刺突文を施す一群である。129・130 は口唇部にヘラ状工具による深い刻目を連続して施す。129 はほぼ直口する器形で、胴部外面に横位または斜位の貝殻条痕文を施す。130 は大きく外傾する器形で、胴部外面に綾杉状と見られる貝殻条痕文が確認できる。131・132 はほぼ直線的に立ち上がり、口唇部に平坦面をつくり外面側に傾く。胎土に雲母を多量に含む。131 は2号炉穴(SP2)の埋土内から出土した。口縁部外面には斜位の貝殻刺突文を巡らした後、胴部外面に貝殻条痕文を円弧状に施す。132 は口縁部のみ残存するが、斜位の条痕文の一部が確認できる。131 と同一個体の可能性がある。133 は波状口縁で口唇部に平坦面をつくる。口縁部外面に斜位の貝殻条痕文を施した後、間隔を空けて横位または斜位の貝殻刺突文を施文する。

134～137 は口縁部が直口または外傾し、口縁部外面に斜位の刺突文を方向を違えて施すことにより羽状(「く」の字状)のモチーフを描く一群である。134 は波状口縁である。外面は口唇部直下の口縁部上端に貝殻刺突文を羽状に描き、胴部外面に綾杉状の条痕文を施す。135 は口唇部が丸みを帯び、貝殻もしくは二又工具による刺突文を斜位に施す。136・137 は口唇部直下の口縁部上端に貝殻刺突文を羽状に施す。136 は口唇部が幅狭で平坦でない。137 は胴部に斜位の貝殻条痕文を施す。

138～140 は口縁部が直口または外傾し、口縁部外面に横位や斜位、縦位の貝殻刺突文を施す薄手で小型の土器の一群である。138 は口縁部が直線的に立ち上がり、口唇部に平坦面をつくる。外面は口唇部直下の口縁部に縦位の直線的な貝殻刺突文を巡らせた後、横位の貝殻刺突文を連続して施す。さらに口唇部直下に小さな貝殻の殻表面を押し当てたような半円状の刺突文を施す。139 は口縁部に縦位の貝殻条痕文を施した後、斜位の貝殻刺突文を連続して施す。口唇部や内面の一部はミガキ状のナデによる調整を行う。内面は剥離により広く欠損している。140 は推定口径7.4cmの小型の土器である。直線的に立ち上がる器形で、口縁部の端部が先細り、外面側と内面側に明確な稜をもたせる。口縁部に横位の貝殻条痕文を浅く施している。一部ナデ消しのような痕跡も見られる。貝殻刺突文は確認できないが、器形や胎土の状況からⅡ類と判断した。

141・142 は口縁部が外反し、貝殻刺突文を外面全体に施す一群である。141 は口縁部がやや外反し、口唇部に平坦面をつくる。口縁部外面に横位2段と斜位の貝殻刺突文を施し、胴部外面に縦位の貝殻刺突文を角度を変えながら連続して施す。142 は口縁部のみ残存する。口唇部に平坦面をつくり、丁寧にナデ調整を行う。口縁部上位から斜位の貝殻刺突文を施す。口縁部の下位にも貝殻刺突文が確認できる



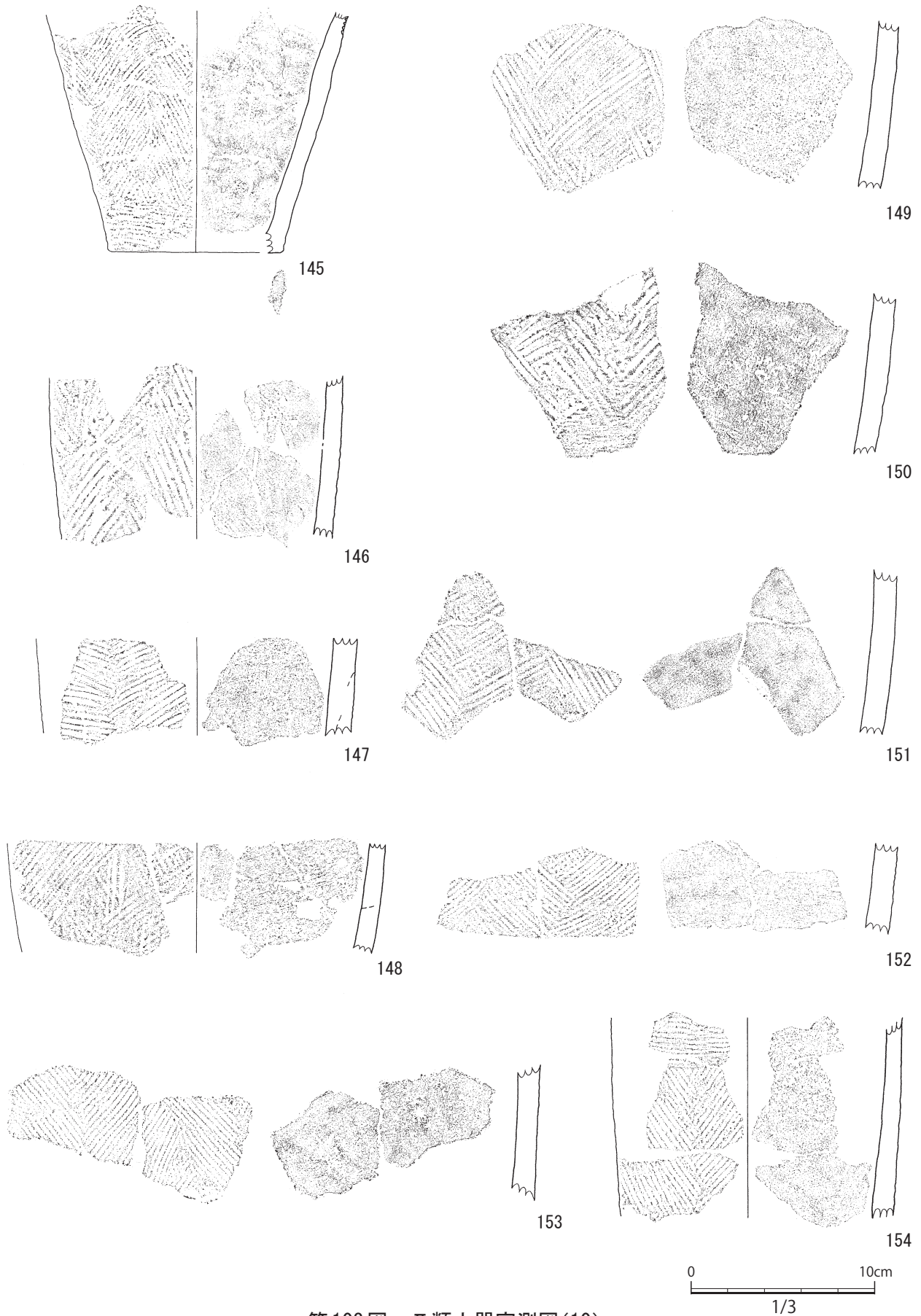
第102図 II類土器実測図(9)

ため、胴部全体に刺突文が施されている可能性がある。141・142は同一個体の可能性がある。

143・144は口縁部が外傾または外反し、細かい条線を縦位または斜位に施す一群である。143は60号土坑(SC60)の埋土内から出土した。口縁部が外反し、口唇部が外面に傾き口縁部との境に稜をもたせる。口縁部外面に細条線を密に施す。胎土に金雲母を含む。144は直線的に立ち上がる器形で、口唇部は少し先細る。口縁部外面に細条線を斜位に施す。口縁部内面はミガキ状にナデ調整を行う。

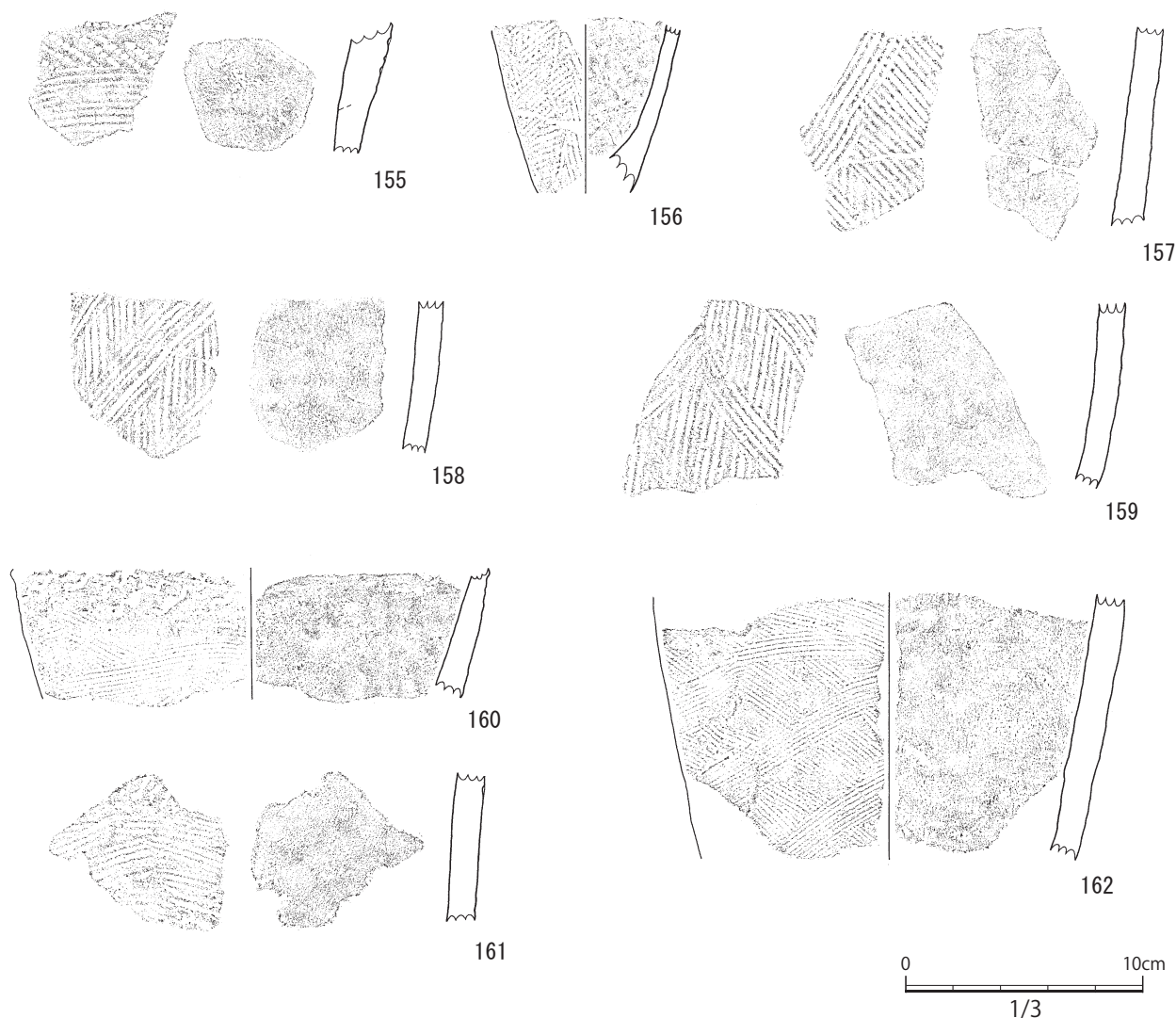
145～172は胴部を主体とするものである。

145～157は胴部外面に綾杉状の条痕文を施す。145は胴部から底部付近まで残存する。胴部外面の上端には貝殻刺突文が見られ、その下位に綾杉状の貝殻条痕文、底部付近に横位の貝殻条痕文を施す。胴部内面はナデ調整を行い、工具痕や指頭圧痕が確認できる。146・149～151は胴部外面に幅広な条痕文を浅く施す。147は胴部外面に角度の緩やかな綾杉状の条痕文を施し、胴部内面が黒変する。148は胴部外面に斜位や縦位の条痕文を施した後、方向を違えて斜位の条痕文を施す。152～154は胴部外面に幅狭な条痕文を明瞭に施す。152は器壁が厚く、胴部内面に丁寧なナデ調整を行う。154は胴部上



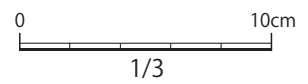
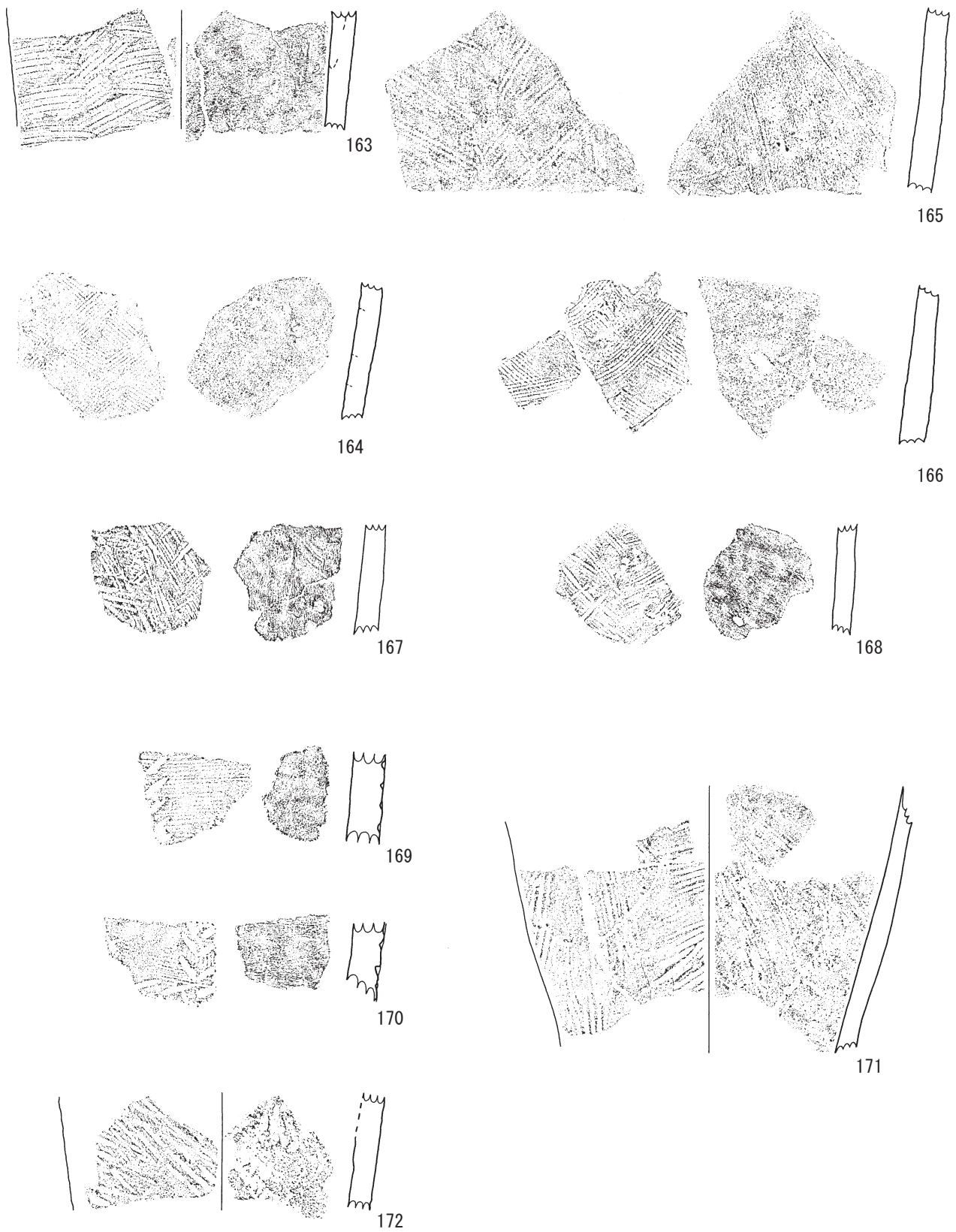
第103图 II類土器実測図(10)



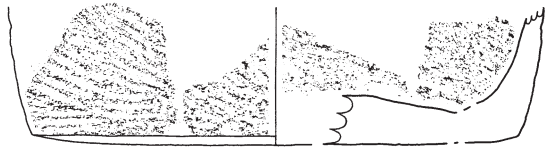


第104図 II類土器実測図(11)

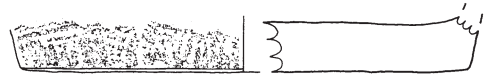
端に横位の貝殻条痕文を、その下位に綾杉状の貝殻条痕文を施す。155は口縁部付近の胴部片と見られ、上半に斜位の貝殻刺突文を、下半に横位の貝殻条痕文を施す。156は小型の土器で、胴部から底部付近まで残存する。胴部内面は丁寧なナデ調整を行い、一部縦方向に緩やかに屈曲する箇所がある。157は胴部内面にナデ調整を行う。158～168は胴部外面に綾杉状をモチーフとした条痕文を描く。158・159は胴部外面に縦位の貝殻条痕文を施した後、斜位の貝殻条痕文を施す。160・161は口縁部付近の胴部片と見られ、胴部外面の上半に斜位の貝殻刺突文を施す。160は上部破断面の形状から、斜位の貝殻刺突文の上位に横位の貝殻刺突文を施している可能性がある。162・164・166は胴部外面に斜位の貝殻条痕文を施した後、それに交差するよう方向を違えた斜位の貝殻条痕文を施す。163は胴部外面に緩やかな円弧状の条痕文を連続して施す。165は風化によるものかナデ調整で条痕文を意図的に消しているのか不明であるが、胴部外面に間隔を空けて綾杉状に施文しているように見える。内面は斜方向にナデ調整を行う。167・168は胴部外面に幅狭な条痕文を斜位または綾杉状に施した後、それに交差するよう方向を違えて幅広な沈線を施す。胎土や施文の仕方から同一個体と見られる。169～172は綾杉状の条痕文は見られないが、胎土や施文の仕方などからII類としたものである。169・170は胴部外面に幅



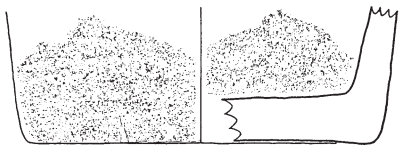
第105图 II類土器実測图(12)



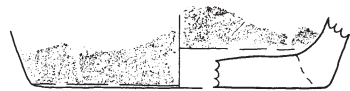
173



174



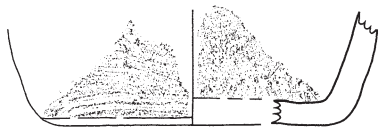
175



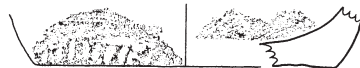
176



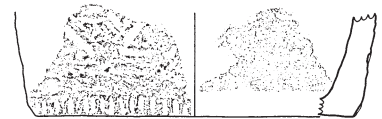
178



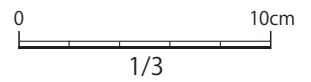
177



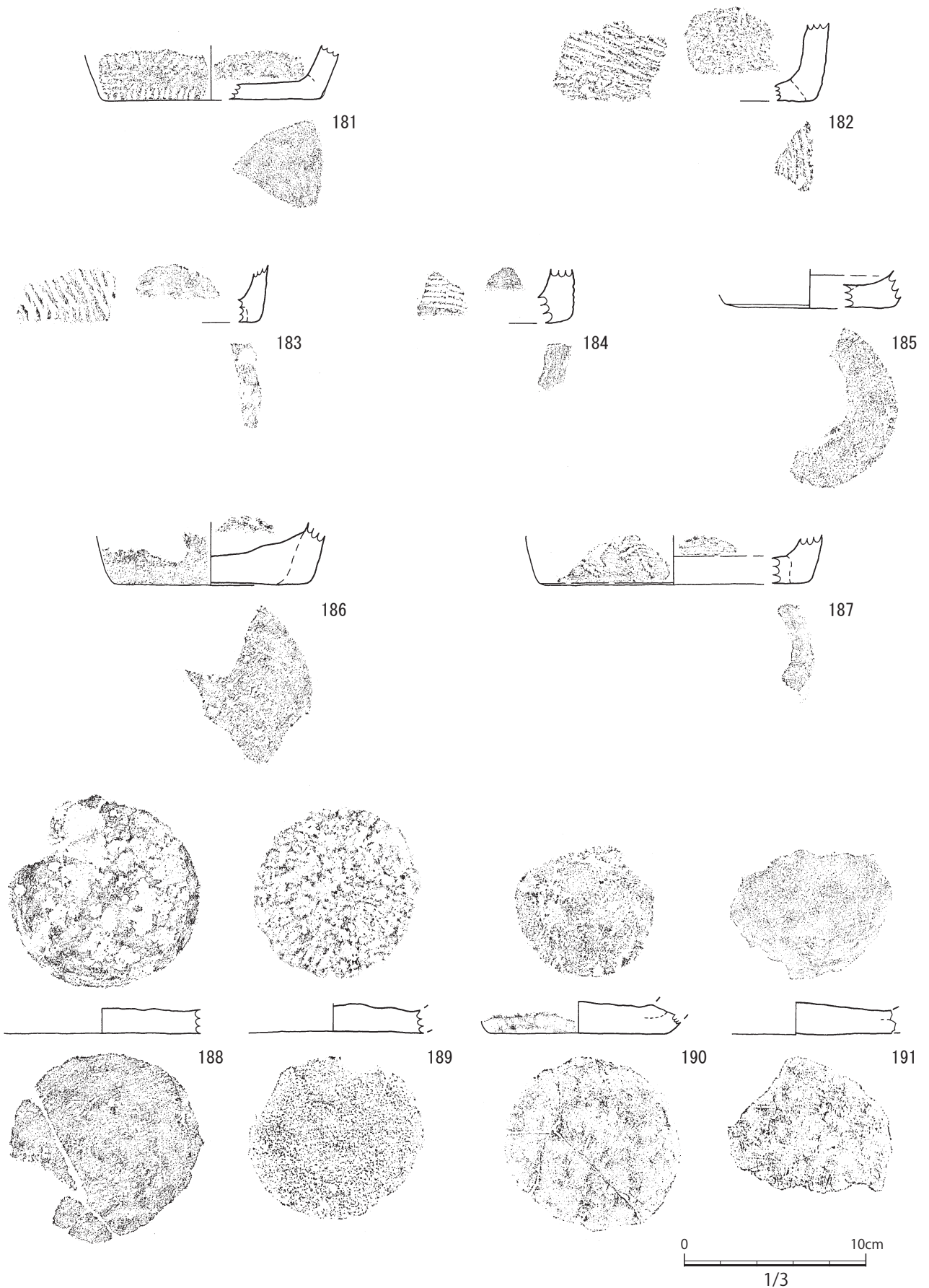
179



180



第106图 II類土器実測图(13)



第107图 II類土器実測図(14)

狭な貝殻条痕文を横位に施した後、貝殻刺突文を方向を違えて施すことによる羽状のモチーフを縦位に施す。胎土や施文の仕方から同一個体と見られる。170においては羽状のモチーフを縦位に加えて横位にも施す。171は胴部外面に斜位、縦位、横位の条痕文を間隔を空けて施す。172は胴部外面に条痕文のような条線を斜位に施す。

173～191は底部で、基本的に平底である。

173は大型の器形である。胴部外面は底部付近まで斜位の貝殻条痕文を施し、底部付近は横位の貝殻条痕文を施す。底部外面も貝殻条痕によって調整を行っている。174は風化により不明瞭だが、底部付近の外面に刻目のような短沈線が確認できる。175・176は風化により外面の施文は不明瞭であるが、ナデによる器面調整を行っていると思われる。177は底部付近に横位の貝殻条痕文を施す。178～181は底部付近に刻目をもつ。178は底部付近に3～5mmの浅い刻目を施すのに対し、179～181は5mm以上の明瞭な刻目を施す。182・183は底部付近まで幅広く斜位の貝殻条痕文を施す。182は胎土に3mm以下の灰白色粒を含む。184は底部付近まで横位の貝殻条痕文を施す。底部外面はミガキ状のナデ調整を行う。185の破断面から、底部に円盤状の粘土を成形し、その上に粘土紐を輪積みしたような痕跡が確認できる。186は底部の器壁が厚く、底部内面と胴部外面の境に粘土のつなぎ目が確認できる。187は胴部外面に羽状をモチーフとした貝殻刺突文が施され、55・169・170と同一個体と見られる。188～191は底部のみ残存するものである。平底で底面積が大きい。188・189は底部内面に痘痕状の痕跡を確認でき、外周を打ち欠いているようにも見えるため円盤土器の可能性はある。190・191は底部外面にミガキ状のナデやミガキ調整を施す。

### (3) Ⅲ類土器 (第109～115図 192～280)

Ⅲ類土器は胴部から底部にかけてすぼまり比較的小さな底をもつ器形で、口縁部から胴部にかけて斜位の貝殻条痕文を施す一群である。口縁部は直口もしくは外傾して直線的に開くものと外反するものがある。文様は口縁部外面に貝殻刺突文を施すものと施さないものがある。胴部外面には底部付近を除いて貝殻条痕を斜位に施し、胴部内面は細かなミガキ調整を行う。

分類 口縁部の施文や形態により、以下のとおりⅢa～Ⅲc類に細分した。

〔Ⅲa類〕口縁部が直口または外傾して直線的に開く器形で、口縁部外面に貝殻刺突文を施すもの  
(192～228)

〔Ⅲb類〕口縁部が緩やかに外反する器形で、口縁部外面に貝殻刺突文を施すもの (229～234)

〔Ⅲc類〕口縁部外面に条痕文のみ施すもの (235～252)

なお、口縁部をもたない胴部や底部については細分せずⅢ類とした。(253～280)

出土分布 Ⅲ類土器の出土分布図を第108図に示す。Ⅲ類に分類した土器は調査区全体から出土しているが、標高が低くなる調査区南東側や北東側に集中している。細分した土器の分布傾向を見てみると、Ⅲa類やⅢb類はあまり集中せず散布的に出土し、Ⅲc類は調査区西側から南東側にかけて多く出土している。接合状況を見ると、209や231などを除き、接合可能なものが少なく、単体で出土した器片が多い。

#### 土器の特徴

192～252は口縁部を有するものである。

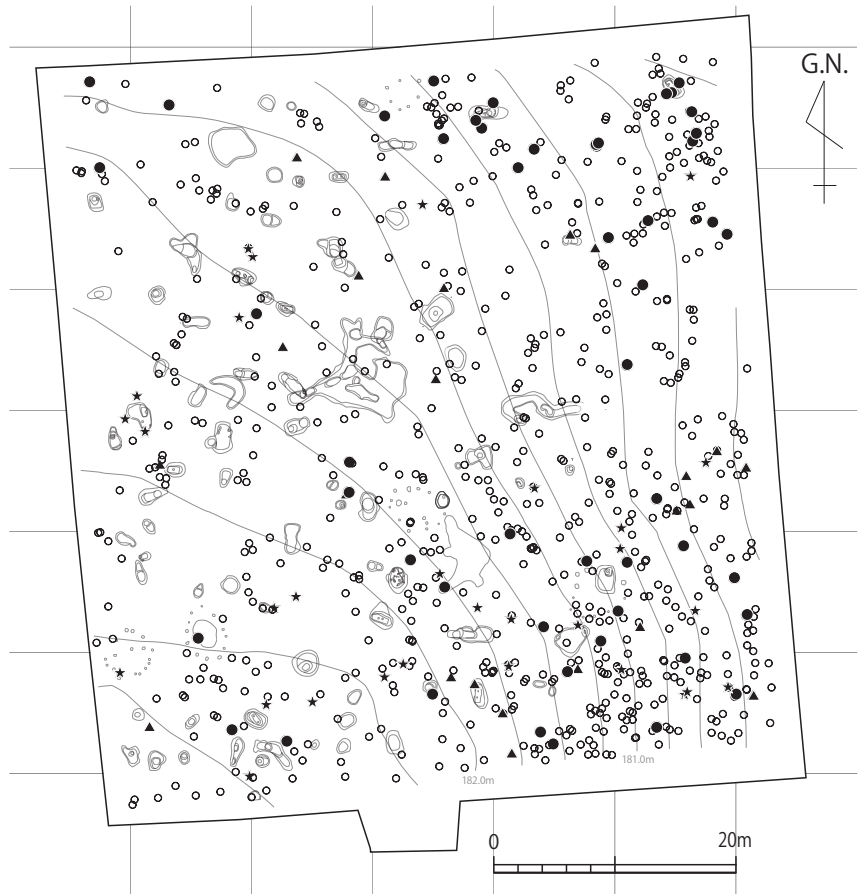
192～228は口縁部が直口または外傾して直線的に開く器形で、口縁部外面に貝殻刺突文を施す一群である。192～203は口縁部が直口する器形である。192・193は口唇部が先細る。192は口縁部から胴

部にかけて貝殻条痕文を施した後、口縁部外面に斜位の貝殻刺突文を施す。193も192と同様に施文を施すが、条痕文や刺突文がより明瞭である。194～200は口唇部にやや丸みを帯びる。194は3号陥し穴(SS3)の埋土内から出土した。胴部内面はミガキ状のナデ調整を行う。195は口縁部外面に斜位の貝殻刺突文を押引状に施す。196は口縁部外面に斜位の貝殻刺突文を施す。口縁部の下位に穿孔をもつ。197は口縁部外面に縦位の貝殻刺突文を施し、その下位に斜位の貝殻刺突文を巡らす。198・199は口縁部外面に斜位の貝殻刺突文を2段施す。200は口縁部外面に斜位の貝殻刺突文を明瞭に施す。201～203は口唇部に平坦面を設ける。201は口縁部外面に斜位の貝殻刺突文を押引状に施す。202は口縁部外面に斜位の貝殻刺突文を2段施す。203は口縁部外面の上端に横位の貝殻刺突文を2段施す。204～228は口縁部が外傾して直線的に開く器形である。204～206は口唇部が先細る。204は口縁部外面に斜位の貝殻刺突文を押引状に施す。外面の上端及び内面が黒変している。205は口縁部外面に横位の貝殻刺突文を2段施す。206は口縁部に比べて胴部の器壁は厚くなる。口縁部外面に斜位の貝殻刺突文を施す。207～218は口唇部にやや丸みを帯びる。207・208は口縁部外面に斜位の貝殻刺突文を施す。209は口縁部から底部付近の胴部まで残存する。風化が著しく、施文が不明瞭な部分もあるが、外面全体に斜位の貝殻条痕文を施した後、口縁部上端に斜位の貝殻刺突文を巡らす。胴部上半に未貫通の穿孔がある。210は口縁部外面に縦位または斜位の貝殻刺突文を2段施す。器壁が薄い。211は口縁部外面の上端に押引状の貝殻刺突文を縦位に施す。内外面とも浅黄橙色の色調をもつ。212は90号集石遺構(SI90)の埋土内から出土した。口縁部外面の上端に斜位の貝殻刺突文を施す。直径1cm程度の穿孔をもつ。213は口縁部上端に貝殻刺突文を巡らす。口縁部内面の上端に指頭圧痕が残る。214は口縁部外面に斜位の貝殻刺突文を2段施す。215は口縁部に縦位の貝殻刺突文を押引状に施す。殻幅の狭い小さな貝殻を使って施文している。同様に216も口縁部に縦位の貝殻刺突文を押引状に施すが、器壁が厚く、施文幅も大きい。217は口縁部外面に斜位の貝殻刺突文を施す。218は口縁部外面に明瞭な斜位の貝殻刺突文を2段施す。219～223は口唇部に平坦面を設ける。219～221は口縁部外面に押引状の貝殻刺突文を斜位に施す。219は内面にミガキ状のナデ調整を行い、褐灰色の色調をもつ。220は内面にナデ調整を行い、にぶい橙色の色調をもつ。221は口縁部外面に押引状の貝殻刺突文を施した後、その下位に斜位の貝殻刺突文を連続して施している。器壁が厚い。222・223は口縁部外面に斜位の貝殻刺突文を2段施す。222は器壁が厚く、223は薄い小型の土器である。224～228は口縁部の内面側に稜をもたせ、口唇部に平坦面を設ける。224は口縁部外面に押引状の貝殻刺突文を施す。225は口縁部上端に刺突文を連続して巡らし、その下位に斜位の貝殻刺突文を施す。226は口縁部外面に明瞭な貝殻刺突文を斜位に施す。227は口縁部外面に押引状の貝殻刺突文を2段施す。228は口縁部外面に明瞭な貝殻刺突文を2段施す。

229～234は口縁部が緩やかに外反する器形で、口縁部外面に貝殻刺突文を施す一群である。229～232は口唇部にやや丸みを帯びた平坦部をもつ。229は62号土坑(SC62)の埋土内から出土した。口縁部に押引状の貝殻刺突文を2段施す。内面は広く剝離する。230～232は口縁部外面に斜位の貝殻刺突文を施す。231は口縁部から胴部にかけて施した条痕文の一部が深く刻まれ、沈線のように残る。232は52号土坑(SC52)の埋土内から出土した。器壁が薄く、内面にミガキ状のナデ調整を行う。233・234は口唇部に平坦面をもつ。233は口縁部外面に明瞭な貝殻刺突文を斜位に2段施す。234は口縁部外面の上端に横位の貝殻刺突文を連続して施した後、間隔を空けて横位の貝殻刺突文をさらに2段施す。口

Ⅲ類土器

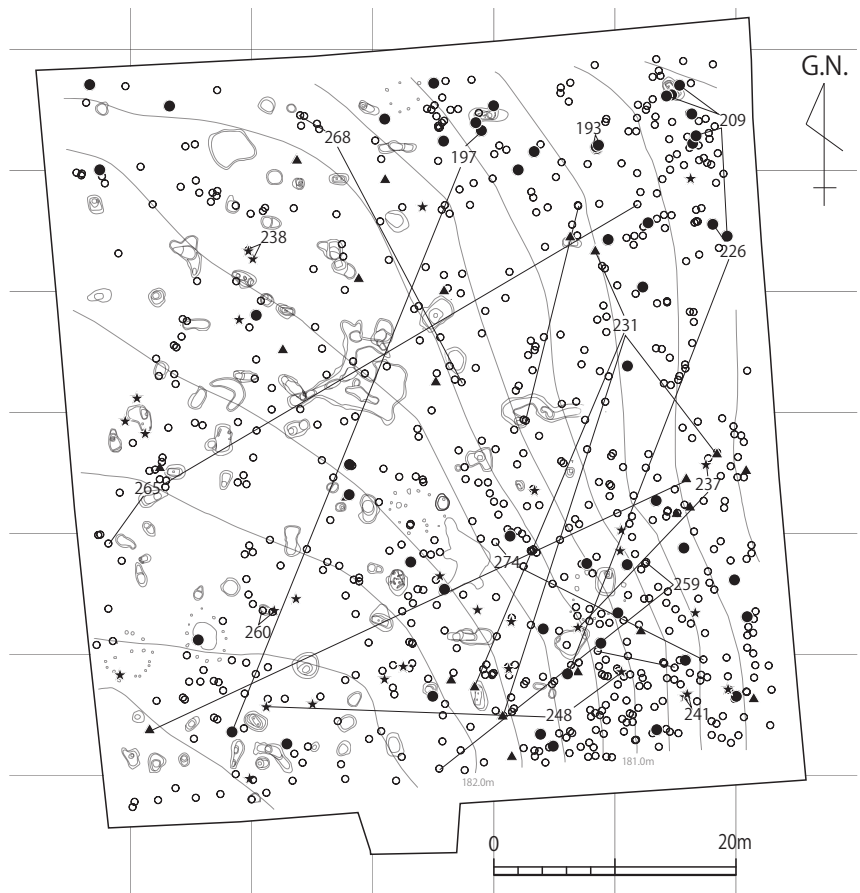
- …Ⅲa類
- ▲ …Ⅲb類
- ★ …Ⅲc類
- …Ⅲ類



Ⅲ類土器

接合状況

- …Ⅲa類
- ▲ …Ⅲb類
- ★ …Ⅲc類
- …Ⅲ類



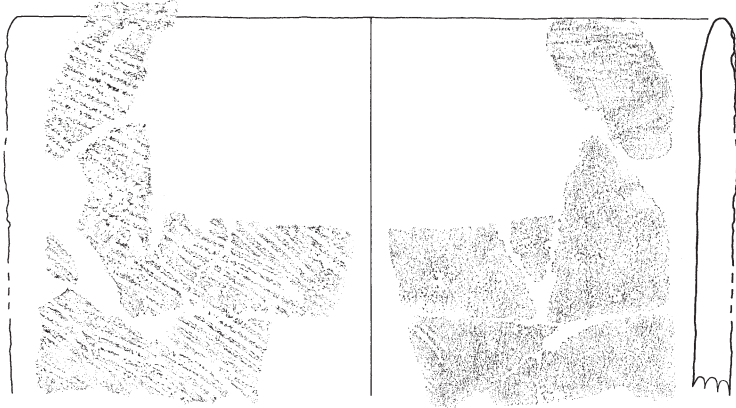
第 108 図 Ⅲ類土器出土分布図



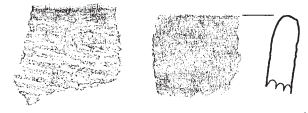
192



194



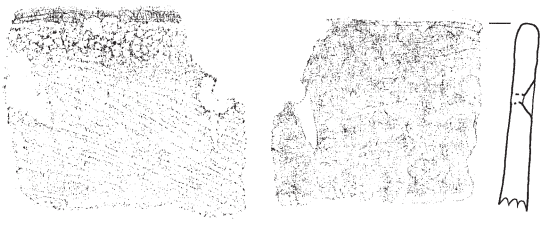
193



195



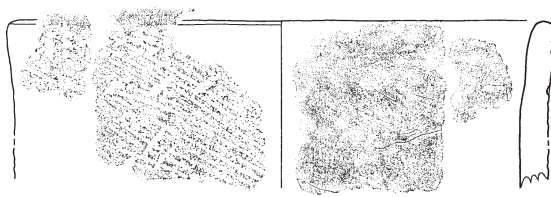
199



196



200



197



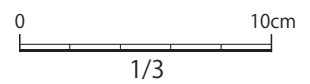
201



198

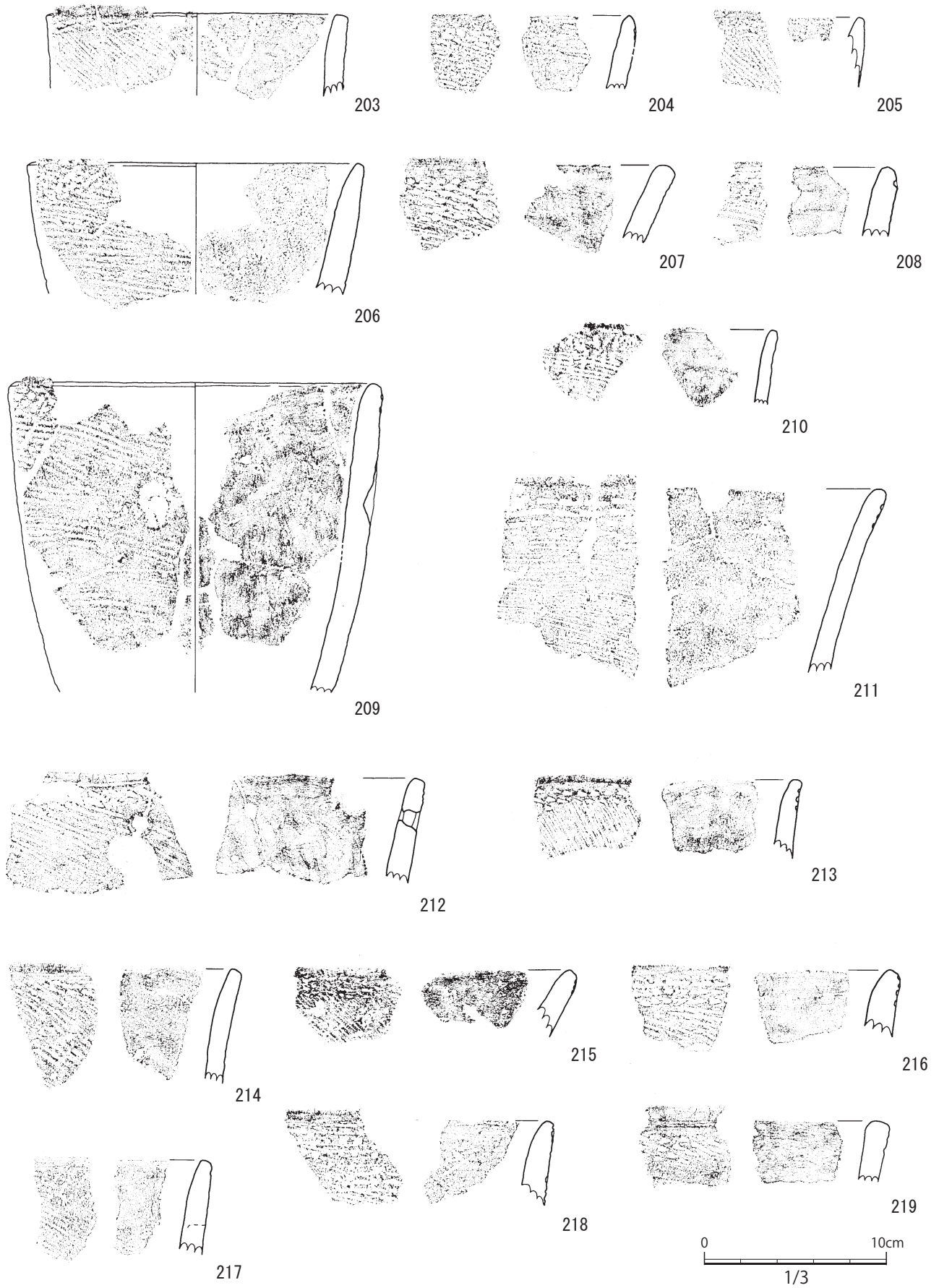


202

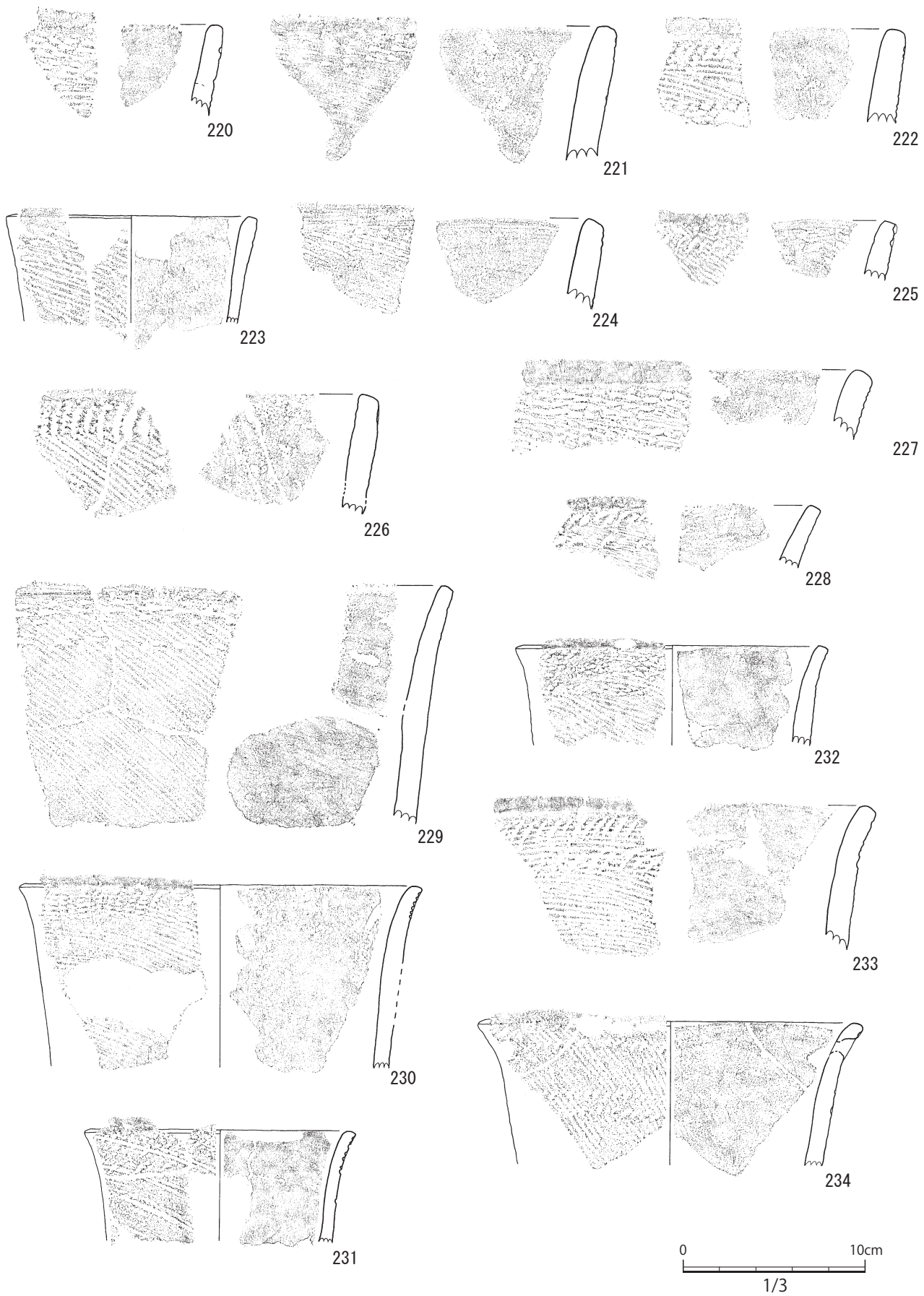


第109図 Ⅲ類土器実測図(1)

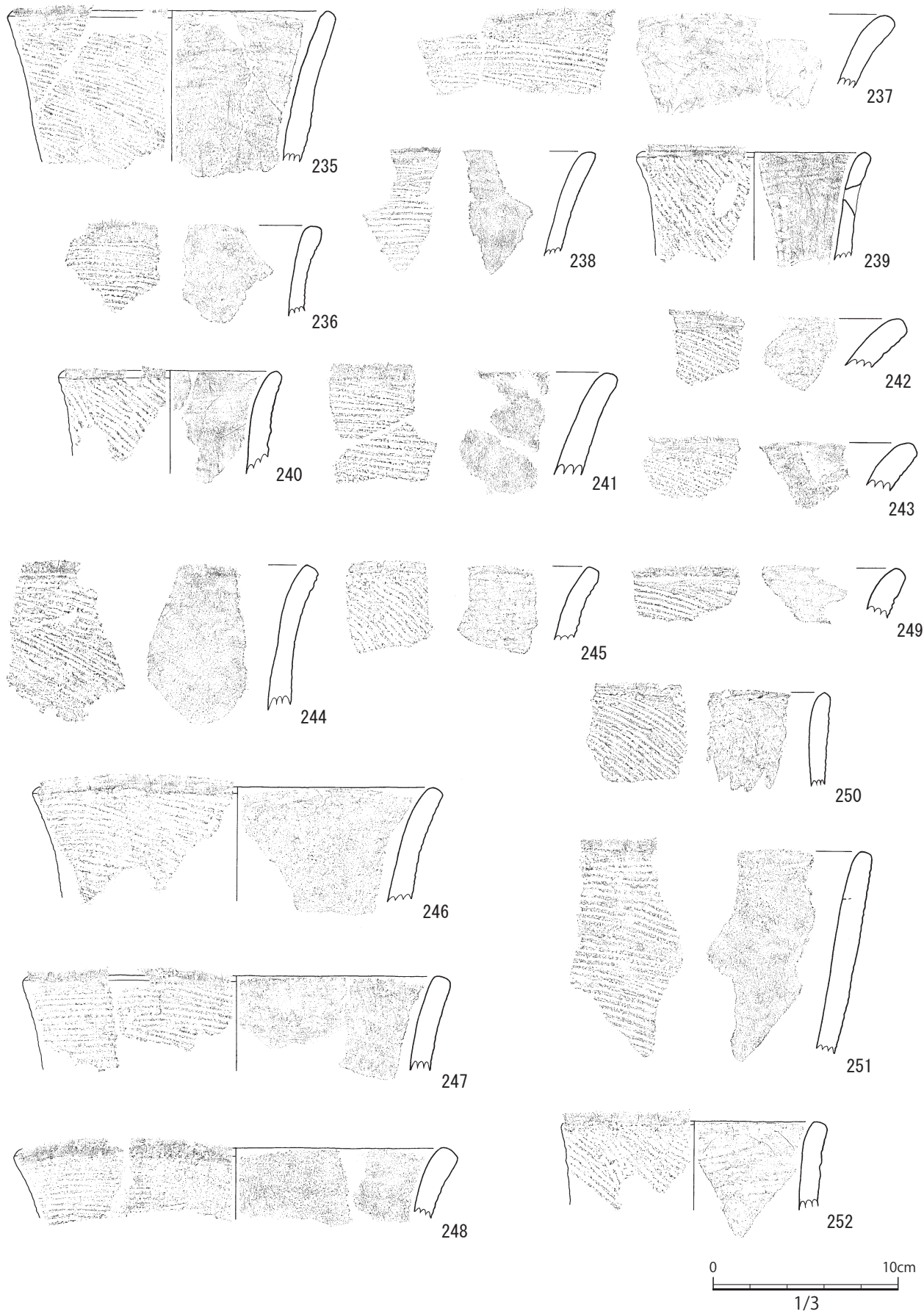




第110図 皿類土器実測図(2)



第111图 Ⅲ類土器実測图(3)



第112図 Ⅲ類土器実測図(4)

縁部上端に穿孔をもつ。内面側の穿孔の周りの一部が剝離している。

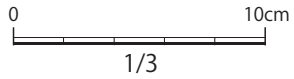
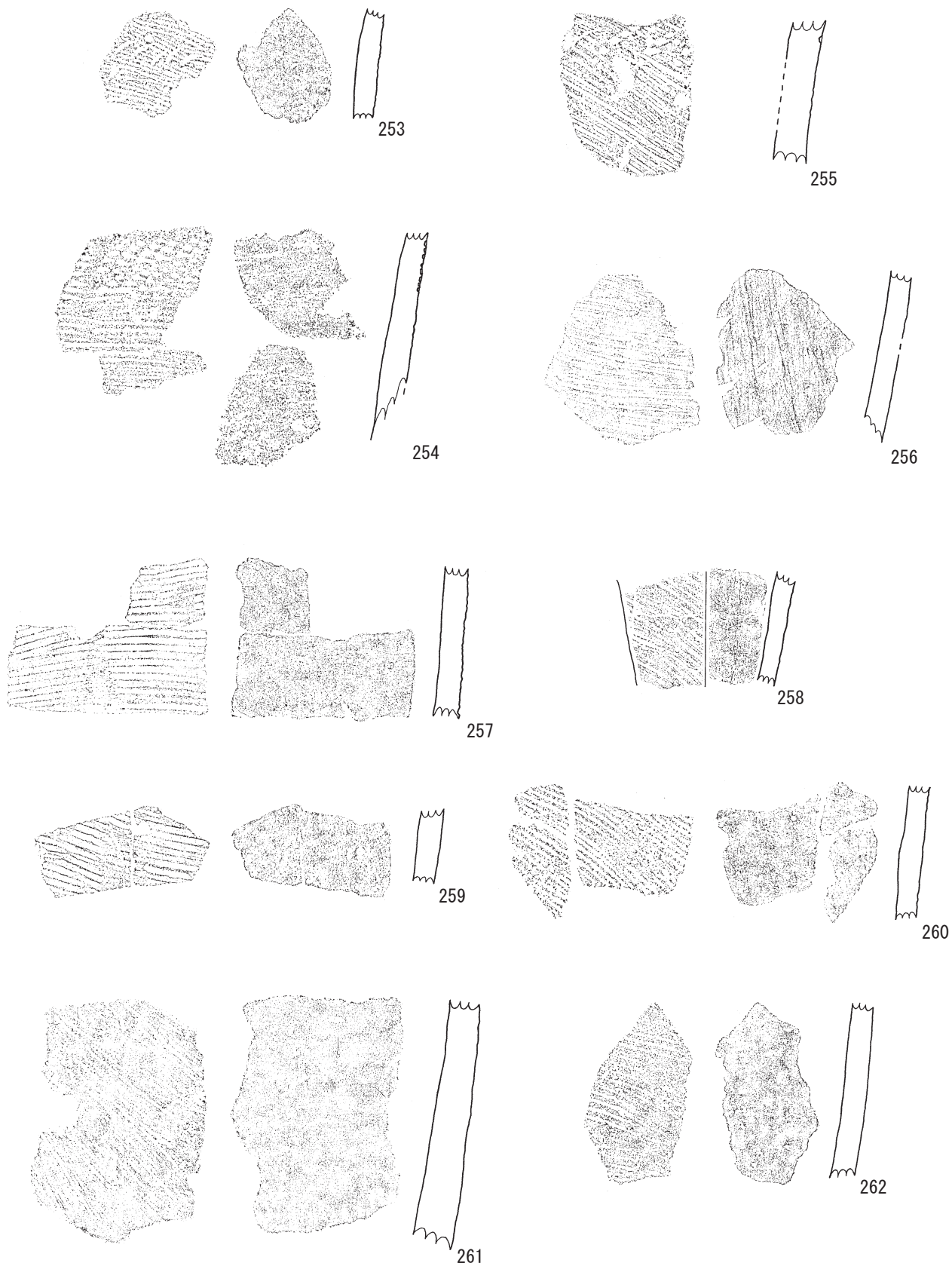
235～252は口縁部外面に条痕文のみ施す一群である。235～243は口縁部が外反し、口唇部が丸みを帯びる。235は口縁部外面の上端から胴部にかけて、貝殻条痕文を丁寧に施す。236は外面に幅狭な貝殻条痕文を施し、口唇部から内面にかけて丁寧なナデ調整を行う。237は黒斑や黒変があまりなく、浅黄橙色の色調をもつ。238は器壁が薄く、外面全体に横位の貝殻条痕文を施す。239は外面全体にススが付着し、口縁部に楕円形の穿孔をもつ。240は外面に斜位の貝殻条痕文を明瞭に施し、口唇部は横方向にミガキ状のナデ調整を丁寧に行う。241は風化が著しく内面に欠損部をもつ。242は66号集石遺構(SI66)の埋土内から出土した。口唇部から内面にかけてミガキ調整を行う。243は口縁部外面に斜位の貝殻条痕文を浅く施す。244～249は口縁部が外反し、口唇部に平坦面をもつ。244は口縁部下半に黒斑をもつ。245は外面に斜位の貝殻条痕文を明瞭に施す。口唇部は丁寧なナデ調整により平坦面をつくり、口唇部の両端に明瞭な稜を形成する。246は口唇部をミガキ調整により緩やかな平坦面をつくる。247・248は外面に横位の貝殻条痕文を施す。249は外面に貝殻条痕文を施し、口唇部にミガキ状のナデ調整を行った後の粘土の垂れが口縁部上端に確認できる。250～252は口縁部が直口または外傾して直線的に開く。250は内外面に黒斑が見られ、口唇部から内面にかけてミガキ状のナデ調整により丁寧に仕上げる。251は全体的に風化し施文が不明瞭になる。口唇部はナデ調整により丸みを帯びる。252は口唇部にミガキ調整により平坦面をつくり、内面は貝殻条痕による器面調整を行った後、丁寧なナデ調整で仕上げている。

253～267は胴部を主体とするものである。胎土や内面の器面調整によりⅢ類にしたが、Ⅱ類の可能性もあり得る。

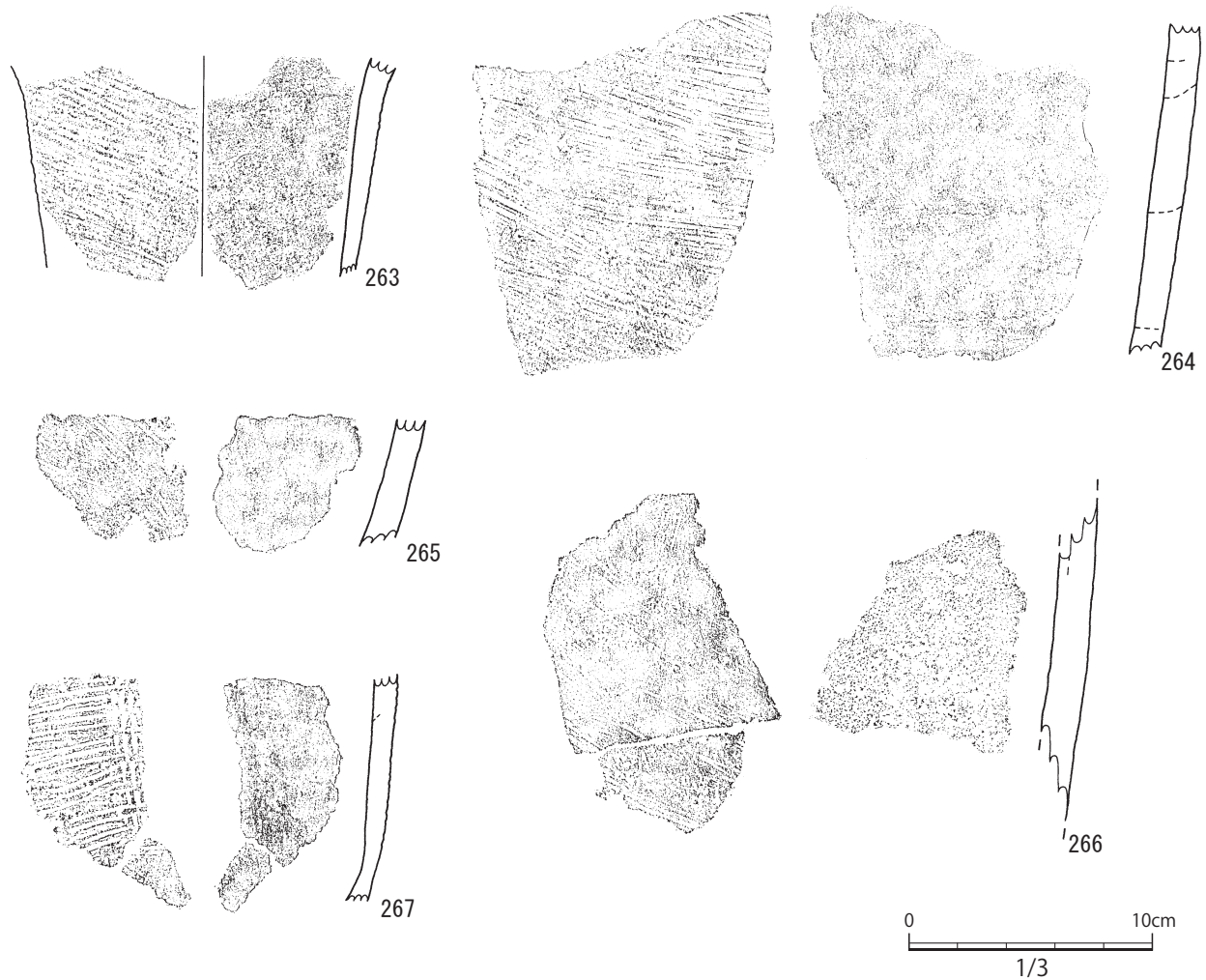
253～255は口縁部付近のものと見られる。253は斜位の貝殻条痕文を施した後、外面上半に斜位の貝殻刺突文を連続して施す。254は上端に押引状の貝殻刺突文を施した後、その下位に横位の貝殻条痕文を施す。255は62号土坑(SC62)の埋土内から出土した。外面全体に斜位の貝殻条痕文を施した後、上端に斜位の貝殻刺突文を施す。器壁が厚く、内面は剝離により大きく欠損する。256は外面に斜位の貝殻条痕文を施し、内面は縦方向のミガキ調整を行う。257は外面に幅広の貝殻条痕文を横位に施す。258は1号陥し穴(SS1)の埋土内から出土した。小型の土器で、内面は縦方向のミガキ状のナデ調整を行う。259は外面に斜位の貝殻条痕文を施し、一部黒斑をもつ。260は胎土に灰白色粒や透明粒を含む。261は器壁が厚く、外面に斜位の貝殻条痕文を施し、内面は丁寧なナデ調整を行う。262は内面をミガキ状のナデ調整で丁寧に仕上げる。263は16号土坑(SC16)の埋土内から出土した。外面全体に斜位の貝殻条痕文を浅く施す。264は外面に幅広の貝殻条痕文を浅く施し、内面にミガキ状のナデ調整を行う。265・266は外面の施文が不明瞭で、斜位の貝殻条痕文が全体的に確認できない。265は内面に縦方向のミガキ調整を行う。266は内面の一部が欠損し、風化が著しいため施文が不明瞭である。267は内面にミガキ調整を施すためⅢ類としたが、外面の施文はⅢ類と大きく異なる。横方向の貝殻条痕文を施した後、押引状の貝殻刺突文を縦位に連続して施す。

268～280は底部を主体とするもので、底径の小さい平底が多い。

268～277は底部外面をミガキ状のナデ調整により丁寧に仕上げる。268は胴部から底部まで残存し、わずかに上げ底である。胴部外面の上端に斜位の貝殻条痕文を確認することができるが底部付近に主な施文は見られない。269は胴部外面と内面は丁寧なナデ調整を行う。270は底部外面が数カ所欠損し



第113図 Ⅲ類土器実測図(5)



第114図 Ⅲ類土器実測図(6)

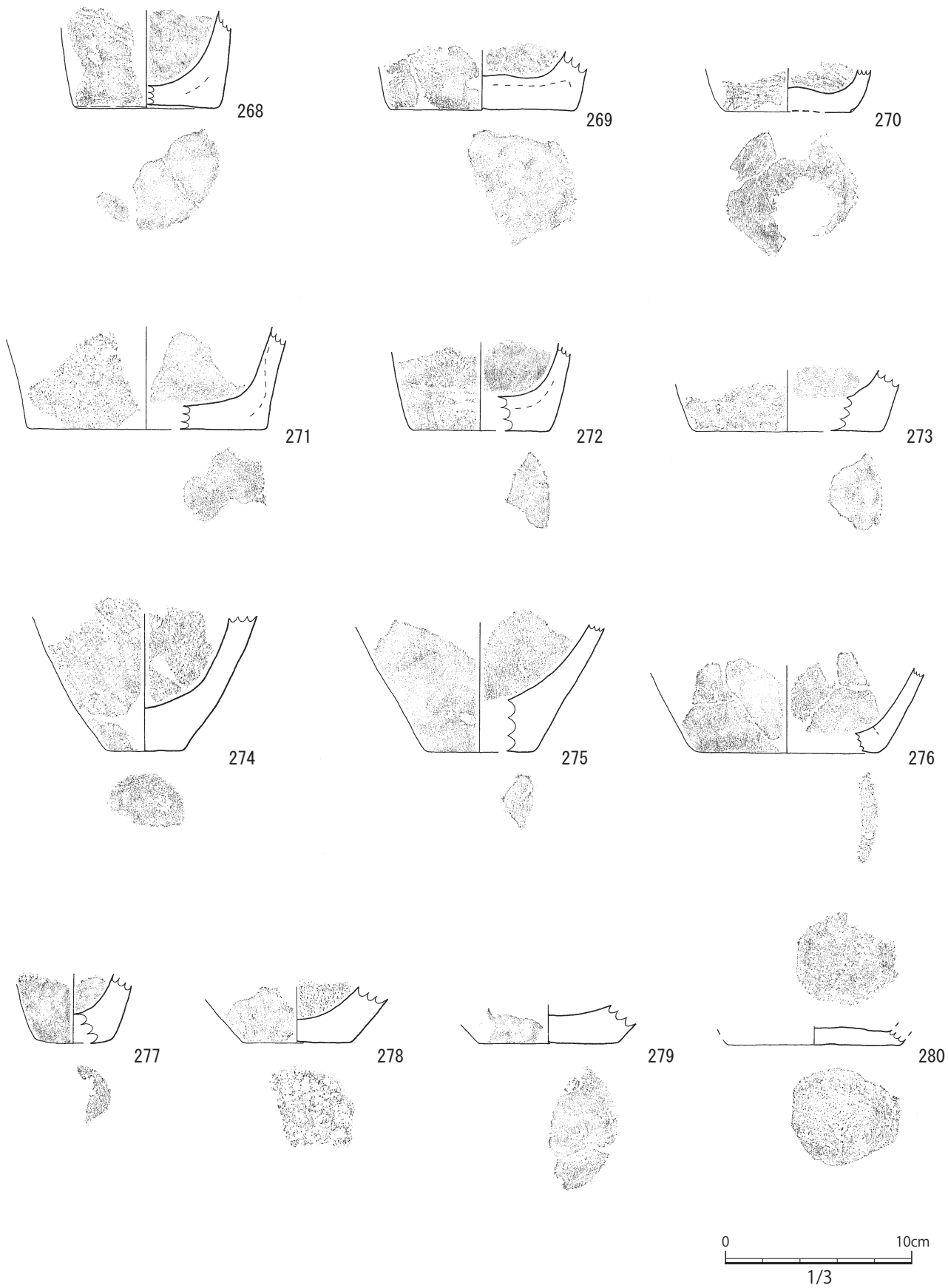
ている。底部内面の中央部分がわずかに膨らむ。271は風化が著しく外面の施文は不明瞭となる。272は断面より粘土の繋ぎ目が確認できる。底面から粘土を輪積みした後、内面側を成形したと見られる。273～275は底面の器壁が厚くなる。274は風化が著しく外面の施文が不明瞭だが、上端の一部に貝殻条痕文が確認できる。275は内外面ともにナデ調整を行い、主な施文は見られない。276・277は外面にミガキ状のナデによる器面調整を行う。277はほかと比べてもかなり小さな底径となり、小型土器の可能性はある。278・279は胴部外面を丁寧なナデ調整で仕上げる。278は底部外面に網代圧痕が見られる。280は底部のみが残存する。底部の厚みがほかと比べて薄く、底部外面は丁寧なナデ調整を行う。

(4) Ⅳ類土器(第117図 281～285)

Ⅳ類土器は外面に貝殻刺突文を施す一群である。器形は口縁部がわずかに内湾し、胴部は直線的もしくはややすぼまりながら底部へ至る。器面調整は内外面ともにナデが行われる。

分類 出土数が少ないため細分はしていない。

出土分布 Ⅳ類土器の出土分布図を第116図に示す。出土状況を見ると、集中箇所は見られず調査区中央から東側にかけて散布的に分布し、標高は181.5mより低い位置で出土している。接合状況は見られない。



第115图 Ⅲ類土器実測図(7)

## 土器の特徴

281～283は口縁部である。

281は口縁部端部がやや先細り、口唇部に丸みを帯びる。外面に斜位の貝殻条痕文を施した後、斜位の貝殻刺突文を2段連続して施す。内面は丁寧なナデ調整を行う。282は口縁部が外傾し、口唇部から内面にかけてミガキ状のナデ調整を行う。口唇部に平坦面をもち、内外面との境に稜をつくる。外面は斜位の貝殻条痕文を間隔を空けて施した後、縦位または斜位の貝殻刺突文を2段連続して施す。283は口縁部がやや内湾し、口唇部は丸みを帯びる。口縁部外面に横位の貝殻刺突文を連続して施す。下位は風化が著しく施文が不明瞭だが、一部斜位の貝殻条痕文が確認できる。内面は丁寧なナデ調整を行う。

284・285は胴部である。斜位の貝殻刺突文を方向を違えながら斜格子状に施す。胎土に金雲母を含む。施文や胎土の状況から同一個体の可能性がある。284は斜格子状の貝殻刺突文の上から幅広の沈線文を2条施している。

### (5) V類土器 (第118・119図 286～303)

V類土器は櫛歯状工具や貝殻腹縁部による条線を施す一群である。器形は口縁部が直口するか、ゆるやかに内湾するバケツ形を呈する。文様は口縁部から胴部にかけて短沈線や条線を連続して施すものと、短沈線や条線で鋸歯状文や縦位の流水文を施すものがある。器面調整は内外面ともにナデが行われる。

**分類** 外面の施文によりV a・V b類に細分した。

[V a類] 条線を縦位に施すもの (286～290)

[V b類] 鋸歯状文や流水文を施すもの (291～302)

なお、底部については細分せずV類とした。(303)

**出土分布** V類土器の出土分布図を第116図に示す。出土状況を見ると、V a類については出土数も少なく、集中していない。一方、V b類については調査区北側と標高の高い南西側に2つのまとまりが見られる。

## 土器の特徴

286～290は条線を縦位に施す一群である。286～288は口縁部が内湾し、口唇部に平坦面をつくり内面側に傾斜する。外面は口縁部上端から縦位または斜位の条線を連続して施す。287・288は縦に隣り合う細条線の境を横方向にナデ調整を行っている。288は口唇部の一部が欠損している。289は胴部で、方向を違えながら鋸歯状に条線を施した後、縦位に直線的な条線を施す。290は口縁部で、口唇部に平坦面をつくる。外面は縦位の条線を間隔を空けて施した後、その間に鋸歯状に条線を施す。

291～302は鋸歯状文や流水文を施す一群である。胎土に雲母を含むものが多い。291～295は口縁部である。291は口縁部から胴部まで残存し、口縁部が内湾する器形である。外面は貝殻腹縁部による鋸歯状文を全体に施す。口縁部端部をナデにより器面調整を行うとともに、口唇部にミガキ状のナデ調整を行うことで平坦面をつくる。口縁部に穿孔をもつ。292も291と同じ文様を施すため、同一個体と考えられる。293～295は口縁部が内湾し、口唇部に平坦面をつくる。293・294は外面に流水文を縦位に施す。内面はミガキ状のナデ調整により丁寧に仕上げる。293は口縁部外面に未貫通の穿孔をもち、294は口縁部に穿孔をもつ。295は外面に流水文を間隔を空けて縦位に施し、その間に櫛歯状工具による短い条線を斜位に連続して施す。296～302は胴部である。296は外面に櫛歯状工具による流水文と短い条線を連続して施す。297は外面に短い条線を方向を違えながら斜位に施し、一部流水文が確認で



IV類土器

● …IV類

V類土器

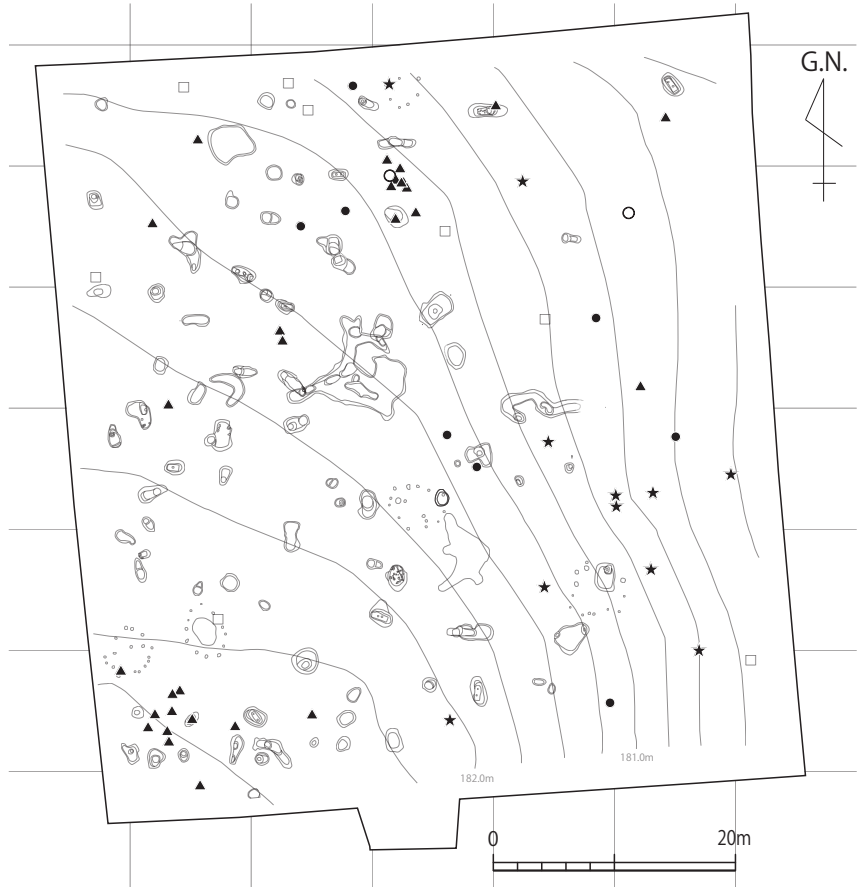
□ …Va類

▲ …Vb類

○ …V類

VI類土器

★ …VI類



IV類土器

接合状況

● …IV類

V類土器

接合状況

■ …Va類

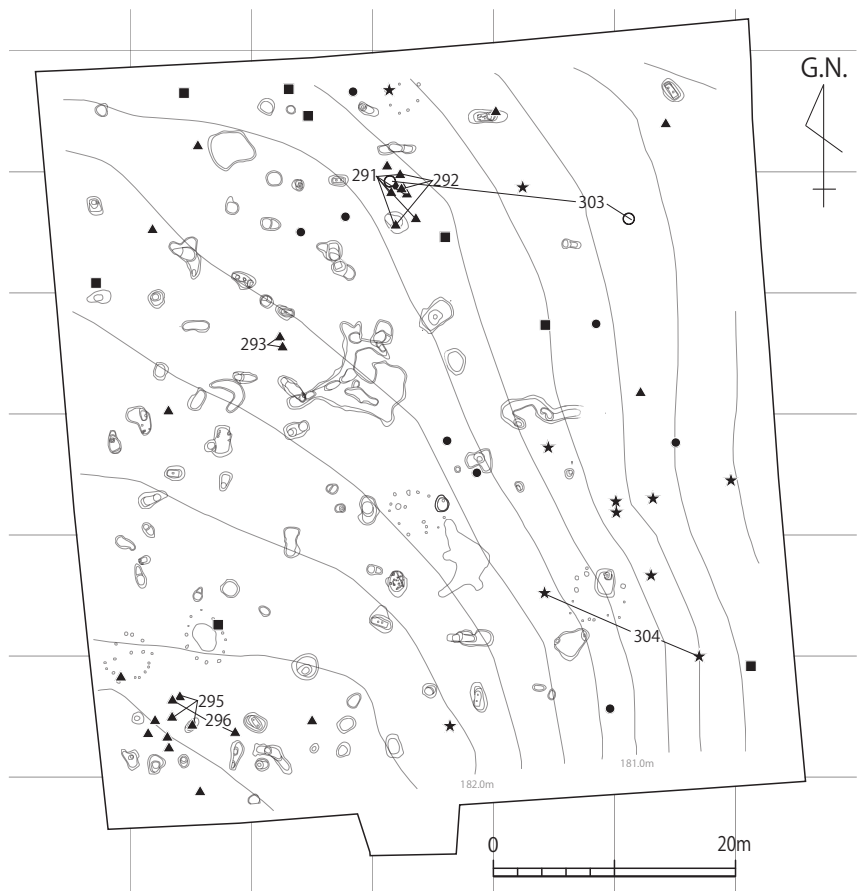
▲ …Vb類

○ …V類

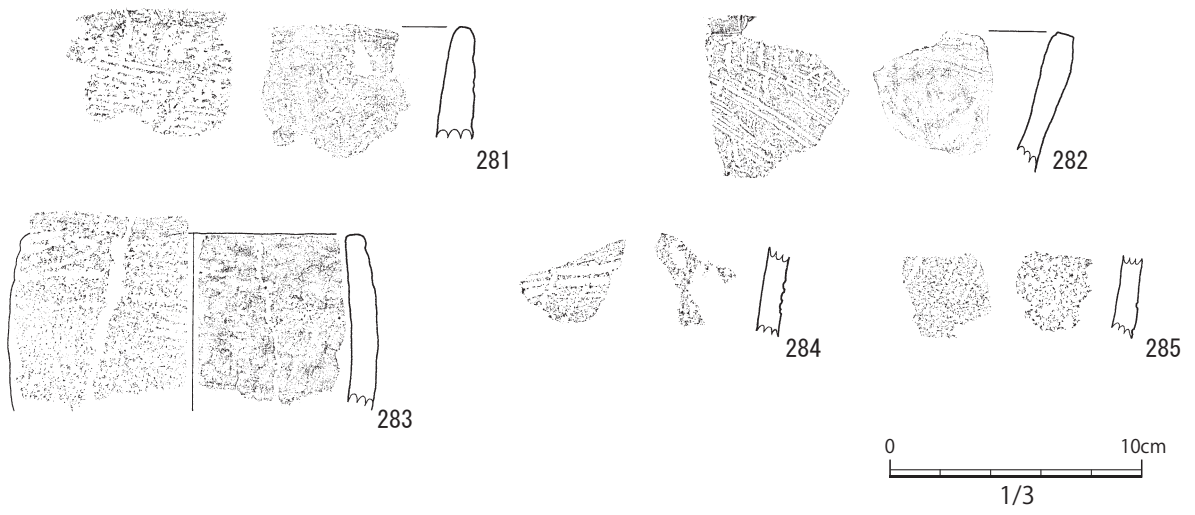
VI類土器

接合状況

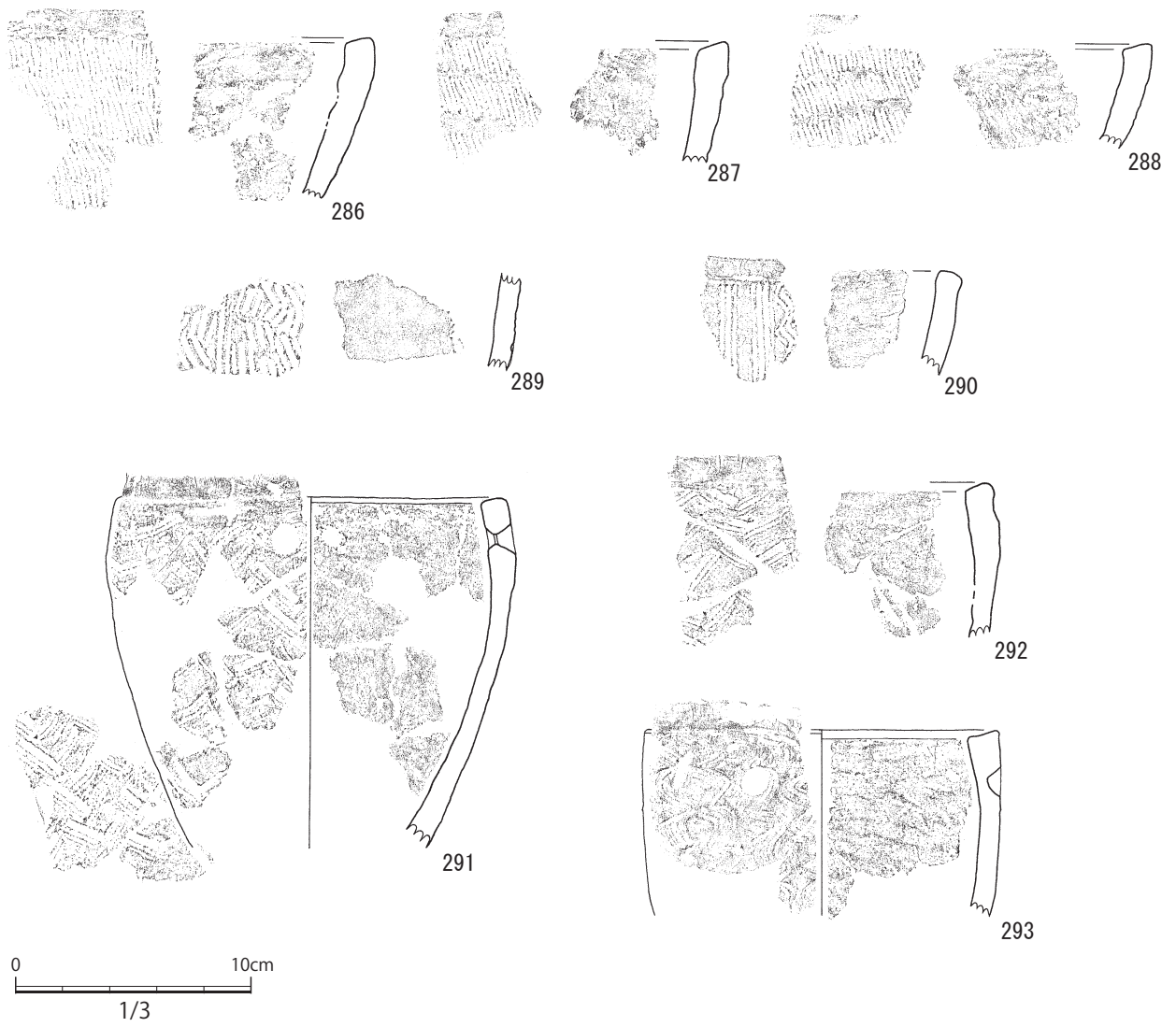
★ …VI類



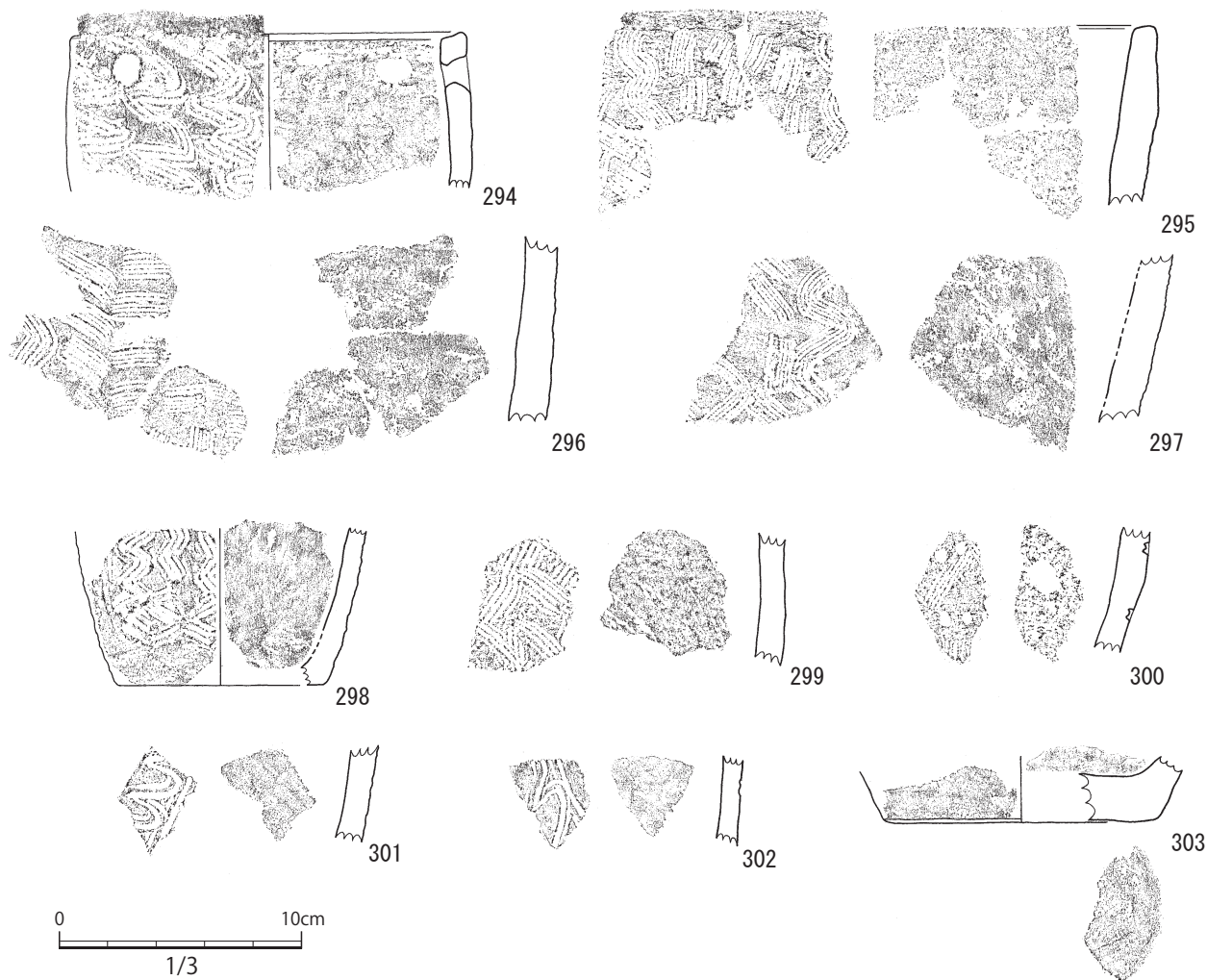
第 116 図 IV・V・VI類土器出土分布図



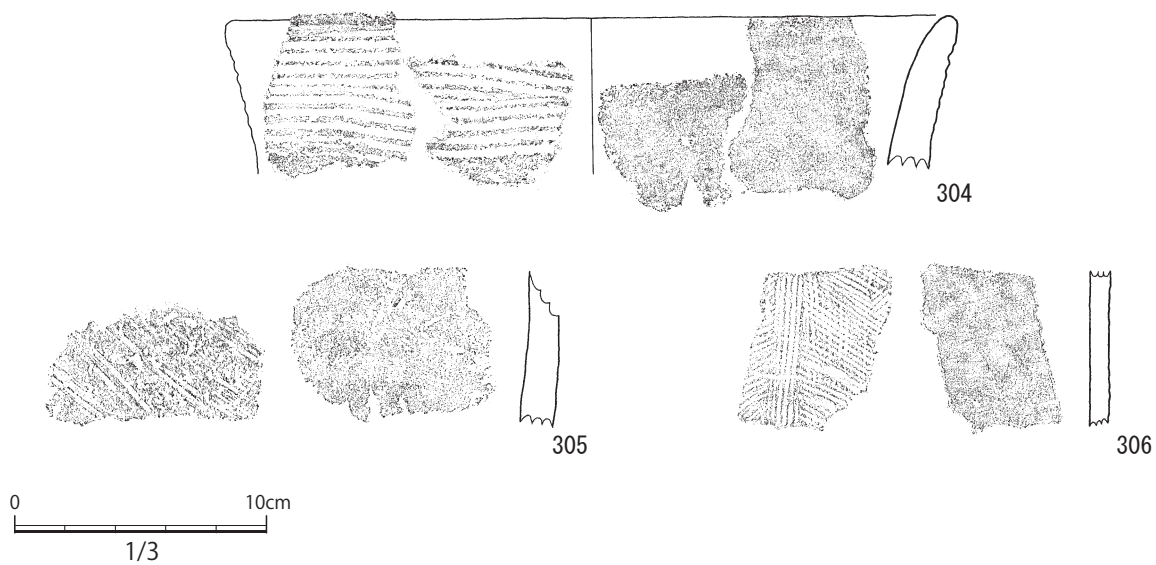
第 117 图 IV 類土器実測図



第 118 图 V 類土器実測図(1)



第119图 V類土器実測図(2)



第120图 VI類土器実測図

きる。施文の仕方や胎土、器壁の厚さからいずれも 295 と同一個体の可能性がある。298 は胴部から底部付近までで、わずかな底部のみ残存する。胴部外面に流水文を縦位に施し、底部付近はミガキ状のナデによる調整を行う。299 は外面に横位の条線を鋸歯状に施す。内面はミガキ状のナデ調整を行い、工具痕が残る。300 は斜位または縦位の条線を施し、上位の条線が頭頂部で屈折するのでおそらく鋸歯状と考えられる。間に竹管文を連続して施す。301・302 は流水文を斜位に施した後、沈線を隣り合うように施す。施文の仕方から同一個体と考えられる。

303 は底部である。底面が広く欠損しているが、残存している部分を見ると平底と考えられる。外面、底面ともにミガキ状のナデ調整を行う。内面は丁寧なナデ調整で仕上げる。

#### (6) VI類土器 (第 120 図 304 ~ 306)

VI類土器は口縁部がやや外傾する器形で、外面に横位または斜位の貝殻条痕文を施す一群である。

**分類** 出土数が少ないため細分はしていない。

**出土分布** IV類土器の出土分布図を第 116 図に示す。出土数が少なく散布的に分布しているが、調査区東側に出土している。接合状況は 1 点のみである。

#### 土器の特徴

304 は口縁部がやや外傾する器形で、口唇部は舌状を呈する。外面は口縁部上端から幅広で明瞭な貝殻条痕文を横位に施す。内面はナデ調整を行う。胎土に灰白色粒をもつ。

305・306 は胴部である。305 の外面は斜位の貝殻条痕文を浅く施し、橙色の色調をもつ。内面はナデ調整を行う。306 は外面に斜位の貝殻条痕文を方向を違えるように施した後、その上から縦位の貝殻条痕文を施す。器壁は 304 や 305 に比べて薄い。

#### (7) VII類土器 (第 124 ~ 139 図 307 ~ 456)

VII類土器は原体を回転し施文する一群である。器形は外反するものと外傾するものがあるが、一部直口するものや内湾するものもある。胴部は直線的もしくはややすぼまりながら底部に至るものや膨らみをもつもの、屈曲部をもつものがある。深鉢土器を主体とするが、一部壺型土器と見られるものもある。器面調整はナデもしくはケズリが行われる。文様は外面及び内面の口縁部上端に施文具を回転することにより施文するものが多い。押型文、縄文、撚糸文に大きく分類できるが、それ以外の原体で回転施文するものも含まれる。一部、形態や施文から押型文土器と供伴するとみられる土器も出土したが、原体を回転して施文するものではないため X 類とした (551・552)。

**分類** 原体の種類により VII a ~ VII j 類に細分した。胴部や底部については、細分した分類順に掲載していく。

- 〔VII a 類〕 楕円押型文を施すもの (307 ~ 356)
- 〔VII b 類〕 連珠押型文を施すもの (357 ~ 378)
- 〔VII c 類〕 山形押型文を施すもの (379 ~ 408)
- 〔VII d 類〕 格子目押型文を施すもの (409 ~ 413)
- 〔VII e 類〕 縄文を施すもの (414 ~ 418)
- 〔VII f 類〕 撚糸文を施すもの (419 ~ 430)
- 〔VII g 類〕 変形撚糸文を施すもの (431 ~ 448)
- 〔VII h 類〕 同心円状押型文を施すもの (449)

〔VII i 類〕 格子状押型文を施すもの (450)

〔VII j 類〕 短枝回転文 (イチゴ状文) を施すもの (451 ~ 456)

**出土分布** VII類土器の出土分布図を第121 ~ 123図に示す。細分した土器の分布傾向を見ていくと、楕円押型文を施す一群 (VII a 類) は調査区全体から広がって出土し、特に調査区北西側から南側 (標高180.75 ~ 182.25m) にかけて集中箇所が認められる。山形押型文を施す一群 (VII c 類) も調査区全体から出土するが、東側よりも西側 (標高181.25 ~ 182.25m) の方が出土量が多い。変形撚糸文を施す一群 (VII g 類) は調査区西側から南側 (標高181.75m前後) にかけて集中して出土している。同心円押型文を施す一群 (VII h 類) や格子状押型文を施す一群 (VII i 類)、短枝回転文を施す一群 (VII j 類) は、個体数も少なく、それぞれ調査区北西側と西側の一部からしか出土していない。その他の分類は、あまり集中せず散布的に出土している。

### 土器の特徴

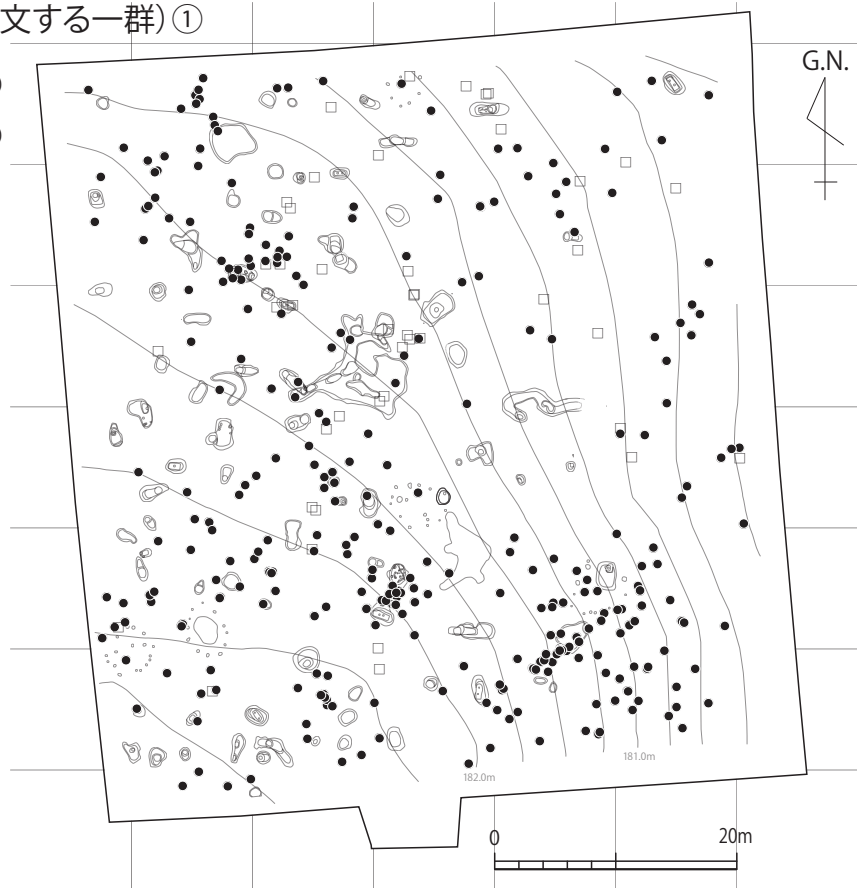
307 ~ 356 は楕円押型文を施す一群である。

307 ~ 325 は口縁部が外反または外傾する器形で、口縁部外面に縦位または斜位の楕円押型文を施す。口唇部や口縁部内面にも楕円押型文を施している。307 ~ 311 の楕円押型文は細長く小粒である。307 は口縁部内面に横位の楕円押型文を施すが、斜方向にナデ消したような形跡が一部見られる。308 は口縁部内面を丁寧なナデ調整を行った上で、上位に横位の楕円押型文を施す。310・311 は同一個体と考える。口縁部は大きく外反し、胴部にかけて膨らむが、底部に向けてすぼまる器形である。口縁部外面から胴部にかけて縦位または斜位の楕円押型文を施した後、口縁部外面の上端及び口唇部、口縁部内面の上端に横位の楕円押型文を施す。312 ~ 316 の楕円押型文は細長く中粒である。314 は口縁部が大きく外反し、口唇部を平坦に仕上げる。315 も口縁部が大きく外反し、端部は丸く、口縁部内面にわずかな稜をもつ。317 ~ 323 の楕円押型文は中粒の楕円形である。317 は口唇部を形成する際に粘土をつまみ出したのか、口唇部が幅広となり口縁部外面上端に凸部を設ける。内面下部は剥離する。319 は内面全体に炭化物が付着する。323 は口縁部上端の器壁を薄く仕上げ、口唇部に横位の楕円押型文を施す。324・325 の楕円押型文は細長く中粒である。324 は口縁部外面に縦位の楕円押型文を施した後、口縁部上端の施文をナデ消している。325 は胎土に金雲母を含む。326・327 は口縁部が外傾する器形で、口縁部外面に横位の楕円押型文を施す。326 は大粒の楕円押型文を外表面及び内面の上端に横位に施す。口唇部には原体を押圧したような深い刻目をもつ。327 は大粒の楕円押型文を外表面及び内面の上端に施すが、口唇部は平坦に仕上げ押型文による施文は見られない。328・329 は口縁部が外反する器形で、口唇部と口縁部内面の上端には横位の楕円押型文を施すが、口縁部外面は楕円押型文による施文は見られず無文となる。

330 ~ 348 は胴部を主体とし、外面に縦位または斜位の楕円押型文を施す。330 ~ 333 の楕円押型文は細長く小粒である。330 は内面に指頭圧痕とみられる形跡がある。332 は外面上部に黒斑をもち、胎土に褐灰色粒や灰白色粒を含む。334・335 の楕円押型文は小粒の楕円形である。334 は内面を丁寧なナデ調整で仕上げる。335 は内面の一部に黒色物が付着する。336 ~ 339 の楕円押型文は細長く中粒である。338 は器壁が薄く、外面上部に黒斑をもち、胎土に金雲母を含む。339 は内面をケズリ状のナデ調整で仕上げる。340・341 の楕円押型文は中粒の楕円形である。342 ~ 345 は外面に細長く中粒の楕円押型文を縦位に施した後、ナデ消しによるものか施文が不明瞭な部分をもつ。345 は明確な屈曲部をもつ。外

Ⅶ類(原体を回転し施文する一群)①

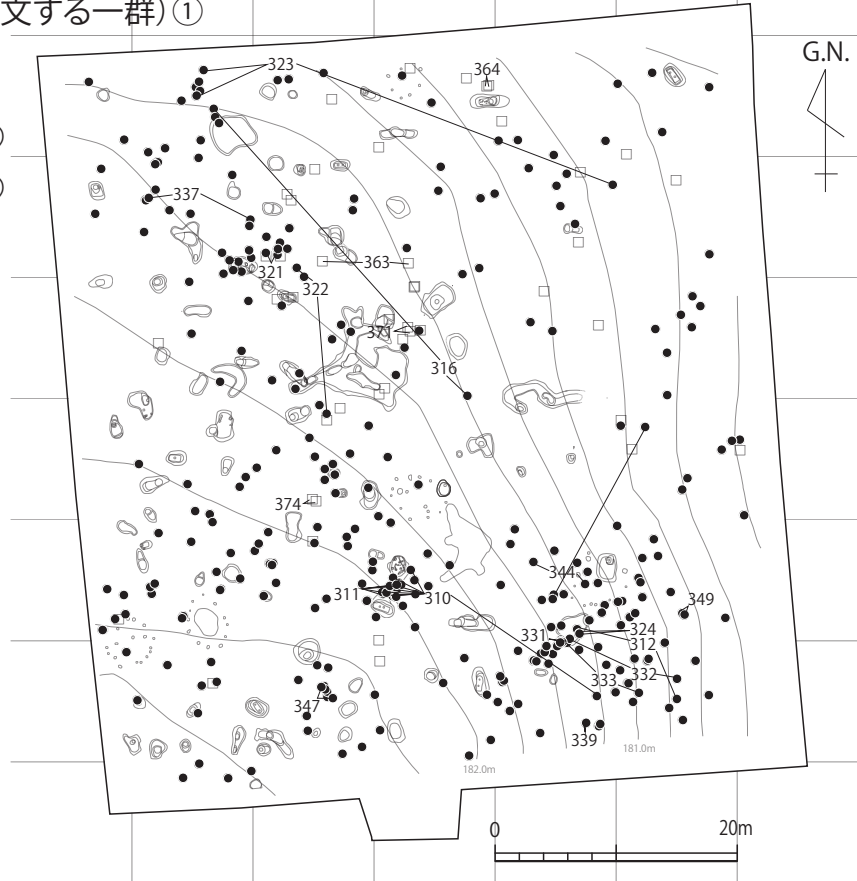
- …Ⅶa類 (楕円押型文)
- …Ⅶb類 (連珠押型文)



Ⅶ類(原体を回転し施文する一群)①

接合状況

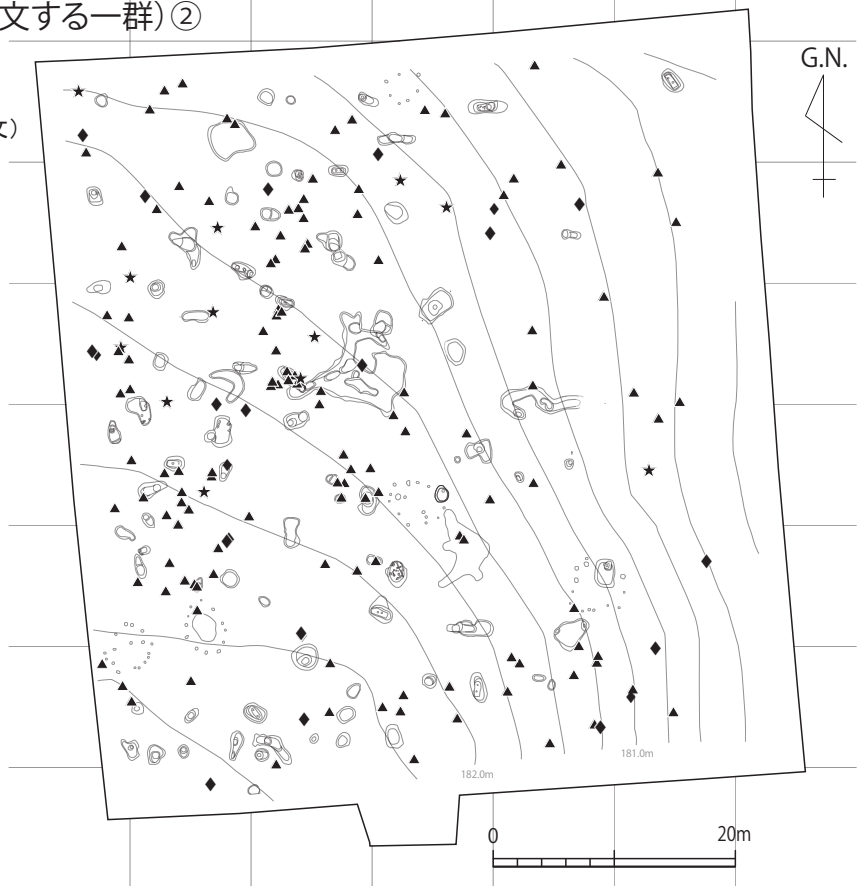
- …Ⅶa類 (楕円押型文)
- …Ⅶb類 (連珠押型文)



第121図 Ⅶ類土器出土分布図(1)

Ⅶ類(原体を回転し施文する一群)②

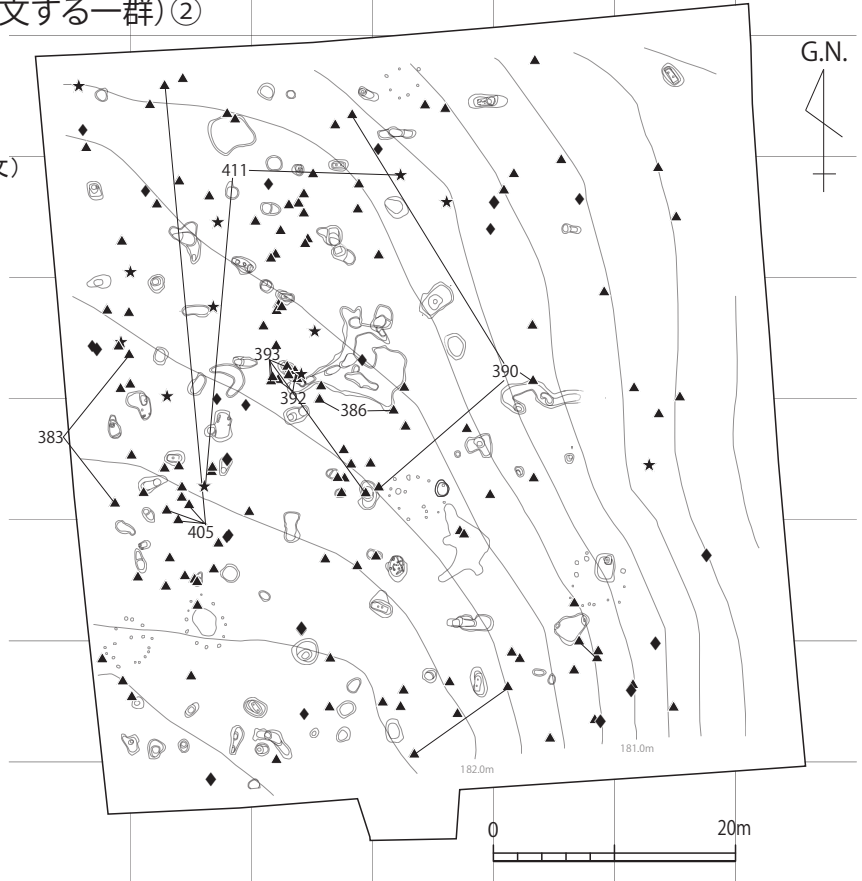
- ▲ …Ⅶc類 (山形押型文)
- ★ …Ⅶd類 (格子目押型文)
- ◆ …Ⅶe類 (縄文)



Ⅶ類(原体を回転し施文する一群)②

接合状況

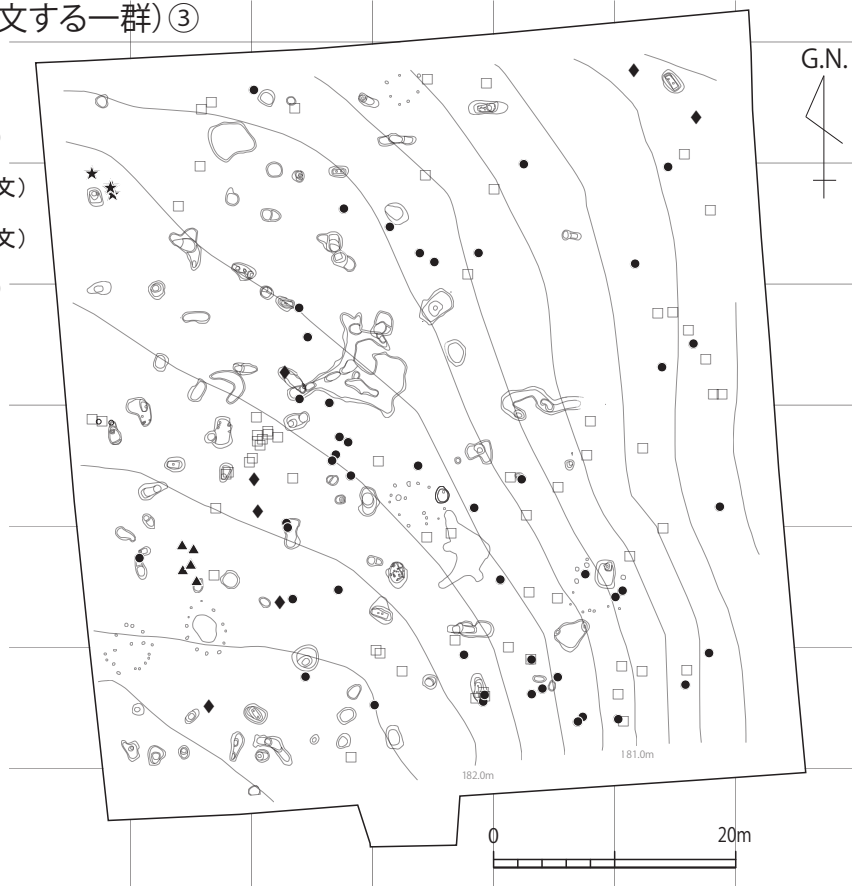
- ▲ …Ⅶc類 (山形押型文)
- ★ …Ⅶd類 (格子目押型文)
- ◆ …Ⅶe類 (縄文)



第122図 Ⅶ類土器出土分布図(2)

VII類(原体を回転し施文する一群)③

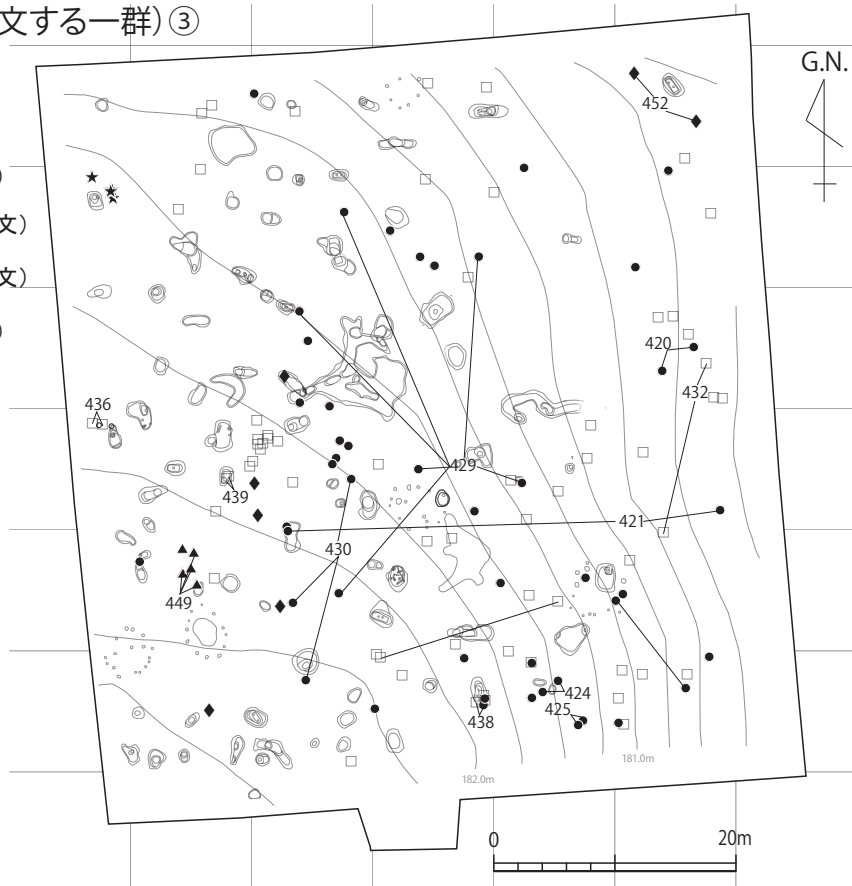
- …VII f類 (撚糸文)
- …VII g類 (変形撚糸文)
- ▲ …VII h類 (同心円押型文)
- ★ …VII i類 (格子状押型文)
- ◆ …VII j類 (短枝回転文)



VII類(原体を回転し施文する一群)③

接合状況

- …VII f類 (撚糸文)
- …VII g類 (変形撚糸文)
- ▲ …VII h類 (同心円押型文)
- ★ …VII i類 (格子状押型文)
- ◆ …VII j類 (短枝回転文)



第123図 VII類土器出土分布図(3)



面に楕円押型文の施文が見られるためⅦ類としたが、屈曲部をもつためⅧ類の可能性もある。346は底部付近のものとする。上位に小粒の楕円押型文が見られるが、その下位は主な施文は見られない。胎土に灰白色粒を多量に含む。347は外面に斜位の楕円押型文を施した後、一部ナデ消しにより施文がない部分がある。内面はケズリ状のナデ調整を行う。348の外面は丁寧なナデ調整により大部分が無文のように見えるが、楕円押型文が一部認められる。

349～354は底部で、基本的に平底である。349・350は斜位の楕円押型文を底部付近まで施すが、外面下端はナデ調整により施文が見られなくなる。350は底面外面をミガキ状のナデ調整で仕上げる。351・352は外面下端まで斜位の楕円押型文を施す。353・354はナデ調整により外面の施文がほとんど見られないが、一部に楕円押型文が見られる。

355～356は円盤形土器製品と考えられる。楕円押型文の土器片を使用し、周縁を研磨した形跡が見られる。

357～378は連珠押型文を施す一群である。連珠とは、楕円の粒が独立している楕円押型文と異なり、楕円の粒が連なるようにつながっている文様を指す。

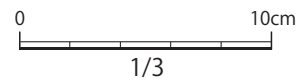
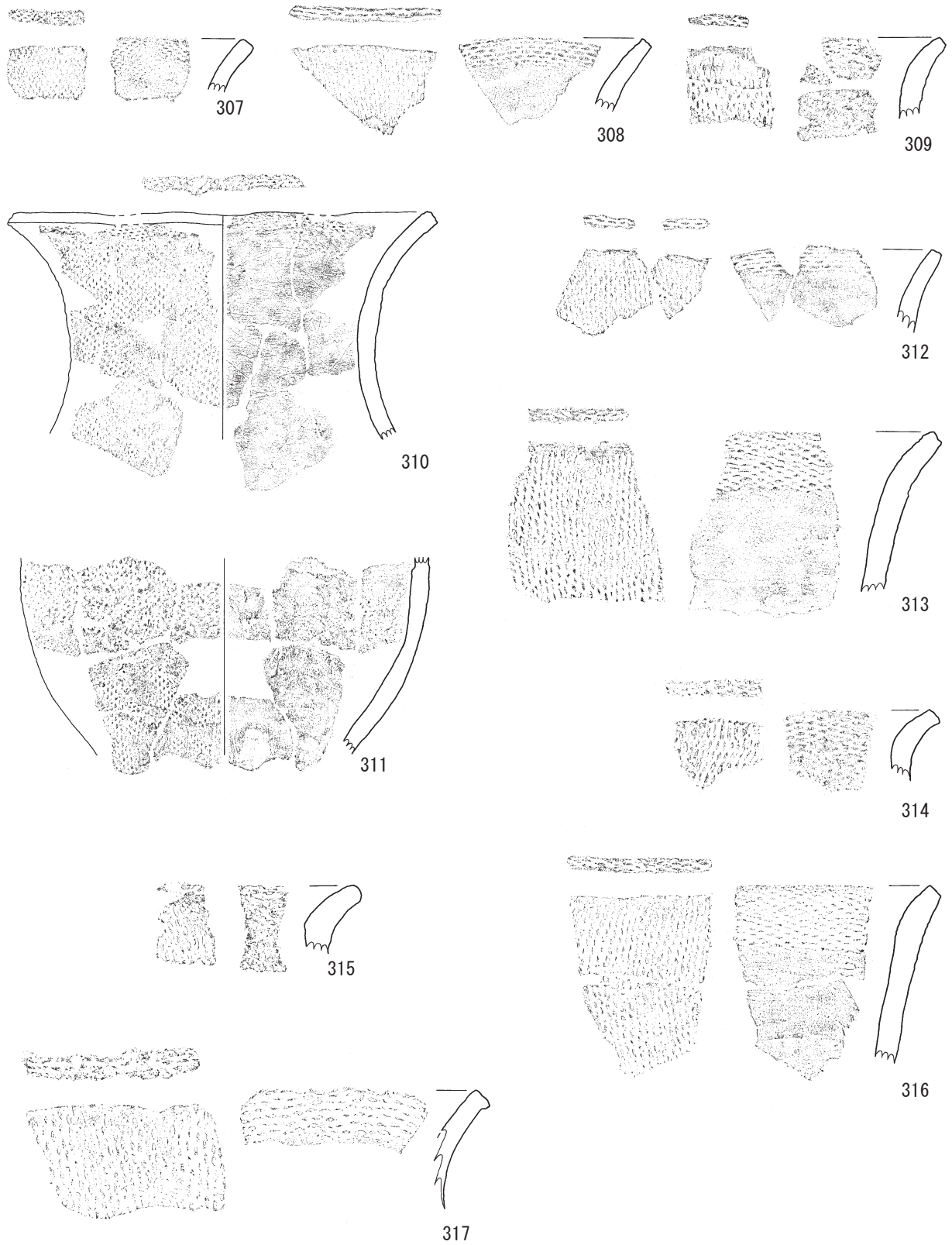
357～368は連珠押型文を横位に施す。357～362は口縁部で、口縁部が直口もしくは外傾する器形である。357は口唇部を丸く仕上げた後、ミガキ状のナデ調整で丁寧に仕上げる。358・359は口唇部が内傾し、口縁部端部の内面に明確な稜をもつ。口唇部にミガキ状のナデ調整を施す。胎土に金雲母を含む。359は穿孔をあけた形跡があるが、欠損のため不明瞭となる。360～362は口縁部内面上端に棒状工具を押し当てたような刺突文（原体条痕）を縦位に施す。360は内面にも連珠押型文を横位に施す。363～368は胴部である。364・365は内面をケズリ調整の後、ナデ調整を行う。366～368は外面に横位の連珠押型文を施した後、連珠の粒の凹凸をナデ消している。

369～378は連珠押型文を縦位または斜位に施す。369～372は口縁部で、外反もしくは外傾する器形である。口唇部や口縁部上端にも横位の連珠押型文を施す。369・370は施文や胎土から同一個体と考える。371は口縁部が大きく外反する器形で、口縁部の内面に稜をもつ。内面は口縁部上端に横位の連珠押型文を施し、その下位はケズリによる調整を行う。372は口唇部を平坦につくり、口縁部内面に連珠押型文を横位に施す。373～378は胴部である。374・375は内面にケズリ調整を行う。376は外面に大粒の連珠押型文を縦位に施し、内面はミガキ状のナデ調整を行う。小型の土器と考える。

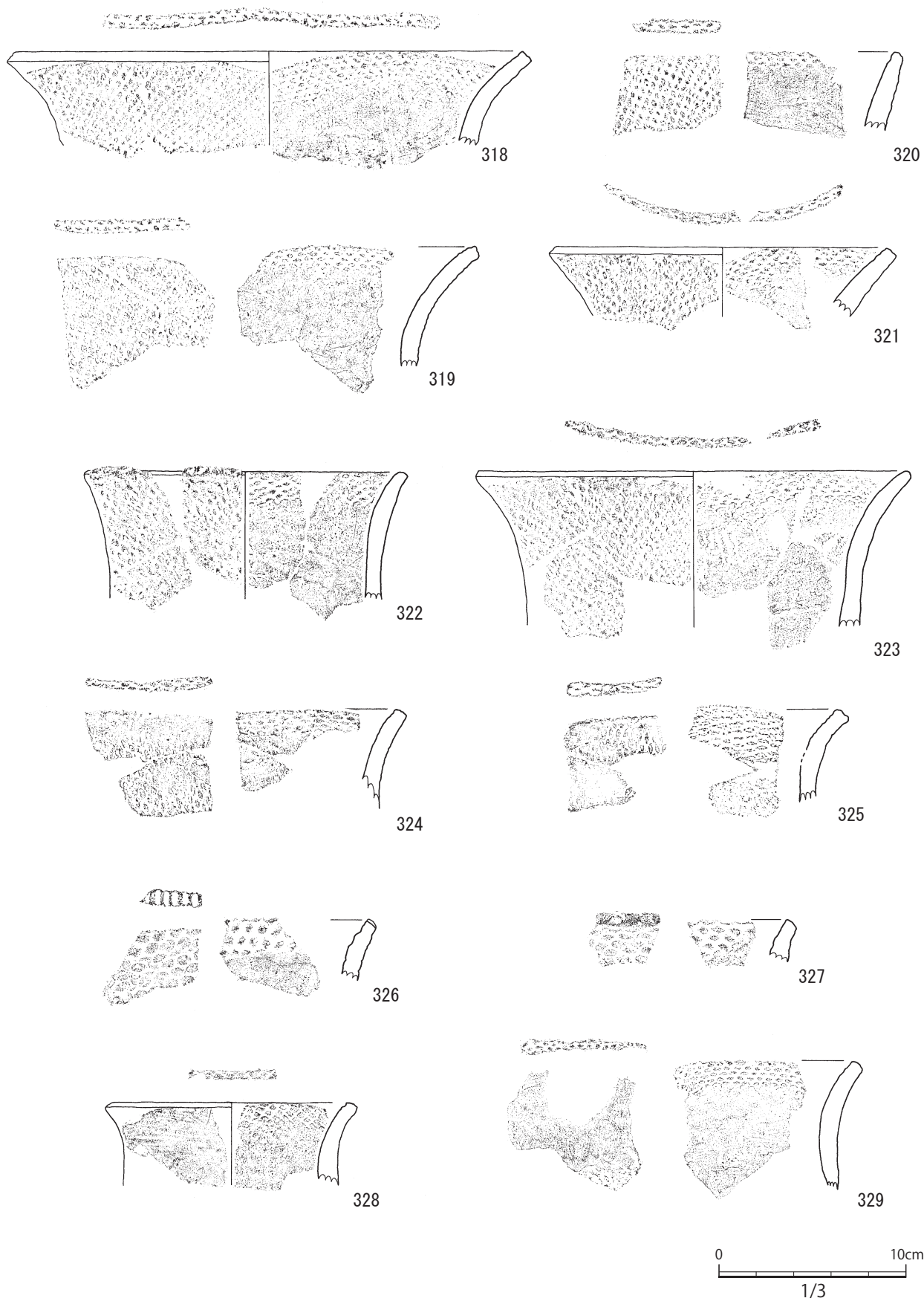
379～408は山形押型文を施す一群である。

379～384は幅の狭い山形の原体を用いて横位または斜位の山形押型文を施す。浅黄橙色の色調をもつ。379・380は口縁部である。379は口唇部に平坦面をつくり、内面は丁寧なナデ調整を行う。381～383は胴部である。器壁の厚みは均等でなく、肥厚したり、薄くなったりする部分がある。384は底部である。わずかな上げ底で、底径が小さい。外面は底面付近まで横位の山形押型文を施す。

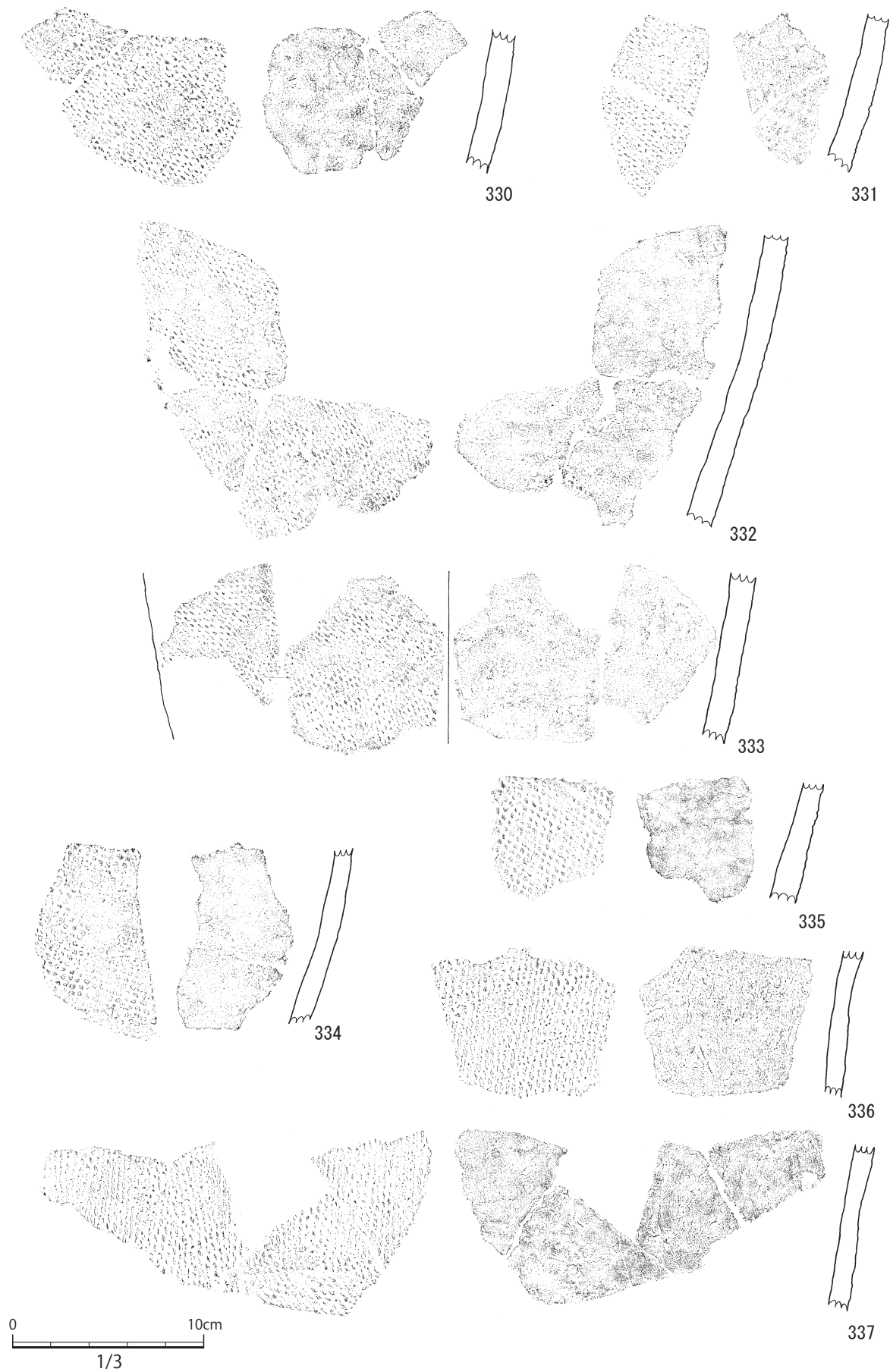
385～403は比較的幅の広い山形の原体を用いて縦位または斜位の山形押型文を施す。橙色や褐色の色調を基本とする。385～388は口縁部で、口唇部や口縁部内面上端にも横位の山形押型文を施す。385は小型の土器で、胴部から口縁部にかけて垂直に立ち上がるが、口縁部上端のみ外傾する器形である。386も小型の土器で、口縁部が直線的に外側に開く器形で、内面はケズリ調整を行った後、ナデ調整を行う。387・388は口縁部が外反する器形で、387は口縁部に穿孔をもつ。389～401は胴部である。389～393は内面をケズリ調整で仕上げる。392・393は施文や胎土から同一個体と考える。392は多く



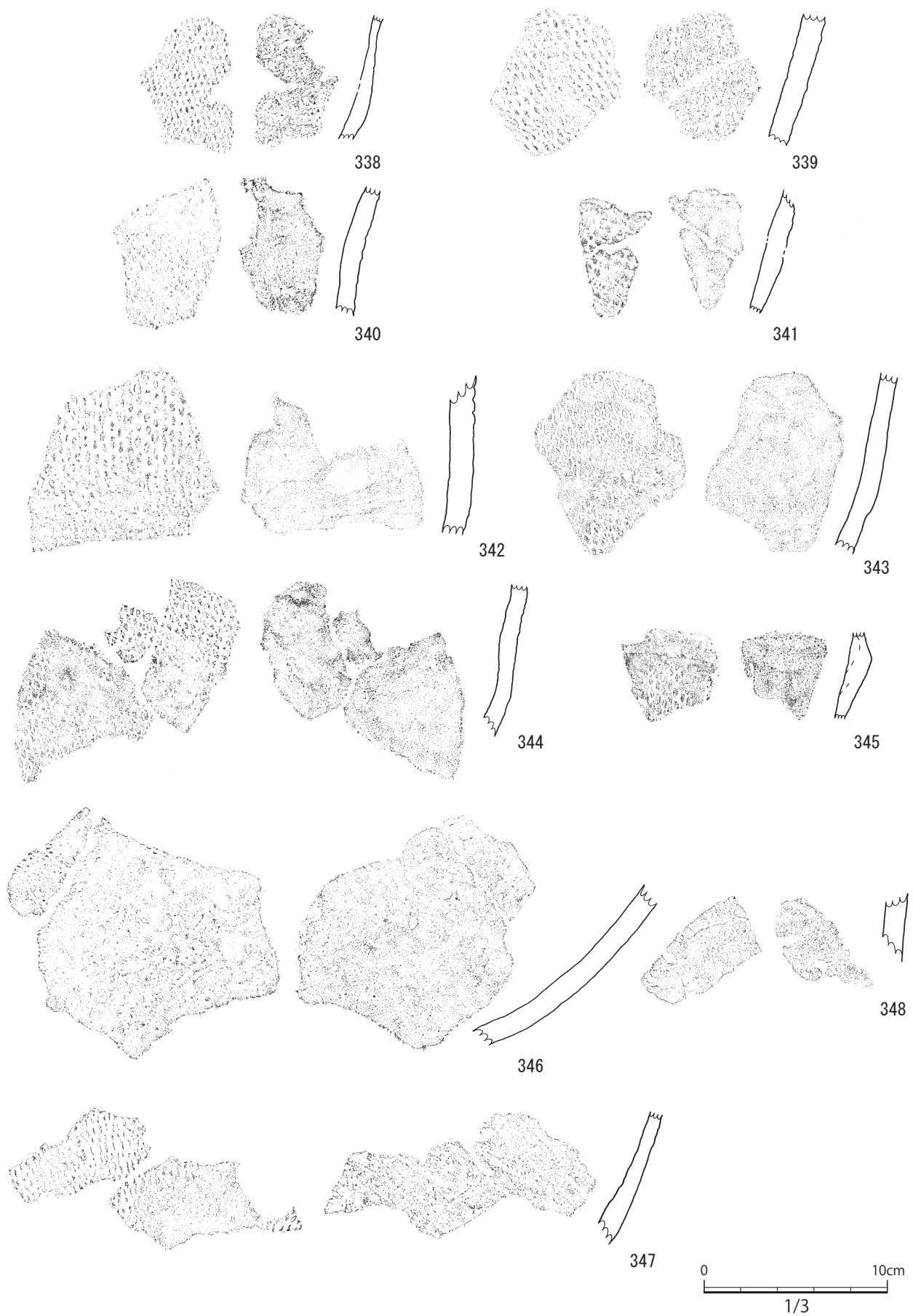
第124图 VII类土器实测图(1)



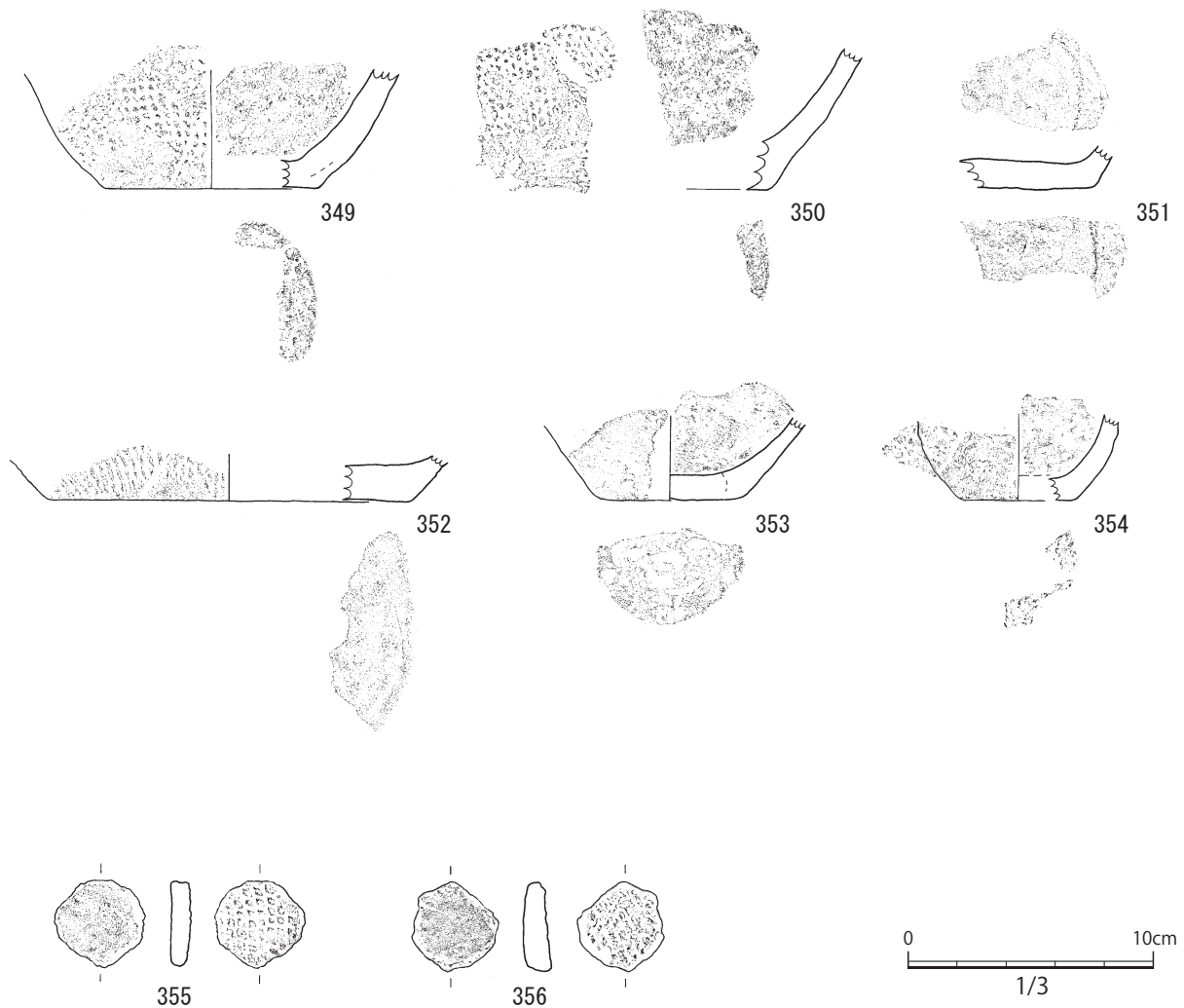
第125図 VII類土器実測図(2)



第126图 VII类土器实测图(3)



第127図 VII類土器実測図(4)



第128図 VII類土器実測図(5)

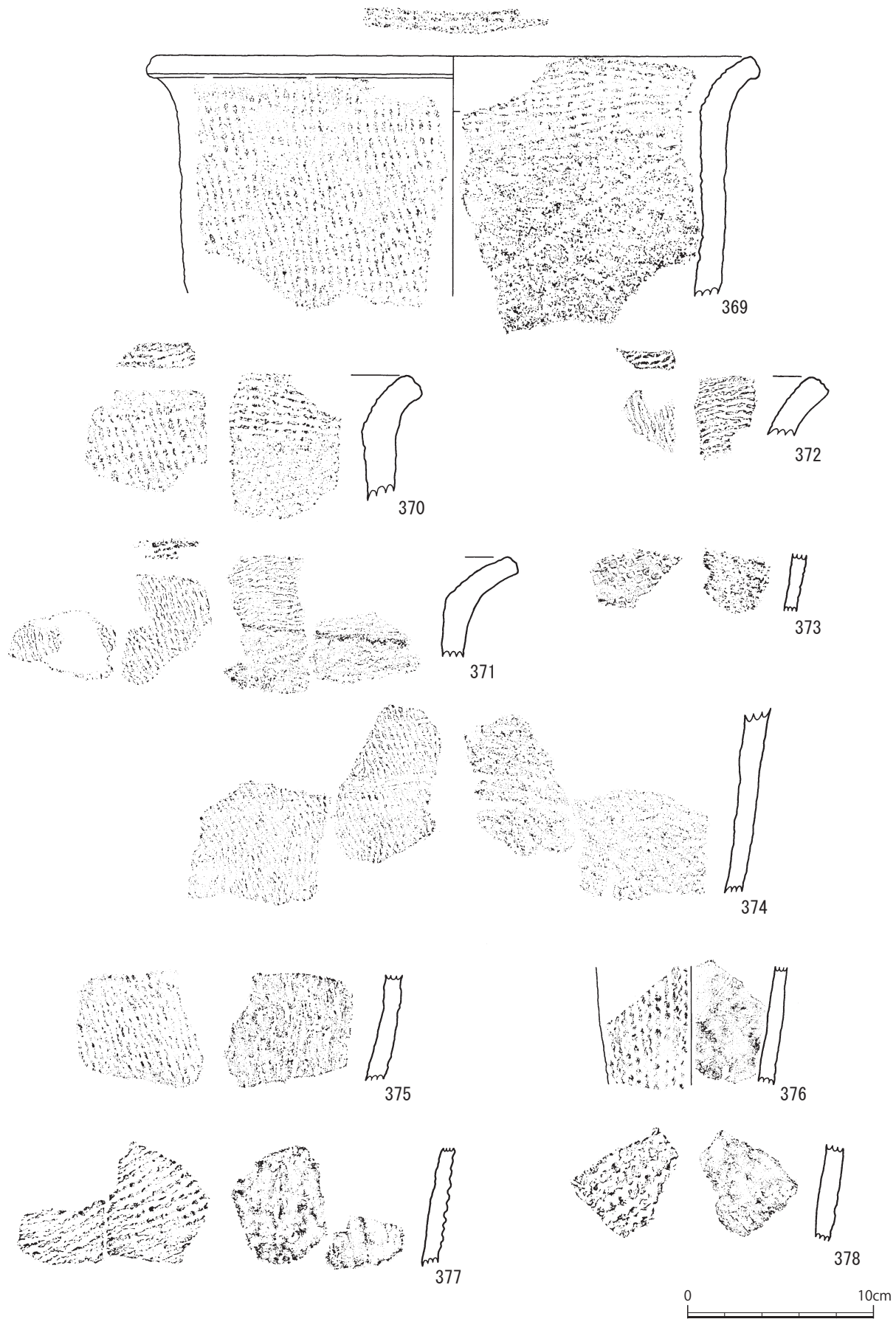
の土器片が1号炉穴(SP1)の埋土内から出土した。大型の土器で、胴部が膨らみ、底部に向けてすぼまる器形である。393は下位が肥厚することから底部付近と考えられる。394・395・397は内面をケズリ調整の後、ナデ調整を行い仕上げている。396・399は外面に山形押型文を密に施し、内面はナデ調整を行う。398は口縁部付近と見られ、大きく外反する。下位に穿孔をもつ。400・401は比較的緩やかな山形押型文を縦位に施し、内面は丁寧なナデ調整を行う。402・403は底部である。402は胴部外面に縦位の山形押型文を施し、底面は上げ底となる。403は胴部外面の上位に縦位の山形押型文を施した後、底部付近には横位の山形押型文を施す。

404・405は縦位の山形押型文を左右反転させて施すことにより菱形のモチーフを描く。同一個体と見られる。404は口縁部でやや外反し、口唇部に平坦面をつくる。内面はナデ調整を行う。405は胴部で外反しながら胴部に至る。断面には接合面と見られる形跡もあり、屈曲部につながる器形からVIII類の可能性もある。

406～408は方向を違えて山形押型文を施す。施文から同一個体と見られる。406は口縁部で、口縁部上端がわずかに肥厚し、やや内湾する器形である。山形押型文を横位に施した後、一部、縦位の山

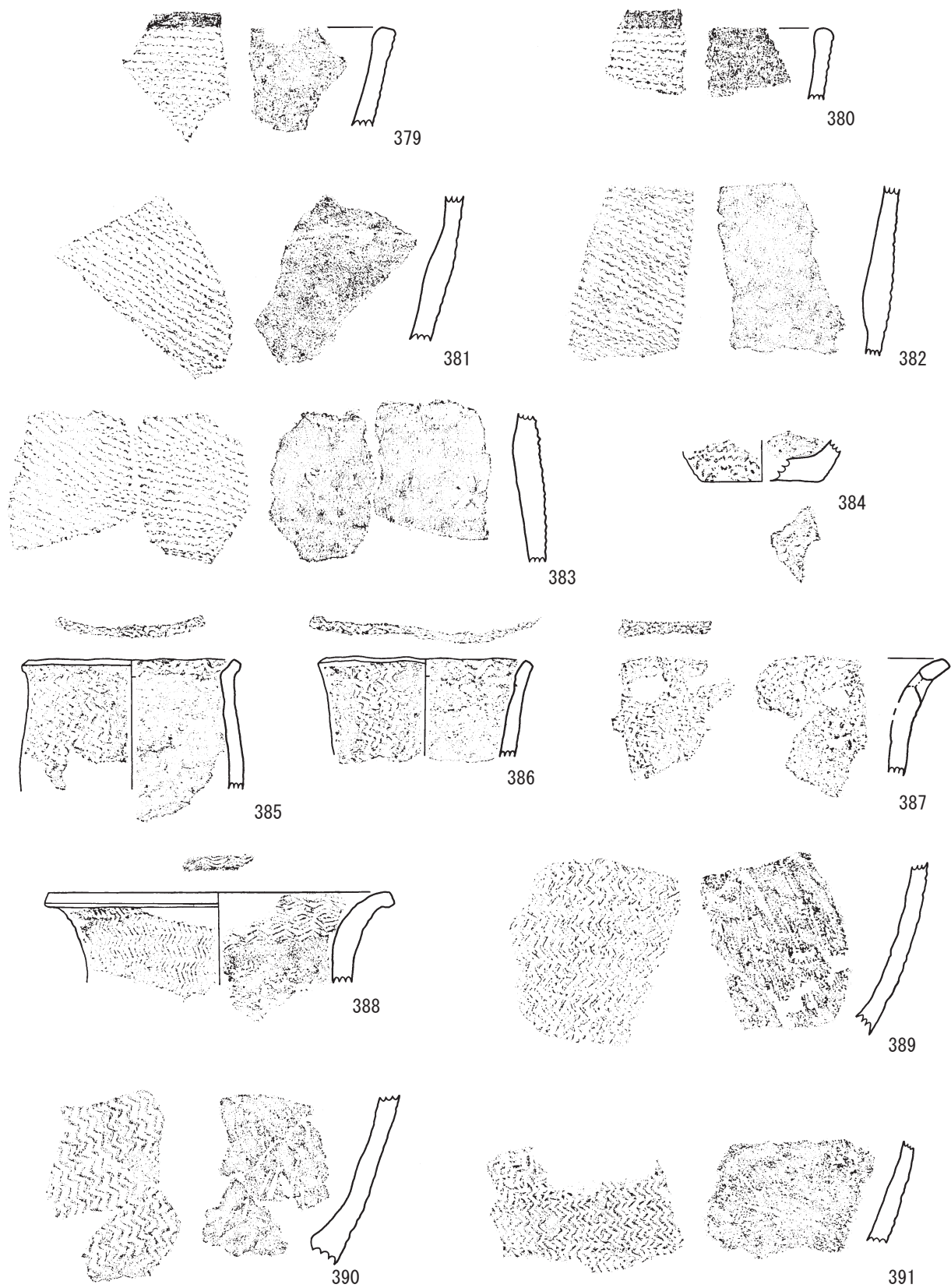


第129图 VII類土器実測图(6)

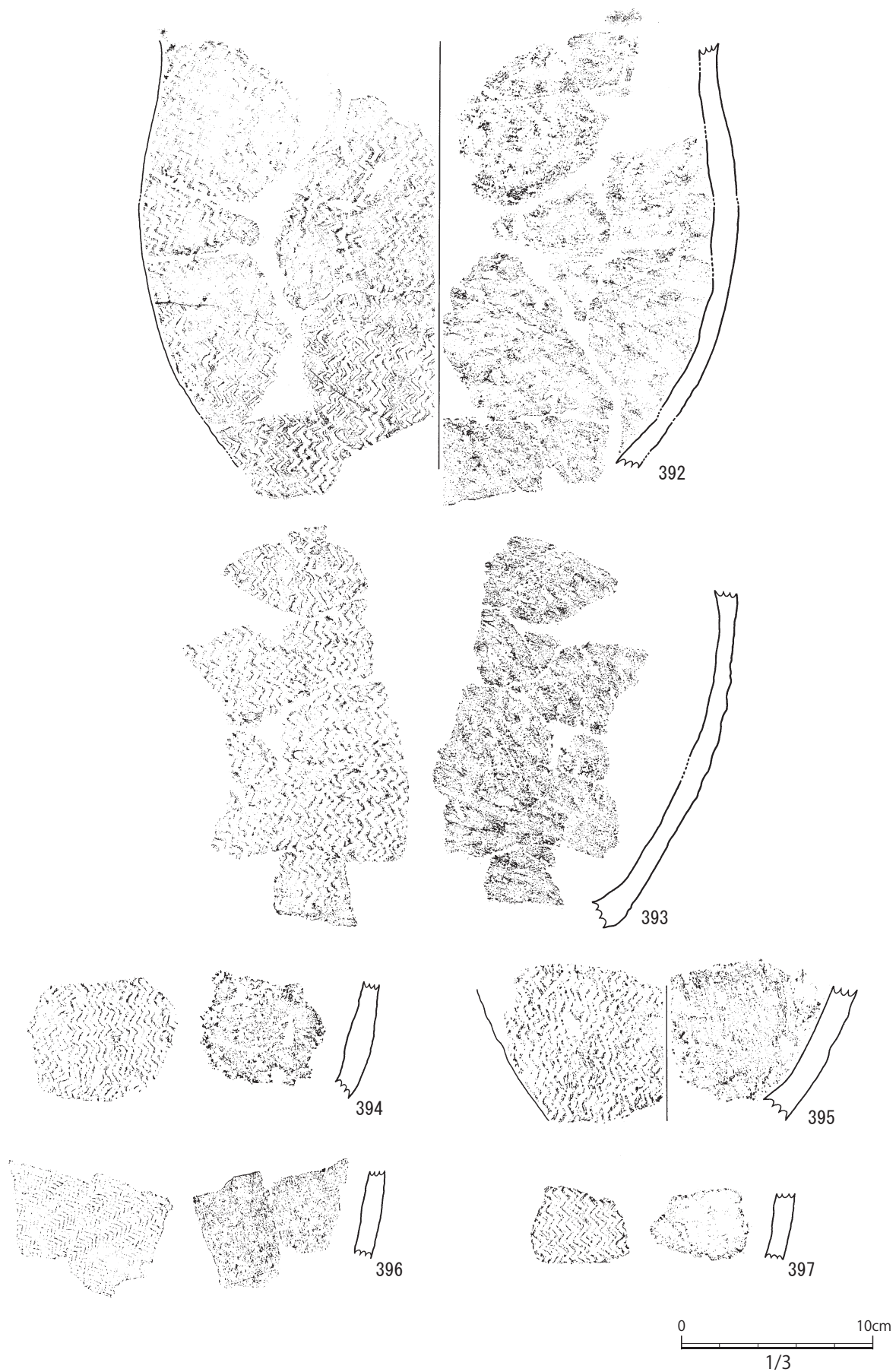


第130图 VII类土器实测图(7)

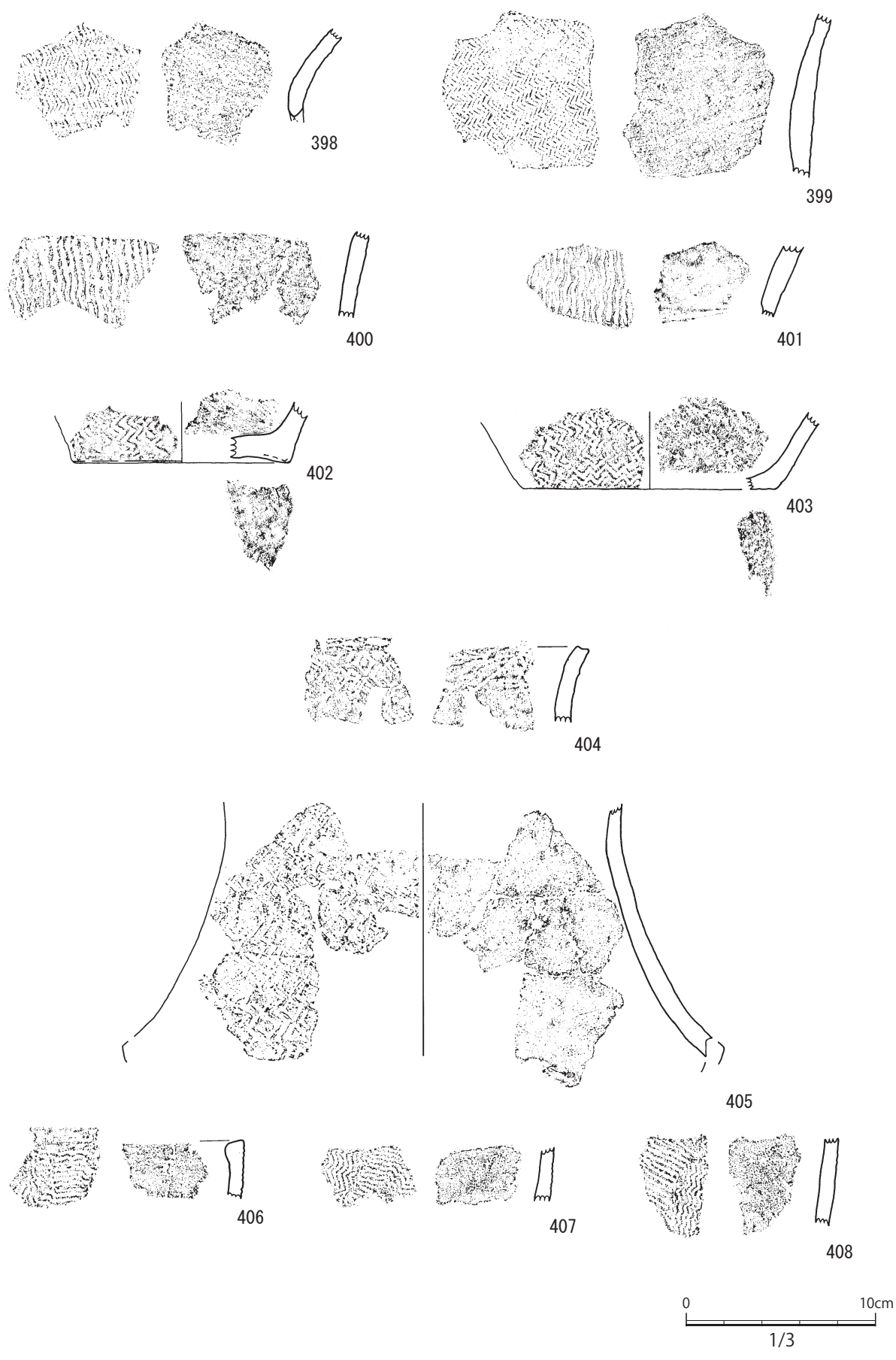




第131图 VII類土器実測図(8)



第132図 VII類土器実測図(9)



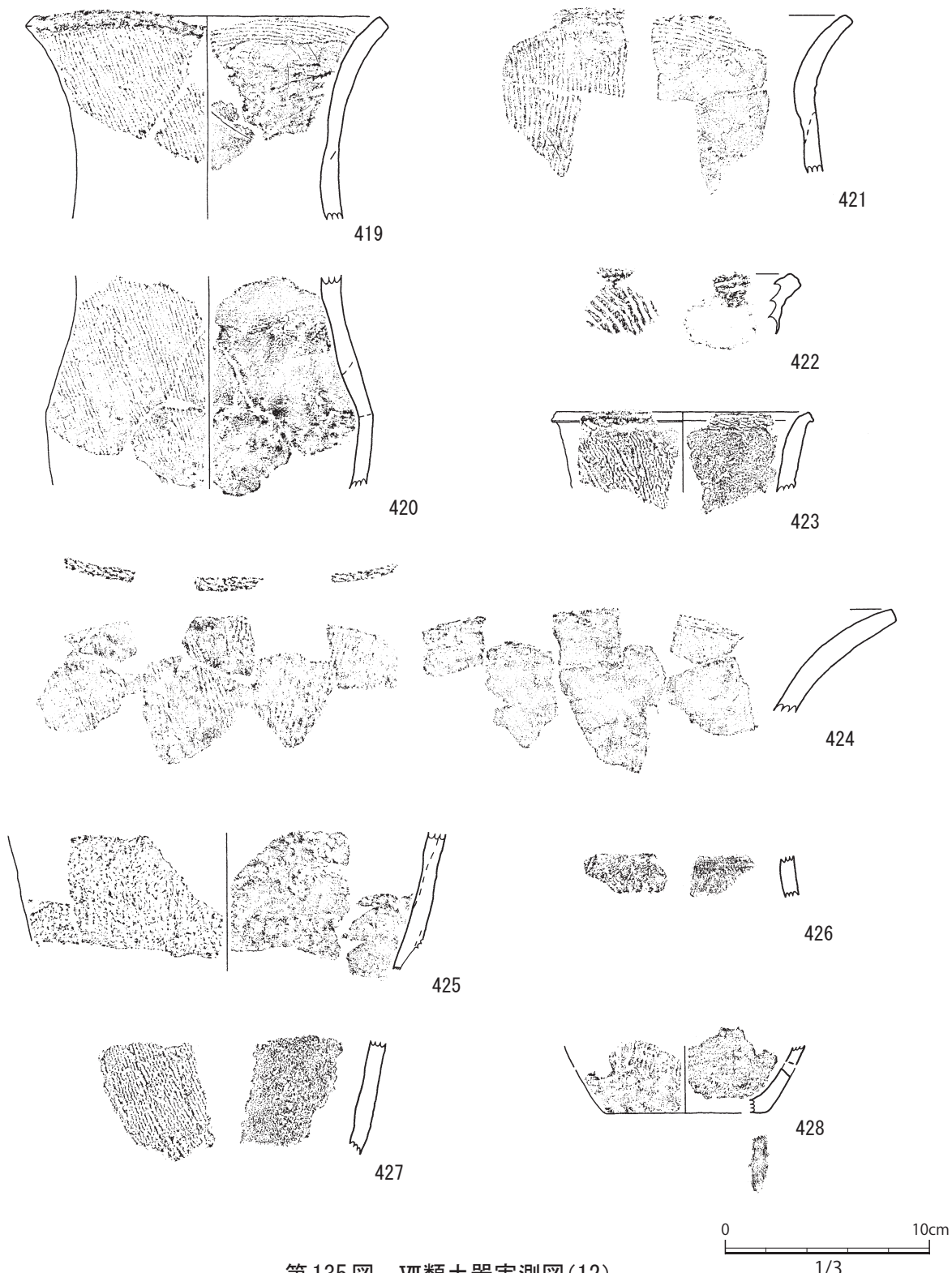
第133图 VII類土器実測図(10)



第134図 VII類土器実測図(11)

形押型文を重ねるように施す。407・408は胴部である。407は斜位の山形押型文を方向を違えて施す。408は斜位の条線を施した後、縦位の山形押型文を施す。

409～413は格子目押型文を施す一群である。409～412は施文や胎土から同一個体の可能性がある。409・410は口縁部である。波状口縁と見られ、外面全体に格子目押型文を施した後、外面上端はナデ調整により丁寧に仕上げる。内面も口縁部上位に格子目押型文を施し、口縁部上端は棒状工具を押し当てたような刺突文(原体条痕)を縦位に施す。411は胴部で、内面はミガキ状のナデ調整を行う。412は



第135図 VII類土器実測図(12)

底部で、外面は底部との境まで格子目押型文を施す。底面は一部しか残存していない。413は格子目がやや大きく、器壁も厚い。内面はケズリ調整を行う。

414～418は縄文を施す一群である。414～416は口縁部である。414は口縁部が外反する器形で、

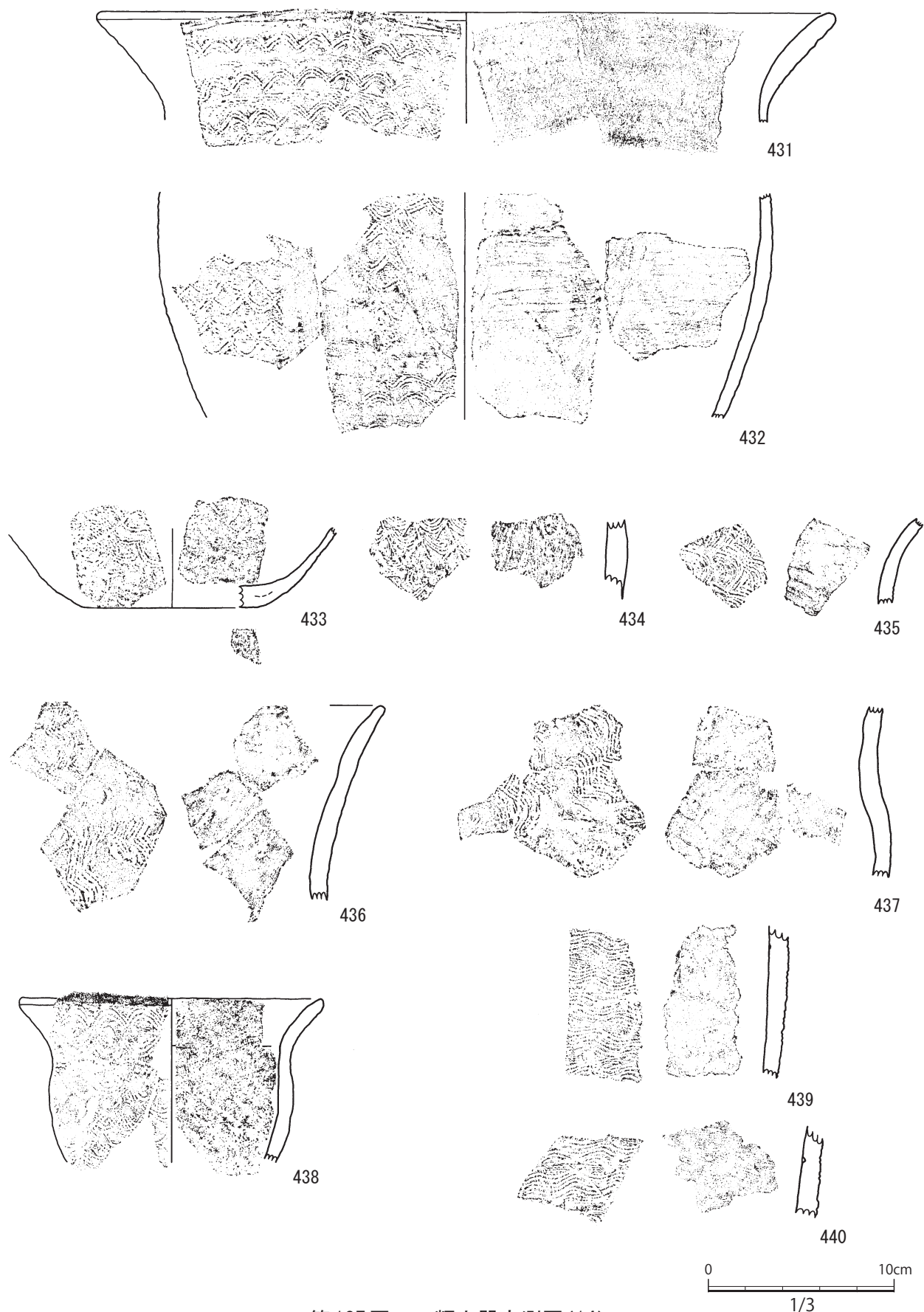


第136図 VII類土器実測図(13)

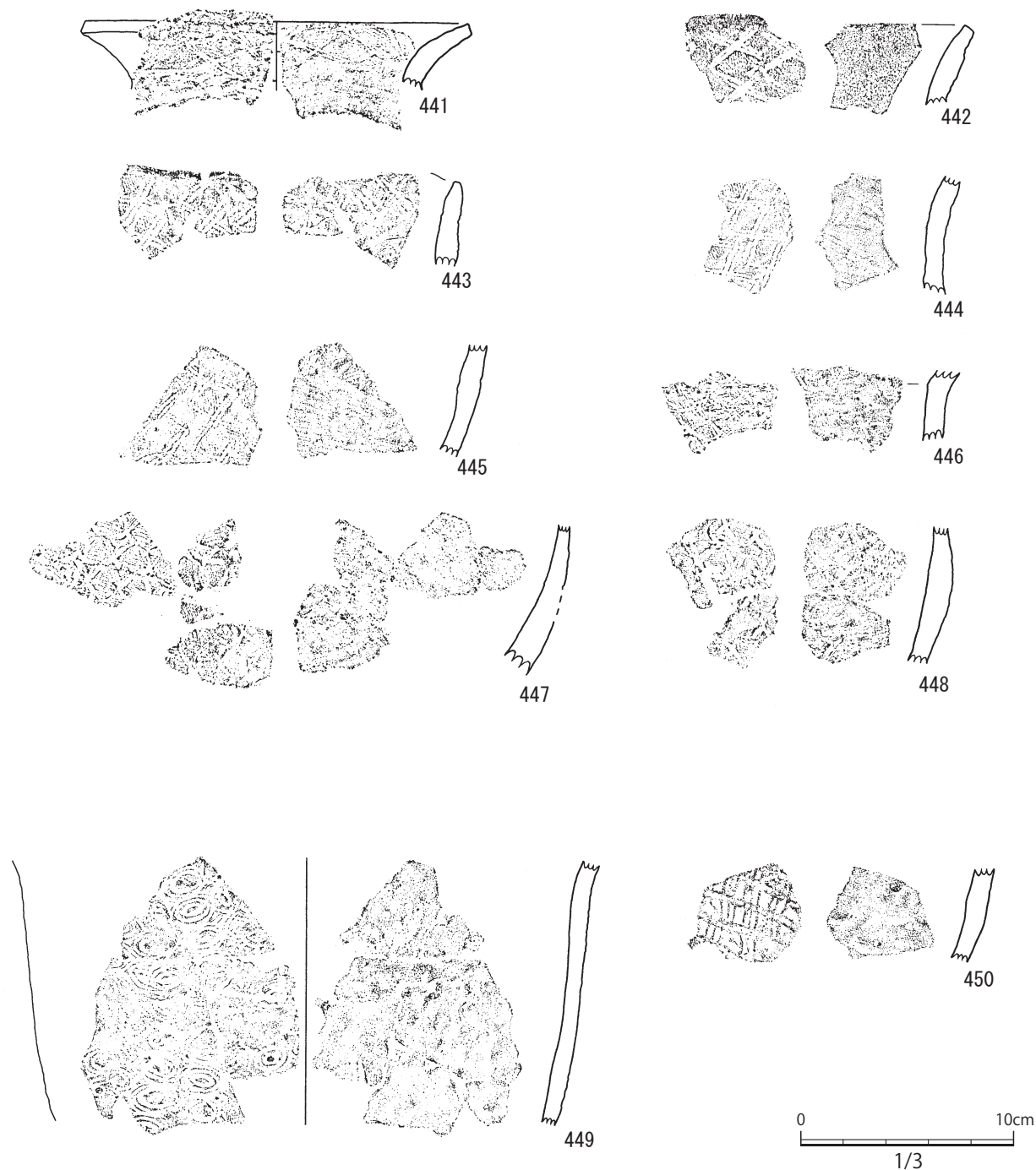
外面及び内面に斜位の縄文を施す。415は口縁部が大きく外反する器形で、口縁部上端に向かって先細る。外面には斜位の縄文を施すが、内面は口縁部の上端のみに施し、その下位はナデ調整で仕上げる。416は外傾する器形で、胴部の器壁は厚いが、口縁部上端に向かって薄くなる。口唇部に平坦面をつくり、外面だけでなく、口唇部と口縁部上端の内面にも縄文を施す。417は胴部で、器壁が厚く、外面のみ縄文を施す。内外ともに黒変が見られる。418は外面に縄文を施した円盤形土器製品と考えられる。

419～430は撚糸文を施す一群である。

419～428は撚糸文を縦位または斜位に施す。419・420は同一個体と考える。口縁部が外反し、胴部に膨らみをもつ器形を呈する。胴部の膨らみが屈曲部と考えるとVIII類の可能性はある。外面全体に斜位の撚糸文を施し、内面は口縁部上端に横位の撚糸文を施す。421～424は口縁部である。421は口縁部が大きく外反する器形を呈する。外面に縦位の撚糸文を施し、内面は口縁部上端に斜位の撚糸文を施す。



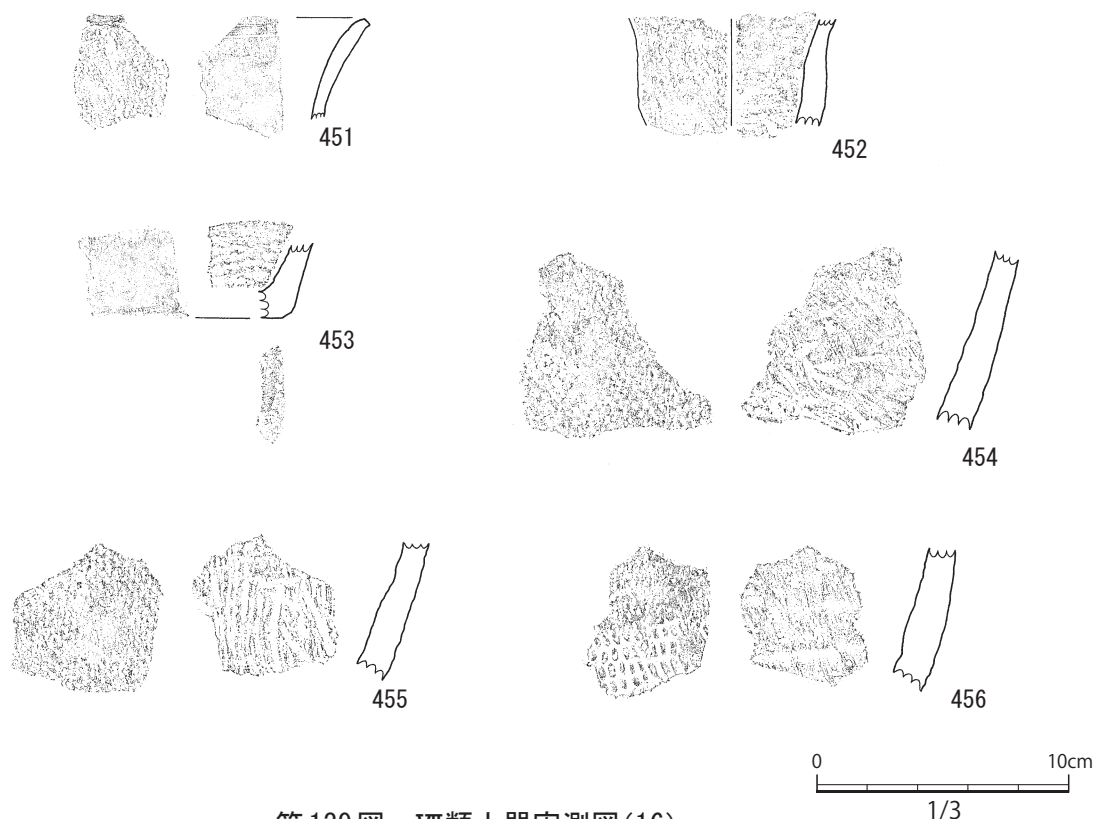
第137图 VII類土器実測图(14)



第138図 VII類土器実測図(15)

422 は撚糸文を外面と口唇部に深く施す。内面は剥離により不明瞭だが、一部横位の撚糸文が確認できる。423 は口縁部が外傾し、口縁部上端のみ外側に開くような器形である。424 は口縁部が大きく外傾する大型の土器である。外面及び口唇部、口縁部内面上端に撚糸文を施す。425～427 は胴部である。425 の下位は接合面と考えられ、外側は破断しているが、内側はわずかに残存する。426 は間隔を空けて撚糸文を施す。427 は撚糸文を斜位に施し、原体1単位の長さが1.5cm程度と考えられる。428 は底部である。外面上位は縦位の撚糸文が確認できるが、底部付近及び底面はナデ調整を行う。外面上位に穿孔と見られる穴が確認できる。





第139図 VII類土器実測図(16)

429・430は壺型土器である。施文や胎土から同一個体と考える。口縁部が外反するタイプで、頸部はすぼまり、肩部はゆるやかに膨らみ、底部に向けてすぼまる器形である。外面全体に撚糸文を縦位に施した後、肩部に竹管文を横位に2段施す。内面はケズリによる器面調整を行った後、ナデ調整を行う。

431～448は変形撚糸文を施す一群である。撚糸文を斜格子状またはレンズ状に施すものも含めた。

431～437は連弧状の変形撚糸文を施す。431・432は施文や厚みから同一個体と見え、大型の土器である。口縁部が外反し、頸部が締まり、胴部がわずかに張る器形を呈する。口縁部には連弧状の変形撚糸文を横位に施す。胴部にも連弧状の変形撚糸文を横位に施すが、一部上下を逆にして施文している部分がある。さらに、連弧状の変形撚糸文の間に、横位の撚糸文が数段見られる。内面には施文は見られず、ナデ調整で丁寧に仕上げている。433は底部で、連弧状の変形撚糸文を施すことから431・432と同一個体の可能性があるが、胴部の器壁が非常に薄い。434は胴部で、器壁が厚い。変形撚糸文を連弧状に施すが、横位の撚糸文は確認できない。435は口縁部付近の胴部と見られ、外反する。外面は変形撚糸文を斜位に連弧状に施し、施文には重なりが見られる。436・437は施文や胎土から同一個体と考える。口縁部は直線的に外側に開き、胴部に膨らみをもつ器形と考える。外面に連弧状の変形撚糸文を斜位に施すが、一部ナデ消しにより施文のない部分がある。

438～440は「8」の字状の変形撚糸文を施す。438は小型の土器で、口縁部が外反し、胴部に膨らみをもつ器形を呈する。口縁部外面に連弧状の変形撚糸文を上下交互に施文することにより「8」の字状のモチーフを描く。胴部外面は施文の重なりがあり、「8」の字状かは不明瞭となる。439・440は緩やかな「8」の字状のモチーフを横位に描く。439は内面にミガキ状のナデ調整を行う。440は内面にケズ

リ状のナデ調整を行う。

441～445は撚糸文を斜格子状に施す。441～443は口縁部である。441は口縁部が大きく外反する器形を呈する。風化気味で施文が不明瞭となるが、外面および内面上端に2組の撚糸を斜格子状に組んだ原体を横回転させて施文する。442は口縁部が外傾する器形で、口唇部に平坦面をつくる。内面には施文は見られず、ナデ調整で仕上げる。443は口縁部が外傾する器形で、口縁部先端が先細る。波状口縁と見られる。斜格子状の撚糸文の間に縦位の撚糸文が確認できる。撚糸を数段巻き付け、その上に2組の撚糸を交差させてつくった原体を縦回転して施文したものとする。口縁部内面上端には同じ原体を横回転して施文している。444・445は胴部で、外面の施文から443と同一個体の可能性がある。444は口縁部付近、445は底部付近と見られる。

446～448は胴部で、レンズ状に撚糸文を施す。446は外反する器形で、口縁部付近と考えられる。外面はレンズ状に撚糸文を施していると考えられるが、施文が不明瞭であり、撚糸文を斜格子状に施している可能性もある。447・448はレンズ状の撚糸文の間に横位の撚糸文が確認できる。撚糸を数段巻き付け、その上に2組の撚糸をレンズ状に交差させてつくった原体を横回転して施文したものとする。内面はケズリ後にナデ調整を行っている。

449は同心円状押型文を施す。直径の異なる三重の楕円の模様をくり抜いた原体を回転することで、同心円状のモチーフを連続して描くと考える。器壁は薄く、内面はナデ調整を行い、一部指おさえの跡が見られる。

450は格子状押型文を施す。格子状に描いた線の内側をくり抜いた原体を回転することで、格子状のモチーフを連続して描くと考える。外面の一部に格子状の施文をナデ消したような部分をもつ。内面はナデ調整を行う。

451～456は短枝回転文を施す一群である。短枝回転文とは、土器の表面に連続する窪みから「イチゴ」とも呼ばれる文様である。451～453は施文や胎土から同一個体の可能性があり、口縁部は外反し、胴部に膨らみをもつ器形を呈する小型の土器である。451は口縁部で、口唇部に平坦面をつくり、口縁部外端が外側に傾く。452は胴部で、下位が膨らむため器壁は厚くなる。453は底部で、外面は底部付近の上位に短枝回転文が確認されるが、下位はナデ調整を行う。452・453の内面はケズリ調整を行う。454～456は胴部で、器壁が厚い。内面はケズリ調整を行い、工具痕が明確に残る。456は上位に短枝回転文を施すが、下位は楕円押型文を施す。

#### (8) VIII類土器 (第141～152図 457～530)

VIII類土器は口縁部が大きく外反し、胴部で屈曲し、底部に向けてすぼまる器形を呈する。口縁部から頸部にかけて刻目突帯を巡らし、胴部に貼付突帯、沈線文、刺突文を施すものもある。器面調整は内外面ともにナデが行われる。

分類 文様構成や形態、屈曲部における貼付突帯の有無により以下のとおり、VIII a～VIII d類に細分した。

[VIII a類] 外面に単一文様を施し、胴部屈曲部に突帯をもたないもの (457～462)

[VIII b類] 外面に単一文様 (山形押型文) を施し、胴部屈曲部に突帯を貼り付けるもの (463～468)

[VIII c類] 胴部屈曲部に突帯を貼り付け、文様を上下で分けるもの (469～481)

[VIII d類] 口縁部外面に瘤状突起を貼り付け、胴部屈曲の度合いが少ない器形を呈するもの (482)

なお、上下の文様が判別できないものや、貼付突帯をもたない口縁部や胴部については、細分せずVIII

類とした。

**出土分布** VIII類土器の出土分布図を第140図に示す。全体的に調査区北西側から西側(標高181.0～182.25m)にかけて集中して出土している。細分した土器の分布傾向を見ていくと、VIII a類は調査区中央よりやや南側から多く出土しているが、その他のVIII b類、VIII c類については調査区北側(標高181.0～181.75m)に集中する箇所が認められる。VIII d類は調査区西側(標高181.75～182.0m)の一部からしか出土していない。

#### 土器の特徴

457～462は外面に単一文様を施す一群である。胴部で屈曲するが、屈曲部に貼付突帯をもたない。

457・458は外面に山形押型文を縦位または斜位に施す。施文や胎土から同一個体と考える。口唇部に平坦面をつくり、山形押型文を横位に施す。内面はナデ調整を行い、屈曲部周辺に指押さえ痕が確認できる。

459～462は外面に撚糸文を施す。方向の異なる斜位の撚糸文が重なって斜格子状のモチーフを描くが、斜格子の形は均一でなく、斜位の撚糸文のみ施される部分もある。459・460は文様や胎土から同一個体と考える。内面は丁寧なナデ調整を施し、屈曲部周辺に指押さえ痕が見られる。461は外面に斜格子状の撚糸文を施す。胴部下端の内外面に剥離した形跡が見られるため、下位に屈曲部をもつ胴部片の可能性もある。462は底部である。外面はナデ調整を行い、上位の一部に撚糸文が確認できる。上位の施文が不明瞭なため、ほかの分類の可能性もある。

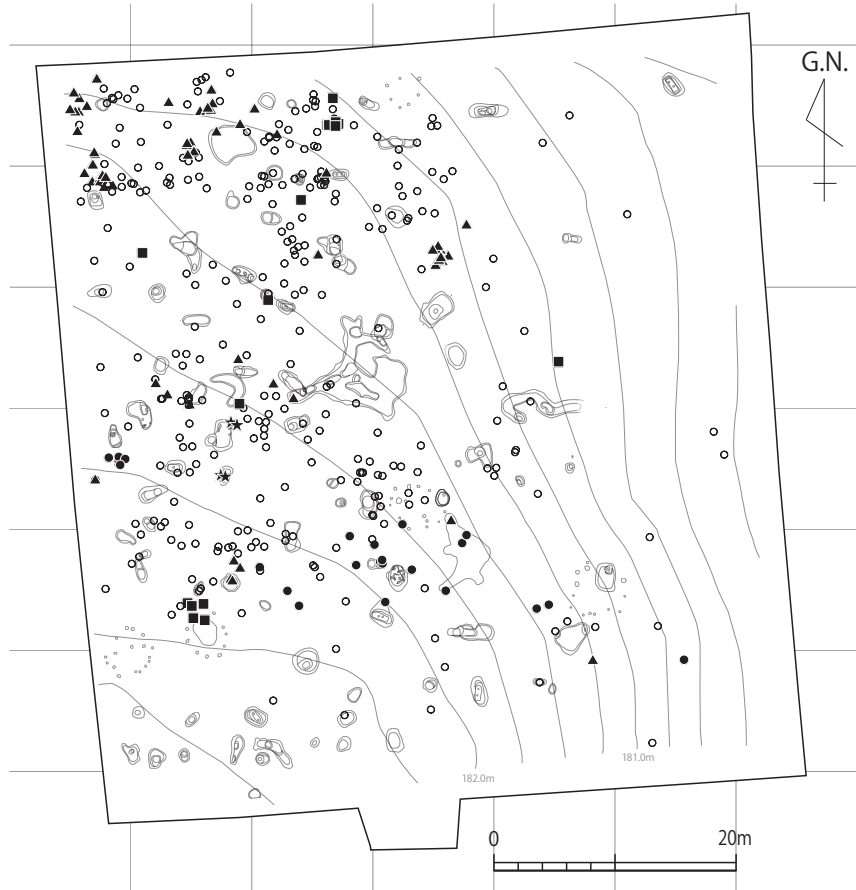
463～468は外面に単一文様を施し、胴部屈曲部に突帯を貼り付ける一群である。463～466は外面に緩やかな山形押型文を縦位に施す。文様や胎土から同一個体と考える。463・464は口縁部で外反し、口唇部は丸みを帯び、外面と内面に刻目を施す。内面の口縁部上端には横位の山形押型文を施す。465・466は胴部で、刻目突帯を貼り付けた屈曲部をもつ。467・468は外面に山形押型文を斜位に施し、文様や胎土から同一個体と考える。467は口縁部で外反する器形を呈する。口唇部に山形押型文を施す。内面の口縁部上端には主な施文は見られない。468は胴部で、刻目突帯を貼り付けた屈曲部をもつ。

469～481は胴部屈曲部に突帯を貼り付け、文様を上下で分ける一群である。

469～473は上半部に沈線文を施し、469・470、473は下半部に山形押型文を、471・472は下半部に撚糸文を施す。469は口縁部から胴部下半まで残存する。口唇部には外側と内側から交互に刻目を施す。口縁部上位に刻目突帯を1条巡らす。胴部上半は山形押型文を地文とし、その上からヘラ状工具による幅広の縦位の沈線を連続して施す。屈曲部には刻目突帯を貼り付ける。胴部下半は山形押型文を縦位に施す。内面はナデ調整を行い、屈曲部周辺に指押さえ痕が見られる。470は胴部のみ残存する。胴部上半はヘラ状工具による幅広の沈線を多方向に施す。欠損により全体像が不明確であるが、重弧状のモチーフを描いていると考えられる。胴部下半には山形押型文を縦位に施す。471は胴部のみ残存する。胴部上半は、屈曲部の上位に横位の沈線を2段巡らし、その上方に斜位の沈線を連続して施す。斜位の沈線は、傾斜の異なる2種類の沈線文が確認できる。屈曲部には二叉工具による刺突文を施した突帯を貼り付ける。胴部下半は縦位の撚糸文を施し、一部上から斜位の撚糸文を重ねている部分も見られる。内面はナデ調整を行い、指押さえ痕が多数確認できる。472は口縁部から底部付近まで残存する。口縁部が外反し、胴部にわずかな膨らみを持ちながら底部に向けてすぼまる器形を呈する。口縁部上端に突帯を貼り付け、外面側から刻目を施した後、上からの刻目を施す。胴部に突帯を設けるが、屈曲の度合い

VIII類(手向山式土器)

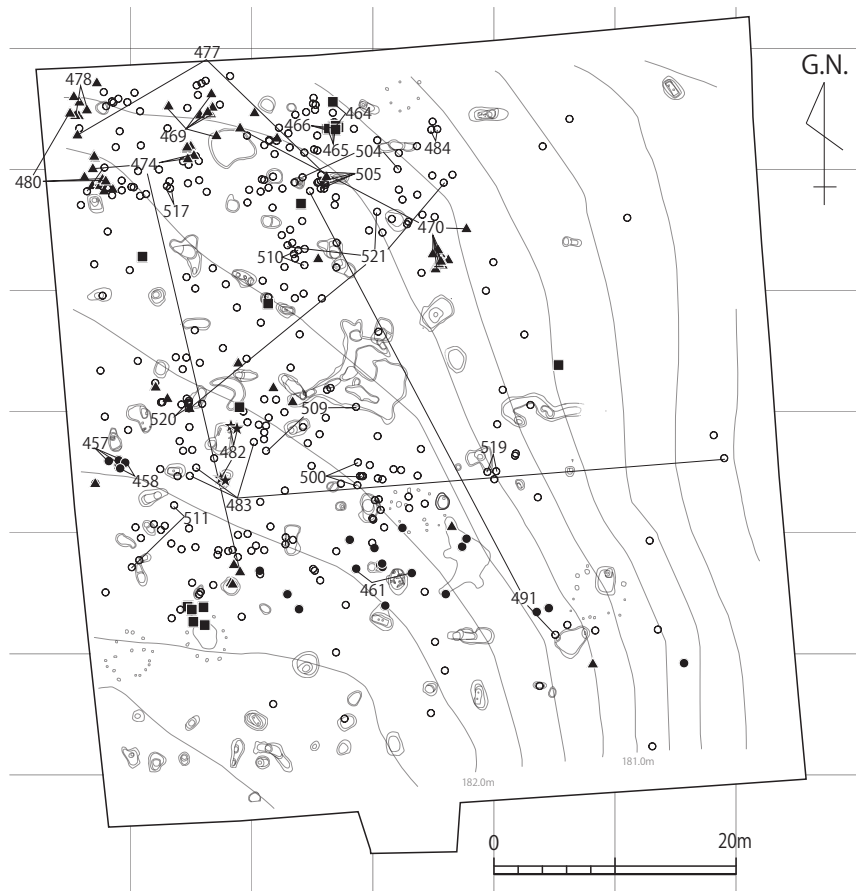
- …VIIIa類
- …VIIIb類
- ▲ …VIIIc類
- ★ …VIIId類
- …VIII類



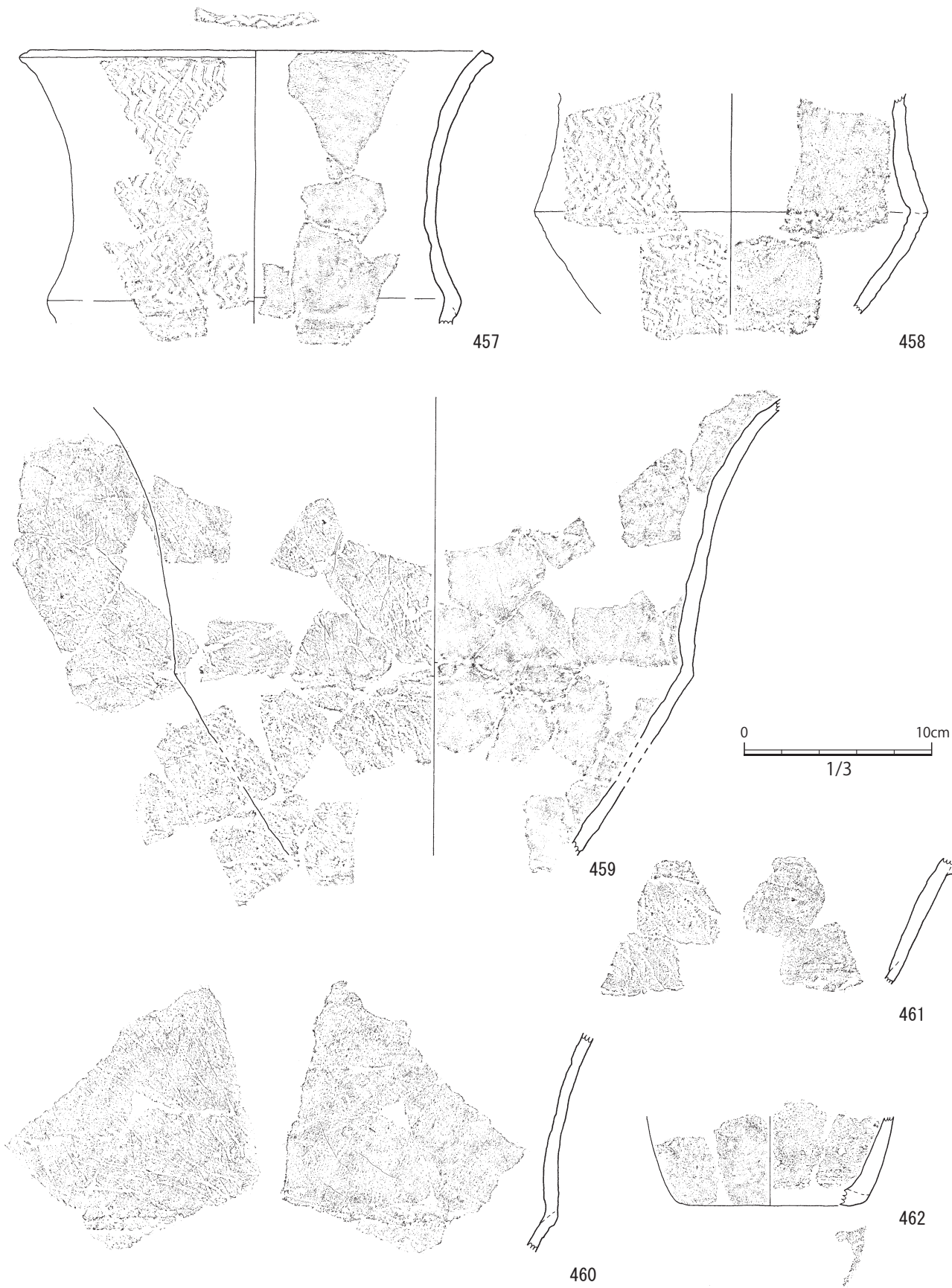
VIII類(手向山式土器)

接合状況

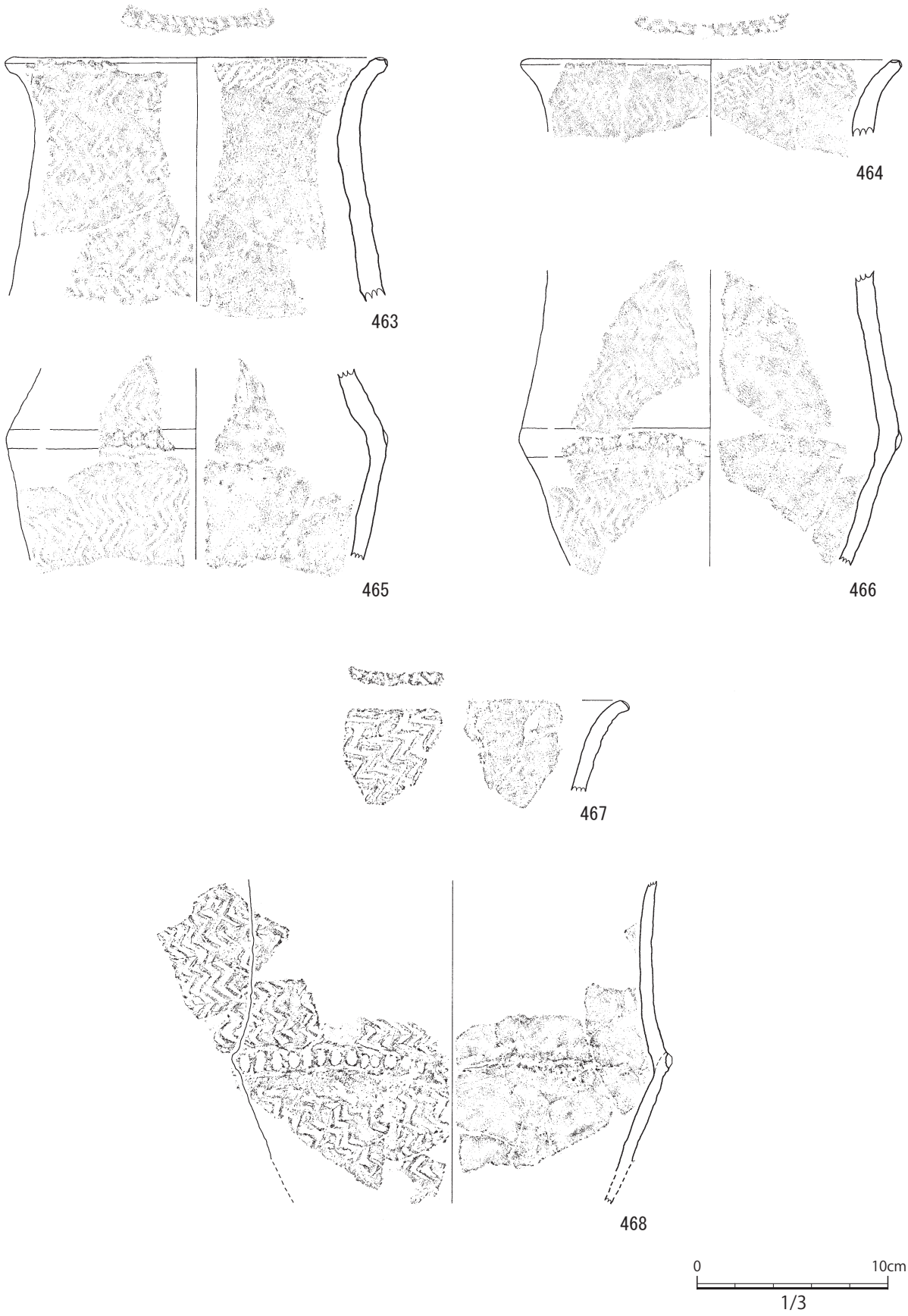
- …VIIIa類
- …VIIIb類
- ▲ …VIIIc類
- ★ …VIIId類
- …VIII類



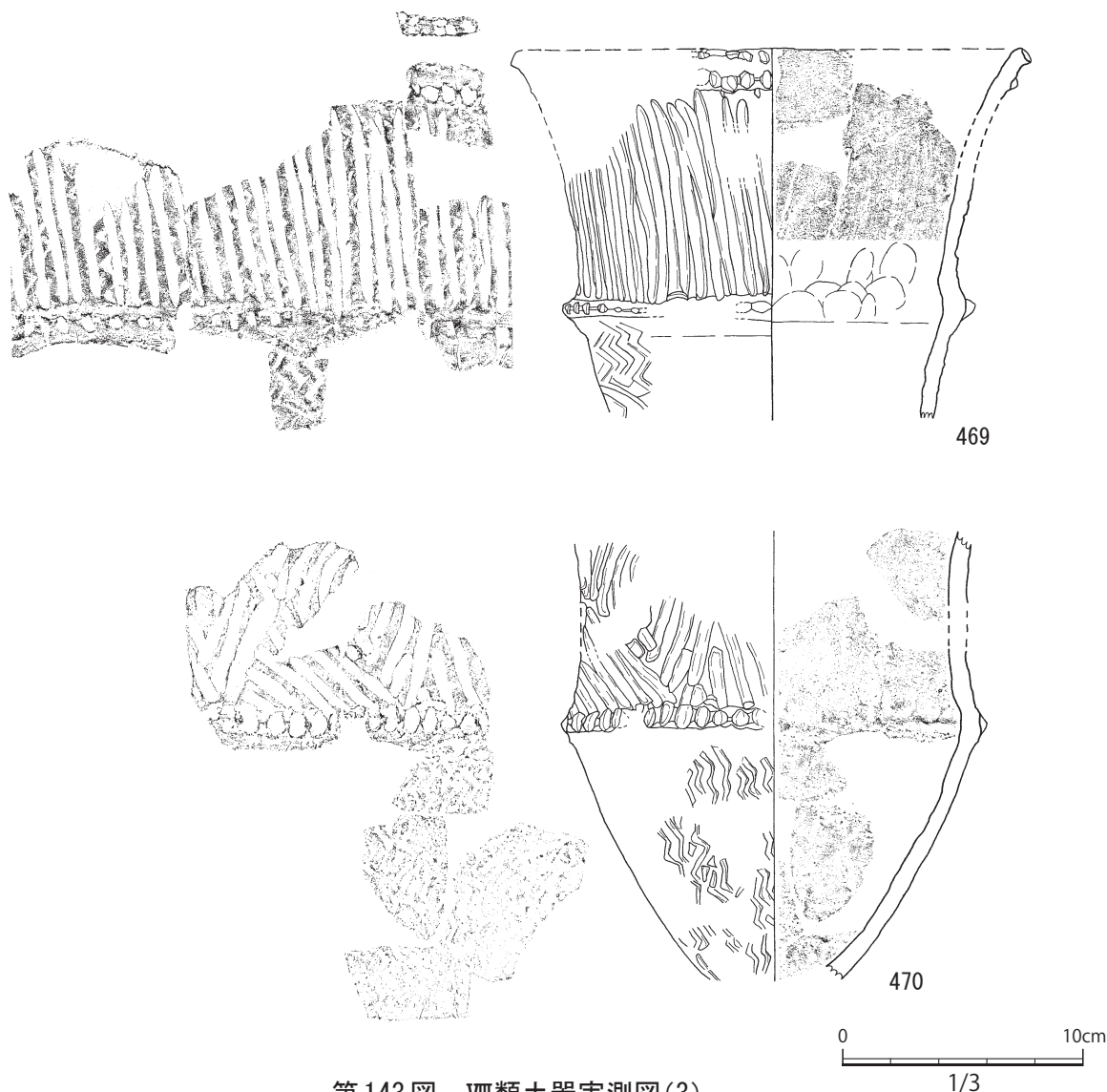
第 140 図 VIII類土器出土分布図



第141图 VIII类土器实测图(1)

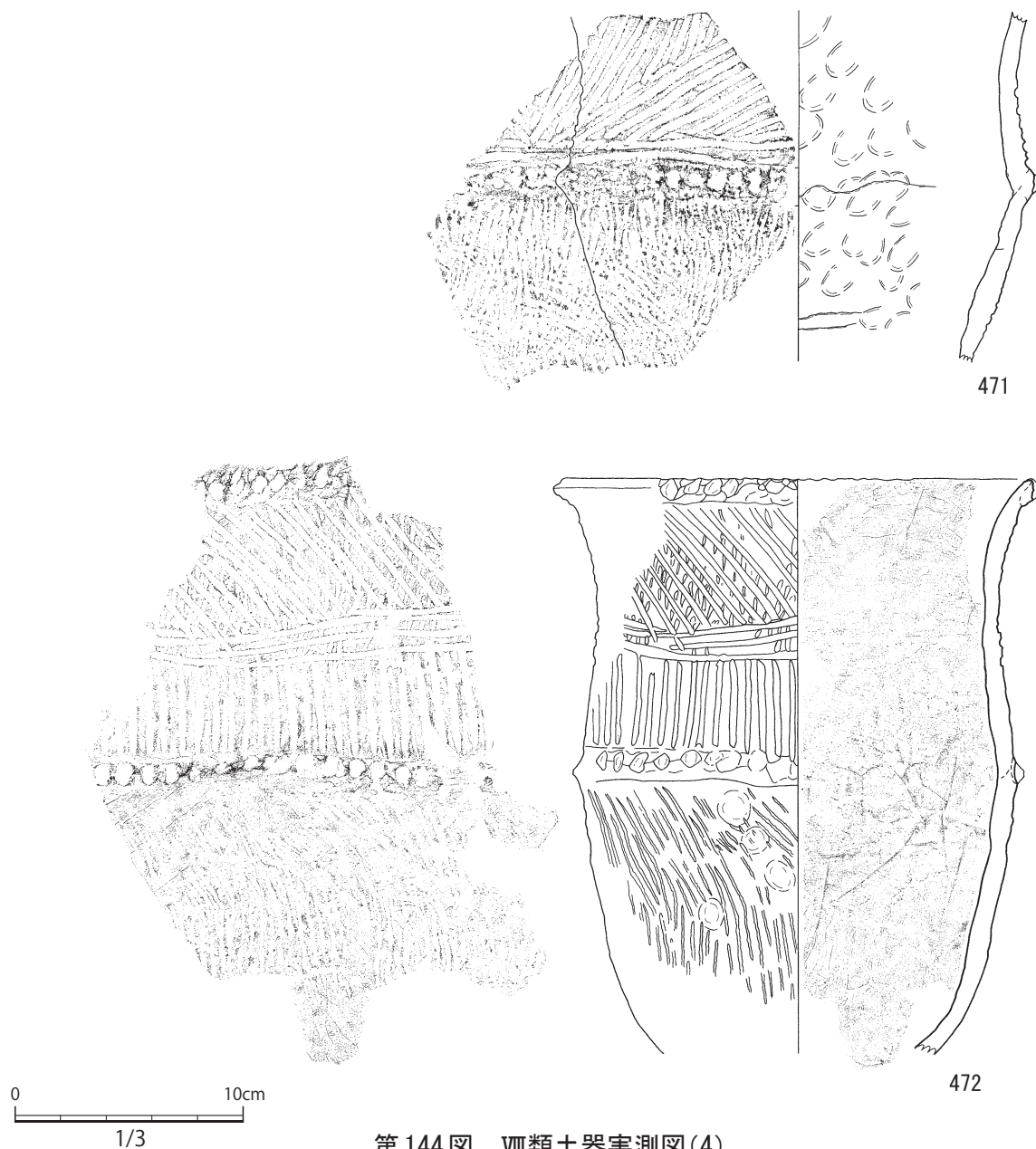


第142图 VIII類土器実測図(2)



第143図 VIII類土器実測図(3)

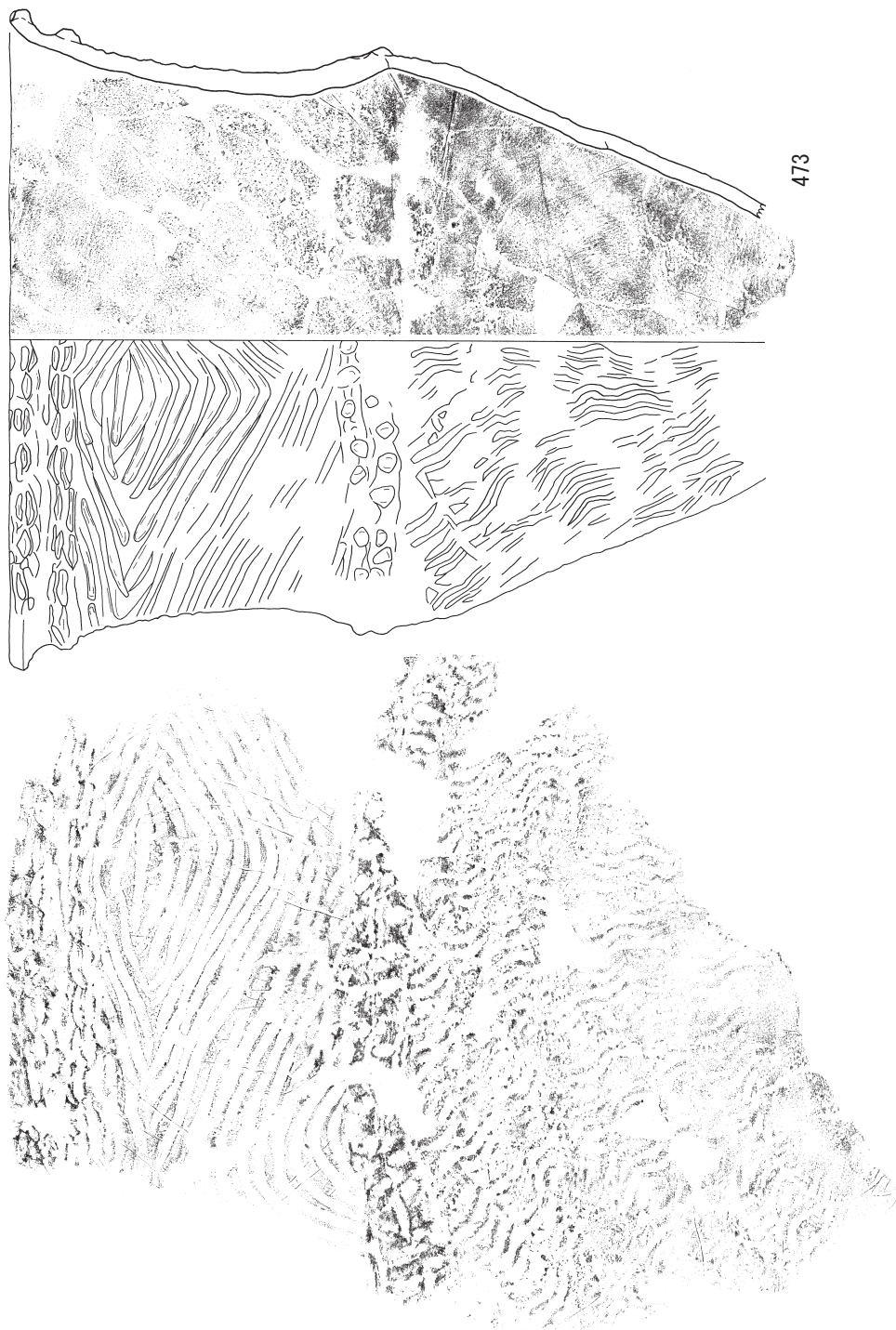
が少ない。胴部にある刻目突帯を境にして、胴部上半は沈線文を施す。胴部上半の真ん中に横位の沈線を3条施した後、その上位には縦位の沈線の上から斜位の沈線を施し、下位には縦位の沈線を連続して施文する。胴部下半には斜位または縦位の撚糸文を施す。内外面ともに指押さえ痕が確認できる。473は大型の器形である。472とともに23号土坑(SC23)から重なり合って出土した。口縁部から胴部下半まで残存する。口縁部から胴部上半にかけてへら状工具による幅広の沈線で菱形または重弧状のモチーフを描く。その上から、口縁部上端に2条の突帯を貼り付ける。突帯には二又工具による刺突文を横位に連続して施す。屈曲部には刻目突帯を2条貼り付ける。胴部下半は山形押型文を縦位に施す。内面はナデ調整を行い、工具痕や指押さえ痕が見られる。474～480は器壁が厚く、大型の器形である。胎土や文様から同一個体の可能性がある。474・475は口縁部である。口唇部に平坦面をつくる。口縁部外面の上端に4条の突帯を貼り付ける。突帯に二又工具による刺突文を連続して施す。その下位はへら状工具による幅広の沈線を斜位に施したり、渦状や連弧状のモチーフを描いたりする。山形押型文を地文としている可能性がある。内面は、ナデ調整で丁寧に仕上げ、口縁部上端に3条の突帯を貼り付ける。



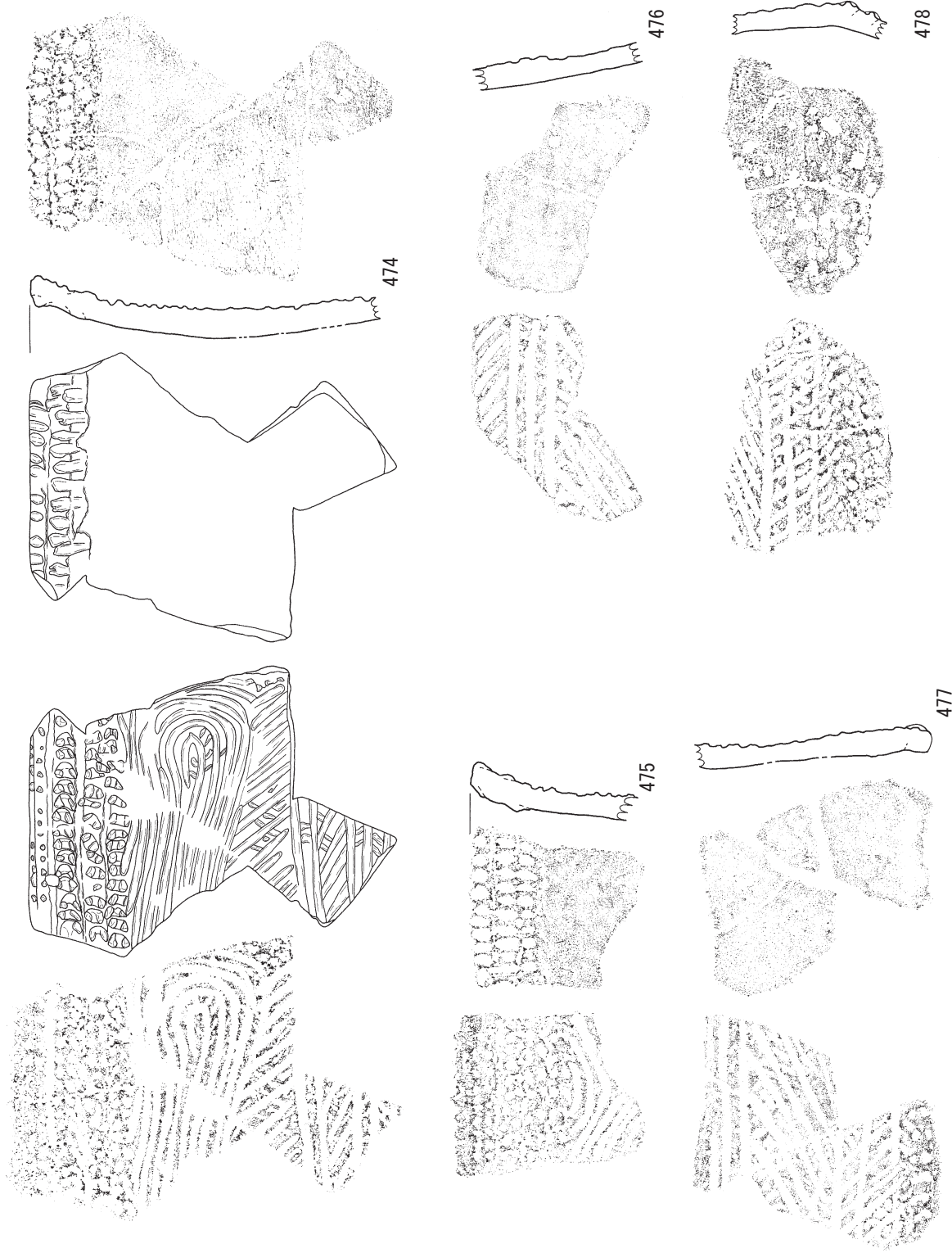
第144図 VIII類土器実測図(4)

内面の突帯は棒状工具による押圧気味の刻目が施される。474の外面の下端には2条の横位の沈線、右下がりの斜位の沈線、3条の横位の沈線が確認できる。476～480は胴部である。476・477は胴部上半と考える。476の外面は右下がりの斜位の沈線の下位に、3条の横位の沈線、左下がりの斜位の沈線を施す。477は3条の横位の沈線の下位に、左下がりの沈線を施し、その下に間隔を空けて施した3条の横位の沈線の中に斜位の沈線を施す。屈曲部と考えられる箇所には二叉工具による刺突文を施した突帯が確認できる。478・479は屈曲部と見られる。478は左下がりの沈線の下位に間隔を空けて施した3条の横位の沈線の中に斜位の沈線を施す。その下には二叉工具による刺突文を施した2条の突帯を貼り付ける。内面は風化が著しく、痘痕状に剥離している部分がある。479は斜位の沈線の下位に2条の突帯を貼り付ける。その下は風化により施文が不明瞭となる。474～479までの文様には一連のつながりがある。480は胴部下半と考える。外面には山形押型文を縦位に施す。481は474～480とは別個体で、

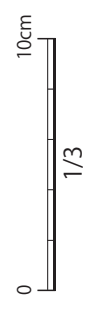
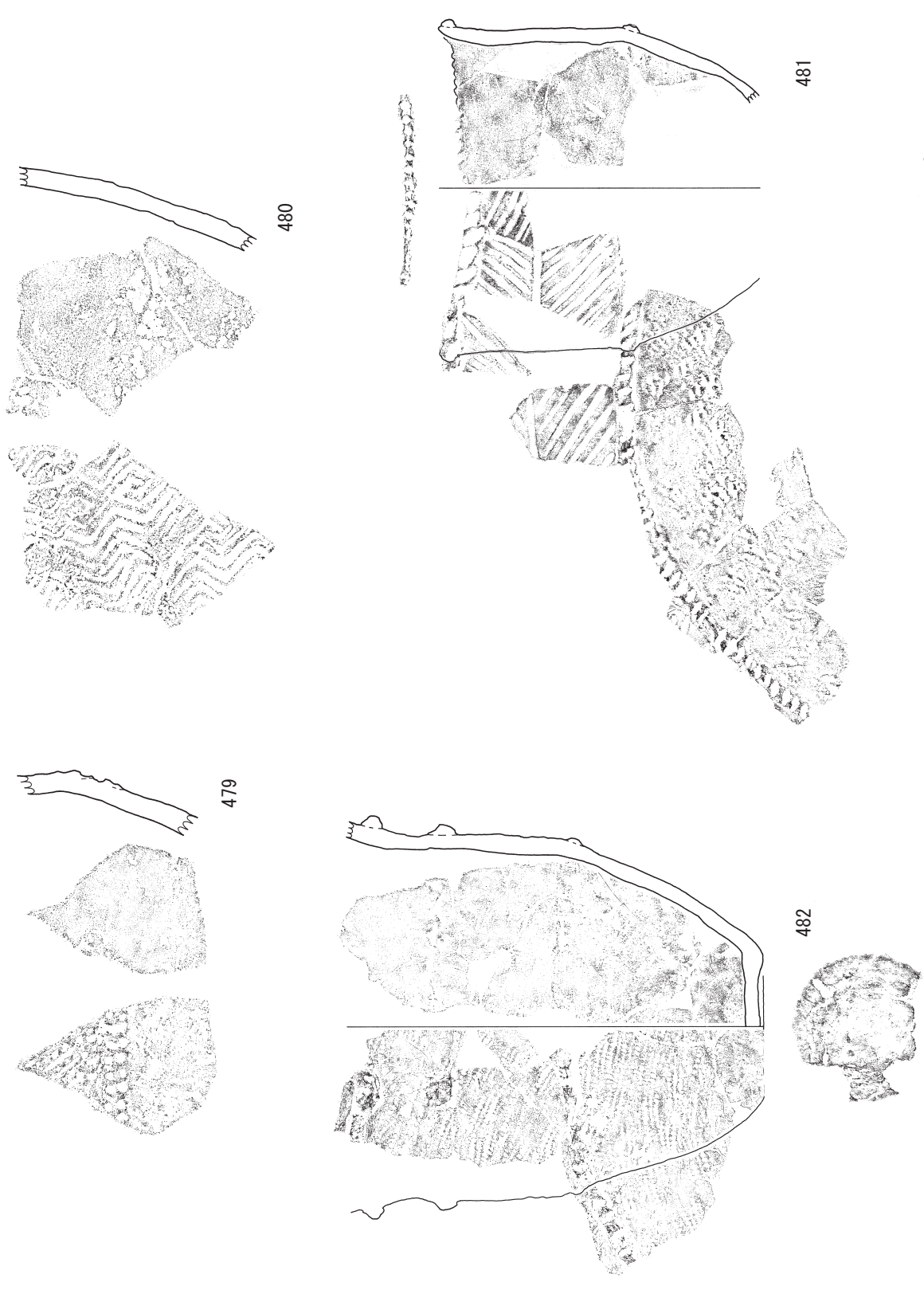




第145図 Ⅷ類土器実測図(5)



第146图 Ⅷ類土器実測図(6)



第147图 Ⅳ類土器実測図(7)



483



484



486



485



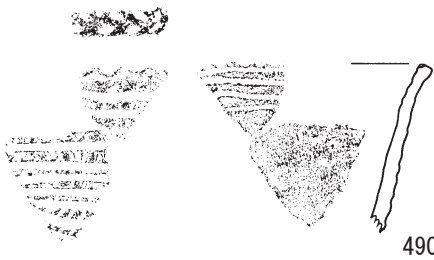
487



488



489



490



491



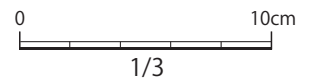
492



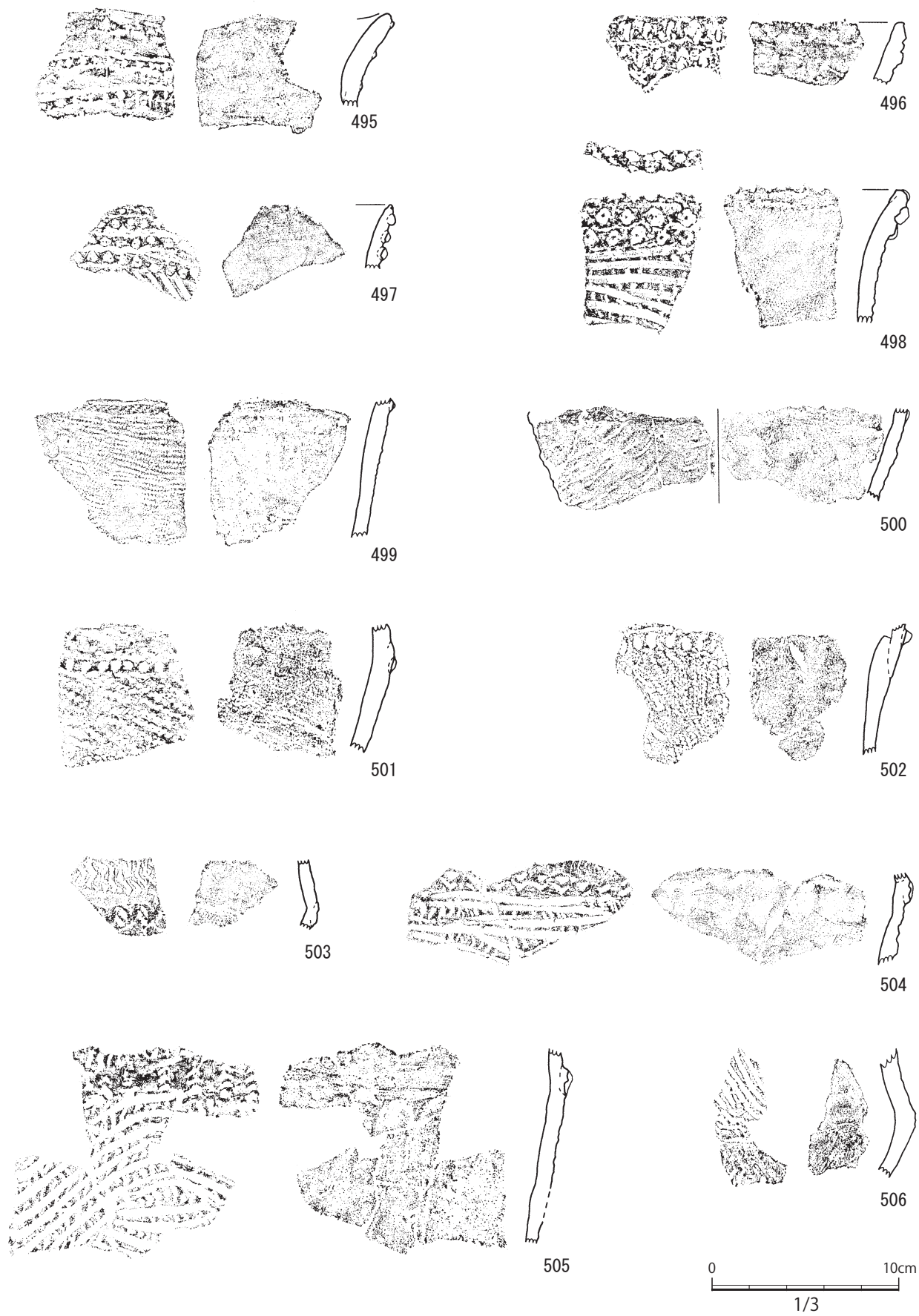
493



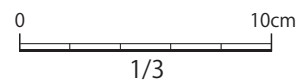
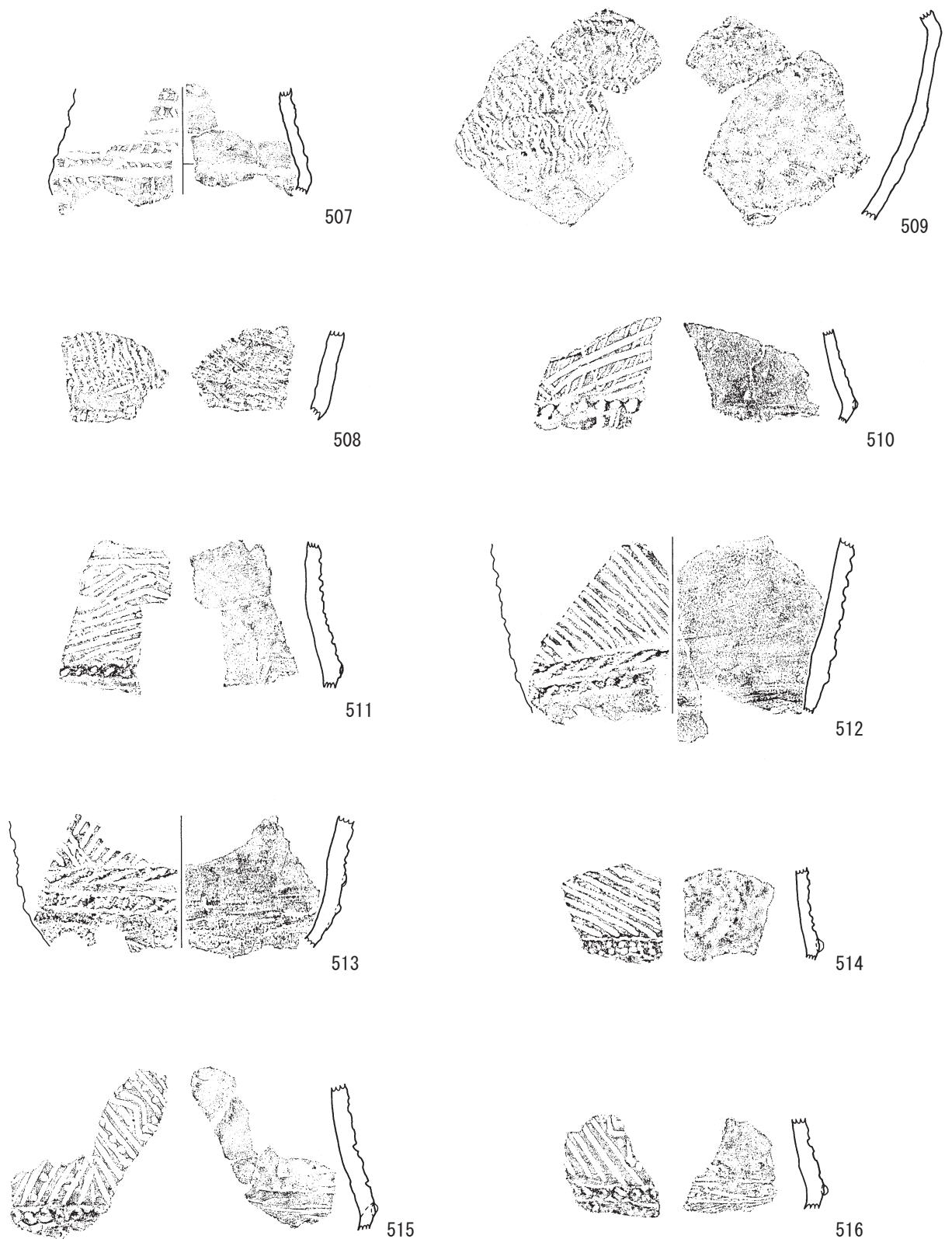
494



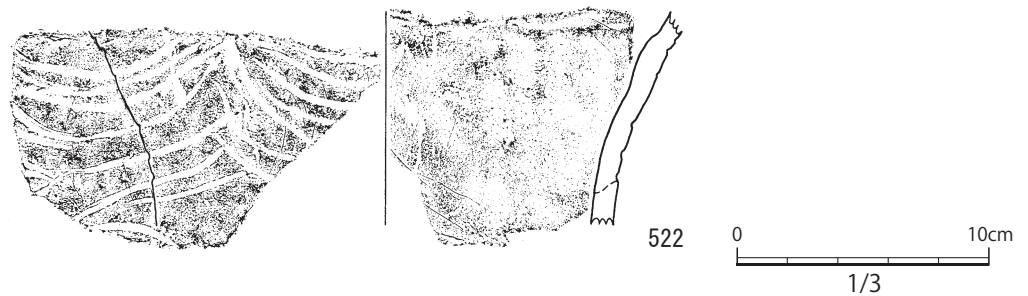
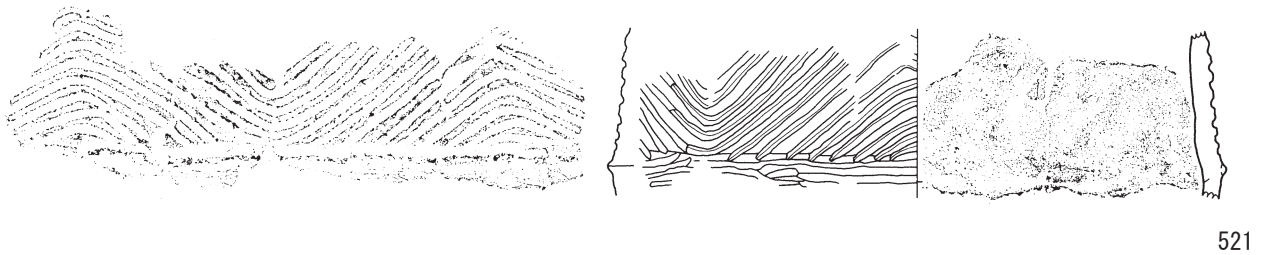
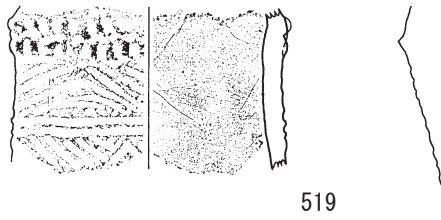
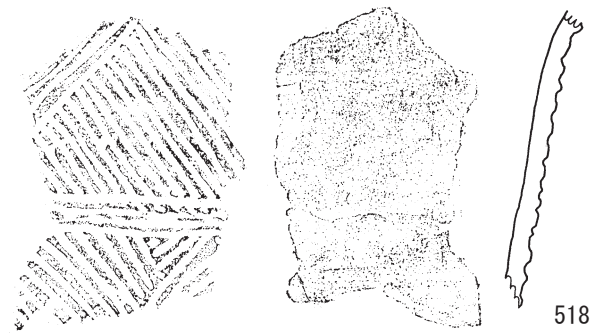
第148图 VIII类土器实测图(8)



第149图 VIII類土器実測图(9)



第150图 VII類土器実測図(10)



第151図 Ⅷ類土器実測図(11)

口縁部から底部付近の胴部まで残存する。胴部上半から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、口縁部上端は先細りながらわずかに外反する。胴部屈曲の度合いは少なく、胴部下半は底部に向けてすぼまる器形を呈する。口唇部は刻目により鋸歯状となり、3点の頭頂部を設けた波状口縁の可能性がある。口縁部外面の上端に刻目突帯を貼り付ける。胴部上半の中央付近に横位の沈線を施して区画を割り付けた後、その上位は左下がりの、下位は右下がりの斜位の沈線を施す。屈曲部と見られる部分に刻み目突帯を貼り付ける。胴部下半は斜位の撚糸文を施した後、部分的に施文をナゲ消す。

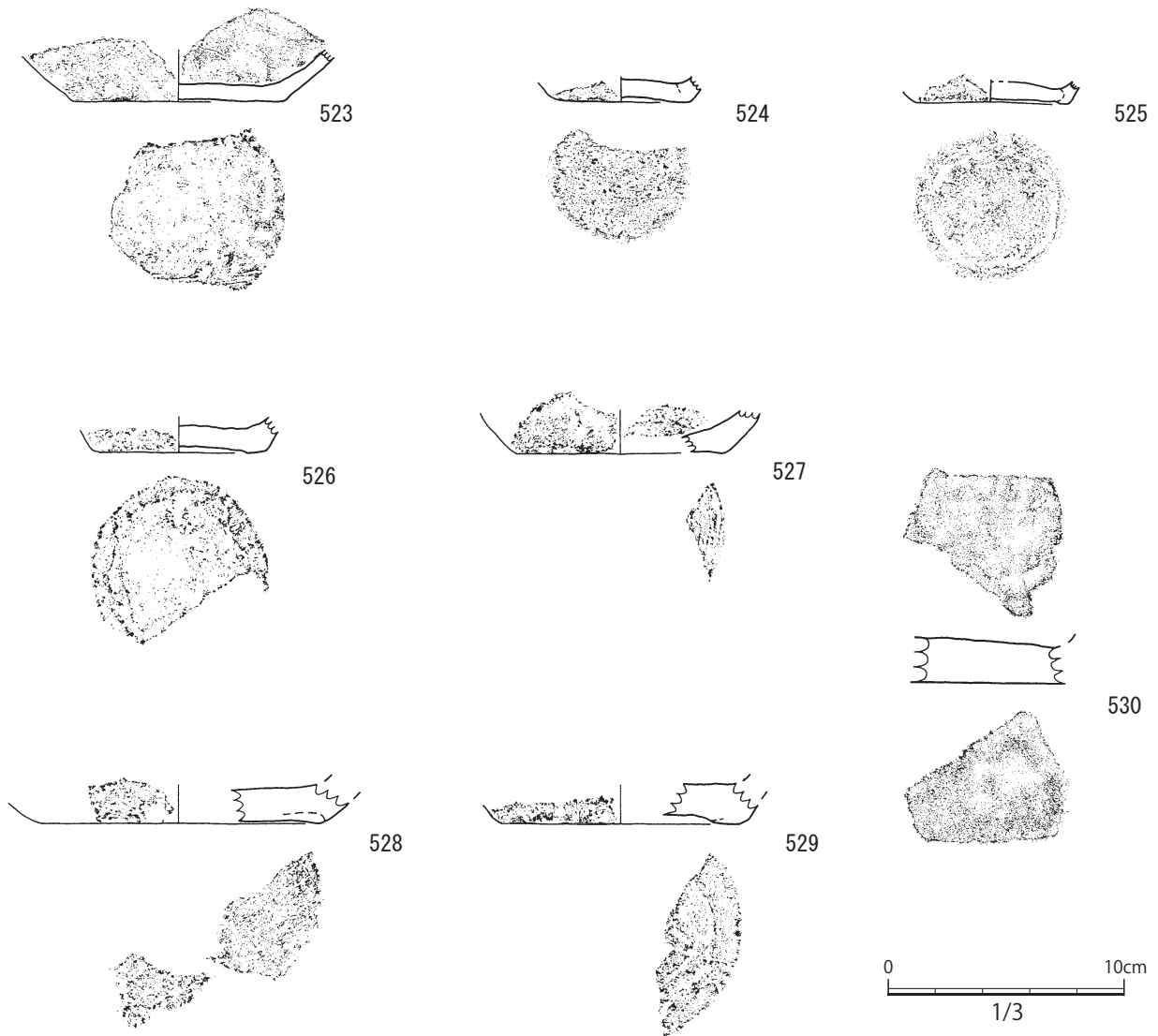
482 は胴部から底部が残存し、胴部上半は外側に開くように外傾し、胴部下半は底部に向けてすぼま

り、底部は上げ底を呈する。外面は、胴部上半の上位に間隔を空けて縦に並ぶように瘤状突起を設ける。胴部全体は斜位または横位の縄文を施す。胴部内面はナデ調整で仕上げ、工具痕や指押さえ痕が確認できる。底面はミガキ状のナデ調整を行う。外面は縄文を地文とするため、IX類の可能性はある。

483～498は口縁部である。483～491は口縁部外面に突帯を伴わないものである。口唇部に刻目を施し、口縁部外面に沈線文による施文を行う。483は口縁部から胴部屈曲部まで残存する。器壁は薄く、口縁部が外反する。口縁部から胴部上半の外面に、上から横位、縦位、横位の順に沈線文を施し、屈曲部に竹管文のような刺突を施した突帯を貼り付ける。484・485は口縁部上端の外面側と内面側から交互に刺突文を施し、口縁部外面には斜位の沈線を施す。486は口縁部上端がやや先細り、口唇部に刻目を施すことにより鋸歯状口縁となる。487は器壁が薄く、外面は広く剥離する。口縁部外面には斜位の下に横位の沈線を施す。488・489は口縁部内面の先端に山形押型文を横位に施す。490・491は口縁部内面の先端に横位または斜位の沈線文を施す。492～498は口縁部外面に突帯を貼り付ける。492は鋸歯状口縁で、口縁部上端に押圧気味の刻目突帯を貼り付ける。493は口縁部上端に二叉工具による刺突文を施した突帯を貼り付け、その下位に山形押型文を縦位に施す。口縁部内面の先端にも山形押型文を横位に施す。494は口縁部上端が先細り、外面側からの刺突による刻目を施した後、その下位に間隔を空けて2条の刻目突帯を貼り付ける。495は波状口縁で、口縁部上端とその下に間隔を空けて3条の刻目突帯を貼り付ける。496は口縁部上端とその下に突帯を貼り付け、二叉工具による刺突を施す。その下位に山形押型文を施していると考えられる。497は口縁部先端が先細り、口縁部外面に3条の刻目突帯を貼り付ける。498は口唇部と口縁部上端に貼り付けた2条の突帯に二叉工具による刺突文を施す。

499～522は胴部である。499・500は外面に撚糸文を施し、上端の屈曲部に刻目突帯を貼り付ける。501・502は外面に縄文を施す。501は屈曲部と考えるが、屈曲の度合いが小さい。502は外面上端に刻目突帯を貼り付ける。503～509は外面に山形押型文を施す。503は屈曲部に二叉工具による刺突文を施した突帯を貼り付ける。504は山形押型文を地文とし、二叉工具による刺突文を施した突帯の下位に横位の沈線文を施す。505は三叉工具による刺突文を施した突帯の下位に、山形押型文を地文とし、上から幅広の沈線で波状のモチーフを描く。506は屈曲部で、上位に斜位の沈線文を、下位に縦位の山形押型文を施す。507も屈曲部で、上位に山形押型文を施した後、上から幅広の沈線を横位に施す。508・509は底部付近の胴部と見られ、外面に緩やかな山形押型文を縦位に施す。510～522は外面に沈線文を施し、原体を回転して施す文様は見られない。510は刻目突帯の上位に、細い沈線を斜位に施した後、角度と線の幅を変えた沈線を上から斜位に施す。511は刻目突帯の上位に、横位、斜位の沈線文を施す。512・513は方向の異なる斜位の沈線を施して「V」字状のモチーフを描き、その下位に2条の刻目突帯を貼り付ける。胎土はにぶい赤褐色の色調をもち、文様も似ているため同一個体の可能性がある。514は突帯に二叉工具による刺突文を施し、その上位に斜位の沈線文を施す。515・516は刻目突帯の上位に斜位の沈線文を施す。沈線間に棒状工具による連続した刺突文や、斜位の山形の沈線文を施しているものがある。内面には工具痕が見られ、文様や胎土から同一個体の可能性がある。517～519は外面に2条の沈線を横位に施した後、その上下に沈線で「V」字状または逆「V」字状のモチーフを描く。517・518は施文や胎土から同一個体と見られる。519は突帯に半裁竹管による刺突文を施す。520・521は突帯を貼り付けるが、突帯には刻目が見られない。520は突帯の下位に、横位、斜位の沈線文を施し、521は突帯の上位に、沈線で波状のモチーフを描く。522は胴部下半と見られ、沈線で連弧状のモチー





第152図 VIII類土器実測図(12)

フを描く。

523～530は上げ底の底部である。523は器壁が薄く、内外面ともにナデ調整により丁寧に仕上げている。内面に指押さえ痕が確認できる。524・525は底径が小さい。525・528・529は底面外周に粘土を付けて、上げ底状に高くなるよう成形している。526は底面にケズリ状のナデ調整を行う。527は底面にナデ調整による工具痕が確認できる。530は厚手で底面にミガキ状のナデ調整を行う。

(9) IX類土器 (第154図 531～542)

IX類土器は口縁部が外反し、胴部はやや膨らみ、底部に向けてすぼまる器形を呈する。口縁部から胴部にかけて刻目突帯や貼付突帯を巡らす。また、瘤状突起を有するものもある。縄文を地文とする。器面調整は内外面ともにナデが行われる。一部、刻目突帯を肩部に巡らす壺形土器と考えられるものがあるが、縄文による施文が確認できないためX類とした(560～562)。

分類 以下のとおり、IX a～IX b類に細分した。

〔IX a類〕口縁部から胴部にかけて貼付突帯を巡らすもの(531～539)

〔IX b 類〕口縁部から胴部にかけて刻目突帯を巡らすもの (540 ～ 542)

**出土分布** IX類土器の出土分布図を第 153 図に示す。個体数が少ないが、全て調査区西側 (標高 181.5 ～ 182.5m) から出土しており、西側の一部 (標高 181.75m 前後) に集中する箇所が認められる。

#### 土器の特徴

531 ～ 539 は口縁部から胴部にかけて貼付突帯を巡らす一群である。赤褐色の色調をもつ。

531・532 は口縁部である。波状口縁で、口縁部が外反する器形を呈する。口唇部に平坦面をつくる。531 は外面に斜位または横位の突帯を貼り付ける。内面は丁寧にナデ調整を行う。532 は口唇部に刻目を施し、口縁部上端から間隔を空けて横位の突帯を連続して貼り付ける。

533 ～ 539 は胴部である。533 ～ 535 は斜位の縄文を地文とし、外面に横位の突帯を 2 ～ 3 条貼り付ける。533 は内面に指押さえ痕が見られる。535 は横位の貼付突帯に繋がるように 3 条の斜位の突帯を貼り付ける。536 は間隔を空けて横位の突帯を連続して貼り付ける。537 は横位の突帯を 2 条貼り付けるが、施文が不明瞭なため縄文は確認できない。538 は外面上端に貼付突帯をもち、縄文を縦位または斜位に施している。内面に指押さえ痕が見られる。539 は外面に 2 条の貼付突帯をもつ。

540 ～ 542 は口縁部から胴部にかけてに刻目突帯を巡らす一群である。

540 は口縁部で、大きく外反する器形である。外面は斜位の縄文を地文とし、口縁部上端から間隔を空けて横位の刻目突帯を 4 条貼り付ける。上位 3 条の突帯は棒状工具を押し当てたような施文で、下位の突帯は棒状工具のようなものの先端を刺突したような施文である。灰褐色の色調をもつ。

541・542 は胴部である。縄文を地文とし、にぶい褐色の色調をもつ。どちらも 2 条の突帯を貼り付けるが、541 は突帯に棒状工具のようなものの先端を刺突した突帯を、542 は棒状工具を押し当てたような突帯をもつ。541 の内面は丁寧なナデ調整で仕上げる。

#### (10) X類土器 (第 155・156 図 543 ～ 562)

X類は、I ～ IX類土器に分類できなかったものである。

#### 土器の特徴

543 ～ 551 は口縁部で、外面に主な施文が見られない一群である。

543・544 は口縁部が内湾し、口唇部に丸みを帯びる器形を呈する。543 は風化が著しく、外面の施文が不明瞭となる。543 は口縁部に穿孔をもつ。

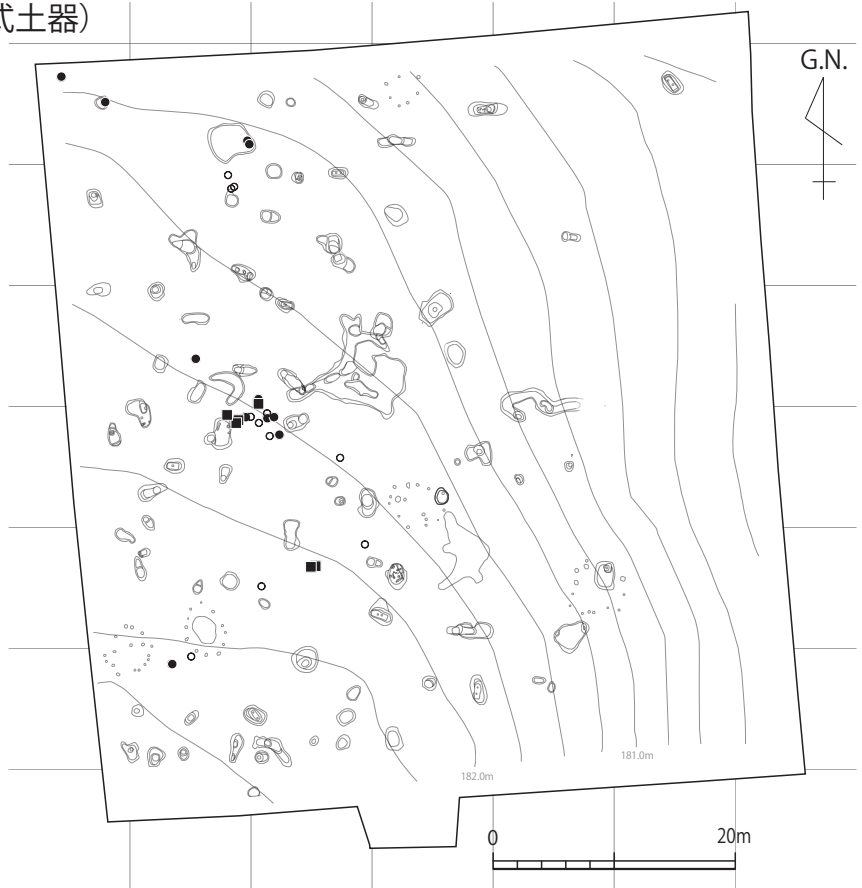
545 ～ 547 は口縁部が外傾する器形を呈する。545 は内面にミガキ状のナデ調整を行う。546・547 は口唇部に平坦面をつくる。547 は内面に丁寧なナデ調整を行う。

548 ～ 551 は口縁部が外反する器形を呈する。548 は口唇部に平坦面をつくり、浅黄橙色の色調を持つ。内面に指押さえ痕が見られる。549 は器壁が厚く、口唇部が丸みを帯びる。550 は内外面ともにナデ調整を行う。551 は口縁部が大きく外反し、口縁部内面に稜をつくり、口唇部は丸みを帯びる器形を呈する。口縁部内面に形成される稜を境に、上位はナデ調整を行うが、下位はケズリ調整で仕上げる。形態と内面の調整が押型文土器と共通するため、押型文土器に伴う無文土器と考える。

552 は口縁部で、口縁部がわずかに外傾する器形を呈する。外面には先端が尖った二叉工具による刺突文が不規則に施される。内面の口縁部上端に棒状工具を押し当てたような刺突文 (原体条痕) を縦位に施す。形態と口縁部内面の刺突文が、縄文を地文とする五十市式土器と類似しているため同時期のものと考えられる。

IX類(妙見・天道ヶ尾式土器)

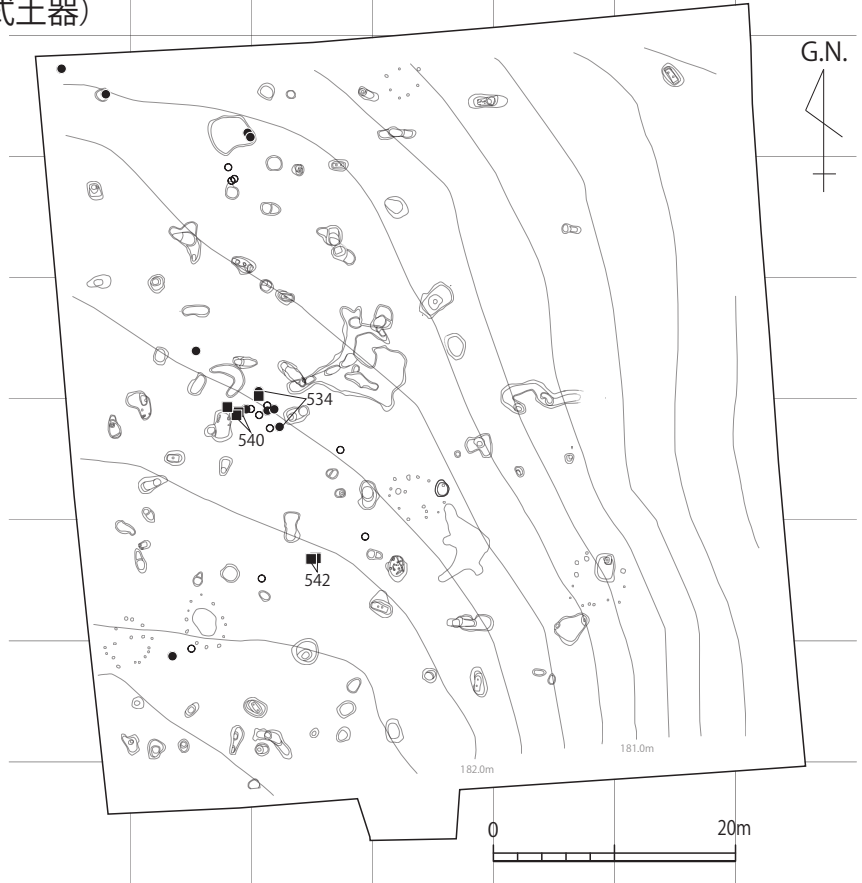
- …IXa類
- …IXb類
- …IX類



IX類(妙見・天道ヶ尾式土器)

接合状況

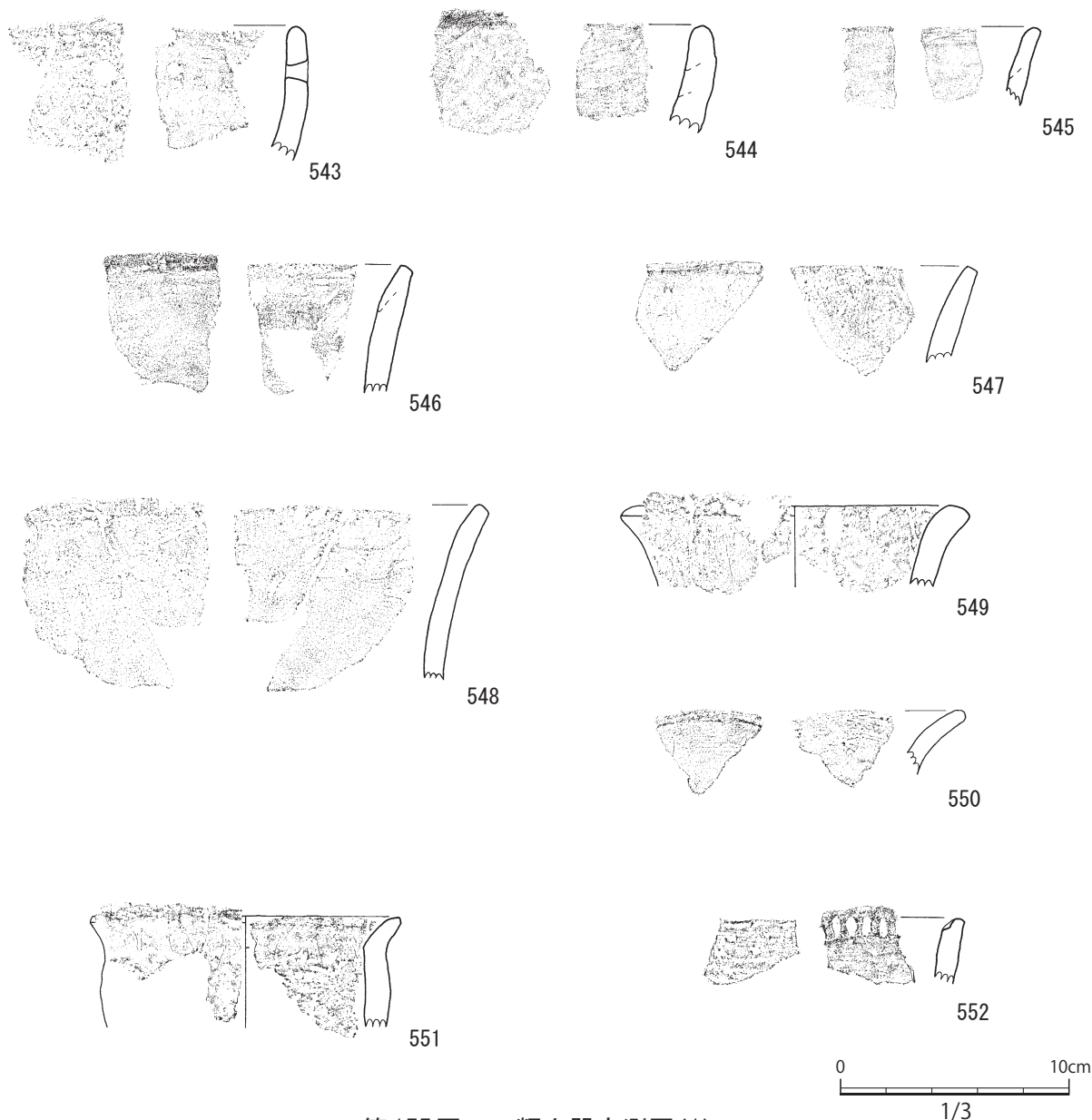
- …IXa類
- …IXb類
- …IX類



第 153 図 IX類土器出土分布図



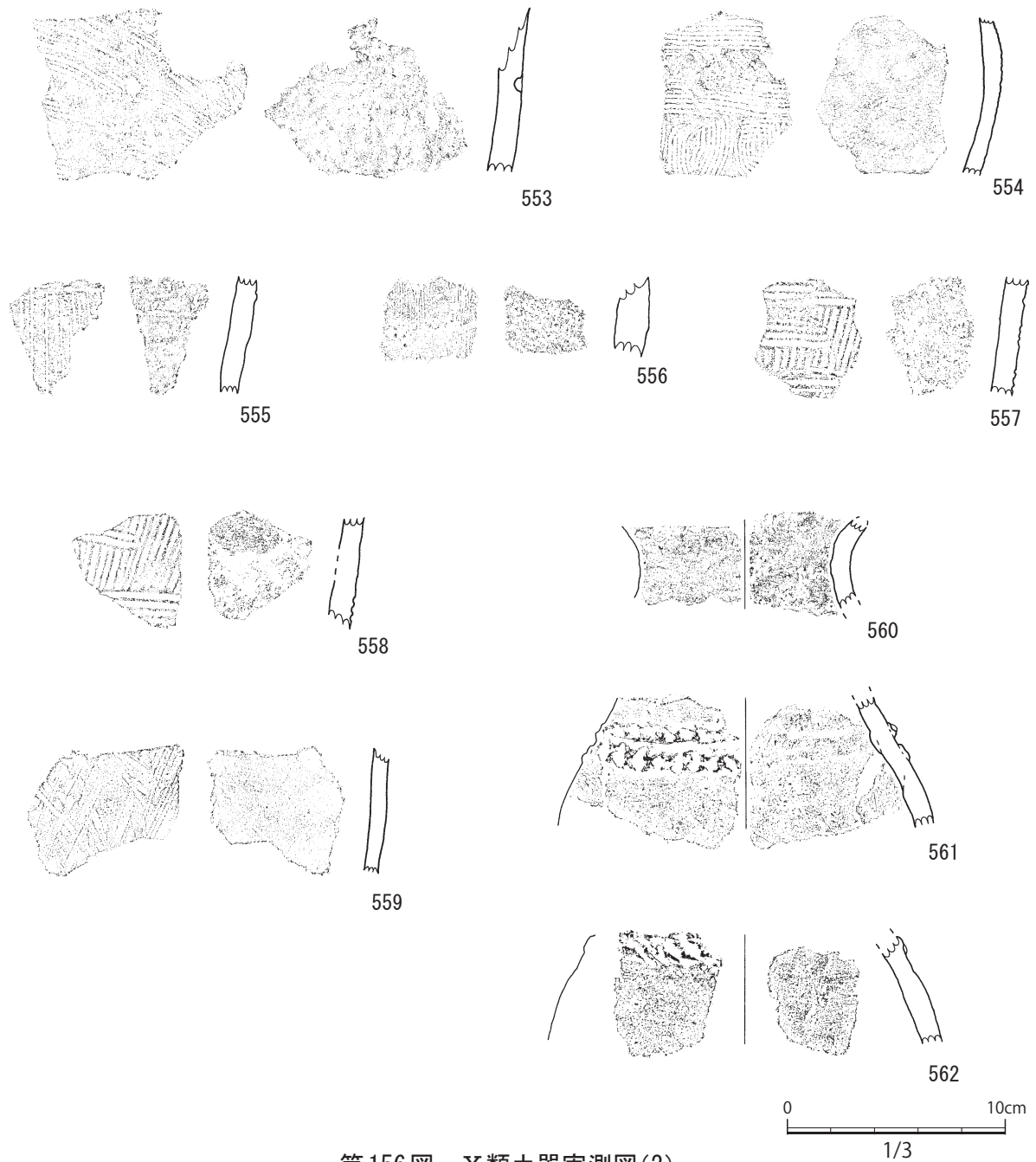
第154图 区類土器実測图



第155図 X類土器実測図(1)

553～562は胴部で条痕文や条線の施文が見られる。

553は外面に斜位の貝殻条痕文を間隔をあけて施し、未貫通の穿孔をもつ。外面はにぶい橙色の色調をもち、外面に貝殻条痕文を施文することからⅡ類やⅢ類の可能性はある。554は外面に上から横位の貝殻条痕文、斜位の刺突文、横位の貝殻条痕文を施す。その下位に円弧状の貝殻条痕文を縦位に施す。内面は丁寧なナデ調整を行う。555は外面に棒状工具による細い条線を縦位に間隔をあけて施し、その間に縦位の短沈線を施す。上端には横位の短沈線が確認できる。556は外面に縦位の細条線を施す。胎土に灰白色粒を多量に含む。557・558は斜位の貝殻条痕文を施した後、部分的に、横位の貝殻条痕文を施す。胎土や施文から同一個体と見られる。559は外面に斜位の条線を方向を違えて交差するように施す。内面は丁寧なナデ調整を行う。560は頸部で、大きく外反する。561は外面に2条の刻目突帯を



第156図 X類土器実測図(2)

貼り付け、562は外面の上位に刻目突帯を貼り付ける。突帯の刻目に条痕らしきものが見られるため、貝殻のようなもので押圧気味に刺突した可能性がある。560～562は胎土や器壁の厚みから同一個体の壺形土器と考えられる。

掲載 番号	実測 番号	種別	分類	器種	部位	法量 (cm)			出土位置		文様・調整		色調		胎土	備考
						口径	底径	器高	遺構/Gr.	層位	外面		内面			
											外面	内面	外面	内面		
6	1	縄文		深鉢	口縁～ 胴部	(20.4)			SA1		貝殻条痕文 / 貝殻刺突文 / 短沈線	貝殻条痕文	にぶい赤褐	明赤褐	赤褐 / 褐灰 / 灰白 / 黒	丸尾式
7	3	縄文		深鉢	口縁部				SA1		貝殻刺突文 / ナデ	貝殻条痕文	橙	にぶい橙	橙 / 灰白 / 黒	丸尾式
8	4	縄文		深鉢	口縁部				SA1		貝殻条痕文 / 貝殻刺突文 / 短沈線 / ナデ	貝殻条痕文	灰黄褐	にぶい褐	灰白 / 透明	丸尾式
9	2	縄文		深鉢	胴部				SA1		貝殻条痕文	貝殻条痕文	にぶい褐	にぶい褐	灰白 / 透明	丸尾式
11	5	縄文		深鉢	口縁部				カクラン		ナデ / 沈線文	ナデ	にぶい橙	橙	黒 / 灰白 / 透明	指宿式か本 野原式
12	6	縄文		深鉢	口縁部				カクラン		貝殻条痕文 / 貝殻刺突文	貝殻条痕文	にぶい赤褐	褐	透明 / 灰白 / 黒	丸尾式 波 状口縁
13	9	縄文		深鉢	口縁部				カクラン		貝殻条痕文 / 貝殻刺突文	貝殻条痕文 / ナデ	明赤褐	明赤褐	透明 / 黒	丸尾式
14	10	縄文		深鉢	胴部				カクラン		貝殻条痕文 / 貝殻刺突文	ナデ	橙	橙	赤褐色 / 褐灰 / 透明	丸尾式 穿 孔
15	11	縄文		深鉢	胴部				カクラン	V a	貝殻刺突文 / 短沈線	ナデ	明赤褐	明赤褐	褐 / 透明 / 黒	丸尾式
16	14	縄文		深鉢	口縁部				カクラン		ナデ / 貝殻刺突文	ナデ	橙	にぶい黄橙	浅黄橙 / 黒褐 / 透明	納屋向式 波状口縁
17	15	縄文		深鉢	口縁部 ～胴部	(24.4)			カクラン		ミガキ	ミガキ / 丁寧なナ デ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	灰白 / 透明 / 黒	中岳 I 式
18	557	縄文		深鉢	口縁部				G6	Ⅲ	ミガキ	ミガキ	にぶい橙	にぶい橙	赤褐 / 黒 / 白	中岳 I 式
19	7	縄文		深鉢	口縁部				カクラン		ミガキ / 刺突文	ミガキ	明赤褐	明赤褐	灰白 / 黒褐 / 黒 / 透明	納屋向式 か？
20	8	縄文		深鉢	口縁部				カクラン		ナデ	貝殻条痕文 / ナデ	明赤褐	明赤褐	灰白 / 透明 / 黒	
21	16	縄文		浅鉢	口縁部				カクラン	V a	沈線文 / 短沈線	ミガキ状のナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐灰 / 赤褐 / 透明	
22	17	縄文		深鉢	頸部				カクラン		沈線文	ミガキ状のナデ	灰黄褐	黒褐	灰白 / 赤褐 / 透明	
23	12	縄文		深鉢	胴部				カクラン		沈線文	ナデ	にぶい褐	灰黄褐	灰白 / 黒 / 浅黄橙	
24	13	縄文		深鉢	胴部				カクラン	V a	ナデ	丁寧なナデ	明赤褐	にぶい赤褐	浅黄橙 / 透明 / 黒褐	
25	18	縄文		浅鉢	口縁部				カクラン	V a	沈線文 / ミガキ	ミガキ	黄灰	オリブ黒	灰白 / 明褐	三万田式 黒色磨研
26	19	縄文	I a	深鉢	口縁～ 底部	17.6	15.5	28.2	SC59	Ⅳ	刺突文 / 貝殻条痕文	ケズリ / 貝殻条痕 文	にぶい橙	にぶい橙	白 / 褐 / 灰 / 灰白 / 黒	補修孔有り
27	20	縄文	I b	深鉢	口縁～ 胴部	(14.4)			C3	Ⅳ	刻目 / 刺突文 / 貝殻条痕 文	ケズリ / ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	橙 / 灰白 / 透明	
28	21	縄文	I c	深鉢	口縁～ 胴部	(13.2)			F5	Ⅲ・Ⅳ	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ケズリ / ナデ	にぶい橙	にぶい橙	浅黄橙 / 褐 / 灰白 / 黒 / 透明	
29	22	縄文	I c	深鉢	口縁～ 胴部				C4	Ⅳ	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ケズリ状のナデ / 工具痕	にぶい橙	にぶい橙	灰褐 / 灰白 / 赤	
30	23	縄文	I d	深鉢	口縁～ 胴部	(24.0)			B4/C4/C5/ D6/F6	Ⅲ・Ⅳ	刺突文 / 貝殻条痕文	ケズリ状のナデ / 貝殻条痕文	橙	明赤褐	灰白 / 褐灰 / 灰 / 黒	
31	24	縄文	I d	深鉢	口縁～ 胴部				C5	Ⅳ	刺突文 / 貝殻条痕文	貝殻条痕文 / ナデ / ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	浅黄橙 / 褐 / 黒	
32	25	縄文	I d	深鉢	口縁部				D5	Ⅳ	刺突文 / 貝殻条痕文	貝殻条痕文 / ナデ	橙	橙	浅黄橙 / 灰白 / 灰 / 褐	
33	26	縄文	I d	深鉢	口縁部				C5	Ⅳ	刺突文 / 貝殻条痕文	ケズリ	灰黄褐	明褐	灰白	
34	27	縄文	I d	深鉢	口縁部				E2	Ⅳ	刺突文 / 貝殻条痕文	ケズリ	灰黄褐	灰黄褐	灰白 / 透明	
35	28	縄文	I e	深鉢	口縁～ 胴部	(13.7)			SB3 C6/C7	Ⅳ	刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ / ケズリ / 指 頭痕	にぶい橙	にぶい橙	浅黄橙 / 褐 / 灰白 / 灰 / 透明	
36	29	縄文	I e	深鉢	口縁～ 胴部	(11.8)			D6	Ⅲ	刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	褐 / 灰白 / 透明	
37	30	縄文	I e	深鉢	口縁～ 胴部	(14.6)			B2	Ⅲ	刻目 / 刺突文 / 貝殻条痕 文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐 / 灰白 / 透明	
38	31	縄文	I e	深鉢	口縁～ 胴部	(14.8)			C5/D5/E3/ E4	Ⅲ・Ⅳ	刻目 / 刺突文 / 貝殻条痕 文	ケズリ / ナデ / 指 頭痕 / 工具痕	にぶい黄橙	にぶい橙	褐 / 灰白 / 灰 / 黒	
39	32	縄文	I	深鉢	胴部				D5	Ⅳ	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	橙	灰白 / 黒	
40	33	縄文	I	深鉢	胴部				C4	Ⅳ	貝殻条痕文	貝殻条痕文 / ナデ	にぶい褐	橙	灰白 / 黒	
41	34	縄文	I	深鉢	胴部				SC61/B6/F4	Ⅳ	貝殻条痕文	貝殻条痕文 / ナデ	橙	橙	灰白 / 黒 / 透明	
42	35	縄文	I	深鉢	胴部				C5	Ⅳ	貝殻条痕文	貝殻条痕文 / ナデ	橙	橙	灰白 / 透明 / 黒	
43	36	縄文	I	深鉢	胴部				C5/D4	Ⅲ	貝殻条痕文	ケズリ / 工具痕	にぶい橙	にぶい橙	褐灰 / 透明 / 灰白	
44	37	縄文	I	深鉢	胴部				F4	Ⅳ	貝殻条痕文	貝殻条痕文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐 / 灰白 / 黒 / 透明	
45	38	縄文	I	深鉢	胴部				SC16	Ⅲ	貝殻条痕文	ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	浅黄橙 / 灰白 / 灰	
46	39	縄文	I	深鉢	底部	(10.4)			C8	Ⅲ	貝殻条痕文 / ナデ	ケズリ？	にぶい橙	にぶい褐	灰白 / 灰 / 黒	
47	40	縄文	I	深鉢	底部	(9.8)			C3	Ⅳ	貝殻条痕文 / ナデ	ケズリ？	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐 / 灰白 / 黒 / 灰	
48	41	縄文	Ⅱ a	深鉢	口縁部				G7	Ⅲ	刻目 / 貝殻刺突文	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	褐 / 灰白 / 透明	
49	42	縄文	Ⅱ a	深鉢	口縁部	(33.9)			E5/F5/F7/ G6	Ⅲ・Ⅳ	羽状刻目 / 貝殻刺突文	丁寧なナデ	橙	橙	褐灰 / 灰白 / 透明	
50	43	縄文	Ⅱ a	深鉢	口縁部 ～胴部	(18.8)			C8/D4/G4	Ⅲ・Ⅳ	刻目 / 貝殻刺突文 / 貝殻 条痕文	丁寧なナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	褐 / 灰白 / 透明	
51	45	縄文	Ⅱ a	深鉢	口縁部 ～胴部	(17.4)			C5/E7/G6	Ⅲ・Ⅳ	刻目 / 貝殻刺突文 / 貝殻 条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	灰白 / 透明	
52	46/ 47	縄文	Ⅱ a	深鉢	口縁部 ～胴部	(25.2)			C4/D6/E3/ F5/G6	Ⅲ・Ⅳ	刻目 / 貝殻刺突文 / 刺突 文 / 貝殻条痕文	丁寧なナデ	にぶい橙	にぶい橙	灰白 / 褐灰 / 黒 / 灰	波状口縁
53	48	縄文	Ⅱ a	深鉢	口縁部				G4	Ⅳ	刻目 / 貝殻刺突文 / 貝殻 条痕文	ナデ	灰褐	橙	褐灰 / 灰白 / 黒	
54	49	縄文	Ⅱ a	深鉢	口縁部				F4	Ⅳ	刻目 / 貝殻刺突文	丁寧なナデ	にぶい橙	にぶい橙	灰 / 黒褐	
55	50	縄文	Ⅱ a	深鉢	口縁部				G6	Ⅳ	刻目 / 貝殻刺突文 / 貝殻 条痕文	ナデ	にぶい黄褐	橙	灰白 / 透明 / 黒 / 浅黄橙	
56	51	縄文	Ⅱ a	深鉢	口縁部 ～胴部				G5	Ⅳ	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	暗灰黄	灰白 / 黒 / 浅黄橙 / 透明	
57	53	縄文	Ⅱ a	深鉢	口縁部				E5	Ⅳ	刻目 / 貝殻刺突文 / ナデ	丁寧なナデ	にぶい橙	にぶい橙	淡橙 / 褐 / 灰 / 黒	
58	54	縄文	Ⅱ a	深鉢	口縁部				G7	Ⅳ	刻目 / 貝殻刺突文 / 貝殻 条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	灰白 / 褐 / 黒 / 灰	
59	55	縄文	Ⅱ a	深鉢	口縁部	(19.0)			G7	Ⅳ	刻目 / 貝殻刺突文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	灰白 / 灰	
60	56	縄文	Ⅱ a	深鉢	口縁部	(24.6)			SS2/F7	Ⅳ	格子目文 / 貝殻刺突文	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	灰白 / 灰 / 黒	

第7表 土器観察表(1)

掲載番号	実測番号	種別	分類	器種	部位	法量 (cm)			出土位置		文様・調整				色調		胎土	備考
						口径	底径	器高	遺構/Gr.	層位	外面		内面	外面	内面			
61	57	縄文	II a	深鉢	口縁部				E5	XV	刻目 / 貝殻刺突文	ナデ		にぶい黄橙	にぶい黄橙	透明 / 灰白 / 黒		
62	44	縄文	II a	深鉢	口縁部				E2	XV	刻目 / 貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ		にぶい赤褐	にぶい赤褐	褐灰 / 灰白 / 透明		
63	52	縄文	II a	深鉢	口縁部				G2	XV	刻目 / 貝殻刺突文	ナデ / 工具痕		にぶい黄橙	にぶい黄橙	浅黄橙 / 灰白 / 褐 / 透明		
64	58	縄文	II a	深鉢	口縁部				G2	XV	刻目 / 貝殻刺突文	(不明)		灰褐	(不明)	灰白 / 黒褐 / 褐灰		
65	59	縄文	II a	深鉢	口縁部				G7	XV	刻目 / 貝殻刺突文	ナデ		にぶい黄橙	にぶい橙	浅黄橙 / 灰白 / 灰 / 黒		
66	60	縄文	II a	深鉢	口縁部				G2	XV	刻目 / 貝殻刺突文	ナデ / 工具痕		にぶい褐	にぶい褐	灰白 / 透明		
67	61	縄文	II a	深鉢	口縁部				F3	XV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ		にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白 / 黒 / 灰		
68	62	縄文	II a	深鉢	口縁部 ~ 胴部	(20.6)			D6/E4/F7	XV	刻目 / 貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ / 工具痕 / 指頭痕		にぶい橙	にぶい橙	灰白 / 褐 / 黒 / 灰 / 金		
69	65	縄文	II a	深鉢	口縁部				F3	XV	刻目 / 貝殻刺突文	ナデ		にぶい橙	にぶい橙	透明 / 黒 / 灰白		
70	66	縄文	II a	深鉢	口縁部				G3	XV	刻目 / 貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ		にぶい褐	にぶい褐	黒 / 透明 / 灰白 / 赤褐		
71	106	縄文	II a	深鉢	口縁部 ~ 胴部	(15.8)			SJ1/D5	XV	刻目 / 貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ / 指頭痕		にぶい橙	にぶい褐	灰白 / 橙 / 黒 / 透明		
72	63	縄文	II a	深鉢	口縁部				E3	XV	刻目 / 貝殻刺突文	ナデ		にぶい橙	にぶい褐	灰白 / 灰		
73	64	縄文	II a	深鉢	口縁部 ~ 胴部	(23.3)			G3/F3	XV	刻目 / 貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ		にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白 / 赤褐 / 黒 / 灰 / 透明		
74	67	縄文	II a	深鉢	口縁部				E6	XV	貝殻刺突文 / 刺突文	ナデ		にぶい橙	にぶい橙	浅黄橙 / 灰白 / 灰		
75	68	縄文	II a	深鉢	口縁部				F6	XV	貝殻刺突文	ナデ		にぶい黄橙	にぶい黄橙	浅黄橙 / 灰白 / 灰		
76	69	縄文	II b	深鉢	口縁部 ~ 胴部	(19.8)			S158/E5/F4/F5/F6/G4	XV・XV	刻目 / 貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	丁寧なナデ / 貝殻条痕文		にぶい黄橙	褐灰	灰白 / 褐灰 / 透明		
77	70	縄文	II c	深鉢	口縁部				D2	XV	刻目 / 貝殻刺突文 / 指頭痕	ナデ		にぶい橙	にぶい橙	透明 / 黒 / 浅黄橙		
78	71	縄文	II c	深鉢	口縁部				E7	XV	刻目 / 貝殻刺突文	ナデ		にぶい褐	にぶい褐	透明 / 灰白 / 黒 / 赤褐		
79	72	縄文	II c	深鉢	口縁部				E5	XV	刻目 / 貝殻刺突文	丁寧なナデ		にぶい橙	にぶい橙	透明 / 灰 / 黒 / 灰白		
80	73	縄文	II c	深鉢	口縁部				D2	XV	貝殻条痕文 / 貝殻刺突文	ナデ		にぶい赤褐	黒褐	灰白 / 褐灰 / 赤褐		
81	74	縄文	II c	深鉢	口縁部				F2	XV	刻目 / 貝殻刺突文 / 指頭痕	丁寧なナデ		にぶい赤褐	にぶい橙	灰白 / 褐灰 / 黒 / 透明		
82	75	縄文	II c	深鉢	口縁部				G5	XV	刻目 / 貝殻刺突文	丁寧なナデ		にぶい黄橙	にぶい橙	褐灰 / 黒 / 灰白 / 灰 / 赤褐		
83	76	縄文	II c	深鉢	口縁部				E3	XV	刻目 / 貝殻刺突文	丁寧なナデ		にぶい橙	にぶい橙	灰白 / 灰 / 黒		
84	77	縄文	II c	深鉢	口縁部				C3	XV	刻目 / 貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ		にぶい橙	にぶい黄橙	灰		
85	78	縄文	II c	深鉢	口縁部 ~ 胴部				E6/F6/G5	XV・XV	刻目 / 貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ		にぶい褐	にぶい褐	灰白 / 透明 / 黒褐 / 黒 / 赤褐		
86	79	縄文	II c	深鉢	口縁部 ~ 胴部	(29.3)			S159/SJ1/D2/D3/F3/G3/G5	XV・XV	刻目 / 貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	丁寧なナデ		橙	橙	浅黄橙 / 灰白 / 赤褐 / 黒 / 透明		
87	80	縄文	II c	深鉢	口縁部 ~ 胴部	(24.1)			G5/F7	XV・XV	貝殻刺突文	ナデ		にぶい褐	にぶい褐	黒褐 / 黒 / 灰白 / 浅黄橙 / 褐灰 / 透明	未貫通の穿孔	
88	81	縄文	II c	深鉢	口縁部				G2/G3	XV	刻目 / 貝殻刺突文	ナデ		にぶい褐	にぶい褐	黒 / 透明 / 灰白 / 浅黄橙		
89	82	縄文	II c	深鉢	口縁部				D6/E6	XV・XV	刻目 / 貝殻刺突文	ナデ / 工具痕		橙	橙	浅黄橙 / 灰白 / 褐 / 黒 / 透明		
90	83	縄文	II c	深鉢	口縁部	(19.0)			C2/C3	XV	貝殻刺突文	ミガキ状のナデ		にぶい黄橙	にぶい黄橙	浅黄橙 / 黒 / 灰		
91	84	縄文	II d	深鉢	口縁部 ~ 胴部	(24.7)			G5/H6	XV・XV	刻目 / 貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ		にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白 / 黒褐 / 赤褐 / 黒 / 透明		
92	85	縄文	II d	深鉢	口縁部 ~ 胴部				C5/D4	XV・XV	刻目 / 貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	丁寧なナデ		にぶい黄橙	にぶい橙	透明 / 黒 / 黒褐 / 赤褐		
93	87	縄文	II d	深鉢	口縁部	(25.4)			SK2/H4	XV・XV	刻目 / 貝殻刺突文	ナデ		橙	明黄褐	灰白 / 黒 / 灰		
94	86	縄文	II d	深鉢	口縁部				E5	XV	刻目 / 貝殻刺突文	丁寧なナデ		にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白 / 灰		
95	88	縄文	II d	深鉢	口縁部				E3	XV	刻目 / 貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ		にぶい橙	浅黄橙	灰白 / 灰 / 褐 / 黒		
96	92	縄文	II d	深鉢	口縁部				F2	XV	刻目 / 貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ		にぶい橙	にぶい褐	浅黄橙 / 灰白 / 黒 / 透明		
97	93	縄文	II d	深鉢	口縁部				E7	XV	刻目 / 貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ		にぶい橙	にぶい橙	灰白 / 褐 / 黒 / 灰 / 透明		
98	89	縄文	II d	深鉢	口縁部 ~ 胴部				B5/C4/F3/G5	XV・XV	刻目 / 貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ		にぶい橙	にぶい黄橙	灰白 / 褐 / 灰 / 黒		
99	94	縄文	II d	深鉢	口縁部				B4	XV	刻目 / 貝殻刺突文	ナデ		にぶい橙	にぶい橙	赤褐 / 黒 / 灰白 / 白		
100	90	縄文	II d	深鉢	口縁部				E2	XV	刻目 / 貝殻刺突文	ナデ		にぶい橙	にぶい橙	灰白 / 透明		
101	91	縄文	II d	深鉢	口縁部				D2/E2	XV	刻目 / 貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ		にぶい橙	にぶい橙	灰白 / 黒 / 透明		
102	95	縄文	II d	深鉢	口縁部 ~ 胴部	(26.8)			G5	XV	刻目 / 貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ		にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白 / 黒 / 褐 / 灰 / 黒		
103	96	縄文	II d	深鉢	口縁部 ~ 胴部	(16.0)			E7	XV・XV	刻目 / 貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ / 工具痕 / 指頭痕		にぶい橙	にぶい褐	褐 / 灰白 / 灰 / 黒	未貫通の穿孔	
104	97	縄文	II d	深鉢	口縁部 ~ 胴部	(26.3)			D2/E2	XV・XV	刻目 / 貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ / 指頭痕		にぶい橙	にぶい橙	浅黄橙 / 褐 / 灰白 / 黒 / 透明	同一個体(105)	
105	97 同①	縄文	II d	深鉢	胴部 ~ 底部	(15.0)			C4/D2/D4/F4	XV・XV	貝殻条痕文 / ナデ	ナデ		橙	にぶい橙	浅黄橙 / 灰白 / 褐 / 黒	同一個体(104)	
106	98	縄文	II d	深鉢	口縁部 ~ 胴部	(20.0)			D4/D5	XV	刻目 / 貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	丁寧なナデ		にぶい黄褐	にぶい赤褐	透明 / 浅黄橙 / 橙 / 灰白 / 黒		
107	126	縄文	II d	深鉢	口縁部				D2	XV	刻目 / 貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ		にぶい橙	褐	暗赤褐 / 黒褐 / 灰褐 / 浅黄橙 / 灰		
108	102	縄文	II e	深鉢	口縁部				SC14/C8	XV	刻目 / 貝殻刺突文 / 刺突文	ナデ		にぶい橙	にぶい黄橙	灰白 / 黒 / 透明	補修孔	
109	109	縄文	II e	深鉢	口縁部 ~ 胴部				G5	XV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ		にぶい橙	にぶい褐	灰白 / 黒 / 透明		
110	110	縄文	II e	深鉢	口縁部 ~ 胴部				D4/H7	XV・XV	刻目 / 貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ		橙	にぶい橙	灰白 / 浅黄橙 / 透明 / 黒	波状口縁	

第8表 土器観察表(2)



掲載 番号	実測 番号	種別	分類	器種	部位	法量 (cm)			出土位置		文様・調整		色調		胎土	備考
						口径	底径	器高	遺構/Gr.	層位	外面	内面	外面	内面		
111	114	縄文	II e	深鉢	口縁部 ～胴部				SP3	XV	刻目 / 貝殻刺突文 / 貝殻 条痕文	ナデ	褐	灰黄褐	褐灰 / 灰白 / 黒 / 透明	
112	105	縄文	II e	深鉢	口縁部 ～胴部	(11.4)			S13/D7	XV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ミガキ状のナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	灰白 / 浅黄橙 / 褐 / 黒	
113	113	縄文	II e	深鉢	口縁部 ～胴部				D6	XV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ	橙	褐	灰褐 / 赤褐 / 灰白 / 透明	波状口縁
114	104	縄文	II e	深鉢	口縁部				SS8	XV	貝殻刺突文	ナデ / 工具痕	にぶい黄	にぶい黄橙	灰白 / 金 / 黒	
115	100	縄文	II e	深鉢	口縁部 ～胴部				G5	XV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白 / 黒 / 透明 / 浅黄橙	
116	101	縄文	II e	深鉢	口縁部				F6/G6	XV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文 / 短沈線	ナデ	にぶい橙	灰黄褐	灰白 / 透明 / 黒 / 赤褐	
117	103	縄文	II e	深鉢	口縁部 ～胴部				C7/G6/G7	XV	刻目 / 貝殻刺突文 / 貝殻 条痕文 / 短沈線	ナデ	橙	にぶい褐	橙 / 灰白 / 黒 / 透明	
118	99	縄文	II e	深鉢	口縁部 ～胴部	(13.9)			F6	XV	貝殻刺突文 / 条痕文	ナデ / 工具痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	透明 / 淡黄橙	未貫通の穿 孔
119	108	縄文	II e	深鉢	口縁部				F5	XV	貝殻刺突文	ナデ	浅黄	にぶい黄橙	灰白 / 黒 / 透明	
120	107	縄文	II e	深鉢	口縁部 ～胴部	(16.5)			C4	XV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ケズリ状のナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒 / 黒褐 / 透明 / 灰白	
121	111	縄文	II e	深鉢	口縁部				G7	XV	刻目 / 貝殻刺突文 / 貝殻 条痕文	ナデ	にぶい赤褐	にぶい褐	褐灰 / 灰白 / 黒 / 透明	
122	112	縄文	II e	深鉢	口縁部				E5	XV	刻目 / 貝殻刺突文	ナデ	橙	灰黄褐	褐 / 灰白 / 黄橙 / 透明	
123	115	縄文	II f	深鉢	口縁部				G6	XV	貝殻刺突文	ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	灰白 / 黒	
124	116	縄文	II f	深鉢	口縁部				F5	XV	貝殻刺突文 / ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	灰白 / 透明	
125	117	縄文	II f	深鉢	口縁部				G7	XV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	丁寧なナデ	にぶい黄橙	褐灰	灰白	
126	118	縄文	II f	深鉢	口縁部				E5	XV	貝殻条痕文 / 貝殻刺突文	丁寧なナデ	にぶい黄橙	褐灰	灰白 / 灰 / 黒	
127	119	縄文	II f	深鉢	口縁部 ～胴部	(31.8)			S159/D6/ E6/F5/F6	XV	刻目 / 貝殻刺突文 / 貝殻 条痕文	ナデ	橙	にぶい橙	灰白 / 黒	
128	120	縄文	II f	深鉢	口縁部 ～底部	(13.0)	(11.0)	18.0	C4/E5/E6	XV	刻目 / 貝殻刺突文 / 貝殻 条痕文	ナデ	橙	にぶい橙	灰白 / 褐灰 / 透明 / 黒	
129	121	縄文	II g	深鉢	口縁部 ～胴部	(21.0)			E6/E7	XV	刻目 / 貝殻刺突文 / 貝殻 条痕文	ナデ	黄灰	にぶい黄	透明 / 淡黄 / 金 / 黒	
130	122	縄文	II g	深鉢	口縁部 ～胴部	(20.5)			S126/E6	XV	刻目 / 貝殻刺突文 / 貝殻 条痕文	ナデ	黄灰	暗灰黄	灰白 / 金	
131	123	縄文	II g	深鉢	口縁部 ～胴部	(17.1)			SP2	XV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	金 / 灰白 / 褐灰 / 浅黄橙	
132	124	縄文	II g	深鉢	口縁部				F7	XV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ	褐灰	灰黄褐	褐灰 / 灰白 / 金	
133	125	縄文	II g	深鉢	口縁部				H5	XV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	丁寧なナデ	明赤褐	明赤褐	褐灰 / 透明	波状口縁
134	128	縄文	II h	深鉢	口縁部 ～胴部	(14.2)			D5/E6	XV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白 / 透明 / 黒	波状口縁
135	127	縄文	II h	深鉢	口縁部				C3	XV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ / 工具痕	灰褐	にぶい褐	赤褐 / 黒 / 灰白	
136	129	縄文	II h	深鉢	口縁部				E6	XV	貝殻刺突文	ナデ	暗オリーブ 褐	にぶい黄橙	灰白 / 灰	
137	130	縄文	II h	深鉢	口縁部				F6	XV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白	
138	131	縄文	II i	深鉢	口縁部				E6	XV	貝殻刺突文	ナデ	にぶい橙	灰黄褐	灰白 / 透明	
139	132	縄文	II i	深鉢	口縁部				G5	XV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ミガキ状のナデ	橙	にぶい黄橙	透明 / 黒 / 灰白	
140	133	縄文	II i	深鉢	口縁部 ～胴部	(7.4)			E5	XV	貝殻条痕文 / ナデ	ナデ	にぶい赤褐	灰褐	灰白 / 透明 / 赤褐	小型土器
141	134	縄文	II j	深鉢	口縁部 ～胴部				SP1/D5/E6/ G6	XV	貝殻刺突文	ナデ / ケズリ	にぶい橙	褐灰	灰白 / 黒 / 透明	
142	135	縄文	II j	深鉢	口縁部				D5	XV	貝殻刺突文 / ナデ	ケズリ	灰褐	灰褐	褐灰 / 透明	
143	136	縄文	II k	深鉢	口縁部				SC60	XV	細条線	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰黄褐 / 黒褐 / 金 / 灰	
144	137	縄文	II k	深鉢	口縁部				E4	XV	細条線	ミガキ状のナデ	にぶい橙	褐灰	黒褐 / 褐灰 / 灰白 / 赤褐 / 透明	
145	138	縄文	II	深鉢	胴部～ 底部	(9.6)			F7/G7	XV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ / 工具痕 / 指 頭痕	橙	にぶい橙	浅黄橙 / 灰 / 黒 / 透明	
146	139	縄文	II	深鉢	胴部				C6/C7/D6/ E4	XV	貝殻条痕文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	黒褐 / 透明 / 黒 / 浅黄橙	
147	140	縄文	II	深鉢	胴部				E2	XV	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	黄灰	灰白 / 黒褐 / 浅黄橙	
148	141	縄文	II	深鉢	胴部				D4/E6	XV	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	透明 / 灰白 / 赤褐 / 黒褐	
149	142	縄文	II	深鉢	胴部				E7	XV	貝殻条痕文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	浅黄橙 / 褐 / 透明	
150	143	縄文	II	深鉢	胴部				E5	XV	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	白 / 灰白 / 黒 / 透明	
151	144	縄文	II	深鉢	胴部				E5	XV	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	白 / 灰白 / 褐	
152	146	縄文	II	深鉢	胴部				E5/G5	XV	貝殻条痕文	丁寧なナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	赤褐 / 黒 / 透明 / 浅黄	
153	145	縄文	II	深鉢	胴部				D6/G5	XV	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	浅黄橙 / 褐 / 白 / 黒	
154	147	縄文	II	深鉢	胴部				B2/D4/E2	XV	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	黄灰 / 黒 / 灰白 / 透明	
155	152	縄文	II	深鉢	胴部				H7	XV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	浅黄橙 / 暗褐 / 灰白 / 黒 / 透明	
156	148	縄文	II	深鉢	胴部				E7/F7	XV	貝殻条痕文	丁寧なナデ	にぶい橙	灰黄褐	灰白 / 黒 / 灰	
157	151	縄文	II	深鉢	胴部				G4/G7	XV	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	灰褐 / 黒 / 透明	
158	149	縄文	II	深鉢	胴部				G6	XV	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	透明 / 灰白 / 橙 / 赤褐	
159	150	縄文	II	深鉢	胴部				E3	XV	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	灰白 / 灰	
160	153	縄文	II	深鉢	胴部				F2	XV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ	灰黄褐	にぶい橙	灰白 / 灰	
161	155	縄文	II	深鉢	胴部				B5	XV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	灰白 / 黒 / 赤褐	
162	154	縄文	II	深鉢	胴部				C2	XV	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい褐	浅黄橙 / 灰白 / 灰 / 黒	
163	156	縄文	II	深鉢	胴部				SC3/F7/G7	XV	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい褐	灰白 / 黒 / 褐灰 / 透明 / 浅黄橙	
164	157	縄文	II	深鉢	胴部				D3	XV	貝殻条痕文	ナデ	にぶい赤褐	にぶい褐	浅黄橙 / 灰白 / 褐灰 / 黒 / 透明	
165	158	縄文	II	深鉢	胴部				B3	XV	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	灰褐 / 灰白 / 褐灰 / 赤褐 / 黒 / 灰	
166	159	縄文	II	深鉢	胴部				B2/D6	XV	貝殻条痕文	ナデ	橙	にぶい褐	浅黄橙 / 灰白 / 褐灰 / 透 明 / 黒	

第9表 土器観察表(3)

掲載 番号	実測 番号	種別	分類	器種	部位	法量 (cm)			出土位置		文様・調整		色調		胎土	備考
						口径	底径	器高	遺構/Gr.	層位	外面	内面	外面	内面		
167	160	縄文	II	深鉢	胴部				E6	IV	貝殻条痕文 / 沈線文	ナデ	橙	にぶい褐色	灰白 / 浅黄橙 / 褐 / 黒 / 透明	
168	161	縄文	II	深鉢	胴部				E6	IV	貝殻条痕文 / 沈線文	ナデ	にぶい橙	にぶい褐色	灰白 / 浅黄橙 / 褐 / 黒 / 透明	
169	162	縄文	II	深鉢	胴部				SJ2	IV	貝殻条痕文 / 貝殻刺突文	ナデ	橙	にぶい褐色	黄橙 / 黒 / 灰白 / 透明	
170	163	縄文	II	深鉢	胴部				D7	IV	貝殻条痕文 / 貝殻刺突文	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい橙	灰白 / 黒 / 透明	
171	164	縄文	II	深鉢	胴部				S126/E6/E7	IV・V	貝殻条痕文	粗いナデ / ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	白 / 灰白 / 褐 / 黒 / 透明	
172	165	縄文	II	深鉢	胴部				C3	IV	条線	ケズリ状のナデ	にぶい橙	にぶい橙	灰白 / 橙 / 赤褐色 / 透明 / 黒	
173	167	縄文	II	深鉢	底部		(19.3)		D3/D5/E2/E3/E7	IV・V	貝殻条痕文	ケズリ状のナデ	橙	橙	灰白 / 白 / 黒	
174	168	縄文	II	深鉢	底部		(17.7)		C3/D4/D5	IV・V	貝殻条痕文	ナデ / 工具痕 / 指頭痕	橙	橙	灰白 / 灰 / 褐 / 透明 / 白	
175	166	縄文	II	深鉢	底部		(13.8)		D5/E5	IV	(不明)	(不明)	にぶい橙	にぶい黄橙	浅黄橙 / 褐 / 灰 / 黒 / 透明	
176	169	縄文	II	深鉢	底部		(11.8)		F3/G2	IV	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	黄灰	透明 / 黒 / 灰白	
177	171	縄文	II	深鉢	底部		(10.7)		F4/F7	IV	貝殻条痕文 / ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい褐色	灰白 / 黒 / 透明 / 灰	
178	170	縄文	II	深鉢	底部		(9.2)		G5/G7	IV	ナデ / 刻目	ナデ	にぶい橙	橙	赤褐色 / 灰白 / 浅黄橙 / 黒 / 透明	
179	172	縄文	II	深鉢	底部		(11.9)		D8	IV	刻目 / ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	灰白 / 灰	
180	173	縄文	II	深鉢	底部		(12.6)		H6	IV	貝殻条痕文 / 刻目 / ナデ	ナデ	橙	にぶい橙	黒褐 / 褐灰 / 灰白 / 赤褐色 / 透明	
181	174	縄文	II	深鉢	底部		(11.9)		C3	IV	貝殻条痕文 / 刻目 / ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	赤褐色 / 褐灰 / 灰白 / 透明	
182	175	縄文	II	深鉢	底部				F4	IV	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	灰白 / 透明 / 黒 / 赤褐色	
183	176	縄文	II	深鉢	底部				調査区一括	-	貝殻条痕文 / ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白 / 透明 / 黒	
184	177	縄文	II	深鉢	底部				G7	IV	貝殻条痕文 / ミガキ状のナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	灰白 / 灰	
185	180	縄文	II	深鉢	底部		(9.3)		G3	IV	ナデ	ナデ	橙	褐灰	白 / 褐灰 / 黒	
186	179	縄文	II	深鉢	底部		(10.7)		SS3	IV	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	灰白 / 透明 / 黒	
187	178	縄文	II	深鉢	底部		(14.9)		E7	IV	貝殻条痕文 / 貝殻刺突文 / ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	灰白	
188	181	縄文	II	深鉢	底部				C4	IV	ナデ	(不明)	にぶい黄褐色	にぶい橙	灰白 / 灰	土製円盤?
189	182	縄文	II	深鉢	底部				D3	IV	ナデ	(不明)	にぶい橙	橙	褐灰 / 浅黄 / 黒	土製円盤?
190	183	縄文	II	深鉢	底部		(9.8)		E3	IV	ミガキ状のナデ	(不明)	にぶい黄橙	灰黄褐色	灰白	
191	184	縄文	II	深鉢	底部				D6	IV	ミガキ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	灰白 / 透明 / 黒 / 透明	
192	191	縄文	III a	深鉢	口縁部～胴部				G2	IV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ	橙	にぶい褐色	赤褐色 / 灰白 / 灰	
193	197	縄文	III a	深鉢	口縁部～胴部	(28.1)			F2	IV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	丁寧なナデ	にぶい橙	にぶい橙	灰白 / 透明 / 黒 / 褐	
194	192	縄文	III a	深鉢	口縁部～胴部				SS3	IV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ミガキ状のナデ	にぶい橙	にぶい黄褐色	赤褐色 / 灰白 / 黒 / 透明	
195	193	縄文	III a	深鉢	口縁部				G7	IV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ミガキ	灰黄	黄灰	灰白 / 透明 / 黒 / 褐	
196	189	縄文	III a	深鉢	口縁部～胴部				G2	IV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ミガキ状のナデ	褐灰	にぶい橙	赤 / 透明 / 黒	穿孔
197	210	縄文	III a	深鉢	口縁部～胴部	(20.7)			C7/E2	IV・V	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ミガキ状のナデ	浅黄	にぶい黄褐色	浅黄橙 / 灰白 / 黒 / 透明	
198	208	縄文	III a	深鉢	口縁部～胴部	(23.4)			F6	IV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ミガキ状のナデ	褐灰	橙	褐灰 / 灰白 / 透明	
199	211	縄文	III a	深鉢	口縁部				E2	IV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ミガキ状のナデ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	灰白 / 黒 / 透明 / 赤褐色	
200	212	縄文	III a	深鉢	口縁部				F6	IV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	丁寧なナデ	にぶい橙	灰黄褐色	灰白 / 褐灰 / 赤褐色 / 黒 / 透明	
201	209	縄文	III a	深鉢	口縁部～胴部				G5	IV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	丁寧なナデ	にぶい橙	にぶい橙	白 / 灰白 / 褐灰 / 透明	
202	227	縄文	III a	深鉢	口縁部				G6	IV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ミガキ状のナデ	にぶい橙	灰黄褐色	灰白 / 灰褐色 / 赤褐色 / 透明	
203	215	縄文	III a	深鉢	口縁部	(15.3)			F2	IV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	丁寧なナデ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	白 / 黒	
204	206	縄文	III a	深鉢	口縁部				B2	IV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ミガキ状のナデ	黄灰	黄灰	灰白 / 黒褐色 / 透明	
205	214	縄文	III a	深鉢	口縁部				F2	IV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	丁寧なナデ	灰褐色	橙	白 / 灰赤 / 透明	
206	196	縄文	III a	深鉢	口縁部～胴部	(18.5)			G2	IV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ	灰黄褐色	灰黄褐色	褐 / 灰白	
207	202	縄文	III a	深鉢	口縁部				G6	IV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	丁寧なナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	灰白 / 透明	
208	198	縄文	III a	深鉢	口縁部				G7	IV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ミガキ状のナデ	灰黄褐色	にぶい橙	浅黄橙 / 褐 / 灰	
209	218	縄文	III a	深鉢	口縁部～胴部	(19.6)			SS3/G2/G3	IV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	丁寧なナデ	灰褐色	橙	灰褐色 / 灰白 / 褐灰 / 透明	
210	225	縄文	III a	深鉢	口縁部	(12.6)			E2	IV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ミガキ状のナデ	橙	にぶい橙	灰白	
211	188	縄文	III a	深鉢	口縁部～胴部				D5	IV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	浅黄橙 / 赤褐色	
212	190	縄文	III a	深鉢	口縁部～胴部				S190	IV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	丁寧なナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	灰白 / 赤 / 透明	穿孔
213	199	縄文	III a	深鉢	口縁部				F6	IV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ミガキ状のナデ / 指頭痕	浅黄褐色	にぶい橙	灰白 / 褐	
214	223	縄文	III a	深鉢	口縁部～胴部				E2	IV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	丁寧なナデ	浅黄褐色	黄灰	灰白 / 褐 / 透明	
215	187	縄文	III a	深鉢	口縁部				F5	IV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	赤褐色 / 浅黄橙 / 透明	
216	200	縄文	III a	深鉢	口縁部				E6	IV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ミガキ状のナデ / 指頭痕	灰黄	浅黄褐色	灰白 / 浅黄褐色	
217	194	縄文	III a	深鉢	口縁部				B2	IV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ミガキ状のナデ	灰黄	にぶい黄褐色	灰白 / 透明 / 浅黄橙	
218	207	縄文	III a	深鉢	口縁部				E7	IV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ミガキ状のナデ	黄灰	黄灰	灰白 / 赤褐色 / 黒	
219	185	縄文	III a	深鉢	口縁部				G3	IV	貝殻刺突文	ミガキ状のナデ	褐灰	にぶい橙	灰白 / 黒 / 透明	
220	186	縄文	III a	深鉢	口縁部				H6	IV	貝殻刺突文 / 貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	橙	灰 / 灰褐色 / 透明 / 灰白 / 黒	

第10表 土器観察表(4)





掲載番号	実測番号	種別	分類	器種	部位	法量 (cm)			出土位置		文様・調整		色調		胎土	備考
						口径	底径	器高	遺構/Gr.	層位	外面	内面	外面	内面		
348	558	縄文	Ⅷ a	深鉢	胸部				F6	Ⅳ	楕円押型文 / ナデ消し	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白 / 金 / 黄灰	
349	345	縄文	Ⅷ a	深鉢	胸部～底部		(9.1)		G6	Ⅳ	楕円押型文 / ナデ / ナデ消し	ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	灰白 / 橙 / 黒	
350	346	縄文	Ⅷ a	深鉢	胸部～底部				C3	Ⅳ	楕円押型文 / ミガキ状のナデ / ナデ消し	ナデ / 指頭痕	にぶい橙	にぶい褐	赤褐 / 浅黄橙 / 金	
351	348	縄文	Ⅷ a	深鉢	底部				D3	Ⅳ	楕円押型文 / ナデ	ナデ	浅黄	黄灰	黄灰 / 黒褐 / 透明	
352	347	縄文	Ⅷ a	深鉢	底部		(14.9)		E3	Ⅳ	楕円押型文 / ナデ	ナデ	にぶい橙	灰黄褐	灰白 / 赤褐 / 金	
353	520	縄文	Ⅷ a	深鉢	胸部～底部		(5.8)		E7/F7	Ⅳ・Ⅴ	楕円押型文 / ナデ	ナデ	にぶい黄橙	褐灰	灰白 / 褐灰 / 透明	
354	521	縄文	Ⅷ a	深鉢	胸部～底部		(4.9)		F6/G7	Ⅳ・Ⅴ	楕円押型文 / ナデ	ナデ	浅黄橙	灰黄	灰黄 / 黒 / 灰白 / 明褐	
355	349	縄文	Ⅷ a	土器製品	円盤土器				E7	Ⅳ	楕円押型文	ナデ	にぶい黄橙	褐灰	灰黄褐 / 褐	
356	350	縄文	Ⅷ a	土器製品	円盤土器				F4	Ⅳ	楕円押型文	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	黄橙 / 褐灰 / 赤褐	
357	351	縄文	Ⅷ b	深鉢	口縁部				E4	Ⅳ	連珠押型文 / ミガキ状のナデ	ケズリ / ナデ	にぶい橙	にぶい橙	浅黄橙 / 灰白 / 金	
358	352	縄文	Ⅷ b	深鉢	口縁部				H5	Ⅳ	連珠押型文 / ミガキ状のナデ	ミガキ状のナデ	にぶい橙	にぶい橙	赤褐 / 浅黄橙 / 灰白 / 金	
359	353	縄文	Ⅷ b	深鉢	口縁部				SC51/G2	Ⅳ	連珠押型文 / ミガキ状のナデ	ケズリ / ミガキ状のナデ	にぶい赤褐	にぶい橙	褐 / 浅黄橙 / 金	補修孔有り
360	354	縄文	Ⅷ b	深鉢	口縁部				D3	Ⅳ	連珠押型文	刺突文 / 連珠押型文	にぶい褐	灰黄褐	灰白 / 浅黄橙 / 金	
361	355	縄文	Ⅷ b	深鉢	口縁部				F3	Ⅳ	連珠押型文	刺突文 / ナデ	にぶい褐	暗オリーブ褐	金 / 灰白	
362	356	縄文	Ⅷ b	深鉢	口縁部				E4	Ⅳ	連珠押型文	刺突文 / ナデ	にぶい褐	暗褐	灰白 / 金	
363	357	縄文	Ⅷ b	深鉢	胸部				D3/E3	Ⅳ	連珠押型文	ナデ	にぶい赤褐	褐灰 / 金 / 灰白		
364	358	縄文	Ⅷ b	深鉢	胸部				E2	Ⅳ	連珠押型文	ケズリ / ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	褐灰 / 灰白 / 金	
365	359	縄文	Ⅷ b	深鉢	胸部				D5	Ⅳ	連珠押型文	ケズリ / ナデ	にぶい赤褐	灰褐	金 / 赤褐 / 白 / 灰白	
366	361	縄文	Ⅷ b	深鉢	胸部				E2	Ⅳ	連珠押型文 / ナデ消し	ナデ	にぶい黄橙	灰白 / 金 / 黒 / 褐		
367	362	縄文	Ⅷ b	深鉢	胸部				D4	Ⅳ	連珠押型文 / ナデ消し	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白 / 金 / 黒	
368	363	縄文	Ⅷ b	深鉢	胸部				SK2	Ⅳ	連珠押型文 / ナデ消し	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白 / 金 / 黒	
369	364	縄文	Ⅷ b	深鉢	口縁部～胸部	(31.9)			C7	Ⅳ	連珠押型文	連珠押型文 / ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒褐 / 灰白 / 浅黄橙 / 黒 / 透明	同一個体 (370)
370	365	縄文	Ⅷ b	深鉢	口縁部				G5	Ⅳ	連珠押型文	連珠押型文 / ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒褐 / 黄褐 / 黒 / 透明	同一個体 (369)
371	366	縄文	Ⅷ b	深鉢	口縁部				E4	Ⅳ	連珠押型文	連珠押型文 / ケズリ / ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白 / 褐 / 金	
372	367	縄文	Ⅷ b	深鉢	口縁部				E4	Ⅳ	連珠押型文	連珠押型文	にぶい褐	にぶい橙	赤褐 / 浅黄橙 / 金	
373	360	縄文	Ⅷ b	深鉢	胸部				E7	Ⅳ	連珠押型文	ナデ	にぶい褐	灰黄褐	赤 / 金 / 白 / 赤褐 / 灰白	
374	368	縄文	Ⅷ b	深鉢	胸部				D5	Ⅳ	連珠押型文	ケズリ / ナデ	にぶい橙	灰黄褐	浅黄橙 / 褐 / 金	
375	369	縄文	Ⅷ b	深鉢	胸部				F4	Ⅳ	連珠押型文	ケズリ	にぶい赤褐	褐灰	灰白 / 褐灰 / 金	
376	370	縄文	Ⅷ b	深鉢	胸部				E4	Ⅳ	連珠押型文	ミガキ状のナデ	にぶい橙	明赤褐	灰白 / 透明 / 黒	
377	372	縄文	Ⅷ b	深鉢	胸部				D5/F2	Ⅳ	連珠押型文	ミガキ状のナデ	明褐	にぶい黄橙	金 / 浅黄橙 / 灰白	
378	371	縄文	Ⅷ b	深鉢	胸部				D3	Ⅳ	連珠押型文	ナデ	にぶい褐	黒褐	金 / 褐 / 灰白	
379	373	縄文	Ⅷ c	深鉢	口縁部				D5	Ⅳ	山形押型文	ナデ / 指頭痕	浅黄橙	浅黄橙	灰白 / 赤褐 / 黒	
380	374	縄文	Ⅷ c	深鉢	口縁部				G3	Ⅳ	山形押型文	ナデ / 指頭痕	浅黄橙	にぶい黄橙	灰白 / 赤褐 / 白 / 黒	
381	375	縄文	Ⅷ c	深鉢	胸部				B4	Ⅳ	山形押型文	ナデ	にぶい黄橙	灰白 / 黒		
382	376	縄文	Ⅷ c	深鉢	胸部				E3	Ⅳ	山形押型文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白 / 黒 / 透明	
383	377	縄文	Ⅷ c	深鉢	胸部				S129/B4	Ⅳ	山形押型文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒 / 金 / 灰白	
384	378	縄文	Ⅷ c	深鉢	底部		(5.9)		D3	Ⅳ	山形押型文 / ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒 / 灰 / 灰白	
385	379	縄文	Ⅷ c	深鉢	口縁部～胸部	(10.5)			E5	Ⅳ	山形押型文	山形押型文 / ケズリ / ナデ	にぶい橙	褐灰	灰白 / 金 / 透明	
386	380	縄文	Ⅷ c	深鉢	口縁部～胸部	(10.2)			D5/E5	Ⅳ	山形押型文	山形押型文 / ケズリ / ナデ	にぶい橙	褐灰	灰白 / 金 / 透明	
387	381	縄文	Ⅷ c	深鉢	口縁部～胸部				D7	Ⅳ	山形押型文	山形押型文 / ケズリ状のナデ	にぶい褐	にぶい褐	褐灰 / 灰白 / 金	穿孔
388	382	縄文	Ⅷ c	深鉢	口縁部～胸部	(17.3)			D3	Ⅳ	山形押型文	ナデ / ケズリ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	灰白 / 赤褐 / 白 / 金	
389	384	縄文	Ⅷ c	深鉢	胸部				D2	Ⅳ	山形押型文	ケズリ	にぶい褐	にぶい褐	灰白 / 金	
390	385	縄文	Ⅷ c	深鉢	胸部				D2/E5/F4	Ⅳ・Ⅴ	山形押型文	ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白 / 褐灰 / 透明 / 金 / 浅黄橙	
391	386	縄文	Ⅷ c	深鉢	胸部				F2	Ⅳ	山形押型文	ケズリ	にぶい褐	褐灰	灰白 / 灰褐 / 褐灰 / 金	
392	397	縄文	Ⅷ c	深鉢	胸部				SP1/D4	Ⅳ・Ⅴ	山形押型文	ケズリ	にぶい褐	にぶい橙	灰白 / 金 / 透明 / 浅黄橙	同一個体 (393)
393	398	縄文	Ⅷ c	深鉢	胸部				SP1/SK2/D4/D5	Ⅳ・Ⅴ	山形押型文	ケズリ	にぶい橙	灰黄褐	灰白 / 金 / 黒 / 浅黄橙	同一個体 (392)
394	387	縄文	Ⅷ c	深鉢	胸部				F4	Ⅳ	山形押型文	ケズリ / ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐 / 灰白 / 金	
395	388	縄文	Ⅷ c	深鉢	胸部				C7	Ⅳ	山形押型文	ケズリ / ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	褐 / 浅黄橙 / 金	
396	390	縄文	Ⅷ c	深鉢	胸部				SP3/C5	Ⅳ	山形押型文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白 / 褐 / 金	
397	389	縄文	Ⅷ c	深鉢	胸部				C5	Ⅳ	山形押型文	ケズリ / ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐 / 灰白 / 橙 / 金	
398	391	縄文	Ⅷ c	深鉢	胸部				D3	Ⅳ	山形押型文	ケズリ	にぶい褐	にぶい褐	金 / 灰白	穿孔
399	392	縄文	Ⅷ c	深鉢	胸部				S197	Ⅳ	山形押型文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	金 / 灰白	
400	393	縄文	Ⅷ c	深鉢	胸部				C2	Ⅳ・Ⅴ	山形押型文	丁寧なナデ	にぶい褐	にぶい褐	金 / 浅黄橙 / 灰白	
401	394	縄文	Ⅷ c	深鉢	胸部				C2	Ⅳ	山形押型文	丁寧なナデ	にぶい橙	にぶい橙	浅黄橙 / 赤褐 / 金	
402	395	縄文	Ⅷ c	深鉢	底部		(11.6)		D4	Ⅳ	山形押型文 / ミガキ状のナデ	ケズリ / ナデ	浅黄	にぶい橙	褐灰 / 灰白 / 浅黄橙 / 金	
403	396	縄文	Ⅷ c	深鉢	底部		(13.4)		D6	Ⅳ	山形押型文 / ナデ	ケズリ / ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	浅黄橙 / 灰白 / 褐 / 金	
404	399	縄文	Ⅷ c	深鉢	口縁部				C5	Ⅳ	山形押型文	ナデ	にぶい橙	灰白 / 褐 / 金		
405	400	縄文	Ⅷ c	深鉢	胸部				S128/C2/C5/C6	Ⅳ・Ⅴ	山形押型文	ナデ / 指頭痕	にぶい橙	にぶい橙	浅黄橙 / 赤褐 / 金	Ⅳ類の可能性

第13表 土器観察表(7)

掲載 番号	実測 番号	種別	分類	器種	部位	法量 (cm)			出土位置		文様・調整		色調		胎土	備考
						口径	底径	器高	遺構/Gr.	層位	外面	内面	外面	内面		
406	549	縄文	VII c	深鉢	口縁部				E7	Ⅳ	山形押型文	ナデ	橙	にぶい橙	灰白 / 黒 / 透明 / 黒褐	同一個体 (407・408)
407	562	縄文	VII c	深鉢	胴部				B7	Ⅳ	山形押型文	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	黄橙 / 灰白 / 褐灰 / 黒	同一個体 (406・408)
408	563	縄文	VII c	深鉢	胴部				D6	Ⅳ	山形押型文 / 条線	ナデ / 指頭痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白 / 橙 / 黒 / 灰	同一個体 (406・407)
409	401	縄文	VII d	深鉢	口縁部 ~胴部				SP1	Ⅳ	格子目押型文	刺突文 / 格子目状 押型文 / ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	浅黄橙 / 黒 / 灰白 / 透明	波状口縁
410	402	縄文	VII d	深鉢	口縁部 ~胴部				SI27/C4	Ⅳ	格子目押型文	刺突文 / 格子目状 押型文 / ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	灰白 / 黒 / 赤褐 / 透明	波状口縁
411	404	縄文	VII d	深鉢	胴部				C5/E3	Ⅳ	格子目押型文	ミガキ状のナデ	橙	黒褐	灰白 / 褐灰 / 黒	
412	405	縄文	VII d	深鉢	胴部~ 底部				E3	Ⅳ・Ⅴ	格子目押型文	ミガキ状のナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白 / 褐 / 透明 / 黒	
413	554	縄文	VII d	深鉢	胴部				E2		格子目押型文	ケズリ	にぶい黄橙	灰黄褐	透明 / 黒 / 褐 / 黄	
414	406	縄文	VII e	深鉢	口縁部				C8	Ⅳ	縄文	縄文	灰黄褐	にぶい橙	灰白 / 灰	
415	407	縄文	VII e	深鉢	口縁部				F4		縄文	縄文 / ナデ	灰黄褐	灰黄褐	灰白 / 褐	
416	408	縄文	VII e	深鉢	口縁部				D6	Ⅳ	縄文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白 / 褐灰 / 黒	
417	409	縄文	VII e	深鉢	胴部				D6	Ⅳ	縄文	ナデ	にぶい黄橙	黒褐	灰白 / 褐灰 / 黒	
418	411	縄文	VII e	土器 製品	円盤土 器				G6	Ⅳ	縄文	ナデ / 指頭痕	明赤褐	明赤褐	灰白 / 透明 / 黒	
419	412	縄文	VII f	深鉢	口縁部 ~胴部	(16.9)			G3/G4/G5	Ⅳ・Ⅴ	摺系文	摺系文 / ナデ / 指 頭痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	浅黄橙 / 灰白 / 褐	同一個体 (420)
420	413	縄文	VII f	深鉢	胴部				F4/G4	Ⅳ	摺系文	ナデ / 指頭痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	浅黄橙 / 褐 / 灰白 / 黒 / 透明	同一個体 (419)
421	415	縄文	VII f	深鉢	口縁部 ~胴部				D6/G5	Ⅳ・Ⅴ	摺系文	摺系文 / ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	灰白	
422	419	縄文	VII f	深鉢	口縁部				E7	Ⅳ	摺系文	摺系文	にぶい黄褐	にぶい黄褐	金 / 灰白	
423	421	縄文	VII f	深鉢	口縁部	(12.3)			F7	Ⅳ	摺系文	摺系文 / ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	赤 / 黒 / 浅黄橙 / 褐灰 / 黒 / 灰	
424	417	縄文	VII f	深鉢	口縁部 ~胴部				E7/F7	Ⅳ・Ⅴ	摺系文	ナデ	橙	明褐	赤 / 黒 / 透明	
425	418	縄文	VII f	深鉢	胴部				F7	Ⅳ	摺系文	ナデ	橙	褐灰	赤 / 灰白 / 黒	
426	420	縄文	VII f	深鉢	胴部				C5	Ⅳ	摺系文	ナデ	にぶい褐	にぶい黄橙	灰白	
427	410	縄文	VII f	深鉢	胴部				G7	Ⅳ	摺系文	ナデ	にぶい橙	灰黄褐	赤 / 灰白 / 黒 / 灰	
428	416	縄文	VII f	深鉢	底部		(7.8)		C6	Ⅳ	摺系文 / ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	灰白 / 黒	穿孔
429	422	縄文	VII f	壺	口縁部 ~胴部	(20.2)			D3/D4/D6/ E3/E5/E6/ F5	Ⅳ・Ⅴ	摺系文 / 竹管文	ケズリ / ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	灰白 / 浅黄橙 / 褐 / 金	同一個体 (430)
430	423	縄文	VII f	壺	胴部				D5/D6/D7/ F6	Ⅳ・Ⅴ	摺系文 / 竹管文	ケズリ / ナデ	にぶい褐	にぶい黄橙	褐 / 灰白 / 浅黄橙 / 灰 / 金	同一個体 (429)
431	424	縄文	VII g	深鉢	口縁部	(39.0)			G4	Ⅳ	変形摺系文 (連弧状)	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	浅黄橙 / 褐灰 / 黒 / 透明	同一個体 (432・433)
432	425	縄文	VII g	深鉢	胴部				G4/G6	Ⅳ・Ⅴ	変形摺系文 (連弧状)	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白 / 褐 / 褐灰 / 透明 / 赤	同一個体 (431・433)
433	426	縄文	VII g	深鉢	胴部~ 底部				G4	Ⅳ	変形摺系文 (連弧状) / 丁 寧なナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白 / 褐灰 / 赤 / 透明	同一個体 (431・432)
434	427	縄文	VII g	深鉢	胴部				G7	Ⅳ	変形摺系文 (連弧状)	ナデ	にぶい黄褐	褐灰	黒 / 透明 / 灰白	
435	428	縄文	VII g	深鉢	胴部				F5	Ⅳ	変形摺系文 (連弧状)	ナデ	にぶい橙	にぶい褐	黒 / 透明 / 灰白	
436	430	縄文	VII g	深鉢	口縁部 ~胴部				B5	Ⅳ	変形摺系文 (連弧状) / ナ デ消し	ナデ	浅黄	にぶい黄橙	灰白	
437	429	縄文	VII g	深鉢	胴部				D4/D5	Ⅳ・Ⅴ	変形摺系文 (連弧状) / ナ デ消し	ナデ	灰黄	にぶい黄橙	灰 / 灰白	
438	431	縄文	VII g	深鉢	口縁部 ~胴部	(16.1)			E7	Ⅳ	変形摺系文 (8の字状)	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	灰白 / 黒 / 透明	
439	433	縄文	VII g	深鉢	胴部				C5	Ⅳ・Ⅴ	変形摺系文 (8の字状)	ミガキ状のナデ	にぶい黄褐	灰黄褐	灰白 / 黒 / 透明 / 赤	
440	434	縄文	VII g	深鉢	胴部				D2	Ⅳ	変形摺系文 (8の字状)	ケズリ状のナデ	にぶい橙	にぶい褐	透明 / 白 / 灰白 / 赤 / 黒	
441	435	縄文	VII g	深鉢	口縁部	(17.9)			SI43/C2/G2	Ⅳ	変形摺系文 (斜格子状)	斜格子状摺系文 / ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒褐 / 灰白 / 浅黄橙 / 透 明	
442	436	縄文	VII g	深鉢	口縁部				G2	Ⅳ	変形摺系文 (斜格子状)	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白 / 黒褐 / 明赤褐 / 金	
443	437	縄文	VII g	深鉢	口縁部				C6/D7	Ⅳ	変形摺系文 (斜格子状)	斜格子状摺系文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白	波状口縁
444	438	縄文	VII g	深鉢	胴部				F7	Ⅳ	変形摺系文 (斜格子状)	粗いナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	灰白 / 黒 / 灰	
445	439	縄文	VII g	深鉢	胴部				F7	Ⅳ	変形摺系文 (斜格子状)	ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白 / 褐	
446	442	縄文	VII g	深鉢	胴部				F5	Ⅳ	変形摺系文 (レンズ状)	ケズリ / 丁寧なナ デ	橙	橙	灰白 / 透明 / 褐灰	
447	440	縄文	VII g	深鉢	胴部				SP3	Ⅳ	変形摺系文 (レンズ状)	ケズリ状のナデ	橙	褐灰	灰白 / 褐 / 灰 / 透明	
448	441	縄文	VII g	深鉢	胴部				E5/F5	Ⅳ・Ⅴ	変形摺系文 (レンズ状)	ケズリ状のナデ	灰褐	橙	灰白 / 褐 / 透明	
449	443	縄文	VII h	深鉢	胴部				C6	Ⅳ・Ⅴ	同心円状押型文	ナデ / 指頭痕	にぶい橙	にぶい橙	灰白 / 浅黄橙 / 淡橙 / 金	
450	444	縄文	VII i	深鉢	胴部				B3	Ⅳ	斜格子状押型文 / ナデ消 し	ナデ / 指頭痕	にぶい黄橙	灰黄褐	灰白 / 透明	
451	445	縄文	VII j	深鉢	口縁部				D5	Ⅳ	短枝回転文	ナデ	にぶい黄	にぶい黄褐	赤褐 / 浅黄橙 / 褐灰 / 灰 白 / 金	
452	446	縄文	VII j	深鉢	胴部				G2	Ⅳ	短枝回転文	ケズリ	灰黄	黄灰	灰白 / 黒 / 金	
453	447	縄文	VII j	深鉢	胴部~ 底部				F2	Ⅳ	短枝回転文 / ナデ	ケズリ	にぶい黄	黄灰	灰白 / 黒 / 褐 / 透明	
454	448	縄文	VII j	深鉢	胴部				C7	Ⅳ	短枝回転文	ケズリ / 工具痕	橙	橙	金 / 黒褐 / 灰白	同一個体 (455・456)
455	449	縄文	VII j	深鉢	胴部				D6	Ⅳ	短枝回転文	ケズリ / 工具痕	にぶい橙	にぶい橙	金 / 灰白 / 黒褐	同一個体 (454・456)
456	450	縄文	VII j	深鉢	胴部				SP1	Ⅳ	短枝回転文 / 楕円押型文	ケズリ / 工具痕	にぶい橙	橙	金 / 灰白	同一個体 (454・455)

第14表 土器観察表(8)

掲載 番号	実測 番号	種別	分類	器種	部位	法量 (cm)			出土位置		文様・調整				色調		胎土	備考
						口径	底径	器高	遺構/Gr.	層位	外面		内面	外面	内面			
											外面	内面						
457	456	縄文	Ⅷa	深鉢	口縁部 ～胴部	(24.1)			S120/B5	Ⅳ・Ⅴ	山形押型文	ナデ / 指頭痕	浅黄橙	にぶい黄橙	灰 / 褐 / 浅黄橙 / 黒	同一個体 (458)		
458	457	縄文	Ⅷa	深鉢	胴部				B5	Ⅳ	山形押型文	ナデ / 指頭痕	浅黄橙	浅黄橙	灰 / 褐 / 黒	同一個体 (457)		
459	453	縄文	Ⅷa	深鉢	胴部				C6/C7/D5/ D6/E5/E6	Ⅳ・Ⅴ	変形捺糸文 (斜格子状)	丁寧なナデ	明赤褐	にぶい褐	赤褐 / 灰白 / 金	同一個体 (460)		
460	454	縄文	Ⅷa	深鉢	胴部				E6	Ⅴ	変形捺糸文 (斜格子状)	丁寧なナデ	にぶい赤褐	灰褐	赤褐 / 灰白 / 金	同一個体 (459)		
461	455	縄文	Ⅷa	深鉢	胴部				D6/E6	Ⅳ	変形捺糸文 (斜格子状)	ナデ	にぶい赤褐	灰褐	赤褐 / 白 / 灰白 / 金			
462	522	縄文	Ⅷa	深鉢	胴部～ 底部		(9.9)		C6	Ⅳ・Ⅴ	変形捺糸文 (斜格子状) / ナデ	ナデ / 指頭痕	にぶい褐	にぶい褐	灰白 / 黒褐 / 赤褐 / 金			
463	458	縄文	Ⅷb	深鉢	口縁部 ～胴部	(19.0)			D2	Ⅴ	刻目 / 山形押型文	山形押型文 / ナデ / 指頭痕	浅黄橙	にぶい黄橙	浅黄橙 / 灰白 / 褐 / 黒 / 透明	同一個体 (463~466)		
464	459	縄文	Ⅷb	深鉢	口縁部	(19.0)			D2	Ⅳ・Ⅴ	刻目 / 山形押型文	山形押型文 / ナデ	浅黄橙	にぶい橙	浅黄橙 / 灰白 / 黒 / 透明	同一個体 (463~466)		
465	461	縄文	Ⅷb	深鉢	胴部				D2	Ⅳ・Ⅴ	山形押型文 / 刻目突帯	ナデ / 指頭痕	浅黄橙	にぶい黄橙	灰白 / 浅黄橙 / 赤褐 / 黒 / 透明	同一個体 (463~466)		
466	460	縄文	Ⅷb	深鉢	胴部				D2	Ⅳ・Ⅴ	山形押型文 / 刻目突帯	ナデ / 指頭痕	浅黄橙	にぶい黄橙	灰白 / 浅黄橙 / 褐 / 黒 / 透明	同一個体 (463~466)		
467	462	縄文	Ⅷb	深鉢	口縁部				C4	Ⅳ	山形押型文	ナデ / 指頭痕	黄灰	浅黄	灰白 / 褐 / 褐灰 / 透明	同一個体 (468)		
468	463	縄文	Ⅷb	深鉢	胴部				C6	Ⅴ	山形押型文 / 刻目突帯	ナデ / 指頭痕	褐灰	浅黄	灰白 / 灰黄褐 / 透明	同一個体 (467)		
469	464	縄文	Ⅷc	深鉢	口縁部 ～胴部	(22.3)			SJ1/C2	Ⅳ	刻目突帯 / 沈線文 / 山形 押型文	ナデ / 指頭痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白			
470	466	縄文	Ⅷc	深鉢	胴部				C2/E3	Ⅳ・Ⅴ	沈線文 / 刻目突帯 / 山形 押型文	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	黒 / 赤 / 灰白 / 透明			
471	467	縄文	Ⅷc	深鉢	胴部				C4	Ⅴ	沈線文 / 刻目突帯 / 捺糸 文	ナデ / 指頭痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黄褐 / 灰白 / 褐灰 / 黒 / 浅黄橙 / 透明			
472	468	縄文	Ⅷc	深鉢	口縁部 ～胴部	(20.4)			SC23/C6	Ⅳ	刻目突帯 / 捺糸文 / 沈線 文 / 指頭痕	ナデ / 工具痕 / 指 頭痕	にぶい橙	にぶい橙	灰白 / 赤褐 / 黒 / 透明			
473	491	縄文	Ⅷc	深鉢	口縁部 ～胴部	(27.2)			SC23/C6	Ⅳ	刻目突帯 / 沈線文 / 山 形押型文	ナデ / 工具痕 / 指 頭痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐灰 / 灰白 / 赤褐 / 浅黄 橙 / 黒 / 透明			
474	470	縄文	Ⅷc	深鉢	口縁部 ～胴部				B2/C2	Ⅳ	貼付突帯 / 刺突文 / 沈線 文	貼付突帯 / 刺突文 / 沈線 文 / ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	黒 / 灰白 / 透明 / 褐			
475	471	縄文	Ⅷc	深鉢	口縁部 ～胴部				B3	Ⅳ	貼付突帯 / 刺突文 / 沈線 文	貼付突帯 / 刺突文 / 沈線 文 / ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐灰 / 灰白 / 黒			
476	472	縄文	Ⅷc	深鉢	胴部				B2	Ⅳ	山形押型文 / 沈線文	ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙	褐灰 / 黒 / 灰白 / 赤			
477	473	縄文	Ⅷc	深鉢	胴部				B2/C4/D3	Ⅳ・Ⅴ	山形押型文 / 沈線文 / 貼 付突帯 / 刺突文	ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	赤 / 褐灰 / 浅黄橙 / 黒 / 透明			
478	474	縄文	Ⅷc	深鉢	胴部				B2	Ⅳ	山形押型文 / 沈線文 / 貼 付突帯 / 刺突文	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤 / 褐灰 / 黒 / 透明			
479	475	縄文	Ⅷc	深鉢	胴部				B2/B3	Ⅳ・Ⅴ	山形押型文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	赤 / 灰白 / 黒			
480	476	縄文	Ⅷc	深鉢	胴部				B2	Ⅳ	山形押型文 / 沈線文 / 刻 目突帯	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	灰白 / 赤 / 黒			
481	469	縄文	Ⅷc	深鉢	口縁部 ～胴部	(16.3)			SK2/SP3/ C2/D3/D4/ E2/E3/E4	Ⅳ・Ⅴ	沈線文 / 刻目突帯 / 捺糸 文 / ナデ消し	ナデ	橙	橙	赤 / 灰褐 / 灰白	鋸歯状口縁		
482	477	縄文	Ⅷd	深鉢	胴部～ 底部		(7.1)		SC17/S14/ C5	Ⅳ・Ⅴ	縄文 / 刻目突帯 / 瘤状突 起	ナデ / 工具痕 / 指 頭痕	にぶい橙	にぶい褐	赤褐 / 灰 / 淡黄 / 灰白 / 金 / 黒			
483	508	縄文	Ⅷ	深鉢	口縁部 ～胴部				C5/D5	Ⅳ	沈線文 / 刻目突帯 / 竹管 文?	ナデ	浅黄	灰黄	透明 / 灰白 / 黒褐			
484	486	縄文	Ⅷ	深鉢	口縁部 ～胴部				E2	Ⅳ	刻目 / 山形押型文? / 沈 線文	ナデ	灰黄褐	灰黄褐	灰白 / 透明			
485	487	縄文	Ⅷ	深鉢	口縁部				D6	Ⅳ	刻目 / 沈線文	ナデ	灰黄褐	灰黄褐	透明 / 灰白			
486	483	縄文	Ⅷ	深鉢	口縁部				B2	Ⅳ	刻目 / 沈線文	ナデ	浅黄	浅黄	黄灰 / 黒 / 灰	鋸歯状口縁		
487	484	縄文	Ⅷ	深鉢	口縁部				D6	Ⅴ	刻目 / 沈線文	ナデ	褐灰	灰黄褐	灰黄褐 / 褐 / 灰白 / 黒			
488	569	縄文	Ⅷ	深鉢	口縁部				C2	Ⅳ	刻目 / 沈線文	山形押型文 / ナデ	褐灰	褐灰	灰白 / 褐灰 / 灰白 / 透明			
489	488	縄文	Ⅷ	深鉢	口縁部				D6	Ⅳ	刻目 / 沈線文	山形押型文 / ナデ	灰白	灰白	灰白 / 透明			
490	560	縄文	Ⅷ	深鉢	口縁部				SC4/E3	Ⅳ	刻目 / 沈線文	沈線文 / ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白 / 褐 / 透明			
491	489	縄文	Ⅷ	深鉢	口縁部				D3/F6	Ⅳ・Ⅴ	刻目 / 沈線文	沈線文 / ナデ	浅黄橙	浅黄橙	灰白 / 褐 / 透明			
492	482	縄文	Ⅷ	深鉢	口縁部				C3	Ⅳ	刻目 / 刻目突帯 / 沈線 文	ナデ	灰褐	灰褐	灰白 / 赤 / 透明	鋸歯状口縁		
493	485	縄文	Ⅷ	深鉢	口縁部				C2	Ⅳ	刻目 / 刻目突帯 / 山形押 型文	山形押型文 / ナデ	灰白	灰黄	灰白 / 黒褐 / 透明			
494	567	縄文	Ⅷ	深鉢	口縁部				D4	Ⅳ	刻目 / 刻目突帯	ナデ	にぶい褐	にぶい橙	透明 / 黒 / 明赤褐 / 白			
495	480	縄文	Ⅷ	深鉢	口縁部				D5	Ⅳ	刻目突帯 / ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	褐灰 / 灰白 / 赤	波状口縁		
496	465	縄文	Ⅷ	深鉢	口縁部				B5	Ⅳ	刻目突帯 / 刺突文 / 山形 押型文	ナデ / 指頭痕	にぶい橙	灰黄褐	黒 / 赤 / 灰白 / 透明			
497	565	縄文	Ⅷ	深鉢	口縁部				F5	Ⅳ	刺突文 / 刻目突帯	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	金 / 灰白 / 黒褐 / 赤褐			
498	481	縄文	Ⅷ	深鉢	口縁部				E3	Ⅴ	刻目 / 刻目突帯 / 沈線 文	ナデ	褐灰	褐灰	灰白 / 褐 / 透明			
499	492	縄文	Ⅷ	深鉢	胴部				D2	Ⅳ	捺糸文 / 刻目突帯	ナデ	にぶい黄橙	にぶい褐	黒 / 浅黄橙 / 赤褐 / 透明			
500	501	縄文	Ⅷ	深鉢	胴部				D5	Ⅳ	捺糸文? / 刻目突帯	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	灰白 / 金 / 透明 / 黒			
501	493	縄文	Ⅷ	深鉢	胴部				C2	Ⅳ	縄文 / 刻目突帯 / ナデ	ナデ / 工具痕	にぶい橙	にぶい黄橙	灰白 / 褐			
502	494	縄文	Ⅷ	深鉢	胴部				E3	Ⅳ	縄文 / 刻目突帯	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	褐灰 / 赤 / 黒 / 透明			
503	495	縄文	Ⅷ	深鉢	胴部				C5	Ⅳ	山形押型文 / 刻目突帯 / 刺突文	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	黒褐 / 透明			
504	498	縄文	Ⅷ	深鉢	胴部				D3/E3	Ⅴ	山形押型文 / 突帯 / 刺突 文 / 沈線文	ナデ / 指頭痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白 / 透明 / 黒			
505	499	縄文	Ⅷ	深鉢	胴部				D3	Ⅳ・Ⅴ	山形押型文 / 突帯 / 刺突 文 / 沈線文	ナデ / 工具痕 / 指 頭痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黄橙 / 灰白 / 透明			
506	496	縄文	Ⅷ	深鉢	胴部				E4	Ⅴ	沈線文 / 山形押型文	ナデ	浅黄橙	灰黄褐	黄橙 / 灰白 / 橙			
507	500	縄文	Ⅷ	深鉢	胴部				D5	Ⅳ・Ⅴ	山形押型文 / 沈線文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白			

第 15 表 土器観察表 (9)

掲載 番号	実測 番号	種別	分類	器種	部位	法量 (cm)			出土位置		文様・調整		色調		胎土	備考
						口径	底径	器高	遺構/Gr.	層位	外面	内面	外面	内面		
508	516	縄文	Ⅶ	深鉢	胴部				C2	Ⅲ	山形押型文	ナデ	にぶい黄	灰黄	金 / 黒 / 浅黄	
509	517	縄文	Ⅶ	深鉢	胴部				D4/D5	Ⅲ	山形押型文	ナデ / 指頭痕	にぶい黄	にぶい黄	灰白 / 黒 / 灰	
510	497	縄文	Ⅶ	深鉢	胴部				D3	Ⅲ	沈線文 / 刻目突帯	ナデ / 指頭痕	にぶい黄	にぶい黄	浅黄 / 赤褐 / 褐灰	
511	502	縄文	Ⅶ	深鉢	胴部				C5/C6	Ⅲ	突帯 / 刺突文 / 沈線文	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	灰白	
512	503	縄文	Ⅶ	深鉢	胴部				D5/E6	Ⅲ	沈線文 / 刻目突帯	ナデ	にぶい赤	にぶい赤	赤 / 白 / 灰白 / 金 / 透	同一個体 (513)
513	504	縄文	Ⅶ	深鉢	胴部				E5	Ⅲ	沈線文 / 刻目突帯	ナデ	にぶい赤	灰黄	赤 / 白 / 灰白 / 金 / 透	同一個体 (512)
514	506	縄文	Ⅶ	深鉢	胴部				D3	Ⅲ	沈線文 / 突帯 / 刺突文	ナデ / 指頭痕	浅黄	浅黄	橙 / 灰白 / 透明	
515	509	縄文	Ⅶ	深鉢	胴部				SK2/D2/D3	Ⅲ・Ⅳ	沈線文 / 刻目突帯 / 刺突文	ナデ	にぶい黄	灰黄	透明 / 赤褐 / 黒 / 灰白	
516	510	縄文	Ⅶ	深鉢	胴部				F4	Ⅲ	沈線文 / 刻目突帯 / 刺突文	ナデ / 工具痕	にぶい黄	にぶい黄	明褐灰 / 灰白 / 赤褐 / 浅黄 / 透明 / 黒	
517	512	縄文	Ⅶ	深鉢	胴部				D5	Ⅲ	沈線文 / 刻目突帯	ナデ	にぶい赤	にぶい赤	赤褐 / 灰白 / 透明 / 金	同一個体 (518)
518	513	縄文	Ⅶ	深鉢	胴部				E5/F5	Ⅲ・Ⅳ	沈線文	ナデ	にぶい赤	明赤	赤褐 / 金 / 灰白	同一個体 (517)
519	511	縄文	Ⅶ	壺	頸部				C3	Ⅲ	沈線文 / 突帯 / 竹管文	ナデ / 指頭痕	浅黄	にぶい黄	灰白 / 褐 / 褐灰	
520	505	縄文	Ⅶ	深鉢	胴部				C4	Ⅲ	沈線文 / 突帯	ナデ / 指頭痕	にぶい黄	にぶい黄	赤褐 / 灰白 / 灰 / 透明 / 黒	
521	507	縄文	Ⅶ	深鉢	胴部				C5/D3/E3	Ⅲ・Ⅳ	沈線文 / 突帯	ナデ / 指頭痕	にぶい黄	にぶい黄	黒褐 / 灰白 / 褐 / 黒 / 透明	
522	518	縄文	Ⅶ	深鉢	胴部				C4	Ⅲ	沈線文	ナデ / 指頭痕	にぶい黄	にぶい赤	赤褐 / 浅黄 / 褐灰 / 透明 / 黒	
523	519	縄文	Ⅶ	深鉢	底部		(9.0)		B3	Ⅲ	ナデ	ナデ / 指頭痕	にぶい黄	にぶい黄	灰白 / 透明	
524	523	縄文	Ⅶ	深鉢	底部		(6.0)		E5	Ⅲ	ナデ	ナデ	にぶい黄	灰白	赤 / 黄灰 / 透明	
525	524	縄文	Ⅶ	深鉢	底部		(6.5)		C3	Ⅲ	ナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	赤 / 灰黄 / 褐灰 / 黒 / 透明	
526	525	縄文	Ⅶ	深鉢	底部		(7.5)		B6	Ⅲ	ナデ / ケズリ状のナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	灰白	
527	526	縄文	Ⅶ	深鉢	底部		(8.7)		F4	Ⅲ	ナデ / 工具痕	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	灰白 / 灰	
528	527	縄文	Ⅶ	深鉢	底部		(12.0)		S198	Ⅲ	ナデ	ナデ	浅黄	にぶい黄	灰黄 / 黒 / 透明	
529	528	縄文	Ⅶ	深鉢	底部		(10.0)		C4	Ⅲ	ナデ	ナデ	にぶい黄	灰黄	赤褐 / 灰褐 / 灰白 / 灰 / 透明	
530	530	縄文	Ⅶ	深鉢	底部				E5	Ⅲ	ミガキ状のナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	灰白 / 透明 / 黒	
531	531	縄文	Ⅸ	深鉢	口縁部				C4	Ⅲ	縄文 / 貼付突帯	縄文 / 丁寧なナデ	明赤	橙	褐 / 灰白 / 透明	波状口縁
532	537	縄文	Ⅸ	深鉢	口縁部				SJ1	Ⅲ	縄文 / 貼付突帯 / 刻目	ナデ	にぶい黄	橙	灰白 / 赤褐 / 透明 / 黒	波状口縁
533	533	縄文	Ⅸ	深鉢	胴部				C5/D5	Ⅲ・Ⅳ	縄文 / 貼付突帯	ナデ / 指頭痕	にぶい赤	明赤	灰白 / 褐 / 黒 / 透明	
534	534	縄文	Ⅸ	深鉢	胴部				D4/D5	Ⅲ	縄文 / 貼付突帯	ナデ	明赤	明赤	褐 / 黒 / 透明 / 灰白	
535	535	縄文	Ⅸ	深鉢	胴部				C5	Ⅲ	縄文 / 貼付突帯	ナデ / 指頭痕	にぶい赤	明赤	褐 / 透明 / 黒	
536	566	縄文	Ⅸ	深鉢	胴部				C7	Ⅲ	縄文 / 貼付突帯	ナデ	明赤	にぶい黄	橙 / 灰白 / 黒	
537	536	縄文	Ⅸ	深鉢	胴部				D5	Ⅲ	貼付突帯	ナデ	赤褐	にぶい赤	赤 / 灰白 / 透明 / 黒	
538	532	縄文	Ⅸ	深鉢	胴部				SC4/B2	Ⅲ	縄文 / 貼付突帯	ナデ / 指頭痕	明赤	にぶい黄	褐 / 灰白 / 黒	
539	541	縄文	Ⅸ	深鉢	胴部				D4	Ⅲ	貼付突帯	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	透明 / 黒 / 灰白 / 黒褐	
540	538	縄文	Ⅸ	深鉢	口縁部				S14/C5	Ⅲ	刻目突帯 / 刺突文 / 縄文	ナデ	灰黄	灰黄	黒 / 赤 / 灰白 / 透明	
541	539	縄文	Ⅸ	深鉢	胴部				C5	Ⅲ	突帯 / 刺突文 / 縄文	丁寧なナデ	にぶい黄	にぶい黄	赤 / 黒 / 灰白 / 透明 / 浅黄	
542	540	縄文	Ⅸ	深鉢	胴部				D6	Ⅲ	突帯 / 刺突文	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	褐 / 灰白 / 透明 / 金 / 黒	
543	561	縄文	X	深鉢	口縁部				G7	Ⅲ	ナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	黒 / 灰白 / 浅黄 / 透明	穿孔
544	543	縄文	X	深鉢	口縁部				G3	Ⅲ	ナデ	ナデ	橙	明赤	褐 / 黒褐 / 灰褐 / 黒 / 透明	
545	544	縄文	X	深鉢	口縁部				G5	Ⅲ	ナデ	ミガキ状のナデ	にぶい黄	にぶい黄	褐灰 / 灰白	
546	542	縄文	X	深鉢	口縁部				G2	Ⅲ	ナデ	ナデ	にぶい黄	褐灰	灰褐 / 褐灰 / 透明	
547	547	縄文	X	深鉢	口縁部				G5	Ⅲ	ナデ	丁寧なナデ	灰黄	灰黄	透明 / 灰白 / 褐	
548	545	縄文	X	深鉢	口縁部				D3	Ⅲ	ナデ	ナデ / 指頭痕	淡黄	浅黄	黄 / 褐灰 / 浅黄	
549	546	縄文	X	深鉢	口縁部	(13.6)			H3	Ⅲ	ナデ	ナデ / 指頭痕	にぶい黄	にぶい黄	浅黄 / 灰褐 / 褐 / 黒	
550	548	縄文	X	深鉢	口縁部				S197	Ⅲ	ナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	黒 / 灰白 / 透明	
551	451	縄文	X	深鉢	口縁部	(13.4)			D3	Ⅲ	ナデ	ナデ / ケズリ	灰黄	褐灰	金 / 灰白	
552	452	縄文	X	深鉢	口縁部				D2	Ⅲ	刺突文	刺突文 / ナデ	にぶい赤	灰褐	灰 / 灰白 / 黄	
553	550	縄文	X	深鉢	胴部				G2	Ⅲ	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄	灰黄	赤褐 / 褐 / 灰白 / 黒 / 透明	未貫通の穿孔
554	551	縄文	X	深鉢	胴部				C2	Ⅲ	貝殻条痕文 / 貝殻刺突文	丁寧なナデ	灰黄	灰褐	金 / 灰 / 灰白 / 黒	
555	552	縄文	X	深鉢	胴部				C3	Ⅲ	短沈線 / 条線	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	金 / 浅黄	
556	553	縄文	X	深鉢	胴部				G6	Ⅲ	細条線	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	金 / 灰白 / 明褐	
557	555	縄文	X	深鉢	胴部				B7	Ⅲ	貝殻条痕文	(不明)	橙	灰黄	橙 / 浅黄 / 灰白	
558	556	縄文	X	深鉢	胴部				B7	Ⅲ	貝殻条痕文	ナデ	橙	灰褐	黒 / 橙 / 浅黄 / 透明	
559	564	縄文	X	深鉢	胴部				C3	Ⅲ	ナデ / 条線	丁寧なナデ	にぶい黄	浅黄	褐灰 / 灰白 / 浅黄 / 赤褐	
560	490	縄文	X	壺	頸部				D2	Ⅲ	ナデ	ナデ / 指頭痕	明赤	明赤	灰白 / 黒 / 透明	同一個体 (561・562)
561	514	縄文	X	壺	胴部				D2	Ⅲ	刻目突帯 / 丁寧なナデ	ナデ / 指頭痕	明赤	明赤	褐 / 灰白 / 黒 / 透明	同一個体 (560・562)
562	515	縄文	X	壺	胴部				D3	Ⅲ	刻目突帯 / 丁寧なナデ	ナデ	明赤	明赤	褐 / 黒 / 透明 / 灰白	同一個体 (560・561)

第16表 土器観察表(10)



## 2 石器

上層遺跡では、第XIV層及び第XV層掘削時または遺構内埋土から17,003点の石器が出土した。ここでは、器種ごとに報告する。また、石材分類及び石器組成表は第17・18表のとおりである。

**石材分類** 今回の調査で出土した石器のうち、主な石材の特徴や産地については下記のように分類した。石材分類については、当センター副所長（当時）の赤崎広志指導のもと、顕微鏡観察等による目視での分類を中心に行った。このうち、石鏃に関しては、試料を抽出した上で、検証確認や判別困難な分類検討のために蛍光X線分析を実施した。（赤崎2022）

**出土状況** 各器種の分布状況は第157～159図のとおりである。本遺跡の第XIV・XV層の出土石器のうち、剥片石器の大半は桑木津留産の黒曜石製であり、チャートがこれに次ぐ。礫石器の多くは砂岩製であった。桑木津留産の黒曜石のグリッド別出土重量・点数については第160図のとおりである。

石材名	主な特徴
黒曜石（桑木津留）	暗灰色～濃褐色で、ガラス質の基質で晶子や気泡がほとんど確認できないもの 透過性の高い基質と透過性の低い基質が縞状を呈するものや、混濁した基質をもち透過性の低いものもある
黒曜石（上牛鼻）	黒灰色で光沢がなく、透過性のないもの
黒曜石（日東）	多孔質で細かい気泡があり、黒色棒状の晶子を有するもの
黒曜石（針尾）	透過性がなく、灰色と暗灰色が明瞭な縞状模様をつくるもの
黒曜石（姫島）	灰白色で透過性が低く、ザクロ石の自形結晶をもつもの
黒曜石（腰岳）	透過性の高い黒色でガラス質の基質に雲状の晶子を有するもの
チャート	灰色や黒色、緑色、赤褐色等の色調を呈すガラス質な堆積岩
石英	基質が透明もしくは白色で、不純物を含むものもある
ガラス質安山岩	黒色でガラス質の基質を有する安山岩で、佐賀県多久産のものが主体
流紋岩	無斑晶や流理構造が確認される流紋岩で、灰色や黒灰色、灰褐色を呈するもの
ホルンフェルス	砂岩や頁岩等の堆積岩が熱変成を受けた変成岩
頁岩	泥質岩のうち、薄い層状に剥離するもの
砂岩	黄色系統の色調を呈し、肉眼やルーペで砂粒が確認されるもの
安山岩	灰色から白色の石基と輝石の斑晶をもつ火山岩で、霧島火山群由来と考えられるもの
溶結凝灰岩	火砕流堆積物が溶結して固結したもので、白色を呈し尾鈴山火山岩類と考えられるもの

第17表 石器石材分類表

個数 (点)	打製石鏃	磨製石鏃	石鏃未製品	尖頭器	尖頭状石器	異形石器	石匙	スクレイパー	二次加工剥片	微細剥離剥片	剥片	チップ	石核	細石刃核	原石	石斧	環状石斧	棒状石器	磨石	敲石	凹石	台石	合計	重量 (g)
黒曜石（桑木津留）	514	-	277	-	-	4	-	-	15	-	13329	1760	84	2	2	-	-	-	-	-	-	-	15987	18992.0
黒曜石（上牛鼻）	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	32	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	33	66.9
黒曜石（日東）	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11	42.5
黒曜石（針尾）	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10	11.7
黒曜石（姫島）	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1.7
黒曜石（腰岳）	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1.0
チャート	48	-	3	-	1	-	3	1	-	-	382	-	3	-	1	-	-	-	-	-	-	-	442	1197.6
石英	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	27	-	-	-	10	-	-	-	-	-	-	-	43	107.8
ガラス質安山岩	4	2	-	1	-	-	3	2	-	-	70	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	82	181.0
流紋岩	5	1	-	-	-	-	-	1	-	3	67	-	2	-	-	1	-	-	-	-	-	-	80	685.2
ホルンフェルス	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	7	1	1	-	-	-	-	11	1124.7
頁岩	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	11	-	-	-	3	4	-	-	-	2	-	-	21	1979.3
砂岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	-	-	-	-	4	-	1	124	39	24	73	272	377194.2
安山岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	1	-	-	4	2793.1
溶結凝灰岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-	-	-	5	1322.5
合計	580	4	280	1	1	5	6	5	15	3	13946	1760	89	2	16	16	1	2	132	42	24	73	17003	405701.2

第18表 遺構及び第XIV・XV層出土石器器種組成表

(1) 打製石鏃(第 161 図 563 ~ 694)

剥片を素材とし、側縁部に両面から押圧剥離を施す、小型から中型の三角形状の石器群を石鏃とした。欠損品を含めて 580 点の打製石鏃が出土し、そのうち 132 点を図化した。石材別に見ると出土した打製石鏃のうち約 88%を桑木津留産の黒曜石製が、約 8%をチャート製が占める。打製石鏃については、以下のとおり、平面形を大分類、基部の形態を中分類、脚端の形態を小分類とし、その組み合わせにより分類した。

[大分類]

- I 類 正三角形鏃
- II 類 二等辺三角形鏃
- III 類 長身鏃
- IV 類 五角形鏃
- V 類 その他

[中分類] I ~ IV 類を基部の形態により細分した

- A 類 基部が平坦で抉りがないもの
- B 類 基部の抉りが浅いもの
- C 類 基部の抉りが深いもの
- D 類 基部の抉りが極めて深いもの

[小分類] C ~ D 類を脚端の形態により細分した

- a 類 尖脚
- b 類 円脚
- c 類 方脚

【I A 類】(第 161 図 563 ~ 586)

I A 類は全体の形状が正三角形を呈し、基部の抉りがないものである。78 点出土し、そのうち 24 点を図化した。563 ~ 584 は桑木津留産の黒曜石、585・586 はチャートを素材とする。563 ~ 566 は一辺が 1 cm 程度と小型である。567・570・573 は両側縁が鋸歯状になる。586 は体部に厚みがあり、一辺が 2 cm 以上と大型である。

【I B 類】(第 161 図 587 ~ 600)

I B 類は全体の形状が正三角形を呈し、基部の抉りが浅いものである。40 点出土し、そのうち 14 点を図化した。587 ~ 595 は桑木津留産の黒曜石、596 は上牛鼻産の黒曜石、597 ~ 600 はチャートを素材とする。588 は側縁から先端にかけてやや丸みを帯びる。595 は両側縁が鋸歯状になる。599 は先端が丸みを帯びる。

【I C a 類】(第 161 図 601・602)

I C a 類は全体の形状が正三角形を呈し、基部の抉りが深く、脚部の先端が尖るものである。3 点出土し、そのうち 2 点を図化した。601・602 は桑木津留産の黒曜石を素材とする。601 は体部に厚みがあり、602 は側縁が鋸歯状になる。

【I C b 類】(第 161 図 603・604)

I C b 類は全体の形状が正三角形を呈し、基部の抉りが深く、脚部の先端が丸みを帯びるものである。

3点出土し、そのうち2点を図化した。603は桑木津留産の黒曜石、604はガラス質安山岩を素材とする。603は細かく押圧剥離が行われる。脚部の先端をわずかに欠くためやや不明確ながらI c類とした。604は先端及び右の脚部が欠損している。剥片を利用して周縁のみに押圧剥離を施している。

【I C c類】(第161図 605)

I C c類は全体の形状が正三角形を呈し、基部の挟りが深く、脚部の先端が平らなものである。出土した1点を図化した。605はチャート素材とし、両側縁は丸みを帯びる。

【II A類】(第162図 606～624)

II A類は全体の形状が二等辺三角形を呈し、基部の挟りが浅いものである。59点出土し、そのうち20点を図化した。606～620は桑木津留産の黒曜石、621・622はチャート、623は流紋岩、624は石英を素材とする。609・616は側縁が鋸歯状になる。622は側縁から先端にかけて丸みを帯び、基部がやや膨らむ。

【II B類】(第162図 625～641)

II B類は全体の形状が二等辺三角形を呈し、基部の挟りが浅いものである。60点出土し、そのうち17点を図化した。625～638は桑木津留産の黒曜石、639～641はチャートを素材とする。625は一辺が1cm未満と極めて小型で、本遺跡出土の石鏃の中で最小である。中央の断面形がレンズ状を呈するものが多いが、633・639は表面の中央部分が凸状に膨らむ。641は先端が鋭く尖り、ガジリ痕がある。

【II C a類】(第163図 642～645)

II C a類は全体の形状が二等辺三角形を呈し、基部の挟りが深く、脚部の先端が尖るものである。5点出土し、そのうち4点を図化した。642は桑木津留産の黒曜石、643・644はチャート、645はガラス質安山岩を素材とする。いずれも基部は緩い「V」字状の挟りとなる。

【II C b類】(第163図 646～649)

II C b類は全体の形状が二等辺三角形を呈し、基部の挟りが深く、脚部の先端部が丸みを帯びるものである。5点出土し、そのうち4点を図化した。646・647はチャート、648はガラス質安山岩、649は流紋岩を素材とする。646は細かい押圧剥離が行われる。647～649の調整は粗い。648は自然面をもつ。

【II C c類】(第163図 650～652)

II C c類は全体の形状が二等辺三角形を呈し、基部の挟りが深く、脚部の先端部が平らなものである。出土した3点を図化した。650・651は桑木津留産の黒曜石、652はチャートを素材とする。650・651は側縁から先端にかけて丸みを帯びる。652の基部は「U」字状の挟りとなる。

【II D a類】(第163図 653・654)

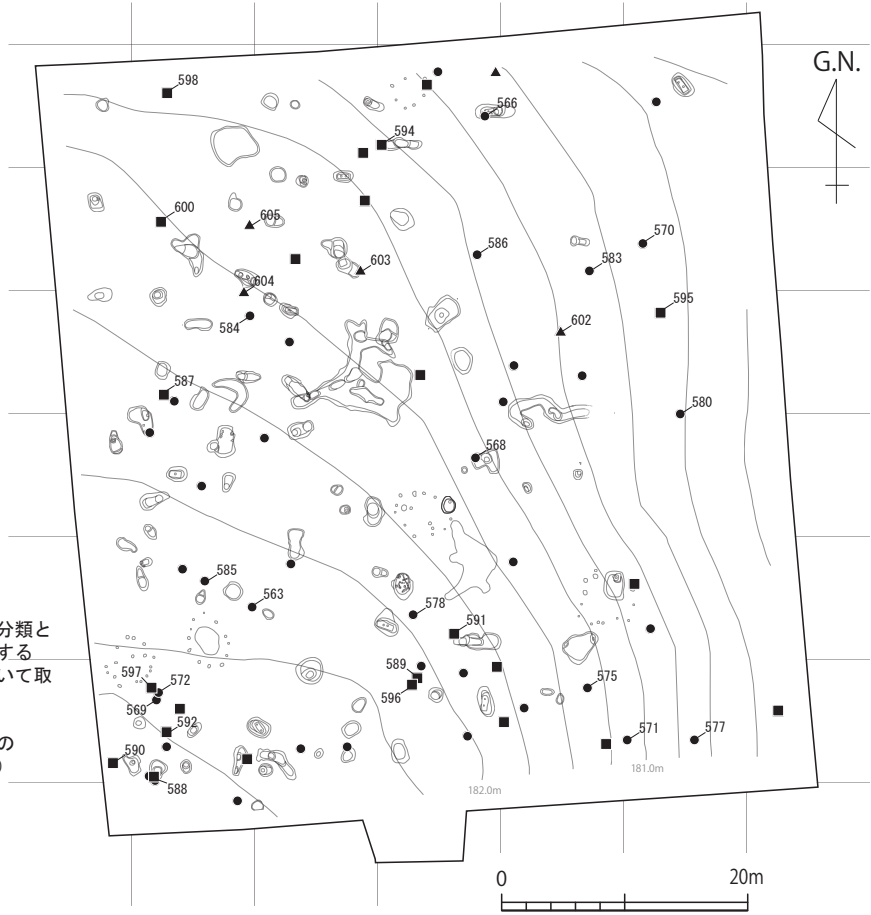
II D a類は全体の形状が二等辺三角形を呈し、基部の挟りが極めて深く、脚部の先端部が尖るものである。出土した2点を図化した。653はチャート、654は流紋岩を素材とする。654は左側の脚部のみ残存し、その脚部サイズから見て大型の石鏃の可能性はある。

【II D b類】(第163図 655～658)

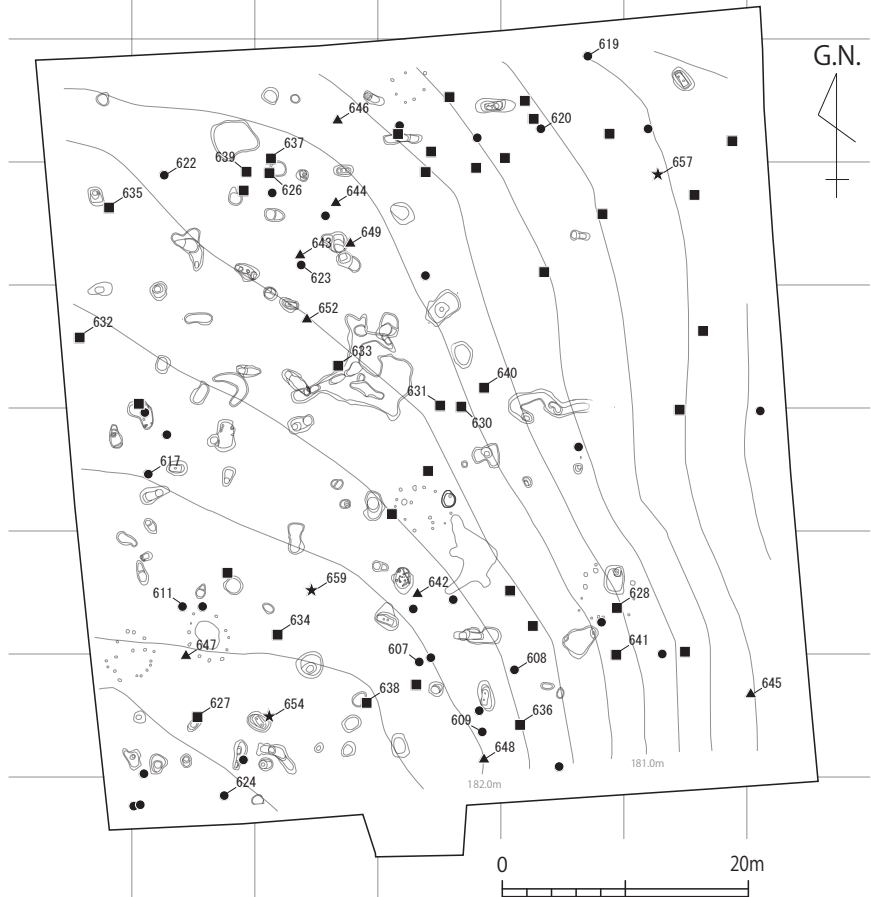
II D b類は全体の形状が二等辺三角形を呈し、基部の挟りが極めて深く、脚部の先端部が丸みを帯びるものである。6点出土し、そのうち4点を図化した。655は桑木津留産の黒曜石、656・657はチャート、658は流紋岩を素材とする。655～658の基部は「U」字状の挟りとなる。656は側縁に屈折部をもつため、IV類の可能性はある。658は右側の脚部が欠損しており、調整が粗く、先端部があまり尖っていない。

- …石鏃 I A類
- …石鏃 I B類
- ▲ …石鏃 I C類

・報告書に掲載した遺物に限らず分類と座標が分かるものについては図示する  
 ・遺構埋土及びグリッド一括において取上げた遺物は図示していない  
 ・等高線はXV層下面にて作成  
 ・遺構はXIV～XV層にて検出したもの  
 (上記はほかの石器分布図も同様)

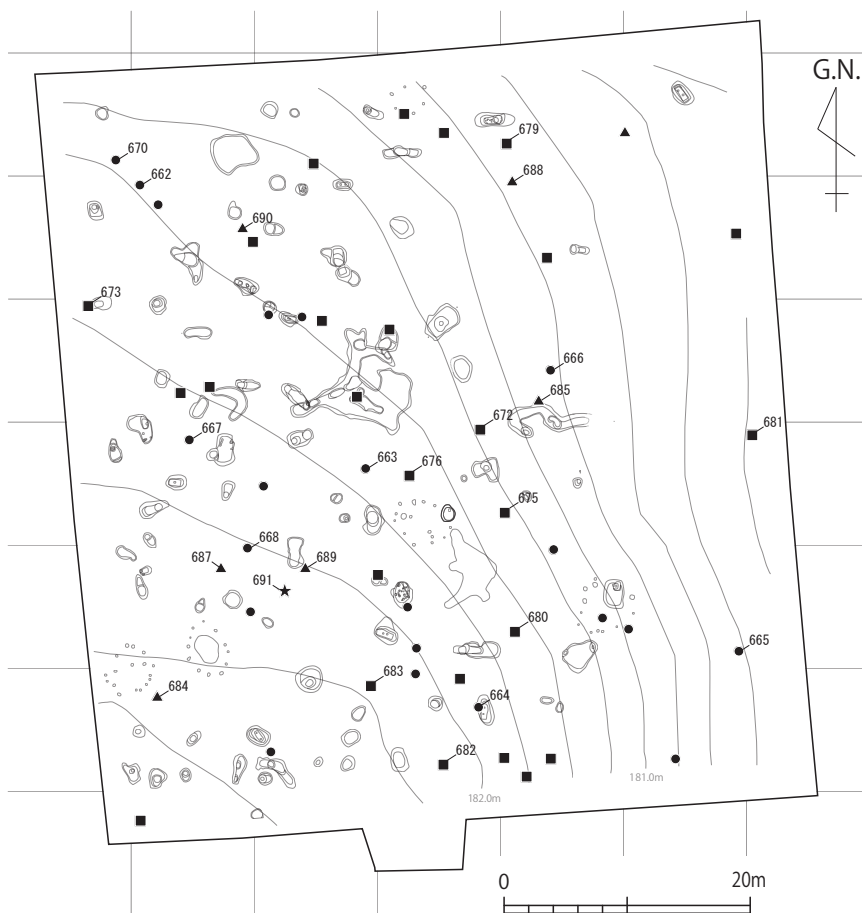


- …石鏃 II A類
- …石鏃 II B類
- ▲ …石鏃 II C類
- ★ …石鏃 II D類



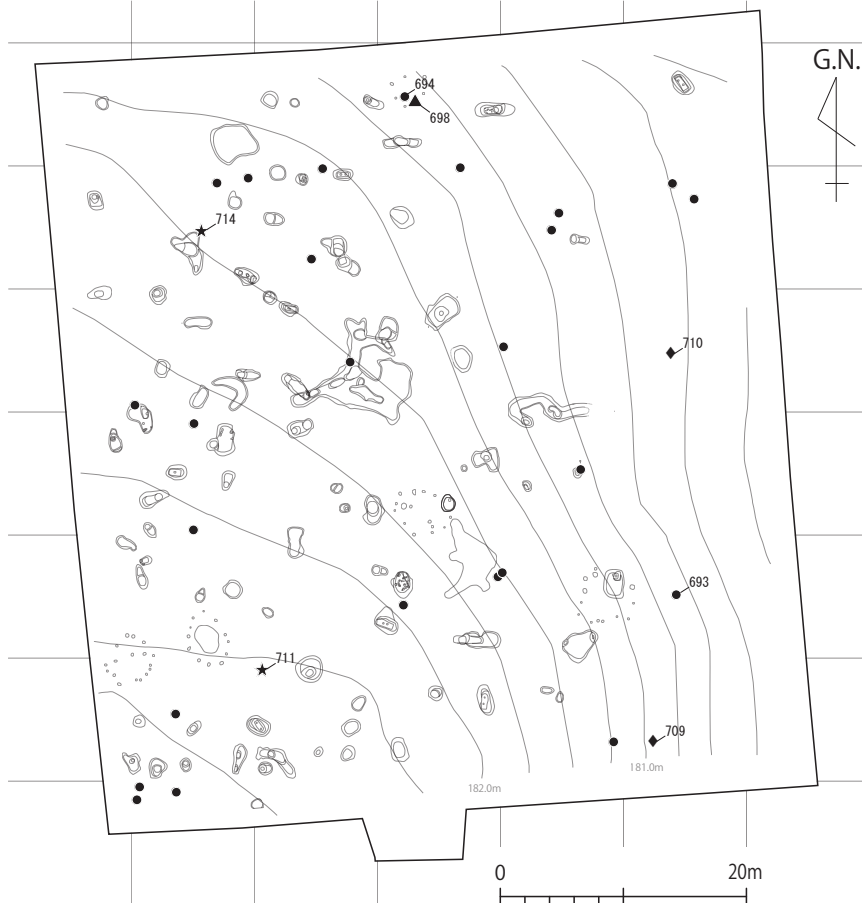
第157図 石器分布図(1)

- …石鏃ⅢA類
- …石鏃ⅢB類
- ▲ …石鏃ⅢC類
- ★ …石鏃ⅢD類



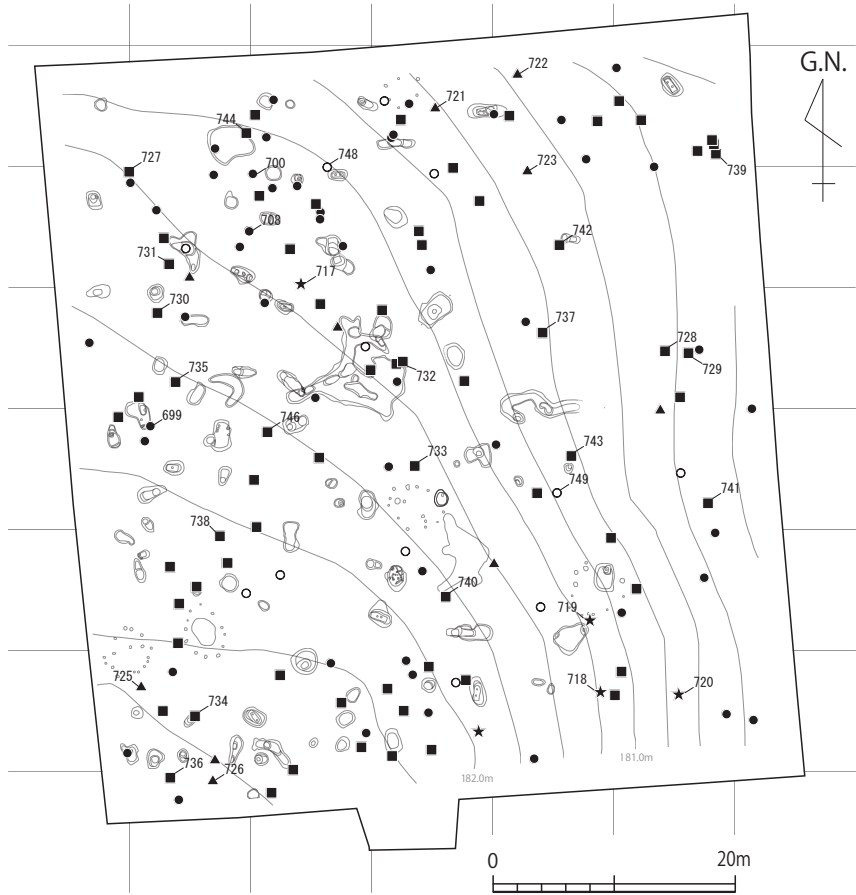
- …石鏃Ⅴ類
- ▲ …磨製石鏃
- ◆ …尖頭器/尖頭状石器
- ★ …異形石器

・石鏃Ⅳ類についてはグリッド一括にて取り上げたため図示していない。

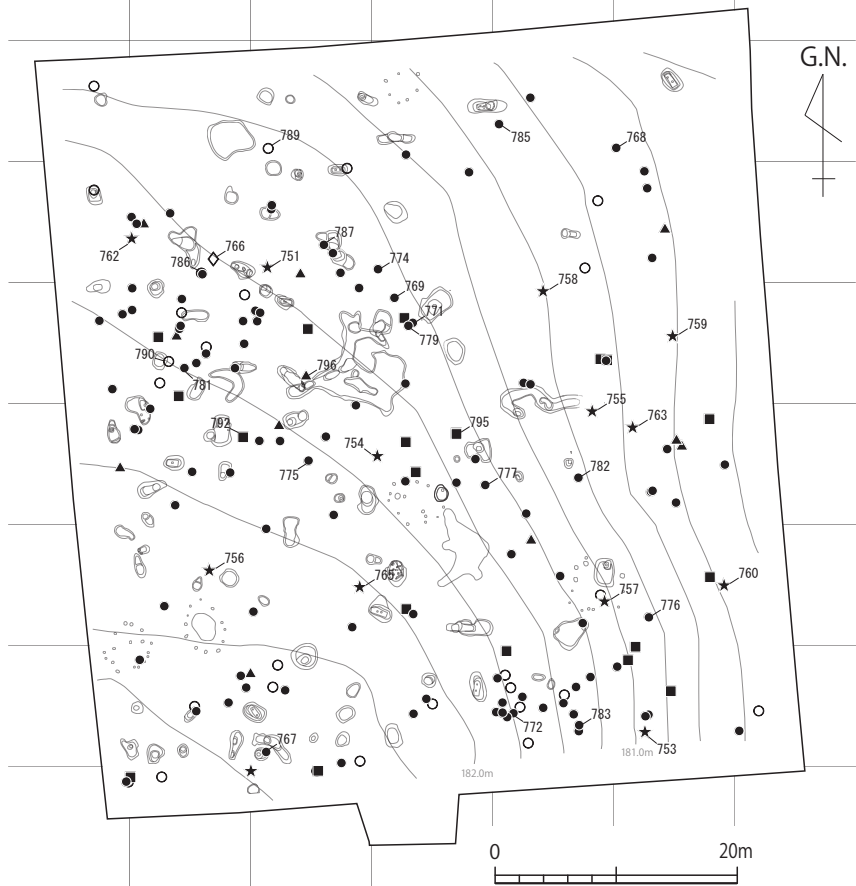


第158図 石器分布図(2)

- …石鏃未製品
- …石核・細石刃核
- ★ …石匙
- ▲ …スクレイパー  
微細剥離剥片
- …原石



- ★ …石斧・環状石斧
- ◇ …棒状石器
- …磨石
- …敲石
- …凹石
- ▲ …台石



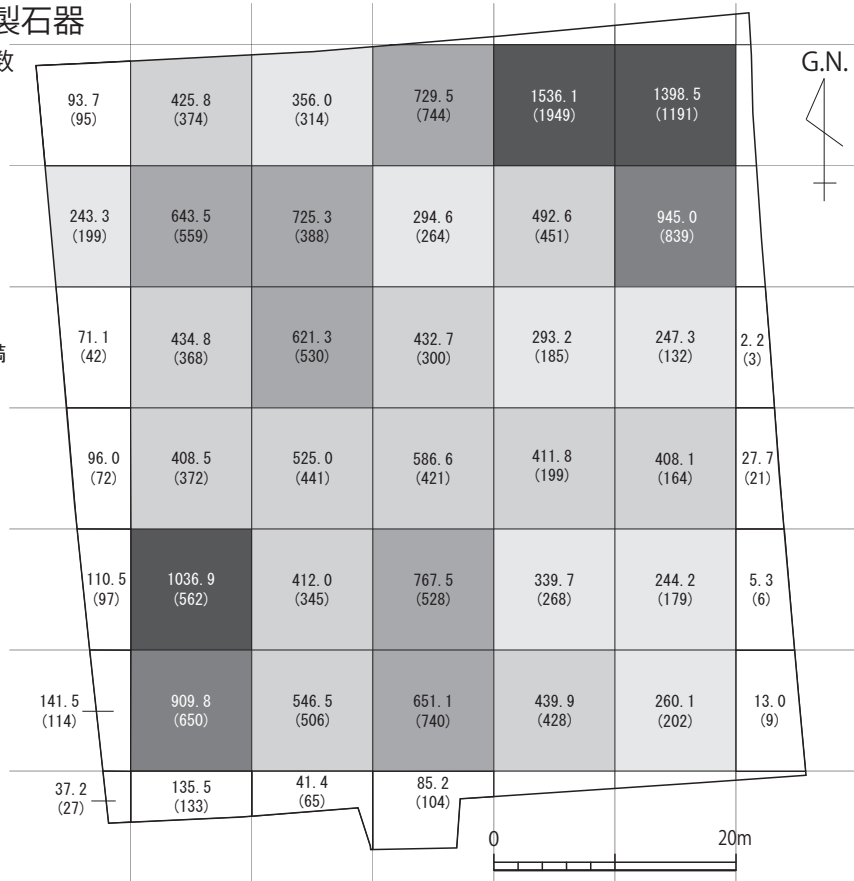
第159図 石器分布図(3)

### 桑木津留産の黒曜石製石器

グリッド別の重量及び個体数

- … 200g未満
- … 200g以上～400g未満
- … 400g以上～800g未満
- … 400g以上～800g未満
- … 800g以上～1000g未満
- … 1000g以上

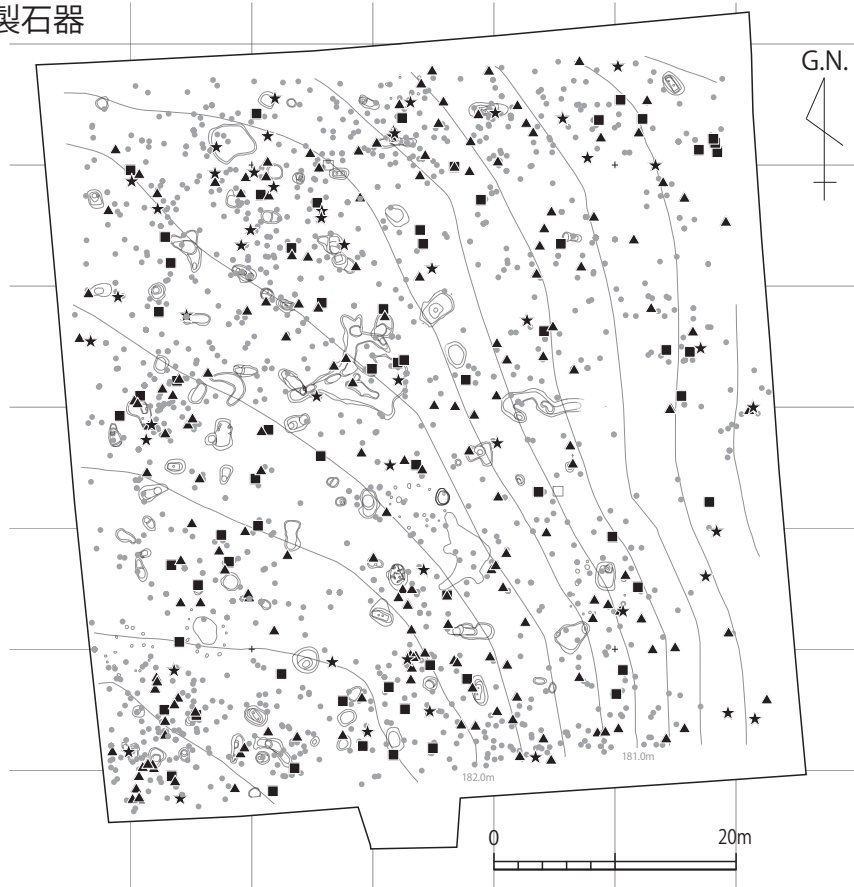
グリッド内の表記  
重量：g  
(個体数：点)



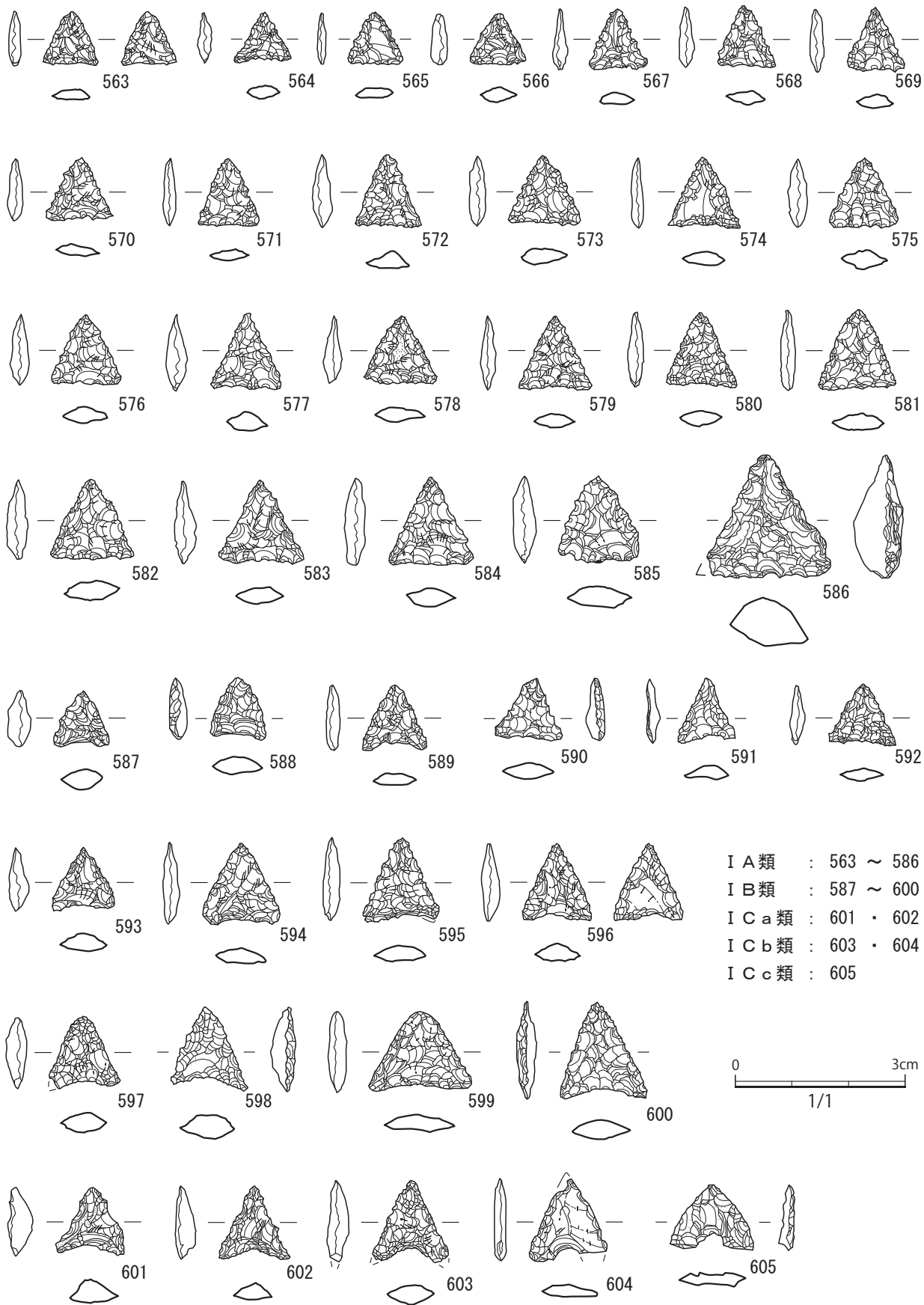
### 桑木津留産の黒曜石製石器

(出土位置が特定できるもの)

- ▲ … 石鏃(欠損品を含む)
- ★ … 石鏃未製品
- … 石核・細石刃核
- … 原石
- … 剥片

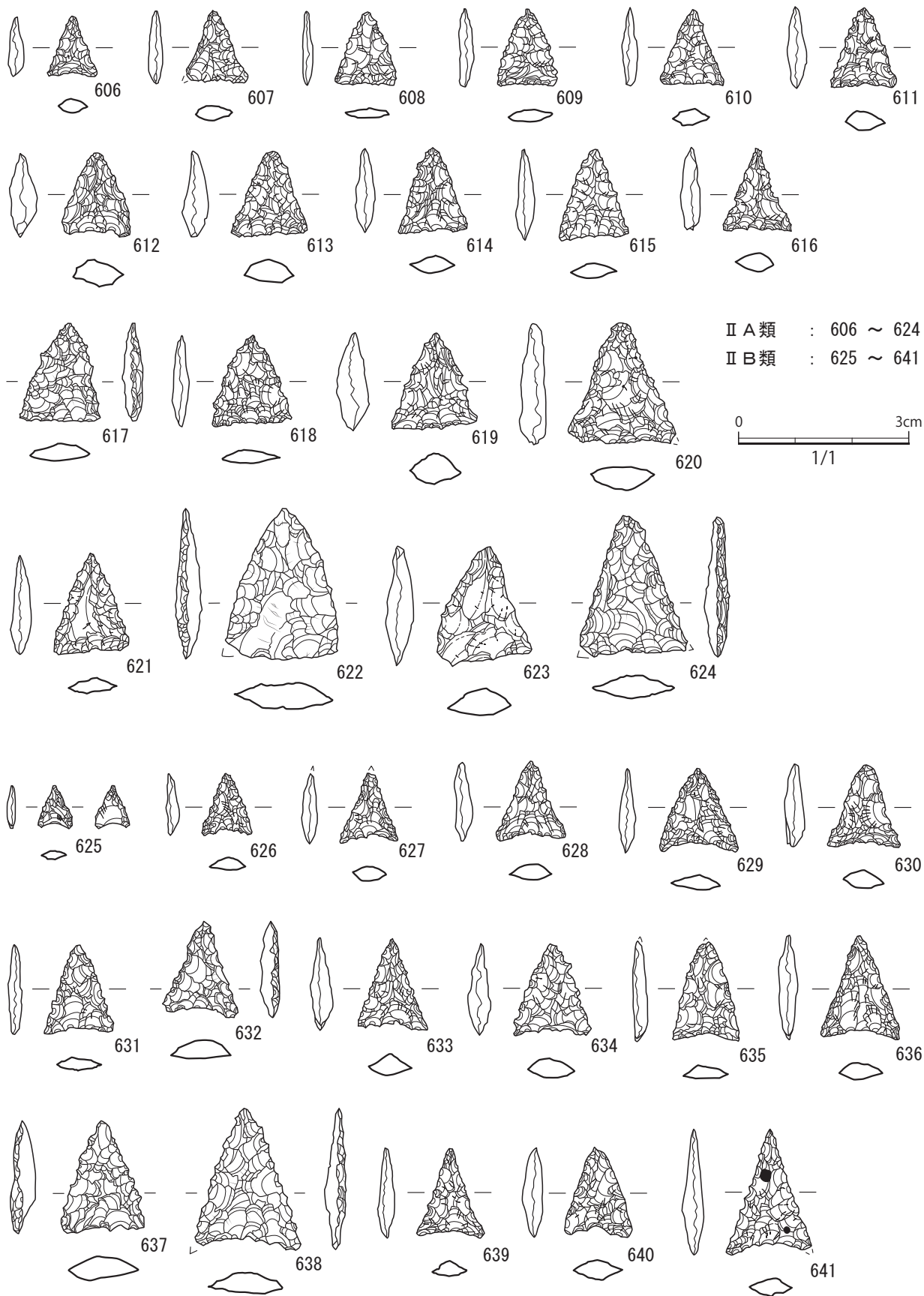


第160図 石器分布図(4)

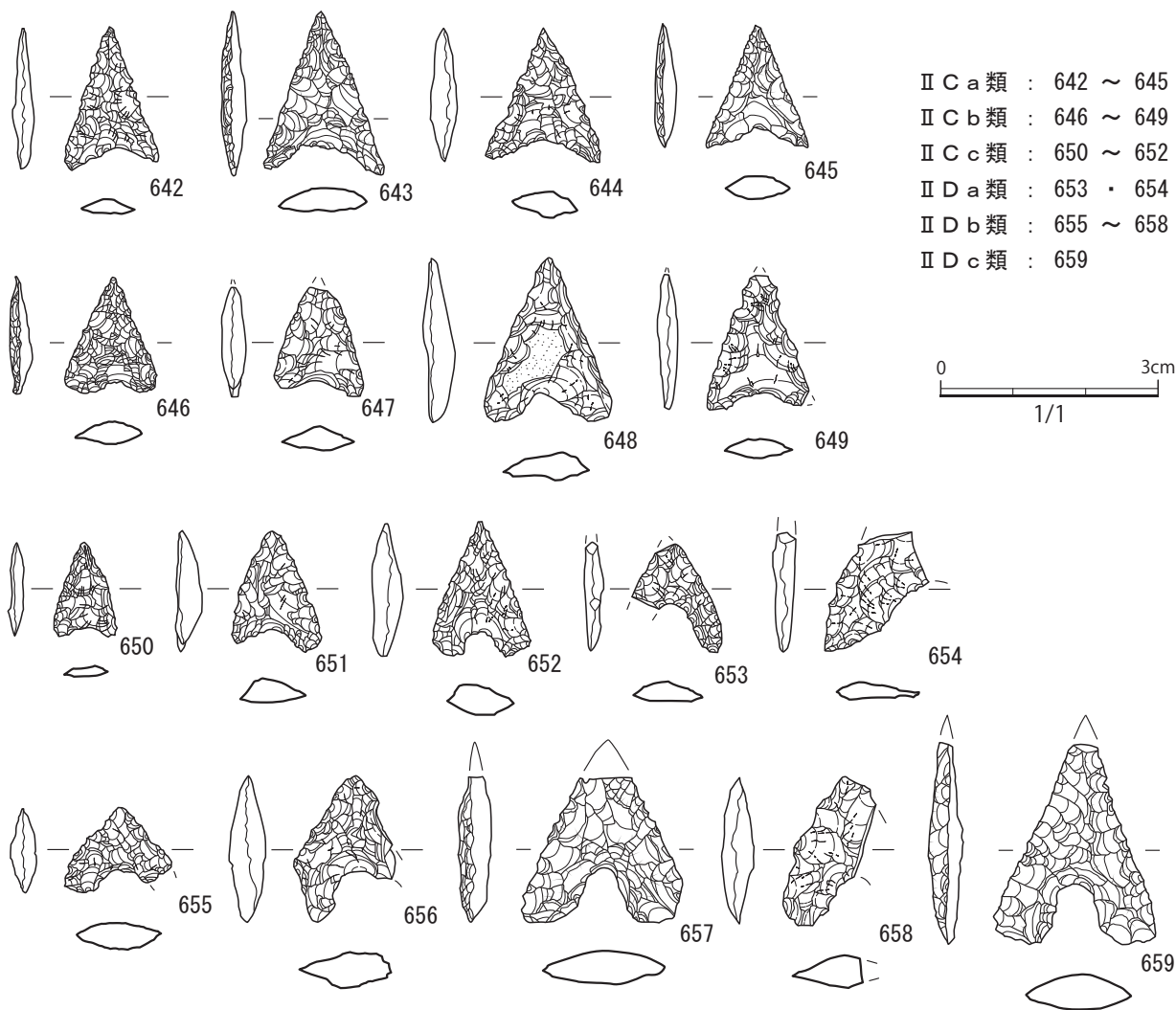


第161図 石器実測図(1)





第162图 石器实测图(2)



第163図 石器実測図(3)

【II D c類】(第163図 659)

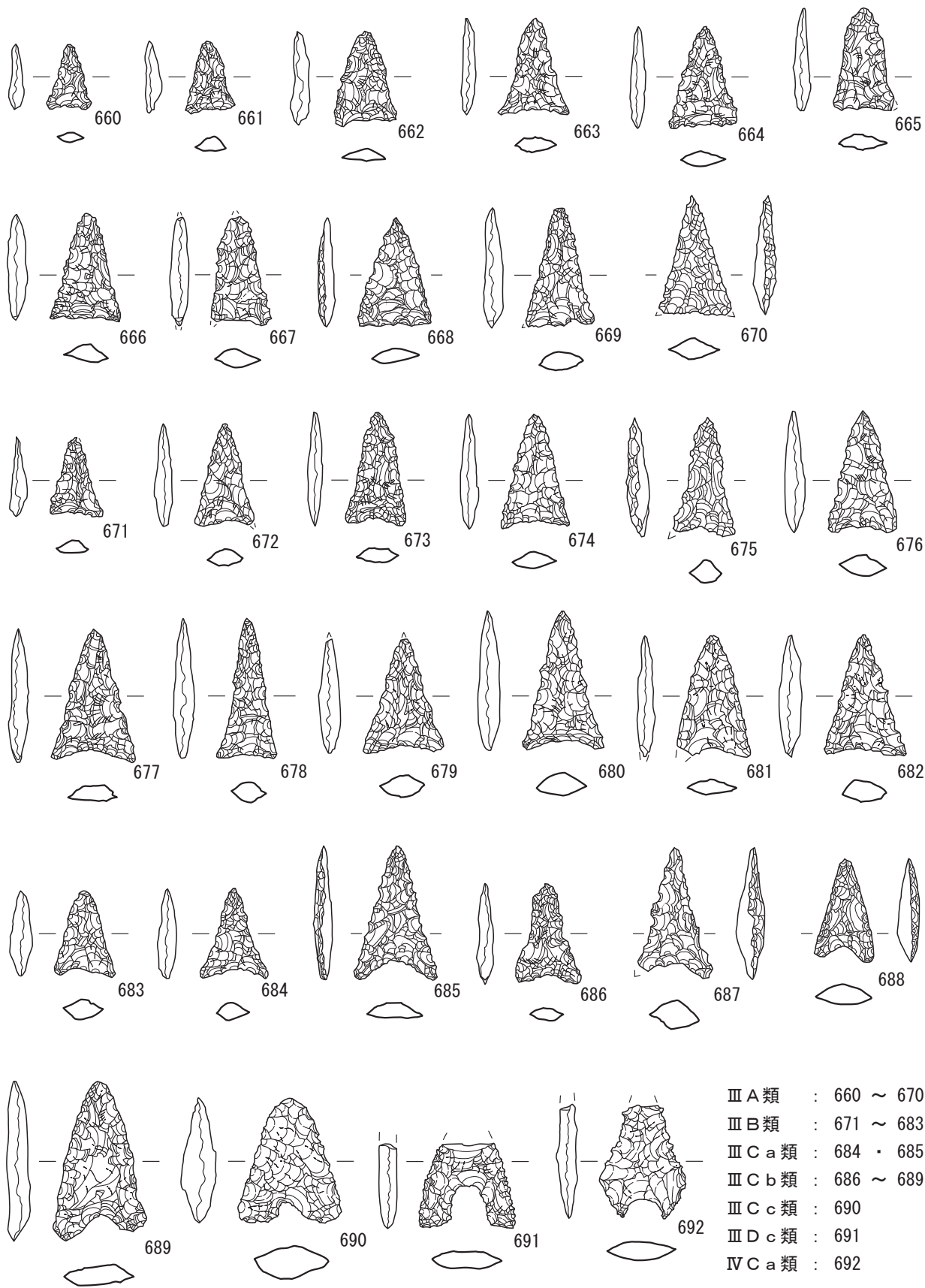
II D c類は全体の形状が二等辺三角形を呈し、基部の挟りが極めて深く、脚部の先端が平らなものである。出土した1点を図化した。659はチャートを素材とする。基部は「U」字状の挟りとなる。先端が欠損しているが、残存長のみでも側縁が3cm程度あり大型である。

【III A類】(第164図 660～670)

III A類は側縁の長さが幅の1.5倍以上ある長身鏃で、基部の挟りが浅いものである。31点出土し、そのうち11点を図化した。660～670は桑木津留産の黒曜石を素材とする。660は幅が1cm未満の小型の長身鏃である。661・662・665は先端が丸みを帯びる。

【III B類】(第164図 671～683)

III B類は側縁の長さが幅の1.5倍以上ある長身鏃で、基部の挟りが浅いものである。36点出土し、そのうち13点を図化した。671～678は桑木津留産の黒曜石、679～681はチャート、682・683は石英を素材とする。675は体部に厚みがあり、側縁に緩い屈曲をもち、脚部が外側に開く。678は側縁の長さが幅の2.5倍もあり細長い。



第164図 石器実測図(4)

**【Ⅲ C a 類】**(第 164 図 684・685)

Ⅲ C a 類は側縁の長さが幅の 1.5 倍以上ある長身鏃で、基部の抉りが深く、脚部の先端が尖るものである。3 点出土し、そのうち 2 点を図化した。684 は桑木津留産の黒曜石、685 はチャートを素材とする。684・685 の基部は緩い「U」字状の抉りとなり、685 は側縁が鋸歯状になる。

**【Ⅲ C b 類】**(第 164 図 686～689)

Ⅲ C b 類は側縁の長さが幅の 1.5 倍以上ある長身鏃で、基部の抉りが深く、脚部の先端が丸みを帯びるものである。6 点出土し、そのうち 4 点を図化した。686・687 は桑木津留産の黒曜石、688・689 はチャートを素材とする。686 は側縁に緩い屈曲をもち、脚部が外側に開く。689 の基部は緩い「V」字状の抉りとなり、側縁から先端にかけてやや丸みを帯びる。

**【Ⅲ C c 類】**(第 164 図 690)

Ⅲ C c 類は側縁の長さが幅の 1.5 倍以上ある長身鏃で、基部の抉りが深く、脚部の先端が平らなものである。出土した 1 点を図化した。690 はチャートを素材とする。先端が丸みを帯び、基部は「U」字状の浅い抉りとなる。

**【Ⅲ D c 類】**(第 164 図 691)

Ⅲ D c 類は側縁の長さが幅の 1.5 倍以上ある長身鏃で、基部の抉りが極めて深く、脚部の先端が平らなものである。出土した 1 点を図化した。691 はチャートを素材とする。細かい押圧剥離を施す。先端が欠損し、基部は「U」字状の深い抉りとなる。

**【Ⅳ C a 類】**(第 164 図 692)

Ⅳ C a 類は全体の形状が五角形を呈するもので、基部の抉りが深く、脚部の先端が尖るものである。出土した 1 点を図化した。692 はチャートを素材とする。基部は「U」字状の浅い抉りとなる。

**【V 類】**(第 165 図 693・694)

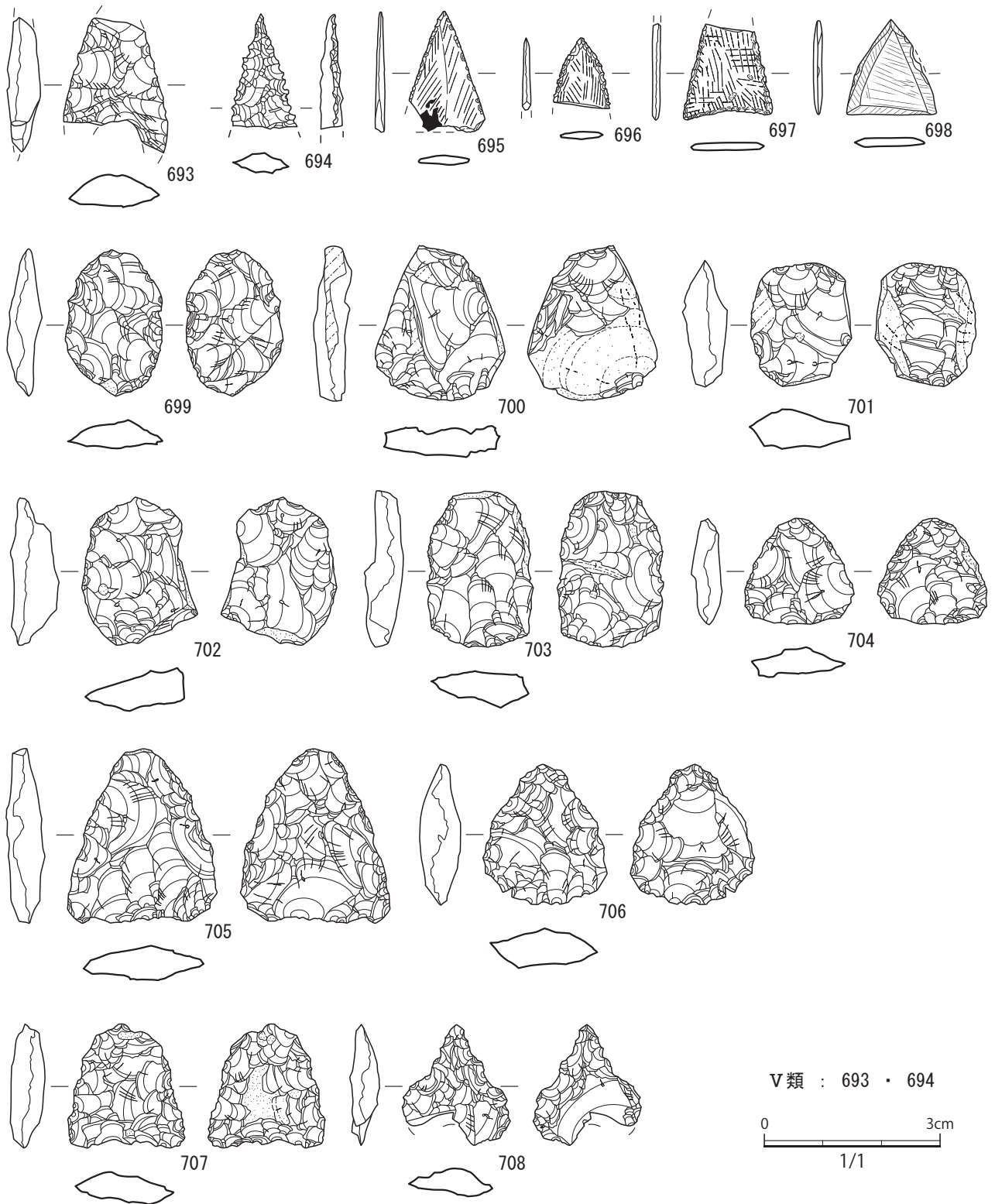
V 類は欠損により全体の形状が不明なため、I～Ⅳ類に分類できないものである。693 は姫島産の黒曜石、694 はチャートを素材とする。693 は先端及び脚部が欠損している。姫島産の黒曜石を素材とする石器はこの 1 点のみである。694 は先端側のみ残存する。側縁が鋸歯状となり、先端が鋭く尖る。

**(2) 磨製石鏃**(第 165 図 695～698)

剥片を素材とし、研磨に加えて剥離調整を施したもの(695～697)と、そのまま研磨により仕上げたもの(698)がある。出土した 4 点を図化した。695 は針尾産の黒曜石、696・697 はガラス質安山岩、698 は流紋岩を素材とする。695 は二等辺三角形を呈し、体部が極めて薄い。基部の一部が欠損している。両側縁部に細かい剥離が見られる。696 は基部が、697 は先端部が欠損しているが、残存する形状から二等辺三角形を呈するものとする。両面を研磨により薄く仕上げ、両側縁部に細かな剥離を施す。697 の基部は緩やかで浅い抉りとなる。698 は正三角形を呈し、両面は丁寧に研磨される。両側縁部から先端にかけてやや膨らみ、周縁には研磨により明確な稜をもつ。

**(3) 打製石鏃未製品**(第 165 図 699～708)

打製石鏃の未製品と考えられる資料である。280 点が出土し、そのうち 10 点を図化した。いずれも桑木津留産の黒曜石を素材とする。699～703 は楕円形もしくは長方形を呈し、体部に厚みがある。剥片面が多く、押圧剥離を施しているが、非常に粗い。704～707 は三角形を呈し、基部から側縁にかけて細かい押圧剥離を施している。708 は先端を比較的鋭く仕上げている。製作の過程で左側の脚部を欠



第165図 石器実測図(5)

損している。先端を錐部とする石錐の可能性を残す。

(4) 尖頭器 (第166図 709)

剥片を素材とし、両面に剥離調整を施し、先端部をつくり出す石器を尖頭器とした。出土した1点を図化した。709はガラス質安山岩を素材とする。断面中央は凸レンズ状を呈し、上端に向かって鋭くつ

くる。周縁には細かい剥離調整を施し、左側縁の先端の一部は鋸歯状となる。

(5) 尖頭状石器 (第 166 図 710)

剥片を素材とし、両面に剥離調整を施し、鈍い尖端部をつくり出し、基部が平らで挟りのないもの尖頭状石器とした。出土した 1 点を図化した。710 はチャートを素材とする。周縁に押圧剥離による調整を施し、尖端部をつくり出す。石鏃に比べて調整が粗く、中央部の断面形は三角形を呈する。

(6) 異形石器 (第 166 図 711～715)

二次加工により整形された石器で、石鏃とは異なり機能や用途が不明のものを異形石器とした。出土した 5 点を図化した。711～713 は桑木津留産の黒曜石、714 はチャート、715 は腰岳産の黒曜石を素材とする。腰岳産の黒曜石を素材とする石器はこの 1 点のみである。711 は左右・上下の側縁に挟りを持ち、「X」字状を呈する。上端から中央にかけての体部は厚く、下端にかけて薄くなる。下端には研磨面が認められる。712 は、右側の下端が欠損しているが、釣り針状を呈するものと考えられる。上端がやや膨らみ、左側の下端は外側に大きく開いて、丸みを帯びる。裏面には自然面が残る。713 は平面形が三角形を呈し、周縁の稜が全体的に摩滅している。714・715 はいわゆるトロトロ石器である。714 は両側縁部から先端にかけて丸みを帯び、側縁部が全体的に摩滅している。715 は正面及び裏面の中央から先端側に、稜線が丸く摩滅した箇所がいくつか見られる。また、正面中央及び裏面中央から先端側にかけて、傷が多くやや磨りガラス状になった剥離面がある。同剥離面はトロトロ石器の素材として用意された剥片の器面と推定される。なお、先端側右側縁の一部は発掘調査時の欠損である。

(7) 石匙 (第 167 図 716～720)

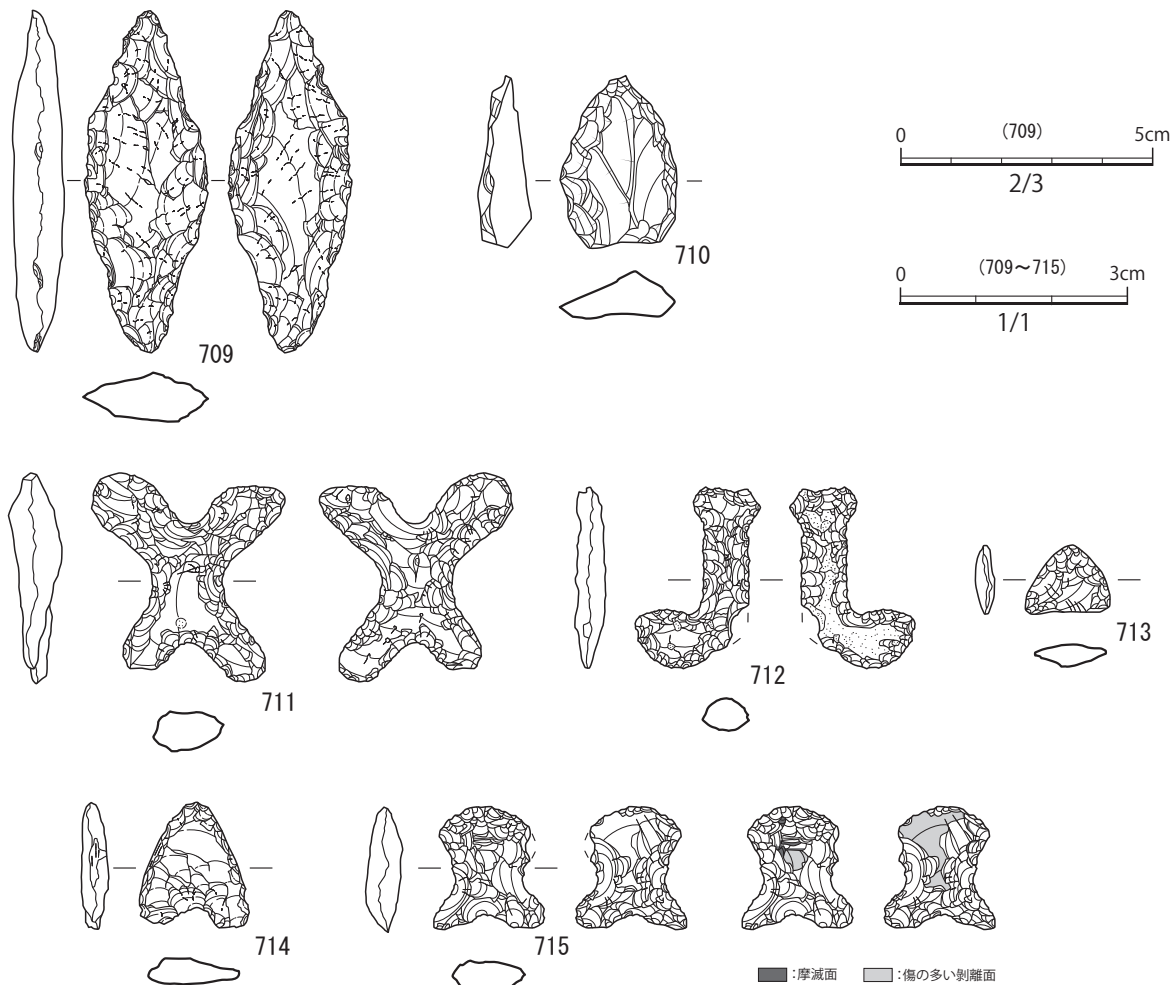
剥片を素材とし、つまみ部と押圧剥離による刃部をもつものを石匙とした。6 点が出土し、そのうち 5 点を図化した。716・718・720 は縦型、717・719 は横型である。716・717 はガラス質安山岩、718～720 はチャートを素材とする。716 はつまみ部を丸くつくり、厚さも薄い。刃部は両側縁及び下端に形成される。717 は左側縁につまみ部を、右側縁に刃部を形成する。718・720 は縦長なチャート剥片を素材にして、上側につまみ部を、右側縁に刃部を形成する。718 の左側縁には微細剥離がある。719 は上側に幅広のつまみ部をつくり、下側に刃部を形成する。

(8) スクレイパー (第 167 図 721～725)

剥片を素材とし、側縁等に二次加工を行い、刃部整形を施したものをスクレイパーとした。出土した 5 点を図化した。721・722 はガラス質安山岩を素材とする。721 は左側縁部の下部と下端が欠損している。左側縁上部から上端、右側縁部にかけて表裏両面から調整を行うことで刃部を形成している。722 は周縁上に細かな調整を行うことで刃部を形成している。721・722 ともに欠損が大きく、石匙である可能性もある。723 は流紋岩を素材とする。厚みのある剥片素材の上部を打面とし左右両側から打ち欠くことで、側縁に薄い剥離面をつくり、主体となる刃部を形成する。左側縁の一部のみ両面から細かな調整を行っている。724 は縦長なチャートの剥片を素材とし、右側縁の上端から下端にかけて両面から細かな調整を行うことで刃部を形成する。725 は縦長で薄い頁岩を素材とし、右側縁の表面から調整を行うことで刃部を形成する。

(9) 微細剥離剥片 (第 168 図 726)

剥片のうち、側縁に細かな剥離のあるものを微細剥離剥片とした。3 点が出土し、そのうち 1 点を図化した。726 は流紋岩を素材とし、表面の両側縁に微細な剥離痕が見られる。



第166図 石器実測図(6)

(10) 石核 (第168・169図 727～745)

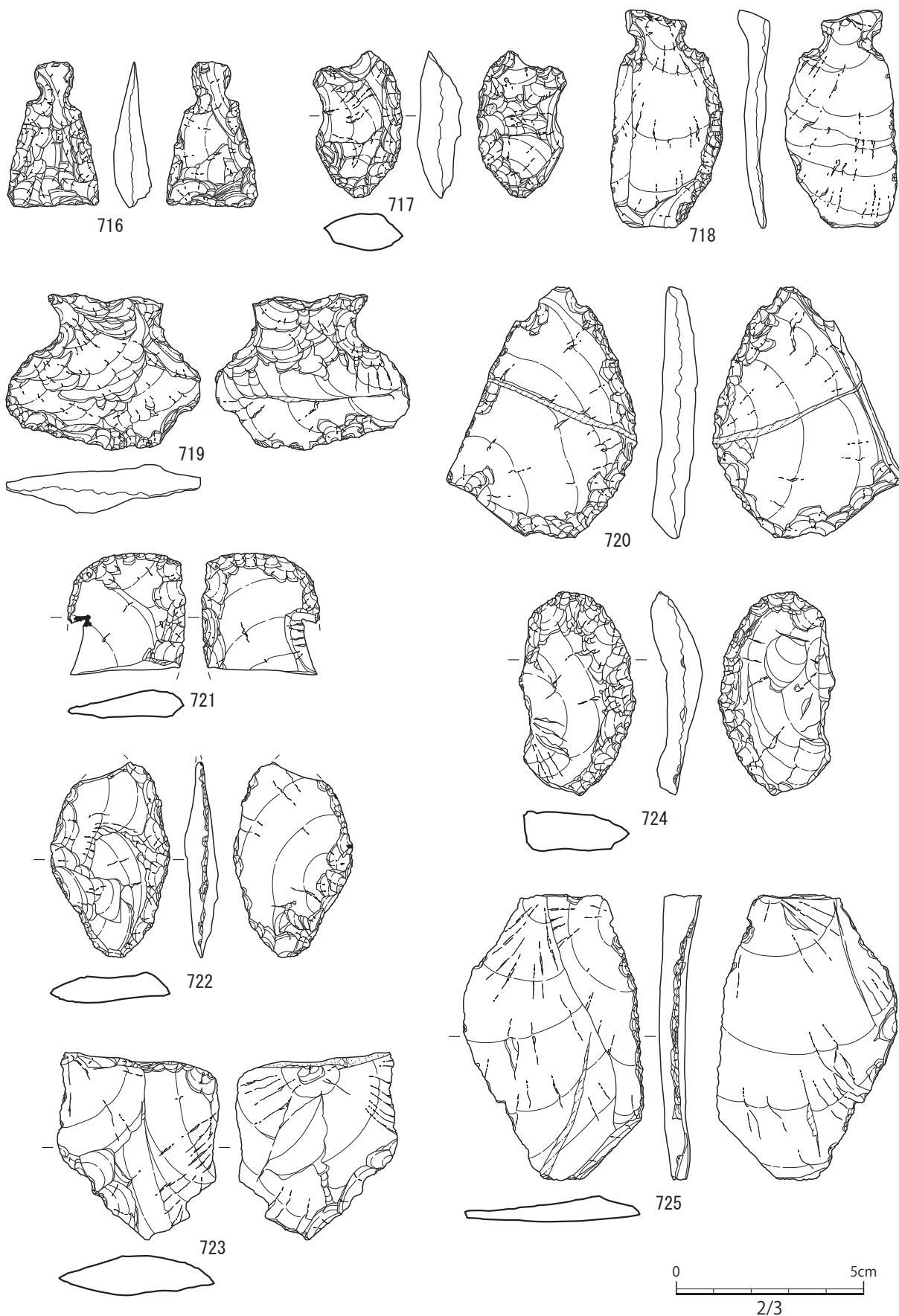
石器素材となる剥片を剥離した後の残存石材を石核とした。89点が出土し、そのうち21点を図化した。727～742は桑木津留産の黒曜石を素材とする。727・733・734のように礫面から直接、不定形な剥片を剥離するものが多い。一方、738のように古い剥離面を打面に置き換えながら、周縁から中心に向かって求心状に剥片剥離を行うものもある。739は剥離面が発泡しており、被熱した可能性がある。742は最大長6.8cmと大型の石核である。743はチャート、744・745は流紋岩を素材とする。743～745は古い剥離面を打面に置き換えながら不定形な剥片剥離を行っており、特に745は幅広の剥片獲得を目的にしていたと考えられる。

(11) 細石刃核 (第169図 746・747)

明らかに他より古い年代のものであるが、縄文時代早期遺物に混在して出土したため、ここで報告する。出土した2点を図化した。746・747は桑木津留産の黒曜石を素材とする。746は上面に打面調整を施した後、小口から正面にかけて半周状に細石刃剥離を行う。747は下面に剥離面を設けて裏面の細石刃剥離の後、上面の礫面を活かして細石刃剥離を行う。小口の細石刃剥離は見られない。

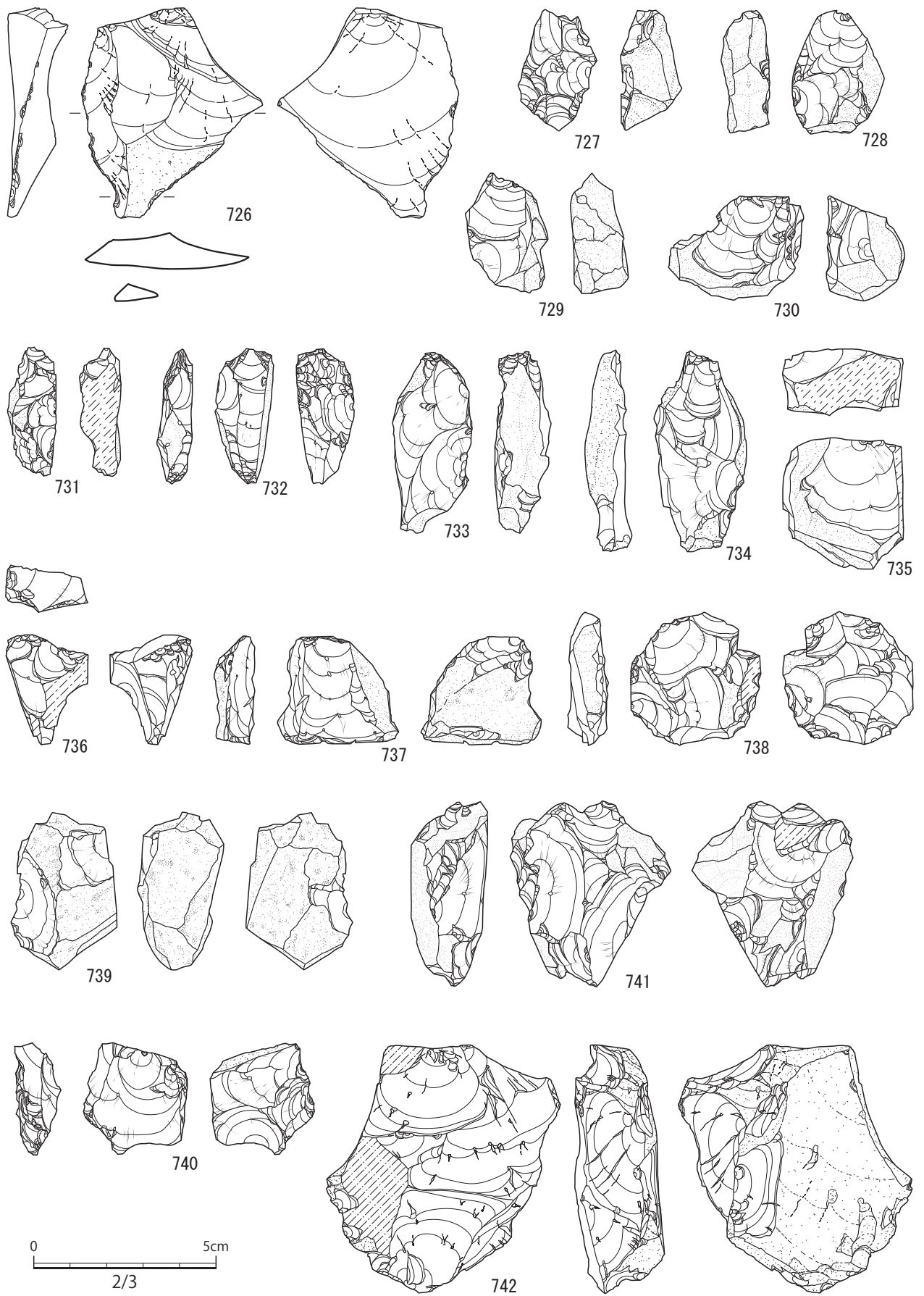
(12) 原石 (第169図 748～750)

石器の素材で、剥片剥離や打面調整等がほぼ見られないものを原石とした。16点が出土し、そのう

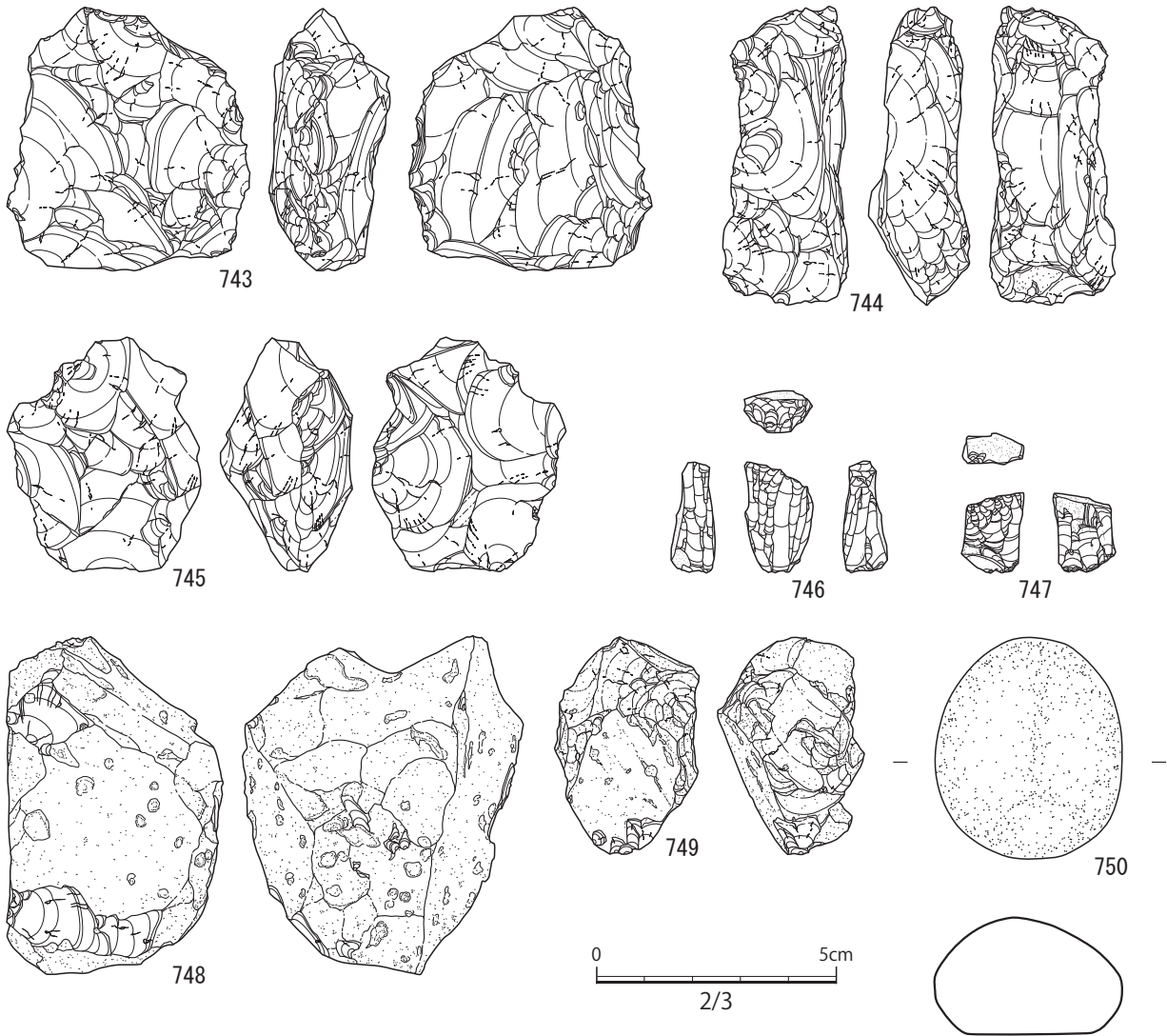


第167图 石器实测图(7)





第 168 图 石器实测图(8)

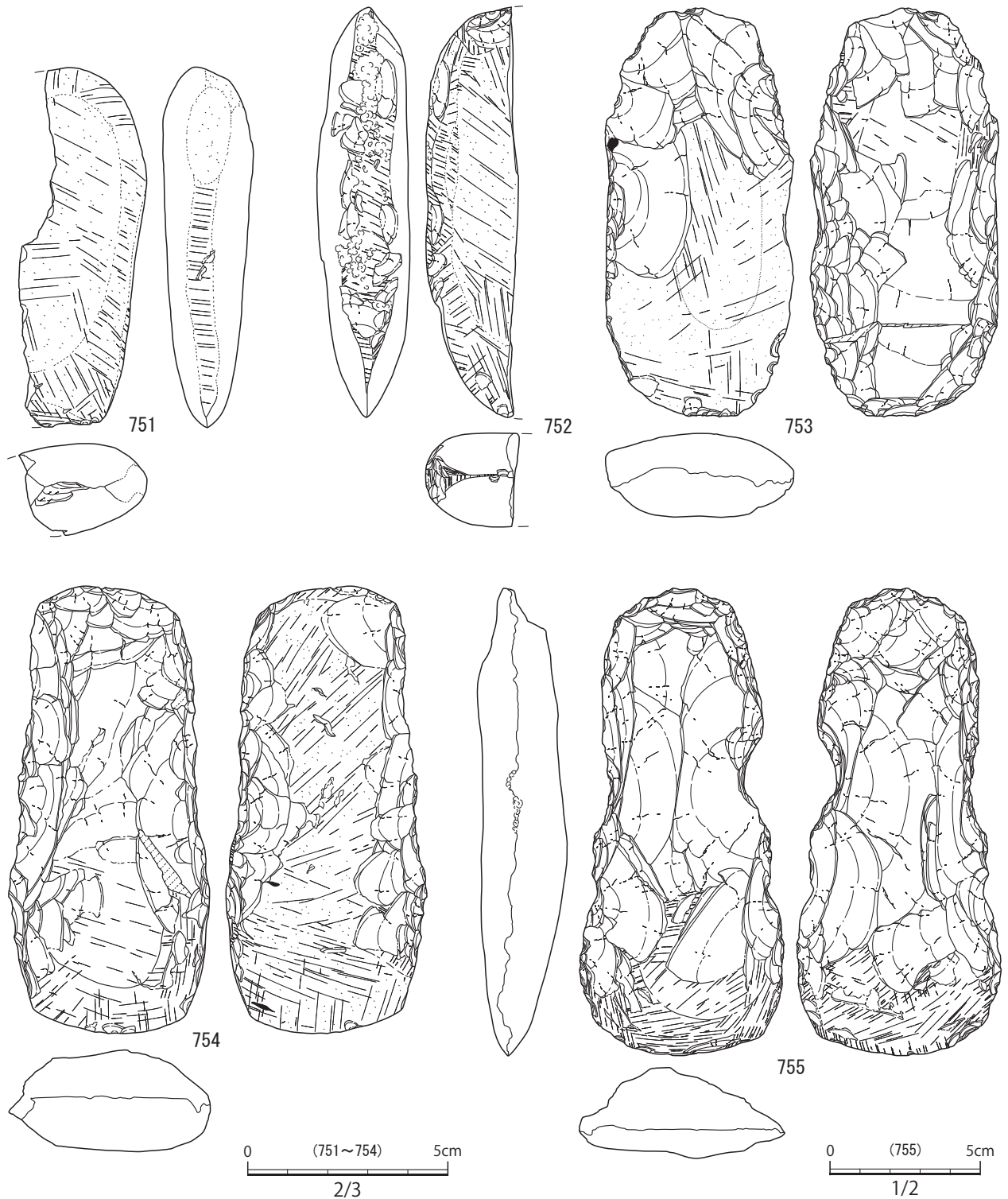


第169図 石器実測図(9)

ち3点を図化した。748・749は桑木津留産の黒曜石の原石である。748は最大幅が7.0cmと大型で、一部剥離面が確認できる。749は発泡したような風化面をもつ。750はチャートの原石である。下部に平坦面をもつ楕円形を呈し、表面はわずかに光沢をもつ。ペットストーンの可能性はある。

(13) 石斧(第170～172図 751～764)

礫に剥離調整や敲打調整を加えて形を整えた斧状の石器を石斧とした。16点が出土し、そのうち14点を図化した。ホルンフェルスや頁岩、砂岩を素材とするものが主体であり、多くが短冊形を呈する。751～755はホルンフェルスを素材とする。751は直刃と見られ、752～755は円刃と見られる。751は左側縁、752は右側縁が欠損する。753～755は周縁に敲打による調整痕が見られ、754・755は礫面に研磨痕が認められる。755は最大長15.5cmの大型の石斧で、基部の両側面に抉りをもつ。756～759は頁岩を素材とする。756は刃部が欠損する。757は体部が薄く、研磨により周縁に明確な稜をつくりながら、鋭い刃部を形成する。758は円刃で、表裏両面の礫面に弱い研磨痕が見られる。759はのみ状石斧と考える。側縁に敲打による調整を施し、研磨により刃部を鋭く尖らせる。760は流紋岩を素材とし、刃部のみ残存する。部分的に礫面に研磨を施し、刃部を鋭くつくる。761～764は砂岩を素材とする。

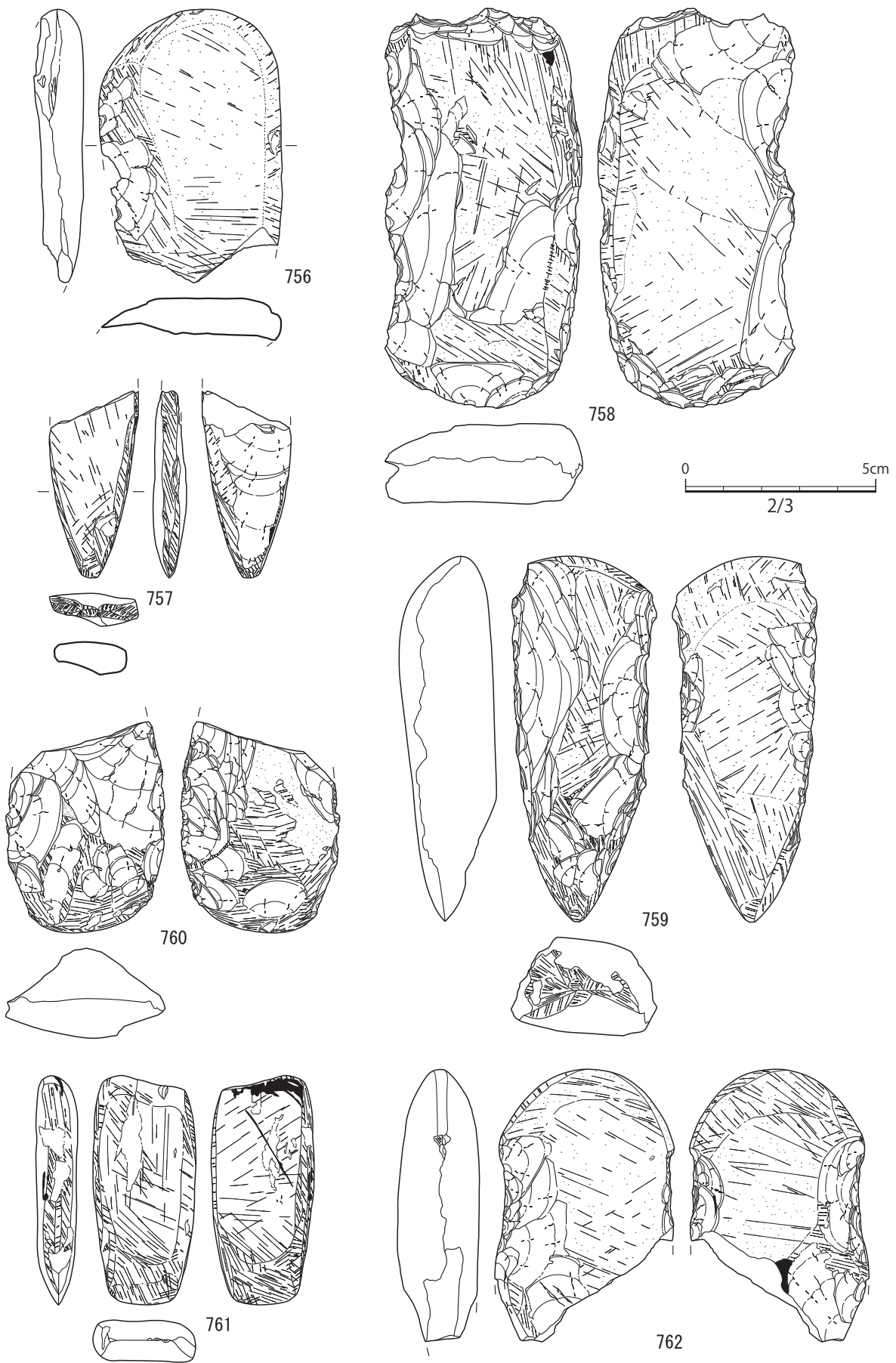


第170図 石器実測図(10)

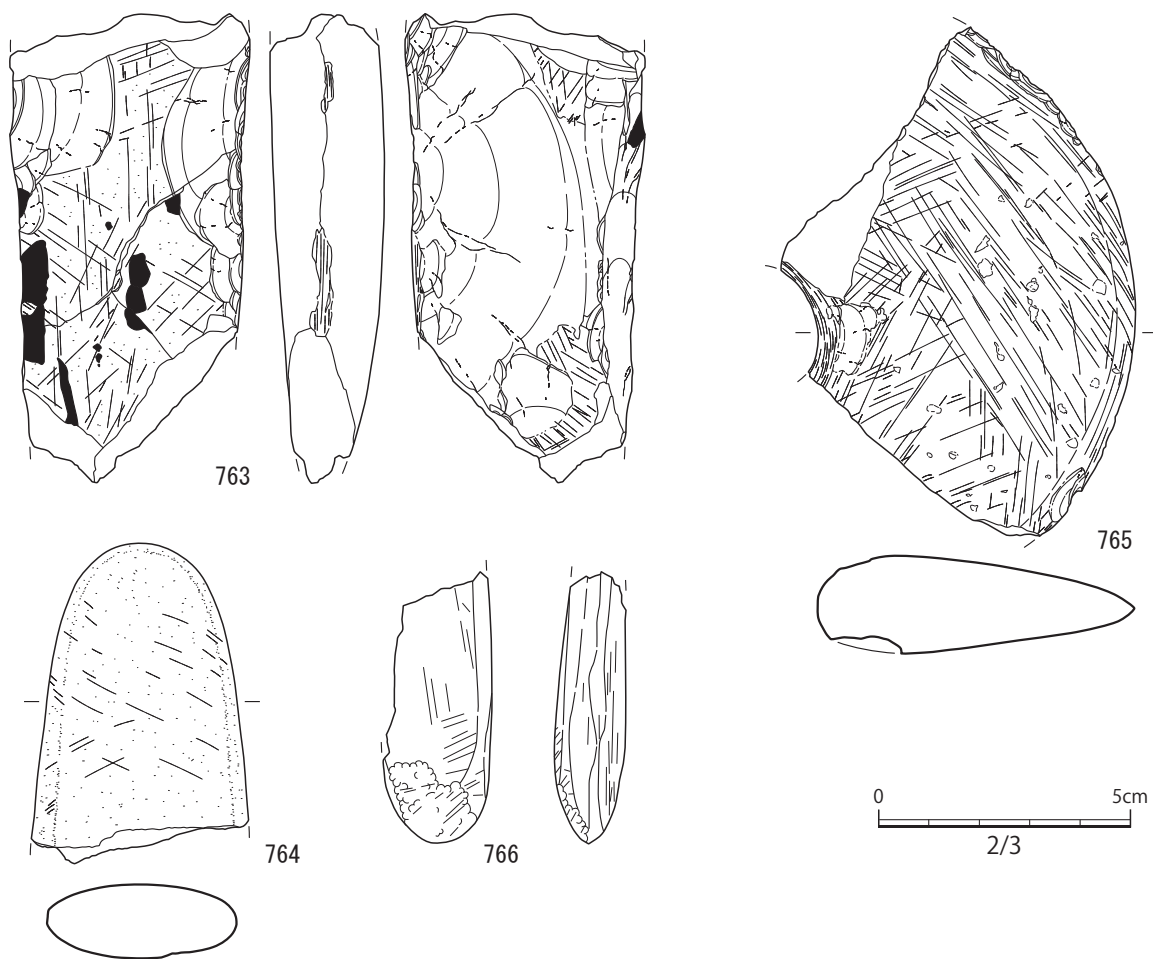
761 は直刃で、全体に研磨痕が認められる。762 は基部のみ残存し、両側縁に抉りをもつ。763 は基部先端と刃部を、764 は刃部の多くを欠損する。

(14) 環状石斧 (第172図 765)

円盤状を呈し、中央に円孔をもち、周縁に刃部が形成されるものを環状石斧とした。出土した1点を図化した。765はホルンフェルス素材とする。4分の1程度が残存する。表裏両面とも研磨痕が見られ、



第171图 石器实测图(11)



第172図 石器実測図(12)

周縁に向かって鋭くなる。中央にある円孔の断面が丸みを帯びることから、両側から穿孔を施したと考える。周縁の刃部の一部に敲打痕が認められる。

(15) 棒状石器 (第172図 766)

棒状の礫を素材とし、研磨調整により先端を丸くつくり出す石器を棒状石器とした。2点が出土し、そのうち1点を図化した。766はホルンフェルス素材とし、下端のみ残存する。表面の端部に敲打痕があり、その上から擦痕が確認できる。

(16) 磨石 (第173・174図 767～787)

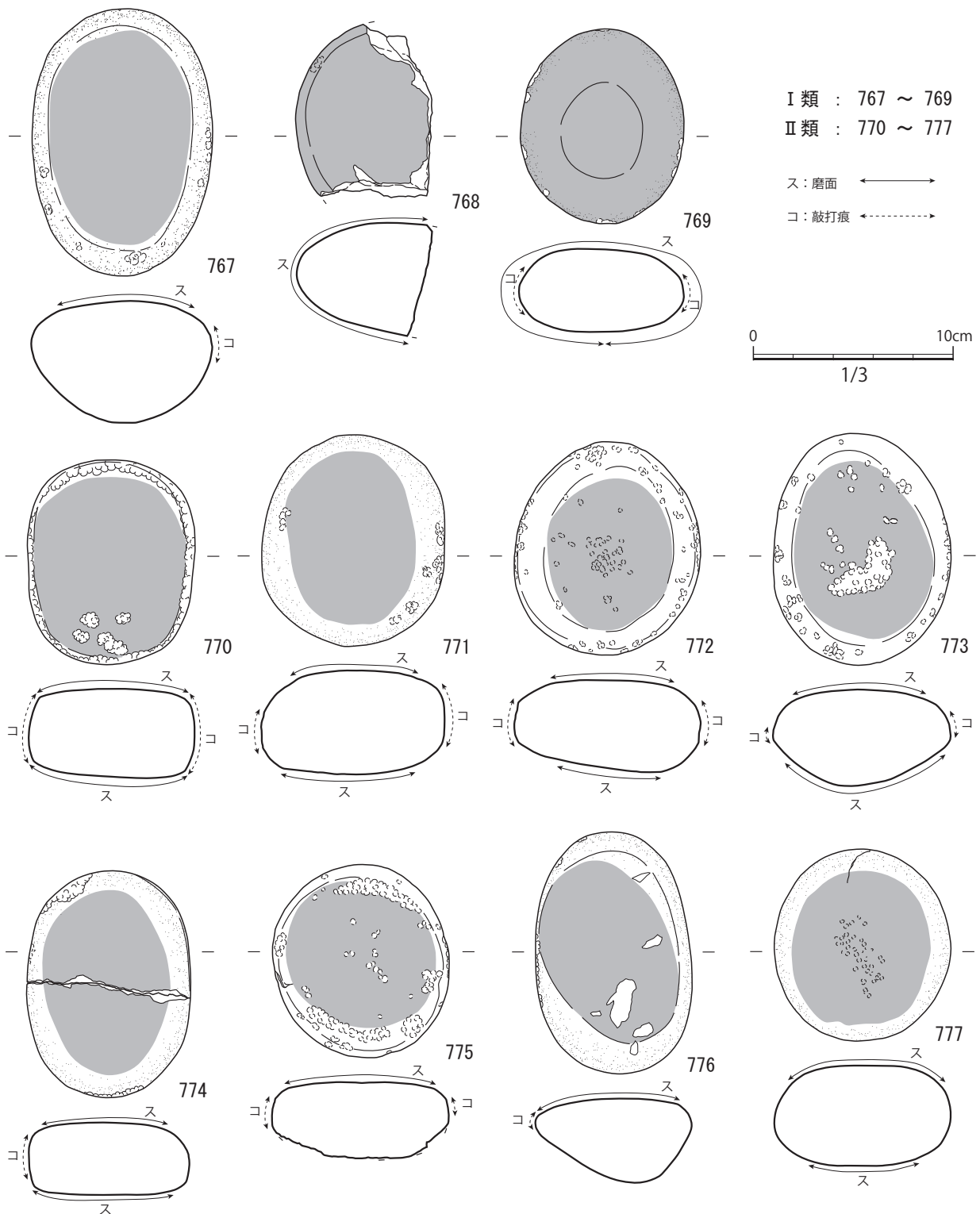
礫を素材とし、全面的もしくは部分的に磨面を有するものを磨石とした。平坦面や側面に敲打痕をもつものも含む。132点が出土し、そのうち21点を図化した。出土した磨石の約94%が砂岩を素材とする。形態や大きさによりⅠ～Ⅳ類に分類した。

【Ⅰ類】(第173図 767～769)

Ⅰ類は平面形が円形もしくは楕円形で、磨面が丸みを帯びている一群である。断面形が楕円形を呈する。767は安山岩を素材とし、表面に磨面、右側面に敲打痕をもつ。768・769は溶結凝灰岩を素材とし、全面に磨面をもつ。769は両側面に敲打痕が見られる。

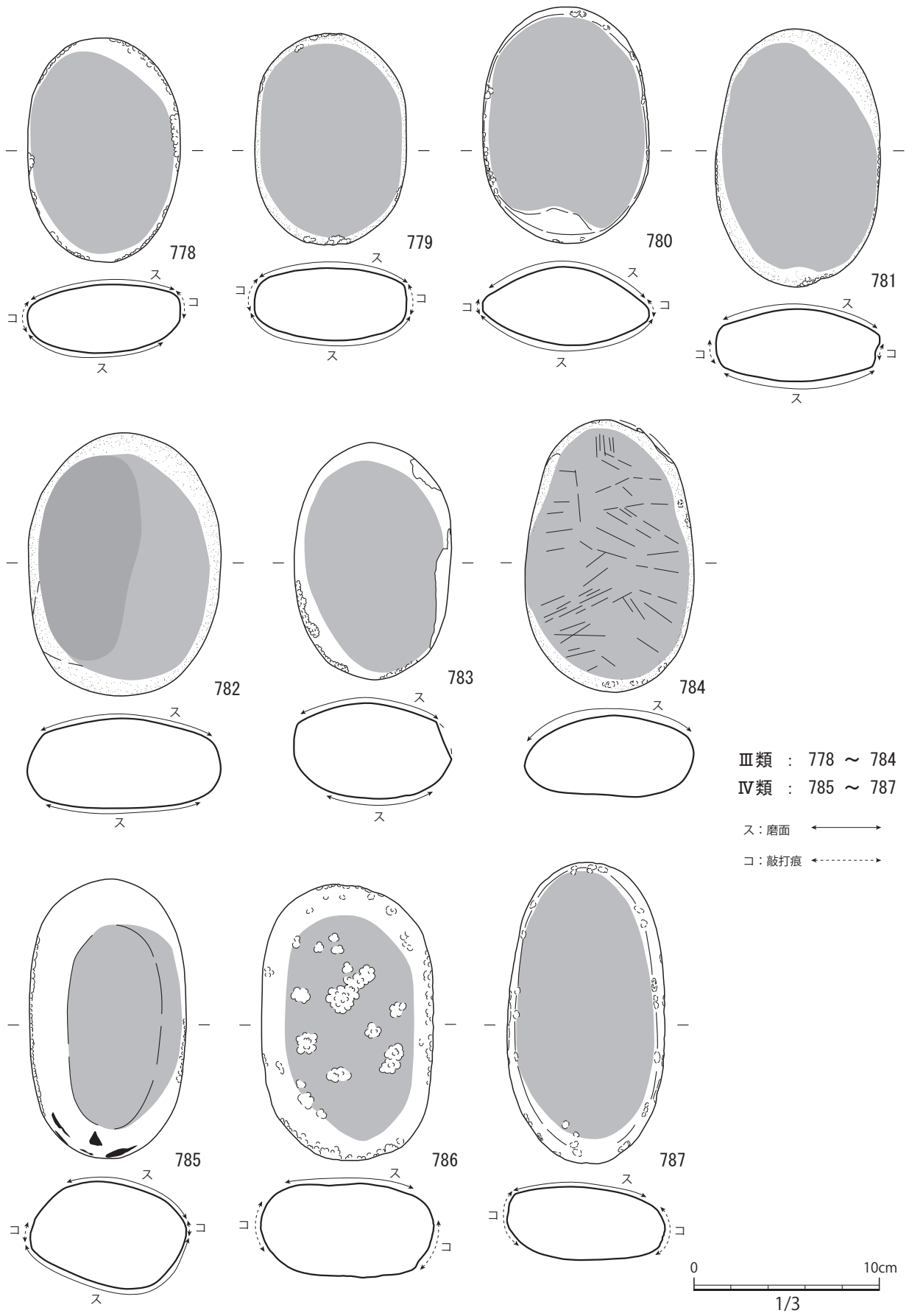
【Ⅱ類】(第173図 770～777)

Ⅱ類は平面形が円形もしくは楕円形で、磨面が平らな一群である。断面形が隅丸長方形のものが多い。

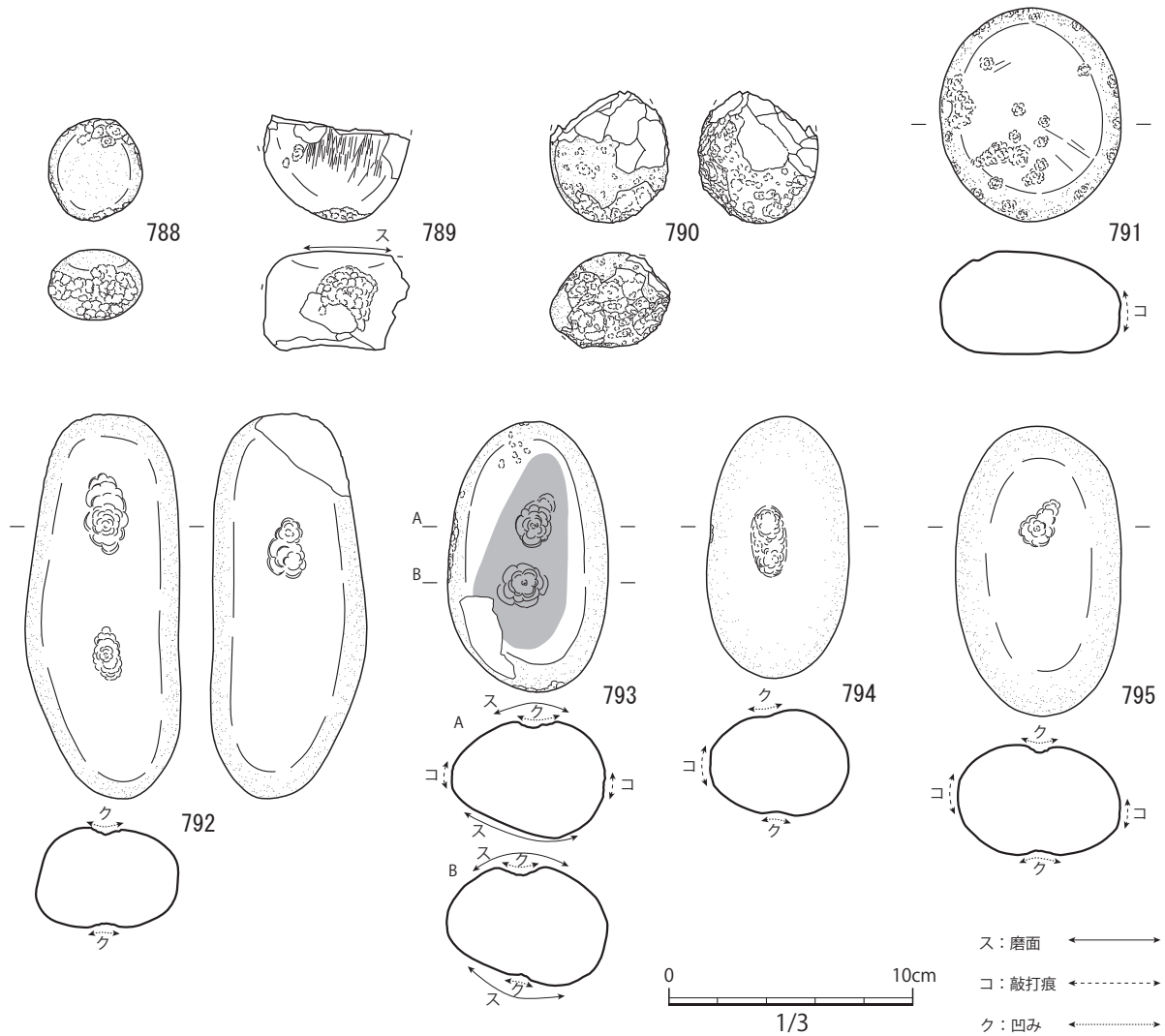


第173図 石器実測図(13)

いずれも砂岩を素材とする。770～773は表裏両面に磨面を、両側面に敲打痕をもつ。772・773は表面中央にも敲打痕が見られる。774は表裏両面に磨面を、左側面と下端部の一部に敲打痕をもつ。775は裏面が欠損する。敲打痕は両側面に見られる。776は表面に磨面、左側面に敲打痕をもつ。776は側面の敲打痕は見られず、正面のみに確認できる。



第174図 石器実測図(14)



第175図 石器実測図(15)

【Ⅲ類】(第174図 778～784)

Ⅲ類は平面形が楕円形で、偏った二面の磨面をもつ一群である。断面形が緩やかな凸レンズ状を呈するものが多い。778～784は砂岩を素材とする。778～781は表裏両面に磨面をもち、両側面に敲打痕をもつ。782は正面の左側に特に顕著な磨面が確認できる。784は正面に擦痕が見られる。

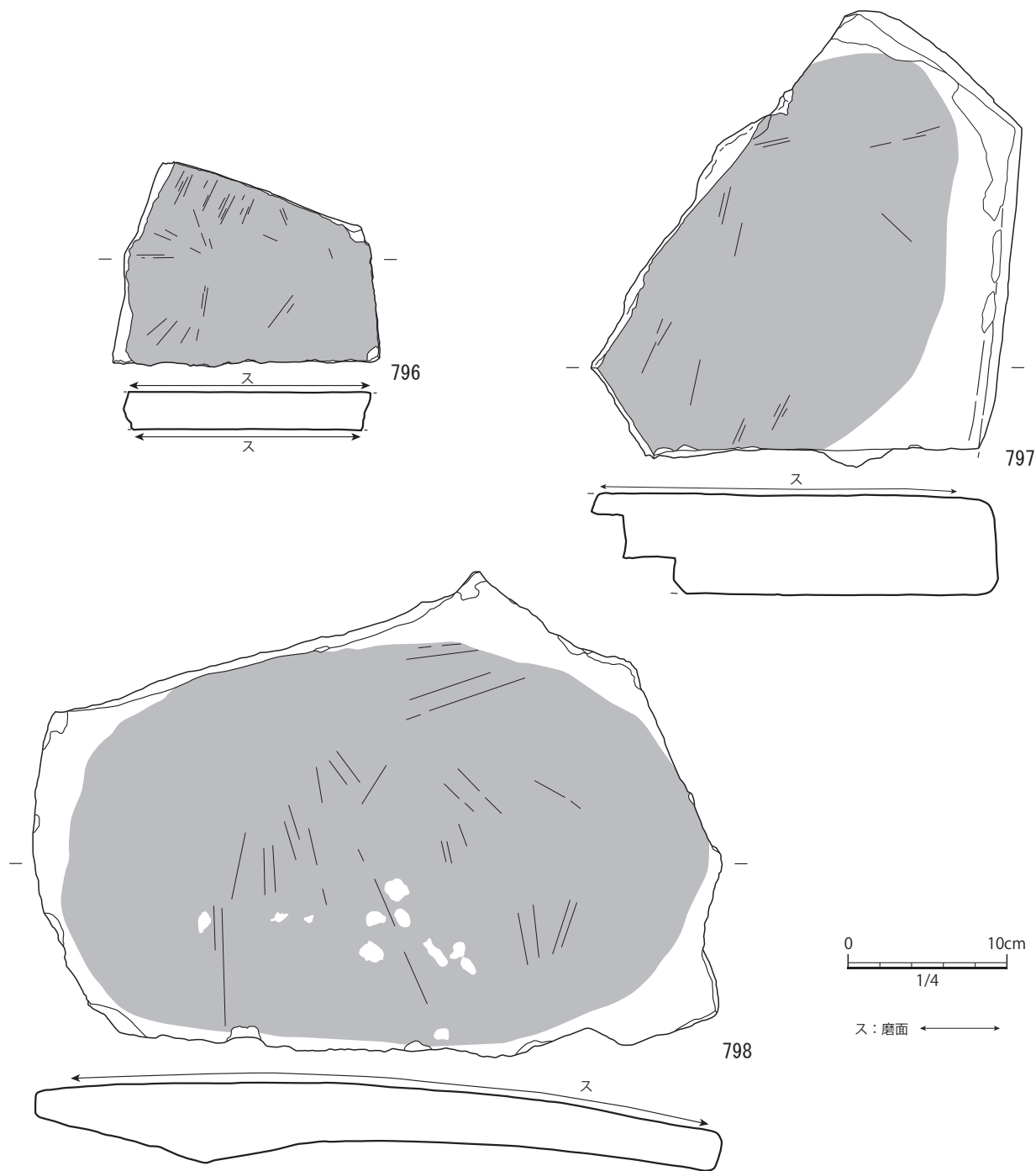
【Ⅳ類】(第174図 785～787)

Ⅳ類は平面形が細長い楕円形で、磨面が平らもしくは丸みを帯びている一群である。785・787は砂岩、786は安山岩を素材とする。785は表裏両面に磨面を、両側面に敲打痕をもつ。786は正面にも敲打痕が認められる。787は表面全域に磨面を、側面に敲打痕をもつ。

(16) 敲石(第175図 788～791)

礫を素材とし、平坦面や側面に敲打痕を有するものを敲石とした。磨面をもつもののうち、敲石としての要素が大きいものは敲石に含めた。42点が出土し、そのうち4点を図化した。788は砂岩を素材とする小型の敲石である。上下面に顕著な敲打痕が見られる。789・790は頁岩を素材とし、どちらも上半を欠損する。789は正面に磨面をもつ。790は上半の剥離面以外の全域に敲打痕が認められる。上半





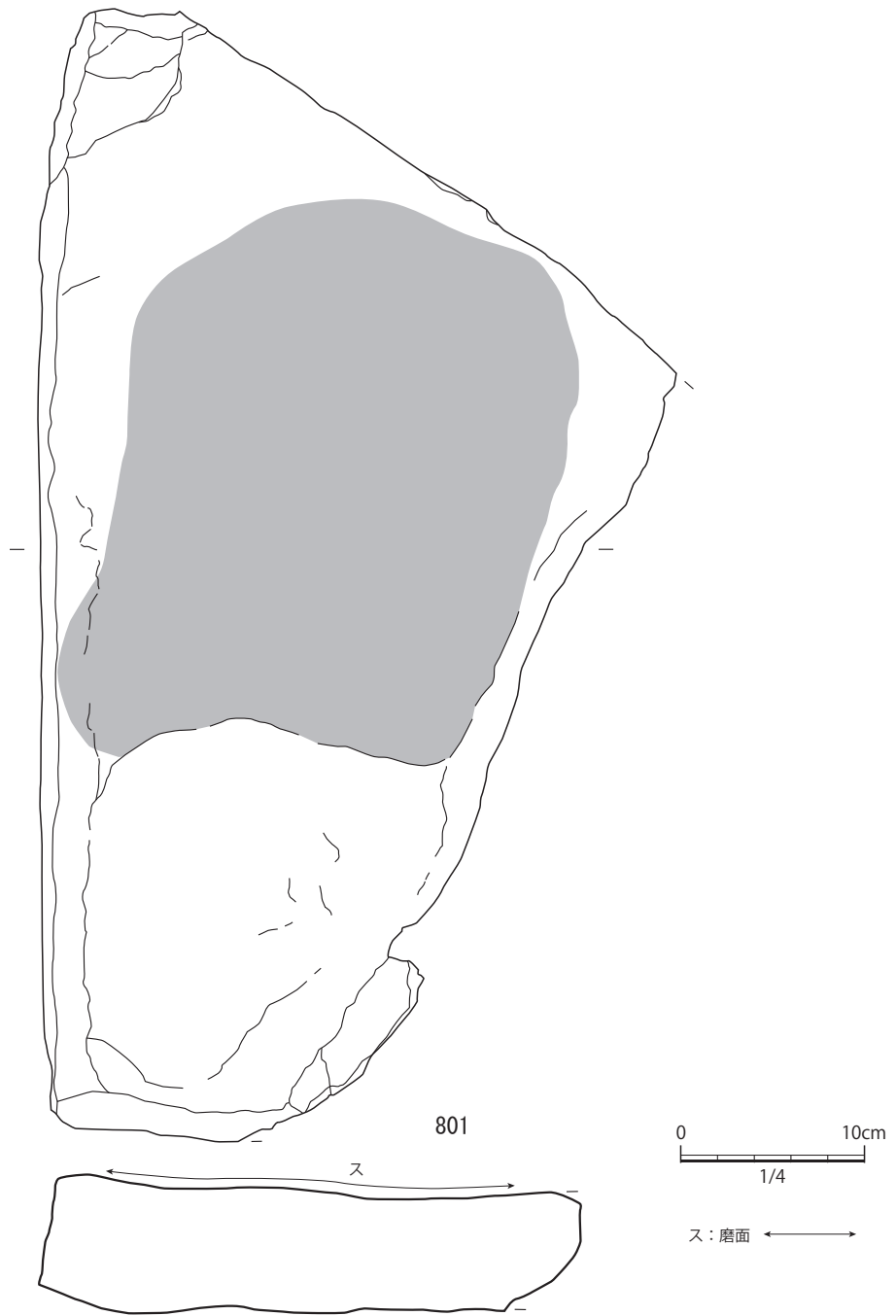
第176図 石器実測図(16)

は被熱による剥落の可能性がある。791は楕円形を呈する比較的大型の敲石で、安山岩を素材とする。側面から正面にかけて敲打痕が確認できる。

(17) 凹石(第175図 792～795)

礫を素材とし、平坦面に凹部を有するものを凹石とした。24点が出土し、そのうち4点を図化した。792～795は砂岩を素材とする。792・793は表面に2箇所、裏面に1箇所凹みがある。793は磨面や敲打痕をもつので、磨石を二次的に利用して凹みを形成した可能性がある。794・795は表裏両面に1箇所の凹みがある。

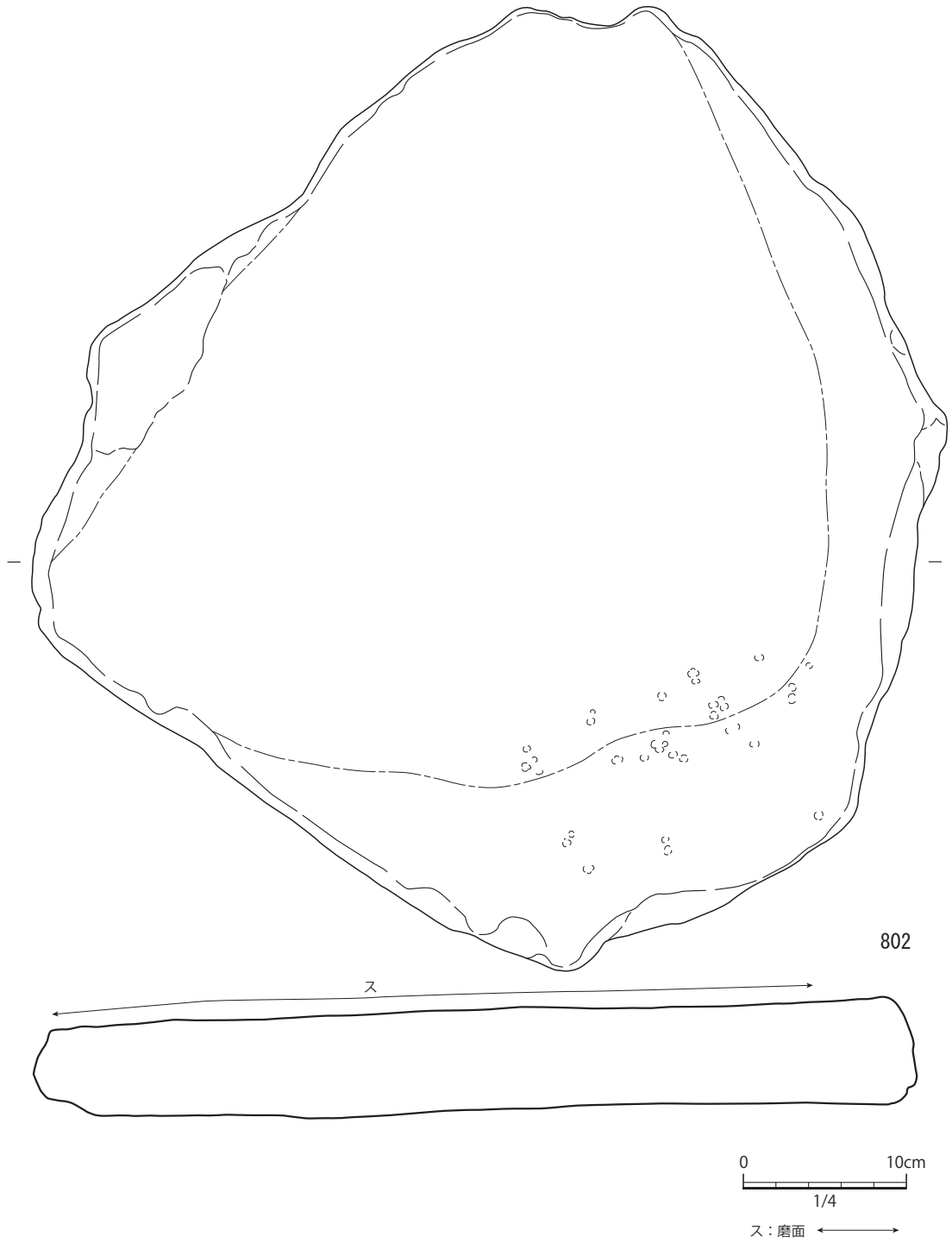




第178図 石器実測図(18)

(18) 台石 (第176～179図 796～802)

大型の礫を利用し、全体的もしくは部分的に磨面を有するものを台石とした。73点が出土し、そのうち7点を図化した。796～802は砂岩を素材とする。796は表裏両面の全域が磨面となる。797は23号集石遺構(SI23)の構成礫の一部である。表面に磨面をもつ。798は14号集石遺構(SI14)の構成礫の一部で、全体的に被熱している。表面に磨面をもつ。799は4号集石遺構(SI4)の構成礫の一部で、表裏両面に磨面をもつ。800は正面に磨面と敲打痕をもつ。801・802は2号配石遺構(SU2)の構成礫である。正面のほぼ全域が磨面となり、下半部に敲打痕が見られる。



第179図 石器実測図(19)

掲載番号	出土位置 ※		器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	分類
10	SA1		石斧	ホルンフェルス	5.1	4.6	3.0	85.5	
563	C6	N 2709	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.0	1.0	0.2	0.2	I A
564	E6	N	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	0.9	1.0	0.3	0.1	I A
565	G7	N	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	0.9	1.0	0.2	0.1	I A
566	E2	N 4030	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	0.9	1.0	0.3	0.2	I A
567	E6	N	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.1	1.0	0.3	0.2	I A
568	E5	N 4194	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.1	1.0	0.3	0.2	I A
569	C7	N 1720	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.1	1.0	0.3	0.2	I A
570	G3	N 2862	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.1	1.2	0.3	0.3	I A
571	F7	N 1068	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.2	1.1	0.2	0.2	I A
572	C7	N 2690	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.3	1.2	0.4	0.3	I A
573	C6	N	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.2	1.3	0.3	0.3	I A
574	F2	N	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.3	1.3	0.3	0.3	I A
575	F7	N 1923	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.2	1.2	0.4	0.4	I A
576	S13		石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.2	1.2	0.3	0.4	I A
577	G7	N 2744	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.3	1.2	0.4	0.4	I A
578	E6	N 2315	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.2	1.3	0.4	0.3	I A
579	G4	N	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.3	1.3	0.3	0.3	I A
580	G4	N 3980	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.3	1.2	0.3	0.3	I A
581	C6	N	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.4	1.4	0.3	0.4	I A
582	C4	N	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.4	1.5	0.4	0.5	I A
583	F4	N 4383	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.5	1.5	0.4	0.5	I A
584	C4	N 2584	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.6	1.5	0.4	0.6	I A
585	C6	N 3256	石鏃	チャート	1.5	1.4	0.4	0.8	I A
586	E3	N 1254	石鏃	チャート	2.2	2.2	0.8	3.2	I A
587	C4	N 4150	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.0	1.0	0.4	0.3	I B
588	C8	N 347	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.1	1.0	0.3	0.3	I B
589	E7	N 2217	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.1	1.1	0.3	0.2	I B
590	B7	N 554	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.1	1.2	0.3	0.2	I B
591	E6	N 292	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.2	1.0	0.3	0.2	I B
592	C7	N 2238	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.1	1.2	0.3	0.2	I B
593	SS8		石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.1	1.1	0.4	0.3	I B
594	E2	N 2617	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.5	1.4	0.3	0.4	I B
595	G4	N 4023	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.5	1.4	0.3	0.5	I B
596	E7	N 3234	石鏃	黒曜石 (上牛鼻)	1.4	1.2	0.3	0.4	I B
597	C7	N 2691	石鏃	チャート	1.3	1.3	0.4	0.5	I B
598	C2	N 749	石鏃	チャート	1.5	1.3	0.4	0.5	I B
599	F3	N	石鏃	チャート	1.4	1.8	0.3	0.7	I B
600	C3	N 773	石鏃	チャート	1.7	1.6	0.4	0.7	I B
601	E6	N	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.2	1.2	0.5	0.4	I Ca
602	F4	N 3923	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.3	1.4	0.4	0.3	I Ca
603	D3	N 2735	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.4	1.4	0.4	0.5	I Cb
604	C4	N 28	石鏃	ガラス質安山岩	1.4	1.4	0.2	0.3	I Cb
605	C3	N 892	石鏃	チャート	1.2	1.5	0.3	0.4	I Cc
606	F2	N	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.1	0.9	0.3	0.2	II A
607	E7	N 3233	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.2	1.1	0.3	0.3	II A
608	F7	N 3630	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.3	1.1	0.2	0.2	II A
609	E7	N 3589	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.4	1.1	0.3	0.3	II A
610	S131		石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.4	1.1	0.3	0.3	II A
611	C6	N 4355	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.5	1.2	0.4	0.4	II A
612	SC39		石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.5	1.2	0.5	0.6	II A
613	SS4		石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.5	1.3	0.5	0.6	II A
614	S150		石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.5	1.2	0.4	0.4	II A
615	S119		石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.6	1.3	0.4	0.5	II A
616	E3	N	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.5	1.2	0.4	0.4	II A
617	C5	N 1074	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.7	1.4	0.4	0.6	II A
618	D4	N	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.6	1.4	0.3	0.5	II A
619	F2	N 4403	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.7	1.5	0.6	0.9	II A
620	F2	N 2726	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	2.1	1.9	0.5	1.4	II A
621	D5	N	石鏃	チャート	1.7	1.3	0.4	0.6	II A
622	C3	N 15	石鏃	チャート	2.7	2.0	0.5	2.0	II A
623	D3	N 996	石鏃	流紋岩	2.1	1.7	0.5	1.3	II A
624	C8	N 353	石鏃	石英	2.5	1.9	0.4	1.3	II A
625	F2	N	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	0.7	0.6	0.2	0.1	II B
626	D3	N 2718	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.1	0.9	0.3	0.2	II B
627	C7	N 2181	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.2	1.0	0.3	0.3	II B
628	G6	N 274	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.4	1.3	0.3	0.3	II B
629	D3	N	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.5	1.4	0.3	0.4	II B
630	E4	N 3228	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.5	1.3	0.4	0.4	II B
631	E5	N 2428	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.6	1.2	0.3	0.3	II B
632	B4	N 676	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.7	1.3	0.3	0.5	II B
633	D4	N 2467	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.6	1.3	0.4	0.5	II B
634	D6	N 438	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.6	1.4	0.4	0.6	II B
635	B3	N 700	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.8	1.2	0.3	0.4	II B
636	F7	N 3606	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.9	1.4	0.3	0.6	II B
637	D2	N 52	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	2.0	1.5	0.5	0.8	II B
638	D7	N 1897	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	2.5	1.9	0.4	1.1	II B
639	C3	N 2545	石鏃	チャート	1.6	1.2	0.3	0.3	II B

掲載番号	出土位置 ※		器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	分類
640	E4	N 3227	石鏃	チャート	1.6	1.2	0.4	0.5	II B
641	F7	N 3737	石鏃	チャート	2.2	1.5	0.4	0.7	II B
642	E6	N 3230	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	2.0	1.3	0.3	0.4	II Ca
643	D3	N 994	石鏃	チャート	2.3	1.7	0.3	0.8	II Ca
644	D3	N 4541	石鏃	チャート	1.8	1.6	0.4	0.7	II Ca
645	H7	N 1963	石鏃	ガラス質安山岩	1.7	1.4	0.3	0.4	II Ca
646	D2	N 953	石鏃	チャート	1.6	1.3	0.3	0.4	II Cb
647	C6	N 2256	石鏃	チャート	1.5	1.2	0.3	0.6	II Cb
648	E7	N 4514	石鏃	ガラス質安山岩	2.3	1.8	0.5	1.3	II Cb
649	D3	N 417	石鏃	流紋岩	1.9	1.4	0.3	0.6	II Cb
650	F2	N	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.3	0.9	0.2	0.2	II Cc
651	F3	N	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.7	1.3	0.4	0.5	II Cc
652	D4	N 2479	石鏃	チャート	1.8	1.4	0.4	0.8	II Cc
653	B7	N	石鏃	チャート	1.5	1.3	0.3	0.3	II Da
654	D7	N 203	石鏃	流紋岩	1.7	1.4	0.3	0.6	II Da
655	E4	N	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.2	1.5	0.3	0.4	II Db
656	C7	N	石鏃	チャート	2.0	1.4	0.5	1.0	II Db
657	G3	N 1646	石鏃	チャート	2.0+α	2.2	0.5	1.7	II Db
658	E7	N	石鏃	流紋岩	2.0	1.3	0.5	0.8	II Db
659	D6	N 1044	石鏃	チャート	2.8	2.2	0.5	1.9	II Dc
660	SC8		石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.1	0.8	0.3	0.2	III A
661	C3	N	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.3	0.9	0.3	0.2	III A
662	C3	N 4419	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.7	1.1	0.4	0.5	III A
663	D5	N 2397	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.7	1.2	0.3	0.3	III A
664	E7	N 3571	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.8	1.2	0.3	0.5	III A
665	F7	N 4369	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.8	1.1	0.3	0.4	III A
666	G4	N 4613	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.9	1.3	0.4	0.6	III A
667	C5	N 41	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.9	1.1	0.3	0.6	III A
668	C6	N 176	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.9	1.3	0.3	0.5	III A
669	E6	N	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	2.1	1.2	0.3	0.6	III A
670	B2	N 370	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	2.1	1.3	0.4	0.6	III A
671	D7	N	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.4	0.9	0.3	0.2	III B
672	E5	N 2429	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.8	1.0	0.3	0.4	III B
673	B3	N 4907	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	2.0	1.1	0.3	0.4	III B
674	E6	N	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	2.0	1.2	0.3	0.5	III B
675	E6	N 441	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	2.1	1.1	0.4	0.6	III B
676	E5	N 2419	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	2.1	1.2	0.4	0.6	III B
677	SP3		石鏃	黒曜石 (桑木津留)	2.3	1.5	0.4	0.7	III B
678	G7	N	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	2.4	1.1	0.4	0.6	III B
679	F2	N 2655	石鏃	チャート	2.0	1.4	0.4	0.8	III B
680	F6	N 4371	石鏃	チャート	2.4	1.4	0.4	0.9	III B
681	H5	N 2828	石鏃	チャート	2.1	1.3	0.3	0.7	III B
682	E7	N 3341	石鏃	石英	2.1	1.4	0.4	0.8	III B
683	D7	N 189	石鏃	石英	1.5	1.1	0.4	0.5	III B
684	C7	N 1721	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.6	1.2	0.4	0.3	III Ca
685	F4	N 126	石鏃	チャート	2.3	1.5	0.3	0.7	III Ca
686	F7	N	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	1.8	1.2	0.3	0.5	III Cb
687	C6	N 1732	石鏃	黒曜石 (桑木津留)	2.3	1.3	0.5	0.7	III Cb
688	F3	N 1633	石鏃	チャート	1.8	1.1	0.4	0.5	III Cb
689	D6	N 2290	石鏃	チャート	2.8	1.6	0.5	1.5	III Cb
690	C3	N 1435	石鏃	チャート	2.2	1.8	0.6	1.8	III Cc
691	D6	N 1043	石鏃	チャート	1.5	1.7	0.3	0.8	III Dc
692	C3	N	石鏃	チャート	2.0	1.5	0.4	0.9	IV Ca
693	G6	N 1855	石鏃	黒曜石 (姫島)	2.3	1.8	0.6	1.7	V
694	E2	N 1186	石鏃	チャート	(2.0)	(1.1)	0.4	0.6	V
695	E7	N	磨製石鏃	黒曜石 (針尾)	2.1	1.3	0.2	0.4	
696	C6	N	磨製石鏃	ガラス質安山岩	1.2	1.0	0.1	0.2	
697	E2	N	磨製石鏃	ガラス質安山岩	1.7	1.5	0.1	0.4	
698	E2	N 1190	磨製石鏃	流紋岩 (傾山)	1.6	1.6	0.2	0.5	
699	C5	N 1751	石鏃未製品	黒曜石 (桑木津留)	2.5	1.7	0.6	2.1	
700	D4	N 2544	石鏃未製品	黒曜石 (桑木津留)	2.7	2.2	0.6	3.3	
701	D4	N	石鏃未製品	黒曜石 (桑木津留)	2.1	1.7	0.8	2.9	
702	E5	N	石鏃未製品	黒曜石 (桑木津留)	2.5	2.0	0.8	3.3	
703	G3	N	石鏃未製品	黒曜石 (桑木津留)	2.7	1.8	0.7	3.1	

掲載番号	出土位置※	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	分類
718	F7 N 4953	石匙	チャート	5.8	3.0	0.9	8.9	
719	F6 N 3729	石匙	チャート	4.2	5.2	1.3	21.7	
720	G7 N 1942	石匙	チャート	6.7	5.1	1.2	33.7	
721	E2 N 2641	スクレイパー	ガラス質安山岩	3.3	3.2	0.8	8.5	
722	F2 N 3167	スクレイパー	ガラス質安山岩	5.2	3.2	0.9	12.5	
723	F3 N 2730	スクレイパー	流紋岩	5.0	4.4	1.1	29.6	
724	D5 N	スクレイパー	チャート	5.4	3.1	1.4	17.9	
725	C7 N 1331	スクレイパー	頁岩	7.6	4.8	1.1	27.1	
726	C8 N 3281	微細彫刻片	流紋岩	5.7	5.0	1.7	27.5	
727	C3 N 1499	石核	黒曜石 (桑木津留)	3.3	2.1	1.7	8.7	
728	G4 N 3958	石核	黒曜石 (桑木津留)	3.4	2.5	1.3	11.8	
729	G4 N 3971	石核	黒曜石 (桑木津留)	3.3	2.2	1.6	10.1	
730	C4 N 4036	石核	黒曜石 (桑木津留)	2.9	3.7	2.1	21.4	
731	C3 N 694	石核	黒曜石 (桑木津留)	3.5	1.3	1.1	5.0	
732	E4 N 4378	石核	黒曜石 (桑木津留)	3.7	1.6	1.0	5.0	
733	E5 N 4523	石核	黒曜石 (桑木津留)	4.9	2.2	1.5	13.3	
734	C7 N 3275	石核	黒曜石 (桑木津留)	5.5	2.5	1.2	13.4	
735	C4 N 2445	石核	黒曜石 (桑木津留)	3.6	3.3	1.7	24.3	
736	C8 N 349	石核	黒曜石 (桑木津留)	3.0	2.2	1.3	5.9	
737	F4 N 4382	石核	黒曜石 (桑木津留)	3.0	3.3	1.1	10.9	
738	C6 N 1099	石核	黒曜石 (桑木津留)	3.6	3.5	1.1	13.3	
739	G2 N 4387	石核	黒曜石 (桑木津留)	4.3	2.9	2.3	22.9	
740	E6 N 3417	石核	黒曜石 (桑木津留)	3.1	2.8	1.3	9.1	
741	G5 N 2769	石核	黒曜石 (桑木津留)	5.1	4.4	2.1	37.6	
742	F3 N 2882	石核	黒曜石 (桑木津留)	6.8	6.4	2.4	77.7	
743	F5 N 2971	石核	チャート	5.5	5.1	2.5	73.8	
744	C2 N 922	石核	流紋岩	6.2	2.6	2.1	37.2	
745	F7 N	石核	流紋岩	4.9	4.1	2.8	42.3	
746	D5 N 406	細石刃核	黒曜石 (桑木津留)	2.3	1.4	0.9	2.7	
747	F3 N	細石刃核	黒曜石 (桑木津留)	1.6	1.3	0.6	1.5	
748	D3 N 2720	原石	黒曜石 (桑木津留)	7.0	5.9	4.5	192.5	
749	F5 N 2968	原石	黒曜石 (桑木津留)	4.5	3.0	3.0	38.7	
750		原石	チャート	4.6	3.9	2.4	66.6	
751	D3 N 866	石斧	ホルンフェルス	9.0	3.2	2.3	74.1	
752	SC49	石斧	ホルンフェルス	10.2	2.3	2.3	82.6	
753	G7 N 1135	石斧	ホルンフェルス	10.2	4.7	2.1	128.4	
754	E5 N 4217	石斧	ホルンフェルス	11.2	5.0	2.5	189.6	
755	F5 N 3990	石斧	ホルンフェルス	15.5	6.8	3.0	322.8	
756	C6 N 3257	石斧	頁岩	7.2	4.8	1.3	58.7	
757	F6 N 1838	石斧	頁岩	4.9	2.4	0.9	9.3	
758	F4 N 3920	石斧	頁岩	10.5	5.2	2.1	160.1	
759	G4 N 2842	石斧	頁岩	9.5	3.8	2.6	107.6	
760	G6 N 4785	石斧	流紋岩	5.6	4.2	2.4	54.3	
761	C3 N 2100	石斧	砂岩	6.0	2.7	1.1	33.9	
762	SK2	石斧	砂岩	7.2	4.7	2.1	94.1	
763	N	石斧	砂岩	9.3	4.8	2.3	129.2	
764	G5 N 4008	石斧	砂岩	6.4	4.3	1.5	64.9	
765	D6 N 1800	環状石斧	ホルンフェルス	10.1	7.0	1.9	138.0	
766	C3 N 3034	棒状石器	ホルンフェルス	5.4	2.1	1.4	21.7	
767	D7 N 3285	磨石	安山岩	13.3	9.0	6.1	1044.6	I
768	G2 N 4720	磨石	溶結凝灰岩	8.6+ $\alpha$	6.8+ $\alpha$	5.7	443.6	I
769	E4 N 4809	磨石	溶結凝灰岩	9.7	8.2	4.2	497.2	I
770	SI78	磨石	砂岩	10.3	8.4	4.5	600.2	II
771	E4 N 4810	磨石	砂岩	10.5	9.1	5.2	692.9	II
772	F7 N 3876	磨石	砂岩	10.7	9.3	4.5	655.1	II
773	SJ4	磨石	砂岩	11.6	8.9	4.8	671.9	II
774	E3 N 4563	磨石	砂岩	11.3	8.2	3.6	544.5	II
775	D5 N 1781	磨石	砂岩	9.7	8.8	3.8	467.9	II
776	G6 N 1846	磨石	砂岩	12.1	7.8	4.2	530.3	II
777	E5 N 4206	磨石	砂岩	9.6	8.8	5.0	599.6	II
778	SU2	磨石	砂岩	12.1	8.2	3.7	548.0	III
779	E4 N 4811	磨石	砂岩	11.4	8.2	3.9	539.7	III
780	SI40	磨石	砂岩	12.7	8.9	4.2	677.2	III
781	C4 N 4131	磨石	砂岩	13.9	8.9	3.9	675.3	III
782	F5 N 5034	磨石	砂岩	14.2	10.4	4.8	1079.2	III
783	F7 N 3791	磨石	砂岩	12.8	8.5	5.2	755.8	III
784	E6 N	磨石	砂岩	14.7	9.1	4.5	890.1	III
785	F2 N 4856	磨石	砂岩	15.1	8.5	5.8	1051.5	IV
786	C3 N 4882	磨石	安山岩	14.9	9.3	5.1	978.3	IV
787	D3 N 5005	磨石	砂岩	16.2	8.5	3.9	846.3	IV
788	D5 N	敲石	砂岩	4.2	3.8	2.9	57.1	
789	D2 N 967	敲石	頁岩	4.4	5.9	4.1	144.2	
790	C4 N 2048	敲石	頁岩	5.4	4.9	3.9	118.9	
791	D4 N	敲石	安山岩	8.8	7.4	4.2	397.2	
792	C5 N 4110	凹石	砂岩	15.8	6.4	4.1	544.8	
793	SI66	凹石	砂岩	11.1	6.6	4.8	448.6	
794	SJ4	凹石	砂岩	10.7	5.8	4.3	376.3	
795	F5 N 4200	凹石	砂岩	11.8	6.7	4.5	494.5	

掲載番号	出土位置※	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	分類
796	D4 N 4035	台石	砂岩	12.9	15.5	2.4	943.1	
797	SI23	台石	砂岩	28.7	26.9	6.4	7300	
798	SI14	台石	砂岩	30.6	43.4	5.0	7600	
799	SI4	台石	砂岩	36.5	32.7	7.7	15000	
800	E3 N	台石	砂岩	43.8	40.0	7.0	17900	
801	SU2	台石	砂岩	71.6	34.7	7.5	19335	
802	SU2	台石	砂岩	59.1	56.1	7.3	29700	

※ 遺構あるいは Gr. / 層 / 取り上げ番号

第 20 表 石器計測表 (2)

# 第IV章 自然科学分析の結果

株式会社 古環境研究センター

## 第1節 はじめに

調査区南東端における第XI層から第VII層までの土壌試料をもとに植物珪酸体分析および花粉分析を、炉穴や集石遺構から採取した炭化材や縄文早期土器付着物をもとに放射性炭素年代測定を、古墳時代の土坑墓・地下式横穴墓から採取した木片や炉穴や集石遺構から採取した炭化材をもとに樹種同定を、集石遺構や土坑から採取した炭化種実類をもとに種実同定を行った。

## 第2節 植物珪酸体分析

### 1 試料・分析法

分析試料は、調査区南東端において第XI層から第VII層までの層準から採取された7点である。試料採取箇所を分析結果の土層断面図(第180図)に示す。なお、テフラ(火山灰)については層相や堆積状況などから判断されたものであり、理化学分析による同定は行われていない。テフラの名称や年代は、新編火山灰アトラス(町田・新井, 2003)を参照した。植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法(藤原, 1976)を用いて行った。

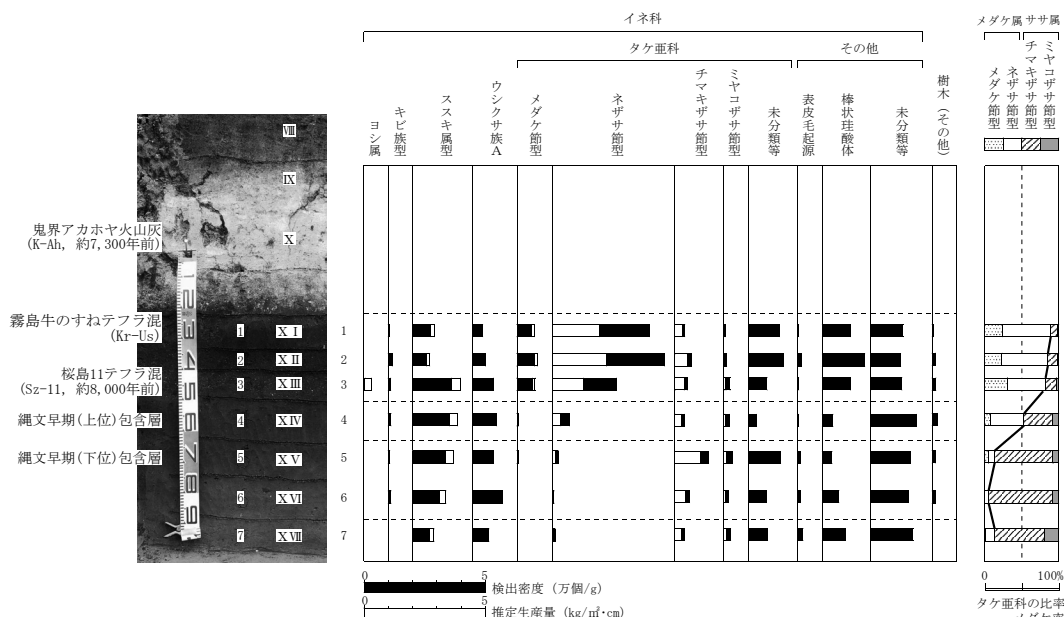
### 2 分析結果

検出された植物珪酸体の分類群や植物珪酸体の検出状況は第21表・写真9のとおりである。

### 3 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

第VII層から縄文時代早期包含層(下位)の第XV層にかけては、ススキ属やチガヤ属をはじめ、ササ属(おもにチマキザサ節)なども生育する草原的な環境であったと考えられ、第VII層より上位では周辺に何らかの樹木(落葉樹)が分布していたと推定される。ササ属については、落葉樹の林床などに生育していた可能性が考えられる。

タケ亜科(竹笹類)のうち、メダケ属は温暖、ササ属は寒冷な気候の指標とされており、メダケ率(両



第180図 調査区南東端における植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)		地点・試料						
分類群	学名	調査区南東端						
		1	2	3	4	5	6	7
<b>イネ科</b>								
Gramineae								
ヨシ属	<i>Phragmites</i>			5				
キビ族型	Panicaceae type	5	16	10	11	6	11	
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	74	58	162	153	138	113	72
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	42	53	86	99	86	124	67
<b>タケ亜科</b>								
Bambusoideae								
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	63	74	66	5	6		
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	407	471	268	71	23	6	11
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	42	69	51	38	143	62	39
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	5	11	25	22	34	17	28
未分類等	Others	127	143	76	33	132	73	78
<b>その他のイネ科</b>								
Others								
表皮毛起源	Husk hair origin	5	16	5	5	11	11	22
棒状珣酸体	Rod-shaped	116	175	116	44	40	68	95
茎部起源	Stem origin							
未分類等	Others	132	122	127	186	161	153	173
<b>樹木起源</b>								
Arboreal								
ブナ科(シイ属)	<i>Castanopsis</i>							
その他	Others	5	11	15	22	11	11	
植物珣酸体総数	Total	1026	1218	1013	691	792	650	585

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m <sup>2</sup> ・cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出		
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.32
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.92 0.72 2.01 1.90 1.71 1.40 0.90
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	0.74 0.86 0.76 0.06 0.07
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	1.95 2.26 1.29 0.34 0.11 0.03 0.05
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.32 0.52 0.38 0.29 1.08 0.47 0.29
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	0.02 0.03 0.08 0.07 0.10 0.05 0.08

タケ亜科の比率 (%)		
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	24 23 30 8 5
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	65 62 51 45 8 5 12
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	10 14 15 38 79 86 68
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	1 1 3 9 8 9 19
メダケ率	Medake ratio	89 85 82 53 13 5 12

第21表 植物珣酸体分析結果

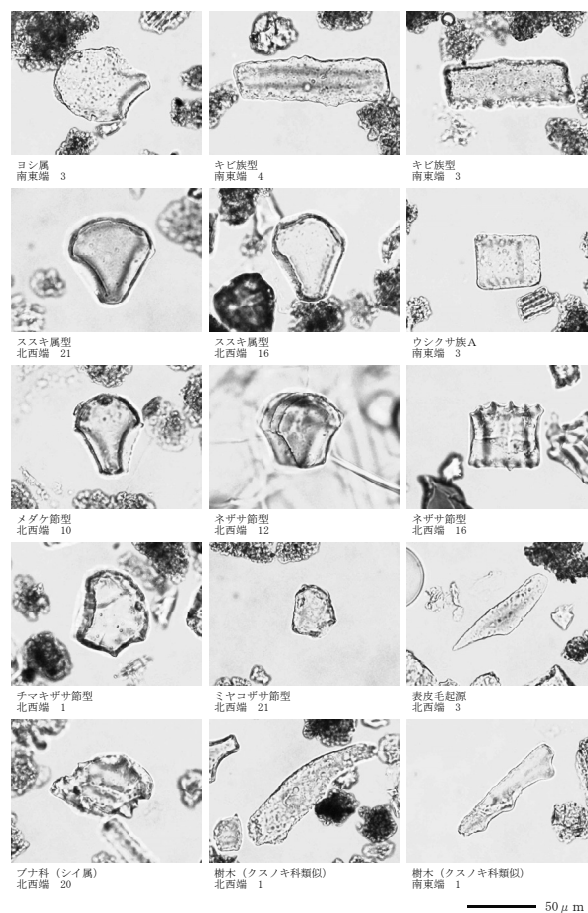


写真9 植物珣酸体(プラントオパール)

者の推定生産量の比率)の変遷は、地球規模の氷期-間氷期サイクルの変動と一致することが知られている(杉山, 2001, 2017)。また、ササ属のうちミヤコザサ節は冬季の乾燥に適応しており、太平洋側などの積雪の少ないところに分布しているが、チマキザサ節やチマキザサ節は冬季の乾燥に弱く、日本海側などの多雪地帯に分布している(室井, 1960, 鈴木, 1996)。ここでは、ササ属のチマキザサ節型が優勢であり、メダケ率が10%前後と低いことから、当時は冷涼で積雪(降水量)の比較的多い気候環境であったと推定される。ササ属などの笹類は常緑であることから、大半の植物が落葉または枯死する秋から冬にかけてはシカ類などの草食動物の重要な食物となっている(高槻, 1992)。遺跡周辺にこれらの笹類が存在したことは、当時の動物相を考える上でも重要と考えられる。

縄文時代早期包含層(上位)の第XIV層でも、ススキ属やチガヤ属を主体とした草原的な環境が継続されていたと考えられるが、タケ亜科ではメダケ属(おもにネザサ節)の増加に伴ってササ属が減少し、メダケ率が53%まで上昇している。また、桜島11テフラ(Sz-11, 約8,000年前)混の第XIII層にかけては、メダケ属(おもにネザサ節)が大幅に増加し、メダケ率が82%まで上昇している。このようなタケ亜科の植生変化は、縄文時代早期における気候温暖化に対応していると考えられる。

これらのイネ科植物は日当たりの悪い林床では生育が困難であり、ススキ属やチガヤ属の草原が維持されるためには定期的な刈り取りや火入れ(焼き払い)が必要とされている(堀田, 1991, 近藤, 1995)。このことから、当時は火入れなど人間による植生干渉が行われていた可能性が考えられる。また、このような植生環境下で土壤中に多量の有機物が蓄積され、炭素含量の高い黒色土壌(黒ボク土)が形



成されたと考えられる(杉山ほか, 2002)。

第Ⅱ層から霧島牛のすねテフラ下部(Kr-UsL)混の第Ⅰ層にかけては、メダケ属(おもにネザサ節)を主体としてススキ属、チガヤ属、キビ族なども生育する草原的な環境が継続されていたと考えられ、遺跡周辺には何らかの樹木が生育していたと推定される。

花粉分析の結果によると、南九州では約8,500年前(較正年代では約9,500年前)にはシイ林を中心とする照葉樹林が成立していたと考えられており(松下, 1992)、植物珪酸体分析でも同様の結果が得られている(杉山, 1999)。本遺跡では鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah, 約7,300年前)下位の第Ⅰ層でも照葉樹(シイ属、アカガシ亜属、クスノキ科など)に由来する植物珪酸体が検出されず、花粉分析(第3節)でも照葉樹が認められないことから、火入れなどの人間による植生干渉が照葉樹林の分布拡大を妨げる一因となった可能性が考えられる(杉山ほか, 2002)。

### 第3節 花粉分析

#### 1 試料・分析法

分析試料は、調査区南東端の第Ⅱ層から第Ⅳ層までの層準から採取された6点である。これらは、植物珪酸体分析に用いられたものと同じ試料である。花粉の分離抽出は、中村(1967)の方法をもとに行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。

#### 2 分析結果

検出された分類群は、樹木花粉5、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉8、シダ植物孢子1形態の計16分類群である。分析結果を第22表に示し、主要な分類群について顕微鏡写真を写真10に示す。

#### 3 花粉分析から推定される植生と環境

下位の第Ⅱ層から縄文時代早期包含層(下位)の第Ⅰ層にかけては、花粉があまり検出されないことから植生や環境の詳細な推定は困難であるが、キク亜科、セリ亜科、タンポポ科、ヨモギ属などの草本類が生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境が示唆され、植物珪酸体分析で推定された草原的な環境と整合している。なお、第Ⅰ層で検出されたマメ科やアブラナ科は、花粉生産量が少なく飛散しに

分類群	和名	調査区南東端					
		1	2	3	4	5	6
Arboreal pollen	樹木花粉						
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ		1				
<i>Castanea crenata</i>	クリ		1				
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	1				1	
<i>Mallotus japonicus</i>	アカメガシワ						1
<i>Zanthoxylum</i>	カンショウ属						1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉						1
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科		1				
Leguminosae	マメ科					2	
Nonarboreal pollen	草本花粉						
Gramineae	イネ科	4		1		1	
<i>Ranunculus</i>	キンボウグ属		1	1			
Cruciferae	アブラナ科					1	
Apioidae	セリ亜科					4	9
Labiateae	シソ科						1
Lactucoideae	タンポポ科			1		3	3
Asteroidae	キク亜科					2	49
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	2	4	1			4
Arboreal pollen	樹木花粉	1	2	0	0	1	2
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	1	0	0	2	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	6	6	4	0	11	66
Total pollen	花粉総数	7	9	4	0	14	88
Pollen frequencies of 1cm <sup>2</sup>	花粉1cm <sup>2</sup> 中の花粉密度	0.6	0.9	0.4	-	1.3	5.0
	×10 <sup>-2</sup> ×10 <sup>-2</sup> ×10 <sup>-2</sup> ×10 <sup>-2</sup> ×10 <sup>-2</sup> ×10 <sup>-2</sup>						
Unknown pollen	未同定花粉	0	1	0	0	2	4
Fern spore	シダ植物孢子						1
Monooleate type spore	単不飽和型孢子	3	0	0	0	1	
Total Fern spore	シダ植物孢子総数	3	0	0	0	1	0
Parasite eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Stone cell	石細胞	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion remains	消化残渣	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)
Charcoal・woods fragments	炭化物・樹木片	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)
炭化物・樹木片(炭化物・樹木片)	(×10 <sup>3</sup> )						
未分解樹木片		4.7	8.0	5.6	4.7	1.3	1.1
分解樹木片							
炭化樹木片(炭化樹木片)			0.5		0.4		

第22表 花粉分析結果

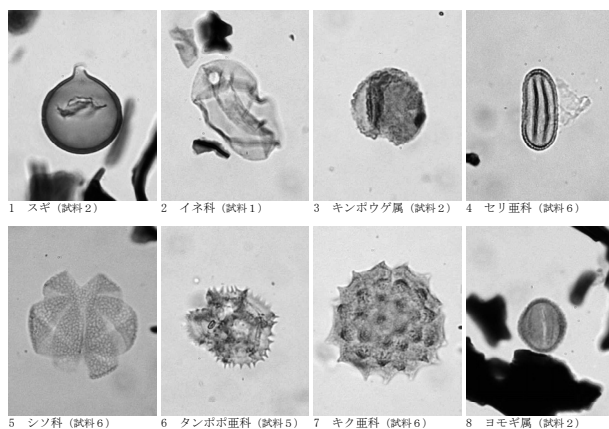


写真10 花粉

10 μm

くい虫媒花であり、集落域などの人為地に生育することが多い。花粉があまり検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。第Ⅲ層から第Ⅴ層にかけても、花粉があまり検出されないことから植生や環境の詳細な推定は困難であるが、ヨモギ属、イネ科、キンポウゲ属などの草本類が生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境が示唆され、第Ⅲ層ではスギ、クリ、第Ⅴ層ではコナラ属コナラ亜属などの樹木が生育していたと考えられる。

## 第4節 放射性炭素年代測定

### 1 試料・測定法

試料は、炉穴や集石遺構から採取された炭化材 (No. 9 ~ No. 22、No. 28 ~ No. 31) および土器付着炭化物 (外面: No. 24) の計 19 点である。試料の前処理・調整として酸-アルカリ-酸処理 (AAA 処理) を実施し、測定は加速器質量分析法 (AMS 法: Accelerator Mass Spectrometry) で行った。

### 2 測定結果

AMS 法によって得られた  $^{14}\text{C}$  濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) 年代および暦年代 (校正年代) を算出した。第 23 表にこれらの結果を示し、第 181 図に各試料の暦年校正結果 (校正曲線)、第 182 図に暦年校正年代マルチプロット図を示す。

加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定の結果、No. 9 では  $8410 \pm 30$  年 BP、No. 10 では  $8170 \pm 30$  年 BP、No. 11 では  $8240 \pm 30$  年 BP、No. 12 では  $8250 \pm 30$  年 BP、No. 13 では  $8210 \pm 30$  年 BP、No. 14 では  $8170 \pm 30$  年 BP、No. 15 では  $8290 \pm 30$  年 BP、No. 16 では  $8280 \pm 30$  年 BP、No. 17 では  $8400 \pm 30$  年 BP、No. 18 では  $8250 \pm 30$  年 BP、No. 19 では  $8220 \pm 30$  年 BP、No. 20 では  $8230 \pm 30$  年 BP、No. 21 では  $8350 \pm 30$  年 BP、No. 22 では  $8560 \pm 30$  年 BP、No. 24 では  $9490 \pm 30$  年 BP、No. 28 では  $8250 \pm 30$  年 BP、No. 29 では  $8290 \pm 30$  年 BP、No. 30 では  $8170 \pm 30$  年 BP、No. 31 では  $8200 \pm 30$  年 BP の年代値が得られた。

暦年代 (校正年代) は、No. 24 (土器付着炭化物) は BC 9120 ~ 8640 年であり、その他の試料はおおむね BC 7600 ~ 7100 年の範囲で揃っている (第 182 図)。なお、樹木 (炭化材) による年代測定結果は、樹木の伐採年もしくはそれより以前の年代を示しており、樹木の心材に近い部分や転用材が利用されていた場合は、考古学的所見よりも古い年代値となることがある。

## 第5節 樹種同定

### 1 試料・方法

試料は、土坑墓から採取された木片 (No. 1)、地下式横穴墓から採取された木片 (No. 2)、炉穴から採取された炭化材 (No. 9、No. 10)、および集石遺構から採取された炭化材 (No. 11 ~ No. 22、No. 28 ~ No. 31) の計 20 点である。試料を洗浄して付着した異物を除去、木材の基本的三断面 (横断面: 木口、放射断面: 柾目、接線断面: 板目) の切片を作成、生材は生物顕微鏡、炭化材は落射顕微鏡で観察し (40 ~ 1000 倍)、木材の解剖学的形質や現生標本との対比で樹種を同定した。

### 2 結果・所見

樹種同定の結果、コナラ属コナラ節 12 点、カヤ 3 点、コナラ属アカガシ亜属 1 点、スダジイ 1 点、クスノキ 1 点、クリ 1 点、サクラ属 1 点が同定された。

最も多く認められたコナラ属コナラ節 (ナラ類) は、強靱で弾力に富み、建築部材や農具などに用い

られる。また、火持ちが良く燃料材として優良である。コナラ属コナラ節の種実(ドングリ)は食用としても有用である。温帯を中心に広く分布する落葉広葉樹で、日当たりの良い山野に生育する。

カヤが認められたのは、土坑墓と地下式横穴墓の木片(No.1、No.2)、および集石遺構の炭化材(No.14)である。カヤは、耐朽・保存性が高く水湿に耐える材で、加工が容易で割裂し易い。表面の仕上がりが良好で光沢が出ることから、現在では碁盤や将棋盤などに利用される。また、均質緻密で堅硬であり弾性が強いことから弓などにも用いられる。耐湿性が高いことから建築部材や船舶材などにも利用されるが、成長速度が遅く生産量が少ないことから利用例は少ない。カヤなどの針葉樹は、火付きの良さや瞬発的な火力の強さがあり、焚き付け材として利用される。カヤは、主に温帯下部の暖温帯に分布する常緑針葉樹で、谷沿いなどやや湿潤なところに生育しており、宮崎県域は生育に適した環境である。

試料 No.	測定No. IAAA-	試料の詳細	種類	前処理 測定法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	暦年較正用 年代(年BP)	暦年代(較正年代)	
								1 $\sigma$ (68.2%確率)	2 $\sigma$ (95.4%確率)
9	210839	SP2	炭化材	AAA処理 AMS法	-23.45±0.18	8410±30	8405±32	cal BC 7534-7471 (66.7%) cal BC 7388-7385 (1.6%)	cal BC 7578-7557 (4.0%) cal BC 7548-7453 (75.4%) cal BC 7413-7361 (16.0%)
10	210840	SP3	炭化材	AAA処理 AMS法	-26.49±0.17	8170±30	8171±32	cal BC 7243-7237 (2.2%) cal BC 7184-7073 (66.1%)	cal BC 7318-7225 (24.0%) cal BC 7195-7065 (71.5%)
11	210841	SI5	炭化材	AAA処理 AMS法	-25.39±0.16	8240±30	8240±32	cal BC 7331-7183 (68.3%)	cal BC 7452-7416 (5.5%) cal BC 7361-7139 (86.1%) cal BC 7103-7082 (3.9%)
12	210842	SI25	炭化材	AAA処理 AMS法	-26.37±0.20	8250±30	8251±33	cal BC 7341-7244 (43.4%) cal BC 7236-7184 (24.9%)	cal BC 7457-7406 (10.2%) cal BC 7374-7172 (80.6%) cal BC 7161-7141 (2.2%) cal BC 7101-7084 (2.4%)
13	210843	SI10	炭化材	AAA処理 AMS法	-26.81±0.18	8210±30	8205±33	cal BC 7312-7226 (38.6%) cal BC 7195-7171 (11.6%) cal BC 7164-7141 (10.0%) cal BC 7101-7084 (8.1%)	cal BC 7331-7076 (95.4%)
14	210844	SI30	炭化材	AAA処理 AMS法	-23.01±0.22	8170±30	8173±32	cal BC 7244-7235 (3.6%) cal BC 7184-7074 (64.6%)	cal BC 7319-7224 (25.3%) cal BC 7196-7065 (70.1%)
15	210845	SI32	炭化材	AAA処理 AMS法	-25.96±0.20	8290±30	8289±33	cal BC 7461-7400 (28.9%) cal BC 7376-7316 (28.2%) cal BC 7224-7196 (11.1%)	cal BC 7476-7246 (80.5%) cal BC 7235-7187 (14.9%)
16	210846	SI87	炭化材	AAA処理 AMS法	-27.52±0.17	8280±30	8284±32	cal BC 7458-7404 (25.9%) cal BC 7374-7313 (28.8%) cal BC 7226-7194 (13.6%)	cal BC 7472-7246 (78.7%) cal BC 7235-7186 (16.8%)
17	210847	SI78	炭化材	AAA処理 AMS法	-24.96±0.19	8400±30	8399±33	cal BC 7531-7468 (61.0%) cal BC 7394-7381 (7.2%)	cal BC 7576-7560 (2.7%) cal BC 7545-7450 (71.7%) cal BC 7431-7425 (0.6%) cal BC 7416-7356 (20.5%)
18	210848	SI51	炭化材	AAA処理 AMS法	-25.41±0.16	8250±30	8251±32	cal BC 7341-7245 (43.4%) cal BC 7235-7185 (24.9%)	cal BC 7457-7406 (10.0%) cal BC 7374-7172 (81.1%) cal BC 7161-7141 (2.1%) cal BC 7101-7084 (2.3%)
19	210849	SI71	炭化材	AAA処理 AMS法	-24.66±0.20	8220±30	8222±33	cal BC 7325-7216 (51.1%) cal BC 7206-7175 (14.1%) cal BC 7096-7088 (3.1%)	cal BC 7448-7436 (1.3%) cal BC 7350-7128 (85.2%) cal BC 7116-7077 (9.0%)
20	210850	SI84	炭化材	AAA処理 AMS法	-25.24±0.24	8230±30	8225±32	cal BC 7326-7214 (53.9%) cal BC 7207-7177 (14.3%)	cal BC 7449-7434 (1.6%) cal BC 7352-7131 (86.1%) cal BC 7111-7078 (7.7%)
21	210851	SI62	炭化材	AAA処理 AMS法	-25.82±0.15	8350±30	8350±33	cal BC 7491-7451 (26.9%) cal BC 7429-7425 (1.6%) cal BC 7417-7357 (39.7%)	cal BC 7521-7331 (95.4%)
22	210852	SI98	炭化材	AAA処理 AMS法	-25.22±0.18	8560±30	8557±33	cal BC 7596-7577 (51.5%) cal BC 7559-7545 (16.7%)	cal BC 7601-7535 (95.4%)
24	210854	掲載番号 35	土器付着 炭化物 (外面)	AAA処理 AMS法	-23.88±0.15	9490±30	9487±34	cal BC 9108-9101 (2.2%) cal BC 9047-9025 (9.1%) cal BC 8826-8731 (54.7%) cal BC 8722-8715 (2.2%)	cal BC 9119-9076 (8.7%) cal BC 9061-9011 (13.1%) cal BC 8919-8903 (1.3%) cal BC 8854-8698 (65.4%) cal BC 8680-8636 (7.0%)
28	210855	SI26	炭化材	AAA処理 AMS法	-25.88±0.20	8250±30	8249±33	cal BC 7339-7244 (43.1%) cal BC 7236-7184 (25.2%)	cal BC 7456-7408 (9.3%) cal BC 7372-7172 (81.0%) cal BC 7162-7141 (2.6%) cal BC 7102-7084 (2.6%)
29	210856	SI13	炭化材	AAA処理 AMS法	-24.33±0.19	8290±30	8285±32	cal BC 7459-7402 (26.6%) cal BC 7375-7313 (28.7%) cal BC 7226-7195 (13.0%)	cal BC 7473-7246 (79.1%) cal BC 7235-7187 (16.4%)
30	210857	SI91	炭化材	AAA処理 AMS法	-26.86±0.17	8170±30	8166±32	cal BC 7182-7072 (68.3%)	cal BC 7317-7226 (20.7%) cal BC 7194-7063 (74.8%)
31	210858	SI61	炭化材	AAA処理 AMS法	-22.06±0.15	8200±30	8199±32	cal BC 7311-7273 (15.7%) cal BC 7257-7227 (14.1%) cal BC 7194-7138 (27.2%) cal BC 7104-7081 (11.3%)	cal BC 7326-7213 (43.4%) cal BC 7208-7076 (52.1%)

第 23 表 放射性炭素年代測定結果

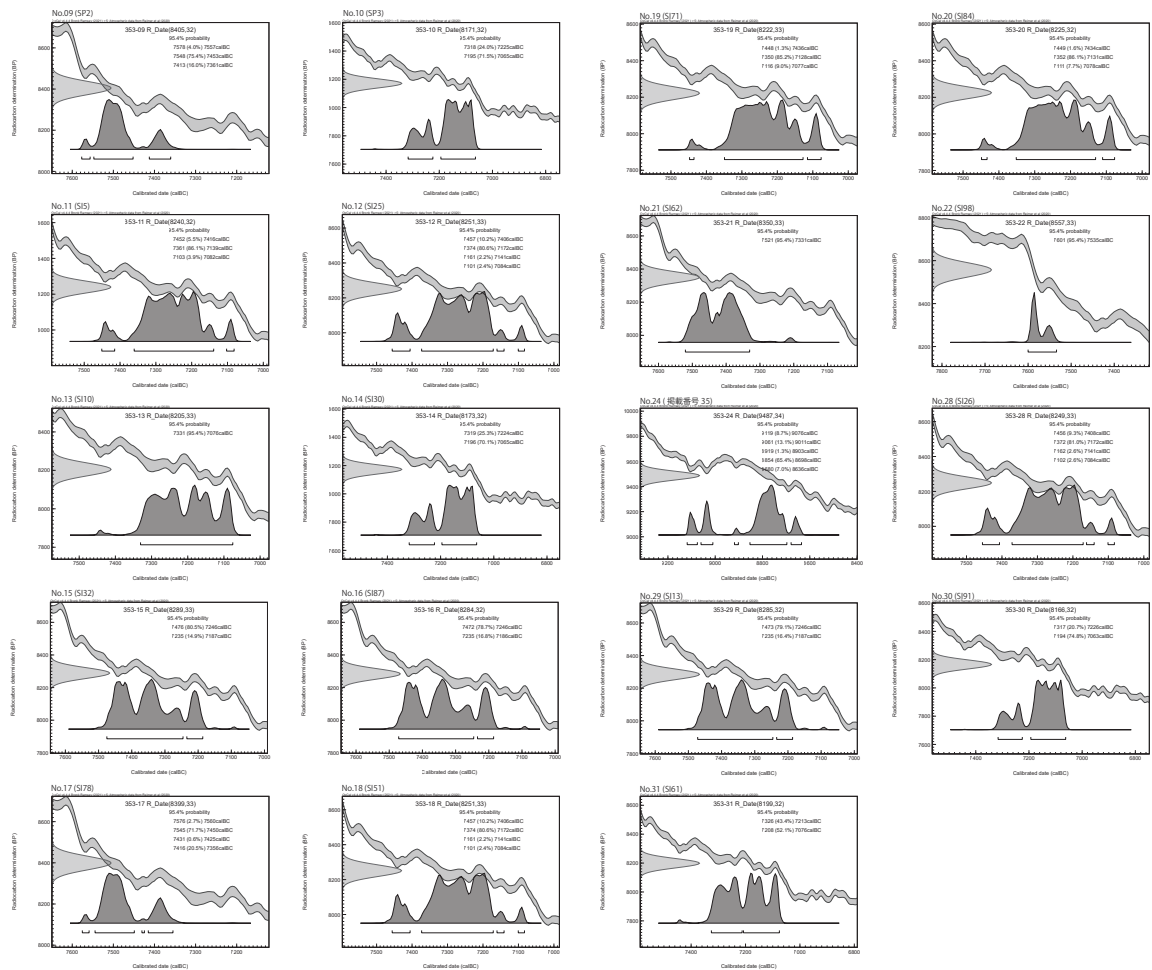
コナラ属アカガシ亜属（カシ類）は、強靱で弾力に富むことから建築部材や農具などに用いられ、火力が強く火持ちが良いことから燃料材（薪炭材）としても優良である。照葉樹林の主要構成要素であり、弥生時代以降の西南日本ではとくに農具に用いられることが多い。

スダジイは、やや重硬で耐朽・保存性は低い材であるが、スダジイを含むシイ属は九州では古くから建築部材などに広く利用された。また、スダジイは身近な里山に自生し、伐採後の更新が早く燃焼時の火力が強いことから、炭や薪に利用された。シイ属の種実（ドングリ）は、アク抜きが必要がなく、そのままでも食用となる。

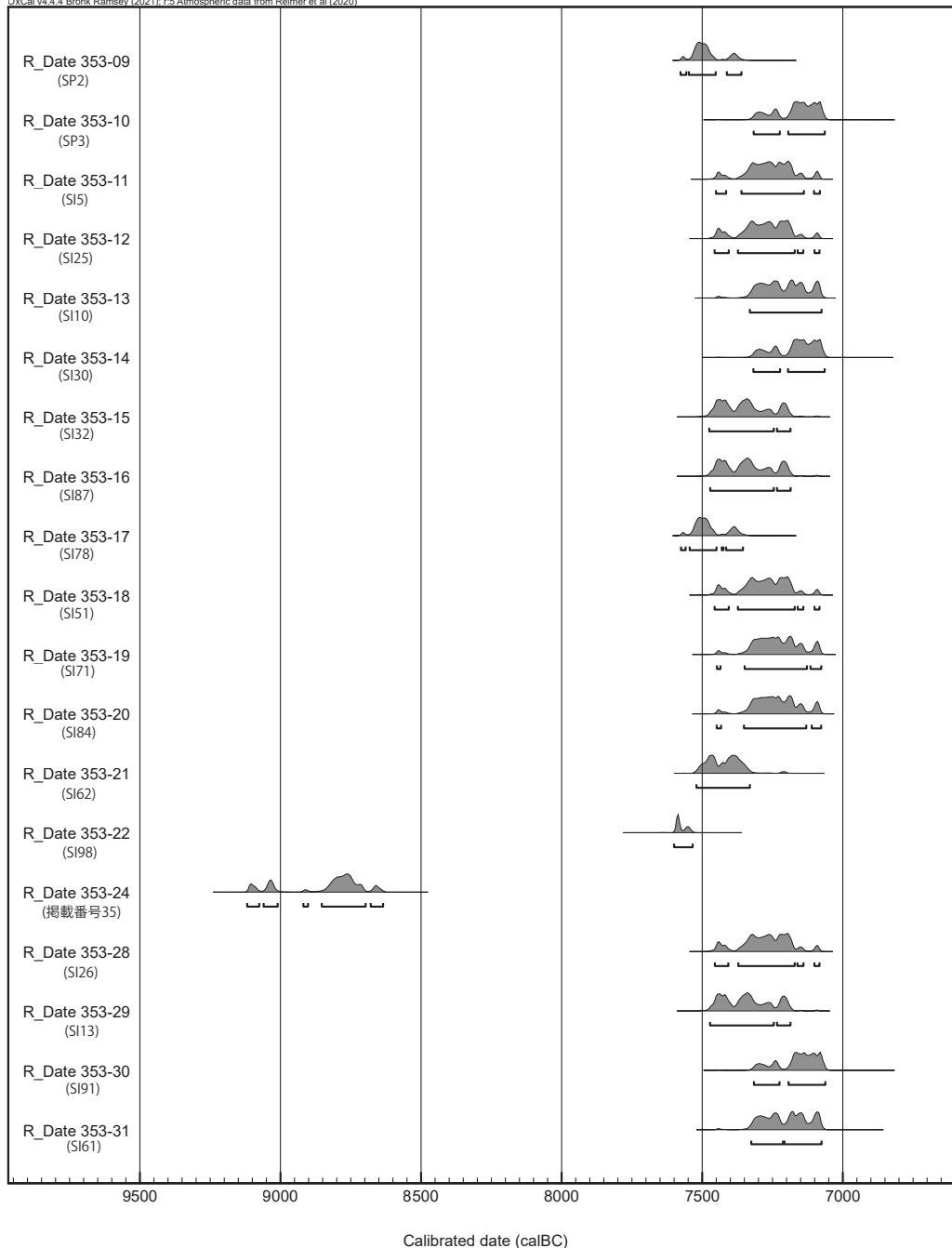
クスノキは、堅硬で耐朽性が高い材である。杵で叩いてもひび割れが起こりにくい長所があり、槽、鉢などの容器、鋏や舟などの用材、および柱などの建築部材、井戸側板などに利用された。クスノキを含むクスノキ科の木材は、割裂は難しいが火持ちが良くきれいに燃え、灰も少ない特徴がある。

クリは、重硬で耐朽性が高く、水湿によく耐え保存性の極めて高い材で、柱材などの建築部材としての利用が多い。クリの果実は優良な食物として利用される。クリは温帯に広く分布する落葉広葉樹であり、乾燥した台地や丘陵地を好み、二次林要素でもある。

サクラ属は、耐朽・保存性の高い材で、切削・加工の難度は中庸で、概して堅硬な材である。サクラ属の薪材は、火持ちなどはカシ類やナラ類に劣るが、比較的早く着火することから中薪に利用された。



第 181 図 暦年較正結果



第 182 図 暦年較正年代マルチプロット図

試料No.	遺構	種類	結果 (学名/和名)
1	SD1	木片	<i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc. カヤ
2	ST1	木片	<i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc. カヤ
9	SP2	炭化材	<i>Prunus</i> サクラ属
10	SP3	炭化材	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
11	SI5	炭化材	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
12	SI25	炭化材	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
13	SI10	炭化材	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
14	SI30	炭化材	<i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc. カヤ
15	SI32	炭化材	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
16	SI87	炭化材	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl. クスノキ
17	SI78	炭化材	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
18	SI51	炭化材	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
19	SI71	炭化材	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
20	SI84	炭化材	<i>Castanopsis sieboldii</i> Hatusima スダジイ
21	SI62	炭化材	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
22	SI98	炭化材	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
28	SI26	炭化材	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
29	SI13	炭化材	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
30	SI91	炭化材	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
31	SI61	炭化材	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i> コナラ属アカシ亜属

第 24 表 樹種同定結果

試料No.	遺構	分類群		部位	個数	備考
		学名	和名			
3-1	SI25	<i>Allium macrostemon</i>	ノビル	鱗茎	1	
3-2	SI25	<i>Allium macrostemon</i>	ノビル	鱗茎	1	
4	SI166	<i>Allium macrostemon</i>	ノビル	鱗茎	1	
5	SI89	<i>Allium macrostemon</i>	ノビル	鱗茎	8	
				細片	(+)	
6	SC24	<i>Allium macrostemon</i>	ノビル	鱗茎	11	
				破片	54	
7-1	SC33	<i>Allium macrostemon</i>	ノビル	鱗茎	4	炭化材細片(+)
				破片	1	
7-2	SC33	<i>Allium macrostemon</i>	ノビル	鱗茎	2	炭化材細片(+)
				破片	9	
8	SC52	<i>Allium macrostemon</i>	ノビル	鱗茎	1	炭化材細片(+)

第 25 表 炭化種実同定結果

## 第6節 種実同定

### 1 試料・方法

試料は、集石遺構や土坑から採取された炭化種実類8ケース (No.3～No.8 :No.3とNo.7は各2ケース) である。種実類について肉眼および双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

### 2 結果・所見

分析結果を第25表に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載し、主要な個体について写真を示す。種実同定の結果、集石遺構や土坑から採取された炭化種実類は、いずれもヒガンバナ科(旧ユリ科)ネギ属ノビルと同定された。ノビルは、日当たりの良い原野や道ばたに生育する多年草で、葉とともに地下5～10cmにできる鱗茎が食用や薬用になる有用植物である。

### 文献

#### 【植物珪酸体分析及び花粉分析】

- 金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p. 248-262.  
近藤錬三・佐瀬隆 (1986) 植物珪酸体, その特性と応用. 第四紀研究, 25, p. 31-63.  
近藤錬三 (1995) 日本における植物珪酸体研究とその応用. 近藤祐弘教授退官記念論文集刊行会: p. 31-56.  
杉山真二 (1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告, 第31号, p. 70-83.  
杉山真二 (1999) 植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史. 第四紀研究, 38 (2), p. 109-123.  
杉山真二 (1999) 過去約3万年間におけるササ類の植生変遷と積雪量の変動—植物珪酸体分析からみた過去のミヤコザサ線—. 日本植生史学会大会発表要旨集, p. 29-30.  
杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オパール). 考古学と植物学. 同成社, p. 189-213.  
杉山真二 (2001) テフラと植物珪酸体分析. 月刊地球, 23, p. 645-650.  
杉山真二・渡邊眞紀子・山元希里 (2002) 最終氷期以降の九州南部における黒ボク土発達史. 第四紀研究, 41 (5), p. 361-373.  
杉山真二 (2017) 植物珪酸体分析による古環境推定—タケ亜科の植生変遷と気候および積雪量の変動—. 文化財技術研究会編. 文化財学研究, 2, p. 1-14.  
島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.  
鈴木貞雄 (1996) タケ科植物の概説. 日本タケ科植物図鑑. 聚海書林. 8-27.  
高槻成紀 (1992) 北に生きるシカたち—シカ、ササそして雪をめぐる生態学—. どうぶつ社.  
藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) —数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—. 考古学と自然科学, 9, p. 15-29.  
堀田満 (1991) 日本列島の植物. カラー自然ガイドⅡ, 保育社: p. 68-69.  
中村純 (1967) 花粉分析. 古今書院, p. 82-110.  
中村純 (1980) 日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.  
松下まり子 (1992) 日本列島太平洋岸における完新世の照葉樹林発達史. 第四紀研究, 31 (5), p. 375-387.  
室井緯 (1960) 竹笹の生態を中心とした分布. 富士竹類植物園報告, 5, p. 103-121.

#### 【放射性炭素年代測定】

- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」. 日本第四紀学会, p. 3-20.  
中村俊夫 (2003) 放射性炭素年代測定法と暦年代較正. 環境考古学マニュアル. 同成社, p. 301-322.  
Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), p. 337-360.  
Paula J Reimer et al., (2020) The Int20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 kBP). Radiocarbon, 62 (4), p. 725-757.

#### 【樹種同定】

- 伊東隆夫・山田昌久 (2012) 木の考古学. 出土木製品用材データベース. 海青社, 449p.  
島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司 (1985) 木材の構造. 文永堂出版, 290p.  
島地 謙・伊東隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧. 雄山閣, 296p.  
山田昌久 (1993) 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史. 植生史研究会特別1号. 植生史研究会, 242p.

#### 【種実同定】

- 笠原安夫 (1985) 日本雑草図説, 養賢堂, 494p.  
佐々木由香・米田恭子 (2012) 王子山遺跡の炭化鱗茎の同定. 王子山遺跡. 都城市文化調査報告書第107集, p. 90-91.  
佐々木由香・米田恭子・小林和貴 (2017) 縄文・弥生時代出土鱗茎の同定方法の開発と利用例. 日本植生史学会第34回大会要旨集, p. 80-81.  
南木睦彦 (1993) 葉・果実・種子. 日本第四紀学会編, 第四紀試料分析法, 東京大学出版会, p. 276-283.  
中沢道彦 (2005) 縄文時代遺跡出土炭化球根類に関する覚書 (1), 佐久考古通信No.98, 佐久考古学会, p. 9-15.  
南木睦彦 (1993) 葉・果実・種子. 日本第四紀学会編, 第四紀試料分析法, 東京大学出版会, p. 276-283.

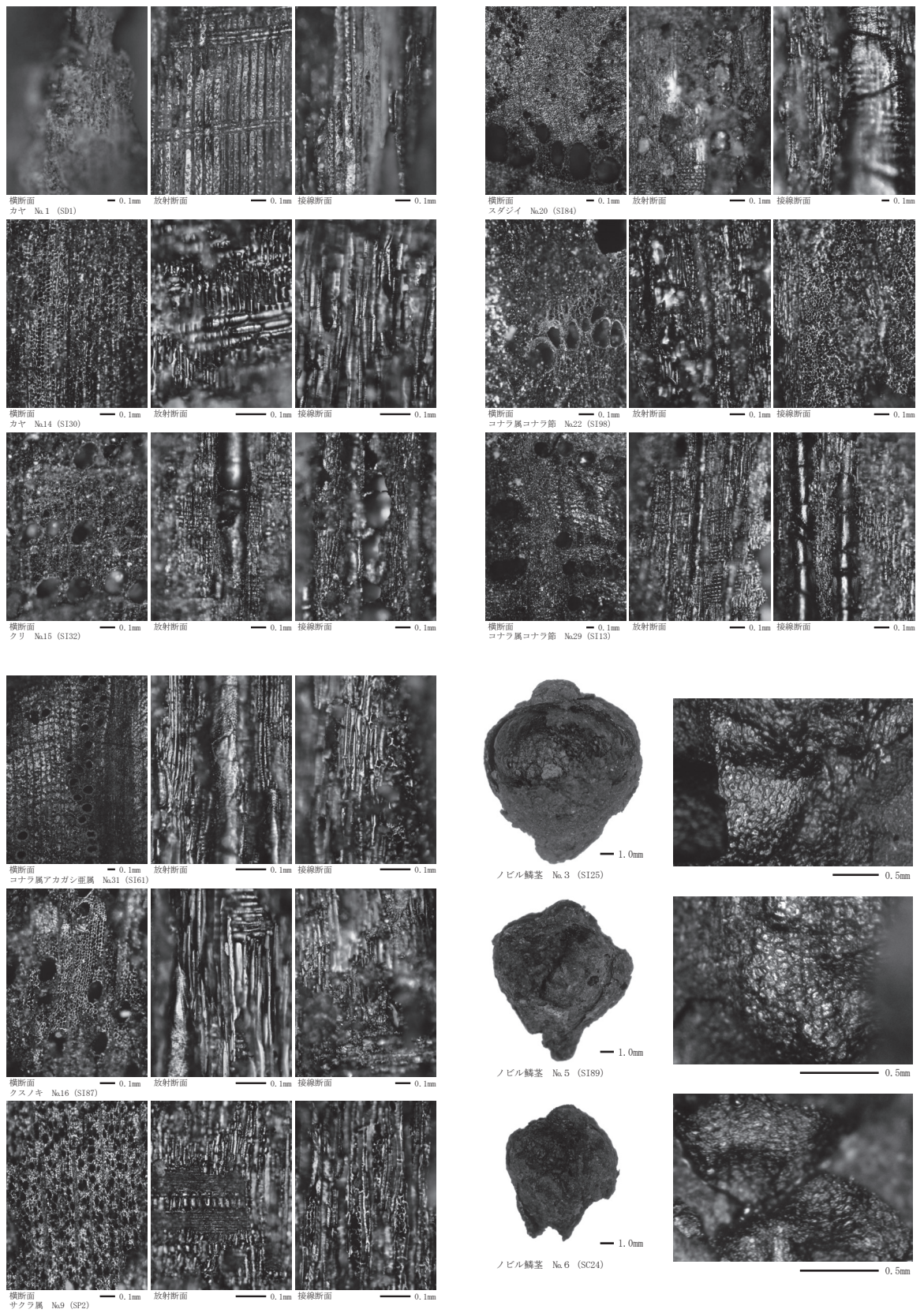


写真 11 樹種同定及び種実同定における試料(拡大図)

## 第V章 地下式横穴墓出土の人骨調査

鹿児島女子短期大学 竹中正巳

### 第1節 はじめに

上平遺跡では、2020年6月、地下式横穴墓(ST1)から1体の古墳時代人骨が出土した。この人骨について、1次資料化の作業を行い、人類学的に精査した。人骨の出土状況および観察と計測の所見を以下に記す。

### 第2節 地下式横穴墓から出土した人骨の所見

1体のみが出土した。保存状態はよくない。遺存している人骨の部位は頭蓋(脳頭蓋・下顎骨・歯)、左鎖骨、左第1肋骨、椎骨(胸椎・腰椎)、右寛骨、左右大腿骨である。仰臥伸展位で埋葬されていた。赤色顔料が前頭部から胸椎にかけてと腰椎から骨盤部にかけての2つの範囲に広がり確認された。副葬品は、約1mの長さの鉄刀が遺存していた。

性別は右側頭骨の乳様突起が大きいことから男性と判定される。年齢は、ラムダ縫合、矢状縫合および前頭縫合の内板に癒合が認められること、遺存歯の咬耗がMartinの2度であることから、熟年と考えられる。

頭蓋の計測値を第26表に、頭蓋形態小変異の観察結果を第27表に示す。下顎骨は前歯部の歯槽が壊れていることから計測できないが、下顎体高や下顎の観察結果から、オトガイ高も低いこと分かる。下顎の高さが低いので、顔高や上顔高も低いであろうことが、推測される。右の外耳道が観察できるが、骨腫は認められない。

遺存する下顎の歯式を下に示す。遺存している歯に、う蝕は認められない。

××× 543 ×× ××× 4 ●●●× ●：歯槽閉鎖 ・：歯根のみ遺存

M No.	人骨番号	上平遺跡 ST-01墓人骨
	性別	男性
	年齢	熟年
27	正中矢状頭頂弧長	142
30	正中矢状頭頂弦長	115
30/27	矢状頭頂示数	81.0
69(1)	下顎体高(右)	28
69(3)	下顎体厚(左)	14

第26表 頭蓋の計測値(mm)及び示数

人骨番号	上平遺跡 ST-01墓人骨	
	性別	男性
	年齢	熟年
		右 左
ラムダ小骨	-	-
ラムダ縫合骨	+	+
インカ骨	-	-
アステリオン小骨	-	-
後頭乳突縫合骨	-	-
前頭縫合残存	-	-
外耳道骨瘤	-	-
フシケ孔	-	-
副オトガイ孔	-	-
下顎隆起	-	+

第27表 頭蓋形態小変異の出現状況

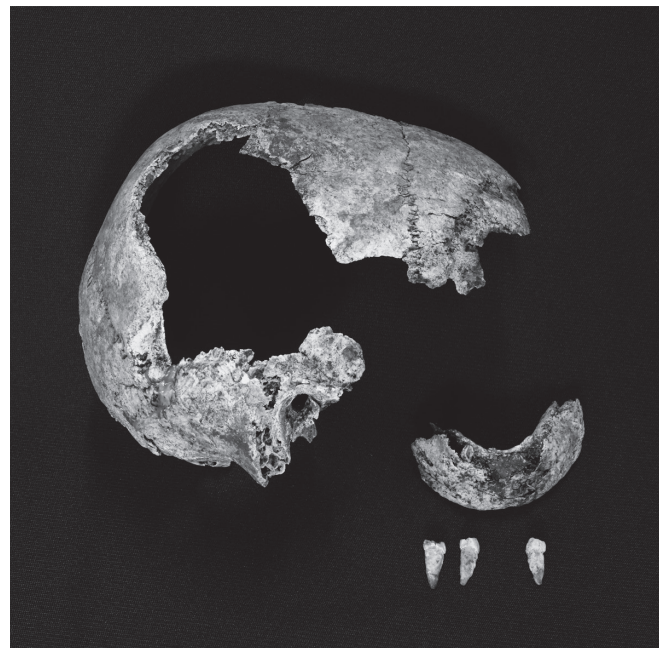


写真12 ST1出土熟年男性人骨(頭蓋)



## 第VI章 総括

上平遺跡では、縄文時代早期を中心に、そのほか縄文時代後～晩期、古墳時代中～後期の遺構・遺物を確認した。そこで、本章では、確認された遺構・遺物をもとに、各時代の様相について考察を加えながら概観する。

### 第1節 縄文時代早期の様相

#### 1 遺構

第Ⅷ層である桜島11テフラ（Sz-11、約8,000年前）層下位にあたる第Ⅳ層と第Ⅴ層から、平地式建物跡5軒、竪穴状遺構4基、土坑62基、陥し穴8基、炉穴7基、配石遺構2基、集石遺構98基、合計186基の遺構を検出した。これらの遺構の構築時期については、検出層位や遺構の形状等から分離することが困難であった。そこで、炉穴や集石遺構から検出した18点の炭化物について放射性炭素年代測定を実施した（第28表）。測定結果は<sup>14</sup>C年代とする。

上平遺跡で検出した遺構の構築時期については、この年代測定の結果に加え、出土土器の型式を踏まえ、以下のように位置づけた。

平地式建物跡は5基検出された。いずれも柱穴内から遺物が出土していないため、構築時期を判断するのは難しい。形態を見ると、柱穴列のみ確認されたもの（SB1）、柱穴列の内部または外部に柱穴が確認できるもの（SB2・SB4・SB5）、柱穴列の内部に土坑を有するもの（SB3）に分類できる。特に、3号平地式建物跡（SB3）については、土坑の上層から前平式土器がまとまって出土した。これらが遺構に伴う土器とすれば、少なくとも3号平地式建物跡（SB3）は縄文時代早期前葉に相当すると考えられる。

竪穴状遺構は4基検出された。平面形は隅丸長方形を基本とする。埋土内から石坂式土器や別府原式土器が出土しているが、埋土の上層から出土したものが多いため、遺構に伴うものかどうか判断が困難である。

土坑は62基検出された。形態は様々である。土坑の中には、埋土に炭化物を含むものもあるが放射性炭素年代測定は実施しておらず、埋土内から出土した土器も小片が多かったり複数型式土器を含んでいたことから、後述する2基の土坑を除けば構築時期を判断するのは難しい。埋土内から出土した土器から構築時期を判断すると、23号土坑（SC23）からは2個体の手向山式土器が重なって出土し、縄文時代早期中葉に相当すると考える。類例として鹿児島県天神段遺跡の2号土器埋設遺構があり、手向山1式土器の範疇である2個体（壺形土器と深鉢形土器）が入れ子状になって出土している（鹿児島県教育委員会ほか 2018）。また、59号土坑（SC59）の埋土中層に1個体の前平式土器片が方形に組み

遺構名	測定結果
3号炉穴	8170 ± 30
30号集石遺構	8170 ± 30
91号集石遺構	8170 ± 30
61号集石遺構	8200 ± 30
10号集石遺構	8210 ± 30
71号集石遺構	8220 ± 30
84号集石遺構	8230 ± 30
5号集石遺構	8240 ± 30
25号集石遺構	8250 ± 30
26号集石遺構	8250 ± 30
51号集石遺構	8250 ± 30
87号集石遺構	8280 ± 30
13号集石遺構	8290 ± 30
32号集石遺構	8290 ± 30
62号集石遺構	8350 ± 30
78号集石遺構	8400 ± 30
2号炉穴	8410 ± 30
98号集石遺構	8560 ± 30

第28表 遺構出土の炭化物年代測定結果

た状態で出土し、縄文時代早期前葉に相当すると考える。

陥し穴は8基検出された。断面形は箱状または逆台形状を基本とし、底面には全て小穴を有する。小穴は逆茂木痕と考えられ、1号陥し穴(SS1)には1箇所、5号陥し穴には9箇所、それ以外には2箇所確認できた。5号陥し穴を除くと、最深部までの深さが2m前後で、始良Tn火山灰層(約30,000年前)を底面とする。埋土上層から石坂式土器や別府原式土器が出土したのがあり、遺構の埋没時期を示すものであろう。後述のとおり、上平遺跡では縄文時代早期前葉から中葉における複数型式の土器が出土しているが、前平式土器から石坂式土器までに登場する加栗山式土器や吉田式土器などは出土していない。ある型式土器が出土するということは、その時期に集落等が近くに存在していたと言える。逆を言えば、ある型式土器が出土していないということは、その時期に集落等が近くに存在しないということになる。集落等の生活空間の中に陥し穴を構築しないという認識が正しければ、上平遺跡における陥し穴の構築時期は加栗山式期から吉田式期までの時期と重なる可能性がある。

炉穴は7基検出された。燃焼部が単独のもの(SP1・2・4・5・6・7)と切り合いによる群をなすもの(SP3)とがある。1号炉穴(SP1)は埋土内から石坂式や別府原式土器のほかに、押型文が多数出土した。特に、山形押型文(392)がまとまって出土し、床面から格子目押型文(409)が出土している。山形押型文は山下大輔が提唱する南九州の押型文土器編年における第4段階(大分編年の田村式)、格子目押型文は第3段階(下剥峯・桑ノ丸式後半)に相当するものである(山下 2009)。2号炉穴(SP2)の燃焼部から採取した炭化材の放射性炭素年代測定の結果は8410±30年BPである。3号炉穴(SP3)の第2煙道から採取した炭化材の放射性炭素年代測定の結果は8170±30年BPである。4～6号炉穴からは構築時期を判断するための情報が得られなかった。放射性炭素年代測定の結果から、2号炉穴の後に3号炉穴が使用されたと考えられる。出土土器の型式を踏まえると、1号炉穴はこれらよりも古い時期に使用された可能性がある。

配石遺構は2基検出された。長径20～30cm大の礫が向かい合うように位置する1号配石遺構(SU1)に比べ、2号配石遺構(SU2)は長径50cmを越える超大型の礫を中心に、大型や中型の礫が集中する。いずれの遺構からも構築時期に関する情報は得られなかった。

集石遺構は98基検出された。第Ⅲ章の第7節にあるとおり、礫の密度、掘り込みの有無、配石の有無により分類した。遺構から採取した炭化材の放射性年代測定を実施したところ、8560±30年BP～8170±30年BPの範囲に収まることから縄文時代早期中葉に相当すると考える。集石遺構の形態による構築時期の差は見られなかった。

以上の結果を踏まえると、第Ⅲ章では、検出した層が異なるため層順に報告したが、第Ⅳ層と第Ⅴ層で明確な時期差は確認できなかった。1～3号炉穴と集石遺構の時期は重なるため、縄文時代早期中葉に大きな集落があったと推測する。また、陥し穴は狩猟するための機能をもち、炉穴や集石遺構と同時期に構築するとは考えにくい。

## 2 遺物

### (1) 土器

上平遺跡では、一括で取り上げた土器片を含め、第Ⅳ層から第Ⅴ層を中心に総点数6,422点の土器が出土した。I～X類に分類した各類は第29表に示した土器型式に該当する。なお、第29表に示した掲載点数とは、掲載された個体の破片数であり個体数ではない。

I類土器は口縁部に刺突文を施し、胴部に横位や斜位の明瞭な貝殻条痕文をもつ円筒形の一群である。前平式土器に該当する。前平式土器については、上杉彰紀・深野信之によって細分されている(上杉・深野 2004)。上杉・深野の細分に基づくと、26は前平I式土器、27は前平II式土器に該当し、前平式土器の古い段階に位置づけられる。28～38は前平III・IV式に該当し、前平式土器の新しい段階に位置づけられる。

II類土器は口縁部に貝殻刺突文を施し、胴部を基本とする貝殻条痕文をもつ一群である。上平遺跡では、VII類土器を除けば、III類土器とともに出土数の多い土器型式になる。

II類土器は石坂式土器に該当する。石坂式土器については、口縁部の形態や文様構成によって前迫亮一によって細分されている(前迫 2003)。前迫によると、口縁部が大きく外反するものを石坂I式土器、口縁部が外へ直線的に開くか直口するものを石坂II式土器としている。前迫の細分に基づくと、48～107は石坂I式土器に、108～140は石坂II式土器に該当する。

III類土器は口縁部から胴部にかけて斜位の浅い貝殻条痕文を施す一群である。別府原式土器に該当する。上杉彰紀によると、口縁部外面の施文や全体の器形、口唇部形態によって別府原I～III式に細分している(上杉 2004)。上杉の細分に基づくと、192～228は別府原I式、229～234は別府原II式、235～252は別府原III式に該当する。さらに別府原I式は、口唇部形態により別府原I式古段階(192～218)と別府原I式新段階(219～228)に分かれる。

IV類土器は下剥峯式土器に該当する。下剥峯式土器とV類土器に該当する桑ノ丸式土器については、山下大輔によって細分されている(山下 2005)。山下の細分に基づくと、281～283については口縁部と胴部の2帯に分けて施文するもので、下剥峯式土器の古い段階に位置づけられる。

V類土器は桑ノ丸式土器に該当する。山下の細分に基づくと、286～298は口縁部から胴部まで1帯で施文する一群で、桑ノ丸式土器の新しい段階に位置づけられる。

VI類土器は中原式土器に該当する。中原式土器は木崎康弘によって設定された土器型式で、木崎の細分(木崎 1996)によると、304は貝殻腹縁による条線文が施される中原IV式土器と考えられる。

VII類土器は原体を回転して施文する一群で、楕円押型文、連珠押型文、山形押型文、格子目押型文、縄文、撚糸文、変形撚糸文、同心円状押型文、格子状押型文、短枝回転文土器が該当する。第29表で示したとおり、上平遺跡ではVII類土器が最も多く出土した。南九州の押型文土器編年については山下大輔による4段階13分類による編年案がある(山下 2009)。山下の編年案に基づき、VII類土器を細分していく。VIIc類のうち、379～384は幅の狭い横位の山形文を施しており、浅黄橙色の色調をもつことから第2段階に位置づけられる。VIIb類のうち、369～371は口縁端部が肥厚し、内面の稜以下にケズリ調整が施される「白ヶ野類型」(山下・栗畑 2007)に該当するため、第4段階に位置づけられる。また、

類	土器型式	掲載点数	出土総数
I	前平式土器	141	233
II	石坂式土器	377	1,174
III	別府原式土器	162	1,340
IV	下剥峯式土器	8	17
V	桑ノ丸式土器	33	68
VI	中原式土器	4	23
VII	押型文土器 縄文施文土器 撚糸文土器 短枝回転施文土器	413	1,522
VIII	手向山式土器	312	737
IX	妙見・天道ヶ尾式土器	23	62
X	型式不明土器	33	1,246
合計		1,506	6,422

第29表 上平遺跡出土の土器型式分類と出土点数

VII c 類のうち、392・393を中心に内面にケズリ調整が施されるものも第4段階に位置づけられる。加えて、山下は変形捺糸文土器についても、時間幅の存在を考慮しつつも、第4段階に帰属するとしている。口縁部内面に原体条痕をもつ格子状押型文をはじめ、縄文施文土器、捺糸文土器、短枝回転文土器を含め、先述したもの以外の多くは、第3段階に位置づけられるものとする。なお、VII類に分類した捺糸文や変形捺糸文の一部は手向山式土器に該当する可能性がある。

VIII類土器は胴部に屈曲部をもつ一群で、手向山式土器に該当する。手向山式土器については、横手浩二郎によって1～3式に細分され(横手 1998)、横手と立神倫史により型式変遷に関する検討が行われた(立神・横手 2020)。両氏の細分に基づくと、457～462は外面に単一文様を施し、胴部屈曲部に突帯をもたないので、手向山1式土器に位置づけられる。463～468は外面に単一文様を施し、胴部屈曲部に突帯を貼り付けるので、手向山2式土器に位置づけられる。469～473は胴部屈曲部に突帯を貼り付け、文様を上下で分けるため、手向山3式土器に位置づけられる。しかし、VIII類に分類した土器の中には、474～481のように胴部屈曲の度合いが少ないものや、482のように縄文を地文とし瘤状突起を貼り付けるものなどが出土している。これらは手向山3式土器に位置づけられるものであるが、屈曲部の度合いや瘤状突起などの特徴から見ると、後述する妙見・天道ヶ尾式へとつながる中で登場したものである可能性が考えられる。

IX類土器は縄文を地文とし、口縁部から胴部にかけて刻目突帯や貼付突帯を巡らす一群である。八木澤一郎の設定した妙見・天道ヶ尾式土器の第1群に該当する(八木澤 2008)。531～539のように口縁部から胴部にかけて貼付突帯を巡らすものと、540～542のように刻目突帯を巡らすものがある。妙見・天道ヶ尾式土器第1群の特徴である沈線文や刺突連点文が施されないことから、妙見・天道ヶ尾式土器の祖型である可能性がある。

X類土器は型式不明の一群をまとめたものである。このうち、551は無文土器だが、形態と内面の調整が、山下が設定した押型文土器の第3段階と共通する。552は形態に加え、口縁部内面の上端に施した原体条痕が、山下により編年的な位置づけが行われた五十市式土器と類似しているため同時期のものとする(山下 2006)。560～562は地文の縄文は見られないが、胎土や胴部外面に貼り付けた刻目突帯の特徴から妙見・天道ヶ尾式期の壺形土器の可能性が考えられる。

以上の考察を踏まえ、上平遺跡における出土土器の特徴を3つ挙げる。第一に石坂式土器や別府原式土器が多数出土した点である。これらは上平遺跡から約1km離れた同一丘陵上にある王子山遺跡からも出土しており、栗畑光博は石坂I式土器と別府原式土器新段階の共伴事例から同時性を有するとしている(栗畑 2021)。この時期に上平遺跡を含めた周辺地域に大きな集落跡があった可能性は十分考えられる。次に押型文土器が多数出土したことである。その多くは山下が設定した南九州押型文土器の第3段階に該当し、第4段階に位置づけられるものも見られる。特に、楕円や連珠、山形、格子状、同心円など様々な押型文土器が確認されたこと、また類例があまりない捺糸文と竹管文を施す壺型の土器が出土したこと等は注目される。さらに様々なバリエーションの手向山式土器が出土した点で、手向山1式土器と考えられるものから、手向山3式土器に位置づけられるものまで幅広く見られることである。特に、手向山3式に位置づけられるものが多く、編年的観点から手向山式土器の後続とされる妙見・天道ヶ尾式土器への変遷の中で発生したと考えられるものも存在する。先述した押型文土器の第3段階から手向山式期、さらには妙見・天道ヶ尾式期に至るまで、上平遺跡において人々の生活が脈絡と続いたことが

考えられる。多数検出された炉穴や集石遺構の構築時期も重なることから、この時期が上平遺跡における人々の営みの最盛期であった可能性が考えられる。

## (2) 石器

上平遺跡では、第Ⅳ層及び第Ⅴ層掘削時または遺構内埋土から 17,003 点の石器が出土した。そのうち特徴的な石器について器種別に概要を述べる。

打製石鏃は 580 点出土した。石鏃未製品を合わせると 860 点にもなる。分類については第Ⅲ章第 9 節に示したとおりである。石鏃分類による出土点数をまとめたものを第 30 表に示す。石鏃の平面形における出土点数を見ると、Ⅰ類（正三角形鏃）は 125 点、Ⅱ類（二等辺三角形）は 141 点、Ⅲ類（長身鏃）は 78 点、Ⅳ類（五角形鏃）は 1 点であった。長身鏃に比べ、三角形鏃や二等辺三角形鏃の出土量が上回る。次に、基部の形態における出土点数を見ると、A類（基部が平坦で抉りがない）は 168 点、B類（基部の抉りが浅い）は 136 点、C類（基部の抉りが深い）は 30 点、D類（基部の抉りが極めて深い）は 10 点であった。基部の抉りがないまたは浅いA類やB類が多いのに対し、基部の抉りが深いC類やD類の出土数は少ない。堂込秀人が鹿児島県の天神段遺跡

類	大分類	掲載点数	出土点数
I A	正三角形鏃	24	78
I B		14	40
I Ca		2	3
I Cb		2	3
I Cc		1	1
II A	二等辺三角形鏃	19	59
II B		17	60
II Ca		4	5
II Cb		4	5
II Cc		3	3
II Da		2	2
II Db		4	6
II Dc		1	1
III A	長身鏃	11	31
III B		13	36
III Ca		2	3
III Cb		4	6
III Cc		1	1
III Dc		1	1
IV	五角形鏃	1	1
V	欠損品	2	235
	合計	132	580

※ 中分類

A類：基部が平坦で抉りがないもの

B類：基部の抉りが浅いもの

C類：基部の抉りが深いもの

D類：基部の抉りが極めて深いもの

第 30 表 上平遺跡出土の石鏃分類と出土点数

における石鏃変遷を共伴した土器型式とともに整理している（堂込 2020）。堂込によると、前平式土器には正三角形小型鏃が、石坂式土器には正三角形鏃の抉りの浅い石鏃が、押型文土器にはU字型で脚部が方形の石鏃が伴う傾向が指摘されている。縄文時代早期前葉から中葉にかけての遺構や土器が確認されている上平遺跡においても、同様の傾向が認められるが、押型文土器の出土量の割にはU字型の抉りの深い石鏃の出土量は乏しいため、石鏃使用の時期や地域性を考慮する必要がある。

磨製石鏃は 4 点出土した。厚みは薄く、周縁に剥離調整を施すものと研磨のみを施すものがあるが、全面的に研磨を施すという点は共通している。695 は針尾産の黒曜石製で、縄文時代早期において黒曜石を全面的に研磨した磨製石鏃はほとんど類を見ない。698 は流紋岩製で、平面は正三角形で、周縁を鋸状に研磨している。鹿児島県の縄文時代早期における磨製石鏃に関する形態分類を行った宮田栄二の分類によると、短身広型に位置づけられる（宮田 2003）。さらに、宮田は共伴土器から磨製石鏃の时期的な位置づけを行っており、短身広型は縄文時代早期前葉の土器と共伴する傾向にあるという。

尖頭器は 1 点出土した。ガラス質安山岩製で、周縁に細かい剥離調整を施す。宮崎県における槍先形尖頭器について松本茂が整理している（松本 2003）。松本によると、縄文早期段階を第Ⅲ期と位置づけ、押型文土器の段階における平面形のスリム化や、サヌカイト・安山岩の利用を特徴として挙げている。

上平遺跡で出土したのも第Ⅲ期の特徴が認められ、天ヶ城跡や白ヶ野第2・3遺跡で出土した細身の尖頭器の出現につながるものである可能性が考えられる。

異形石器は5点出土した。中でも、711は「X」字状を、712は釣り針状を呈し、宮崎県で出土した異形石器ではあまり見慣れない形である。714・715はいわゆるトロトロ石器である。南九州の縄文時代早期におけるトロトロ石器の多くはチャートや頁岩を素材として製作される傾向にある中、715は黒曜石(腰岳産)を素材とする。腰岳産黒曜石の石器はこの1点のみであり、他所で製作され、搬入してきたと考え、注目される。

石斧は16点出土した。宮崎県域における縄文時代早期の石斧については重留康宏がまとめている(重留2005)。重留は、形態的特徴として撥形は少なく短冊形が主体であること、技術的特徴として礫あるいは分割礫を素材とするものが多いということを指摘している。上平遺跡で出土した石斧も、重留の指摘のとおり、礫や分割礫を素材とした短冊形の石斧が多い。また、藤木聡は刃部の摩滅の有無により石斧の使用について考察している(藤木2005)。上平遺跡から出土した石斧の中で刃部をもつものは全て研磨のような使用痕が確認できる。使用頻度の差はあるが、打製石斧の使用空間もしくは廃棄された空間であった可能性が高いと考える。

環状石斧は1点出土した。上平遺跡が位置する都城市にある上水流松ヶ迫遺跡では、本市初例となる環状石斧が出土した。県内でも環状石斧の出土例は少ないが、都城市の近隣地域では、上猪ノ原第4遺跡(宮崎市：旧清武町)や橋山第1遺跡(宮崎市：旧高岡町)、芳ヶ迫第1遺跡(宮崎市：旧田野町)で環状石斧が出土している。

素材となる石材別に見ると、剥片石器の約9割が桑木津留産の黒曜石製である。桑木津留産の黒曜石製の剥片石器を器種別に見ると、約6割が打製石鏃で、石鏃未製品を合わせると9割以上となる。石鏃などの製品だけでなく、石核や剥片も多数出土し、原石も見られることから、上平遺跡において剥片石器の製作が盛んに行われていた、もしくは黒曜石流通における重要な場所であった可能性が考えられる。また、桑木津留産の黒曜石は宮崎県と熊本県、鹿児島県の県境が原産地とされており、上平遺跡からの距離もさほど遠くはないため、素材獲得のために原産地まで出向いた可能性も考えられる。黒曜石を主体に剥片石器を製作するのに対し、礫石器の約9割は砂岩製であり、霧島系由来の安山岩を素材とするなど、近傍の河川等から得られる身近な素材を使用していたと考えられる。

## 第2節 縄文時代後期～晩期の様相

竪穴建物跡を1軒検出した。床面上層から出土した深鉢片の土器型式から縄文時代後期に相当する丸尾式期のものと考えられる。周辺に同様の建物跡が検出できるか試みたが、遺構の広がりには確認できなかった。また、竪穴建物跡の周辺の包含層からは中岳Ⅰ式土器や三万田式の黒色磨研土器等、縄文時代後期から晩期に相当する土器が出土している。上平遺跡の東側にある開析谷に位置する花木池平遺跡でも、同時期の深鉢片が出土していることから、本遺跡との関連が注目される。

## 第3節 古墳時代中期～後期の様相

土坑墓と地下式横穴墓を1基ずつ検出した。土坑墓からは、副葬品として鉄剣や鉄鏃、刀子が出土し、地下式横穴墓からは古人骨と鉄刀が出土した。日向(宮崎県)の地下式横穴墓についてまとめた和田理

啓によると、上平遺跡の地下式横穴墓は羨道が玄室の長辺上につくことから横型（平入り）に該当し、都城盆地でよく見られる形態である（和田 2001）。南九州における古墳時代鉄鏃については、秦憲二が整理している（秦 2003）。秦がまとめた岩瀬川・大淀川上流域様式構造図を見ると、土坑墓から出土した圭頭斧箭鏃は秦の分類における圭頭曲刃類に該当し、長頸鏃と共伴していることから5世紀中葉から後葉に相当すると考えられる。また、九州南部における古墳時代鉄器についてまとめた橋本達也によると、大刀は古墳時代後期に位置づけられるという（橋本 2014）。このことから、上平遺跡で検出した土坑墓と地下式横穴墓は古墳時代中期末から後期初頭のもと考えられ、土坑墓、地下式横穴墓の順に構築された可能性がある。第Ⅱ章で先述したとおり、山之口地区においては山之口村古墳に地下式横穴墓が1基県指定されている他、隣接する山之口運動公園の建設工事の際に地下式横穴墓が数基確認されたと言われているが学術的調査は行われていない。山之口地区において地下式横穴墓が埋蔵文化財として発掘されたのは上平遺跡が初めてとなる。なお、当該期は墓2基のみで、堅穴建物等は検出されていないが、近隣の花木池平遺跡からは古墳時代後期の堅穴建物跡が検出されており、関連性も含め山之口地区の古墳時代の様相がさらに明らかになっていくことを期待したい。

#### 第4節 結語

今回の発掘調査は、都城盆地北東部に広がる山地と大淀川支流の河川によって形成された細長い台地状の上部縁辺に位置する調査区を対象とした。調査区からは、時代の古い順に、縄文時代早期中葉を中心とする遺構群、縄文時代後期の建物跡、古墳時代中期～後期の墓が検出され、いずれの時代も都城盆地、ひいては本県を含む南九州の歴史と文化を明らかにする上で重要な成果が得られた。特に、縄文時代早期における集石遺構群や炉穴、陥し穴などの遺構ならびに縄文時代早期前葉から中葉に至るまでの土器や多数の石器は、断続的に活動する人々の生活を物語ることができる貴重な資料である。今回の発掘調査の成果が、今後の調査・研究の一助になることを期待したい。

#### 【引用・参考文献】

- 上杉彰紀 2004 「『別府原式土器』とその周辺」『九州縄文時代早期研究ノート』第2号 九州縄文時代早期研究会  
上杉彰紀・深野信之 2004 「前平式土器および志風頭土式器の検討」『南九州縄文通信』No.15 南九州縄文研究会  
鹿児島県教育委員会・公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2018 『天神段遺跡3』（公財）埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（18）  
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2014 『船迫遺跡・高吉B遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（180）  
川口雅之・黒木梨絵・立神倫史 「鹿児島県における縄文土器の実年代―土器付着炭化物放射性炭素年代測定値から―」『縄文の森から』第12号 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
木崎康弘 1996 「第V章 総括 2. 縄文時代早期土器群の編年学的研究―中原式土器の設定―」『蒲生・上の原遺跡』熊本県文化財報告書第158集  
栗山葉子 2009 「文様からみた変形撚糸土器―宮崎県の出土資料から―」『南九州縄文通信』No.20 南九州縄文研究会  
栗畑光博 2021 「別府原式土器考」『南九州縄文通信』No.23 南九州縄文研究会  
重留康宏 2005 「宮崎県域における縄文早期の石斧概況」『Stone Sources』No.5 石器原産地研究会  
秦憲二 2003 「南九州における古墳時代鉄鏃の様式構造」『先史学・考古学論究』IV 龍田考古会  
高城町教育委員会 2005 『牧ノ原遺跡群』高城町文化財調査報告書第20集  
立神倫史・横手浩二郎 2020 「手向山式土器の型式変遷に関する検討―鹿児島県出土資料を中心に―」『九州縄文時代早期研究ノート』第6号 九州縄文時代早期研究会  
堂込秀人 2020 「南九州縄文時代早期の石鏃の編年について」『遺跡学研究の地平―吉留秀敏氏追悼論文集―』吉留秀敏氏追悼論文集刊行会  
永山修一 1998 「日向国の官道」『宮崎県史』通史編 古代2 宮崎県  
橋本達也 2014 『九州南部における古墳時代鉄器の基礎的研究』鹿児島大学総合研究博物館

- 東憲章 2007「非破壊的手法による遺跡情報の収集－宮崎県立西都原考古博物館における地中レーダー探査の実践－」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第3号
- 東憲章 2012「西都原古墳群の探査と地下マップ」『月刊考古学ジャーナル』629 ニューサイエンス社
- 東憲章 2019『地下を探る 日本のGPRはどこまで到達したのか』宮崎県立西都原考古博物館
- 東憲章・吉行真人 2021「地中レーダー探査と発掘調査検出遺構の比較検討－都城市山之口町上平（うえんでら）遺跡の事例から－」『宮崎埋蔵文化財センター研究紀要』第6集
- 日高博司 2013「宮崎県内の局部磨製石鏃集成」『宮崎考古』第24号 宮崎考古学会
- 日高優子 2012「宮崎県の精神文化関連遺物」『鹿児島大会 縄文時代における九州の精神文化』第22回 九州縄文研究会 九州縄文研究会・南九州縄文研究会
- 藤木聡 2005「宮崎県域における縄文時代の石斧製作と石材」『Stone Sources』No.5 石器原産地研究会
- 本田道輝 1989「市来・一湊式土器様式」『縄文土器大観』第4巻 小学館
- 前迫亮一 1992「異系統土器文化の一接点－南九州における縄文時代後期中葉の一樣相：丸尾式土器の提唱－」『南九州縄文通信』No.6 南九州縄文研究会
- 前迫亮一 2003「石坂式土器再考」『縄文の森から』創刊号 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 松本茂 2003「宮崎県における槍先形尖頭器の出現と消滅」『九州旧石器』第7号 九州旧石器文化研究会
- 都城市史編さん委員会 2005『都城市史』通史編 中世・近世 都城市
- 都城市教育委員会 2009『都城市山之口地区遺跡詳細分布調査報告書』都城市文化財調査報告書第94集
- 都城市教育委員会 2010『萩ヶ久保第1遺跡』都城市文化財調査報告書第97集
- 都城市教育委員会 2012『王子山遺跡』都城市文化財調査報告書第107集
- 都城市教育委員会 2015a『富吉平遺跡』都城市文化財調査報告書第114集
- 都城市教育委員会 2015b「5. 市指定史跡島津寒天工場跡（山之口大丸遺跡）」『都城市内遺跡8』都城市文化財調査報告書第119集
- 都城市教育委員会 2016a『軍神原遺跡』都城市文化財調査報告書第121集
- 都城市教育委員会 2016b『山之口一本松遺跡』都城市文化財調査報告書第124集
- 都城市教育委員会 2018「4. 峯元第1遺跡」『都城市内遺跡11』都城市文化財調査報告書第135集
- 都城市教育委員会 2019a『土角遺跡』都城市文化財調査報告書第136集
- 都城市教育委員会 2019b「5. 遺跡枠外（花木第3団地）」『都城市内遺跡12』都城市文化財調査報告書第141集
- 宮崎県教育委員会 1999『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅱ』
- 宮崎県農政水産部農業振興課 1981『都城・北諸地域 土地分類基本調査』都城
- 宮崎埋蔵文化財センター 2000『竹ノ内遺跡』宮崎埋蔵文化財センター発掘調査報告書第27集
- 宮崎埋蔵文化財センター 2004『三侯城北東曲輪跡』宮崎埋蔵文化財センター発掘調査報告書第97集
- 宮崎埋蔵文化財センター 2011『富吉前田遺跡』宮崎埋蔵文化財センター発掘調査報告書第209集
- 宮崎埋蔵文化財センター 2015『一本松遺跡』宮崎埋蔵文化財センター発掘調査報告書第236集
- 宮崎埋蔵文化財センター 2016『中床丸遺跡』宮崎埋蔵文化財センター発掘調査報告書第239集
- 宮崎埋蔵文化財センター 2020『上高遺跡』宮崎埋蔵文化財センター発掘調査報告書第254集
- 宮崎埋蔵文化財センター 2021『小迫遺跡』宮崎埋蔵文化財センター発掘調査報告書第257集
- 宮崎埋蔵文化財センター 2022『花木池平遺跡』宮崎埋蔵文化財センター発掘調査報告書第262集
- 宮崎市教育委員会 2006『本野原遺跡3』宮崎市文化財調査報告書（田野町文化財調査報告書第53集）
- 宮崎県教育委員会 2007『西都原古墳群 男狭徳塚女狭徳塚陵墓参考地地中探査事業報告書』
- 宮崎県教育委員会 2012『特別史跡西都原古墳群 地中探査・地下マップ制作事業報告書』（1）
- 宮田栄二 2003「縄文時代早期の磨製石鏃について」『縄文の森から 創刊号』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 八木澤一郎 2008「平袴式・塞ノ神式土器」『総覧 縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会
- 八木澤一郎 2009「変形燃糸土器考～九州南部押型土器の終焉について～」『南九州縄文通信』No.20 南九州縄文研究会
- 柳田裕三 2003「通称『イチゴ』という名の押型土器」『利根川』24・25 利根川同人会
- 山下大輔 2005「下剥峯式および桑ノ丸式土器の再検討」『南九州縄文通信』No.16 南九州縄文研究会
- 山下大輔 2006『「口縁部内面刺突文」から見た縄文時代早期中葉の土器－宮崎県都城市内遺跡出土の資料を中心に－』『九州縄文時代早期研究ノート』第4号 九州縄文時代早期研究会
- 山下大輔 2009「南九州の押型土器編年に関する一考察」『南九州縄文通信』No.20 南九州縄文研究会
- 山下大輔 2014「宮崎の押型土器」『宮崎県央地域の考古資料に関する編年的研究－東九州道調査以後の新地平－』平成26年度宮崎考古学会研究会
- 山下大輔 2015「南九州における押型土器研究の現状と課題」『貝殻文と押型文』宮崎考古学会南例会実行委員会
- 山下大輔 2020「南九州の円筒形押型土器とその周辺」『九州縄文時代早期研究ノート』第6号 九州縄文時代早期研究会
- 山下大輔・柴畑光博 2007「南九州貝殻文円筒形土器と押型土器の関係－宮崎県における遺構内出土資料の検討から－」『縄文時代』18 縄文時代研究会
- 山之口町史編纂委員会 1974『山之口町史』
- 山之口町史編さん委員会 2005『山之口町史』
- 和田理啓 2001「日向の地下式横穴」『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第4回九州前方後円墳研究会大会第I分冊 九州前方後円墳研究会